AKANE

木と蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＫＡＮＥ

【Ｎコード】
Ｎ０９０１Ｉ

【作者名】
木と蜜柑

【あらすじ】
高校受験を控えた平凡な中学生、朱音（あかね）は、ある晩突然見知らぬ氷のように美しい男に連れ去られてしまった。訳もわからず連れて来られたそこは、人間と魔族の両方が互いに争い合う、異世界レイシア。そこで過酷な運命が彼女を待ち受ける。多くの人達との出会い、そして敵国の騎士との恋。
しかし、彼女の前世（過去）には隠された重大な秘密があった・・・！

登場人物（前書き）

登場人物が増えてきたので、簡単に整理してみました。
もしわからなくなったときは、ご覧下さい。

登場人物

☆新崎（にいざき）　朱音（あかね）
高校受験を控えた平凡な中学生。
空手道場を営む家に生まれた、長女。

☆新崎（にいざき）　真咲（まさき）
朱音の生意気な弟。将来は父の跡を継ぐと決めている。

☆フェルデン・フォン・ヴォルティーユ
サンタシ国の王子。騎士団を指揮する指令官も務める青年。
剣の腕ではレイシアでも名を知られている。

☆ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユ
サンタシ国の国王。フェルデンの実の兄で、平和をもたらした王として賢王と民に親しまれている。

☆アザエル
魔王ルシファーの側近。碧髪碧眼の美貌を兼ね備えているが、感情をまるで持たない冷徹な男。

☆ロラン
サンタシ国の王、ヴィクトル直属の術師。結界術に長けている。
霞がかった茶の髪と眼をもった、十三歳程の少年。根はいいが、毒舌。

☆エメ
サンタシ国の白亜城に勤める侍女。朱音の身の回りの世話を任される。

ロージ村出身で、ハーブに詳しい。

☆ルイ
ゴーディア国でアザエルに命じられて朱クロウつきになった少年。
霞がかった灰の髪と眼をもち、ロランと瓜二つの顔をしている。
性格はとても温厚。

☆魔王ルシファー
ゴーディア国の国王。強大な魔力を持ち合わせている。
漆黒の髪と透けるような美しい肌、見た者の視力を奪うとも言われる程の恐ろしい美貌をもつ。
千年前に天上界から追放され、レイシアに降臨したと言われている。

☆クロウ
魔王ルシファーの息子。儀式により長い眠りについていた。
ルシファーを生き映した姿をしており、父同様の強大な魔力をもつ。

☆ユリウス・ゲイラー
サンタシ騎士団の小柄な騎士。フェルデンの部下であり、幼馴染み。
フェルデンの兄弟弟子でもあり、剣の腕は確か。

☆ディートハルト・アルデンホフ
フェルデンの剣の師。かつてはレイシアの三剣士と呼ばれる程の剣士であった。
老いてはいるが、屈強な身躯をもちあわせている。
顔面のケロイド状になった大きな古傷がトレードマーク。

☆フィルマン
サンタシ王家に仕える医師。かなりの高齢。

☆ヘロルド・ケルフェンシュタイナー
年齢不詳の痩せ身で醜い男。アザエルの後釜におさまった、新しい司令官。
良からぬ企みをしている。

☆クリストフ・ブレロ
ゴーディアの魔城に出入りを許される、腕利きの美容師。
謎多き紳士。

☆クイックル
クリストフの近くにいる、世にも珍しい白鳩。

☆トマ・クストー
ゴーディア国の魔城で護衛を務める、近衛兵の一人。

☆アレットおばさん
キケロ山脈の山中で、夫と自給自足生活を送る中年の女性。
とても気立てが良い。

☆フレゴリー
ゴーディア国のボウレドという街で、街医者をしている男。
医術に関しては神の腕を持つ。

☆アルノ
サンタシ国の船、リーベル号の船長。

☆ファウスト

別名：F（エフ）
真っ赤な髪と緋の眼、褐色の肌をした青年。

☆ボリス
立ち寄った街リストアーニャで、朱音達に助けを求めてきたトカゲのような男。
魔光石について何か情報をもっていそうな気配。

☆ベリアル王妃
魔王ルシファーの正妻。大商人コンコーネ家の一人娘。
アプリコット色の髪に、可憐な容姿をもちあわせている。
ルシファーをとても愛しているが、クロウには冷たくあたる。

☆??
魔王ルシファーがただ一人愛した女性。
いつも傍にいるらしいが、誰かは未だに謎のまま。

☆メフィス・ギュンツブルク
ゴーディア国、黒の騎士団の副司令官。
植物を操る魔力をもちあわせている。

☆ライシェル・ギー
ゴーディア国、黒の騎士団指令官補佐。
琥珀色の髪と眼をもちあわせている、盲目の槍使い。
また、魔笛をつかい、ありとあらゆる動物を意のままに操る魔力をもっている。

☆タリア
ゴーディア国、黒の騎士団唯一の女騎士。
少年のように海松色（みるいろ）の髪を刈り上げている。とても有能。

☆アレクシ
サンタシ国、サンタシ騎士団の第三隊隊長。

☆ノムラさん
レイシア一の巨大鳥ゾーン。気性が荒く、とても人の手で手懐けられる鳥ではない。
名前は朱音がつけた。

☆スキュラ
真っ黒い鱗の飛竜。まだ子どもでクロウと血の契約を交わしている。

☆ヒュドラ
ファウストの赤き飛竜。口から炎を吐き出す。
後にクロウがこの竜に”ヒュドラ”と名付けた。

第1章　1話　碧い男（前書き）

公募の為、小説全体のあちこちを修正しました。
お話を読んで少しでも楽しんで貰えたら嬉しいです☆

第1章　1話　碧い男

ひどく寝苦しい夜だった。
嫌な夢をみた。
狭苦しい箱の中に閉じ込められている圧迫感。早く解放されたいのに、なぜか身体がピクリとも動かない。暗闇の中でなんとか声を出そうとするも、それさえも適わない。苦しさで喘ぎそうになるその瞬間、ふっと身体が浮き上がるような気がした。
いや、これは夢ではない、実際に浮き上がっているのだ。
「ん・・・」
重い目をなんとかこじ開けると、薄暗闇の中で自分が誰かに抱えられている格好になっていることに気付いた。
「え・・・？　ちょっ！」
慌てて身じろぎして身体を突き放そうともがくが、ほとんど効果は見られない。先程、なかなか寝付けなかった朱音は、数時間ベッドの上で寝返りをうってばかりいたが、確かに一刻程前に浅い眠りに落ちたばかりだった。なのに、今はこうして見知らぬ者に抱きかかえられている。これは誘拐か何かの事件に巻き込まれた以外に考えようがないではないか。
「起こしてしまいましたか・・・」
すぐ上から降ってきたのは、意外にも落ち着いた男の声。
「なにすんの！？　はなしてってば！」
抱えられた手足をバタつかせるが、男の腕に力が加えられてそれも呆気なく封じられてしまう。
「ご無礼とは承知でお迎えにあがりました。今ここでお放しすることはできません。時間に限りがありますので」
月明かりで男の顔がうっすらと浮かび上がる。吸い込まれそうな

冷たい碧い瞳。息を呑む程の美しい顔立ちは、見慣れた大和の顔立ちではなかった。瞳と同じ碧い髪は長く、一つに結わえられている。全てにおいて整いすぎている男の表情は、“冷たい”という言葉が適切な表現のようにも思える。

「あ、あなた、誰・・・？」

瞬きをするのも忘れて、大きく目を見開いた朱音はかろうじてその言葉を発することができた。

「私は魔王陛下の側近、アザエルです」

男の言葉の意味が理解できずに、咄嗟にまだ自分が夢の中にいるのではないかと、朱音は首を捻った。

「魔王陛下・・・？」

気がついてみると、ここは屋外。月の光が妙に明るいのはそのせいだったのだ。

「えっ、ここどこ！？」

これが夢でなければ、朱音は謎の外人に自宅から抱きかかえられたまま外に出て来てしまっているということになる。しかも、男が今歩いているのはどこかもわからない山の中。

さやさやという葉の音やどこかで梟が鳴く声がする。ジーという虫の声はますます周囲の静けさを際立たせていた。

「時空の扉です。考えていていた以上にあなたを見つけ出すのに時間がかかってしまいました。扉の向こうでは既に追手が迫っています」

身動きがとれない体勢の中、朱音は無理矢理首を起こすと、視界に入ってきた信じられない光景に絶句した。

山の奥のほんの少し開けた場所に、暗闇の中ぽっかりと口を開ける金色の光。穴の大きさは人が一人腰を屈めてならなんとか収まる程のものだ。

しかし、光は今尚縮み続けていて、あと数分もすれば人さえ入り込めない程になってしまうだろう。

「ま、待って待って！　時空の扉って？」
嫌な予感がして朱音はもう一度この腕から逃れようと身動ぎして声を張り上げるが、
「申し訳ありませんが、今はゆっくり話している時間はありません」
というアザエルの厳しい言葉に制され、朱音の言葉は掻き消される。
腕の中で暴れる朱音の身体を一際強く抱き締めると、無言のまま光の中へと足を進めていく。
「放して！　一体わたしが何したっていうの？」
光の中に吸い込まれる瞬間、朱音の声が山の頂上に木霊した。

この時の朱音はまだ、自分を待ち受ける数奇な運命を知る由も無かった。

2話　逃亡

（なんでわたしがこんな目に遭わなきゃなんないの？？）

朱音は、すっかり土埃で汚れてしまっている、寝巻き代わりの着慣れたTシャツとハーフパンツ姿のまま、木の陰で息を潜めていた。

それというのも、不思議な金色の光を通り抜けた後、アザエルという謎の男に抱えられたまま次に見た光景は、洞窟の中だったのだ。

湿っぽい洞窟の中では、二人が通り抜けた途端にみるみるうちに縮んで消えてなくなった光の穴の他に、他に何も見当たらなかった。アザエルがどういったマジックを使ったのかは定かではないが、家で寝ている朱音を攫って何の説明もなしに強引にこの洞窟に連れて来られたという事実だけは確かだった。

こんな夜更けにいつまでもこんなところにいる訳にもいかないし、夜が明けると家の者が朱音の不在に気付いて騒ぎ始めるはずだ。

「いいかげん降ろして！」

不機嫌な朱音の声に意外にもあっさりと手から解放したアザエルは、突然片膝を地面につけると、恭しく朱音の前に礼をとった。

「先程までの御無礼をお許しください。これはあなたのお父上、魔王陛下最期のご命令にございます。どうぞご理解頂きたい」

暗闇の中でよく分からなかったが、男の服装は普段朱音が目にしているようなものではない。それに、アザエルの言っていることといえば、正気とは到底思えなかった。

（とにかく、家へ帰らないと・・・）

一見すると女性のようにも見えなくもないこの美しい男だが、先程抱えられていたときの力強さを思うと、そう簡単には帰してもらえそうにはない。

もぞもぞと朱音は足先を落ち着きなく動かしてみせた。
「どうかなさいましたか？」
異変に気付いたアザエルが朱音に視線をやる。
「えっと・・・。トイレに・・・」
アザエルがこくりと頷くと、ちらと洞窟の外を見やった。洞窟の外は木々や草が茂っているらしく、どうやらそこで用を足せということだろう。
もじつきながら、朱音は洞窟から足を踏み出した。
先程と変わらない筈の山。でもなんだか妙な感じがする。梟や虫の鳴き声がしない。
ふと天を見上げると、朱音は驚きで目を丸くした。
月が二つ。
西の空に大きな三日月が一つと、東の空に小さな満月が一つ・・・。
「え・・・？」
もともとアザエルからうまく逃れる為に嘘をついた朱音だったが、ここで初めて自分が置かれている異常な環境に気がついたのだ。
「ここ・・・どこ・・・？」
呆然として立ちすくむ。
まるで金縛りにでもあったかのようにその場から動けない朱音に向けて、洞窟からアザエルの声がした。
「お逃げ下さい！」
その直後、洞窟の中から激しい剣のぶつかりあう音が響き、ときどき数人の男のくぐもった呻き声が漏れる。
一体アザエルに何が起こったのか。朱音の心の危険信号が点滅し、とにかくここは危険だから離れるべきだと知らせる。なんとか自分自身を奮い立たせ、朱音は駆け出した。
（とにかく逃げないと！　生きていれば後から考える時間はいくらでもある・・・！）
鋭い野山の草は素足の朱音に容赦なく切り付ける。

「うっ・・・」
あちこちきり傷だらけになり、足の裏も小枝や小石を踏んづけたせいでひどく痛む。ひょっとすると出血し始めているかもしれない。
「誰かいるぞ！　追え！」
朱音の気配を察知した男達が、数人朱音の後を勢いよく追いかけてくる足音が聞こえる。
（どうしよう・・・、このままじゃ殺される！）
痛みをこらえながら、朱音は辺りを見回して身を隠せそうな場所がないかを必死に探した。
目に入ってきたのは、巨大な幹。　樹齢何百年もの大木である。
咄嗟にその影に身体を滑り込ませると、息の上がってしまった口を両の手で覆い、男達が行き過ぎるのをじっと待った。
「確かこの辺りに逃げ込んだぞ」
低い男の声がすぐ近くまで迫っている。
（お願い、通り過ぎて・・・！）
朱音の願いむなしく、まだ別の男の声が聞こえた。
「見ろ、血だ・・・」
身体の大きな男が地面を明かりで照らすと、地面を濡らす血液をじっと目で追った。
点々とつづく血痕は、巨大な木まで続いていた。
ゆっくりと近づく数人の男達の足音。
（なんでわたしがこんな目にあわなきゃなんないの？）
朱音は恐怖で顔を真っ青にしながら、震える手で口を覆って静かに時を待った。
ピタリと止まった足音。
張り詰めた空気にきつく閉じた目をおそるおそる開いて見てみる。
「驚いた・・・。人間の女の子だ」
朱音の目の前に立っていたのは、身長一八〇を優に超える、金色の短い髪の青年騎士であった。
恐怖のあまりがたがたと肩を震わせて潤んだ瞳で見上げる少女の

姿を見て、青年は持っていた剣を鞘に収めた　そして青年は少女を驚かさないようにそっと屈んで目線を合わせると安堵の表情を浮かべた。

「殿下、これは一体どういうことでしょう」

青年のすぐ後ろで剣を鞘に収めた小柄な騎士が、困惑の表情を浮かべながら言った。

「われわれの読みが甘かったようだ。これからのことは一度城へ戻ってからゆっくりと検討するにしよう」

青年は目線をほんの少しだけ後ろの騎士にやると、落ち着いた口調で答えた。

「さて、君の名前は？　おれの名はフェルデン・フォン・ヴォルティーユ」

ふっと優しく微笑むフェルデンの瞳は、美しく透けるようなブラウンであった。

「・・・朱音・・・」

震える声の少女の髪をえらかったねとばかりにフェルデンは優しく撫でた。

「よし、アカネ。おれ達は君を傷つけたりしない。どうやら君は怪我をしているようだ。手当てをしたいんだが構わないか？」

フェルデンの優しい声に、命の危機はどうやら去ったことを悟った朱音は、コクリと頷いた。と同時に、一気に気が緩み、その場へとくず折れた。

「アカネ！？」

心配そうなフェルデンの声を遠くに聞きながら、朱音は再び眠りの淵へと落ちていったのである。

3話　異なる世界（前書き）

3話　異なる世界

深いまどろみ中で、朱音は懸命に瞼を持ち上げようようとする。
（眠い・・・）
ひどい眠気がする。昨日の奇妙な体験で精神的に余程疲れていたらしい。いや、あれはひょっとすると夢だったのかもしれない。受験を控えた十五歳の朱音にとっては、現実逃避という密かな自己防衛に走り始めていたのかもしれない。
「ん・・・」
重い瞼を持ち上げると、朱音は僅かに数回目を瞬かせた。
ふかふかのベッド。見慣れぬ部屋の天井。
驚きで飛び起きると、部屋の周囲をぐるりと見渡してみた。
天井と思っていたのは実は天蓋付きのベッドで、部屋の中はフランス王朝に登場しそうなテーブルが一つ。壁際には恐ろしく光沢のある引き出し付きの棚が置いてあり、そのすぐ上には巨大な絵画が吊るされていた。
（嘘・・・、あれは夢じゃなかったの？）
信じられない光景に、すっかり眠気が吹き飛んでしまった頭で、ベッドからおそるおそる這い出すと朱音はベッドから足を降ろす。
すると包帯に巻かれた自らの足が目に飛び込んできた。
（そうだ、わたし、足を怪我して・・・）
よく見ると、朱音が身につけていた泥だらけのTシャツとハーフパンツは、いつのまにかゆったりとしたワンピース型の白い服に着替えさせられている。
戸惑いつつも床に足を降ろすと、床についた足は途端に鈍い痛みを訴えた。
パニックを起こしそうな思考回路の中で、一種の冷却装置のようなものが働いて、自分が何かの事件に巻き込まれて、眠っている間

に外国の地へ拉致されたのだと冷静に自分自身に言い聞かせる。
（そうよ、そうに決まってる）
痛む足を引きずりながら、朱音は絵画の前に足を進めた。
広大な緑の野に囲まれた地のすぐ下は崖になっており、その崖のすぐ上を美しい古城が太陽の光を浴びて輝いている。城のすぐ手前には透き通る程の美しい湖。崖下は深い森が広がっていた。
ふと朱音の頭に、空に浮かぶ二つの月の映像が過ぎる。
（あれはきっと何かの間違い、そう、そうに違いないわ・・・）
狼狽する朱音の背後で、ガチャリと部屋のドアが開いた。
「あら、お目覚めでしたか」
若い娘が姿を現した。そばかすだらけの娘は見慣れた黒髪の日本女性とは程遠く、茶味がかった髪をひとつに小さく纏めている。
「すぐにフェルデン殿下を呼んでまいりますから、もう少しベッドでお休みになってお待ちくださいね」
侍女のような服に身を包んだ娘はくるりと踵を返すと急ぎ足で部屋を出て行った。
一体ここがどこなのか、どうして自分がこんなところに来てしまったのか、一人で考えてはみるものの、情報の乏しい現状ではどうしようもない。
そのことに気付いた途端、ジクジクと痛みを発し始めた足の裏をおそるおそる覗き見ると、巻かれた包帯からじわじわと血が染み出してきていた。
「・・・・・・」
観念して、朱音は痛む足を引きずりながら、元いたベッドまで戻ってくると前のめりにダイブした。
ふかふかとしたベッドは朱音の起こした衝撃をものの見事に飲み込んではくれたが、当の朱音はうつ伏せに倒れたまま両の手で頭を抱え込んでいた。
「目が覚めたんだな」
突然背後から聞き覚えのある男の声が降ってくる。

慌てて身体を反転させて振り向くと、昨晩、山の中で見たあの金髪の青年、フェルデンが柔らかい笑みを浮かべてそこに立っていた。
「足・・・、出血しているな。しばらくは歩くのを控えた方がいいだろう」
心配そうなフェルデンの顔をじっと見つめたまま、朱音は静止画のように動かなくなった。
それというのも、昨晩は暗がりの中であまりよく見ていなかったが、フェルデンの容姿はあの碧い瞳の男、アザエルに負けずとも劣らない、彫刻のように美しいものだったのである。
細身で女性的な印象を与えるアザエルに比べ、フェルデンの身躯は鍛え抜かれた男らしい印象で、短い金の髪はきりりと引き締まった美しい顔を更に上品に見せていた。透けるようなブラウンの瞳は、まだほんの少し少年の頃の名残を残していて、朱音への純真な興味の色が伺える。
「アカネ？」
ふいにフェルデンの口から自分の名が飛び出した途端、ほんのりと桜色の頬を染めた朱音が慌ててむくりと身体を起こした。
長身のフェルデンは白を基調とした軍事服のような服を身につけ、詰襟の際には金の刺繍が美しく施されている。併せ襟のマントさえも白く、その下から僅かに覗く質の良い皮ブーツだけが唯一の茶だ。
これだけでも、この青年が大層身分の高い者だということは朱音にもわかった。
「フェ、フェルデンさん。た、助けていただいて本当にありがとうございました」
カチコチになったままぎこちなく礼の言葉を口にする朱音の姿を微笑ましく思ったのか、フェルデンは口元をふっと緩めると、穏やかな口調で言った。
「畏まらなくていい。おれのことはフェルデンと呼んでくれ」
フェルデンはゆっくりと朱音の前で腰を落とした。
いきなりすぐ目の前までフェルデンの美しい顔が降りてくると、

美形に免疫のない朱音は耳まで真っ赤にしてふっと目線を逸らせた。
「さて、話してくれないか。君が昨晩どうしてあの森であの魔族の男と一緒にいたのかを・・・」
視線をゆっくりとフェルデンへと戻すと、先程までと打って変わって、彼の目は真剣味を帯びていた。
「魔族・・・？」
朱音は妙な言葉に違和感を感じ、思わず口に出してしまっていた。
「まさか、あの男が魔族だと知らずにいたのか？　だが、君はどうやらある種の魔術を掛けられているらしい。一体、あの森で何があった？　奴に何をされそうになったんだ？」
魔族や魔力という非現実的な言葉の勃発に、朱音は震える声でベッドの白いカバーを強く握り締めた。
「聞きたいのはこっちです・・・！　一体ここはどこなんですか？　昨日から魔王だとか魔族だとか魔術だとか、そう、それに二つの月とか・・・。意味が解らない！　わたしは眠っている間に無理矢理あの人に連れて来られただけなのに・・・！」
フェルデンのブラウンの瞳が僅かに揺れるのがわかった。
「君はもしかして、アースからやって来たのか!?　・・・だとしたらなぜだ、なぜ只の人間である君を連れて来る必要があるんだ！」
フェルデンはまるで自分に問い質すかのように声を荒げた。
ビクリと身体を震わせる朱音の姿を見て、青年はすまない、と声を落とした。
「ここはレイシアという君のいた世界“アース”とはまた別の世界だ。つまり、君はあの男の手によって、異界の地に連れて来られたということになる」
フェルデンの言葉の意味を理解できずに、朱音は呆然とフェルデンの顔を見つめる。
「レイシアには二つの大国と島国を主とする小国が存在する。そしてこの緑豊かな国サンタシは二つの大国のうちのひとつだ」
フェルデンはすっと立ち上がると、塗りの素晴らしい棚の中から、

使い古した本を一冊取り出した。
「これはこのレイシアの世界地図だ。ここがサンタシ。そして向かいの大陸に広がる大国が我らの宿敵であり魔族の住まう国、ゴーディアだ」
本の見開きのページに描かれている見たこともない不思議な地図をフェルデンは朱音に見せた。
呆然としながら朱音はフェルデンからひったくるようにその本を手元に引き寄せる。
少し日に焼けて黄ばんだ地図は、確かに朱音が普段目にしていた日本やアメリカなどの国がかかれているものとは似ても似つかない。
巨大な大陸が二つ、海を隔てて、羽を広げたような形をしている。右側に位置する大陸にはゴーディアと、左側に位置する大陸にはサンタシと記されている。左側の大陸は右側の大陸と比べると少し大きく、北の辺りは雪が積もっている様子が描かれている。おそらく、南の方は南国のような気候となっているのだろう。大陸から千切れたような小さな島の絵が無数にある。対してサンタシは大陸の半分以上を占め、その下にいくつもの小国が連なっていた。
「う・・・そ」
信じられないことを聞かされた朱音は、愕然としてその地図をポサリとベッドの上に落とした。
「気持ちはわかる。おれ達の予想だが、おそらくは君は、ゴーディアの王の命(めい)でアースの地から贄(にえ)として連れて来られたのだろう」
「に、贄・・・？」
フェルデンの口から出たおぞましい言葉は、朱音を震え上がらせるには十分であった。
「だが、なぜわざわざアースの地から連れて来なければならなかったのか、何を目的にしているのかはわからない・・・」
ベッドに落ちた本を拾い上げながら、フェルデンは溜め息を溢した。
「やだ・・・、わたし一体どうなるの！？」

ガタガタと真っ青になりながら震える朱音を哀れみの目で見つめると、フェルデンはそっと朱音の髪を優しく撫でた。
「怖がらせて悪かったな。でも、大丈夫。おれ達が君を絶対守ってやる」
フェルデンの手は逞しく、それで髪を撫でる手はとても優しかった。
「わたし、元の世界にもどれるよね・・・？」
フェルデンの手がピタリと静止する。
「正直なところ、おれには分からない・・。でも、陛下直属の術師なら何か分かるかもしれない」
動揺はしているものの、僅かな希望を抱いているか朱音の表情を、フェルデンは少し淋しそうな微笑みで見つめた。
「陛下？」
「サンタシの王、ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユ陛下だ」
朱音は不思議そうに首を傾げた。
「ヴォルティーユ？」
フェルデンはくすりと笑みを溢した。
「そう、ヴィクトル陛下はおれの兄だ」
「・・・えええええええええええええええええええええええ！？」

4話　毒舌少年

「もう一ついかがですか？」
そばかすの侍女、エメがクッキーのようなお菓子を差し出しながら、朱音に微笑みかけた。
「うん、ありがと」
お菓子に手を伸ばしながら、朱音は一週間程前に初めてサンタシの王ヴィクトルに対面したときのことを思い出していた。

「アカネと申したか、面をあげよ」
フェルデンよりも低音であるヴィクトル王の声に、朱音がおそるおそる顔を上げた。
「お初にお目にかかります、ヴィクトル陛下」
フェルデンに教えられた通りの言葉をなんとか言い終えると、高い壇上の椅子に腰掛けるヴィクトル王を見上げた。
そこにあった王の姿は、予想とは裏腹にまだ二十代後半の若い男のものであった。
幾枚もの木目細やかな金の刺繍の入った布を併せた、艶やかな衣装に身を包み、フェルデンと同様の金の髪は、肩のあたりで切りそろえられており、緩やかにウェーブがかっている。賢王という名に相応しく、少しばかり吊り上った目はまるで隙を感じさせなかった。
「フェルデンからは話は聞いている。大変な目に遭ったな。アースから参ったと？」
張り詰めた空気を断ち切るように、朱音はしっかりとした口調ではいと答えた。
「聞くところによると、そなたには微弱な魔術をかけられているということだ。しばらくは追っ手や刺客に狙われることを覚悟しておかねばなるまい。術の効力が切れるまでは外出を控え、術師の施し

た結界の中に逃れておくのが懸命であろう」
ヴィクトル王はすっかり恐縮して縮んでいる朱音を見据えたまま言葉を連ねた。
「よって、そなたには術師であるロランを護衛としてつけよう」
ヴィクトル王のすぐ近くに控えていた長い灰色のローブを身に着けた少年が、ヴィクトル王の目配せで朱音の前に歩み出た。
年は十二、三歳という程の頃合で、朱音よりは二つか三つ程年下と思われる。霞みがかった茶色い髪と眼がとても印象的な少年だ。
「陛下、賢明なご配慮、ありがとうございます」
朱音の隣で膝をつくフェルデンが頭を深く下げて礼をとった。それを見て慌てて朱音も礼をとる。
「礼には及ばぬ。あの愚王ルシファーのすることだ。何かただやらぬ恐ろしい事を企んでいるに違いない。こちとて、その邪魔だてをする程の快哉は無い。それに、我がサンタシの国土内に薄汚い足を踏み入れ、聖域なるセレネの森を踏み荒らしたとなると放ってはおけぬ」
難しい顔をするヴィクトル王の顔には確かに怒りの色が見えた。
「ルシファー・・・」
思わず小さく口をついて出てしまった言葉に、朱音自身も驚いて唇を覆う。
その声を聞き逃さなかったフェルデンは、朱音の耳の傍で静かに囁いた。
「魔王ルシファー、憎きゴーディアの王であり、強大な魔力を持ってして魔族を率いる恐ろしい男だ」
この男の名を聞いた途端、なぜか懐かしい気がするのは、元いた世界でも魔王ルシファーの名を何度か耳にしていたせいだろうか。ただ、朱音の知っている魔王フシファーは、実在しない想像上の人物である。
「まったくもって、あの男の考えていることは理解できぬ。この両国の緊迫した状況を知っての行いだとすれば、これは停戦を打ち止

める宣戦布告と見なすこともできるというに」
　椅子の肘掛の外にひらりと長い衣の袖を降ろすと、ヴィクトル王は肘をついて小さく溜め息を漏らした。
「時空の扉を開く為だけに敵国の地に侵入してまでのことです。アカネを連れて来たにはそれなりの理由があるとしか考えようがありません」
　フェルデンの的を得た意見に、王はうむと頷く。
「そちと同意見だ。ロラン、フェルデン、そなた達にアカネを任せよう。ゴーディアにとって重要な鍵となるこの娘を決して敵の手に渡すのではないぞ」
「仰せのままに」
　二人は王に向き直り、膝をついた姿勢で礼の形をとった。
　王はすっと椅子から立ち上がると、艶やかな刺繍の衣を翻しながら部屋を後にして行った。

「どうかなさいました？」
　エメが心配そうに朱音の顔を覗き込む。
「あ、何でもないです。ちょっと考えごとを」慌てて首を振ると、朱音は気ちを振り切るように甘い菓子をぽきんと割って口の中に放り込んだ。
　足には未だ包帯が巻かれたままだが、今ではすっかり塞がって、歩くことに不便を感じることはなくなった。
　この城に来てからというもの、朱音はこうして以前から夢に描いていたようなドレスを着させて貰い、朱音の身の周りを世話してくれる侍女のエメと、この部屋で一日の大半を過ごしていた。
　初めは怪我のせいもあってそんな暮らしも苦痛とは思わなかったが、城の中の者にあまり朱音の姿を晒すことを良しとしなかったヴィクトル王の命により、部屋の外へ出ることさえも厳しい制限を加

えられ、何もしないで部屋に篭り続けなければいけない状況が続いていた。
朱音はいい加減そんな状況にうんざりし始めていた。
部屋のノックの音が聞こえ、朱音の護衛を任された術師のロランが顔を出す。
「ロラン！！」
朱音が退屈から連れ出してくれる救世主を見つけたとばかりにロランの元に駆け寄る。
「・・・そんな目で駆け寄られても僕は何もしないからな」
鬱陶しそうにしっしっと払いのける真似をするロランは可愛らしい顔に似合わずのなかなかの毒舌少年だった。
「ロラン、わたし、いつ元の世界に戻れる？　ねえねえ、いつ？？」
自分よりも少し背の低い少年のローブの裾を掴むと、朱音はくいくいと引っ張った。
「だから何度も言ってるだろう！？　お前はゴーディアに狙われているんだ。この城に張られた結界内から外に出た途端、お前に掛けられた魔術を察知して、すぐさま敵の追手に連れ去られるのが落ちだ。せめて魔術の効力が切れるまではここでじっとしていろ」
まだ声変わりのしていないロランの声は、朱音の弟、真咲のことを思い出させてくれる。
「じゃあ、いつになったらその魔力の効力ってのがなくなるの？　こんなところにずっと閉じ込められて、わたし頭がおかしくなりそうだよ！」
ロランはぷいと朱音に背を向けた
「お前は本当に頭の悪い女だな。そんなこと僕にわかる筈ないだろ！　だいたい、僕がその掛けられた魔術を解こうとしたことも既にフェルデン殿下から聞いているだろう！」
ロランは国王お気に入りの術師で、自身もその能力に自信を持っていた。それなのに、朱音にかけられた魔術が解けないということでひどく自尊心が傷ついているようであった。

「とにかく、その魔術の効力が切れるのはかけた本人にしかわからない。ぼくから言えるのは、それを掛けた奴ってのが、相当の魔力の持ち主だってことくらいだ」

ロランの服を引っ張っていた朱音の手がスルリと解けるのがわかった。エメは心配そうな表情のまま、カップにティーを注いでいる。

「だって・・、ロランもフェルデンもあんまり来てくれないじゃない・・・」

しゅんと俯く朱音は年下の筈のロランよりも不思議といくらか幼く見えた。

「お前！　殿下のことを呼び捨てに・・・！」

真っ青になって叫ぶ。

「フェルデンがそう呼べって」

ぶつぶつと膨れっ面で朱音は呟いた。

「ロラン様、アカネ様の言っていることは本当のことです。フェルデン殿下は確かにアカネ様にそのように呼ぶようにと日々仰っています」

エメが困ったような笑いを浮かべながら、ポットをテーブルの上に静かに置いた。

「さあ、ハーブティーが入りましたよ。ロラン様もどうぞお掛けになってくださいな。サンタシが誇るリリーの葉とチチルの実を燻して作ったハーブです。ストレスを緩和してくれる効果もあるんですよ」

本当にこの娘の気配りにはいつもながら感心してしまう。

ロランも渋々エメが促す椅子に腰掛ける。

「護衛を任された僕はまだしも、国王直属の騎士団の指揮を任されるフェルデン殿下がお前のような卑しい者にこれ程お気を掛けてくださるなど、この上なく幸せなことだと思えよ？　今は国も緊迫した状態なんだ。お忙しい身であられることに変わりはない」

カップを手にとると、ロランはふんっと鼻を鳴らして口をつける。

「フェルデンって騎士団の指揮までしてるの！？」

あの青年騎士がヴィクトル王の実の弟であり、王族であるということは知っていたが、この事実は朱音にとって驚くべき、そして実に納得のいく事実であった。

（そっか・・・、だからいつもあんな軍人さんの服を着てるのか）

朱音も遅れて席に着くと、エメの入れたハーブティーの入ったカップを手にとった。

「お前、そんなことも知らなかったのか？　ほんと頭悪いよな」

呆れ顔で毒を吐き続けるロランに、朱音は不機嫌そうに視線を送る。

「煩いなあ。だって誰にも教えて貰ってないんだし、知らなくたって仕方ないじゃん」

「知らなくたって予想位できるだろうが。聞けばエメだって喜んで教えてくれただろうさ」

毎度こんな調子でロランと口喧嘩をするのが日々の日課になりつつある。エメは気にもしない様子でハイペースでなくなってゆく二人のティーカップに小まめにティーを注ぎ足していた。いつもの如く、これが収まるのは、一刻程口喧嘩し続けてすっかり二人が疲れてしまった後である。

しかし、退屈で仕方のない今の暮らしの中、こうしてロランと思う存分口喧嘩をすることのできる時間は、朱音にとって幸せな一時と言えないこともない。

もっとも、ロラン自身はいい迷惑と思っているかもしれないが。

「まあ、お前は心配するな。いずれ掛けられた魔術が解けたら、才ある僕がお前をアースへと無事に送り返してやる」

素っ気無くそう言い残すと、ロランはぷいと振り向きもせず朱音の部屋を退出して行った。

「ロラン・・・」

口を開いたまま、朱音はロランの出て行った扉をじっと見つめる。

「アカネ様、ロラン様は言葉は悪いですが、本当にあなたをお守りしようと必死になっておられるのですよ」

エメはにっこりと笑い掛けると、手際良くティーのセットを片付

け始めた。
「うん・・・、わかってる・・・」
そう言って、朱音は見慣れた美しい絵画に目をやった。
（そう言えば、この絵、どこのお城だろう・・・）

5話　切れた効力

ある朝、とんでもないことが起きた。

「＊＊＊＊＊＊」

昨晩まで確かに理解できたはずのエメの言葉が、聞いたことのない響きとなって、突然理解できなくなったのである。

「な、なに？　エメ？？」

何度聞き返しても返ってくる言葉は全くもって理解できず、朱音はただ狼狽した。エメの方も朱音の言っていることがわからない様子で、その切羽詰った状況に気付いて慌てて部屋を飛び出していった。

（な、なんで？？）

混乱して椅子にへたり込んだ朱音は、テーブルの上で頭を抱え込んだ。

思い起こせば、アザエルに攫われたあの夜にどうして違和感もなく言葉が通じることに異変を感じなかったのだろう。これはひょっとすると、ロランの言うように、自分は本当に頭が良くないのかもしれないと思い始めていた。

「＊＊＊＊＊！」

勢いよく開かれたドアから現れたのは、息を荒げたフェルデンと、そしてそのすぐ後ろになぜかロランの姿も。

「＊＊＊＊＊？　＊＊＊＊＊・・・」

心配そうに駆け寄るフェルデンが懸命に何かを話しかけてきてくれているのはわかったのだが、今の朱音には彼の言葉はさっぱりわからない。

「わかんない、フェルデン、あなたの言葉がわかんないよ」

昨夜、部屋を訪ねてきてくれたフェルデンは、いつものごとく朱音の元いた世界について聞きたがり、車や飛行機などの話をしたば

かりだった。それに、家族を思い出してはホームシックに陥いる朱音の髪をいつも優しく撫でてくれたのだった。

そんな彼の言葉が理解できない。急にこの世界に一人ぼっちで置き去りにされてしまったような不安と孤独を感じ、朱音はぼろぼろと涙を零し始めた。

「＊＊＊＊＊＊」

安心させようと、フェルデンが朱音の髪を撫でる。

涙で滲む視界の中で、フェルデンのブーツが泥でひどく汚れていること、そしていつも部屋にやって来るときには必ず置いてきてくれる剣を今日は見につけたままにしていることに気付く。おそらく、訓練を中断してここに駆けつけてくれたのだろう。

「＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊・・・」

入り口の辺りでその様子を見守っていたロランが何やらフェルデンに話をし始めた。

驚いた様子でフェルデンが立ち上がりロランを振り向く。

「＊＊＊＊!?」

「＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

二人のやり取りは真剣そのものであった。

「フェルデン殿下、アカネが急に言葉を解さなくなったのは、おそらく、彼女にかけられていた魔術の効力が切れたからでしょう・・・」

「それは本当か!?」

「はい。実際、今アカネの身から魔術の気配は消え去っています」

そんなやり取りがあったことなど知りもしない朱音は、とにかくどうして自分がこんな状況に陥ってしまったのか、必死に考えていた。

「ロラン、君の術でなんとかできないのか?」

いつも冷静で十七という若さで騎士団の指揮官という任に就き、たった二年で数々の功績を挙げてきたこの青年が、この出所もわか

らないただの少女を前にすると、なぜか取り乱していることに、ロラン自身少々驚いていた。

「できないことはありません。しかし、僕の専門は結界術です。以前かけられていたような術をアカネに施すとなると、相当の時間を要するかと・・・」

戸惑いを隠せず、フェルデンは椅子の上で小さくなっている朱音を見やった。

「これ以上時間を無駄にする訳にはいかない。アカネは元の世界に戻りたがっている。そのチャンスを奪いたくはない・・・」

ロランも小さく頷いた。

時空の扉を作り出すことのできる唯一の場所、セレネの森の鏡の洞窟は百年に一度地殻変動によって出現する未知なる力を持つ聖域で、その力を発揮することができるのは日数にして六十日の間のみ。そしてこの洞窟が出現してから、もう既に五十日が経過していた。

「この際言葉などどうでもいい。この機会を逃せば、アカネはアースに戻る術を失う」

そう言ったフェルデンは、どんなことをしても朱音を元の世界に返してやりたい気持ちでいっぱいだった。

出会った当初は、純真で飾らないこの少女に興味を抱き、幼くして亡くした妹の面影を抱いてはこのままここにいればいいのに、などと不謹慎なことを考えることも度々あったフェルデンだった。

しかし、毎晩家族や元の世界を懐かしんでは帰りたいと泣く朱音の姿を見ているうちに、自分がどれだけ身勝手な願いを抱いていたのかを思い知り、そして深く後悔したのだった。純真で可憐なこの少女の本当の幸せとは、元いた世界で家族と共に暮らすことなのだから、自分はどんなことをしてもその幸せを守りたいと強く心に決めたのである。

「言葉の弊害は厄介ですが、この際送り届けてしまえば何の問題もありません。

術の切れた今のアカネならば、敵に気配を察知される心配もないで

しょう」
　ロランはいつか自分が約束した、無事アースに送り届けるという言葉を思い出していた。
「鏡の洞窟が力を失うまで既に十日を切りました。あまり早く送り返してしまうと、再び敵がアカネを攫ってきてしまうことも考えられます」
　フェルデンはこくりと頷くと、意を決して言った。
「よし、ぎりぎりまで粘るぞ。そして期限ぎりぎりにアカネをアースへと送り返す！」
　突然大きな声を出したフェルデンに驚いて、朱音がビクリと身体を震わせて、椅子からずるりと滑り落ちた。
「アカネ！」
　慌ててフェルデンが床にペタリと尻餅をついたアカネに駆け寄ると、起き上がるのに手を貸す。
「フェルデン殿下、しかしながら、時空の扉を開くには僕の力をもってしても丸一日はかかってしまいます。それに、先日穢された聖域を浄化する作業もしなくてはなりません」
　ロランはちらりと涙目の少女を見ると、すぐさまフェルデンへと視線を戻した。
「どのくらいかかる？」
「穢れの具合によります」
　アカネを起こし終えると、フェルデンはロランを見つめた。
「よし、君に全て任せる。陛下にはおれから話して許可を貰っておこう。準備が整い次第直ぐに出立を。敵がまだ潜んでかもしれない。騎馬隊の第三小隊を護衛につけよう」
　ロランはフェルデンに礼の形をとると、
「御意に」
　と応えるとすぐさま早足で部屋を後にした。
　何やら真剣な面持ちでフェルデンとロランがやり取りをした後、突然に早足でロランが部屋から出て行ってしまったことに不安の表

情を浮かべている朱音をフェルデンはぐいと引き寄せた。
驚きで朱音は目を見開き、耳まで真っ赤に染める。
二人きりになった部屋の中で、何が起こったのか、朱音はフェルデンの腕の中に抱き寄せられる形で納まっていた。フェルデンの引き締まった長身の身体は、逞しくとても安心できた。服の布ごしに聞こえてくるフェルデンの心臓の音が、朱音の耳にしっかりと響いてきた。
「＊＊＊＊＊＊＊・・・」
相変わらず言葉の意味はわからなかったが、優しい声は朱音のパニックを起こした心に深く沁みこんでくる。
「大丈夫、きっと帰れるから・・・」
フェルデンは、愛おしいと思えた少女を抱き締めずにはいられなかった。
たとえ、言葉が通じなくとも。

6話　鏡の洞窟

一ヶ月以上もの間、城の部屋の一室に閉じ込められるような形で過ごした朱音だったが、この日は朝から様子がおかしかった。

いつもなら煌びやかなドレスをエメに半ば強制的に着せられるのだが、今朝は動きやすいスリットの入った上着にぴたりとしたズボンを着せられ、何度もエメは目を潤ませながらしきりに何かを訴えかけてきていた。

そうするうちに、フェルデンの手により慣れない馬に乗せられてやって来た先は、あの見覚えのある山。いや、森である。確か、以前ヴィクトル王がセレネの森と話していた。

それに今日初めて城の外に出たことで驚くべきことがわかった。部屋にあったあの絵画の中の城は、朱音自身がいた城だったのだ。言葉が解らない為、フェルデンに城の名前を訊くことは適わなかったが、城の周囲に広がる広大な野や美しい湖、そして崖下に広がる森は絵のものとそっくりであった。

（わたし、あんなに綺麗なお城で暮らしてたんだ・・・）

崖下に広がる森が今朱音達のいるセレネの森であった。すぐ裏手にあるものだとばかり思っていた森だったが、切り立った崖を降りることはさすがに難しく、ぐるりと馬で回って森へ降りた頃には、すっかり日が落ちていた。

「＊＊＊＊＊＊」

フェルデンが朱音に何やら囁くと、懐かしいいつしかの洞窟が目に入ってきた。

「あっ・・・」

驚いてフェルデンを振り返ると、ブラウンの瞳がふわりと優しく

綻んだ。
フェルデンは、朱音を元の世界に返してくれようとしている。今思えば今朝のエメの必死な訴えは、別れの言葉を朱音に伝えていたのかもしれなかった。
「＊＊＊＊＊！」
フェルデンと朱音の乗る馬に気付いた見張りの兵士が何やら叫んで敬礼をとると、洞窟の周りで護衛をしていた他の兵士達も慌てて敬礼をとった。
フェルデンは自分が先に馬を降りると、朱音が降りるのを手伝う。朱音は、すっかりこの青年の優しさに甘えきってしまっている自分を恥じた。
一人の兵士の案内で、二人は洞窟の中へと足を踏み入れた。
朱音は息を呑んだ。
一ヶ月前、アザエルに連れ去られたあの日に見た、あの金色の光の穴が、洞窟の奥にぽっかりと口を開いている。穴のすぐ近くには、しばらく見なかったロランが呪文のようなものをぶつぶつと唱えながら、穴に向かい合っていた。
ロランの顔には疲労の色が濃く見られる。おそらく、ここ数日徹夜でこの作業にあたってくれていたのだろう。いつかした朱音との約束の為に・・・。
朱音は胸が熱くなるのを感じた。
あれだけ憎まれ口を叩いていても、ロランは朱音を見捨てたりはしなかった。
そしてフェルデンも・・・。
今夜は雲が多く、二つの月は見えない。
「ロラン・・・」
朱音はロランのすぐ近くまで寄ると、小さな声で『ありがとう』と言った。
この言葉は、エメから教わった、数少ないこちらの世界の言葉だった。ロランの霞がかったブラウンの瞳が驚きで見開かれている。そ

の頬にちゅっと朱音は軽く口づけた。みるみる赤く染まる。思い返せば、こんなに豊かな表情を見せたロランは今が初めてかもしれない。

金色の穴は既に安定していて、今なら悠々と朱音が入っていけるだろう。

（帰れるんだ・・・）

喜びで手が震えそうになりながらも、チクリとなぜか胸が痛んだ。

「フェルデン・・・」

振り返ると変わらない笑みの青年が立っていた。でも、その顔はいつもよりもどこか淋しそうだ。

別れの時が迫っていた。これを逃すともう元の世界には戻れない、なぜか朱音はそんな気がしていた。

でも、この一ヶ月という期間、自分を自分の妹のように気に掛け、励まし、優しく接してくれたこの青年の温かくて逞しい手と永久にさよならするには、あまりに辛すぎた。

はらりと頬を伝うものに気付き、朱音は手の甲でそれを拭う。息もできない程の辛さ。

（そうか、わたし、いつの間にかこの人のこと好きになってたんだ・・・）

今更気付いてしまった自らの想いに、思わず苦笑してしまう。

ふと見上げると、美しい青年の顔がすぐ近くまで迫っていた。

「フェル・・・」

名を呼び終えぬうちに、朱音はぐいと強くフェルデンの腕の中に引き寄せられた。

「ラ・レイシアス・・・」

切なげに朱音の耳元で囁いた言葉の意味はわからない。でも、朱音は懸命に背伸びをしてフェルデンの背中に腕をまわし、抱き返した。一層強く抱き締められる形になった朱音だが、次の瞬間驚きで目を見開いた。

唇にあたる温かい感触。フェルデンが自分の唇に口付けていたの

だ。
ほんの数秒後、勢いよくフェルデンに突き飛ばされた朱音は、そのまま金色の穴の中に入ってしまった。
「や・・・！」

次に目を開けたとき、朱音は草の上で一人倒れていた。
金色の穴は朱音が通った直後、ロランの手によって素早く閉じられてしまったのだろう、周囲にそれらしきものは見当たらない。
「う・・・そ・・・。」
愕然としながら朱音はそこら中を暗闇の中探し回る。
「フェルデン・・・！！　フェルデン！」
さっきまですぐ傍にあったフェルデンの気配はどこにも感じられない。もう、二度と彼に会うことは叶わないことだけは朱音にも理解できた。
「ラ・レイシアスってどういう意味だったんだろ・・・」
朱音は草の上にへたり込み、まだ耳に残る優しいフェルデンの声を何度も頭の中で反復していた。

第2章　1話　さよなら

すっかり日が暮れてしまっていることだけはわかるが、何せ朱音は何も持っていない。時間を確認することなどできる筈もなかった。まだ頬に残る雫を服の裾で拭き取ると、朱音はしっかりとした足取りで歩き始めた。暗い山の中。あの夜と同じ虫の鳴き声や梟の声が聞こえる。

確かにここは朱音の元いた世界だった。いつまでもこんな山の中に座り込んでいる訳にもいかないし、朱音は月明かりのを頼りに足を進めた。

少し開けたところから下を見下ろすと、小さく町のネオンが見えた。あれは朱音の住む町に違いなかった。

（よし、ここは町の裏手にある望月山（もちづきやま）だ。この山ならそんなに高くはないし、町にも十分歩いて帰れる）

そう確信して、朱音は足を速めた。

山の麓には確か交番があって、駐在さんが日替わりで寝泊りしている筈だ。そこで助けを求めよう、と心に決め朱音は足元に気を配りながらこんなことを思い出していた。

（望月山って名前の由来は、どんなに天気の悪い日でも不思議と雲がかからないから、いつだって月がよく見えるってところからきてるんだっけ。確か、社会の先生がそんなこと言ってたよな・・・）

元の世界に戻って来れたことは本当に嬉しい。でも、もう一つの世界、レイシアに何か大切な物を置いてきてしまったような空虚感は消し去ることができなかった。

ぐっと拳を握り締めると、朱音は突然行方を眩ませた自分を余程心配しているだろう家族に、どんな言い訳をして説明しようかと思考をそちらに逸らす。

（きっとすごい心配してるよな・・・。突然知らない男に拉致され

た、なんて言ったら信じてくれるかな？）

戻ってきた今も色々と問題は山積みだ。

そうこうするうちに、いつの間にか山の麓まで無事に下りてくることができた。迷わずにここまで来れたことに感動しながら、朱音はとうとう明かりの灯る交番に向かって勢いよく駆け出した。

（やっと家へ帰れる・・・！！）

あと数メートルで交番に着く、というその瞬間、急に自分の足が自分のものではないかのようにぴたりと止まる。

すぐ近くの交番のガラス越しに警官が動く影が見えている。

（な、なんで！？）

ここから叫べば中の警官が気付いて出てきてくれるかもしれない。なのに、声さえ出せない。嫌な汗が背中を流れた。

「申し訳ありません。少しの間術を掛けさせていただきました」

先程まで存在さえ感じながったのに、ふと背後で声がした。振り向こうにもびくともしない朱音の身体は、すぐさま誰かの肩に担がれてしまう。

「！！」

担がれた拍子に視界の端に見覚えのある碧い髪が入ってきた。

（アザエル・・・！　どうして・・・！？）

それと同時に、自分がこれからどうなるのか、簡単に想像できた。この男にレイシアに再び連れ去られるのだ。

「このようなことになったのは全てわたしの失態です。あの時、どんな理由があろうとあなたから目を離すべきではなかった」

感情の篭らないアザエルの声は、まるで人形のように担がれている朱音の耳にやけに冷たく響いてきた。

（怖い・・・、この人一体何者なの？　なんでわたしなの・・・？）

身体のどの部分も自由に動かすことはできないけれど、不思議なことに、朱音の瞳からはつうと一筋の雫が零れ落ち、地面に吸い込まれていった。

（フェルデン・・・）

恐怖の中で、優しい金髪のあの青年の顔が思い出される。

ぐるりと背中に回した手は、力強く、何者からも自分を守ってくれた。どんなときも微笑み、髪を撫でてくれた。

「あなたが愚かなサンタシの騎士どもに攫われた後、直ぐにお迎えにあがれず申し訳ありませんでした。城の中は厄介な結界が張られており、あなたが結界の外に出てくるのを待つ他なかったのです」

アザエルがなぜこうまでして自分をレイシアに連れて行こうとするのかは朱音には理解できなかった。

「そうして待ち続け、あなたは予想通り再びあの洞窟の前に現れた」

突然アザエルは抱えていた朱音を地面にそっと降ろすと、暗闇の中に僅かに手を翳し始める。途端にバリバリと電気の生じるような音が走り始め、翳した部分に風が集まり始める。朱音は身動きのとれない身体のまま、どうすることもできずにその様子をじっと眺めていた。アザエルの手の中が微かに光り出すと、その光はみるみる大きくなり始めた。時空の扉だ。

遠くで午前零時の鐘が鳴っているのが聞こえる。

あっという間に金色の光の穴は広がり、安定を取り戻す。アザエルは疲れた様子を微塵も見せず、横たわった朱音の身体をもう一度抱え直す。

美しく冷たいアザエルの顔は、フェルデンの優しい微笑みとは似ても似つかなかった。

無言のままアザエルは光の中に足を踏み入れた。

その瞬間、朱音は元いた世界と完全に糸を断ち切られたかのような絶望感に襲われた。なぜか、もう二度とこの世界に戻ってくることは適わないと確信したのだ。

さよなら・・・。

既に自分が泣いているのか、そうでないのかもわからなかった。

光の中を抜けた先は、見覚えのあるあの洞窟。すぐさま背後で消失していく光の穴は、以前のように少しずつ小さくなるというよりは、突然テレビの電源をブツリと切られたような無くなり方だった。

そして、洞窟の中では数人の兵士が倒れていた。誰も彼も、何かに切りつけられたように血を流している。

（ひどい・・・！）

彼らが既に息をしていないことだけは確かだった。

朱音は、懸命に目だけを動かして、自分の知る人物の姿を探した。

ロラン、フェルデン・・・。この中に彼らの姿がないことを祈るが、その希望はすぐ様打ち消された。

「ううっ・・・」

洞窟の隅でうごめく小さな影。目を凝らしてみると、それはどこかで見たローブだった。

（ロラン・・・！）

恐ろしいことに、ロランのローブから血が染み出していた。

「なかなかしぶとい様だなロラン、この裏切り者の犬めが」

アザエルが冷酷な笑みを零す。

朱音はぞっとした。

「・・・ア・・カネ・・をどうするつもりだ・・・」

ロランは息も切れぎれにそれでも怯むことなくアザエルを睨みつける。

「我が国王を裏切った者に話すことは何もない。せめて一思いに死なせてやろう」

アザエルが無慈悲にも空いた左手をロランに振り上げようとした。

（やめてーーーーー！！！）

「やめろ！」

アザエルが一体何をしようとしていたのかはわからないが、洞窟の入り口からの鋭い制止の声にピタリとその手を止めた。

アザエルがじっと暗闇の中その声の主を見据えている。

暗闇の中、月明かりに映し出されたその姿は、紛れもなくあのフェルデンであった。
幸い、この場を離れていたのか彼には傷はないようだ。白く美しい軍服には血液の染みはついていなかった。
「フェルデン・フォン・ヴォルティーユか」
アザエルはフェルデンを見知っているようだ。
「貴様、ロランから離れろ！　一体何を・・・！！」
声を荒げたフェルデンは剣を抜こうとしてはっと手を止めた。
「誰を抱えている・・・！」
月明かりの下のフェルデンからは、洞窟の中の様子は暗くてよく見えないらしい。
さっきまであれほど会いたかったフェルデンがすぐ近くにいるというのに、朱音自身は声を出すこともできなかった。
それに、先程アザエルにかけられた術の影響か、朱音はまたこちらの世界の言葉を理解できることに気が付いた。
「フェルデン、そこをどけ。どかなければその腹切り裂いてでも通らせてもらうぞ」
冷たく恐ろしい男。この男ならば本当にフェルデンを殺してしまいかねない。
まるでフェルデンが存在しないかのようにアザエルは洞窟の入り口の方へと向かって歩いていく。
フェルデンは刀身を抜いてアザエルに向けて構えた。
徐々に明るみに近づいてくる恐ろしく冷酷で美しい魔王の側近。
その肩に担がれているものが見えたとき、フェルデンは怒りで震えていた。
「アカネ！」
先程鏡の洞窟の最後の力を利用して、ロランの術で扉を開き、腕をもぎ取られるような思いで元の世界に送り返した筈の朱音が、ダラリと人形のように力なくこの男の肩に担がれている。
「貴様っ、アカネに何をした！！」

アザエルはさして興味もないかのようにその声を無視してその隣を通り過ぎようとする。
一瞬のことだった。
フェルデンの鋭い剣の切っ先がアザエルの首に宛がわれている。先がほんの少し喰い込み、タラリとそこから血が僅かに滲んだ。
「ほう。ヴォルティーユの坊やはすっかり怯んでただ見ているだけだと思ったのだがな」
アザエルは無表情のまま静かに言った。
「少しでも動いてみろ、貴様の首を撥ね、その面をルシファーに送りつけてやる」
フェルデンの手に力が加わるのが朱音にも感じとれた。
「やめておけ。お前の剣の腕は噂で聞き及んでいる。今は無理だが、いずれ魔術抜きで剣を交えたいところだ。どうしても今だと言うのならば、わたしは惜しくも魔力でもってしてお前を殺してしまうだろう」
フェルデンは少しの迷いもなく剣を納めようとはしない。
「アカネをみすみす連れて行かせる訳にはいかない。それに貴様にそう簡単に殺られる訳にもな！」
勢いよくフェルデンが剣をアザエルに突き刺した。
しかし、それは風のようにさっと避けられてしまう。
「愚かな」
アザエルが朱音を抱えていない空いた左手をフェルデンに振り下ろした。一瞬にしてアザエルの手からどす黒い尖った釘のようなものが勢い良く無数に放たれた。
「やめてーーーー！！」
「うっ・・・」
朱音の声がセレネの森に響き渡った。
何がどうなったのか、朱音は自分の身体が動くことに気付き、慌ててアザエルの肩の上で無茶苦茶に暴れ回った。流石のアザエルも不意の事態に対応仕切れず、思わず手の力を緩めてしまった。

その隙を狙って、朱音は勢いよくアザエルの肩から飛び降りた。
足元で呻くフェルデンの元に素早く駆けつける。
「フェルデン！」
攻撃の瞬間にうまく身体を僅かに逸らしたのか、急所は外れているようだ。
でも、左肩には深い傷を負っていた。白い服にはどす黒い血が滲み出し、腕を伝って幾筋もの血液が流れ出していた。
「困りましたね、魔力を持たない筈のあなたが私の術を破ってしまうとは・・・」
アザエルがフェルデンと朱音を見下ろす。
「その男から離れてください。あなたまで傷つけてしまいます」
アザエルは再び手をフェルデンに向けようとしている。
「ダメー！　殺さないでっ」
朱音は地面に肩膝をついて痛みに耐えるフェルデンの長身の身体を必死に庇おうとする。
「アカネ、馬鹿なことをするな・・・！　おれのことはいいから、離れろ・・・！」
朱音はかぶりを振ってしてフェルデンから離れようとしない。
「では、わたしの条件を呑んで下さるのならば、その男の命は助けましょう」
アザエルは呆れ返った様子で朱音に言った。
「アカネ、耳を貸すな・・・！」
しかし、深い傷を負ったフェルデンがこの危機を逃れる為には、もうアザエルの出す条件を飲むこと位しか選択の余地は残っていない。
朱音は泣き腫らした目でぎっとアザエルを睨みつけると、こくりと頷いた。
「懸命なご判断。わたしの条件は実に簡単なことです。あなたがわたしに大人しくついてくる、たったそれだけのこと」
そのことが意味するのは、即ち、朱音がサンタシの敵国である魔

族の住まう地、ゴーディアに行くということ。
“贄”という言葉が頭を過ぎる。
しかし、目の前の大切な青年の命を思うともう覚悟を決めるしか無かった。
すっくと立ち上がった朱音は、重い足取りでアザエルの元へと近付いていく。
「アカネ！　やめろ！　行くな！」
痛みをこらえてフェルデンが朱音に訴えかける。
しかし、朱音は目をぎゅっと閉じてアザエルの言葉に素直に従った。
「では、参りましょうか。それまで少しお眠りください」
アザエルがとんと朱音の額に手をやると、がくんと朱音の身体が急に力を失った。
眠りに落ちた朱音の身体を再び肩に担ぐと、アザエルは何事も無かったかのように洞窟の外へと歩き始めた。
「くそっ、待て！　アカネをどうする気だ！」
掠れた声でフェルデンが叫ぶ。しかし、出血の量が多く、体が思う様に動かず、足に力が入らない。
フェルデンは氷のように冷たい碧眼と碧髪の男を心底殺してやりたいと思った。そして、こんなにも無力で、大切な人さえ碌に守りきることさえできない自分を呪った。
洞窟を出た途端、アザエルは掻き消えるようにして姿を消した。
その後の静寂の中で、フェルデンは悔しさで唇を噛み締めた。
「アザエル・・・、貴様は絶対に許さない・・・！」
そして、愛らしい黒髪の純真な少女を思い、何度も洞窟の壁に自らの拳を血が出るまで打ち付け続けたのだった。

2話　魔王ルシファー

目が覚めても、朱音は起き上がる気にはなれなかった。
洞窟で肩に大怪我を負ったフェルデンのことが未だ頭から離れなかったのだ。それに、夥しい血を流して倒れていたロランの安否が気になって仕方がない。

鏡の洞窟からこのゴーディアの魔城までの道のりは、長いものだった。
まず、セレネの森を抜け、サンタシの国土を休み無く早馬で走り抜け、常人なら一週間はかかる距離をアザエルは三日という驚異的な記録で到達した。
それから、中立国の隣国ナジムに入り、商業船の行き交う港へと直行し、自国へと帰る船の船長に話をつけて乗船。その後は術を解かれた朱音は退屈な商船の中で約十日間過ごした。そうしてやっとゴーディアの地へと辿り着いたのだ。
その後も長い魔城からの迎えである馬車に詰め込まれ、朱音はひどく疲労しきっていた。
ここ、ゴーディアの魔城と呼ばれるこの城は、黒の大理石調の石を存分に使用した魔王の城に相応しい城で、ヴィクトル王の白を基調とした白亜城とは対照的な印象を与えた。魔城はどこか妖しげな空気を漂わせていたが、美しい城であることに変わりはなく、ゴーディアの民の誇りであることは疑う余地もない。
そしてこの部屋も例外ではない。
コンコンというノックの後に、見たくもない男が姿を現す。
吸い込まれそうな碧い瞳と長く碧い髪の美しいこの男は、魔王ルシファーの側近であり片腕であるアザエルだった。
朱音はもぞもぞと毛布を頭まで被り、ぷいとアザエルに背を向け

た。
「まだお加減が優れませんか」
応えが返ってこないのに、アザエルは気にもしない様子で、朱音の眠るベッドの傍に寄ると、無言でその淵に腰掛けた。
「今日はあなたに会わせたい方がいます。このところのように、ほとんど食べ物を口になさらないのでは、本当に身体を壊してしまいます。昼食を用意させますので、召し上がってください」
アザエルが相変わらず感情の篭らないトーンで朱音に言葉を連ねる。
この男は魔王ルシファーの命で動いているだけであって、本当に朱音のことを心配している筈がなかった。この男にはもともと人の心というものが備わっていないのかもしれない。
「・・・あんたなんか大嫌い・・・。顔も見たくない・・・。出てってよ」
しばらくの沈黙の後、アザエルが諦めたのか、静かにベッドから立ち上がった。
「わかりました。また後程お迎えにあがります。ですが、必ず食事は摂ってください」
アザエルがそう言い残して部屋を出て行ったのを確認すると、朱音は毛布からもぞもぞと這い出した。
(どうせわたしが食べないと自分がルシファーに叱られるから義務的に言ってるだけなんでしょうよ)
ふんっと鼻を鳴らしながら、朱音はぎゅっと目を閉じた。
どうせ、贅にされる身なんだから、今更食事したところで何の意味も無いように感じた。
しばらくして給仕がスープやサラダなどを載せたワゴンを押して入ってきたが、朱音は気付かない振りをして不貞寝し続けていた。
一刻程粘っていた給仕だったが、全く起きてくる気配のない朱音に諦めて、せめてというようにテーブルに冷めても口にできるパン

をバケットごと置いて部屋を出て行ってしまった。
（魔王ルシファー・・・、もし会うことがあったら、死ぬ前に思いっきり文句言ってやる！　きっとこれだけ傲慢な人なんだから、誰にも文句言われたことなんてないだよ！）
怒りで思わずベッドのシーツをぐしゃりと握り締めてしまっていた程だ。

「どうやら昼食も口になさらなかったようですね」
おそらくノックをしてはいたのだろうが、怒りのあまり朱音が気付かなかったのだ。
ふいにベッドのすぐ後ろで声がして、朱音はビクリと身体を強張らせる。
「さて、今からあなたに会わせたい方がいます。ついて来ていただけますか？」
アザエルの言葉には有無を言わせない強さがあった。
この男の言いなりにはなりたくはないが、ここで朱音が意地を張ったところで、この冷酷な男はまた妙な術をかけて担いででもそこへ連れて行ってしまうだろう。
「・・・・・・」
俯いたまま、のそりと重い身体を起こすと、朱音は渋々アザエルの元へと歩いた。
それを確認すると、魔王の側近は朱音を誘導するように城の中を歩き始めた。
城の中は黒っぽい壁面のせいか昼間だというのになぜか薄暗く感じる。でも、奇妙なことに懐かしい気がするのはどうしてなのか、朱音はそれが不思議でならなかった。

ギギギという腹に響くような音がしたと思うと、アザエルが石壁を開いているところだった。ぼうっと歩いてきたせいで、ここまでどうやって来たのかはもう思い出せない。

「さ、会わせたい方はこの部屋の中です」
アザエルが視線をやる先は、石壁で囲まれた薄暗い部屋。窓は一つもなく、勿論のこと人の気配など何も感じない。壁に吊り下げられている蝋燭に、アザエルが静かに火を灯していった。
少し明るくなった埃臭い部屋の真ん中に、美しい彫刻で模られた対になった黒い棺が二つ。それ以外にこの部屋には何もない。
「こちらへ」
アザエルが片方の棺の前で足を止めると、ゆっくりとその蓋を外し始めた。
ごくりと朱音は息をのむ。
まさか、おどろおどろしい骸骨やミイラなんかが飛び出しては来まいかと、内心びくついていたのだ。しかし、蓋が全て外されても、中のものが勢いよく飛び出してくることはなかった。
アザエルに促されるまま、一歩、一歩と棺に近づき、意を決して中を覗いてから驚きのあまり、朱音は後方に数歩後退りしてから尻餅をついた。
「こ、この人・・・」
棺の中に横たわっていたのは、恐ろしく美しい黒髪の男だったのだ。
長い髪は漆黒で、肌はそれとは対照的な白。眠っているようにも見えたが、生気はまるで感じられない。
「ゴーディアの国王、ルシファー陛下です。そして、あなたのお父上です。」
「う、嘘・・・！」
首を振りながら、朱音はずりずりと壁際へとにじり寄る。
「ルシファー陛下は、一千年の長きに渡って、その強大な魔力をもってして、このゴーディアを治めてこられました。しかし、四百年前に始まったサンタシとの長き戦いで、莫大な量の魔力を断続的に使用し続ける羽目になったのです。そしてそれは陛下の身体に大き

な負担を強いていました。」

朱音はアザエルの言葉を信じられない思いで聞いていた。

「二百年前のことです。味方の裏切りによって城内へ敵兵の侵入を許してしまったことが唯の一度だけありました。その頃はサンタシの王、セドリック・フォン・ヴォルティーユの時代のことです。陛下とベリアル王妃には陛下の血を色濃く受け継ぐお子のクロウ王子がおられましたが、まだ幼かった王子をサンタシの手から守る為、お二人はある儀式によって王子の魂のみを異世界に送り出されたのです。」

朱音は両手で耳を塞ぎ、小さく蹲った。

自分が魔王ルシファーの息子の筈などない、そう心に言い聞かせて。

「本来なら、陛下がお亡くなりになる以前にあなたをお迎えに挙がる筈でした。しかし、鏡の洞窟が出現するのは百年に一度のみ。残念なことに出現するのを待たずして、陛下は亡くなってしまわれた。ですから、私は陛下のあなたの魂を呼び戻せという最期の命に従い、こうしてあなたをここへお連れしたのです」

小さく蹲った朱音のすぐ目の前で、アザエルは膝を折って頭を深く下げ礼の形をとった。

「なんでわたしなの？　わたしがそのクロウ王子の魂だというその根拠は？」

朱音はアザエルの碧い目を強く睨みつけた。

「それはあなた自身がよくわかっている筈です。突然懐かしい思いを感じたり、奇妙な感覚に囚われることはありませんか？　それはあなたの魂の記憶です」

「・・・・・・」

確かにアザエルの言うように、そのような不思議な感覚に見舞われることは何度かあった。信じたくないのに、魔王ルシファーの亡骸を目にしたときの衝撃。あれは“悲しみ”という感情に他ならないのではないだろうか。

同時に、フェルデンのゴーディアを深く憎む姿が脳裏に浮かぶ。
十年前、幼い妹を魔族の手によって殺されたと打ち明けてくれたあのひどく淋しそうな顔を・・・。そして、君も妹と同じような運命にさせたくない、と呟いたフェルデンの横顔。
もし朱音が憎き魔王ルシファーの子だと知ったら、彼はどんな顔をするだろうか？　今までと変わらない微笑みを向けてくれるだろうか？　あの優しいフェルデンに、冷たくされることや、憎しみの目を向けられることを考えると、朱音は絶望の淵に立たされた気分になった。
アザエルはそんな朱音の手を緩やかにとると、その甲に触れるだけのキスをした。
かっとなって、朱音はその手を振り解く。
（この男は、わたしが絶望したり悲しんだりする反応を見て面白がっているんだ・・・。どこまでも魔王ルシファーの僕（しもべ）で、わたしのことを本当に考えてはくれていない・・・。この人が見ているのは朱音ではなくてクロウ王子だけ）
まるで何も感じないかのような整ったアザエルの顔に、朱音は吐き気を覚えた。
「わたしに触るな・・・！」
小刻みに震えながら、アザエルに口付けられた手を庇うと、視線を決して合わさぬよう、じっと石の床を睨みつけていた。

3話　復活祭

「アカネ様、起きて下さい。もうすっかりお日様は昇っていますよ？　ほらほら、目覚めのティーを入れました。召し上がってください。目覚めにはプッカブの葉が一番です」

という、早朝一番のエメの声が聞こえた気がする。

でも、眠い目をこすりながら部屋を見渡してみても、ここにはあの明るいエメの姿はどこにもない。

毎日飲んでいたエメのティーが無性に飲みたくなる。エメのハーブティーは朱音の心の拠り所の一つだった。

「わたし、王都からずっと離れたロージ村という田舎からから出稼ぎに来ているんです。わたしのハーブの知識は祖母から教わった宝物なのよ」

と、朱音がどうしてエメはハーブに詳しいのか、と聞いたときに嬉しそうに話してくれた。

もうこのルシファーの城にきてから一週間以上は経った頃だろうか。既に日にちの感覚はなく、毎日のほとんどをこのベッドで過ごしていた。

寝ている間に給仕が食事を運んで来てくれたのだろうが、不貞寝の多い朱音に諦めて、もう起こそうとする努力もしなくなった。

テーブルの上にすっかり冷めた朝食が載っている。

ノックの音がするが、朱音は見向きもせず、じっと窓の外を眺めていた。遠くに城壁が見え、そこまでは美しい芝が広がり、整えられた道には城で働く者や王都からやって来た者が忙しく行き来する姿が小さく見えている。それに、城の敷地内ではいつもよりもどこ

か慌しく、何かを組み立てる者や、あれこれと従者に指示をしている者、黒い巨大な国旗を乗せた荷車を引っ張る者など姿が目立つ。今日は何か城で開催されるらしい。

アザエルは、テーブルに載ったままの冷めた朝食にちらりと目をやるが、そのことについて何も言おうとはしなかった。

「おはようございます。今日のご予定を申し上げに参りました。本日、王都マルサスで復活祭が催されることになっております」

窓の出っ張りに肘をついたまま、朱音は何も聞こえてないような素振りでじっと窓の外を眺め続けている。

「それに即して、我城でクロウ殿下の復活の儀式が執り行なわれることになりました」

さらりと何事もないように話す淡々としたアザエルの言葉に、朱音は驚き、勢いよく振り返る。

「儀式!?　そんなの聞いてない!」

朱音が乱暴に立ち上がったせいで、腰掛けていた椅子は大きな音を立てて床に倒れた。

「元老院の権限により急遽決まったことです。王の不在に国民や他国が感付き始めました。一刻も早い、クロウ殿下の即位が望まれます」

朱音は、怒りに打ち震えた。

「儀式って一体何をするの・・・?」

儀式と耳にすると、サンタシでフェルデンやヴィクトル王に言われた”贄”という嫌な言葉が蘇る。

「あなたは何もしなくても構いません。全ては祭司に任せておけばよいのです」

何もしない儀式など、あるはずもない。

朱音はその言葉の真意を探ろうと躍起になった。

「何もしないって、どういうこと・・?」

ツカツカと早足でアザエルに近付いていくと、アザエルの腕の裾をぐいと引っ張って睨み上げた。

「今の人間の肉体から魂を抜き出し、元の身体に戻すだけのことです」

朱音はさっと血の気が引くのがわかった。

（魂を抜き出す・・・？　じゃあわたしの身体は一体どうなるの・・・？）

カタカタと震え出す肩。朱音は恐ろしさで震えを止めることはできなかった。

「た・・・魂を抜き出すって、どうやって・・・？」

アザエルはやれやれというように、強く掴まれた服の袖から、ゆっくりと朱音の手を解く。

「ハデスという短剣を胸に尽き立て、人間の肉体を仮死状態にすることで魂を取り出すのです。恐れることはありません。苦痛は一瞬です。蛇に噛まれるよりも短い」

朱音は聞きたくもなかった恐ろしい事実に、真っ青になってアザエルから一歩、また一歩と後退る。

「儀式は日が最も高く昇る頃に行なわれます。あなたもそろそろ準備をしていただかなければ。直に侍女を遣します」

礼の形をとると、アザエルは恐怖に慄く朱音に背を向けさっさと立ち去ろうとする。

「わたし、儀式になんか絶対出ないから・・・！」

アザエルはほんの少しだけ振り向くと、残酷な言葉を朱音にぶつけた。

「では、あなたはこの国とその民がどうなってもよろしいと・・・？」

アザエルが部屋の扉に手を掛ける。

一人ぼっちの今の朱音には、信じたくはないが、この冷酷な男だけが、唯一の頼みだった。

「死にたくない・・・！」

朱音の悲鳴のような声だった。

「・・・死ぬ？　寧ろその逆ですよ」

アザエルは、涼しい顔をして部屋を出て行った。

後に一人残された朱音は、声もなく絶望の涙を流した。

魂をこの身体から抜かれるということは、朱音という存在が消えてしまうことを意味している。

懐かしい元の世界の思い出が心の中を駆け巡った。

あともう少しで手にすることのできた帰還の切符。望月山麓の交番にほんのちょっと手を伸ばせば届いたのに、それさえも邪魔したアザエル。愛する家族や友人にまた会える、という希望は目の前で儚くも散ってしまった。それだけでなく、せっかく再会を果したフェルデンとも引き離したアザエルは、またしても朱音の大切な物を奪い去ろうとしていた。

あの世界にいた証であるこの”朱音”という存在。大切な両親から譲り受けた、決して自慢できないが愛着のある身体。そして、フェルデンとの唯一の繋がり・・・。

正直、無理矢理連れて来られた朱音にとって、ゴーディアは何の愛着も感じらなかった。こんな国なんて知ったこっちゃない、滅ぶなら滅んでしまえばいい、などという腹立たしささえ感じる。

そして、今ここには朱音を助け出してくれる人は誰一人いなかった。誰も助けてくれないのなら、自分を救うことができるのはもう朱音自身だけである。

朱音は、やけに早鳴る鼓動を右の拳で押さえ、とんでもない行動に出た。

人は、生命の危機に立たされると、とっさに思い掛けない行動に出る。

部屋の窓を全開にしてどうにか城の外に降りられないものかと下を覗き込むと、窓の外には僅かな出っ張りが。

朱音はごくりと唾を飲み込むと、おそるおそる窓を跨ぎ、部屋の外へと出ると、思いの他強い風が吹き付けることに気付き、慌てて壁の窪みに縋り付く。

けれど、このままこの部屋に残れば、恐ろしい儀式の犠牲となることは免れないと思うと、朱音の挫けそうな心を何とか立て直すことができた。

（気付かれる前に王都まで逃げないと・・・！　人ごみに紛れれば、何とかなるかもしれない！）

僅かな希望を胸に、朱音は一歩、一歩と小さな窪みに足を掛け、確かめながら壁を降りる。

下を見ると足が竦み、心が萎えそうになる為、なるべく下を見ないようにしなければならない。

十メートル程壁をつたい降りれば、一息つける程の平たい場所がある。

それを目標に朱音は自らを励まし続けた。

あと三メートル、あと二メートル・・・と近付いていく目標地点。

裸足の足でペタンと着地すると、ひどく自分が汗をかいていることに気付いた。

（さあ、もう一頑張り・・・）

そう思って下を覗き込むと、朱音はまだまだ遠い地上に愕然とした。

（まだたったのこれだけしか降りてきてない・・・。どうしよう・・、もう降りられないかもしれない・・）

そう思ったと同時に、頭上の空いた窓から侍女達の騒ぐ声が聞こえてきた。

部屋のどこにもいない朱音に気が付いて、探し回っているのだろう。

再び早鳴りし始めた心臓。

見つかりませんように、とぎゅっと瞼を閉じて強く願ったのも適わず、窓の開く音と同時に悲鳴が上がった。

見つかってしまったのだ。

なんとかして逃げたい気持ちはあるが、下を覗くと恐怖で足が凍

りつく。
いっそのこと、このまま一気に下まで飛び降りてやろうかとも思った。そうすれば、いいように利用されなくても済むだろうし、この後待ち受けている恐ろしい儀式の被害者にならずとも痛みを感じる前に死ねるだろう。朱音はふとそんなことを考えながら、虚ろな目で遠い地上を見つめていた。
そうしていると、もしかすると奇跡が起きて、空を飛べるかもしれないなどという非現実的な考えさえも頭を過ぎり始める。
「アカネ様！　馬鹿な考えはおやめください！」
頭上から侍女の声。
侍女の目からも、朱音がこのまま身を投げてしまいそうに見えていたのだ。
侍女の声は何の励ましにもならない、ましてや、この後の儀式で死に行く朱音にとっては、寧ろここで身を投げることの方が救いの道のようにも感じられた。
ぐっと拳を握り締め、唇を噛み、朱音は震える足で静かにその場に立ち上がった。
吹き付ける風は強く、ゆらゆらと朱音の身体を揺さぶる。
ここから飛べば、本当にこの風に乗って逃げ遂せるような気がしてならなかった。
瞳を開くと、もう一度地面を見据えた。
「・・・！」
碧い髪・・・。
朱音の見据える地上に、碧く長い髪がたなびいている。遠く離れた男の表情は見えない筈だったが、その目がじっと朱音を見つめているのがはっきりとわかった。
（邪魔しないで・・・）
朱音はまたもや立ち塞がろうとする碧く美しい男に、これ以上の邪魔をさせる気になれなかった。
（どいて・・・！）

朱音は強くアザエルを睨むと、次の強い風に身体をまかた。
「アカネ様！！」
侍女達の悲鳴を他所に、朱音は風を切って落下していく。
空を飛べるなんてやはりある訳なかったんだ、と落ちていく高速の景色の中で、やけに冷静に朱音は冷静に考えていた。そして、あの憎い男アザエルが困り果てる顔は見たかったな、なんてことも。
しかし、その落下は激突寸前で打ち止められた。
「ほんとにあなたという方は・・・。
どれだけ私の心臓を弄べば気が済むというのですか」
ザバリと突如して起こった水流に流され、そして直ぐ様形を失った多量の水は地面に広がり、流れ消えた。その濡れた地面の上で全身ずぶ濡れになった朱音がゴロリと地面に転がった。
「ごほっ」
水を少し飲み込んでしまったのか、朱音は咽ながらのろのろと起き上がった。
この一瞬の間に何が起こったのかは説明するまでもなく、アザエルは朱音が地面に激突するのを魔術によって回避したということは明らかだった。
「よくもそんなことを言えるね！　あんたが心配なのはわたしじゃない。クロウだけなんだからさ」
手を貸そうと伸ばしたアザエルの手をパシリと叩き退けると、朱音は悔しげに涙を浮かべながら唇を噛んだ。
「今のあなたは人間の身体に長く居すぎたせいで一時的に記憶を亡くし、混乱しているだけにすぎません。元の身体に戻れば、徐々に記憶を取り戻していく筈です」
朱音は、このとき、もうどうやっても儀式からは逃れられないと強く感じた。そして、朱音である自分だけは失いたくないという思いも。
アザエルの手によって、部屋に戻された朱音は、部屋に待機してい

た侍女達に身体を清められ、儀式用の衣服に着せ替えられた。その間も、朱音はそっと頬を濡らし続けた。

侍女達はそんな朱音の姿を知りつつも、無言のまま自らの仕事をテキパキと済ませていく。

しかし、侍女達の心の中も、内心は悲哀の気持ちでいっぱいだった。ここに来てからすっかり痩せてしまった少女の身体は痛々しく、少女の心の痛みは、全部までとはいかないが、少しはわかる気もしていた。国の機密事項の為、侍女達にはこの人間の少女が何者なのかは一切聞かされてはいなかったが、今日行なわれる復活祭りの儀式で、この少女にとってよくないことが行なわれることだけは何となく想像がついてもいた。だからこそ、この高さの窓から逃げるなどという無謀なことをしでかしたのかもしれなかった。

「アカネ様・・・、何か私達にできることはありませんか？」

侍女の一人が堪らずに小声で囁いた。朱音は、そんな侍女の心遣いに感謝しつつも、悲しそうな目で小さく首を横に振った。

儀式のときは刻一刻と迫っていた。えらく長く、そして短い時間のようだった。

城の地下にある儀式用の大広間に連れられた朱音の心は、もうすっかり麻痺してしまっていた。ただ、もう考えることに疲れ、そしてどうでもいいという諦めだけが心を支配していたのだ。

壇上には以前目にしたのと同じ、真っ黒な彫刻が施された棺が置かれ、その隣には石の寝台が設置されている。棺と寝台は数人の灰のローブを羽織った者達に囲まれていて、その者達の表情は深くフードを被っているせいで見えない。

足元には炭のようなもので描かれた見たこともないような文字や絵で敷き詰められていた。壇上より下は、ゴーディアの政治関係者と思われる人物十数人が、歴史的な儀式の一場面を目に収めようと、緊張した面持ちでじっと様子を見守っていた。石の寝台の端には、怪しい光を放つ短剣が置かれている。

朱音は寝台に寝そべる瞬間、ふと隣にある棺の中を覗き見た。棺の中には、真っ黒な服に身を包む、朱音と同じ年頃の少年が静かに横たわっていた。魔王ルシファーと同じ漆黒の髪は、二百年の年月の間に、恐ろしい程長く伸びていた。それに、この少年はまだ少年の姿をしてはいるが、魔王ルシファーの生き写しのような妖しい容貌をしていた。

（これがクロウ・・・）

朱音は複雑な気持ちでそれを見つめると、朱音はゆっくりと寝台に仰向けに寝そべった。

寝そべる瞬間、ちらりと視界の端にあの碧い髪が入ってきた。当然のことながら、あのアザエルも儀式に立ち合っているということだ。

あの男は、今のこの時をどれだけ心待ちにしていたことだろうか。忠誠を誓う魔王ルシファーの最期の命を全うできるこの時を。きっと、今冷たい微笑を浮かべているに違いない、そう思うと、朱音はひどく腹立たしく思った。

棺と寝台を囲む祭司達が何か不気味な呪文のようなものをぶつぶつと唱え始めた途端、風もないのにパタパタと男達のローブがはためき始める。

そして急に空気が冷たくなるのがわかった。

寝台の近くにいた祭司の一人が、寝台にあったハデスの短剣を手にとると、それを朱音の胸につき立てた。

その瞬間、凄まじい痛みが胸に走り、朱音は堪らずに悲鳴を上げた。深く突き刺さった短剣は燃え滾るように熱く感じられた。痛みの中で朱音の視界は暗転していった。

（フェルデン・・・）

朱音は最期に心の中で小さく呟いた。

4話　王の狙伺

夢を見ていた。

「わたしの国はね、身分の違いなんかないんだよ。みんな平等に仕事をしたり学校へ行ったりしてすごく平和に暮らしてて」

にこりと微笑む少女の顔は、本当に幸せそうだ。

「では、君の国では王がいないと？」

こくりと頷いた少女の反応に、驚いてフェルデンは目を丸くする。

「それでは、誰が国を治めるんだ？」

少女のきょとんと見つめ返す茶味がかった黒い瞳は、不思議な色を秘めていた。

「みんなが代表に選んだ人が期間限定で政治を引っ張る方法を執っているかな。わたし達の国では、総理大臣っていうんだけど」

少女の話すことはこのレイシアでは考えもつかないような興味深いものばかりだ。

「それは凄いな・・・」

フェルデンは部屋の窓のから立ち上がると、くるりと少女に向き直った。

「君はどんな環境で暮らしていた？」

朱音はふっと顔を綻ばせると、

「私の家族はねえ・・・」

と、生き生きとした表情で話し始めた。それだけで、この少女がどれだけ幸せな暮らしを送っていたのかが想像される。

「わたしの家族は、お父さん、お母さん、それと弟の真咲（まさき）の四人暮らしでね、お父さんは空手の道場で師範をやってるんだよ。で、お母さんは料理が苦手なただの主婦。弟の真咲はチビで生意気だけど、お父さんの道場をいつか自分が継ぐんだ、って勝手に思い込んでるお馬鹿さん」

フェルデンは知らずに口元が緩んでいることに気付いてはいなかった。

空手や道場、師範、などの聞き慣れない言葉の意味を訊ねると、朱音は空手は武器を使わない武術のことで、道場は訓練場、師範は先生のことだと懇切丁寧に教えてくれたのだった。

ズキリと傷が痛み、フェルデンは懐かしい夢から目を覚ました。どれだけ眠っていたのだろうか。

「アカネ・・・！」

フェルデンは痛みを堪えてベッドから這いずり出た。

上半身に巻かれた包帯からはまだ血が滲み出している。力の入らない足、歪む床や天井から、自分が高い熱を持っていることに気付く。

「殿下！　いけません！　ベッドにお戻り下さい！」

慌てて駆け寄ってきたのは王家の専任の医師、フィルマンだった。

「どいてくれ、おれはアカネを助けに行かなければ・・・！」

何かに掴まっていないとすぐに崩折れそうになる身体を、なんとか壁に寄り掛かることで支えたフェルデンは、駆け寄ってきたフィルマンの手を払った。

「殿下、お気持ちはわかります。しかし、今の御身体では無理かと・・・。傷の状態はロランよりも悪かったのですぞ」

フェルデンははっとした顔になり、すぐにフィルマンの肩を強く揺さぶった。

「そうだ・・・！　ロランは・・・ロランは無事なのか・・・？」

フィルマンはこくりと頷いた。そしてフェルデンにベッドへ戻るように促し、その背を支える。

「ご安心くだされ。ロランは無事です。ロランの傷は大きかったものの、フェルデン殿下に比べると、傷自体は浅いものでした。得意の結界で咄嗟に防御したものと思われます。」

ほっと安堵の溜め息をついたのも束の間、フェルデンはフィルマンの支える手からやはり離れようとした。

「アカネが、魔王ルシファーの右腕、アザエルに捕まったのだ。直ぐに追わなければ・・・！」

壁に背を委ねながら、懸命に部屋の扉に向かうフェルデンを、フィルマンは何とかして止めなければならなかった。フェルデンの失血量は致死に到ってもおかしくは無い程のものだったからだ。そして、そんな身体で歩けること事態が既に奇跡としか言いようがない。

何が彼をそこまで駆り立てるのか、フィルマンは不思議で仕方がなかった。

アカネはセレネの森でフェルデンが保護してきた人間の少女であったが、その存在は城の内部でもごく少数の者にしか知らされていなかったし、ヴィクトル王の口から詳しい説明は何も語られることはなかった。しかし、フィルマンはそんなアカネに何度か面会する機会があった。

森から保護された少女は、足の裏に傷を負っていて、その治療に自分が抜擢されたのだ。

珍しい肌の色や黒髪と少々風変わりではあったが、平凡な人間の少女であった。

傷の手当を終えた後に、

「ありがとう」

と、感謝の言葉を述べられたとき、実はフェルマンは少々驚いていた。城で働き始めてからというもの、そんな言葉を言われることがなかったからである。　しかも、それは治療の度に繰り返されたのだった。

騎士団を率いる忙しい身のフェルデンであったが、日々の公務の後、必ずと言っていい程、アカネを気に掛け部屋を訪ねていく姿をよく見かけたものだ。

ふと、幼い姫君と一緒に戯れる、少年時代のフェルデンの姿が思い出され、もしかすると、フェルデン閣下は亡くなられた姫君に面影を重ね合わせているのかもしれないな、とフィルマンは勝手な解釈をした。

「殿下、どうかベッドに・・・」
フィルマンがはてさてどうしようかと焦り始めたその時、
「入るぞ」
という声と同時にヴィクトル王が姿を現した。フィルマンは咄嗟に礼をとった。
「兄上・・・」
驚いた表情でフェルデンは兄であるヴィクトル王の顔をしばし見つめた。
「部屋の前を通った際に、お前とフィルマンのやり取りが耳に入ったのでな。
どうやらまたフィルマンの手を煩わせているようだが？」
昼間の王の顔とは違い、ヴィクトルはフェルデンの年の離れた兄の顔に戻っている。
「フェル、一体どの位眠り続けていたのかを知っているか？　お前は三日間も眠り続けていた・・・。一体あの夜何が起こったのだ？」
フェルデンは三日という言葉に愕然とした。
あのアザエルならば三日あれば既にこの大陸を離れているかもしれない。あれから三日経っているとすれば、あの男に追いつくことはかなりの困難を極めるだろう。
「おれはそんなに眠っていたのか・・・」
「正確には、瀕死の重傷だったと言えるだろう」
ヴィクトルは、フェルデンの背に腕を回し、ベッドに戻る手伝いをした。今度はそれに素直に従った。
「ロランに大まかなことは聞いている。時空の扉から、確かにアカネをアースへ送り返したこと。しかししばらくの後、魔王ルシファーの側近であるアザエルが突然背後から現れ、容赦なく攻撃を仕掛けてきたこと、閉じかかった時空の扉を再び開き、自ら入って行ってしまったこと。少し後に気を失ったアカネを抱えてアザエルが時空の扉から帰還したこと」
小さく呻きながらフェルデンはベッドにどさりと腰掛けると、こ

くりと悔しそうに頷く。
「おれはアカネを手放したことに動揺し、儀式の片付けをロランに任せたままに早々に退散していた・・・。おれが馬鹿だった。公務に私情を挟むなどと・・・」
くっと唸ってからフェルデンは包帯の巻かれた拳をベッドに振り下ろした。
ヴィクトルは項垂れる弟の肩にそっと手を置いた。
「馬を走らせていたおれだったが、途中で何か嫌な予感がして慌てて引き返して来た。すると鏡の洞窟の前で部下が血を流し倒れていて、まさかと思い洞窟の中を覗いたときには、もうあの男、アザエルがアカネを担いで出てくるところだった・・・」
フェルデンの落ち込み様は異常だった。嘗てこんなにも後悔に苛まれる弟の姿を見たことはあっただろうか。そう、幼きジゼル姫を失ったあの時でさえ、恨みや怒りを露にしたものの、ここまで落胆することはなかった筈だ。
「フェル、そう自分を責めるな。お前の指揮官としての働きはこの国の誰もが認めている。それに、お前があの場に初めからいたにしても、いくら剣の腕の立つお前でもあの男の魔術を前に対抗できたのかもわかるまい。寧ろ、そうであればお前の命はもうここにはなかったやもしれぬ」
ヴィクトルの言うことは正しかった。アザエルの魔力が強大で、結界術を得意とする有能なあのロランでさえ怪我を負ったのだ。ただの人間であるフェルデンに剣一本で互角に渡り合える筈はない。
「それよりも、お前はまずその怪我を治すことに専念しろ。お前には、一刻も早く復活し、重要な任に就いて貰う予定でいるのだ」
フェルデンの額には、うっすらと汗が浮き出ている。傷の痛みは尚酷いらしい。
「重要な任・・・？」
ヴィクトルはフィルマンに目配せして部屋を退室するよう合図し、フィルマンがいなくなるのを確認した後、声を落として驚くべき事

実を告げた。
「ゴーディアに放っておいた密偵からの情報でまだ確信はないのだが、ルシファー王が死去した可能性がある。それをゴーディアがどうも隠し立てしているようだと・・・。」
「そ、それは本当ですか！？」
フェルデンは兄王の腕を掴むと、強く揺さぶった。
「これはあくまで推測の域だ。だが、各国の王達が異変を感じ始めているのも事実」
ヴィクトルは難しい面持ちで頷く。
「実はあの儀式の夜、わたしも何か胸騒ぎを感じてな、お前がアカネを連れて出た一刻半程後に、ディートハルト達に鏡の洞窟へと向かわせたのだ」
何か言いたそうなフェルデンの顔を見て、ヴィクトルは腕を強く掴む弟の手首にそっと手を置き言った。
「ディートハルト達が着いたときには、既にお前が洞窟脇に血を流して倒れていて、洞窟内も悲惨だったと・・・。生きていたのはお前とロランのみ。ディートハルトは部下にお前達をすぐに城へと運ばせて、自らはアザエルの気配を追ったが、森を抜けてしばらくいったところで見失ったと報告を受けた」
ディートハルトとは、フェルデンの剣の師であり、フェルデンが尊敬する数少ない人物の一人であった。
二年前まで、騎士団の指揮官を務めていた屈強な戦士である彼は、すでに六十を迎えたというのに、未だ部下からの信頼も厚く、ヴィクトルのよき相談相手でもあった。
そんな彼が急に指揮官の地位をフェルデンに譲ることを宣告してから、時は既に二年経ち、それからはヴィクトルによって国内の治安維持を目的とする警備隊長官という任を与えられている。
「ディートハルトが・・・」
傷を負った自分を助けてくれたのが、嘗ての師である男だったことと、その男を的確な判断で送るヴィクトル王に、フェルデンはひ

どく感銘を受けた。
「そこでだ。わたしはすぐさまゴーディアに向けて書状を書いた。内容は、我国土内で起きた不祥事を会談でもって御伺いしたい、というようなものだ。その為にこちらから遣いの者を向わせるとも」
フェルデンは兄王の眼を見つめ、意図を読み解こうと努力した。
「まさか、その遣いというのは・・・」
ヴィクトルはこくりと大きく頷いた。
「そう、それをおまえに頼みたいのだ。おそらく、これだけの問題を起こしておきながら、それを拒否するなどゴーディアの元老院の年寄共もさすがにせぬであろう。危険な任だが、行ってくれるか？」
「・・・わかってはいると思うが、会談はただの名目であって、これが主ではない。お前のその目で、国王の生死、国の現状を探ってきて欲しいのだ・・・」
その後に続く言葉はなかったが、恐らく暗黙の了解で、そのときを狙ってアカネを奪還してくることを許す、ということであろう。
ほとほと、ヴィクトルの考えには驚かされ、国民に賢王と呼ばれるだけのことはある、とフェルデンは我兄ながら凄いと思った。
「はい、兄上。ぜひその役目、おれにやらせてください！」
フェルデンの目には確かに希望の火が灯った。
気落ちする弟を救い出すこと、それこそがヴィクトル王の一番の狙いだったのかもしれなかった。
重大な任務を背負ったフェルデンは、必ずアカネを取り戻す、という強い決心の名の下に、右手でつくった拳を左胸に引き付け誓いの形をとる。
「ああ。任せたぞ、フェル・・・！」

5話　覚醒

喉が焼けるように痛む。

「・・・う・・・」

身体中がとにかくなんでもいいから水分を、と欲している。

漏れた声はひどく掠れていた。堪らずに両の手で喉を引っ掻くように掴む。

しかしその手さえもまるで他人のものであるかのように、重く、気だるい。

とても奇妙な感覚だった。自分の身体なのに呼吸さえもうまくできず、自然と息が荒くなる。

ひどい疲労感と苦しみの中で、周囲がざわざわと騒ぎ始めるのがわかった。

「クロウ殿下がご復活なされた・・・！　儀式は成功した・・・！！」

「直ぐに医師を呼んでまいれ！」

盛大な歓声とともに、人々が慌しく周囲を歩き回る音、そしてこちらへ駆け寄る音。

朱音にはその全てがもうどうでもよく感じられた。ただ、今は喉が渇いた。

これまでの人生で　これ程までに渇きを覚えたことはない。強い渇きは、時として痛みにも変わる。

苦しみに悶えていると、ふと誰かが朱音の背を優しく腕にもたせ掛け、その力の入らない身体を起こすと、唇に何かをそっと流し込み始めた。こくりと一口飲み込むと、それが水であることに気付く。

「おかえりなさいませ」

そっと耳の傍で囁く声が聞こえたような気がした。

入りきらなかった水はタラリと唇の端から零れ落ち、ポタポタと

その雫が滴り落ちていく。朱音は欲するがままに、その水をこくこくと咽返りながらも飲み干していった。

「・・・もう・・・いい・・・」

なんとかそう言い終えると、朱音はぐったりした身体でうっすらと目を開けた。まるで初めて目を開けた赤ん坊のように、視界がぼやけて見えにくかったが、じっと目を薄めてしばらく見つめていると、少しずつ視野がはっきりと見え始めた。

目の前に見えてきた顔は、あの碧髪、碧眼の男、美しくも冷たい男のそれだった。しかし、その目はいつも朱音が目にしていたものとは違い、俄かに優しい光を放っているようにも見えた。この男が、渇きに苦しむ朱音を一番に察し、水を口に運んでくれたのは明らかだった。

でも、朱音はこの男が嫌いで仕方が無い。本当なら、こうして触れられるのさえも許せないというのに、今は何しろ身体が自由に動かせない。

（儀式はどうなったの？　もしかして失敗した・・・？）

自由の利かない身体をふわと抱き上げられて、朱音はあの晩の記憶をふと

思い出した。月夜の晩、アザエルに同じ格好で抱き抱えられたまま、ここレ

イシアに連れ去られた日のことを。

そして、今も同じ男にこうして抱き抱えられている。本当に皮肉なものだ。

美麗な碧い眼の男は、そっと巨大な天蓋つきのベッドに黒髪の主（あるじ）を横たえると、乱れた髪を、手櫛で整えてやった。

長い髪は黒く艶やかで、ベッドの上に扇のように見事に広がっている。少年の額には玉のような汗がいくつも浮かび上がっていた。長き眠りからの覚醒と、魂を入れ替えるという異例な儀式は、相当主の身体に負担を強いたようだ。

苦しそうに肩で荒く呼吸を繰り返す少年のその頬は、棺に納まっていた頃に比べるとほんのりと赤みが差し、待ち望んだ主が今まさに自分の手元に戻ってきたと、アザエルに強く実感させた。

儀式用に一枚布で誂えられた黒く軽い被服は、ひどく安っぽい物のように思え、アザエルは少しばかり嫌悪感を抱いた。

ノックの音で、数人の医師が入室してくる。

彼らは、ベッドに横たわる黒髪の主を目にすると、震える手で少年の身体の各部位を弄し始めた。医師陣の手からは紫色の淡い光がゆっくりと放たれる。

彼らは魔王ルシファー選りすぐりの医療魔術精鋭部隊であった。

しばらくは苦しそうに呼吸を繰り返していた主だったが、しばらくすると、少しずつ落ち着きを取り戻し、穏やかな表情ですっと眠りに落ちていった。

そんな様子を見て傍を離れても大丈夫と判断したアザエルは、主を残したままそっと部屋を後にしたのだった。

“アカネ・・・”

どこかでフェルデンにそう呼ばれた気がして、朱音は目を開けた。

あのひどい喉の痛みや気だるさよりも遥かに楽になった身体は、それでもまだ全てを拭いきれていないようだった。

「んん、だるい・・・」

のっそりと起き上がると、まだはっきりしない頭でぼうっと部屋を見渡す。

見覚えのある天蓋つきのベッド。

この部屋は朱音が儀式の前に過ごしていた部屋だった。

（いつの間にこの部屋に戻されたんだろう・・・）

朱音は、儀式の恐ろしい記憶を蘇らせた。

そうだ、確かにあの時、ハデスの短剣が朱音の胸を貫いた瞬間に走った凄まじい痛みは、今思い出しただけでも身震いする。できる

ことならもう二度と経験したくない痛みである。
慌てて朱音は自分の胸に手を当ててハデスの剣の存在やそれが残した傷跡を確かめようとした。
（！！）
見慣れぬ黒く薄い被服の下は、普段触れなれている筈の朱音の身体とは明らかに違っていた。
驚きのあまり息をするのも忘れて、朱音は今度はまじまじと両の腕や手の甲、平を見る。生粋の日本人の筈の朱音の手は、本来ならば黄みがかった色をしているはずなのだが、妙に白く、染み一つ見当たらない。
だるい身体を勢いよく起こし、朱音は慌ててベッドから飛び降りると、何か姿を映せるものはないかと探し回った。その間も、足首まで伸びた真っ黒な黒髪は、ひどく頭を重く感じさせ、そして歩くのを邪魔する。
（どうしよう・・・、なにか、なにか映るものを・・・）
銀のトレーに載せられた水の入ったグラスと布に気が付き、慌ててトレーごと引っ掴むと、グラスが音を立てて割れて飛び散ることも構わずに、自らの顔をそのトレーに映し見た。
鏡と違い、少し曲がって映った自らの顔は、見慣れている朱音のものではなかった。
真っ黒な長い黒髪、朱音は、これ程までに真っ黒な瞳を見たことは嘗てない。黒曜石の瞳の少年は、朱音が儀式の際にちらと盗み見た棺の中の少年に間違いなかった。
ぽろりと手から離れたトレーが、銀特有の大きな音を立て床に転がる。
勢いよく部屋の扉が開き、紺の制服に身を包んだ近衛兵の若い男が飛び込んでくる。はたと数秒間の沈黙の後、男はしまった、とばかりにたじろぎ、
「で、殿下・・・！　失礼致しました！　わたしは、アザエル閣下から部屋の警護を任されておりますトマ・クストーです。大きな物

音がしたもので、つい・・・」
　肩膝をつき、頭を下げて礼の形をとった男の腰に、剣が帯びられていることに気付いた朱音は、引き付けられるように駆け寄って、その剣を引き抜いた。
　はっとした近衛兵の若い男は、
「殿下！　危険です！　おやめください！」
と声を張り上げたのも束の間、朱音はその剣を掴んで、自らの長い髪を乱暴にたくし上げると、ザクリとそのほとんどを切り落としてしまった。
「な、なんということを・・・」
　男は呆然としながらあわあわとうろたえた。
「一体何事だ」
　背後からの突然の声にびくりと反応し、近衛兵の男は、冷たく碧い上官に向き直った。
「アザエル閣下・・・！　殿下が・・・突然髪を・・・！」
　短く不揃いになった黒髪の少年は、右の手に近衛兵の剣を持ち、その白い裸足の足元には黒く艶やかな長い髪がばさりと散らばっている。その少し後ろには、水を入れてあったグラスの残骸と水で滴った布、銀のトレーが乱雑に散りばめられていた。
　その様子を見たアザエルは、静かに少年の元へと歩み寄ると、刺激しないようにそっと右手からその剣を抜き取った。
「クロウ殿下、なぜ髪を切ってしまわれたのです？」
「・・・邪魔だったから・・・」
　まだ変声期を終えていない少年の声は、朱音の声よりも少し低く、別の人が話しているような気持ちの悪い感覚に陥らせる。
　無表情のアザエルには珍しく、ふうと息を一つ吐くと、アザエルは受け取った剣を近衛兵に返し、下がるように命令した。どうやら、それは彼の溜め息のようだった。
「この不揃いなままにはしておけません。後で美容師を寄越しましょう」

朱音はふいっとアザエルから背を向けた。
「そんなこと、別にどうだっていいよ。わたしはクロウなんかじゃない、新崎朱音。あんたが無理矢理ここに連れてくるまでは、普通の中学生で受験生だった」
朱音はぐっと拳を握り締め、震える声でそう言った。
「裕福じゃなかったけど、友達もそれなりにいて、あったかい家族に恵まれて、わたしは幸せだった・・・。それを・・・それを、あんたは全て奪った」
突然全てを奪い去ってしまったこの魔王の右腕である男を、朱音は許すことができなかった。
もうこの世界にやってきてどの位日が経ったろうか。元の世界を、元の家族や友達を想わなかった日など一日とてない。
「まだ記憶がお戻りではないようですね」
アザエルは事も無げに感情の篭らない声でそう言った。
この男に、自分の悲しみや怒りをぶつけたところで、無駄なことは朱音自身よくわかっていた。けれども、この溢れ出した思いを最早止めることはできなかった。
朱音はくるりとアザエルに向き直ると、たたと走り、その胸を拳で何度も強く殴った。まだ完全に体力を取り戻していないことと、怒りと悲しみで実際はほとんど力は入っていなかったのだが、朱音は泣きじゃくりながら繰り返し繰り返し殴りつけた。
「あんたさえ、あんたさえ来なかったら、わたしはこんなことにならなかったのに・・・！　あんたなんかいなければよかったのに！　あんたなんか大嫌い・・・！」
何度も殴りつけられている筈のアザエルだが、表情一つ変えずにじっとその場に立って、朱音のしたいようにただ殴られてやっていた。
泣き疲れた美しい少年は、癇癪を起こして部屋を荒らすだけ荒らした後、今はアザエルが水に混ぜた睡眠剤の効果でベッドで静かに

横たわっている。その頬はまだ微かに濡れている。
儀式による疲労は少しばかりの睡眠ではとても回復できるようなものではなく、相当身体の方は辛い筈だった。そんな中、この身体の主を突き動かしているのが自分に対する憎しみだと思うと、アザエルは情けなさになぜか笑えてしまった。先程自分に向けられていた黒曜石のような真っ黒な瞳は、アザエルに対する嫌悪感に染まっていた。
「ふ・・・無様だな。あなたと同じ顔にこうも嫌われると、いくら私でもこたえる。これをわかっていてあなたは私にこの役目を命じたのか・・・。惨い方だ」
アザエルはいつの間にか解けてしまった長く美しい碧髪を掻き揚げると、ベッドに眠る少年を見つめながら言った。しかし、その声は少年には届いておらず、向けられた言葉はその少年に向けて発せられたものではなかった。

「お呼びでしょうか」
ノックの音とともに入ってきた少年に冷たい目を向けると、アザエルは静かに口を開いた。
「来たか、ルイ。ここでお眠りになっておられる方は、ルシファー陛下のお子、クロウ殿下だ。殿下は長き眠りから覚醒されたばかりでしばらくは自由に動けまい。お前を世話役に命じる」
ルイは驚いた顔でベッドに駆け寄った。
「まさか、僕が・・・？」
ベッドに横たわる黒髪の少年を見るなり、顔を紅潮させて、ルイはキラキラと輝く灰色の目でアザエルを見返した。
「僕などがクロウ殿下のお傍にお仕えしてよろしいのですか？」
霞みがかった灰の瞳は喜びで震えていた。二百年の間行方不明となっていたルシファー王の一人息子が、先日の復活の儀式によって突如としてこの国に降臨したという話は、城で働く者達の噂で既に耳にしていたルイだったが、まさかその方の世話係に任じられるな

どと思いもしていなかったのだ。
それに、儀式に立ち会った者達は皆口々に、クロウ殿下は天から授かった世にも珍しい美貌を兼ね備えた王、ルシファーの姿を生き写したかのようだと感嘆を洩らしていた。ルイ自身、この黒髪の少年王子の姿を前にして、自分がどうやら過呼吸気味だということに気付いた。
だが、美しさの中に奇妙な違和感も感じる。確かにこの方はクロウ殿下だというのに、この黒髪の少年王子の身体からは、一切の禍々しさや溢れんばかりの強大な魔力を感じられない。そのことに気付き、ルイは首を傾げながら眠り続ける王子の顔をじっと見つめた。
「何か言いたそうだな」
アザエルはそんなルイの小さな仕草さえも見逃さなかった。
「いえ、ただ・・・」
口を開きかけてそのまま言葉を飲み込んだルイにアザエルは、
「なんだ」
と、問い詰めるような声で問い質した。
「ただ、クロウ殿下の魔力が感じられないと思いまして・・・」
そう言い終った瞬間、ルイは部屋の空気が一気に凍りついたのを感じ、しまったと思って自らの口を塞いだ。
アザエルの冷たく凍りつくような視線。数秒間の沈黙は数時間にも及ぶ長い時間のように思われた。
「このことはまだ内密にしておけ」
その目は、もし誰かに話してでもみろ、命はないと思え、と言われているような気にもなる脅迫の色を持った目であった。控えめな少年は、思わずゴクリと喉を鳴らして唾を飲み込んだ。
「クロウ殿下の魔力と記憶は、二百年前に行なわれたアースへの転生の儀式によって未だ眠りから覚めていない。おそらく、記憶が戻りさえすれば魔力も戻ってくるだろう。しかし、この事が他の者の耳に入ってでもみろ、内乱はおろか、ゴーディアは他国の一斉の攻撃の的と様変わりすることとなるだろう」

ルイの目が強く揺れた。
「黙っていろ。他の者には、クロウ殿下は今は力を秘めたまま温存しているのだと話しておけ」
アザエルは碧い髪をしゅるりとポケットに入っていた黒い紐で結うと、ルイの隣を銅像か何かの横を通り過ぎるような顔で通り過ぎた。
「何があってもクロウ殿下から目を離すな。いいな」
結われたさらさらとした碧い髪は優雅にルイの首元を掠めていった。
まるで、自分がこれからはこの黒髪の主についてやれないことを嘆いているかのように。

6話　始動

朱音は目が覚めてもこの暖かい温もりの残る毛布から出られないでいた。
夢の中で、フェルデンのあの大きな腕に優しく抱かれていた。その暖かさが幻だとしても、今はそれさえも名残惜しく、離しがたい。ぎゅっと毛布を抱き締めると、朱音はあのブラウンの瞳を思い、もう一度目を瞑った。
「クロウ殿下・・・？」
突然テーブルの辺りから懐かしい声が飛び込んできて朱音は驚いて飛び起きる。
テーブルの脇に立っていた少年は、サンタシで保護されていた朱音と友達だった、いや朱音が勝手に友だと思っていたあの毒舌な少年そのものだった。
しかし、霞みがかった灰の髪と瞳の色だけは違っていた。
「ロ・・・」
まだ身体がだるいことを忘れて、朱音は嘗ての知り合いの名を呼ぼうとした。
「クロウ殿下。僕はアザエル閣下の命（めい）により、今日よりあなたにお仕えすることになりました、ルイと申します。何なりとお申し付け下さい」
にっこりと可愛らしく微笑んで、朱音のベッド前で優雅に礼をとる少年は、姿形はよく似てはいるものの、持っている雰囲気はあのロランとは似ても似つかない。あの毒舌少年は、こんなに可愛く微笑んだりは決してしなかった。
いつだって最初に口から飛び出すのは憎まれ口で、朱音は少年の皮肉っぽい笑みしか目にしたことは無かった。
「ルイ・・・？」

ここにいる少年は、ロランではない。そう思った途端急にがっかりして、朱音は黒曜石の瞳を毛布へと戻した。

「クロウ殿下、どうかなさいましたか？」

声さえもこんなに似ているのに、ルイとロランは明らかに別の人物であった。これを知っていて傍に置いたアザエルはどこまでも朱音を苦しめるつもりらしい。目を細め、ここにはないあの美しい碧い男を憎らしげに思う。

「何でも無い。よく知っている友達によく似てたから・・・」

あの男が憎くても、この少年には何の罪もない。朱音は、見ればサンタシを思い出して辛くなる従者の少年の顔を、黒く美しい目を少し悲しい色に染めながら、じっと見返した。ルイは、困ったように微笑むと、この世のものとは思えない美貌の主にほんの少し頬を赤く染めた。

「そういえば、あいつは？」

朱音は急に不機嫌になった声でルイに尋ねた。

ルイは首は一瞬首を傾げるが、

「ああ、アザエル閣下ですね？　閣下は、本来の仕事である国政の任に戻られました。国王陛下不在の今、アザエル閣下がゴーディアの最高権力者です。今や閣下なしでは国は動きえません」

ルイは、まるで憧れる先輩について話す中学生のように、熱の篭った口調で朱音に言った。憎しみですっかり忘れていたけれど、アザエルはルシファーの右手と呼ばれる程の存在だった。ゴーディアで“閣下”と呼ばれる地位にいたところで、何ら不思議はない。何にせよ、あの見ただけで吐き気を催す憎い顔を見ないで済むことは、朱音にとっては唯一の救いであった。

「そう」

ほっとして思わず顔が綻ぶ主の顔を、ルイは不思議そうに見つめた。

「そうだ。クロウ殿下、髪を整えるようにとアザエル閣下から申し付けられています。午後から美容師を招いておりますので、そのつ

もりでいらっしゃってくださいね」
　にこりと微笑むルイは、朱音の髪をちらりと見やった。思い出したように、朱音は黒く艶やかな髪を摘んでみた。昨日のことを思い出してはっとする。
癇癪を起こして警護にあたっていた兵士の剣を奪って、強引に切ったクロウの長い髪は、すっかり不揃いですっかり短くなってしまっていた。クロウの身体だというのに、自分勝手なことをしてしまったと少しばかり反省はしてみるが、やっぱり軽くなった髪の方が朱音にとっては心地良かった。

「フェルデン殿下、無理をさなっているんじゃ・・・」
　小柄な騎士、ユリウスが心配そうに小声で見上げてくる。
「心配するな。なんともない」
　フェルデンの肩の傷はまだ完全には塞がってはいなかった。そして、微熱が尚も続いていることを、ユリウスは知っていた。
　騎士には珍しい小柄なこの青年は、十七歳という若さでサンタシ国の騎士団の指揮官という任につき、その二年間で数々の功績を残してきたことに尊敬の眼差しを向ける者の中の一人であった。
　思い返してみても、この旅は過酷なもののなにものでもなかった。傷の塞がりきらないフェルデンに、ゴーディアへの遣いを命じるヴィクトル王の考えに、ユリウス自身納得できないでいた。
　しかし、国王の命令に背くことは誰であろうとできない。そのせいで、こうして高貴な地位のフェルデンが地味な旅装束を身に纏い、大切な愛馬も白亜城に置いて極秘任務にあたっているのだ。

王都の西にある貿易の盛んな町ディアーゼの港まで来ると、サンタシの商船に見せかけて改装した戦闘用の船に乗り込み、二人は密やかにゴーディアの地へとやって来ていた。

「フェルデン様、どうかご無事で・・・！」
商船の船長を演じる太った中年の男は、甲板の上から声を掛けた。
この男、戦闘船リーベル号の船長アルノは今回のフェルデンの極秘任務を知らされている数少ない人物である。
「ああ、世話になったな」
フェルデンはアルノを見上げて右手をあげて合図した。
「いいですか、我々の船はしばらくは“商売の為に”この港に停泊します”」
アルノは語尾を強調してそう言うと、忙しそうに甲板の奥へと姿を消していった。
ここからはまた馬を使って旅を続けなければならない。ゴーディアの王都、マルサスは四方を山脈に囲まれた地にあり、山を越える必要がある。
ここの地形に詳しくはないフェルデンとユリウスが無事に王都に辿り着く為には、人々が馬車や徒歩で行き来してできた山道をひたすら突き進むしかない。山の中を突き進むには、二人には土地勘が無さすぎた。
ユリウスは、ふと以前のことを回想していた。

「どうやら整理ができたようですな」
低いしわがれた声で、額から下唇に渡って、深く古い剣傷を残し目を細めて眺めた。
「ディートハルト、ヴィクトル陛下から話は伺った。またもや命を救って貰ったと・・・」
フェルデンはかつての師の目を落ち着いた面持ちで見つめた。
「貴方を鏡の洞窟の前で見つけたときにはこうも思いましたぞ。なんというザマだ！　図体ばかり大きくなって、中身はてんで生っ白い！　まだ騎士団の指令官の任を譲るには早すぎたか！　と」
手を腰にやり、大声で笑い出したディートハルトは、長身である

フェルデンに並んでもまだ高く、警備隊の長の制服とマントに隠されてはいても、年を重ねた筈の身体に屈強な筋肉は健在だった。
照れくさそうに苦笑するフェルデンの目には、今や迷いの色は見えなかった。
「おれの弱さは今に始まったことじゃないと気付いたんだ。ならばこれからもっと強くなればいい、と。失ったものは奪い返せばいい、と」
フェルデンの強い言葉に、ディートハルトはふっと口を綻ばせ、嘗ての弟子の肩にぽんと大きな手を置いた。
「まだ傷は癒えていないようだが、行くのですかな？」
フェルデンはこくりと頷いた。
「これ以上は引き延ばすことはできない。今直ぐにでも発たなければ」
連れ去られた朱音の行く先は贄という悲惨なものだった。これ以上の長居は朱音の命をも脅かす。
「敵地に赴くということは、火の中に飛び込むということ。必ず生きて帰られよ」
ディートハルトは、フェルデンに大きく頷き返した。
「わかっている。おれが留守にするしばらくの間、騎士団を頼めるだろうか？」
ぶっと噴出すと、顔面に刻まれた古い傷跡のケロイド部分がぴんと突っ張り、男の顔の皮が不自然に引き攣る。これがフェルデンが子どもの頃から何度も見ていた、師の懐かしい笑い顔だった。
「本当に図々しいお方ですな。少しはわたしの年を労わったらどうです。その図々しさときたら、子どもの頃と少しも変わっておらん」
白髪の混じった顎鬚を左手で一撫ですると、唇の端を少し上げて言った。
「仕方ない。貴方を助けたときに既に乗り掛かった船だ、もう一つや二つ助けたとてそうは変わりますまい」
フェルデンはぐっと師の片手を掴むと、強く両手で握り締め、信

頼のおける屈強なその男に、笑みを含んだ強い眼差しを向けた。
「ディートハルト、貴方ならそう言ってくれるとわかっていた。ありがとう」
ごほんと罰が悪そうに咳払いをすると、ディートハルトは但し条件がある、と一言言った。
フェルデンはまさか嘗ての師に騎士団の指揮官の代理を頼むのに条件を出されるなど考えてもいなかったものだったから、はたと握り締めるその手を止めた。
「旅は道連れと言いますぞ。騎士団の中から、信頼のおける部下を一人、供として連れてお行きなされ」
ディートハルトの意図が何なのかはフェルデンには直ぐに理解できそうにはなかったが、この経験豊富な男のアドバイスで役に立たなかったことはない。
「ユリ、ついて来てくれるか？」
フェルデンはすぐ脇で草の葉についている虫を観察している小柄な青年騎士に訊ねた。
二つ年下のユリウスは、農民の出身で、騎士としては特殊だったが、ディートハルトの兄弟弟子として共に過ごしてきた友と呼べる特別な存在だった。
そして何より、小柄でありながらもその剣の腕は確かで、フェルデンは誰より彼を信頼していた。
「へ？」
きょとんとモスグリーンの瞳を長身の二人の男達に向けると、葉についていた虫がパタパタと羽を鳴らしながら飛び立っていった。
「ユリウスよ、幼き頃から共にあるお前なら、フェルデン殿下の最高の部下として、友として、きっとよ良き手助けができるだろう」
小柄なユリウスはゆっくりと立ち上がると、白い歯を出してにっかりと笑った。
「あったり前じゃないですか！　おれ以外の誰にフェルデン殿下の相棒が務まるというんです。大船に乗ったつもりでいてください」

胸を張って言い切ったユリウスに、師であるディートハルトは、
「このお調子者めが！」
と頭を小突いた。
「って！」

自分を供として選んだフェルデンは、極秘である今回の遣いとしての任の重要性を丁寧にユリウスに話して聞かせ、そして、あのディートハルトでさえ知りえない裏の事実も明かしてくれた。
異世界から鏡の洞窟を通じて、魔王ルシファーが呼び寄せた人間の少女アカネのこと。そしてそのアカネを愛してしまったこと。さらに、今回の任は“会談”という名目の元、敵国の情勢を見定めるという裏の任が含まれていると同時に、ルシファーの手に奪われた少女を奪い返す唯一のチャンスであるということ。
ユリウス自身まだ信じられない思いでいっぱいだった。あの晩あの森で保護した黒髪の少女は、魔王ルシファーの右腕、アザエルによって儀式の為に連れ去られたサンタシ国の少女だとばかり思い込んでいたのだ。それが、まさか異世界からやって来た少女だったとは。そして、このフェルデンが一人の少女を愛する日が来るなど想像すらつかなかった。ユリウスにはない長身と、男らしく甘い顔立ちは無意識に通りすがる女達を虜にしていたにも関わらず、本人は色恋には全く興味を示さないで、剣ばかりに熱心に入れ込んでいたというのに。
ヴィクトル王お抱えの術師、ロランが鏡の森で重傷を負ったという噂は聞いていた。しかしまさか、ここにいるフェルデンさえも同じとき同じ場所で瀕死の重傷を負っていたという事実は本人の口から聞くまでは知り得なかったことである。おそらく、ヴェクトル王とディートハルトの計らいで、入念に隠蔽されたのだろう。

山道を二頭の馬が駆ける抜ける。

フェルデンは痛む肩にほんの少し顔を顰めた。馬が山道を駆ける度にその振動が治り切らない傷の存在を知らしめた。

しかしそれでも、ここで止まる訳にはいかなかった。今こうしている間にも、アカネはひどい扱いを受けているかもしれない。恐ろしい儀式に立ち合わされているかもしれない、そう思うと、痛みで立ち止まっていることなどできなかったのだ。

すぐ後ろを駆けるユリウスは、そんなフェルデンの心中を察していた。旅の途中、何度もフェルデンの傷の包帯を巻き直す手伝いをしたが、傷口は未だ赤黒く腫れ上がり、ひどく熱を持っているようであった。

そんな状態でもこの過酷な旅を続けられるフェルデンの心の支えは、今や愛する少女の可憐で無垢な笑顔を守りたいという強い思いが大部分を占めていた。

「殿下、殿下ったら！」

ユリウスは先程から二人が向かう先と反対の方向へと歩む馬車や荷台を引く人々と頻繁に擦れ違うことに気付いていた。勿論そのことにフェルデン自身も気付いていない訳ではなかった。

「殿下！　なんだか様子がおかしくないですか？」

フェルデンは毛頭馬の足を止める気もないようで、前方から目を離さないまま言った。

「何が！」

苛立ちを隠せないその言葉は、半ば怒鳴っていた。

「だって、こんな山道だっていうのに、やけに王都からの人通りが多いし、さっきの家族見ました？　頭に祭りの飾りをつけていましたよ！」

怒って余計にスピードを上げるフェルデンに向けて、ユリウスはわざと大声を出した。

「それが！」

ますます不機嫌な声のフェルデンは、またもや怒鳴り声を上げた。

「それがって、つまりですね、王都マルサスで何か祝い事があった

ってことです！」
堪らずにユリウスは手綱を引き寄せて、その場で馬の足を止めた。
「そんなこと、お前に言われなくてもわかっている！」
数メートル走ったところで、ユリウスがついて来ないと気付いたフェルデンが、仕方なく馬を止めると、忌諱（きい）に触れた顔でじっとフードの下からブラウンの瞳を光らせた。
「ユリ！」
ユリウスはぱっと馬から軽やかに飛び降りると、馬の手綱を引いたままゆっくりと馬上のフェルデンに近付いて行った。
「殿下が苛立つ気持ちもわかります。でも、貴方の部下として友として、おれにも冷静に物事を見定める義務がある。それは、誰でもない貴方を助ける為です」
いつもは朗らかな雰囲気を身に纏っている小柄な青年は、平素と違って高姿勢な態度だった。
「では、一体どうするんだ？」
フェルデンがフードを外してもう一度ユリウスの目を見た。青年は道の先を指差して言った。
「あの者に訊ねてみます」
道の先からやってくるのは、荷台を引いた壮年の男。荷台には砂埃よけの大きな茶味がかった布が被されている。
「失礼！　おれたち、王都へ向かっているんだけど、最近王都で何かあったんですか？」
ユリウスがいつもの朗らかな笑みを浮かべて男に歩み寄っていくと、壮年の男も気の良さそうな顔で、おう、と短く返事をした。
「ああ、あんたら、他国の人かい？　昨日、復活祭があったんだよ」
馬に跨ったまま、フェルデンの眉がぴくりと反応した。
「復活祭？」
ユリウスは聞き慣れない言葉を反復した。
「なんだ、復活祭を知らないのかい？　復活祭は、このゴーディアの国王陛下、ルシファー魔王陛下が、天上よりこの地へ舞い降りら

れた有り難い日のことだよ」
　フェルデンは当然のことながら、ゴーディアの復活祭のことは聞いたことがあったし、この国では、神に変わって強大な魔力を持つ魔王ルシファーを信仰する慣わしがあることも知っていた。
「おじさんは魔王陛下を見てきたんですか？」
　世間知らずな青年を装って、ユリウスは男に詰め寄った。
「あはは、ほんとにお前さん何も知らないんだなあ。魔王様は国民に姿をお見せにはならいよ。わたしも魔王様のお姿は偶像でしか拝見したことはないよ」
　荷台から手を離し、男はぽんぽんと小柄なユリウスの肩を叩いた。
「あんたら、魔王様のお姿を一目見ようとわざわざ他国からここまでやって来たんだろう？　伝説によると、魔王様は絶世の美貌をお持ちだということだし、あんたらみたいにこうしてやって遠くから来る者も少なくないそうだ」
　残念だったな、と男は馬上のフェルデンにも哀れみの表情を向けた。
　ユリウスが何か言いたげにモスグリーンの目をフェルデンへやった。
「ま、そういうことだ。だからこうしてわたしも祭りで売れ残った品物を故郷の街へ持って帰るところなのさ。せっかくだし、王都を満喫して帰るといい」
　男は、降ろした荷台の取っ手をよっこらせ、と持ち上げると、愛想のいい笑顔を作ってまた山道を歩み始めた。
「ああ、おじさん、ありがとう！」
　ユリウスは荷台を引く男の背に向って手を振ると、馬の背に乗ろうと手をかけた。
「あ！　そうそう。あんたら、ラッキーだよ。今年の復活祭は特別だから！」
　荷台を引きながら、男は付け加えた。
「二百年前に行方知れずになっていた魔王様の子息が、再びこの地

に降臨されたそうだ。王都はそのこともあって、いつもよりも相当盛り上がってるぞ！」

男の言葉を聞いた途端、フェルデンの顔が一瞬にして蒼白になったのがユリウスにはわかった。

まだ悪い知らせと決まった訳ではない、と言おうとしたのも暫時、フェルデンは硬い表情をしたまま全速力で馬を駆け出した。

（まさか・・・！　アカネ・・・！）

肩の痛みも忘れ、フェルデンは無我夢中で馬を疾走させていた。

「殿下！　お待ちください！　フェルデン殿下・・・！」

懸命に背後から叫ぶユリウスの声も耳に入らない程、フェルデンの嫌な予感が心の中で膨らみ続けていく。

ユリウスは、我を忘れる程フェルデンの心を掻き乱すアカネという少女に深く興味を抱いた。

「さあて、クロウ殿下、仕上がりましたよ。鏡をご覧下さい」

差し出された手鏡をのぞくと、美しく整えられた真っ黒黒髪の少年がじっと鏡の中から朱音を全てを見透かしそうな目で見つめていた。その麗しい少年はまるで、

『お前は誰だ。それはお前じゃない。クロウだ』

と、言っているかのように。

朱音は鏡から苦い顔で目を逸らすと、鏡を裏返しにしてごとりとテーブルの上に置いた。

「クロウ殿下、お気に召しませんでしたか？」

美容師の男は細身の身体に身に着けている赤色に染めた皮のチョッキの内側にハサミを丁寧にしまった。ちらと見えた服の内側は、たくさん道具がしまえるポケットや穴がいっぱいあって、ハサミや櫛も六～七本は収まっていそうだ。

「いえ、クリストフさんの仕事は最高です」

朱音は首から垂れ下がるポンチョを外そうと手を伸ばすと、骨ば

って細いクリストフの手がそれを手助けして、慣れた手つきでしゅるりとそれを解いていく。

「クロウ殿下にお褒めいただくとは、光栄でございます」

クリストフはグレーがかったシャツを腕のあたりまでたくし上げていて、そこからのぞく手は長くてふわふわした体毛が覆っていた。揉み上げも長くて濃く、朱音にかの有名なアニメのルパン三世を思い起こさせた。

「ただ、鏡を見ると辛いんです」

クリストフは、取り外したポンチョを手際よく丁寧に折り畳んでいくと、

「どうしてです？」

と質問した。

「これは、わたしじゃないから」

クリストフはふっと微笑むと、畳んだポンチョを持ってきた道具箱の中にぎゅっと押し込んだ。

「それ、よくわかりますよ。わたしも、殿下と同じように思うことがときどきあります」

道具箱の蓋を閉め、クリストフはゆっくりと朱音に向き直った。

「自分がわからなくなったときは、広い世界を見るのが一番です」

彫りの深い目の奥には、クリストフという男の優しさが滲み出ていた。

朱音はなぜかこの細い男の雰囲気が好きだな、と感じ、信じられる人のように思えた。

「おや、クロウ殿下、こんなところに髪が・・・。失礼」

そう言いながらクリストフは服のゴミを取る素振りでさっと朱音の手に小さな紙切れを握らせた。そのことに気付いた朱音はじっとクリストフの顔を見た。

クリストフ自身は何もしていないような常の表情で、目も合わせないでクロウの服の髪をパタパタと白いハンカチで払い落としている。部屋の隅でじっと見張りをしているルイの目を誤魔化す為だと

分かり、朱音も握った紙切れをそっと服の袖口に押し込んだ。
「辛くなったときはいつでもそれで手紙を寄越して下さい。宛名と差出人は書かずに合言葉を忘れずにね。そうすれば、わたしが殿下をここから連れ出して差し上げますよ」
と、クリストフは囁くようにそう言ってウインクをした。
そして、最期の一払いを終えて、男はルイに目配せしてゴホンと一つわざとらしい咳払いをしてみせた。
「ああ、クリストフ、終わったんですね」
霞がかった灰の髪をふわりと揺らしながら、クリストフに歩み寄ると、懐から取り出した金貨を数枚美容師に手渡した。
「どうも」
それを受け取ると、細身の男はにっこりともう一度朱音を見て微笑んだ。
「いつもながら、あなたの腕は素晴らしい。髪を切らせてあなたの右に出る者はそうはいないでしょう」
可愛らしい少年は黒髪の主を夢見心地で見つめた。
じろじろと見られることに慣れていない朱音は、ルイの手の裾をくいと引っ張ると、
「ルイ、クリストフさんを見送ってあげて」
と言った。ルイははっと正気に戻って、慌ててクリストフを部屋の外へと連れ出して行く。
とは言っても、この少年、アザエルから一体何を言われたのか、片時も朱音の傍から離れようとはせず、美容師を見送る時でさえきっと部屋の外からは他の召使いにでも代わりを任せるつもりだろう。
ほんの僅かな従者の少年の不在を狙って、朱音はさっき袖口に押し込んだ紙切れを慌てて引っ張り出して開いた。

『白い鳩』

紙の中身はたったそれだけだった。

朱音ははっとして窓の外を見た。窓の枠に一羽の真っ白な鳩が羽を休めてとまっている。この魔城には不似合いな程の真っ白な鳩。

朱音は胸が高鳴るのを覚えた。

（クリストフ、一体何者だろう・・・）

朱音の胸に一筋の希望の光が差した。

7話　サンタシの遣い

儀式の後、癇癪を起こして眠ったあの日から、冷たい氷のような男、アザエルとは一度も顔を合わせていなかった。

魔王ルシファーの死去は城内でも一部の者にしか知らされていない事実であり、国王が不在であるゴーディアを代わりに取り仕切っているのは実質上あのアザエルだというのだから、相当忙しい身に違いない。でも、そんな状況に朱音は喜び、隠れて何度も舌を出した。どうせなら、忙しすぎて過労死でもしてしまえばいいのに、なんてこともよく願ってしまう。

「ほんとにこの鳩、一体どこからやって来たのでしょうね。ゴーディアには珍しい品種ですよ。こっちの鳩は灰色が普通なんです。突然変異でしょうか？」

朱音はぎくりとしながらも、平静を装って、鳩に朝食時にとっておいたパンを千切って与えていた。

「さあ？　でもすごく可愛いよ？　クイックルって名前をつけたんだ」

真っ白の鳩を愛しげに見つめる黒髪の主は、ルイが知っている厳然とした重々しく怪しいオーラを身にまとった魔王ルシファーとはひどく懸け離れた可憐さを放ち、何度もその差異に戸惑うことが多かった。長き眠りから覚めた主は、確かにルシファー王の血を色濃く受け継いだ容貌をしてはいたが、その心は清く穢れを知らないままだったのだ。

「クイックルですか？　可愛らしい名前ですね」

ふふっとルイは笑みを零すと、そんな心美しき主に心から仕えたい、この主の役に立ちたい、と思えた。

儀式から三日経ち、クロウの身体は着実に回復へ向かっていた。まだときどき立ち上がった際にふらついたり、手足を扱いにくそう

にしていることはあるが、心理的には随分安定しているようにも思える。きっかけは、美容師のクリストフの来訪だった。

あれからというもの、クロウの表情が少し明るくなり、ルイともよく言葉を交わすようにもなった。話し上手なクリストフが閉ざされかけたクロウの心を溶かしてくれたようだ。

でも、二百年前のアースへの転生の儀式で眠らされたクロウの記憶は未だ戻らないようで、クロウはときどき妙なことを口走ることがあった。

“わたしは朱音という名前だ”とか“元の世界に帰りたい”だとか、“家族にもう一度会えるだろうか”ということである。

その度に、ルイは困った顔でこう言うのだった。

「いずれアカネという記憶は薄れ、思い出になる日がやって来ます。僕はその日まで、クロウ殿下のお傍にいますから」

黒髪の主は、まだ元いた朱音という少女の記憶を、幻から解き放たれずに苦しんでいるようだった。そんなクロウの姿を痛々しく思い、ルイはただただ傍に仕えることで慰めようとしていた。

「これはこれは、はるばるサンタシの地からようこそ」

アザエルは目深にフードを被った遣いの男と、その横に控える小柄な男に心にも無い労いの言葉を述べた。

遣いの男は、フードを外すと済んだブラウンの瞳で碧い男の目を射た。

「お久しぶりです、アザエル閣下。セレネの森以来でしょうか？」

張り詰めた空気に、ユリウスはフードの下から二人の様子を伺っていた。

なるほど、書類だらけのデスクの前に腰掛けているのは、透けるような碧い髪と碧い眼をしたどこか女性的な美しさを秘めた男、魔王ルシファーの側近アザエルであった。噂に違わず氷のように冷た

い表情。この男がフェルデンに瀕死の重傷を負わせた張本人だと思うと、よくもこんなに平然としていられるものだ、と卑しむ気持ちを抑えきれない。

「生きておられたようで安心した。わたしも、あの場で貴殿程の剣の腕を持つ者を失くすのは少々惜しかったのです」

冷ややかな微笑を浮かべると、アザエルは羽ペンを静かにデスク脇に横たえた。

「書状には目を通されましたか」

心中では腸が煮えくり返るような思いでいっぱいだろうに、流石に騎士団を率いるだけの器、フェルデンは落ち着いた口調で述べた。

「ええ。ですがまさか王家の血を引くフェルデン・フォン・ヴォルティーユ殿下が御自らおいでになるとは思いもしなかっものですから、少々驚いていますが」

ユリウスは、何を白々しい！　と心の中で吐き捨てると、いざという時にフェルデンの助太刀ができるよう、じっと隠し持っている剣に手を添えて静かに時を過ごした。

「ヴィクトル国王陛下も、今回の件では決して穏やかではありません。十年前にやっと成立した停戦条約を無碍にするようなゴーディアの行動の真意を直接ルシファー王に問い質したい」

アザエルはしばしの沈黙の後、突飛なことを淡々と口にし始めた。

「意外だな。サンタシの王ヴィクトルは賢王と聞いていたが、まさか本当に気付いていないとは」

フェルデンはアザエルの感情のない目をじっと見つめた。

「どういうことです？」

落ち着いたフェルデンの声は先程よりも少し熱が入り始めている。

「ルシファー国王陛下はお亡くなりになられた」

「なに！？」

「なんだって！？」

俯いていたユリウスでさえ、勢いよく顔を上げ、大声を張り上げていた。

「国王が不在の今、国内の混乱を避ける為、わたしと元老院者達が意図して公表をしなかったのです。貴殿も王族ならばお解かりになる筈」

兄ヴィクトルが言っていた推測は正しかった。

フェルデンは衝撃の事実に自失した。

「よって、今回の事情は全てわたし個人の起こしたこと。国家は何も関わってはいないということだ」

やられた、とフェルデンは氷のような男を臍を噛む想いで見つめた。

こちら側は、ゴーディアが起こした条約を蔑ろにするような行為を引き合いに出し、有利に会談を進める手筈だったというのに、この狡猾な男は国王が死去したという事実を提示し、自分一人が罪を背負うということで、ゴーディアの立場をサンタシと同等のものへと見事引き戻して見せたのである。

「そうですか。しかし、いくら国王の意思ではないとは言え、貴方はルシファー王の側近。国家間を揺るがすような不穏な行動を、見逃す訳にはいかない」

ユリウスは感情に任せて掴み掛からないで自らの任を果たそうとする賢明な上官の姿を、固唾を呑んで見守っていた。

「貴殿の言うことは正しい。わたしの身柄はサンタシに委ねましょう」

まるで他人事のような口振り。

憎い男の身柄を得ることができ、この男に勝利した筈なのに、なぜかまんまとしてやられたという敗北感がフェルデンの癪に障る。

最初から、アザエルの狙いはここにあったのかもしれない。ユリウスは漠然とそう思った。そして、ここにいる碧髪碧眼の男を、恐ろしいとも。

「しかしながら、今日は大切な日。わたしは逃げも隠れもしまい、あと少しの間待っては貰えないだろうか」

「大切な日？　復活祭は三日前に済んだ筈では？」

フェルデンが怪訝そうに眉を顰める。アザエルが言う祝いの日が復活祭であるならば、既に過ぎたと山道ですれ違った壮年の男に話は聞いていた。

「如何にも。年に一度の復活祭は大盛況をおさめました。貴殿がと数日早く城に到着していれば、復活の儀式にも立ち合っていただけたというのに。残念でしたね」

ユリウスは反射的にフェルデンの腕を引っ掴んでいた。

その行動は正しく、ユリウスがフェルデンの腕を掴むとほぼ同時に、アザエルの濃い藍の詰襟にフェルデンは掴みかかっていた。

「貴様！　アカネをどうした！！」

小柄なユリウスの力では、全身全霊の力を込めていなければ長身のフェルデンに振り落とされそうになる。

「フェルデン殿下！　落ち着いて下さい！」

「放せ、ユリ！」

すっかり我を忘れている上官に、ユリウスは懸命にしがみ付いた。今ここで力任せにアザエルを殴りつけてしまったとなると、一気にこちらの情勢が悪くなる。

そうなれば、アザエルの思う壺である。

「えらく興奮されているようだが、大丈夫か？」

わざとフェルデンを挑発するような冷淡な言葉は、アザエルの戦略の一つだとユリウスは悟った。

「もう貴殿の耳には入っていることと思うが、二百年前に行なわれた儀式によって長き眠りにつかれていたルシファー陛下のお子、クロウ殿下が、復活の儀式で覚醒されたのです。今日はそのクロウ殿下の即位式が執り行なわれる」

嫌な予感は的中した。既に儀式は済んでしまっていた。贄として攫われた朱音がどうなったかなど、想像もしたくない。

フェルデンのアザエルの詰襟を掴む手が緩んだ。

「フェルデン殿下、まだアカネ様が儀式の贄になったとは決まっていません。きっとまだこの城のどこかにいます」

ユリウスは、そっとフェルデンの耳元でそう囁いた。まだ、友にここで希望を失って欲しくはなかったのだ。

良くない考えは捨て切れなかったが、フェルデンは僅かな希望を胸に、自らのみ掻き乱れた心を落ち着かせるよう律して、大きく息を吐き出した。

「あなた方はゴーディアの大切な客人。ぜひ今夜の即位パーティーにご参加ください。そして叶うならば、新たな若い国王に祝辞を。きっとお喜びになるでしょう」

ユリウスは、小さく目でフェルデンに合図をすると、頷いた。これは城内を朱音を探して歩くには又とないチャンスかもしれない。

「・・・わかった。お受けしよう」

アザエルは冷笑を浮かべると、掴まれていた詰襟を何事も無かったかのように静かに整え言った。

「では、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ殿下。それに騎士殿。その姿ではパーティーに出席できまい。礼服を用意させましょう。夕刻までまだ時間があります。侍女に部屋を用意させていますので、暫しお寛ぎを」

「なんだか今日は騒がしいね。何かあるの？」

朱音は復活の儀式の日の慌しい城内の様子を思い出し、身震いする。

「ああ、殿下の即位式の準備ですよ」

霞がかった灰色の目をきらきらと輝かせながら、従者である少年がにっこりと可愛らしく微笑んだ。

「は！？」

がたりと音を立てて朱音は椅子から立ち上がり、がくがくとルイの肩を揺さぶる。

「何それ！？　そんなこと一言も聞いてないよ！？　どういうこと

！？」

激しく揺さぶられ、何度も舌を噛みそうになりながらも、ルイはなんとか言葉を紡いだ。

「何、と、申、され、まし、ても、殿、下、が、この、国、の、王、に、なる、ん、で、す、」

またしても、朱音の意思を完全に無視して、とんでもない方向へと話が進んで行ってしまってる。そのことに腹立たしさを抱き、朱音は掴んでいたルイの肩から手を離すと、バンと大きな音をたててテーブルを両手で叩き付けた。

大きな音にびくりと飛び上がったルイは、

「クロウ殿下・・・？」

と、恐るおそる顔色を伺っている。

「ルイ、もう我慢できない！　今直ぐアザエルをここに呼んで！」

灰色の少年は言い難そうに、小さく呟いた。

「あの、殿下？　今はサンタシから遣いの者が来ているとかで、アザエル閣下はこちらへは来られないかと・・・」

朱音は久しく聞くことの無かった“サンタシ”という言葉に、ドキリとした。

もしかして、フェルデンが自分を取り戻しに追いかけて来てくれたのでは、という期待に胸が高鳴った。

「サンタシから!?　どんな人だった？　背は高かった？　髪の色は？　瞳は？」

やけに食いついて来る朱音の迫力に圧され、ルイは数歩後退りしながら言った。

「さあ・・・、僕は直接見ていないので詳しいことはわかりませんが。見た者の話によると、使者は二人で、一人は長身、もう一人は小柄だったと。深くフードを被っていたせいで髪や眼の色までは確認できなかったようです」

二人と聞いて、朱音は少し首を捻るが、ひょっとすれば小柄はロランかもしれないと顔を綻ばせる。そうなると、やはり長身はフェ

ルデンとしか考えられない。
「殿下、どうしてそんなにサンタシの遣いが気になるんです？　もしかして、二百年前に失くされた記憶が戻ったのですか？」
　ルイは復活の儀式によって直接異世界アースからクロウの肉体が呼び戻されたと解釈していた。その為、アザエルの手によって鏡の洞窟を通って朱音が連れて来られた事実も、そして一月程の間サンタシの白亜城で保護されていたこと事実も知らなかった。
「・・・戻らないよ。戻る訳ないよ、わたしはクロウじゃなくて朱音なんだから」
　目の前の少年王子はまた奇妙なことを口にすると、それきり黙り込んでしまった。
　ルイは軽薄なことを口走ってしまったことを深く反省し、麗しい黒髪の主に償いの笑みを送った。
「殿下、そんなに気になるのなら、御自分の目で確認したらいいのですよ。今夜は殿下の即位パーティーです。各国の客人が殿下に会いにやって来ます。きっとその使者もそのパーティーに出席する筈です」
　朱音は思ってもいない機運に感謝した。
（フェルデンに、フェルデンに、また会えるかもしれない・・・！）

8話　再会

華美な装飾に、真っ黒に染め上げられた絹を存分に使用した煌びやかな衣は、引き摺る程に長い。
硬い王座にもう二刻以上も座ることを強要されているまだ少年の域を出ない年若い王は、まるで拷問を受けているかのように、お尻にかかる負荷にひたすら耐え続けていた。
「クロウ国王陛下、本日はご即位、おめでとうございます」
腹立たしいことだが、朱音が腰掛ける王座のすぐ隣には、無表情なアザエルが立ち、朱音がもぞもぞと腰を動かす度にじっとしていなさいとばかりに睨みをきかせていた。
元老院やゴーディア国のお偉い方達の祝辞が一通り済むと、やっとのこと、朱音は硬い王座から開放してもらった。
「ああ、疲れた・・・。喉カラカラだよ」
うんざりしたように言うと、ルイがグラスに水を注いで手渡してくれた。
式の行なわれていた部屋を退室した後、今はパーティー会場として使われている大広間へと向かっているところである。
朱音の手をとり、エスコートするように歩くアザエルの横顔をそっと盗み見る。思えば、今日はこの男と一度も言葉を交わしていない。しかし今の朱音にとっては、そんなことはどうでもいいことだった。サンタシからの使者、フェルデンに会えるかもしれない、その喜びで胸がいっぱいだった。
あの鍛えられたすらりとした身躯、そして短く美しい金の髪。少年っぽい色を残した、男らしく優しいブラウンの瞳。もう一度あの人に会えるかもしれないと思うだけで、無意識に足が震える。
（フェルデン・・・！）
従者の手で開けられた大広間の豪華な扉の隙間から、華やかな音

楽の音が響き、美しく着飾った女達や身分の高そうな男達が楽しそうに立食したり、会話をする様子が目に飛び込んできた。
扉が開ききった途端、大広間中の者達が歓声を上げて朱音の方に向き直った。
女達は頬を赤く染め、男達も感嘆の声を洩らした。そして、口々にこう口走った。
「なんとお美しい！」
「まるでルシファー国王陛下を生き写したかのようだ！」
と。
未だおおっぴらには、魔王ルシファーが死去した事実は公表されておらず、皆、ルシファー国王は健在だと信じて疑っていない。
しかし中には、覚醒したばかりの年若いクロウの突然の即位と、その息子の即位式にさえ姿を現さなかったルシファー国王のことを考え、ルシファー国王の身に何か起きたのではないか、と疑念を抱く者が出てきているのも現実だった。
朱音は自分が人々の視線の的となっていることに気付き、不快感で顔を歪めた。見世物にでもなったような嫌な気分を抱きながら、朱音はそれでもパーティー会場の人混みの中に長身の男の姿を探した。フェルデン・フォン・ヴォルティーユ、その人の姿を。

「しかし、まさか本当に魔王が死去していたとはな・・・」
フェルデンは旅装束から、賓客用に用意された美しい礼服に着替えていた。
白いシャツの襟を立てると、慣れた手つきで蝶えを結ぶ。艶やかな紫色の細いタイは、フェルデンを紳士へと仕立て上げてくれた。
「国王の側近、あいつ、やはりただ者ではありませんね。こうなることを予想して、まるでおれ達をわざとここへ招き、利用しているような口振り」
ユリウスはぶるりと身震いした。あの冷徹な顔を思い出しただけ

で寒気がする。
「あの男は、感情の無い蛇のような男だ。一瞬の気の緩みが命取りになる」
長身のフェルデンは、小柄な部下に向き直った。
ユリウスもかっちりとした礼服で身だしなみを整え、謹厳な面持ちで上官の目をじっと見つめた。
魔王ルシファーの息子が復活の儀式によって覚醒したこと、そしてその息子がゴーディアの国王として即位したこと。その全てがフェルデンやユリウスにとって衝撃的で、停戦中のサンタシ側からすれば、いつ停戦状態が解かれるかもわからない今、そのことはヴィクトル王に事細かに報告すべき重要事項ばかりである。
即位式は厳かに内輪の者だけで行われていた。まだ式は終わってはいなかったが、続々と魔城に到着する高貴な馬車や、そこから降りる着飾った男や女の姿を見るに、パーティーは既に開始されているらしい。
日は傾き、空にはうっすらと二つの月が浮かび上がっている。
「おれたちもそろそろ会場へ行きましょうか」
ユリウスがテーブル脇においてある水の入ったグラスをぐいと煽った。
「いいか、パーティーのときだけは城内がどうしても手薄になる。新国王に祝辞を述べた後、うまく会場を抜け出し、アカネを探すんだ」
「了解」
賑やかなパーティー会場、人ごみの中には朱音が夢に描いていた金の髪は見つけられないでいた。
いつもは従者服であるルイも、今日は礼服を身につけ、こんな時でさえぴたりと朱音の背後に張り付いていた。灰色の髪の従者は、黒髪の主がこの喧騒の中で一体何を探しているのかを知っていた。

「国王陛下、何かお探しでしょうか？」
アザエルが落ち着かない様子で、辺りを見回す朱音の様子に、感情のない声で言った。碧い眼が全てを見透かしているかのように、朱音を見つめる。
「べ、別に・・・！」
この冷たい眼に何度陥れられてきたことか。朱音は無意識にその眼から視線を逸らす。ふっと口元を歪めると、氷の男はそっと朱音の耳元で囁いた。
「今やあなたはこの国の最高権力者なのですよ。あなたがわたしに命令を下せば、チェスの駒を動かすようにいとも簡単にわたしは動くというのに」
喫驚し、黒髪の少年は耳の飾りを揺らしながら、国王の側近の手を掴んだ。
「サンタシから、フェルデンが来ているの！？」
突然壇上でアザエルの腕を掴んだ主の行動に灰の目を丸くし、ルイがあたふたと慌てた。
「へ、陛下・・・？　ここは壇上ですよ・・・！」
それでも掴んだ手を離そうとはしない黒髪の少年王に、アザエルは不敵な笑みを浮かべた。
「陛下がお望みならば、ここへお呼びしましょう」
アザエルが警備にあたっている兵に目配せすると、パーティーの人ごみが割れ、通り道ができた。その人の道の奥から少しずつ懐かしい色の金の髪が見え始め、ゆっくりと長身の男が姿を現した。
「・・・フェル・・・」
どんなに願っても二度と会うことは叶わないと思っていた愛しい青年が、人垣から一歩進み出た。その後ろには懐かしいロランの姿はなく、いつしかセレネの森で見た小柄な騎士の姿があった。凛とした男らしい顔で、フェルデンはじっと麗しい黒髪の新国王の顔をした主音を見据えた。
朱音が口を開きかけた途端、フェルデンが礼の形をとり、よく通

るあの心地よい声で言った。
「お初にお目に掛かります、新国王クロウ陛下。わたしはサンタシの国王ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユの実弟、サンタシの騎士団司令官フェルデン・フォン・ヴォルティーユと申します。この度のご即位を兄ヴィクトルともどもお喜び申し上げます。今後も両国にとって、よい関係が続きますよう」
流暢な言葉は、朱音の心をものの見事に打ち砕いた。
（そうだ・・・、わたしはもう朱音じゃないんだ・・・）
瞬きをするのも忘れて、朱音はへたと腰掛けていた椅子の背にもたれかかった。
大好きなフェルデンが、あんなにも会いたかった騎士が目の前にいるというのに、朱音として声を掛けることさえできない。
今ここで、大声で叫びだしたかった。
『わたしはクロウなんかじゃない、ここにいるのは新崎朱音なんだよ！』
と。
しかし、その目論見は木っ端微塵に吹き飛ばされる。
顔を上げたフェルデンの表情が、忌み嫌うようなものでも見るかのように、明らかに朱音から視線を逸らしたのだ。
ズキリと心臓が鷲掴みされたように痛んだ。
（フェルデンはクロウを嫌っている・・・、魔王ルシファーの血を引くこの身体を嫌っているんだ・・・）
朱音の頬を、つうと一筋の雫が伝った。
「へ、陛下？」
驚いたようにルイが駆け寄る。
朱音は堪らずに椅子から立ち上がり、気が付けば、艶やかな黒い衣を翻して逃げるように大広間を飛び出していた。
「なに、陛下は喜びの余り感極まって席を立たれただけのこと」
驚いて思わず立ち上がったサンタシの使者達に、碧髪の男はひどく落ち着いた口調で言った。こくりと頷くと、フェルデンとユリウ

スは一礼してその場を去った。
「フェルデン殿下、あの少年王、泣いてましたね・・・」
ユリウスがテーブルの上に美しく盛り付けたハムを一枚フォークで刺すと、ぱくりと口へ放り込んだ。
絶世の美貌とは聞いてはいたが、十年前に結ばれた停戦条約の際に一度だけ目にした魔王ルシファーの、人知を超えた美しさをそのまま生き移したかのような姿だった。恐らくは、幼ないながらも魔王ルシファー同様、強大な魔力を内側に秘めているのだろう。
しかし、その黒曜石の瞳から流れた一筋の涙は、フェルデンの心を揺さぶってならなかった。
（あれは憂いの涙では・・・）
だが、長き眠りから覚めた少年王がなぜにあんなにも悲しい目でフェルデンを見つめていたのか、考えも及ばない。
「さて、フェルデン殿下。我々はそろそろもう一つの任に取り掛かりましょうか」

9話　引き裂かれた心

魔城は日が落ちるとますます不気味に暗くなり、明かりをつけていても尚薄暗い。
白亜城とはまるで対極にあるような城だな、とユリウスは思った。
「しかし、兄上が放っている密偵とやらの情報で、おれ達は随分助けられているな」
フェルデンは魔城の内部を記してある手書きの地図を取り出すと、蝋燭の火で照らした。
「どうやって調べたのかはわからないけれど、大まかな部屋の場所はこれでなんとかわかりますよね」
ユリウスがにこりと白い歯を見せて笑った。
「フェルデン殿下がこうまでして取り戻したい程のお嬢さんだ、セレネの森では薄暗くてよく見えなかったけれど、きっと可愛い子なんでしょうね」
にやにやと肘でフェルデンは部下に脇腹をつつかれると、「ユリ！」と頭を軽く叩いた。
「って！　何焦ってるんですか？　大丈夫ですってば。おれの好みはボッキュッボンの大人の女なんですから」
ユリウスは悪戯っぽい目をフェルデンに向けると、また地図に視線を戻した。
「おれが思うにですね、アカネさんが囚われているとしたら・・・この地下牢か、こっちの離棟じゃないでしょうか」
フェルデンは、揺れる蝋燭の炎をゆっくりと地図から遠ざけた。
「同感だ。ほんとにお前とは昔っからそういうところは気が合うな」
城内を調べ歩くにはもう左程時間はない。地下牢と離棟の当てが外れたら、きっともう朱音を見つけ出すことは困難になるだろう。
「今は時間が惜しい。お前は離棟を、俺は地下牢を探すことにしよ

う。そして、無事にアカネを見つけたら、お前がアカネをサンタシまで連れて逃げてくれ」

小柄な部下は、こくりと頷いた。

フェルデンにはまだ、アザエルの身柄を預かり、サンタシへと連れ帰るという重要な任が残っていたのだ。

二人の計画は、パーティーから大勢の客人が出ていく瞬間を狙って、予め用意しておいた変装で人ごみに紛れて逃亡するというものだった。

しかしこれは一種の掛けでもあった。

朱音の消えたこの魔城にフェルデンが一人残るということは、ゴーディア側に誘拐の容疑を掛けられる可能性も大いに考えられる。

「じゃ、急ぎましょう。後程、礼の場所で落ち合いましょう！」

ユリウスは快活に闇の中へと消えていった。

フェルデンも持っていた蝋燭をふっと吹き消すと、見回りの兵がいないことを慎重に確認しながら、暗闇の中地下へと続く階段を降りていった。

「アカネ・・・？　ここにいるのか？」

じめじめした淀んだ空気に、湿気臭い匂い。時折鼠が暗闇の中を掻け回る音がする。

フェルデンの声が妙にわんわんと地下に響いた。

幸い、現在無人の地下牢に見張りの者はいない。皆、パーティー会場の警備に駆り出されているようだ。

こんな暗くて不潔な場所に、あの華奢な少女が閉じ込められていると思うと、フェルデンは居た堪れないない気持ちになり、暗闇の中をじっと目を凝らして少女の姿を探した。

しかし、人の気配は感じられず、反応は何も返ってこない。

「アカネ、おれだ・・・！　いたら返事をしてくれ・・・」

ぴちゃりぴちゃりというどこかで滴る水滴の音だけが暗闇の中で響いている。

地下牢にはアカネの姿はどこに見つけられなかった。あとは、ユリウスが行った離棟の方に望みをかけてみるしかない。

落胆する気持ちを抑えながら、フェルデンは胸の内側ポケットに折り畳んである魔城の地図を取り出す。蝋燭の火は邪魔になると思って消してしまっていたし、この暗い地下牢では、地図はよく見えない。

ふと顔をあげると、高い牢の天井近くの壁に、小さな鉄格子の窓が見えた。

そこから、僅かに月明かりが差し込んでいる。フェルデンは身を屈めると、空っぽの牢の中に潜り込み、その光の筋を頼りに地図を見つめた。

フェルデンがいる地下牢から、ユリウスが向かった離棟はかなり離れていて、今から行くには時間的に無理がありそうだ。

くしゃりと金の髪を掻き雀ると、フェルデンはちっと舌打ちした。この城のどこかに、あの無垢な少女が囚われているというのに、無情にも時間は刻々と時を刻んでゆく。

ふとフェルデンは地図のある箇所に目をとめた。

扉の描かれていない奇妙な空間。じっとそこを見つめ、指先でその場所をなぞる。扉は描かれてはいないけれど、確かにここには何かの部屋がありそうだった。というのも、フェルデンの住む白亜城にも同じような隠し部屋がいくつか存在したからだ。この奇妙な空間は、その隠し部屋の構造にとてもよく似通っていた。

（ここだ・・・！）

フェルデンはくしゃりと地図を握り締めると、勢いよく駆け出した。

地下牢から左程離れてはおらず、パーティーの終息まで余り時間が残されていない。

フェルデンは息を切らせながら湿った石造りの階段を駆け上がった。薄暗い廊下に取りつけてある蝋燭の火がゆらゆらと仄暗く、不気味に大きな人影を壁に映し出した。

「しっかし、クロウ陛下って言ったら、まだ子どもじゃないか？ルシファー陛下は一体何をお考えなのか」
「おい、お前、言葉には気をつけろ！　アザエル閣下のお耳に入ったら、命はねえぞ！」
二人組みの見回り兵が明かりを手に、階段に面した廊下を横切っていく。フェルデンは上がった息を抑えると、じっと死角となる階段の陰へと身を潜め、二人が通り過ぎるのを待った。
地図によると、隠し部屋らしき場所があるのは、この廊下を右に折れてその突き当たり。見回り兵が逆方向へと姿を消して行ったのを確認すると、フェルデンはふうと大きな深呼吸をして呼吸を整え、再び走り始めた。
魔城は白亜城よりもひどく冷える。周囲を山脈で囲まれている気候のせいか、ゴーディアの王都マルサスは、気温が低いようだった。
フェルデンは、突き当たりの石壁の前に立った。一見ただの石壁のようにも見える。コンコンと壁を拳で叩くと、中の空間に響くような音が返ってきた。
（間違いない、ここは確かに部屋だ！）
ぺたぺたと石壁のあちこちを手で触って、何か仕掛けが隠されていないかを調べるが、見当たらない。
（どこだ・・・！）
サンタシの白亜城の隠し部屋は、石壁の一つが奥へ沈み込むと、壁が開くという構造になっているから、同じようにこの城の隠し部屋もそんな造りになっていると予想していたにも関わらず、いくら石壁を押してみてもびくともしない。
「パーティー会場を抜け出し、こんな離れた薄暗い場所で、何かお探しかな？」
突如背後から声がし、フェルデンは慌てて飛び退いた。
薄暗闇の中、不気味に碧い目がぎらぎらと光る。長い碧髪は片方に寄せて紐で結わえられていた。
（全く気配を感じなかった・・・！）

フェルデンは氷のように冷ややかな男の笑みを恐ろしい思いで見据えた。
「フェルデン・フォン・ヴォルティーユ、気付かなかったのか？地下牢は湿気と水でそこらじゅう濡れていただろう？」
くすりとアザエルは口元を歪めた。
フェルデンもアザエルの能力についてはよく知っていた。水を魔術により自由に操り、場合によっては空気中の水分でさえ武器にも変えてしまうことができる悪魔の力。セレネの森でフェルデン自ら、そしてロランや兵士が襲われたあの不気味などす黒い武器は、今考えると死んだ兵の血液だったに違いない。
「そうか・・・、水で結界を・・・」
フェルデンはふっと苦い笑みを零した。どこまでも一枚上手な相手に、両手を挙げることしかできないことが惨めすぎて、本当なら大声で笑い出したい気分だった。
「裏切り者のの犬、ロラン程のものではないがな。地下牢は目が行き届きにくいのでな、人が入り込むとわかるようにしてある」
アザエルはフェルデンの正面に立つと、床面にある黒石の一つをこつんと踏みつけた。
途端、ギギギと音を立て、先程までいくら押しても引いても開かなかった石壁の扉がゆっくりと開き始めた。
「入らないのか？」
アザエルが先に部屋の中へと進み入ると、少し振り返って、空いた扉の前で棒立ちになっている若い青年騎士を招いた。
中は真っ暗で、明かりの一つも見当たらない。美しい魔王の側近は、無言のまま壁に設置されている蝋に火を灯した。
途端、ぼんやりと部屋は明るみになり、部屋の真ん中に二つの黒い棺が横たわっていた。碧髪の男は、静かに棺に近付いていくと、そっとその蓋に僅かに積もった埃を指で払った。
「あちらの棺は空けるな。ルシファー陛下のご遺体が入っている。棺の中は特殊な魔力によって腐敗から守られてるのだ。こちらの棺

も、面会が済んだら必ず蓋を閉じること。遺体を腐らせたくなければな」

そう言い終わると、アザエルはフェルデンをその部屋へ置き去りにし、自分はさっさと何事も無かったかのように出て行ってしまった。

残された金の髪の青年は、アザエルの触れた黒い棺の蓋に手を触れた。

どうしてあのアザエルが、城中をこそこそと嗅ぎ回っている自分を捕らえようとも咎めようともせず、こうして隠し部屋の中にまで招き入れたりしたのか、フェルデンには理解できなかった。

ただ、この棺の中は何があっても確認する必要があった。そう、どんなに見たくないと思っていても、そうせざるを得なかったのだ。

魔王ルシファーの棺の隣には、一体誰が眠っているのか。美しい彫刻は、対になっている。この棺自体が強力な魔力を持っていることは、触れただけでもよく分かった。

ここにユリウスがいたならば、できるなら彼に棺の蓋を開けさせただろう。

いや、彼がいなくて良かったのかもしれない。こんなに臆病な姿を有能な部下の前で晒す訳にはいかない。

フェルデンは、震える手で、棺の蓋をゆっくりと持ち上げた。

少し開いた隙間から、ふわりと甘い香りが漂った。懐かしいチチルの実の匂い。侍女エメがチチルの実を香油にして瓶詰めし、朱音の髪につけてやっていたのだ。

蓋を持つ手の震えが止まらない。

まさか、間違いであって欲しい、と願うのに、少しずつ露になる中身にちらりと黒い髪が見えた。

「う・・・嘘だ・・・」

フェルデンは蓋を無我夢中で取り払った。

棺の中で横たわるのは、夢の中で抱き締めた、華奢な少女その人

だった。

「アカネ・・・」

震える手で、フェルデンは少女の額にかかる髪にそっと触れた。

少女の胸に深ぶかと突き刺さった剣の柄。横たわる朱音の表情は眠っているかのように穏やかである。

「嘘だろ、目を開けてくれ、アカネ・・・！」

棺の魔力のせいか、朱音の頬はさっき息を引き取ったばかりのようにほんのりと赤みを残していた。その眠る頬に、ぽたりぽたりといくつもの雫が零れ落ち、それがまるで朱音自身の涙のように見えた。

「アカネ、お前を救ってやれずすまない・・・！　元の世界へ帰してやると約束したのに・・・！　おれがあの時、あの男からお前を取り返していたら・・・！」

眠ったまま動かない朱音の身体をそっと抱き寄せると、フェルデンは甘いチチルの実の香りを放つ髪に頬を寄せた。

「可哀想に・・・怖かっただろう・・・」

フェルデンは胸が張り裂けそうな思いでいっぱいだった。

出来ることならば、この棺ごとサンタシへ連れ帰り、もっとちゃんとした場所へ葬ってやりたい、そう思った。

アースに帰ることは叶わなかったが、淋しがり屋の朱音が淋しくないように、せめてサンタシの白亜城の中に墓を建て、いつでも皆の傍にいられるように、と。

「アカネ、愛している。一緒に帰ろう・・・」

フェルデンは掠れた声でそう囁くと、そっと朱音の唇に口付けた。

無垢で可憐な少女は、フェルデンがもっとも恐れていた形で手の中に戻ってきてしまった。

年若い騎士の青年は、生まれて初めて号哭（ごうこく）した。

１０話　傷だらけの想い

朱音は薄暗い城の廊下を滅茶苦茶に走った。
大広間を出てすぐに、片方の靴が脱げてしまい、もう片方も直ぐに邪魔に
って適当に脱ぎ捨ててやった。ペタリペタリと冷たい大理石の石床を歩くと、すっかり足の指の感覚がなくなっている。
控えていたルイも慌てて朱音の後を追ったのだが、朱音は思いの他足が速く、とっくにその姿を見失ってしまっていた。
城は広く、そして窓の外はいつの間にやらすっかり日は落ちてしまっていた。
（わたしはもう、朱音じゃない・・・）
朱音は、あれ程見たいと思っていたブラウンの瞳が、疎ましそうに自分を避けていた姿を思い出す度に、こんな身体なんて消えてしまえばいいのに、とわざと壁に身体をぶつけて歩いた。
痛みは感じるのに、胸の痛みにくらべたらちっとも痛くなかった。
寧ろ、今はそれさえも腹立たしくて仕方が無い。
（無くなっちゃえ、こんなわたしなんて、無くなっちゃえ・・・）
そんな少年王の姿をした朱音は、まるで、飛び立つ度に壁や木にぶつかる方向感覚を失った小鳥のようで、あまりに痛ましいものだった。
もう既に自分がどこを歩いているのか、どこに向かっているのかさえもわからない朱音は、寒さに震えながらも足を動かし続けた。
止まってしまうと、またフェルデンの目が脳裏に蘇ってきてしまう。
ふらふらと力なく歩いていると、さっきまで雲に隠されていた月が顔を出し、月明かりがぼんやりと美しい少年王の姿を神秘的に照らし出した。
広く長い廊下の先に、黒い影が浮かび上がった。

数メートル先に壁にもたれかかるようにして座り込んだ影は、じっと蹲って動かない。

朱音は、ぺたりぺたりとふら付きながらその影に歩み寄って行く。

徐々に月にかかる雲が全て取り払われた途端、美しい横顔が照らし出された。

見慣れた金の髪、高い鼻、きゅっと引き締まった薄い唇。そのシルエットは、全くこちらに気付いた様子もなく、俯いたままじっと動かない。長い足は片方は乱雑に伸ばされ、折り曲げて立てたもう一方の膝の上に右の肘を置き、その手に項垂れる頭をもたせ掛けていた。いつも礼儀をわきまえ、どんなときでもだらしの無い格好を人に見せたことのない騎士の青年は、そんなことさえも忘れてしまう程、酷く落胆し傷ついているように見えた。

「フェルデン・・・？」

朱音は驚きのあまり目を見張るが、気付いたときには俯く青年の前に裸足のまま突っ立っていた。

少年の白い足が視界に入り、フェルデンはゆっくりと顔を上げた。

その透けるようなブラウンの瞳は濡れ、頬から顎にかけて涙が幾筋もの跡を残していた。生気の抜けてしまったような目はぼんやりと見下ろす美しい黒髪の少年を見つめる。

朱音は音もなくそっと青年の前に屈み込んだ。

フェルデンがこんなにも悲しい顔をするのを見たことが無かった。

そして、そんな悲しい目をしたフェルデンを見てはいられなかった。

すっかり冷え切った手は悴(かじか)んでいる。こんな冷たい床に座り込んでいるフェルデンもきっと身体中冷え切っているに違いない。それでも、そんなことに気付きもしない程、青年の心は酷く苦しんでいるようであった。

朱音は無意識にフェルデンの頬に手を伸ばしていた。流れた涙の跡を、そっと白い手で拭うと、ぽたりと青年の服に雫が一滴染みをつくった。

「・・・おれはお前が憎い・・・」

フェルデンの低く呟く声。
「お前の覚醒ごときの為にアカネが犠牲になった。お前なんか戻るべきでなかったのに・・・」
憎しみに染まった力ない瞳は、朱音の心をズタズタに引き裂いていく。
「あ・・・」
フェルデンの服に染みをつくったのは、フェルデンの涙ではなく、朱音の頬を伝ったものだったのだ。
「なのに、どうしてお前が泣く、新国王」
今ここで弁解したかったのに、まるで金縛りにあったかのように、愛する青年の残酷な言葉が朱音の心を、身体を強張らせ、言葉を発することさえさせてくれなかった。
「ふ・・・、おれを嘲笑っているんだろ・・・？」
くくくっと喉を鳴らしてフェルデンは笑った。
「今ここでお前を殺してやりたい・・・」
若い騎士は両手を少年王の首に掛けた。
「・・・フェ・・・」
首を締め付ける手に、その冷え切った冷たい手に絶望しながらも、朱音はその大きく男らしい手に自らの白い手を重ねた。
（貴方に憎まれる位なら、このまま貴方の手で殺して・・・）
息苦しいさの中で、生理的な涙を浮かべながら、朱音は目を閉じた。

「殿下！　何してるんですか！？」
突然激しい怒号が響き、何者かの手で、朱音の首に掛けられたフェルデンの手が強制的に引き剥がされた。
「ごほっごほっ」
咳き込みながら床にくず折れると、ぼやける視界に小柄な青年の姿が入ってきた。心配そうに覗き込んでくるモスグリーンの瞳。
「ほんとに、一体どうゆうつもりです！？　こんなことして、ただ

で済むとお思いですか！？」

小柄な青年はいきり立ってフェルデンの胸倉を掴み、自らの拳をその頬に叩き付けた。鈍い音とともに、フェルデンはどさりと床に転げると、小さな呻き声を洩らしてゆっくりと身体を起こした。口腔内が少し切れたのか、薄い唇の端かからじわりと紅い血が滲む。

「クロウ陛下、大丈夫ですか？」

小柄なサンタシの騎士は、そんなフェルデンを放ったまま朱音の身体を起こす手伝いをする。

「申し訳ありません、どうかこの方のしたことをお許し下さい。我国サンタシは、ゴーディアとの戦を望んではいません。どうか・・・」

呆然としたまま、フェルデンは口元の血を手の甲で拭った。自分が今何をしようとしていたのかを悟り、ひどく動揺しているようだった。

「ごほっ、だ、だいじょ、ごほっ」

咳き込みながら、なんとか朱音は答えようとするが、うまく声が出ない。

ほっとしたように、小柄な騎士は朱音の背を支えるようにして起こすと、そっと近くの壁に持たせ掛けた。

「ユリ・・・、おれは・・・」

フェルデンは友の手によって正気を取り戻し、ぐしゃりと頭を両腕で抱え込んだ。

「一体どうしたというんです？　貴方がこんなにも正気を失うなんて・・・」

ユリウスは険しい表情を浮かべて、すっかり消沈してしまった長身の指揮官に投げかけた。

「隠し部屋で・・・黒い棺を開けて中を見たら・・・、アカネが・・・」

震える声でフェルデンは頭をぐしゃぐしゃと掻き毟った。

「ああ・・・まさか・・・。なんて事だ・・・」

ユリウスも愕然とした声で、フェルデンの乱れた姿を見つめた。
「アカネの胸には、深く剣が突き刺さっていた・・・。まだほんの少し暖かかった・・・」
「フェル、もういい！　それ以上話すな！」
ユリウスが堪らずにフェルデンの肩を揺さ振った。これ以上友の苦しむ姿を見ていられなかったのだ。
（ああ、そうか・・・。フェルデンはわたしの抜け殻を見たのか・・・）
壁にもたれ掛かったまま、朱音は悲しい笑みを零した。
朱音の命の引き換えとなったクロウを殺したいと憎む程、フェルデンが自分のことを想ってくれていたことに、胸が締め付けられる思いがした。
今ここでクロウが朱音だという事実を言ってしまったら、ここにいる優しい青年は、また苦しみに苛まれることになるだろう。大切に想う朱音を、自らの手で殺めてしまいそうになったことを知ったとしたら、彼はきっと自分自身を一生許せなくなってしまう。
朱音は心の中で、このことだけは何があっても絶対に隠し通さなければいけない、と強く決心した。
「殿下は先に部屋に戻っていてください。おれは、クロウ陛下をアザエルのところへお連れしますから」
ユリウスは、悲しい目でフェルデンを見ると、朱音の腕を自らの肩に回させ、立ち上がる手助けをした。
朱音は小柄な騎士に肩を貸して貰うと、もう一度フェルデンの姿を目に入れることをしなかった。もう、これ以上この人の傍に居ることは一時だって耐えられそうになかったからだ。
再び月が雲の中に隠れ、二人の影は薄暗闇の中を、ゆっくりとフェルデンに背を向けて歩んでいった。

11話　別れ

その昔、創造主は世界に天上界と地上界の二つの世界を創った。
地上には豊かな創造力を持つ人間を、天上には神に最も近い力を持つ天上人をを住まわせた。
非力な人間は、天上人を時として神と崇め、崇拝し、この世の災いや苦しみから逃れる為に神として彼らを讃えた。

あるとき、自由な天上人ルシフェルが退屈な毎日にうんざりし、悪戯心で人間に化け、地上へと降り立った。その際に美しい人間の娘と恋に落ち、天上界では禁忌とされていた肉欲、愛欲に溺れてしまう。
天上で最も創造主に愛されていたルシフェルは、禁忌を破ったことで創造主の怒りを買い、エルの称号を失って、永久に地上界へと追放されてしまったのである。
このとき、創造主はルシフェルの力を全て奪ってしまう筈だったのだが、既にルシフェルは神とさして相違ない程の圧倒的な力を持ってしまっており、反発するルシフェルを前に、創造主はそれを奪い去ることが出来なかった。皮肉なことに、創造主はルシフェルを愛するがあまり、強い力を与えすぎてしまっていたのだ。
天上界を追放されてしまったものの、力を失わずに済んだルシフェルは、魔王ルシファーとして地上界に君臨し、自らの魔力を特定の人間達に分け与え、その者達に子孫を残させることで、魔力を持つ者達を増大させていった。
それが魔族の起源である。
魔族達は、魔王ルシファーのもと、長い年月の間平和に暮らしていたが、欲深く非力な人間達は、生まれながらに不思議な魔力を持っている魔族を脅威と感じるようになった。いつか、魔族に人間が

滅ぼされるのではないかと恐怖し始めたのだ。
力を持たない人間達は、なんとか魔族の力に対抗しようと、さまざまな行動に出始めた。創造主に与えられた豊かな創造力を駆使し、さまざまな武器や兵器を開発し、魔族に攻撃を開始したのだ。
魔王ルシファーは、初めはそうした人間の攻撃をいとも容易く退けてきたのだが、あるとき人間が神をも冒涜するような恐ろしい武器を作り出したのだ。
“魔光石”である。
その人工的に作られた石は、魔族の人々を攫っては殺し、その血液を収集、凝縮し、結晶化した特殊な石である。
魔力を秘めたその石を身につけることで、人間であっても自由に魔力を操ることができるようになった。
しかし、魔光石一つ作るのに、数十人から数百人分もの魔族の血を必要とした。その為、多くの罪無き魔族の民が犠牲となり、人身売買や裏取引に利用されることも少なくなくなった。
魔王ルシファーは何としても魔族の民を守ろうと、自らの魔力を惜し気もなく使い続けていくことになったのである。

朱音はルイが少しでも気が紛れるようにと持ってきた歴史本をぱたりと閉じた。
昨晩のことが頭を過ぎり、ちっとも内容に集中できないでいた。
習いもしない文字が読めることや、いつの間にかアザエルの魔術なしでもレイシアの人びとと話を交わすことができるようになっていることに、朱音自身奇妙な感覚を持っていた。これはおそらく、クロウの身体が記憶しているもの。
しかし、今はそんなことを考える余裕など更々無い程に、朱音は苦しんでいた。未だフェルデンの手の冷たさと強い締め付けの感覚が残った首筋に、自らの指を這わせる。

「誰にやられたのです」
足元のおぼつかない朱音に肩を貸し、フェルデンの部下である小柄な青年が、アザエルの執務室に連れ帰ったとき、人の気配を察して部屋から出てきたアザエルとばったりと顔を合わしてしまったのだ。
碧い目が鋭く見つめていたのは、朱音の首にくっきり紅く浮かび上がった痣。朱音は今にも泣き出しそうな顔で、顔を逸らすと、唇をきつく結んだままじっと床を見つめた。
「クロウ陛下、首のそれは誰にやられたのですか」
アザエルの瞳が珍しくも怒りの色を帯び、朱音をサンタシの使者の腕から引き剥がすと、その痣を確かめた。
それでも何も言おうとしない少年王の様子に、ユリウスは戸惑いを隠せなかった。きっと、この少年王はこの男の前で包み隠さずに事の成り行きを話すだろうと思っていたからだ。
（どうして話さない・・・？　自分がサンタシのフェルデン・フォン・ヴォルティーユの手に掛かり、殺されかけたことを・・・！）
そんなことが発覚すれば、裏切りと見なされ、フェルデンも自分も良くても監禁、最悪は殺され兼ねない。
最悪の場合には、なんとか隙を見てフェルデンだけはうまく逃がさなければならない、とユリウスは逃亡計画まで立てていた。
しかしうまく逃げおおせても、ゴーディアとサンタシの戦争再開は免れないだろう。
「陛下が何も仰らないのなら、こやつに聞きましょう。サンタシの使者、クロウ陛下に何があった」
ユリウスは重苦しい空気の中、ゆっくりと口を開いた。
「貴方がお考えの通りです。クロウ陛下は・・・」
「首を絞められて殺されかけた」
ユリウスの話を遮るように、朱音ははっきりとした口調で言い切

った。
「だけど、誰にやられたのかはわからない。暗くて、よく顔が見えなかったから」
月明かりが差し込むあの廊下で、少年音が相手の顔を見ていない筈は無かった。それにユリウスは、駆けつけた際に確かにフェルデンに向けて「殿下」と呼んだことを覚えている。例え暗がりで顔が見えなかったにせよ、自分を殺そうとした相手がサンタシの王子であることは少年王でもすぐに分かることである。
「この人は、わたしが襲われているときに助けてくれただけだよ」
このまだ幼さの残る少年王が、フェルデンを庇っていることは明らかだった。
魔王の側近は目を細めると、じっと小柄な騎士を疑わしい目つきで見つめた。
勘の鋭いこの男は、既に誰が犯人なのかを心中で察しているようだった。
「ほう、我が国の王を救ってくださった恩人とはそれは失礼を。この国の祝い事に紛れて招かざる客が紛れ込んでいるようですね。直ぐに兵に命じて捜索させましょう」
気まずそうに下を向くと、朱音はちらりと小柄な騎士を盗み見た。モスグリーンの優しげな瞳は、戸惑ったように朱音の黒曜石の瞳を見返してきた。
「きっともうこの城にはいないと思う。この人が来てくれたとき、驚いて窓から逃げてったから・・・」
アザエルは全てを知っているかのようにふっと口元を緩めると、
「そうですか・・・」
と一言言うと、それきりそのことについて触れてくることはなかった。
「ねえ、クイックル」

窓の外からちょんと部屋の中へ入ってきた真っ白な鳩がきょとんとした目で首を傾げる。

「わたしは一体誰だと思う?」

砕いたクッキーを手の平に載せて差し出してやると、小さな白い友達は、嘴でそれを上手に啄ばみ始めた。

「あの人に殺したい程嫌われてしまって、わたしはどうして生きていったらいい? あの人に会えないのなら、もう生きている意味なんてないのに・・・」

朱音は気が緩めば滲む目尻の涙を、黒い服の袖でごしごしと擦った。

ルイが言うには、黒はこの国で最も高貴な色で、その色を身につけることが許されているのは国王とその親類だけだということだ。

考えて見れば、あの魔王ルシファーの側近であるアザエルでさえ、黒に限りなく近い藍の衣服を着ているところしか見たことがない。

コンコンというノックの音で、いつもの従者服に身を包んだルイが顔を覗かせた。

「クロウ陛下! 起きてらっしゃったんですね!」

ひどくほっとした顔で、ルイが朱音の元へと駆け寄ってきた。昨晩、大広間から突然抜け出して消えてしまった朱音を必死で追いかけ探したにも関わらず、結局ルイは見つけ出すことができなかった。

その上、アザエルによって部屋へと運ばれてきた朱音の首には、明らかに何者かによって締め付けられたような痣がくっきりと残っていたのだ。

「わたしは何があってもこの方から目を離すなと言っておいた筈だが」

冷ややかな氷のような目がルイを見据え、ルイは霞んだ灰の瞳を見開いた。

そのときに自らが仕える主に何が起こったのかを、そして自分が犯した失態を瞬時に悟ったのだ。

そんなことがあった為、ルイはひどく心配性になっていて、ほん

の少しの朱音の言動にも敏感だった。
「ルイ・・・。心配かけてごめんね。わたしが昨日勝手に飛び出してったせいで、きっとあいつに怒られたんでしょ？」
ルイは目を見張って扉を後ろ手に閉めた。
「いえ、違うんです・・・。全てはクロウ陛下から離れた僕の責任なんです」
すっかり意気消沈してしまっているルイに朱音は同情した。
見た目はクロウだか魔王の息子だか、何だか知らないが、中身は平凡な中学生“朱音”だというのに、そんな自分の為に尽くそうとするルイに申し訳ない思いを抱かずにはいられない。
「えっと、そんなことより、大変なんです！　元老院が、アザエル閣下の地位を剥奪し、サンタシにその身柄を引き渡すことを今朝決めたそうです！」
ルイはひどく興奮して、朱音に縋るような目を向けてきた。
「ふうん・・・、あいつ、何したの？」
朱音はさして興味も無さそうに、クイックルにクッキーをやる手を止めないまま言った。
「僕にも真偽がわからないんですが、アザエル閣下がこの城を留守にしていた間、閣下はサンタシの領土内に入って、地を荒らし兵を斬ったとか・・・」
朱音はぱらぱらと手の中のクッキーの粉を零すと、従者の少年に詰め寄った。
「それって、どうゆうこと！？」
急に服の袖口を掴まれて、まごついたルイは、美貌の主を見つめ返した。
「えっと、つまりは国の許可なしに勝手な行動をした謀反者だと元老院は話しているそうです」
アザエルがサンタシの領土内に入ったことや、兵を斬ったことは事実であった。
しかし、それは朱音をアースから鏡の洞窟の力を使ってこちら側

の世界レイシアに連れて来る為にしたことで、勝手な行動などではなく、列記とした国王ルシファーの命の元に動いた結果である。

「僕が思うに、アザエル閣下は賢いお方です。決して何もないのにそんな軽薄な行動はとられない筈・・・。きっと何か重要な理由があったに決まっています」

ぎゅっと握り締めた拳を震わせて、ルイは訴えかけるように朱音の目を見つめる。

一体過去に何があったのかは知らないが、この少年がアザエルに恩義があり、敬意を抱いていることは明らかだった。

でも、そんなルイには悪いと思いながらも、憎いあの男がそうなることを自業自得だと思い、ざまあみろと思う心を止められなかった。

「あいつなんか、どうとでもなればいいよ。こっちはいなくなって清々する」

ルイの悲しげな目が大きく揺れた。

朱音はルイのその目に罪悪感を抱き、白い鳩に再び視線を戻した。

「閣下はひどく陛下のことを気に掛けておられました。こんな弱輩者の僕を陛下のお傍に仕えさせる時点で、こうなることを予測していたのかもしれません」

灰色の髪はいつもよりひどく乱れている。身だしなみを整えるのを忘れる程、従者の少年はアザエルに下りた判定に取り乱したのだろう。

アザエルにそのような判定が下りたことから察するに、フェルデンが昨晩のことを咎められずに、そして誰にもその出来事を知られることなく朝を迎えたということも意味していた。

「サンタシの遣いは今日の午前中にアザエル閣下とともに魔城を発つそうです・・・」

朱音はフェルデンが無事に帰路に着くことができるとこにひどく安堵した。

ルイはもう一度朱音に助けを求めようとはしなかった。この主が

アザエルのことを酷く嫌い、その話題を出すことを嫌がっていることを知っていたのだ。そして昨晩の事件以来、開きかけていた主の心が再び固く閉ざされてしまったことに、ルイは気付いていた。

「陛下の嫌いな話をして申し訳ありませんでした」

ペコリと頭を下げると、ルイは下がろうとした。

「ねえルイ、アザエル達はいつ発つ？」

シンプルな黒の詰襟の服の主は、魔城の見晴らしのよい窓を開け放し、切なげにじっと入り口を見下ろしていた。

魔城から出てきた旅装束の三人の男。一人は長身、もう一人は小柄。そしてもう一人は、深く被ったフードから僅かに碧い髪が見える。

（昨日、あのまま死んでいればよかったのに・・・）

と、朱音は生き延びてしまった自分の運命を呪った。

もう、あの優しい笑顔を、優しいブラウンの瞳を見つめることも、大きく男らしい手で髪を撫でられることも二度と叶わないだろう。今朱音に向けられるのは冷たく恐ろしい程の憎悪のみ。彼に愛された朱音はもうどこにもいない。

城の中から従者達が箱のようなものを運び出し、それを荷馬車の荷台に括り付けている。ぼんやりとその光景を眺めていると、ふと見上げたアザエルの視線が朱音のものとかち合った。

「！！」

碧い瞳はじっと朱音を見つめている。なぜかその目に釘付けになり、朱音は目を逸らせずにいた。

（なに・・・？　王の次に偉い筈のあなたが、なんで素直について行くの？　もしかして、途中でフェルデンやユリウスさんを殺して逃げるつもりなんじゃ・・・）

突然冷やりとした感覚を覚え、朱音は駆け出した。

（あいつを、フェルデン達と一緒に行かせちゃ駄目・・・！！）

出発までもう時間がない。

朱音は縺れる足で何度も転びそうになりながら、城の入り口まで

こぎつけた。
箱を積んだ荷馬車が、今にも歩み出そうとしていた。
フェルデンが、息を切らして城から飛び出してきた美しい少年王に気がつき、目を丸くした。詰襟の下に隠されてはいるが、その隙間からは紅く変色した痣がちらりと見える。昨晩我を失ったフェルデンが犯した罪の跡は、はっきりと少年王の首に印を残していたのだ。
「陛下、罪人の見送りにでも来てくれたのですか？」
深く被ったフードの下から、アザエルが微笑を浮かべて言った。
「本当はあんたの顔なんて見たくもないよ。でも、あんた、今度は一体何を企んでるの？」
額に薄く汗を滲ませながら、朱音はつかつかと魔王の側近に近付いていった。
フェルデンとユリウスは不可解そうに二人の様子を見ている。
ユリウスは、少年王がここにいる魔王の側近を快く思っていないという事実に少々驚いていた。
「サンタシへ向かう途中二人を殺して逃げるつもり？　それとも、二人を人質にとってサンタシに先制攻撃でも始めるとか？」
大きく黒い瞳に怒りの色を見え隠れさせて、朱音はアザエルをきっと下から睨み上げた。
「ふ・・・、どこまでもわたしは信用されていないようですね」
アザエルはほとんど変わらない表情のまま、くすりと鼻で笑った。
「あんたが諸悪の根源だってことはわたしでもわかる！」
「陛下～！」
後ろから灰の髪を揺らしながら、従者の少年がぱたぱたと駆け寄ってくるのが見える。
「酷い言われようですね。でも、今回は本当に素直に身柄を引き渡されますよ。わたしとて、ルシファー陛下が御自分の命と引き換えに守ったゴーディアを、危険に陥れることなどしたくはありませんからね」

淡々と話すアザエルは、自分の手首に嵌められた枷を朱音に見せた。美しく彫刻された一見腕輪のようにも見える金の枷は、女性のように美しいアザエルの手首にしっかりと嵌っている。

「それにこれがある限り、わたしは魔術を使用できないですし」

アザエルの背後で、小柄の騎士ユリウスが口を開いた。

「その手枷は、魔力を無効化する特殊なものです。魔族の罪人を護送する際に使います」

朱音は不意打ちを食らったような顔をして、その金の手枷に触れる。得意の魔術を封じられ、自分自らサンタシに行こうとするアザエルの真意が全く読めない。

朱音に追い付いたルイは、事の成り行きを解せず、息を切らせながら心配そうにその様子を見守っていた。

「さて、いよいよお別れでしょうか。ルシファー陛下のお望みを叶え、貴方をこの国へ連れ帰り、貴方のお姿を拝見できたこと、光栄でした」

柄にもなく、アザエルはもう二度とここへ戻ってくることがないような口振りで言った。

「クロウ陛下、貴方にまだ魔力が戻っていないことを、決してそこにいるルイ以外の者に洩らしてはなりませんよ。周りは全て敵だとお思い下さい・・・」

そっと朱音の耳元でそう囁くと、アザエルは二人のサンタシの使者に向き直った。

「アザエル閣下・・・！」

ルイが思わず声をあげた。

「わたしが留守の間、陛下を頼んだぞ」

振り向きもせず、アザエルは荷馬車に乗り込んだ。フェルデンがぴしりと馬に鞭打つと、ゆっくりと荷馬車は動き始めた。

結局最後まで金の髪の青年を直視できなかった。まだ見る度に痛む胸を押さえながら、もう二度とその腕の温もりを感じることはできないだろうと、朱音は遠ざかる馬車をいつまでもじっと見つめる。

そして、世界で一番憎い筈のあの碧髪碧眼の男が、少しずつ遠ざかっていくというのに、なぜかツキリと胸が痛んだ。

12話　不穏な画策

ヘロルドは嫌な男だった。

年齢不詳のこの男は、ひどく姿勢が悪くひょろひょろとした身体でいつも前屈みに歩いている。こけた頬骨に落ち窪んだ黒っぽいぎょろりとした目。魔女のように尖った鼻にやたらと大きい口が浮かべる下卑た笑みを見る度に朱音はぞっとした。

「クロウ陛下、お話が」

アザエルの後釜にこの男が収まったことに朱音は疑念を抱かずにはいられなかった。

「なに？」

朱音はヘロルドと極力目を合わせないようにしながら言った。

この男は、隙あらば自分が王と成代わろうとしている魂胆が見え見えだった。

魔王ルシファーの死去が公にされたのは、アザエルが発ったあの日のことである。恐らく、長年の間国王の座を狙っていたヘロルドだったが、入れ替わるようにしてこの地へ舞い戻ってきた王の息子にその座を掠め取られ、さぞ悔しがったに違いない。そんなヘロルドがこの美しい少年王を良く思っていないことはルイも勘付いていたし、彼にまだ魔力が戻っていないことを絶対に悟られる訳にはいかない。

「陛下、よくお聞き下さい。あまり大きな声では言えないのですが、元老院の年寄どもが、どうも裏で画策しているようです」

痩せた男は、黄色い歯をちらつかせながら、朱音の傍へ近付いた。

「あまり陛下に近寄らないでください。陛下は人に触れられるのが好きではないのです」

いつもはおっとりとしたルイが珍しく強い口調で釘を刺した。

「ああ、これは失礼を・・・。しかし、これは本当なのです。偶然

にも、わたしは父マルティンの話を聞いてしまったのです」
朱音は、なぜこのような男がアザエルの後釜におさまったのか、不思議でならなかった。
ヘロルドの父マルティンは元老院の一人で、その息子だということから優遇されたのかもしれないし、何より、ヘロルドは風を操る魔術に長けているらしく、その点から抜擢されたのかもしれない。しかし、今やその権限はアザエルがいた頃よりも劣り、元老院の下に位置するものと化していた。無論、朱音の信頼を得ていない時点で、“新王陛下の側近”という立場は既に無いに等しい。
朱音はつまらなさそうに執務室のデスクに肘をつき、すっかり溜まってしまった書類にぼんやりと視線を落とした。
国王としてのデスクワークは以前、全てアザエルがこなしていた。それを、何もわからない朱音がルイに相談しながら進めるしかない今の状態に、朱音自身疲れ切っていた。
半端ない量の検討資料、政策。ただの受験生だった朱音にはどれも難しすぎるものばかりだ。
それでも、こうして仕事に費やしている時間だけは、サンタシの美しく優しい騎士のことを思い出さずに済み、いくらか朱音は救われていた。何もしないでじっとしていたら、朱音は今頃おかしくなっていたに違いない。それこそ、儀式の前のように窓から身を投げてしまっていたかもしれない。
「元老院の年寄りどもは、陛下に黙って罪人アザエルを暗殺する為に幾人かの腕利きの刺客を放ったようです」
朱音はぴくりと身体を反応させた。
ヘロルドは、その様子を目にし、しめたというような笑みを浮かべた。
「それは本当ですか・・・!?」
ルイは信じられない思いで、痩せた男のぎょろぎょろした目を見つめた。
「はい。魔王陛下の側近を務める男が敵国に渡ったとなれば、こち

らの不利な情報が漏れるかもしれません。元老院はそれを恐れたのでしょう」

朱音は急に早鐘のように高鳴り始めた心臓を左の手で押さえた。

アザエルの手首に嵌められた手枷が脳裏に蘇る。今や魔術を封じられたアザエルや、剣の腕の立つフェルデン、小柄な騎士ユリウスの三人が、ゴーディアの刺客に襲撃される様を想像しただけで、朱音はどうしようもない不安に苛まれた。

「しかし、国家の最高権力であるクロウ陛下に相談も無くそのような行動を起こすなんて、一体どういうおつもりでしょう?」

ルイは納得のいかない顔で腕組みをして言った。

「失礼ながら・・・、クロウ陛下がお目覚めになってからはまだ時間がそれほど経過していません。それに、まだ体調も万全ではないようですし、元老院もそれを念頭に置いたのではと・・・」

遠まわしな言い方ではあったが、ヘロルドが言っているのは少年王の魔力についてのことであった。少年王の身体から魔力が感じられないことに、城の中の者達も薄々勘付き始めていた。

「なんですって!? 陛下の魔力をお疑いですか!?」

ルイは憤慨した。

「そういう訳では・・・」

顔色を伺うかのように、姿勢をますます屈めて、痩せた男は数回瞬きした。

「では、どういう意味です?」

ルイの強い口調に、ヘロルドは再び下品な笑いを浮かべた。

「物分かりの悪い元老院の年寄りどもに、クロウ陛下の強大な魔力を見せ付けてやるというのはどうです? さすれば、怖れ慄き、陛下の偉大さを改めて認識するでしょう」

ヘロルドの狙いはまさにここであった。魔力の存在を感じられない少年王に、疑惑を感じ始めていたのだ。

「それはできません」

返答に困る朱音の横から、ルイがはっきりと言い放った。

「陛下は来たるべきときに備え、今は魔力を最小限に抑え、温存しておられるのです。それに、こんな内輪で揉めるなど、持っての他です！」

この従者の少年は、見た目は愛らしい少年のようだったが、アザエルが朱音の隣につけただけのことはある。なかなかの器であった。

「ほお・・・。ただの従者の割にえらく大きな口を叩くではないか！　しかし、少し位の魔力なら問題はないでしょう。ここでこの国の最高権力者が誰なのかをはっきりさせておかねば、苦しくなるのは陛下です」

よくもまあ思ってもいないことをこうも次々と詰まらずに言えたものだ、とルイは感心せざるを得なかった。

「あなたにそのようなことを言われる筋合いはありません。それに、アザエルがいない今、わたしの側近はこのルイです。いくらあなたであっても、わたしの側近にそんな口をきくなんてゆるさないから」

朱音は強い口調の嫌な男を睨んだ。

ヘロルドはプライドをいたく傷つけられ、尖った鼻に皺を寄せ、大きな口をへの字に曲げた。

「もう部屋を出ていってくれない？　見てわからないの？　わたし、忙しいんです」

朱音は痩せた男も見もしないで、書類の束に羽ペンを走らせ始めた。ヘロルドはきっと黒髪の主を鋭く睨みつけると、執務室から退室していった。

「ふう・・・」

男の出て行った部屋で、朱音は机に突っ伏した。強がっては見たものの、今の朱音には魔力の“ま”の字さえない。

「陛下、お見事でした」

ルイは柔らかな笑みを朱音に向けた。その笑みを浮かべた頬は、なぜかほんのりと赤い。

「僕なんかを側近と言ってくださるなんて、僕、もう死んでもいい

です」
霞がかった灰色の瞳はきらきらと潤んでいる。
「何言ってんの、そんなことで死なないで！　それに、わたしはルイを側近だなんて思ってないよ？」
朱音は呆れたように突っ伏したままルイを見上げた。
「え～～？」
ひどく残念そうに口を尖らせるルイに、朱音はぷっと吹き出した。
「だって、ルイはわたしの友達でしょ？　だから側近なんて思ってないよ」
ルイの顔が一瞬きょとんとしたかと思うと、耳まで真っ赤に染まった。
「そんなことより・・・、どうしよう、元老院の放った刺客っていうのは・・・」
朱音はぐしゃぐしゃと艶やかな黒い髪を掻き乱す。朱音が気が気でないのは、誰でもないフェルデンの安否だった。深く心に傷を負った優しいサンタシの騎士に、憎まれようとも嫌われようとも、彼にはこれ以上の苦しみを味合わせたくはないし、どんな形であれ、生き延びていて欲しかった。
そしてその彼と親しいようであったあの小柄の騎士、ユリウスにも無事にサンタシへと辿り着いて欲しいと心から思った。彼ならば、傷ついたフェルデンを支えてくれる、なぜかそんな気がしたからだ。
それなのに、なぜか憎くて大嫌いな氷の男、アザエルの姿が頭をちらついて仕方がない。あの男のことだ、簡単にはやられてくれまい。しかし、魔力を封じられた今、腕利きの刺客とやり合うとなれば、只では済むまい。
（あんなやつなんて、死んでしまったってどうってことないのに！）
「ねえ、ルイ。友達なら、わたしを信じてくれる？」
朱音は乱れてしまった頭を起こして、ぎゅっとルイの手を握った。
驚いた顔で従者の少年はこくりと頷いた。
「ぼくは一度だってクロウ陛下を疑ったことなんてありません。陛

下がおっしゃるなら、なんでも信じます」
朗らかな笑みに安心し、朱音は一つ息を吐き出すと静かに話し始めた。
「あのね、前にも少し話したことがあったけれど、わたしはクロウじゃなくて朱音という人間なの・・・」
ルイには話していなかった、自分がもともとはアースにいたただの人間の少女だったという事実。
ある日突然アザエルの手によって攫われ、鏡の洞窟の力を利用してできた時空の扉からレイシアに連れて来られたということ。連れ去られたその晩、セレネの森でサンタシの騎士団に保護され、一ヵ月程そこで匿われていたこと。一度は元の世界に戻ったにも関わらず、再びアザエルに引き戻されたこと。そして朱音とクロウの切り離せない魂の関係性。
何もかもを包み隠さずに話した。
ルイの表情は思いの他落ち着いていて、朱音は少年がどんな反応を返してくるのかを不安に思いながら、じっと可愛らしい灰の瞳を見つめた。
「大変な目に遭われたのですね・・・。僕はそうとも知らず、クロウ陛下の傍にお仕えすることができることに舞い上がっていて・・・。馬鹿な従者です」
しょんぼりと項垂れるルイの頭を、朱音はいつか白亜の城でフェルデンがしてくれたように優しく撫でた。
「でも、陛下の魂が誰であろうと、陛下は陛下です。僕はこの先もずっと陛下の傍にいます」
照れたように、ルイは恥ずかしそうに微笑んだ。
「ありがとう・・・」
朱音はこの愛らしい少年に全てを打ち明け、随分心が軽くなったような気がした。
「陛下がなぜアザエル閣下をああまで憎んでいるのかがやっとわかりました。でも・・・、閣下は本当はとてもいい方なんです。氷の

男だと呼ばれることもありますが、誰よりも亡き魔王ルシファー陛下に忠義を尽くし、ゴーディアの民を愛しておられます。きっと、ルシファー陛下の最期のお望みを叶える為、この国の安泰を維持し続ける為に躍起になっておられたのでしょう・・・」

お世辞にもあの男がいい人だとは思えそうにはないが、この国の危うい現状を知った今、アザエルが捨て身で起こした数々のことを理解できないこともなかった。

「だけど、やっぱりわたしはあの人を許せない。どんな理由があったにしても、わたしの全てを奪ってしまったあの人を・・・」

ルイは悲しそうな表情を落とした。

「だけど・・・、わたしはフェルデンやユリウスさんが心配だし、なんとかして二人を助けたい。ルイも協力してくれる？」

執務室を追い出されたヘロルドは、廊下に出て地団駄を踏んだ。

「くっそう、あの糞餓鬼どもめ・・・！　見た目こそルシファー陛下にそっくりだが、魔力など微塵も感じぬではないか！　今に見ていろ・・・！　おれを虚仮にしたこと、しかと後悔させてやる・・・！」

痩せた男は、不気味な笑みを浮かべ、不穏な計画を練り始めるのであった。

13話　双子の過去

朱音は唯一の理解者であるルイが見守る中、短い手紙を認めていた。

慣れない羽ペンで走らせた文字。最後に合言葉の『白い鳩』と記した。その紙を折り畳むと、窓の外でちょこんと日向ぼっこをするクイックルの足に結わえ付けた。

「クイックル、頼んだからね」

いつもは首を傾げてあまり窓枠から離れようとしない白鳩だったが、少年の声に返答したかのようにホロホロと喉を鳴らすと、パサリと羽を広い空へと舞い上がった。

（どうか、なるべく早く届きますように・・・）

一度だけしか顔を合わせたことのない謎多き美容師クリストフ。不思議なことに朱音はあの男に、今は小さな希望を託していた。そしてあの小さな友だちクイックルにも同じような想いを。

ルイはしつこく一体誰に手紙を書いたのかと訊ねてきたが、朱音はそのうち分かる、とだけ言って、詳しくは何も教えなかった。

その晩のこと、いつもならばルイはとっくにクロウの私室から退室している時間だというのに、朱音は下がろうとするルイをなんとか引き止めて残させていた。

「陛下、一体何をなさろうとしているのです？　それ位なら僕にも教えてくれたっていいんじゃないですか？」

呆れたように腕組みをするルイに、朱音はくすりと笑った。こうして見ると、やっぱりサンタシの少年術師に、瓜二つであった。これはもう赤の他人だなんて言い切るにはもう無理が生じていた。

「ねえ、ルイ。ロランとはどういう関係なの？」

ぶしつけな質問だとは分かっていたが、もうルイもロランも朱音

にとっては大切な友達で、そのことを見て見ぬ振りをするには限界が近づいていた。

「ロランを知っているんですか・・・！？」

顔色を一遍に変え、灰色の少年は黒髪の主をまじまじと見た。

この口振りからしても、二人が知り合いなのは確実である。

「うん。サンタシで匿われていたとき、ヴィクトル陛下がわたしの護衛としてつけてくれた術師。すっごい口が悪くて素直じゃないんだけど、ルイと本当によく似てた」

鏡の洞窟でロランを最後に見たときは、地面に蹲り、ローブから血を滲ませていた。あと少しのところでアザエルに命を絶たれるところだったのを、フェルデンが止めてくれたのだ。

あの後、ロランが無事に白亜城に戻ったのかは未だに分からない。

「ロランは、ぼくの双子の弟です・・・」

淋しそうなルイの顔からは、いつもの朗らかな笑みは消えていた。

ルイとロランの間に一体何が起こったのか、それは朱音が安易に踏み込んではいけない領域なのかもしれない。

けれど、朱音は敢えてその領域に踏み込んでいった。

「やっぱり・・・。あんまり似すぎてるから、初めはロラン本人かと思ったよ。だけど、ルイとロランは別人だった。どうして離ればなれになってしまったの？」

ルイは、悲しい出来事を思い出すかのように、そっと目を閉じて話し始めた。

「ぼくとロランは魔族の血を引く父と、人間の血を引く母の間に生まれました・・・」

朱音は静かに少年の話に耳を傾けていった。

二人の父はゴーディアの騎馬隊の小隊長を務める勇猛な魔族の騎士で、サンタシ国にあるミラクストーという街へ遠征に来ていた。

この頃、二百年前の魔城落城の窮地にまで追い込まれた事件、“

マルサスの危機”の時代で、サンタシ国王の玉座に着いていたセドリック・フォン・ヴォルティーユが百〇三歳で死去した後、孫のロベール・フォン・ヴォルティーユがその後を継ぎ、サンタシの実権を握っていた。

しかしロベールは、贅沢を好み財を自らの欲望のままに使い果たす愚王であった。そのせいで、サンタシの国の防衛力は見るからに低下し、セドリックの頃と比べると遥かに国力を落としていた。

それを機に、魔王ルシファーはここぞとばかりに各地に遠征軍を送り、サンタシの武器生産の主要な街を占領することで、国の内側から崩壊させる策に乗り出したのだ。

ここミラクストーの街もそうした中の一つで、砲弾生産工場の密集する地であった。

「リュック隊長、またあの娘が来てますよ」

街を見事制圧したゴーディアの騎士団は、五日程前から街の中心部を駐屯地として占拠していた。

そこへ、毎日のように現れるパン屋の娘。編み込んだ茶色い髪と、朗らかな微笑みは、魔族の騎士達を虜にしていた。

パン屋の娘は、マリーという名で、騎士団の中で一際男らしく、珍しい霞みがかった灰色の髪の騎士に恋をしていた。サンタシでは幼い頃から魔族は恐ろしい種族と教えられてきたが、その男がマリーに向ける眼差しはとてもそんな恐ろしいものには見えず、余ったパンを差し入れに持っていくと、いつも男は喜んでそれを受けとってくれた。

「リュック、わたし、あなたが好き」

ある日突然のマリーの突然の告白に、リュックはひどく喜んだ。

二人の間を邪魔するものは何も無く、人間の娘マリーと魔族の騎士リュックは愛し合うようになり、やがて結ばれた。

しかし、幸せはそうは長く続かなかった。

街を制圧したリュックは、半年の月日を過ごしたミラクストーを離れ、ゴーディアの地へ引き戻されることとなったのだ。

その大きな理由は、サンタシのロベール王が身動きのとれなくなってしまった自国の危機をなんとか乗り切ろうと、大陸の南に位置する、サンタシ、ゴーディアに告ぐ軍事国、カサバテッラを味方に引き込んだことにあった。

カサバテッラは小国ながら近年優れた軍事技術を持ち始め、急激に成長しつつある国であった。今まで大人しくしていたにも関わらず、サンタシの勢いが落ちてきた今、うまくそれを利用してサンタシに成り代わろうと画策し始めていたのだ。

こうして、カサバテッラは、遠征で兵の薄くなったゴーディアの横腹を攻め始め、遠征に向かっていた兵の多くが急を要して国内の防御へと回呼び戻されることとなった訳だ。

リュックが街を去ることを知り、マリーはひどく悲しんだ。

しかし、戦争は無常にも再び二人を引き裂いてしまった。

そのしばらく後、リュックの率いる騎馬隊は、ゴーディアの地でカサバテッラの集中攻撃を受け全滅し、二人が再び出会うことはもう二度となかった。

だが皮肉なことに、マリーはリュックの子を身篭っていたのだ。

マリーは、双子の男の子を出産し、それぞれにルイとロランと名付けた。

二人は母の愛の傘下で大切に育てられたが、二人を育て上げるには、ただの人間であるマリーの寿命はあまりに短かすぎた・・・。

魔族の血を引く者は、人間の約十倍もの時を生きるが、即ち成長も遅い。ルイとロランが人間でいう七歳程に成長する頃には、母マリーはこの世を去ってしまっていた。

残された二人の子どもは、長年の間聞かされてきた父リュックを探す旅に出る。魔族である父ならば、きっとまだ生きていると信じ

ていたのだ。
二人は苦労の末、ゴーディアの地へ渡り父リュックの消息を尋ねるが、父リュックは母と別れたすぐ後に戦死していたことを知る。

「そんな・・・、じゃあ二人は、どうなったの・・・？」
朱音は、過酷な双子の人生を思い鼻の奥がつんとするのを感じた。
「幸い、僕らは魔族の血を引いていましたし、僕らは結界術に長けていましたので、ゴーディアの軍から引き抜きを受けました」
引き抜かれた幼い双子は、ゴーディアの戦力になるよう教育、訓練を受けることになった。そのときに幼い双子の面倒を見てくれたのが軍事総司令官アザエルだったのだ。
「僕とロランはアザエル閣下に大きな恩義があるんです。閣下は僕たちの育ての親だとも言えます・・・」
ルイは突然言葉を詰まらせた。
「だけど、ロランはある日突然僕とアザエル閣下の前から姿を消しました・・・」
ルイの肩が小刻みに震えている。
「ルイ・・・」
朱音は震える少年の手をとり、優しく擦ってやった。
「ロランがどうして僕に何も言わずに消えてしまったのかはわかりません・・・。でも、風の噂でロランがサンタシの王に仕えていると聞いたときは、すごくショックでした」
朱音は、サンタシにいたもう一人の双子、ロランのことを思い出していた。
口は悪いが、人を簡単に裏切ったりするような少年ではない。そのことは鏡の洞窟で自分を元の世界へ返そうとしてくれたことから、朱音自身よく知っていた。
「辛い話をさせてごめんね、ルイ。でも、話してくれてありがとう」
ロランにもきっと何か事情があったに違いない。

そしてこうも思った、鏡の洞窟で、アザエルがロランの命を絶とうとしたことは、今は話さないでいよう、と。

「こんばんは」

突如窓から大人の男の声がして、ルイと朱音ははっと驚いて振り返った。

「クリストフさん！！」

美容師として訪れていたときと違い、全身闇夜に紛れる紺のタイトな上下に身を包み、懐かしい揉み上げのクリストフが窓の枠を飛び越えて部屋に入ってくるところだった。

「お邪魔だったかな？」

朱音はクロウの黒曜石の瞳を輝かせて、ふるふると首を横に振った。

「ううん！　あなたが来るのを待ってた！」

ルイは呆気にとられたように、朱音とクリストフのやり取りを見た。

「昼間、白鳩を使ってわたしに手紙を寄越したでしょう？　もっと早くに寄越してくれると思って、ずっと待っていたんですよ」

にこりと微笑むクリストフに、ごめんと朱音が照れながら謝ると、とんでもない！　ジョークですよ、とクリストフが笑顔で返した。

「クリストフ、貴方、一体何者ですか・・・！？」

ルイは疑いを込めた目でクリストフに詰め寄った。

「知っての通り、わたしは、しがない美容師ですよ」

ルイは窓の外を指差して囁き声で怒鳴った。

「そんな訳ないでしょう！　この城では兵が夜も交替で見張りをしているんですよ？　それにこの高さの窓からいとも容易く侵入してくるなんて・・・、ただの美容師な筈がないでしょう！？」

すごい剣幕のルイに、クリストフは苦笑を洩らした。

「まあ、ただの美容師ではないことは認めますよ。ですが、陛下や君の敵でないことは約束しておきます」

長くて質量のあるくるりとカールした睫を、美容師の男は片方だけ瞬かせた。
「そんなこと、信じられる訳ないでしょう!?　陛下、こんな不審な男を信じてはダメですよ!」
クリストフは肩を竦めて苦笑を洩らした。
「陛下、行くのなら早くしないと機を逃してしまいますよ」
「わかった、あなたの言う通りにする。で、どうすればいい?」
ルイは驚いて黒髪の主の顔を振り返った。
「陛下!　何をなさるおつもりですか!?」
しっと朱音は扉を気にして人差し指を立てた。
扉のすぐ外には近衛兵のトマ・クストーが見張りをしている。いつか朱音が癇癪を起こしたときのように、騒ぎを立てるといつ彼が部屋に飛び込んでくるかわからない。
「空を飛ぶのはお嫌いですか?」
クリストフは突拍子もないことを口にした。
「え?」
「は?」
朱音とルイは気の抜けた声を出す。
「申し訳ありませんが、手荷物は置いて行ってくださいね」
クリストフはぐいと朱音とルイの手を引いて窓際へと引き寄せた。
「一体何を・・・!」
ルイが口を開いたと同時に、朱音と従者の少年は謎の美容師に勢いよく窓の外へと放り投げられていた。

「!!!!!!!!」

瞬間、ゴオッと唸りを上げながら、突発的に旋風が巻き起こる。
あまりの強風に、後方で部屋の扉が開き、部屋中の物という物が宙に舞うのが視界の端に映った。
「お望み通り、広い世界へとお連れしましょう!」

驚くべきことに、朱音とルイはふわりと空を舞っていた。
というより、強い風に吹き飛ばされているといった方がぴんとくるかもしれない。
遠ざかる魔城、離れゆく国王の私室の窓から、小さな人影が窓から外に乗り出しているのが見える。トマ・クストーだ。
突如突風に攫われた少年王と従者の少年が夜空に消えていくのを、きっと口をあんぐりと開けて見ているに違いない。
ルイの顔は真っ青になって引き攣れている。
朱音は今までに感じたことのないスリルと、快感に包まれていた。
それに、トマ・クストーやルイの様子が可笑しくて可笑しくて堪らず、声を上げて笑った。クリストフも愉快そうに微笑んでいる。
「やっぱり、あなたを呼んでよかった！」

愛するフェルデンを守る為、朱音とその友ルイ、謎の美容師クリストフの奇妙な三人の旅はこうして始まったのである。

第3章　1話　追いつ追われっ

ゴーディアの夜風は冷たく、朱音とルイは唇を真っ青にしてがたがたと震えていた。
「やはり寒かったですか、どこかで暖をとらねばなりませんね」
クリストフはいつもと何ら変わらぬ様子で言った。
「クリストフさんは寒くないの？」
朱音とルイは痩せた美容師がさして暖かい格好をしているわけでもないこともあり、なぜこうも平然としていられるのか不思議でならなかった。ましてや、細身の彼は、体脂肪がある訳でもないというのに。
「わたしは風に乗ることには慣れっこなんですよ。少しくらいの寒さなら平気です。しかしそれよりも、人を乗せた風を操るというのはなかなか集中力が要るんですよ。安全に飛行する為には長距離の飛行は不向きでしょうね」
朱音はどうしてこんな山の中間部で舞い降りたのかとクリストフに訊ねようとしていたところだったが、それはやめておくことにした。
おそらくは、ここがきっとクリストフの飛行距離の限界点だったのだろう。
それに、これ以上冷たい風に晒されたとしたら、朱音とルイはきっと低体温症に陥ってしまっていたに違いない。
ここには明かりの代わりになるものは何も見当たらず、今晩は二つの月も雲に隠されていて、それさえも当てにはならない。
「寒い・・・」
朱音は凍えながら、がちがちになった身体を両の手で摩った。体の芯から冷え、なんでもいいから温かいものにありつきたい衝動に駆られた。

「こんな山中に舞い降りてしまい、申し訳ありません。しかし、万が一追っ手につけられてしまったときのことを考え、とりあえず王都からは脱出することが先決でしたので・・・」

魔城から王都マルサスの上空を飛び、三人は王都を囲むようにしてそびえ立つ、キケロ山脈の山中にいた。

山と言っても、朱音が見慣れている木々が生い茂るようなものではなく、ところどころ岩肌が露出した、短い草原の広がる山であった。山の頂上付近には雪が降り積もるような山並みである。山道は塗装などされている筈もなく、明かりもない今の状況で突き進むには無理があった。

それに、山頂まではまだ暫く距離があるように思われるし、そして何より夜があまりに更けすぎていたのである。

「仕方がありません、ここから少し外れた所に、人知れぬ小さな山村があります。そこにわたしの知り合いの家がありますので、今晩はそこで泊めてもらいましょう」

クリストフは落ち着いた口調のまま、短い草を掻き分け山道を外れていく。

朱音とルイは顔を見合わせ、慌ててその後を追った。

「大丈夫、あそこは村民以外の者には知られていません。さあ、こっちです。ついて来てください」

その頃、魔城では、アザエルの後任ヘロルドが地団太を踏んで悔しがっていた。

「くそう、あのくそ餓鬼どもめ、よくもわたしを出し抜いたな・・・！」

ヘロルドは昼間の件でひどく腹を立て、唯一の忠臣であるボリスにクロウの寝首を?くように命じていたのだ。

ボリスが深夜、新国王の私室に忍び込もうと部屋向かったところ、扉の前に控える近衛兵がいることに気付き、どう対処しようかと慮（おもんばか）

っていたちょうどその時、王の私室の扉が、勢いよく風とともに開け放たれたのである。

強風が新国王の部屋中に吹き込んでいた。物という物が吹き飛び、扉の前に控えていた近衛兵も一瞬にして廊下の向かいの壁に叩き付けられた。慌てたヘロルドの忠臣は、咄嗟に廊下の角へと身を潜め、しばらく様子を見守っていたのである。

ボリスは、吊り上った目を見開いて、トカゲそっくりな顔を興奮の色で上気させた。

「物凄い強風でしたよ、ヘロルド閣下！　その後、立ち上がった近衛兵が慌てて国王の私室に入っていきましたが、もう中は蛻(もぬけ)の殻でした」

ちっと舌打ちすると、ヘロルドは忠臣の腹に膝で一撃を入れた。

「この役立たずが！」

ボリスが冷たい床上で呻いて腹を抱えこんだ。驚いて主人を見上げている。

「わたしは何とお前に命令した？　クロウを殺せと言ったのだ！　それが見ろ、お前は殺すどころか近付くことすらできておらんではないか！　なぜすぐに後を追わなかった！」

ヘロルドは床で転がったままの忠臣の頭を固い靴底で踏みつけ始めた。

「うっ、も、申し訳ありませんでした、ヘロルド閣下・・・」

痩せ身のボリスは、頭を踏みつけるヘロルドの靴を退けようと、その足首に指を這わせた。

「いいか、無能なお前を拾ってやったのは一体誰だ？　このわたしではないか！　よいな、役立たず、今すぐ奴の後を追い、その命を必ず奪うのだ！」

ヘロルドの恐ろしい物言いに、ボリスは床の上でブルッと一つ震えた。

「で、でも・・・、ヘロルド閣下、新国王には魔力が無いとおっしゃっていましたが、あの風・・・、とてもそうは思えませんでした・

・・。わたしなどが王の命を奪うことなど・・・」
怯えたボリスが全てを言い終わらないうちに、ヘロルドはもう一撃を忠臣の腹に入れた。
「うぐっ！！」
「黙れ、この役立たず！　無能は無能らしく相手に見くびらせて隙をつくという姑息な手があるだろうが。この馬鹿めっ」
ボリスは歪んだ視界でもう一度頬骨の出た、痩せた主を見上げた。
「いいか、よく聞け。お前がもしその手でクロウを暗殺できたなら、わたしは晴れてこの国の国王だ。そうなれば、お前をわたしの側近にしてやらないでもない」
ヘロルドが大きな口元を気味悪く引き攣らせると、ボリスはその目を嬉しそうに見つめた。
「ヘロルド閣下！　今度は巧くやります・・・！」

クリストフは暖炉に火をくべ、温かくて甘いココアのような甘い飲み物を二人に手渡してやった。
「クリストフさん、この家、留守みたいですけど、こんな風に勝手に入っちゃって平気なんですか？」
朱音は、クリストフがどこからか調達してきた毛布にくるまりながら、湯気の立つカップに口をつけた。
「いいんですよ、彼とはとても親しいんです。こんなこと位で怒るような男じゃない」
クリストフは、長くカールした睫で一つウィンクし、再び暖炉に木をくべ始めた。
オレンジ色の炎がパチパチと音を立て、部屋の冷えた空気を少しずつ暖めていく。
山道を逸れた小さな村は、少し落ち窪んだ場所にひっそりと存在していた。

こじんまりとした木の家が四軒程建ち並び、三人が入った家はその中でも特に小さな山小屋であった。
小屋の中には小さな古いベッドが一つと、暖炉、そして丸い二人用のテーブルが一つ。部屋のあちこちにスケッチ用の道具が散在し、いくつか家主が描いただろう絵も壁に貼り付けられている。その多くは自然を描いたものばかりであった。
「この家の人、絵描きさんか何かかな？　ね、ルイ？」
ずずずっと飲み物をすすると、黒髪の少年が近くで同じように毛布に包まっている灰の髪の少年に振る。
「え、あ、そうですね・・・」
急に話を振られてあたふたとするルイを尻目に、クリストフが言葉を重ねた。
「そんなことより、そろそろ聞かせては貰えないですか？　クロウ陛下。貴方がなぜ白い鳩でわたしを呼んだのかを、そして、これからどうしたいのかを・・・」
朱音は静かに瞼を閉じた。毛布と暖炉の温かさが身体を包み込み、実のところ、まどろみそうになっていた。
「そうですよ、クロウ陛下。一国の王が城を空けて出てくるなんて、一体どういうおつもりです？」
ルイは羽織っていた毛布をがばりと外し、ずいと朱音に詰め寄った。
「そうだよね、二人には何も話さないで巻き込んでしまって、ほんとに悪いことしたよね、ごめん・・・。だけど、今のわたしではどうすることもできなくって、クリストフさんとルイの助けがどうしても必要で・・・」
ごとりとカップを木床に置くと、朱音はルイとクリストフの顔を交互に見た。
「クリストフさん、わたしはある人達が無事に故郷に辿り着くのを見守りたいんです。手伝っていただけますか？」
ルイは信じられないことを耳にしたという表情で、呆けたまま朱

音の顔を見つめている。
「その、ある人達、とは一体どなた達です？」
薪をくべる手を止めて、クリストフが真剣な眼差しで朱音の顔を覗きこんだ。
「・・・サンタシの遣いの者達です・・・」
クリストフは変わらぬ表情のまま言った。
「フェルデン・フォン・ヴォルティーユですか・・・」
ただの美容師であるこの男が、なぜサンタシの遣いの正体まで知っているのか、と朱音とルイは驚きの顔でクリストフを見つめ返す。
「サンタシとゴーディアは敵国同士ですよね。十年前にサンタシの玉座にヴィクトル王がついてから、やっと得た停戦状態ですが、その関係もいつ崩れるかもわからない・・・。そんな敵国の王族騎士を、なぜ貴方は見守りたいと？」
ルイは魔城で朱音が打ち明けてくれた事実から、なんとなくその理由に気付いていた。
即位パーティーであの男、フェルデンに会ったときのクロウの様子は尋常では無かった。それに、その夜の悲劇もきっとあの男が関係していることは薄々感じていた。少年王の魂、即ち元の少女の魂が、サンタシの騎士に抱く特別な感情を。
「えと、つまりですね、ちょっと事情があって詳しくはお話できないんですけど、以前に、彼にはすごくお世話になって・・・。その恩返しと言うのか、何というか・・・」
誤魔化し笑いをする朱音に、ルイは自分が気付いてしまったことを悟られまいと、ふっとよそよそしく目線を逸らし、カップに口をつけた。
「彼らに危険が迫っているんです。ゴーディアの元老院達が、アザエルから情報が漏洩することを怖れて腕利きの刺客を放ったんです」
クリストフの目がじっと目を細めた。
「なるほど・・・、アザエル閣下が自ら身柄をサンタシに委ねたという話は本当だったのですね」

この男は、本当にどこまでも知り得ない情報をどうやってか掴んでいるらしく、謎は深まるばかりである。
「では、話は簡単ではないですか。アザエル閣下程の魔力を持った方が近くにおられるのでしたら、直接刺客に狙われていることを知らせてやればいいではないですか？」
朱音はとんでもない、というようにぶんぶんと首を大きく横に振った。
「なぜです？」
クリストフもルイも興味深げに真っ青になった朱音の顔色を見た。
「だ、駄目だよ！　だいたい、アザエルは今魔術を封じられているし、フェルデンに直接会うなんてできない！」
あの優しい目にもう一度憎しみの色を浮かべられたら、もう朱音はきっと耐えることはできないだろう。
「アザエル閣下は魔力を封じられているのですか？　それは少々きついかもしれませんね・・・」
ふむと腕組みをしてクリストフは考え込んでしまった。
「しかし、サンタシの王族騎士に直接会えないというのは・・・？」
動揺して急に落ち着きをなくした朱音は、被った毛布を無駄に引っ張ったり、乱れてもいない髪を手櫛で整えたりし始める。
「えっと、その、だから・・・」
そんな主の姿に堪らず、ルイはとうとう口を挟んだ。
「サンタシの王子は陛下を覚えていないのです。記憶をなくされたようで、今は敵国としての認識しかありません。そんな相手に、国王自ら近付いて、我国が刺客を送った、などと直接話などできますか？　そんなことを言えば、今より国同士の確執は強くなるでしょうね」
「まあ、確かに・・・」
ルイの機転のきいた嘘に、納得はしていないようだが、クリストフは取り敢えず理解は示してくれたようだった。
クリストフは、空になった朱音のカップを受け取ると、古ぼけた

丸テーブルの上にことりと置いた。
「わたしは無理に全てを聞きだそうとは思いません。陛下が望んだときに話してくだされればいいですし、話さずずっと心の中に仕舞っておかれるのも自由」
驚き見開いた朱音の真っ黒な瞳には、暖炉の火が映り込み、その中でオレンジ色に美しく燃えていた。
「ただ、一つだけ質問することをお許しください。いつか、陛下は今の自分が自分じゃないと話しておられましたね。陛下、これは自分探しの旅ですか？」
ルイが見守る中、朱音はしっかり頷いた。
「うん、そうかもしれないね。今のわたしは中身と器がちぐはぐだから・・・、今生きてる意味を探さなきゃ」
ふっと目を緩ませて、クリストフは笑みを零した。
「それを聞いて安心しました。陛下が望むのであれば、わたしはサンタシの遣いの者達から着かず離れずの距離をとっての旅の手助けをすると誓いましょう」
優雅にお辞儀をすると、クリストフは静かに朱音の白い手をとった。
「これでも、私は人を見る目があるのです。でも、これだけは覚えておいてください」
濃げ茶のくるくるとカールした髪をふわりと揺らして、クリストフは膝を床につき黒髪の朱音の目をじっと見た。
「わたしは、自由な男です。誰からも束縛されない。わたしを動かすことができるのは、わたし自身の意思だけだということを・・・」
そして目鼻立ちのくっきりした謎のこの男は、にこりと邪心の無い顔で微笑み掛けた。
「即ちわたしは誰の命令でもなく、わたし自身の意思で陛下の自分探しの旅にお付き合いするということです」
ルイはまだこの謎多き美容師の男を信用仕切れない気持ちでいっぱいだったが、なぜかもう少し様子を見ていようと、そう思えたの

である。

2話　キケロ山脈

『タシタシタシ』
という奇妙な音で朱音は目を覚ました。
朱音の眠るベッドの傍らには、ルイが毛布に包まったまま可愛らしい寝顔で寝息を立て、クリストフは、丸テーブルに突っ伏したままいつの間にか寝入ってしまったようである。
薄着の彼の肩にも、今はブランケットが掛けられている。流石に寒くなったのだろう。
『タシタシタシ』
未だ続く音の正体を追い、朱音はそっとベッドを抜け出した。
二人を起こさないように細心の注意を払い、立てつけの悪いドアをなんとか開くと小屋の外へ出た。
外気は冷やりとし、朝霧がかかっている。しかし薄暗いながらも確かに太陽は昇り始めていた。冷たい空気にまだ半分眠りの中にいた朱音の頭がすっきりと晴れていく。
先程よりも近くで鳴る音の方を見て、朱音は思わず笑みを洩らした。
「クイックル！」
朝霧の中に見えた小さな影は、あの小さな白い友達、クイックルだったのだ。
白鳩は懸命に自らの翼をはたたかせて、小屋の窓を叩いている。
「おはよう、クリストフさんを呼んでいるの？」
微笑みかける黒髪の朱音に気付き、クイックルはホロホロと喉を鳴らしながら首を傾げる仕草をした。
「おや、エリック、戻ったのかい？」
突如背後で見知らぬ声がして、朱音ははっとして朝霧の中に目を凝らした。

「いつ戻ったんだい？　戻ったんなら声くらい掛けて・・・」
そう言い終わらないうちに、霧の中から現れた中年の女は口をあんぐりと開けた。女は、芋のようなものをいくつか入れた網籠を腕に抱えていた。その中の一つがころんと地面に転がると、女ははっとしたように言った。
「こりゃあ驚いた・・・。あんた、えらい別品さんだねえ！　エリックのこれかい？」
小太りな女は、空いた左の手の小指を立ててにかりと愛想よく笑った。
「あの・・・」
どう反応していいものかと戸惑っていると、ギイと音を立てて小屋のドアが開いた。

「おはよう、アレットおばさん」
焦げ茶のくるくるとカールした髪にちょっぴり寝癖をつけたクリストフが、寝惚け眼で背中を?きながら出てくる。
「おや、エリック。お前さん、いつ帰ったんだい？　私も旦那もあんたの帰りを今か今かと待ってたんだ、帰ったんなら声ぐらい掛けなさいな」
女は、転がった芋を屈んで拾い上げると、腰に手をやって言った。
「すみません。昨日は着いたのが遅かったものですから、声を掛けるのは控えたんです」
クリストフはいつの間に着替えたのか、白いカッターと茶色いチェックの入ったベストを身につけ、昨晩の闇夜に紛れる為に扮した紺の上下は既に取り払われていた。
「それより、そこのえらく別品なお嬢さんはどなただい？　奥手なお前さんが連れて来た初めての子じゃないか、ひょっとして、お前さんもとうとう身を固める決心が着いたね！?」
朱音はきょろきょろと周囲を見回した。アレットが言った“お嬢さん”がどこにいるのかと思わず探したのだ。

くすりと笑うと、クリストフは朱音の手をとって耳元でこう囁いた。

「アレットおばさんが言っているのは、貴方のことですよ、陛下」

ぎょっとしてクリストフを振り返る。

確かに魔城ではさんざん美しいだとか魔王の生き写しだとか言われてはきたが、まさか“お嬢さん”などと言われるなど思いもしなかったのだ。ましてや、今はクロウという少年の姿である。

「お前さんたら、ある日突然王都の景色のデッサンに行くって言ったっきり、もう三ヶ月も留守にして・・・。突然帰ってきたと思ったら、こんな年端もいかないお嬢さんを連れ帰ってくるなんて」

呆れたように笑うと、アレットは籠の中の芋を二つ程手にとって朱音に差し出した。

「エリックは見ての通り変わり者だろ？　あんたも苦労するだろうけど、どうか気長に付き合ってやっとくれね。ほら、さっき畑で採れたばかりのトト芋。朝食のスープに入れるといいよ」

言われるがまま、朱音はアレットからトト芋を受け取った。

見た目は長芋にも似ているが、土の香りに混じってほんのりと甘い香りも漂っている。

ふと朱音は自分の今の服装を思い出した。

堅苦しい王服を寝苦しいのではと気遣ってくれたクリストフが、これまたどこからか灰色のセーターを貸してくれていたのだ。

しかしそのセーターはまだ少年の身体には少しばかり大きく、袖口も数回折り曲げていたし、丈も随分長かった。

「ありがとう、アレットおばさん。後でいただくよ」

クリストフはにっこりと朗らかに笑うと、アレットは満足したように、満面の笑みで鼻歌を歌いながら元来た道を引き返して行った。

「なるほど・・・。陛下は絶世の美をお持ちですから、ルシファー陛下の顔を見たことのない者からすると、貴方は女性にも見えてしまうらしい」

困ったように苦笑を溢すクリストフの手を朱音はぐいと引っ張っ

た。
「ねえ、エリックって？」
途端、クリストフは焦げ茶の瞳を見開くと、数秒朱音に向き合った後、ぷっと吹き出した。
「ああ！　気付いてしまいましたか！」
頬を膨らませる朱音に涙目で笑いかけると、
「エリックはわたしのことですよ。勘の鋭い陛下のことだ、もう気付いておられるかと思いますが、この家もわたしのです」
小屋の木壁を軽くノックしながら、クリストフは言った。
「そうじゃないかと思った・・・。毛布は出てくるし、飲み物は出てくるし、服は出てくるし、留守にしている知り合いの家にしてはあまりに図々しいから変だと思っていたんです」
朱音は膨らませた頬のまま、両手を腰へやった。
「すみません、騙すつもりはなかったんですけど、説明するのが面倒臭くって・・・。エリックはわたしが自由に生きる為の、もう一つのわたしの名です」
ファサファサと羽ばたいて飛んできたクイックルは、飼い主の肩にご機嫌でとまった。
「ふ～ん、クリストフさんは腕のいい美容師だって話だけど、エリックさんは絵を描く人なの？」
小屋の中に転がっていたデッサンに使う道具の数々、描かれた絵たち。
「まあ、自称売れない画家ですね。売れない画家の肩書きって便利いいんですよ？　好きなときに好きなだけ、好きなところへデッサンの旅に出られるんですから」
クリストフは、デッサンを描く空真似をしながら、朱音に小さくウィンクを送った。
朱音は、クリストフという男が、ますます謎に包まれていることを改めて感じた。
「さて、そんなことはさておき、アレットおばさんにもらったトト

芋を使って、温かいスープをご馳走しますよ」
これ以上詮索される前にと、クリストフはくるりと朱音に背を向けて小屋のドアに手を描けた。
肩の上の白鳩は、じっと身動き一つせずにいる。
「クリストフさん！」
なんですか？　と振り向いた謎多き男に、朱音は思い切って話しを切り出した。
「お願いがあります・・・！」
ドアに手を掛けた手を引っ込めて、クリストフは少年王の正面に向き直った。何か大切なことを言おうとしている朱音の様子を察知したのであろう。
「はい？」
彫りが深く顔立ちのはっきりとしたクリストフの焦げ茶の瞳が、長い睫がじっ朱音の次の言葉を待っている。
「旅の間、わたしのことは朱音と呼んでもらえませんか？　これからはただの友達として・・・」
しゅんと項垂れてしまった少年の姿をじっと見つめた後、クリストフは優しく微笑み返した。
「ええ、わたしも貴方とは友達になりたいと思っていたんです。構いませんよ、アカネさん」
長い間その名で呼ばれることの無かった朱音は、懐かしい響きに思わず顔を綻ばせた。

魔城を出立してから既に三日が経過していた。
行きは馬を全力で飛ばして一日で向かった道のりだったが、こうして荷馬車でガタガタと揺られながらでは、想像以上の時間がかかっていた。
「フェルデン殿下、今日はもうこれ以上は無理かと・・・」

ユリウスが荷台で項垂れるようにしてもたれ掛かる青年に声を掛けた。
「兄上が待っている・・・、いいから進め」
掠れた声には力が無く、うまく隠してはいてもほんの少し息が上がっているのがわかる。
「具合が悪そうだな」
後ろ手に縄で縛られたアザエルが感情の無い声で言った。その声は前で鞭を操作するユリウスの耳には届いていない。
「黙れ」
俯いたまま、フェルデンは怒気を含む声で言った。
「まだ傷は塞がっていないのか？」
アザエルの質問に、青年は無言を通したまま返事をしようとはしなかった。
案の条、傷の治りきらないうちの無理が祟って、フェルデンの肩の傷は悪化していた。熱をもった傷口は膿み、疼きをもたらした。その為、フェルデンは高熱に悩まされ、痛みと朦朧とする意識の中で必死に闘っていたのである。
「殿下！　やっぱり医者に診て貰った方がいいです・・・！」
ユリウスは突然馬の足を止めると、勢いよく背後を振り返り、荷台に身を乗り出した。
「なんともない・・・」
ユリウスは俯くフェルデンの額に手の平を宛がった。
「なんですか、この熱！　どうして今まで黙ってたんですか！？」
ユリウスは軽い身のこなしでひょいと黄土色の手荷物を引っ掴むと、中身を全部ひっくり返してぶちまけた。
「ああ、くそっ、腹痛薬しか入ってない！」
と、腹立たしくぶちまけた中身を蹴飛ばすと、ユリウスはドサリと腰を降ろした。
「焦っても仕方が無い。次の道を左へ抜けるとボウレドの街がある。そこならば顔利きの街医者もいる。まずはそこへ向かえ」

アザエルが表情の無い顔のまま、ぽつりと言った。
この三日というもの、魔力を奪う腕輪を嵌められた魔王ルシファーの側近は、一度も口を開いていなかった。
フェルデンとユリウスが万が一のことを考え、男の両手首には縄がきつく結びつけられ身体の自由さえも奪い拘束していた。
「そんな必要なんてない、ユリ、いいから予定通り港へ迎ってくれ」
ボウレドへの道は、二人のサンタシの遣いが向かっている、アルノ船長の待つ港からは大きく逸れることになる。
「サンタシの者は噂通り愚鈍な者が多いようだ」
見下したようなアザエルの口振りに、
「なんだと！」
と、ユリウスが掴みかかった。
「ボウレドならばここからさほど離れてはいない。急げば日が暮れるまでには到着できる。しかし港まではまだ少し距離がある、野宿は免れないだろうな」
ユリウスはちっと舌打ちをすると、身動きのとれないアザエルの服から仕方無く手を離した。
「ユリ、おれはなんともない。これはこの男の策略だ、騙されるな。港から遠ざけ、おれ達が母国へ帰るのを妨害する気だ」
熱のせいで潤んだ目をユリウスに向けたフェルデンは、すっかり熱くなっている手で部下の腕を力無く掴んだ。
ユリウスは困惑した。
ここにいる碧髪の男は蛇のように狡猾で信用ならない。
しかし、フェルデンの身体は、このまま旅を続けるには限界がきていた。今夜山中で野宿をすれば、いくらタフなフェルデンとは言え、ただでは済まないだろう。膿んだ傷が悪化して最悪は死も考えられなくもない。
「ふ・・・、わたしもえらく信用されていないものだな・・・。まあいい、サンタシの遣いが山中で野垂れ死のうが、わたしには関係の無いことだ」

そう言ったきり、アザエルは目を閉じてしまった。
ユリウスは、腕を掴む熱い手の主を見て心を決めた。
身を翻して元の位置へと戻り、手綱をとると、勢いよく馬を走らせ始めた。
背後でとさりという音がして、ちらりと振り向くと、フェルデンが荷台の上で倒れているのが見えた。息はひどく荒く、肩は呼吸の度に大きく上下している。
ユリウスははっとしたが、馬を止めることなく鞭打つ手を一層強めた。例え、これがアザエルの策略であったにせよ、今は無二の友の具合が優先である。

三人を乗せた荷馬車は、キケロ山脈の途中で、港からボウレドへと方向を転換していった。

3話　いざ、ボウレドへ

「さて、我々もそろそろ出発しましょうか」
クリストフは、肩の上で毛づくろいをするクイックルの足を優しく手の平に乗せてやる。
ルイは不機嫌な顔で眉に皺を寄せた。
「ぼくは貴方を信用した訳ではありません。今度は一体どこへ連れて行くつもりなんですか」
従者の少年は今朝方、クリストフの手によって、旅をするのに君の従者服は不似合いだ、と半ば強制的にだぼりとした薄黄色のカッターに、寒さを凌ぐ為の大きめのトレーナーを羽織らされていた。
勿論、この小さな小屋のような家が、クリストフのものだとはまだ気付いていない。
「ボウレドです」
小屋の外へと二人を誘(いざな)いながら、クリストフは小声で白い鳩に何か囁くと、それを空へと放った。
霧は晴れ、日もすっかり昇っているようである。
「なんですって、ボウレド!?　ボウレドなどにどうして行く必要があるんです!?　サンタシの遣いは国へ帰るんですよ?　大陸の東の先端、港街メトーリアに向かうのが通常でしょう!」
朱音が二人の後について小屋を出ると、ルイが声を荒げていることに気付き、慌てて二人の間に割って入った。
「ルイ、どうしたの?　落ち着いて?」
ルイは突然現れた謎多き美容師の正体が、ひょっとすると元老院かヘロルドの手先かもしれないと思い始めていた。民間人で、あれ程の魔力を発揮し、誰にも気付かれずに魔城に忍び込むなどの所為をいとも簡単にこなしてしまうことに嫌疑を掛けていたのである。
そう考えると、サンタシの遣いが魔城を訪れていたことを知ってい

たことや、その遣いがサンタシの王子フェルデン・フォン。ヴォルティーユだという情報を得ていたことにも納得がいく。

「小鳩に空から調べてきて貰ったのですよ。夜明け前、港街メトーリアに向かった筈の使者達を乗せた荷馬車は、道を大きく逸れ、ボウレドの街に向かったそうです。なんらかの事情で立ち寄らざるを得なくなったのでしょうね」

朱音は、朝霧の中で小屋の窓を叩くクイックルの姿をふと思い出した。

「クイックルが調べてくれたの!?」

目をきらきらさせてクリストフの傍に寄り付く黒髪の主に、ルイはあたふたとする。

クロウを陥れようおとする者達の仲間かもしれないのに、疑がう心を微塵も見せない純真な主が、あまりに心許無く、従者の心に不安を掻き立てる。

「クイックル?」

ぱちくりと瞬きをして首を傾げるクリストフに、

「そう。わたしがつけたの! クリストフさんの小さなお友達」

ああ、と手をぽんと軽く叩くと、クリストフは破顔させた。

「彼女に名前をつけてくれたんですね! 素敵な名前です」

朱音は少し驚いてぽりぽりと筋の通った鼻を?いた。

「クイックルって女の子だったの? わたしはてっきり男の子だとばかり・・・」

すっかり打ち解けた雰囲気と距離に、ルイが思わずはらはらして割って入る。

「そんなことより! ボウレドですよね!? で、どうするんです?」

疑り深い目を向けるルイに、クリストフは苦笑を洩らしながら言った。

「昨日、元老院がアザエル閣下の暗殺の為に刺客を放ったと言っていましたよね? クイックルの情報によると、まだ彼らは無事な様

子ですし、刺客はまだ仕掛けてはいないようです。・・・となれば、ボウレドで何か起こるかもしれませんね・・・」

すらりとした指でクリストフは揉み上げに触れた。この仕草は、何か考えるときの彼の癖のようである。

「それってやばいよね!?　わたしたちも早く追いつかないと・・・」

朱音が血相を変えてクリストフの顔を見つめ返した。

アザエルに危険が迫っていることもあり、ルイは仕方無く今は男の言うことに素直に従うことにした。しかし、この謎多き男がいつ正体を現すかもわからないし、何か企んでいる可能性は捨てきれない。朱音がいくらこの男を信用していようとも、自分だけは決して信用しないで主を守ってみせる、とルイは心の中で決心した。

「ボウレドまではここからだとまだ随分距離があります。風に乗って行きましょうか」

何でもないことのようにクリストフは言ったが、ルイは内心ギクリとしていた。実は、二人には言ってはいなかったが、ルイは極度の高所恐怖症だったのだ。

「ルイ?」

霞みがかったルイの灰の瞳が大きく動揺しているのに気付いた朱音が心配そう顔を覗きこむ。

「では、いきますよ!」

その瞬間、再び突風が巻き起こった。

木の小屋が吹き飛ぶのではないかという強風。

三人の身体がふわりと宙へと舞い上がった。

「!!!!!!」

気持ち良さそうに風に身体を任せる朱音と、声も出せない程に顔を引き攣らせる灰の髪の少年、そして謎の美容師クリストフはボウレドに向けて旅を再開させたのである。

「これはひどい・・・、こんな傷でよく今まで旅を続けてこられたものだ・・・」

街医者のフレゴリーは熱に浮かされた青年の肩の傷を手当てしていた。

フェルデンの意識は朦朧としており、ひどい高熱で額に大粒の汗を浮かべている。

「今すぐに傷を切開して悪い血を出さねばならん・・・」

フレゴリーは切開用のメスを医療具の入った引き出しから手にとると、アルコールの入ったトレーの中に浸して殺菌を始めた。

ユリウスはごくりと唾を飲み込んだ。尖ったメスがぎらりと光を反射する。

「彼は助かりますか?」

切開用のメスを清潔な布で拭うと、フレゴリーは細く小さな目でじっとユリウスを見つめた。

「今まで、毒素が脳や心臓に回らなかっただけでも奇跡的だ。傷から血を抜いて、腫れがうまく引けばいいが・・・。とにかく、このまま高熱が続けば彼が危険なことに変わりない」

ユリウスはこんなになるまでフェルデンの異変に気付くことができなかった自分の不甲斐無さを浅ましく感じた。

「これだけの高熱だ、おそらく痛みは麻痺しているだろうが、念の為だ、彼が動かないようにしっかりと押さえていてくれ」

フレゴリーがメスを構えた。

ユリウスは痛ましい光景に目を背けそうになりながらも、無言で街医者の指示に従った。

全体重をかけてフェルデンの身体、主に腕に圧し掛かる。曝け出された上半身の尋常ではない熱さがローブごしに伝わってくる。

フレゴリーがそれを確認すると、ゆっくりとメスをフェルデンの

傷口に宛がった。
「うあああああああああ！」
フェルデンが耳を覆いたくなるような呻き声をあげた。
フレゴリーの言うように痛みは麻痺などしておらず、フェルデンは痛みから逃れようともがいた。ユリウスは暴れる腕と足を必死で押さえ込む。精神力の強いフェルデンがこれほどまで苦しむ姿を見ると、傷の痛みは相当なものと予想される。
傷口からはどす黒い血液が夥(おびただ)しく流れ出している。
フレゴリーは蒸留水で何度も何度もその血を洗い流した。
「す・・・まない・・・、アカ・・・ネ・・・」
フェルデンは虚ろな目で天井をじっと見つめたまま、うわ言のようにそう繰り返していた。
「さて、悪い血は抜いた。縫合するぞ」
フレゴリーの手は不気味に真っ赤に染まっている。使用を終えたメスはトレーの中に沈み、カランと音を立てた。途端、トレーに張られたアルコール水がピンク色に変色する。
フレゴリーが開いた傷を縫い始めても、フェルデンは数回「うっ」と呻いただけで再び暴れることはしなかった。それでもユリウスは、友の痛みが少しでも紛れるようにとずっとその手足を握り締めてやっていた。

「さあ、ご苦労さん。傷の手当はとりあえず終わった。後は彼の回復力にかけるしかない・・・」
フレゴリーは水桶で手に付着した血を洗い流すと、緑色の液体を綿に浸し、ピンセットで丁寧に傷口につけていく。
「これは自家製の傷薬だ。傷の治りが早くなる」
ユリウスはこくりと頷いた。
そしてフェルデンの額に浮かぶ汗を布で拭ってやった。
「きみは彼の友達かい？」
「はい」

フレゴリーの質問に、ユリウスは間髪入れず返答した。
診療所の前に停めた荷馬車にはアザエルが残っている。腕を拘束はしているが、あの男が逃走したのではないか、と急にユリウスは不安になった。
診療所の窓から慌てて荷馬車の方を覗くと、荷台の上にフードを被った影が変わらぬ姿勢で座っているのが確認できた。
いつの間にか日はどっぷりと暮れてしまっている。
ユリウスはほっとしながら窓際の腰掛け椅子に腰を下ろした。
「それにしても、きみ達は何者かね？　アザエル様と一緒に旅をしているとは・・・」
そもそも、ボウレドに到着したのは日暮れ時で、アザエルがこの診療所へと向かうようにユリウスに指示したのである。
口を噤んでしまった小柄の青年に気付き、フレゴリーはその質問をすぐに取り消した。
「彼はしばらくこのまま動かさない方がいいだろう。今夜はうちで彼を預かるから、きみとアザエル様はどこか宿をお探しなさい」
フレゴリーは信用できる街医者のようだった。
アザエルの顔利きだと聞いたときは、どんなにあくどい医者だろうかと考えたりもしたが、ユリウスはあの冷酷な男にもまともな知り合いがいることに少々驚いていた。
「大丈夫、高熱は続いてはいるが、今すぐにどうのということはない。今日は君も疲れただろう、ここはわしに任せて休みなさい。今度は心労が祟って君まで倒れてしまうぞ」
ぐいと背中を押されて、ユリウスは気掛かりな気持ちを捨て切れないまま、フレゴリーによって診療所の外まで連れ出されてしまった。
「いや、でも・・・」
ユリウスの声を無視して、フレゴリーは荷馬車の後ろに腰掛けたままのアザエルに声を掛けた。
「アザエル様、治療は終わりました。今夜は彼をうちで預かります

から、こいつを連れてどこか宿をお探しください」
“こいつ”と呼ばれてかちんとしながら、ユリウスはフレゴリーを振り返った。
すっかり暗くなったことと、深く被ったフードのせいで、フレゴリーからはアザエルが手を拘束する縄は見えず、何も気付いてはいないようである。
「わかった。いつもすまないな、フレゴリー」
感情が篭らない口調はそのままであったが、氷の男の口から飛び出した労わりの言葉にユリウスは思わずぎょっとした。
「そういう訳にはいかない！」
ユリウスがきっとアザエルを睨みつけると、再び診療所内に戻ろうとした。
「お前はヴォルティーユの者よりは少しは利口だと思っていたが、思い違いだったか？」
ユリウスはぴたりと足を止めた。
「フレゴリーはその辺りの藪医者とは違う。任せておけ。寧ろお前がいると仕事の邪魔だ」
見下した口振りに、ユリウスはかっとして荷馬車の上の男を振り返った。暗がりの中の魔王の側近は、相変わらず無表情のままだ。
くくくっという堪えた笑いがし、ぱっと視線をやると、フレゴリーは「ごほん」というわざとらしい咳払いを一つして、笑いをうまく飲み込んでいた。
「アザエル様は相変わらずのようだ。おっと・・・、また口がすぎてしまいましたかな」
フレゴリーは愉快そうに微笑み、その隙をついて診療所の扉をバタリと閉じてしまった。
「あ！」
慌てて扉に駆け寄ってみるが、既に内側から鍵がかけられている。
「あんのくそじじい！　鍵までかけやがって！」
ユリウスはぐしゃぐしゃと髪を掻き乱した。

「おい！　あんた、一体どういうつもりだ!?　部下のおれをフェルデン殿下から引き離すなんて！」

つかつかと荷台に歩み寄り、ユリウスはきっと荷台上の碧髪の男を睨みつけた。無表情の魔王の側近は、興味をなくしたように、ふっとユリウスから視線を逸らした。

何も言わないアザエルに、ユリウスは諦めの溜め息を洩らした。

「でもまあ・・・、フェルデン殿下を助けてくれたことには礼を言うよ・・・」

ユリウスは暗がりの中で、ぼそりと小さくそう呟いた。

4話　懺悔の夜

「今日はなんたって突然の来訪者が多い日だ・・・」
フレゴリーはふうと溜め息を一つつくと、横目で隣室にいる二人を見つめた。

朱音はベッドに横たわる痛々しい程の包帯に巻かれたフェルデンの手を優しく握り締めていた。
高い熱のせいか、玉のような汗を額に滲ませ、フェルデンは荒く呼吸を繰り返していた。きつく閉じられた瞳からは、あの透けるようなブラウンは垣間見ることさえできない。この瞼の下の美しい瞳を、朱音はどんなにか見たいと願っていたのに。
「フェルデン、ごめんね」
俯いた儚く悲しげな黒髪の少年が、じっとベッドの上の青年を見つめている姿を見ると、フレゴリーは事情をを察し、診療所の入り口に佇むもう一人の人物を見やった。
「エリック、あの子は一体・・・」
意味深な笑いを口元に浮かべ、クリストフは近くの長椅子に腰掛けた。
「わたしの友だちのアカネです」
ふむと小首を傾げると、フレゴリーは疑わしげな目でクリストフにじっと目線をやった。
「見たところ、あのお嬢さんはどこぞの貴族の娘のようにも見えるが・・・。まさかお前さん・・・」
クリストフはしっと小指を唇にあてて静止を促すと、そのままにこにこしたまま何も話さなくなってしまった。
「んっとに、お前さんって奴は・・・」
呆れたように苦笑を洩らすと、フレゴリーは私室へと引き返して

いった。

朱音は包帯の下の傷を知っていた。

あの夜、鏡の洞窟でフェルデンがアザエルに受けた攻撃は、今でも目を閉じれば鮮明に思い出される。アザエルの手から発されたどす黒く尖った無数の釘のようなもの。

行くな、と自分に言ったフェルデンの悲痛な声は、まだ耳に木霊している。

朱音は、傷ついたフェルデンをあの洞窟の前に置き去りにし、敵国へと自ら去ってしまった。

「奴に会ってどうするおつもりですか。貴方は、サンタシにとって今や脅威でしかない。貴方は奴をあの森で見捨て、自らの意思で私とともにこの地へと来たではありませんか。そんな裏切り者を奴が歓迎するなどと甘い考えはお捨てなさい」

アザエルが言った冷たい言葉は、朱音の胸に深く突き刺さっていた。

今目の前にいる青年が、どれだけ自分を大切に思い、助けようとしてくれていたことか。そんな恩人をも裏切り、こうしてアザエルとともにゴーディアへとやって来てしまった自分は、ただの裏切り者以外の何者でもなかった。

儀式での苦しみや朱音自身の肉体を失ってしまったことは、その罰なのだと、朱音は自らに言い聞かせた。

「貴方をこんなに苦しめてしまって、ほんとにごめんなさい・・・」

朱音は、今は力無いフェルデンの逞しい手をぎゅっと握り締めると、項垂れた額をすり寄せた。つうと長く黒い睫の下からつうと一筋流れた涙は、ぽとりとベッドの白いシーツに染みをつくった。

「せめて、貴方が無事にサンタシに着くまでは、今度はわたしが貴方を守ってみせるから・・・」

フェルデンは夢を見ていた。
温かい手の温もり。
懐かしいチチルの実の甘い香り。
「きっと良くなるから・・・」
耳元で囁く優しい少女の声。
（アカネ・・・、戻って来てくれたのか・・・）
一度は亡くしたと思った無垢で愛しい少女の存在を、確かにすぐ傍で感じていた。
（良かった・・・、無事だったんだな・・・）
眠ったフェルデンの表情がほんの少し穏やかになった気がした。
朱音は水の入った桶の中で濡れた布をぎゅっと絞ると、そっと汗ばんだフェルデンの額の汗を拭ってやる。
「そう、きっと良くなる・・・」
その行為は、明け方にフェルデンが目を覚ます少し前まで、繰り返し繰り返し続いた。

「陛下、彼が目を覚ますまで傍にいなくていいんですか？」
ルイが心配そうに朱音の顔を覗き込んだ。
「ううん、いいの」
朱音はくるりと診療所の奥から姿を現したフレゴリーを振り返った。
「結局今までついていたのか」
呆れたように言うと、フレゴリーは持っていた薪を足元へと積み上げた。
「お邪魔しました。その・・・、彼には、わたしがここへ来たということは黙っていて貰えませんか・・・？」
美しい顔に不安そうな色を見え隠れさせた朱音の姿に、フレゴリーは小さく頷いた。
「何か事情があるんだろう、わかった」

フレゴリーの返事にほっとした表情を浮かべると、朱音はふっとクリストフに向き直った。
「フレゴリー、突然訪ねて来てしまって申し訳なかったですね。わたし達はそろそろお暇します」
お茶でも一杯どうだとフレゴリーが勧めたが、三人は静かに首を横に振ると、音も立てずに診療所を後にしていった。

ユリウスは診療所の脇で毛布に包まり、じっと夜明けを待っていた。
昨晩の出来事の後、おちおち眠りになどつける筈もなかった。
なぜかあの少年王の懸命な姿に負けてしまい、フェルデンの居場所を教えてしまったことに直後はひどく後悔したが、一晩中フェルデンの眠る部屋の明かりが灯っていたことや、時折窓越しに聞こえてくる少年王の懺悔の言葉に、戸惑いを覚えた。
いくら待てども寝首を?こうとする気配も無く、ひたすらに明け方まで少年王の看病は続き、日が明けきる前には少年王を含む三人は静かに診療所から去っていった。
(あの少年王、一体何者なんだ・・・?　フェルデン殿下とはどんな関わりが・・・)

ユリウスは冷えた外気にぶるっと一つ身震いすると、もう一度毛布に深く身体を潜らせた。そして昨晩の出来事を目を閉じて思い出していた。

ビュンッと風を切る音。
ユリウスはさっと身を翻して刃を逃れた。

小雨が降り始めたせいで、仕方なく宿を探すユリウスと護送中の罪人アザエルは、闇と同化する藍色の衣に身を包んだ謎の覆面の三人組みに囲まれていた。

降りしきる雨で視界が悪く、服は水を吸ってひどく重い。

この者達は、雨の音に紛れて突如二人の前に姿を現したのであった。

「何者だ・・・！」

湾曲した剣士らしからぬ短い刀身に、見慣れぬ上下の境目のわからぬ衣装。

三人の身のこなしは軽く、常人ではないことはすぐにユリウスにもわかった。

ユリウスの投げかけに反応を示すこともなく、三人は容赦なく刃を繰り出す。

『ドッ』という鈍い音とともに、一人が後方に背中から転がった。

未だ手を拘束されたままのアザエルが、片足で蹴りを溝落ちに食らわせたのだ。

「元老院の犬か・・・」

降りしきる雨の中、ぽたぽたと水滴が碧い髪を滴り、水を含んだその髪は、いつもよりも僅かに落ち着いた色を放つ。

すぐさま別の者がアザエルにブンと刃を振り降ろし、もう一人が渾身の力を込めてユリウスに飛びかかった。

『ガキイン！』

刃と刃のぶつかり合うするどい音。

ユリウスは覆面の者の刃を剣でもって制していた。

アザエルはさっと身体を反らせると、目にも留まらぬ速さで敵の背後に回りこみ、拘束された手で相手の首を羽交い絞めにした。

首を強く締め付けられ、僅かに緩んだ手から剣を取り上げると、アザエルは慣れた手つきで男の首を?き切った。

「ぐう・・・！」

男はくぐもった呻き声を洩らし、喉もとから赤黒い血を滴らせながら、バサリと地面にくず折れた。
「くそっ！」
腹を蹴られたもう一人が勢いよくアザエルに刃を向け走り出した。そのすぐ近くで、ユリウスと覆面の別の男が剣を何度もぶつけ合う激しい音が鳴り響く。
ぬかるんだ足元には先程首を?き切られた男が倒れ、紅い水たまりをつくっていた。
アザエルが奪い取った刃で手首の縄を切り外し、ぱらりと縄がばらけて落ちていく。それとほぼ同時に、男の向けた切っ先が僅かにアザエルの碧い髪を掠めた。
『シュッ』
一瞬のことであった。
覆面の男が些か眼を見開くと、無言のまま前のめりに砂利の上に豪快に倒れ込んだ。
「ぐああ！！」
ユリウスとやり合っていた男が、額からだらだらと血を滴らせ、バランスを崩して後退していた。
「誰の差し金だ？　狙いはなんだ」
ユリウスは、剣の切っ先を男の首に押しつけ、問い掛けた。男は何も言わず苦しげに血の流れていない方の目でユリウスを睨み上げた。
「答えろ！」
覆面の男は、ぱっくりと口を開けた額の傷を両手で押さえながら、ちっと舌打ちをする。ちらりと横目で倒れた仲間の近くに転がっている剣のありかを確認すると、男は隙をついてその剣に手を伸ばした。
しかしユリウスはそれを逃さなかった。男の胴にざくりと剣を突き立てると、男は身体を硬直させてどっと道へ倒れた。
ユリウスはふうと息をついて碧髪の男を振り返った。拘束してい

た縄は断ち切られ、湾曲した剣が握られている。
はっとして慌てて剣を構えたユリウスを他所に、アザエルは持っていた剣をぽいと無関心に放り捨てた。
「閣下！」
ザアアと降り付ける強い雨の中、ここでは聞く筈のない少年の声が響いた。
アザエルが物静かに振り向いた先に、灰色の髪の少年の姿。黒く曇った空の下では、不思議とその色は銀にも見えた。
「なぜお前がここにいる・・・」
じっと目を細めた冷たいアザエルの声。灰色の髪の少年ルイは、物言いたげに少し口をぱくつかせると、しゅんと下を向いてしまった。
「わたしが連れて来たんだよ」
ルイの背後から真っ黒な髪の少年がすっと現れた。ユリウスは驚きであっと声を上げる。
そこにいたのは即位パーティーの夜に見たあの、世にも美しい魔王の息子、クロウに違いなかった。
「どういうことだ、ルイ。殺されたいか」
アザエルは凍りつくような碧い目をルイに向けると、その首を片手で締め付けた。
「す、すみません・・・、閣下・・・、全て、僕の不注意です・・・」
「アザエル！！　違う！　ルイのせいじゃない！」
朱音はルイの首にかけられたアザエルの手を引っ張った。
「こんなことやめて！　悪いのは全部わたしなんだから！」
目に涙を浮かべながら懇願する少年王の姿に、ユリウスは戸惑いを隠せなかった。先程まで自分達を襲っていた謎の男達は、この少年王の差し金に違いないと思っていたのだ。
「陛下のお望みならば・・・」
アザエルは意外にもすんなりとルイの首から手を離すと、すっと

朱音の前に居直り、礼の形をとった。
ルイが咳き込みながら呼吸を取り戻す。
「陛下、失礼ながらお聞かせください。なぜこのようなところへ来たのです」
感情の篭らないアザエルの言葉は、いつになく冷たさを放っている。不機嫌な時程この男は、より丁寧な口調で冷たく話をすることを朱音は知っていた。
「元老院があんたをサンタシに渡すまいと刺客を送ったからだよ」
ユリウスは剣を鞘に納めると、少年王の言葉に耳を傾けた。
「でも勘違いしないで。わたしはあんたを助けに来た訳じゃない。フェルデンを無事に国へ送り返す為に来たんだから」
魔王の側近がクロウに忠誠を誓っていることは、傍目から見ても明白だった。しかし、王たる少年はこの男を信頼しているという訳では無さそうである。ユリウスはこの二人の不可解な関係についてどうもしっくりこない思いに囚われていた。
「今すぐ城へお帰りください。王が城を空けるとは言語道断。国の混乱を招くおつもりですか」
冷たく射放たれた視線は、ぐっと朱音の言葉を詰まらせた。また儀式の前と同様の有無を言わせないあの目だった。
「わたしだってなりたくてなったんじゃない・・・！　あんなとこへなんか絶対戻らないから」
唇をきつく結び、朱音は握り締めた拳を震わせながら抗議する。
「そうはいきません。陛下がそう仰るのであれば、わたしも当初の約束を破らざるを得ない」
すっと立ち上がったアザエルは、ゆっくりと小柄の騎士ユリウスを振り返った。
その氷のような目に、ユリウスはごくり空気を飲んだ。
「その者をここで殺してしまいましょうか？」
朱音は咄嗟にアザエルの服を引っ張った。
「なにするつもり！？　何もしないって言ってたじゃない！」

水を滴らせながらふっとアザエルは不適な笑みを浮かべた。
「サンタシの使者を二人とも殺してしまえば、陛下がこのようなところへ足を運ばずともよいではないですか」
これにはルイも驚きを隠せず、
「閣下！」
と、叫び出していた。
この冷徹な男ならば、本当に二人を殺してしまいかねない。
「そんなことしたら、サンタシと戦争になるよ！？」
朱音が必死になって止めようとするにも関わらず、アザエルは落ち着いた表情のまま、先程放り投げた湾曲した剣に手を伸ばす。
ユリウスは、魔力を封じられてはいても、相当の腕の持ち主であろうアザエルの攻撃に備えて、剣の柄に手を掛けた。
「確かに・・・。しかし、国が国王を失うのであれば、国は滅びたも同じこと」
手にとった剣を片手に持つと、その湾曲した刃についた血を指先で絡め取る。
暗くなり、雨が降って視界が良くなかった為、今まであまり気が付かなかったが、この辺りには鉄臭い血の匂いが充満していた。足元に転がる屍は、元の世界で見た親戚の葬式できれいに飾られた死体とは比べものにならなかった。
（こいつ、一体何を考えているんだ！？）
ユリウスは、考えの読めない魔王の側近がゆっくりと自分に向かって近付いてくる姿を見つめ、真意を見抜こうとするが、その表情は氷のように冷たく、何も感情を映し出してはいない。
どうやらここで戦闘は免れないらしい。
ユリウスの剣の腕はサンタシでも有数のものだったが、魔王ルシファーに長く仕え、ゴーディアの軍事司令官を務めた経歴のあるこの男に、その腕がどこまで通じるのかは実のところわからない。いくら腕の立つユリウスでも、この男相手に互角に渡り合えるとは考えにくい。

「悪く思うな」
アザエルがぴたりと歩みを止めると、ユリウスに剣先を向けた。
（ならば、先に仕掛けるまで・・・！）
ユリウスはアザエルの間合いに飛び込むと同時に、剣を鞘から抜き取った。
『ガキイン！』
ユリウスの一撃をアザエルが剣で薙ぎ払う。
すぐさま胴を狙う攻撃に切り替え、ユリウスはさらにアザエルの間合いに踏み込んでいく。
『ガキイン！』
再び起こった刃と刃のぶつかり合い。
小柄なユリウスは果敢に魔王の側近に攻め入った。
「やめて！！　アザエル！！」
「閣下！！」
朱音とルイの必死の呼び止めにも関わらず、ものともしない。
初めは圧しているようにも見えたユリウスだったが、形勢は逆転し、いつの間にかアザエルによって後ろへと追いやられる形になっていた。
「くそっ」
その瞬間、ユリウスの剣がアザエルの剣に薙ぎ払われ、ぶんぶんと音を立てて宙を舞うと、カランと地面に落とされた。
「若いが、なかなかいい腕をしている。殺すには惜しいが・・・。これも陛下の為だ」
アザエルは丸腰になったユリウスに剣を振り下ろした。
「やめてーーーー！！！！！」
朱音が叫んだと同時に、
「そうはさせませんよ」
という声が降り、ごうっと音を立てて空から叩きつけるような風が巻き起こった。
吹き飛ばされそうな程の突風に、ユリウスもアザエルも地から足

が離れぬように必死に耐えた。
アザエルの手から剣が離れ、少し離れた場所へとカラカラと吹き飛ばされた。
「魔族か！」
すっと突風がやむと、アザエルは忌々しげに上を睨んだ。
「何者だ・・・！」
今まで気配を感じさせなかった男の存在に、ユリウスは寒気を覚えずにはいられなかった。
すたりと地面に舞い降りた男は、にこりと朗らかに微笑んだ。こんな緊迫した状況に不似合いな笑みを浮かべ、男はなんともないような口調で話し始めた。
「申し遅れました、わたしはクリストフ・ブレロ。この方の友であり、しがない美容師です。わたしはクロウ陛下の旅を手助けする契りを交わしました。ですから、その約束を果たす為に、ここでサンタシの使者殿をみすみす殺させる訳にはいかないのですよ」
アザエルは、じっと目の前に現れた男を見つめた。
綺麗に整えられた髪、紳士的な身なりに口調、到底しがない美容師というのは信用ならない。
「ルイ、この男は何者だ」
ルイが慌てて口を開く。
「はい、えっとこの人は、王都マルサスで近頃名の知れる腕利きの美容師です。魔城にも何度も彼を呼びつけ、クロウ陛下の衣装のデザインや整髪にも関わっていました」
ニコリと微笑むと、濡れた髪を掻き上げ、後ろへなで上げると、クリストフは優雅に頭を下げた。
「笑わせるな。ただの美容師だと？　貴様程の魔力を持つ美容師がいる筈などない。貴様、軍の出だな・・・」
クリストフはアザエルの言葉に返事はせず、肩を竦ませる程度におさえた。
「閣下、おっと、元閣下でしたか。今はわたしをどうにかしような

どと考えるのはよしてください。貴方は今魔術を封じられているでしょう？　普段の貴方ならばわたしなど捻り潰すことは容易いですが、今の貴方はわたしに敵わない」

クリストフの言動に、アザエルは冷ややかな視線を送った。

「何が望みだ」

気がつくと、赤音はアザエルに向けて駆け寄っていた。

アザエルを見上げ、その胸のローブを掴んで無我夢中で揺さ振っていた。

「フェルデンはどこ！？　彼はどこにいるの！？」

無表情のままアザエルは何か呟くと、朱音は目を見開き、揺さ振る手を止めた。何か相当ショックを受けることを言われたようであった。

「クロウ陛下。フェルデン殿下は街医者フレゴリーの診療所です。以前に受けた傷が悪化し、あまり状態がよくない」

驚いたことに、そう口にしたのは誰でもない、ユリウス自身だった。

少年王はひどく焦ったようにクリストフを見返していた。謎の美容師も、こくりと一つ頷いている。おそらく、すぐにでも診療所に駆けつけるつもりであろう。

ここにいる少年王が、ひょっとするとフェルデンの寝首を？くつもりかもしれないのに、なぜかフェルデンの居場所をこの少年王に教えてしまった自分にひどく驚いていた。

「アザエル、わたし、やっぱり行かなきゃ。彼には絶対に顔を合わせないようにするから・・・」

「止めたところで、陛下は行ってしまわれるのでしょう」

呆れたように溜め息をつくと、アザエルはくるりと背を向けて歩み出した。

「おい！　どこへ行く気だ！」

ユリウスが立ち去る碧髪の魔王の側近の後姿に投げかけると、彼は嘲るようにこう返答した。

「案ずるな。わたしは荷馬車に戻る。荷台の荷をこのまま放置するのに気が引ける。お前はお前で好きにすればいい」

荷馬車に積んだ四角い箱が一体何なのか、ユリウスは知っていた。フェルデンの容態に気をとられ、今まですっかり忘れていた荷の存在に、ユリウスはあっと声を出した。大切な荷を、確かにこれ以上放っておくことはできない。

かと言って、先程自分に牙を向けてきたこの魔王の側近と、一晩中荷馬車で夜を過ごす気にもなれなかった。

恐らく、アザエルは逃げる気はないだろう。魔術などなくても、あれだけの剣の腕があればその気があれば今までだっていつでも逃げおおせた筈だ。

「わかった・・・。クロウ陛下、おれが診療所へ案内します」

ユリウスは地面に転がった剣を拾い上げると、そっと静かに鞘に納めた。

一夜にしてとんでもない状況に陥ってしまった帰途。

ユリウスにとって、敵国の王クロウとフェルデンとの関係に、新たな疑問と謎が浮かび上がった夜となった。

5話　旅は道連れ

「やるじゃねえの」
藍色の布を頭から足首までを覆い隠す布を被った男が、木の上からぴょんと軽やかに飛び降りた。
降りしきった雨はいつの間にか小雨へと変わっている。
「けど、さすがにこいつらじゃ相手にもならなかったか・・・」
地面に転がる四体の残骸をごろんと蹴飛ばすと、ぺっと唾を吐き捨てた。
男は被った布の下でくくくっと笑いをこぼした。予想外の面白い展開に笑いを堪えることができなかったのである。
（しっかしまあ、こんな場所にクロウ国王が登場するとはなあ・・・。それに、あの横にいた男・・・。風を操ってやがった。面白いじゃねえの・・・）
くくくっと再び笑いを零すと、男は何かを思いついたようにピタリと笑いを止めると、ひゅうと一つ口笛を吹いた。

「気がつきましたか」
ユリウスが丸椅子から立ち上がると、まだ夢うつつにぼうっと天井を見つめるフェルデンに歩み寄った。
フェルデンの顔色は随分血行を取り戻し、熱も微熱程度に落ち着いてきているようであった。
「アカネに会った・・・」
天井を見上げたフェルデンの横顔は、ひどく落ち着いていた。
ユリウスは口を開きかけたが、言葉を口にするのはやめておくことにした。

「ユリ、ここは・・・？」
「ボウレドの街医者、フレゴリーの診療所です」
ユリウスは一呼吸置いてから言った。
フェルデンは驚いた表情を浮かべて天井からユリウスへと視線を泳がせた。
「ボウレドだと？」
こくりと頷くと、ユリウスはフェルデンに頭を下げた。
「貴方の指示に従わず、すみませんでした。でも、あのままメトーリアに向かっていたら、貴方は死んでいたかもしれない。おれは部下である以前に貴方の友でもあります。貴方を助けるという義務がある、わかってください。」
フェルデンは、解顔して目を閉じた。
サンタシを出立する前、信頼の置ける部下を一人供として連れて行けと、といったディートハルトの言葉の意図がやっと今になってわかった気がした。今ここにユリウスが供として居てくれることに、心から感謝した。
「いや、おれこそお前に謝らなければ。おれは正気を失っていた・・・。ありがとう」
怒りを買うとばかり思っていたユリウスだったが、想いの他返ってきた謝罪と感謝の言葉に困惑し、照れた笑みを浮かべた。
「まだ二、三日は安静にしておいてください。本当ならまだ一週間はベッドに縛り付けておきたい程だとフレゴリーは言ってましたが、急ぎの用があると話したら、熱が下がれば特別に許すと言ってくれました」
観念したように、フェルデンは頷いた。
「わかった。お前の言う通りにするよ」
「はい、安心してください。アザエルが荷馬車の荷を見張ってくれています。もう少し眠ってください」
何か言いたげな目を向けるフェルデンだったが、何も言わないまま再び瞼を閉じた。

穏やかな寝息が聞こえ始めると、ユリウスはほっとして丸椅子に腰掛けた。

昨晩、ゴーディアの元老院から送られてきた刺客に襲われたことは、まだフェルデンに話すのはやめておくことにした。そのことを知れば、この人はきっとまた無理をしてベッドから起き出そうとするに違いない。

“アカネに会った”と言ったフェルデンの言葉が妙にユリウスの心に引っかかった。昨晩この青年に付きっきりで看病していたのは、誰でもない敵国の王、クロウに他ならなかったからだ。

やっと落ち着きを取り戻しつつあるフェルデンに、その事実を知らせる訳にはいかず、ユリウスは沈黙を守ることに決めていた。

「フェルデン殿下、貴方にとって、そのアカネという人は本当に大切な人だったんですね。いつも冷静な貴方の正気をも失わせる程に・・・」

ボウレドの街外れにある小さな店で、朱音は出されたスープとパンを口にしていた。

今はクリストフは買出しに行って二人の傍を離れており、テーブルにはルイと朱音の二人きりであった。

「陛下、今更こんなことを言ったら怒られるかもしれませんが、僕はやっぱりあのクリストフという男が信用できません。それに、アザエル閣下も言っていたように、城をあまり長く空けるのは僕も良くないと思うんです・・・」

言いにくそうに俯いたままぼそぼそと話すルイの話を全く気にしていない様子で、朱音は明るい口調で言った。

「ルイ、このスープ飲んでみなよ。なかなかいけるよ」

すすっていたスープの皿をルイに差し出すと、にこりと微笑んだ。

「いえ、僕は結構です・・・。それより、そろそろ城へ戻りませんか・・・？」

朱音は相変わらず気に留めた様子もないまま、パンを頬張った。

「なんでかなあ、城の料理って美味しい筈なんだけど、こうしてお城の外で食べる質素な食べ物の方が美味しく感じるんだよね、不思議だよね」

朱音はもぐもぐと口を動かしながら、ルイにパンも差し出した。

ふるふると首を横に振られて残念そうな顔をしながらも、朱音はぱくぱくと残りのパンも平らげてしまう。

「それってさ、どうしてか分かる？」

じっとルイの顔を見つめた後、朱音は少し悲しげに目を伏せた。

ルイははっとして顔を上げた。

「あのお城にはわたしの居場所がないからだよ。ここにいるわたしはクロウであって、クロウじゃない。そんな誰でもない国王が、力の無い人間がお城に戻ったところで、何の役に立つと思う？　きっとただの飾りでしかないんだよ」

ルイは何も理解できていなかった自分に気付き、恥じ入った。目の前の年若き国王は、未だ大きな苦しみを抱えていた。それも、その苦しみを決して外へと出さないまま。

「陛下・・・、無神経なことを言ってしまいました。お許しください」

ルイは椅子から立ち上がると、テーブルに頭がつく程に腰を折った。

「こらこら、ルイったら！　こんなところでそんなことしないでってば。それに、陛下はなしだよ。誰かに聞かれでもしたらどうするつもり？」

慌てて立ち上がり、朱音は頭を下げるルイを制止させながら小声で言った。

「は、はい・・・！　申し訳ありません・・・！」

あわあわと狼狽するルイをなんとか椅子に押し戻すと、朱音はく

すりと微笑んだ。
「お城の外では陛下じゃなくて朱音って呼んで？　ね？」
戸惑ったようにこくりと頷くと、ルイは再び俯いてしまった。
「ルイの心配はわかってるつもりだよ。わたしがお城を空けていることが他の国にばれたら、戦争が起こることだってありえるんでしょう？　でもさ、わたしも自分が一体誰なのかわかんないままゴーディアの王になんてなれない・・・。あともう少し、あともう少しだけわたしの旅に付き合ってくれないかな？」
先程、王都マルサスから来た商人が店のカウンターで主人と話している声が二人の耳にも入っていた。しかし、国王クロウが城を抜け出したことは話題には上がっておらず、それよりも先日公表された先王である魔王ルシファーの死去で持ち切りだった。
ここの主人はなかなか読みが深く、クロウ陛下が即位するよりも以前に、実はルシファー王は既に亡くなっていたんじゃないかという予想まで立てていた。
商人は、強大な魔力を持ったルシファー王がこの世を去ってしまったことで混乱が起きなくて済んでいるのは、魔力をを受け継ぐクロウ陛下がいるからに他ならないな、と得意げに話をしていた。
そんな中でもしもクロウ王が不在だと知れたら、国内は間違い無く混乱するだろう。
元老院達は今のところうまくその事実を隠し通しているようだ。恐らく慌てた元老院達は、アザエル暗殺の為の刺客のみならず、クロウ国王を早急に連れ戻す為の人員を既に各地へと放っている筈だ。
「水を・・・、水のおかわりを貰ってきますね」
ルイは空いたグラスを手に、テーブルを離れた。
こうしている間にも、この街ボウレドにもクロウ王を探す使者が潜んでいるかもしれない。そう考えると、ルイはこのように自由に旅を続けられるのも残り僅かな時間のようにも思えた。
（どうせ連れ戻されるのなら、せめて、陛下の気が済むように・・・）

テーブルの上に載った残った飲みかけのスープを見つめたまま、朱音ははあと溜息を漏らした。

ルイが怒るのも当然だった。

相談も無く勝手に城の外へと連れ出してきた上に、あちこち連れまわした挙句、ゴーディアを危険に晒している。友達だと都合のいいことばかり言って、彼には迷惑を掛け通しだった。

「どうした？　うかない顔して」

突如掛けられた見知らぬ男の声に驚いて、朱音はびっくりして俯けていた顔を上げた。

いつの間にかルイが先程腰掛けていた席に見知らぬ青年が座り、朱音の顔を覗き込んでいる。

深く被った紐を編んだような風変わりの帽子に、健康的な褐色の肌。両耳には大きな石のついた飾りをしていて、燃えるような紅い眼はとても印象的だった。

「たまげた！　あんた、相当の美人だな！」

「だ、誰・・・？」

警戒心の強い口調で、朱音は訊ねた。

「俺か？　俺はエフ！　メトーリアの港で停泊中の船乗りだ。あんたは？」

悪意の無い笑みでニカリと笑うと、突然手を差し出してきた。

どうやら握手を求めているらしい。

「朱音です・・・。あの、連れがいますので」

悪い青年のようには見えなかったが、今の朱音はどうもこの青年と和気藹々と会話をする気にはなれそうになかった為、差し出された手を握り返すことはしなかった。

「そっか、残念。こんな美人が一人な訳ねえもんな！　ま、なんか落ち込んでるみたいだけど、元気出せよ！　長い人生のうちに悪いことばっかじゃねえよ」

握り返すことをしてくれなかった朱音に対して別段気分を害した様子も無く、青年は案外すんなりと席を立った。

「そうですね、ありがとう」
苦笑いを浮かべるとエフは親指を立ててニカッと再び笑って店を出て行った。
「また会おうぜ！　アカネ！」
と、去り際にこう言い残して。

「お待たせしました、遅くなってしまって」
水を持って帰ってきたルイが朱音にグラスを手渡しながら首を傾げる。
「えと、陛・・・じゃなかった、アカネ様、どうかなさいました？」
呆気にとられたように店の入り口を見つめる朱音を不思議そうな顔でルイが問い掛ける。
「ううん、なんでもないよ」
受け取った水を手にしたまま、朱音はぷっと突然吹き出してくすくすと笑い始めた。
「そうだよ、彼の言う通り、きっと長い人生の中で悪いことばっかりじゃない」
ルイはいまいち状況が理解できないではいたが、なんだか可笑しそうに笑う朱音の姿を見ていると、この旅も決して悪いものではないような気がしてきた。
「そうですね！　僕もそう思います。アザエル閣下のことも気に掛かりますし、それに、サンタシにいるロランのことも気に掛かります。もう少しこのまま旅を続けてみましょうか」
朱音は嬉しそうに微笑むと、ぎゅっとルイの肩を抱き寄せた。
「ルイ・・・！」
ルイは頬を紅く染めながら、照れくさそうに頭をぽりぽりと掻いた。

「きっとまたすぐに会えるぜ・・・。アカネ・・・！」
店の表でくるりと一度店を振り返り、エフは小さくそう呟いた。

6話　リーベル号

「あの人達は・・・？」
出航を直前に控えたリーベル号の甲板は忙しない船乗り達の往来でごった返している。
その中で、一人の船乗りが不思議そうな面持ちで、この船に唯一の客室に案内される三人連れの者達を見つめていた。
「ああ、なんでも・・・、あの旦那はアルノ船長の古い友人だそうだ」
最後の荷を運び込みながら、もう一人の船乗りが言った。
「あの紳士が？　へえ！」
客室に繋がる階段に消えていく三人の後ろ姿を見つめながら、男は腕組みをした。
「なんか匂うんだよな」
縄で編まれた荷を肩の上で担ぎ直すと、男は目を細めて言った。
「なにが？」
「お前、あの旦那の後ろを歩くお嬢さんを見たか？　鍔（つば）のでけえ帽子と日除けのベールでよくは見えなかったが、ありゃあ相当の別嬪さんだ。着ているドレスも地味なものを選んではいるが、上物と見た！　横にくっ付いている坊やはきっと御付きの者だぜ！」
腕組みをした男が驚いたように口をあんぐり開けた。
「ってえとなると・・・、あれはどっかの貴族の娘さんかなんかか？」
荷物が肩からずれ落ちそうになるのを、何度か修正しながらも、男は鼻を鳴らして笑った。
「察しが悪ぃな、バカ！　俺ぁ、あのお嬢さんはどっかの姫さんと見たぜ」
「えっ！　あの旦那の娘じゃねえのか！？」

他の者が仕事をさぼっている二人にばつの悪い視線を向け始めたので、荷を載せた男は困り顔で再び足を動かし始めた。
「さあな。お忍びで国を渡らなきゃなんねぇ理由かなんかあるんじゃねぇか？　じゃ、俺ぁそろそろ仕事に戻る」
男達はそそくさと再び忙しない甲板の船乗り達の往来の中に紛れ込んでいった。

「ああ、もう我慢できない！」
朱音は客室に入った途端、頭と顔を覆う大きな帽子を脱ぎ払ってベッドの上に放り投げた。
「このドレス、苦しすぎるよ！　息もできない！　貴族の人たちってほんとに毎日こんなドレス着てるの？」
灰のハットを優雅に外すと、ふっとクリストフが笑みを漏らした。
「お洒落には多少の我慢は必要なものですよ、アカネさん」
苦しそうに胸に手を当てる朱音の顔色は少し青くなっている。
「陛下・・・、とてもお美しいです・・・」
ルイがうっとりとした表情で朱音を見つめる。
それにうんざりして、朱音はベッドにどさりと腰を下ろした。
「だけど、本当にこんな変装が必要なの？　こんな立派なドレスまで調達してきちゃって」
クリストフは満足気に頷いた。
「勿論ですとも。旅を続けるには変装が欠かせません。知っていますか？　今、この国のどの街にも貴方を探す政府の犬が潜んでいるということを。彼らが求めているのは“蒼黒の髪、黒曜石の瞳の少年”の姿です。ですから、これを敢えて変えてやることで、カムフラージュになるという訳です」
もっともらしいクリストフの言葉だがどうも納得がいかず、朱音は膨れっ面でぷいと船窓から覗く海に目をやった。
「そんなこと言っちゃってさ、自分のデザインしたドレスを単にわたしに着せたかっただけじゃないの？」

「あ、ばれてました？」
肩を竦めながらクリストフは変装の為に口元に糊付けした口髭をちょんと摘む仕草をすると、にこりと微笑んだ。
「それより・・・、貴方、本当に何者なんです！？　僕は、貴方はこの国一の美容師クリストフと認識していましたが、行く先々で呼ばれる名も対応もそれぞれ・・・。クリストフにエリック、先程はロジャー、貴方は一体いくつ名を持っているんですか！？」
ルイがぐいとクリストフに詰めより、きっと鋭く下から見据えた。
「えー、まあ、そうですね・・・」
困ったようにぽりぽりと頭を掻くと、クリストフは窓の外を指差した。
「クイックル！！」
窓の外でぱたぱたと羽ばたく白鳩に歓喜の声を上げ、朱音は慌てて窓を開けて小さな友を船の客室に招き入れた。
「一体どこに行ってたの？　心配してたんだよ」
ちょんと朱音の肩に飛び乗った白鳩の首を優しく指で撫でてやると、ホロホロと気持ち良さそうに喉を鳴らした。
「彼女には、魔城での様子を見てくるようお願いしていたんですよ」
この白い友達は、三人がボウレドに滞在している間中一度も朱音の前に姿を現してはいなかった。
クリストフが懐から麻の袋を取り出すと、中から小さな実を手の平に取り出し載せた。それを見たクイックルは、目を輝かせてその手にパサパサと飛び乗った。
「その実はなに？」
好奇心旺盛な目で、朱音はベッドから立ち上がりクリストフの元へと歩み寄ると、クリストフの手にある実の一つを摘んでまじまじと見つめる。
「リガルトナッツですよ。彼女の大好物なんです。酒のあてとしてもよく出されるんですよ。」
細長く丸い形をした小麦色のナッツを、クイックルは器用に小さ

な嘴を使って啄ばんでいる。
「まさか、この世界でリガルトナッツを知らない人がいるとは知りませんでした。魔城ではこのような俗世の食べ物が出されないのですか？」
ぎくりとしてルイが慌ててフォローを挟む。
「陛下はほんの少し以前にこのゴーディアの地に降臨されたばかりです。知らない食べ物があったってそう不思議はありません」
うまく逃げ切ったつもりでいルイだったが、次の瞬間思わず言葉を噤んでしまった。
「そのことなんですが、以前から少し気になっていたんです。クロウ陛下が降臨されたということはこの世界の誰もが既に知っています。けれど、一体どこから降臨されたんです？」
硬直して顔を引きつらせるルイに気付いてか気付かないでか、クリストフは手の平のナッツを全て食べ終えてしまったクイックルを静かにテーブルの上に降ろすと、言葉を続けた。
「それに、わたしにはどうしてか貴方がただの少女に見えてしまう」
朱音に向き直ったクリストフから、朱音はぱっと顔を背けた。
「確かに亡きルシファー王の血を色濃く受け継ぐ美しい容貌・・・、ですが貴方を見ていると、わたしにはただの可憐な少女としか思えないのですよ。貴方こそ一体・・・」
トクトクと早鳴る鼓動に、朱音はぎゅっと拳を握って平静を装う。
まだここでクリストフに全てを話してしまう訳にはいかない、なぜかそう思った。
「・・・というのが実際のところわたしの疑問です。ですが、以前話したようにわたしは決してその答えを無理には聞き出そうとは思いません。貴方が自分探しの旅を続けて答えを見つけるというのならば、わたしは決して貴方を裏切ることをしないと約束しましょう」
朱音は驚きに満ちた顔でクリストフの彫りの深い目を見つめた。
そこへルイが疑り深い声で水を差す。
「クリストフ、貴方こそなぜそうまでして陛下に関わろうとするん

です？　僕は、それが不思議でなりません」
　ふっと困ったように微笑むと、クリストフはルイに視線をやった。
「さて・・・。実のところ、わたし自身もそれが不思議なんです。おそらく、直感で感じたんでしょう。わたしとクロウ陛下は同じ匂いがする・・・、と」
　机の上に乗せられたクイックルは翼をバサバサと鳴らして、クリストフを呼んでいるようだ。
「クリストフとクロウ陛下が同じ・・・？」
　ルイは意味深なクリストフの言葉に顔を顰める。
「ルイ、君は先程わたしに何者かと尋ねましたね？　でも今はお話できません。しかしいつかその全てをお二人に明かす時がくるでしょう。その時まで、例え何があろうとわたしを信じていただけないでしょうか？」
　なかなかクリストフが来てくれないのに、クイックルは少しばかり不機嫌に羽をバタつかせている。
「冗談でしょう？　どこからどう見ても不審な点ばかりの貴方を一体どう信じろと・・・」
「わかった。わたし、クリストフさんを信じるよ」
　ルイの言葉を遮るようにして、朱音が決意を固めた声で言った。
　信じられないというように、ルイは朱音の曇りの無い横顔を振り返る。
「ありがとう」
　にこりと微笑むと、クリストフは羽をばたつかせるクイックルに手を伸ばした。クイックルは大人しくその手にちょこんと乗ると、ぱちくりと数回瞬きをした。
「待たせて悪かったね」
　白鳩に優しく言葉を掛けると、クリストフは客室の扉へと向かった。いつものごとく、クイックルから偵察の情報を受け取りにいくのだ。
　一体この言葉を話せない鳩からどうやって情報を得るのかは謎だ

ったが、クリストフは決してその際に朱音やルイを立ち合わせようとはしなかった。

「そうだ、言い忘れていたけれど、この部屋からは無闇に出ないこと。いくら変装しているとは言え、アカネさんの神がかった美しさは目立ちすぎる。半月程退屈すると思いますが、辛抱してください」

部屋から出しなにクリストフは好奇心旺盛な朱音に釘を刺しておいた。放って置くと、あちこち船中を歩き回り兼ねない。

「わかってるってば」

口を尖らせながら、朱音は締め付ける息苦しいドレスの胸を擦った。

ルイ自身クリストフという男を信用することに抵抗はあるが、この男が確かに朱音の性質をよく理解してることだけは認めた。

「それと・・・。友の手助けをするのに理由なんて必要なんでしょうか？　わたしは、ここにいるのは“クロウ陛下”ではなく、“アカネさん”だと認識していますが・・・」

パタリと閉じられたドアの手前でポツリと残された、美しいドレスに身を包んだ朱音。そしてその従者ルイは、目を見合わせたましばし静止していた。

二人は直感的に、やはりあの男は何か勘付いているのでは、っとそう思ったのである。

揺れる船内。

積荷を入れた船室に一人、フェルデンは静かに佇んでいた。

出航してから最初の夜がきていた。比較的に波は安定し、揺れも左程酷くはない。

蝋燭の火を頼りに、フェルデンは木箱にそっと手を触れた。

「こんな薄暗いところに居させてすまない・・・」

木箱にはぐるぐると頑丈に縄が巻きつけられていて、簡単には解

けそうにない。その中身は、あの美しく彫刻された黒い棺であった。そしてその中には、未だ温かみの残る少女が眠っている。

フェルデンは暫く木箱の淵を指で触れた後、その一室から出た。部屋の外は船の甲板で、小波の音が聞こえる。天気も良く、今晩は二つの月も大きくくっきりと群青の空に浮かび上がっていた。

「それほどまでに愛しいか」

フェルデンは溜息を漏らした。マストの脇で背をもたせて座るその人物が、ユリウスであることをこんなにも切に願ったことはない。

「なんのことだ」

蝋燭を吹き消すと、フェルデンは諦めて男に視線をやった。

「またあの人間の小娘の屍に会いに行っていたのだろう」

風に棚引く碧い髪は隠し隔てもなく、月明かりの下で異様な輝きを放っていた。

フェルデンは自分が意識を無くした後、この男とユリウスの間に何かがあったことに勘付いていた。以前は縄で拘束されていたアザエルの手首は、今は縄が外されており、腰元には剣の鞘が収まっている。ユリウスは警戒しているのか、この男とは一定の距離を置き、フェルデンでさえこの男に接触することをさせないように神経を尖らせているようであった。その癖アザエルは当然のことのようにフェルデンとユリウスの帰路に同行し、ついて来ている。理由を尋ねてもユリウスは珍しく口を割らないし、フェルデン自身考えあぐねていたのだ。

「お前には関係無い」

フェルデンはきっと男を睨みつけると、言葉を撥ね付けた。

「まあ、そうだな。ヴォルティーユの坊やがどこぞの屍に執着していようが、わたしには全く関係の無いこと」

フェルデンは腸（はらわた）が煮えくり返るような思いがした。手元に確かにあった可憐な少女の温もりや、確かに存在した幸せな一時は、ここにいる碧髪碧眼の男アザエルの手により掠め取られ、永遠に失われてしまったのだった。

フェルデンは剣を鞘から抜き去りながら、つかつかと男の元に歩み寄り、その首に切っ先を宛がった。　そんな状況にも関わらず、変わらぬ無表情のまま、アザエルはじっと動かず帯刀した剣を抜く気配は微塵も感じられない。

「アザエル、おれが気を失っている間に一体何があった。貴様、ユリウスに何かしたのか！？」

その返答によれば、フェルデンは剣の切っ先をアザエルの首深く突き刺してしまいそうだった。

「おや、サンタシの王子はお気楽なものだな。まだ気付いていなかったのか」

「なんだと！？」

気のせいか、月明かりで照らされたアザエルの表情にはほんの僅かに疲労の色が見えた。

「このところ毎夜魔城からの刺客が訪れている。言っておくが、これはクロウ陛下のご命令ではない、元老院どもの差し金だ」

驚きでフェルデンは思わず剣を床に置き、アザエルの肩に掴みかかった。

「どういうことだ！？」

アザエルは疎ましいものでも見るかのように、フェルデンの手を払いのけようとした。

「わたしの存在がサンタシ側に渡ることを恐れてのことだろう。安心しろ、わたしから離れていればお前達に危害が及ぶことはない」

フェルデンは脱力した。

ユリウスがアザエルから距離を置き始めたのはいざこざに巻き込まれまいとした理由からだと悟ったのだ。

しかしアザエルはもう一つの事実を話そうとはしなかった。

クロウ王が城を抜け出し、フェルデンを追ってきたことを。そして、それを阻止する為にアザエルがユリウスを手に掛けようとしたことを。

明かしてしまえば、それでなくとも不安定なフェルデンの心を

掻き乱し、たちまちこの青年の冷静さを断ち切ってしまうだろうことは安易に予想できた。

フェルデンは朱音を奪ったアザエルをひどく憎んでいた。しかし、それと同じく朱音の命と引き換えに覚醒したクロウをも憎んでいた。まだ記憶と力の戻らないクロウ王は強がってはいても、自らを守る術を知らない。ましてや、今のクロウ王は朱音の記憶のみで動いている。

フェルデンが自らを殺そうとするならば、クロウ王は喜んで慕う者の為にその命を差し出すだろう。

ユリウスとアザエルはあの夜以来一度も言葉を交わしてはいないが、ユリウスも恐らくは同じことを案じ、敢えてフェルデンにその事実を伏せているようであった。

「船の上は陸地と違い逃げ場はない。念の為忠告しておくが、ここでは安心して眠ろうなどと考えない方がいい」

掴んでいたアザエルの肩から手を離し立ち上がると、フェルデンはじっと目を細めて碧髪の男を見下ろした。

このところ碌に睡眠をとっていないのだろう、アザエルの眼の下はうっすらと黒ずんでいた。

「いっそのこと、今ここで私を殺してしまうというのはどうだ？そうすれば厄介事を片付けることもできる」

皮肉を込めた笑みを口元に浮かべ、アザエルは麗しい長い髪を掻き揚げた。

「罪人を手にかけて自分の手を汚したくは無い。それに、俺はヴィクトル陛下を裏切るような真似はしない。そう思うならば自分で自分の首を掻っ切ったらどうだ？」

踵を返すと、フェルデンは剣を鞘に納めその場を後にした。

「・・・はっ・・・、このわたしが自ら殺られてやると申し出ているというのに。もうこんな好機は二度と巡っては来ぬかもしれんぞ。後悔するな、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ」

7話　暗闇の中で

「いいですか、これから話すことは決して穏やかではありませんよ」
そう言ってから話し始めたクリストフの言葉は、思ったよりも朱音に大きな衝撃を与えなかった。
「クロウ王が魔城を抜け出したことにより、確かに城内に混乱が生じています。しかし、その事実は一部の者にしか知らされておらず、王は無期限の瞑想に入ったと誤魔化されているそうです。しかし、クロウ王不在をあくまで隠し通そうという考えの元老院の弱みに付け込み、現在ゴーディアを取り仕切っているのは実際のところヘロルド・ケルフェンシュタイナーと。名ばかりだったヘロルド・ケルフェンシュタイナーの地位と元老院の地位は逆転し、あの男は次々と法令を自分の有利なものへと変えようと目論んでいるようです」
このことを予想していなかったと言えば嘘になる。
しかし、まさかあのヘロルドがこんなにも短期間で王に取って代わるなどと考えが及んでいなかった。自分が無断で城を抜け出したことにより、他の人達に迷惑がかかっていることや、国を危険に晒していることを思うと多少なりとも申し訳ない気持ちは起こった。
かと言って、自分が何者かもわからないまま、大国を背負える度胸も諦めも、今の朱音には無かった。
クロウの身体には戸惑うこともあるが、随分慣れてはきている。以前のように違和感を覚えることはなくなった。
しかし、戻ると言われたクロウの嘗ての記憶は、一向に戻る気配は無く、それと同様、肉体に眠る筈の魔力さえ微塵も感じたことはない。
正直なところ、このままずっと中身が朱音のまま時が過ぎていくのではないかという不安も拭い去れなかった。それに、勿論のこと元の世界に戻りたいという願いは捨てた訳では無かった。目を閉じ

ると、今までのことが全て悪い夢で、目が覚めるとただの中学生だった朱音の日常が訪れるんじゃないかという淡い幻想を抱くこともしばしば。

しかし、二度目にアザエルにこのレイシアに連れ去られてきた際鏡の洞窟で感じた、ブツリと元の世界と切り離されたような感覚は今でも妙にリアルに朱音の記憶の中に蘇る。時折思い出しては不安と焦燥に駆られて胸が張り裂けそうになる為、なるたけ考えないようにしていた。

あれこれと思いを巡らすうちに、夜がすっかり更け、深夜にベッドを抜け出すという日がこのところ毎晩のように続いている。

リーベル号に乗船してからというもの、もう一週間という日が経過していた。

この船唯一の客室で寝泊りしている朱音達だったが、片時も離れようとはしないルイとは違い、なぜかクリストフは時折二人の前からふと姿を消すことがあった。

この晩もクリストフの簡易ベッドは蛻(もぬけ)の殻で、となりのベッドですやすやと寝息を立てているルイはそのことに気付いてはいないようだった。

“あちこち船内を歩き回らないように”

っと、きつく釘を刺されていた朱音だったが、こうも目が冴えてしまうと、なかなか寝付けないもの。決まって目が覚めたときにベッドを空にしているクリストフの不在をいいことに、甲板に出て夜風に当たる、というのが密かな習慣になりつつあった。

ルイを起こさないようにこっそり抜け出した客室。薄手の寝具はクリストフが調達してきた洒落たデザインのネグリジェだ。

海の上は風が冷たく、朱音は薄紅色のガウンを着込むと、甲板の船尾に立って、じっと暗い海の景色を眺めた。

海は嫌いじゃなかった。元の世界でも、何度となく夏には海を訪れ、南国でのシュノーケリングに憧れたりしていたものだ。志望校に合格したら、親友達と晴れて卒業旅行で沖縄に行く計画まで立て

ていた。
それがどうだ、もうこの世界に来てからどれくらい日が過ぎただろうか。
今頃、受験日が数日に迫っているかもしれない。いや、ひょっとしてもう過ぎてしまったかも・・・。
そんなことを考えながら、朱音は冷えた身体でぶるっと一つ身震いすると、ふるふるとそんな考えを振り切った。
『バタン』
扉の閉まる音が聞こえ、朱音はそっと物影から覗き見た。
長身の身体。ふわりとした金の髪は夜の船上でもすぐに誰のものかはわかった。
（フェルデン・・・！）
また会えた、という喜びで思わず朱音は口を両の手で覆った。
ボウレドで最後に見た彼の姿は、フレゴリーの診療所内の寝台の上で、熱に浮かされ苦しんでいるものだった。傷の状態は素人の朱音から見ても相当に悪いということはすぐに分かった。そして、そんな彼を見ていると、このままこの青年がいなくなってしまうのでは、というとてつもない恐怖を感じた。そして朱音の抜け殻を目にしてしまったフェルデン自身は、きっと同じような思いを抱き、絶望したに違いない。
鏡の洞窟で彼を裏切り、見捨て、こういう結果を招いたのは紛れも無い朱音自身だということを、あの夜は身を持って思い知らされた。
しかし、こうして離れた場所からでも、彼の健在な様子を拝み見ることができることが何より幸せなことと思えた。まだ完治したという訳ではなさそうだが、とりあえずこうして当初の目的通り彼がサンタシへと帰国するのを見守ることのできる現状に、朱音は深く感謝した。
ふっと口元を緩ませると、朱音は身体が冷え切ってしまう前にと客室へと戻る。

（いつもあの部屋で何してるんだろ・・・）
フェルデンを見かけた最初の晩は驚きと興奮で何も考えてはいなかったが、毎夜、同じ時間帯にあの部屋から出てくるフェルデンの姿を見るうちに、朱音にある疑問が浮かび上がってきた。
見たところ、物置き部屋のようにも思えるあの部屋で、フェルデンは一体何をしているのだろうか、ということばかりが気になり始めたのだ。気になって確認してみたい気はあるものの、日中はクリストフが部屋から出ることを許してはくれないだろう。
（なら、夜にこっそり行っちゃえばいいんだ！）
クリストフはきっと朱音のこういったところを恐れていたのだろう。

次の晩、朱音は連日のように深夜に起き出し、こっそりと例の部屋に潜り込んでいた。暗闇の中、じっと息を潜めフェルデンが現れるのを待つ。
「時化込んできやがった。こりゃ、一雨くるぞ」
今晩はいつもよりも波が高く、星は雲で一つも見えてはいない。
アルノは経験からあと半刻もしないうちに海が荒れ始めることを予想し、船乗り達を叩き起こして配置につかせた。被害を最小限に抑える為、マストは畳み、揺れに備えて放り出されそうな物という物に縄を結びつけていった。
少々騒がしい甲板の様子に異変を感じながらも、一室から出るに出られなくなった朱音は戸惑いながらもじっと息を潜めて待つことしかできなかった。
「ルイ！　朱音さんはどこです！？」
客室に戻ったクリストフは、いつもならそこにある筈の朱音の姿がベッドにないことにすぐさま気付いた。
「ううん・・・、どうしたんですか・・・？」

眠気眼でルイがむくりとベッドから身体を起こす。
従者の少年は、まだ事態の深刻さを全く理解できていなかった。
「“どうしたんですか？”じゃありません！　朱音さんはどこへ行ったんですか？」
クリストフに肩を揺すられて、ルイはガバリと飛び起きた。
「え！？」
抜け殻となっている主のベッドを目にするなり、ルイは裸足の足で部屋を飛び出した。
しかし不可抗力な力がルイの身体にかかり、少年は跪（ひざまず）くように床へとよろめき、倒れた。
「！？」
理解できない出来事に、ルイはクリストフを仰ぎ見る。
「嵐ですよ。それも、アルノによると、稀に見る大嵐だそうです」
ルイは差し出された手を掴むと、床に叩きつけられるような圧力に耐えながら、なんとか立ち上がった。
クリストフの表情はいつになく固い。
ルイ自身、何か物にでも掴まっていなければ、歩くどころか立っているのも危うい。
「どうしましょう・・・！　また僕は同じ失敗を・・・」
悔しそうに唇を噛み締める従者の少年の肩に手を触れると、クリストフは小さく首を横に振った。
「それよりも、今は朱音さんを捜すことが先決です。それに、何も君だけのミスではないです。朱音さんから離れたわたしにも非はあります」
夜な夜な二人の眠る客室から抜け出していたクリストフに気付くことのできなかったルイは、更に自らを恥じ入った。
しかし、今は反省や後悔をしている場合ではない。この揺れだ、華奢な少年の姿の朱音が一人で出歩いていたならば、船外へと放り出されてしまってもおかしくはない。ましてや、今はなんの魔力も持ち合わせていないのである。刻一刻を争う事態である。

二人は壁を伝うようにして、なんとか揺れに立ち向かい、船を捜索し始めた。船内はほとんどの人員が外に出払ってしまっていて、人気は少ない。

「どうしました!?　危険だから部屋に戻っていてください!!」

すれ違い様に船乗りの一人がクリストフとルイに声を掛けた。

「連れを捜しているんです。見ませんでしたか?」

男は息を切らし、両手に持ったバケツを担ぎなおした。

「噂の美人の子ですか?　さて、中では見てませんけど・・・」

申し訳無さそうに頭をペコリと下げると、男は船外へと飛び出して行った。

「船内に残っていないとなると・・・、考えたくは無いですが外にいるとしか・・・」

クリストフは頭痛でもするかのように、眉間を人差し指でグリグリと押さえる仕草をした。

「そんな・・・!」

真っ青になって、ルイがへたりとその場に座り込んだ。

「まだ諦めるには早いですよ。アカネさんはわたしの見込んだところ、なかなか骨のある方です、きっと無事でいる筈です」

クリストフの励ましに、ルイはもう一度足を踏ん張って立ち上がった。

「いいですか、甲板に出たらとりあえず、何か固定できるものにこの縄を結びつけるんです」

クリストフはルイの腰に数回縄を巻き付けると、もう片方の端を本人に手渡した。

「分かりました。でも・・・、あなたはどうするんです?」

命綱となるだろう縄は一人分しか見当たらず、クリストフは何もつけずに船外に出るつもりらしい。

「私は無くてもきっと何とかなりますよ」

ルイが止める間もなく、クリストフは甲板へ出る為の扉を勢いよく開いた。

途端、凄まじい風とバケツの水を頭からひっくり返したような雨が吹き込んできた。
「うあっ・・・っぷ」
開け放たれた扉は船が揺れる旅ギイギイと音を立てている。そこにはもう、クリストフの姿は見当たらなかった。
思い切って扉から這い出るようにして外へ出ると、甲板はまるで地獄絵図だった。
周囲の海はいつものように青く穏やかなものではなく、黒く高い波がほとんど船を寝かせてしまう程にリーベル号を目茶苦茶に揺さ振っていた。船を通り過ぎた波の水しぶきが、甲板の上を増水した川のごとく流れ交っている。
立派な商船リーベル号はもとは戦闘用の船で頑丈に設計されている筈だったが、今は荒れた真っ黒な海の上に漂うただの小舟でしかなかった。
荒れ狂う波の音達に混じって、ギシギシと軋みを伝える船の音、そして懸命に転覆させまいと海に挑む船乗り達の声が僅かに聞こえる。
「無理だ・・・、こんなの、歩くことさえままならないよ・・・！ほんとにこんな中に陛下は・・・」
ふと過ぎったとんでもない考えを、ルイはふるふると首を振るって断ち切った。
（僕は一体何考えてるんだ・・・！　陛下は、こんな僕を側近と言ってくれたんだ。陛下の危機を僕が救えなくてどうする・・・！僕は陛下にずっとついていくと約束したんだ！）
ぎゅっと目を閉じ決心を固め、ルイは持っていた縄をマストにしっかりと結びつけ、何度も転がりながら朱音の姿を探し始めた。
（陛下・・・！　待っていてください！　すぐに参りますから・・・！）

”海の天気は変わりやすい”
昔そんなことを祖父から聞いたような気がする。
母方の祖父は、マグロ漁に命を懸ける生粋の漁師だった。
「お爺ちゃんは海の男だから、潮の流れや海の天候予報のプロなのよ」
母はマグロ漁船で漁を続ける祖父のことを誇りに思っていた。
そして孫である朱音も・・・。
今頃になって、朱音はそんな事を思い出してひどく後悔していた。
船の揺れがきつくなったと気付いたときには既にもう手遅れだった。波はあっとう間に高くなり、直ぐに立っていることさえ難しくなった。真っ暗闇の船室には船外からの海水が流れ込み、床中水浸しである。それに、軽い積荷や樽は揺れで転がったり、倒れたり、はたまた床上の海水を浮かんでは激しく揺さぶられていた。
更に悪いことに、今晩も予想通り、フェルデンはこの部屋へとやって来てしまっていたのだった。
甲板が騒がしくなり、出るに出られなくなってしまった朱音が荷の影に座ってじっと息を潜めて待っていたところ、フェルデンが通例通り蝋燭を片手に部屋へと入ってきたのだ。
彼に見つからないように、と身を小さくして蹲(うずくま)っていたのだが、間髪入れずに船が突然大きく揺さぶられ始めたのだ。当然のことながら、不意を食らった朱音自身も船室の壁に叩きつけられる格好になり、積荷の多くは崩れ、樽は床面をごろごろと勢いよく転がった。
「あっ！」
朱音は咄嗟に出てしまった声を止めることはできなかった。
「・・・誰かいるのか・・・？」
この揺れで、フェルデンは蝋燭を落としてしまったようで部屋には再び暗闇が訪れた。
しかし、ひどい揺れはおさまることはなく、一層強さを増している。
はっとして口を紡ぐが、フェルデンは暗闇の中に潜む誰かの存在

に気付いていた。
「なぜ返事をしない・・・？　誰だ！？」
心の内で祖父の言っていたことを思い出し、こういう状況になってしまったことへの後悔を繰り替えしながら、無言でじっと揺れに堪えた。
（ああ、私のバカバカ！　なんでお爺ちゃんの言ってたことをもっと早くに思い出さなかったの！？　っていうか、そもそも、なんでフェルデンがここに来る理由を知りたいなんて思ったりしたの！？）
しかし、朱音はもっと肝心なことに気付かなかった。この部屋には多くの荷が積まれていることを。いくらバランス良く積まれた荷でも、これ程の揺れではあまり意味を成していないことも。
「！！！」
とびきりの大きな揺れが起きた。
一瞬船が海面を離れ、宙を舞ったような浮遊感に見舞われたその直後、バラバラと詰まれた荷が朱音目がけて崩れ落ちてきたのだ。身動きのとれない朱音はただ身を固くして衝撃に備えることしかできなかった。
しかし、訪れる筈の衝撃はいつまで経っても訪れなかった。
ただ、荷が床面に崩れた音が聞こえただけ。
今尚シーソーのように揺れる床面の上で、朱音はじっと暗闇の中で目を凝らした。
朱音は驚きで息を吸うのも忘れてしまった。仰向けに倒れた自分の身体の上に、フェルデンが覆いかぶさるようにして手をついていたのだ。
暗闇の中でも、フェルデンの金の髪は見えた。短かった髪が少し伸びたようだ。
「っつ・・・、大丈夫か・・・？」
朱音を庇った際にどこか怪我をしたのかもしれない。フェルデンは少し呻いた後、静かに呟いた。
今にも彼の心臓の音が聞こえてきそうな距離に、朱音はぎゅっと

目を閉じた。本当は“大丈夫”と彼に直接言葉で伝えたかった。でも、まだ正体を悟られる訳にはいかない。

「おい・・・？　どこの誰だか知らないが、なぜ何も話さない？　ひょっとして、どこか怪我をしているのか？」

こんなにも近くにいるというのに、暗闇は今の朱音の姿を全て覆い隠してくれている。フェルデンはまだ暗闇に目が完全に慣れていないせいもあって、真下にいるのがクロウ王だとは気付いていないようだ。

（お願い・・・！　気付かないで・・・！）

朱音はとにかく祈った。彼がクロウに気付きませんように、と。

「・・・ネか・・・？」

ギシギシと軋む音の中で、何かをぼそりと呟いた。

「アカネなのか・・・！？」

朱音は我耳を疑った。まさか、フェルデンが自分の存在に気付くとは思ってもいなかった。

「チチルの香油の香り・・・、間違いない！　あれはおれがエメに特別に作らせた唯一の品だ！　そしてそれを身につけているのはアカネ唯一人・・・」

確信へと変わったフェルデンの声に怯え、朱音は持てる力の全てを使って青年の身体を押し退けた。

こんな姿へと変貌してしまった朱音の存在に気付かれる訳にはいかなかった。これ以上接触すると、いくらこの暗闇でも、朱音の正体を長くは隠し通せない。

「アカネ、なぜ逃げる？」

驚きと戸惑いを含むフェルデンの優しい声に、朱音は胸が熱くなるのを覚えた。

（私の今の姿を知ってしまったら、貴方は朱音を嫌いになってしまうかもしれない・・・）

クロウは憎しみの対象となってはいても、せめて記憶の中の朱音だけは愛されていたい、それが朱音に残された唯一つの願いだった。

「答えてくれ・・・、無事だったのか？　それとも、今ここにいる君は魂か幻想か何かなのか・・・？」

朱音はただ沈黙を守り続ける他無かった。その質問に、朱音自身がまだ答えを見つけ出していなかったからである。

（私は、一体何なんだろう・・・？　フェルデンの言うように、魂だけの存在・・・？　それとも、クロウが創り出したただの幻想・・・？）

無意識に身体が震えていることに朱音は気付いていなかった。そしてそれは、浸水してきた海水の冷たさから引き起こされたものではなく、心理的なところからきた震えだった。

「アカネさんっ！」

突如開け放たれた扉から多量の海水と雨が吹き込んできた。船外もほとんど室内と変わらぬ程の暗闇だったが、扉の前に立つ人物が誰なのか、朱音にはすぐにわかった。

（クリストフさん・・・！！）

それは、どんなピンチにもいつも駆け付けてくれる、クリストフその人に他ならなかった。

暗闇でもわかるクリストフは、頭の先から靴の先まで、これ以上にない程ぐっしょりと濡れていた。

「今、アカネと言ったか！？」

フェルデンは壁に手をつくと、よろめきながら扉から現れた新たな人物に問い掛けた。

「やはり、ここに居るのはアカネなんだな！？」

クリストフは瞬時にこの暗闇の中で何があったのかを読み取ると、部屋の隅で蹲る朱音の影に、船のひどい揺れをまるで感じさせない程素早く　駆け寄った。

「さ、アカネさん、私達の部屋に戻りましょう。ここは危険です・・・。ほら、私に掴まって・・・」

朱音の肩に触れた途端、クリストフはぴくりと手を止めた。

「アカネさん、貴女、震えて・・・？」

力の入らない朱音の腕を抱えると、クリストフはぐっとその腕を自らの肩に回させ、なんとか立ち上がらせる。
「おい！　貴方は一体誰なんだ!?　それは俺の知っているアカネなのか!?」
フェルデンは二人の元に歩み寄っていく。
しかし、クリストフはそれを許さなかった。
「私はアカネさんの友人です。今はそれだけしか申し上げられない」
朱音を担いだまま、ゆっくりと部屋から脱出していくクリストフの背中に、フェルデンは強く問い掛けた。
「なぜだ！」
クリストフは小さく潰いた。
「それは、彼女が貴方に会いたいと願わないからです。貴方は悲しみのあまり、あまりに盲目になりすぎている。もっと心の目で物事を見てみてください。そうすれば・・・真実が自ずと見えてくる筈です」

二人が立ち去った後、フェルデンは揺れる船室で、しばらく頭を抱えて座り込んでいた。
またずきりと肩の傷が痛み始めた。さっき崩れた荷を身体で受け止めた際にまたぶつけたようだった。
「アカネ・・・、一体どういうことなんだ・・・」

8話　一欠片の記憶

「陸地を離れて一週間、このところ刺客が送られて来ないからって、ちょっと気を抜いてたんじゃねぇの？」

背後から若い男がぼそりと呟いた。

アザエルは男の気配に全く気付くことができなかった。

この激しい揺れと波や風の音が原因していることもるが、アザエル自身も疲れがピークに達していたということもある。それに、今は船内で行方不明となっている少年王の姿を探すことに意識をとられていたのだ。

揺れ動く船で背後から男がアザエルの背にただ体当たりしただけではなかった。

「間諜か・・・、うまくやったな」

男の手を伝い、赤く黒い血液が筋になって床へと零れ落ちていく。

「そりゃどうも」

アザエルの背に深く突き刺された短剣は、男の手により乱暴に引き抜かれた。

アザエルが腰の剣を鞘から引き抜いたと同時、男はひょいと身軽に背後へと飛び退いた。

「そんだけの傷を負っておいて、まだ動けるとはな！　そりゃあ今まで送り込んだ下衆共じゃ到底敵わねえ訳だ」

男は、リーベル号の船長であるアルノの助手の青年だった。

「まさか船長の助手が間諜だなんて思いもしなかったろ？」

青年は常から被っている紐を編んだような風変わりな帽子を脱いだ。帽子の下からは無造作な深紅の髪が現れる。

「その髪・・・、ファウストか・・・！」

じっと目を細め、アザエルは青年をじっと見据えた。

「光栄だね、かの有名な魔王の側近様に名前を見知っていただけて

いたとは」
　くくくっと笑うと、ファウストはがくりと膝をついた碧髪の美しい男に向かって言った。
「これでも、俺は魔王ルシファーの右腕と謳われたあんたを尊敬してんだ。あんたを殺すって任務さえなけりゃ、ぜひとも魔力の戻ったあんたとやり合ってみたかったね」
　内臓のどこかが傷ついたらしい、アザエルはごふりと鮮血を口から数回吐き出した。
「止めをさすまでも無さそうだな。じゃ、あばよ」
　褐色の肌の少年は再び帽子を被り直すと、深紅の髪を外界から全て覆い隠してしまった。
　激しく揺れ続ける船の中で、ファウストは軽い足取りでアザエルに背を向け、船外へと駆け出した。
「あ！　言い忘れてたけど、あんた、面白いもん連れて来てくれたよな。まさか同じ船にあのクロウ王が乗船してるなんてな！　それに、いつも近くにいるあの風使い・・・。しばらくは退屈しなくて済みそうだぜ。礼を言うよ」
　アザエルは口から垂れ流した血液を服の袖で拭うと、ゆっくりと立ち上がった。その頃には、既にファウストの姿は無かったが、まるで暇つぶしのおもちゃでも見つけたようなファウストの口振りが、妙にアザエルの胸に引っ掛かった。
　魔王ルシファーの命通りに朱音をレイシアへ召還し、クロウを覚醒させ王位を継がせることを全うしたことで、自分の役目は全て完了した筈だった。
　そしてそれにより、自分の存在価値は既にもう無いとも。
　しかし、アザエルが考える程クロウ王は思うように動いてはくれなかった。クロウ王は魔力も記憶も失いひどく混乱し、国王としての責務を果たそうとしないどころか魔城からさえも逃げ出してきてしまった。
　そして、その今や非力で儚く尊い魂は、多くの危険に晒されてい

る。

（本当に、貴方という人は・・・）

そうなるとアザエルは、まだここでくたばる訳にはいかなかった。あの男、“ファウスト”をクロウ王の近くにのさばらせておくにはあまりに危険すぎる。

しかしこの傷だと、そう長くはないことも経験からアザエルは察していた。

長い年月をかけて、アザエルが手に掛けてきた人々の多くの傷を目にしてきたからである。最後までクロウを守りきることはできそうにはないが、せめて命が尽き切る前に、クロウを今ある危機から救い出す必要があった。

痛みを感じない訳では無かったが、アザエルはいつもと変わらぬ冷淡な表情のまま少年王の姿を探し続ける。

アザエルの歩いた場所には点々と赤い血の道筋ができていった。

この嵐がこの船にもたらしているダメージは甚大で、あちこちがひどく軋み、不気味な音を船内に響かせていた。しかし、リーベル号はなんとか転覆することなく持ちこたえている。それは、この船の船長であるアルノの的確な指示の賜物だとも言えるし、船乗り達の果敢な働きによるものだとも言えた。

「ルイ！」

マストの柱に縄を縛りつけ、その縄を頼りに危険な船外に朱音を捜す為だけに来てくれていたらしい。朱音はずぶ濡れになった従者の少年を見るなり、こんな危険な目に遭わせてしまったことへの申し訳無さで涙が出そうになった。

「ルイ！　今からアカネさんをそちらに渡します！　しっかり腕を掴んでください！」

クリストフが自らの首に回させていた朱音の腕をゆっくりと外すと、その身体を身長にルイの元へと引き渡そうとした。

しかし、常にシーソーのように揺れる床では、滑り台のように傾

いた側に二人の身体が流されてしまい、うまくルイの手に引き渡せない。
甲板に流れ込む海水は容赦なくクリストフや朱音にぶつかり、体力を消耗させていく。
「うあああああ！！！」
すぐ傍で、船乗りの一人が水流に飲まれて海へと流されていくのが視界に入った。
「ニックが流されたぞ！　ダメだ、もう助けられない！」
他の船乗りの声が聞こえる。
ニックという船乗りは、まだ生きていた。
しかし、あっという間に彼の姿は黒い海の波間に消えてしまった。
朱音は急に恐ろしくなり、クリストフの腕にきつくしがみ付いた。
「大丈夫、アカネさんをあんな目には遭わせませんよ。ですからわたしを信じてください、ね？」
自分さえ今にも海水に飲まれそうになっているというのに、クリストフはそっと朱音の耳元で優しく囁いた。
「いいですか、手を伸ばしてルイの手を取るんです」
船が再び逆の方向へと大きく傾いた。
船が逆方向に傾くその途中、水平になる瞬間が一度だけある。ルイの手を掴むならばその一瞬を狙うしかない。
クリストフは、船に縛り付けてある荷の縄の端を自らの腕に巻きつけ、かろうじて甲板に留まっていた。船が傾く度、縄はクリストフの手首に強く喰い込んでいた。
「ごめんね、クリストフさん・・・！　痛いでしょ？」
クリストフは、いいえと呟くと、小さくウィンクして見せた。
「さ、また船が傾きますよ。わたしが合図したらわたしから手を離してルイの手に！」
ミシミシっと軋みながら船が逆方向へと傾き始めた。
「さ、準備してください」
朱音はこくりと頷き、クリストフから手を離す準備をする。

「今です！！」
ぐいと背中を押された瞬間、朱音は思い切って踏み切り、ルイの手をがっしりと掴んだ。
「陛下！」
ルイはしっかりと両の手で朱音の腕を掴み、ぐいとマストの辺りへと引き上げてくれた。
しかし、安心するにはまだ早い。
クリストフはまだ今にも海に飲まれかけている。彼を船の甲板に繋ぎ留めているのは、手首に巻きつけた縄だけだ。彼の表情が相当辛いことを物語っている。容赦なく打ち寄せる波と海水で、クリストフはひどく疲労していた。
「クリストフ！　貴方、風で安全な場所まで移動するとか、何か方法はないんですか！？」
ルイは、クリストフに向けて叫んだ。
しかし、クリストフから返ってきた返事は絶望的なものだった。
「馬鹿を言わないでください。こんな場所で風を起こしてみてください、船長の腕でなんとか浮き続けているこの船は、あっけなく転覆するでしょうね」
呆れたことに、クリストフはこんな時でさえ可笑しそうに微笑んでいた。
「何を悠長にしているんです！？　なんでもいいですから、とにかくなんとかしてこっちに来てください！」
じっと微笑んだままクリストフはルイと朱音を見つめて言った。
「いいえ、先にお二人は船内へ戻っていてください。わたしは必ず後から戻りますから」
朱音ははっとして叫んだ。
「ダメだよ！　クリストフさん、貴方を置いていけない！」
「いいえ、早く船内に戻ってください。早く！」
今まで微笑みさえ見せていたクリストフは、なぜか急に焦って二人を追い立てるようにして言った。

次の瞬間、朱音はクリストフが一体何を言いたかったのかを瞬時に悟った。

『ミシミシミシッ』

二人の命綱でもある縄を括り付けてあるマストが大きな音を立てて軋み始めたのだ。

「マストがもう持ちません！　巻き込まれる前に早く縄を切り離して、船内へ！」

ルイは懐から果物用のナイフを取り出すと、縄を切り離しにかかる。

「ルイ、待って？　このままだと、倒れたマストがクリストフさんを直撃してしまうかもしれない！」

朱音の気持ちは百も承知していたが、ルイには我主を危機から救い出す為にはこの言葉は聞こえない振りをするしかなかった。

『ミシ・・・ミシミシ・・・』

マストがゆっくりと傾き始める。

傾いた先にはクリストフがまだ辛うじて手首に巻き付けた縄で船上に留まっていた。

「マストが倒れるぞー！！」

どこかで船乗りが叫んでいる。

「ルイ！　クリストフさんが・・・！　ルイ！」

悲痛な朱音の声を無視して、ルイは縄をナイフで完全に切り離した。

途端、マストはスピードをあげクリストフ目がけてぐしゃりと倒れこんでいった。

「うそっ！　うそでしょ、クリストフさん・・・！」

真っ青な顔で朱音はマストが倒れていく瞬間を見つめ続けた。

巨大な折れたマストの下敷きになっていたとしたら、クリストフは無事である筈がない。

折れたマストは、次に訪れた波に攫われ、黒い海へと流されていく。

「彼はきっと大丈夫です。陛下も知っているでしょ？　彼は風を操

れるんですから。陛下、彼が言ったように、船内へ戻りましょう」
ルイはわざと冷静を装い、パニックを起こしかけている朱音の腕を引いた。
命綱を失った自分達も、決していい状況とは言い難いことをよく理解していたからだ。
「ルイ、あれを見て！」
朱音が指さした先は流されゆくマストの残骸だった。しかし、その中に僅かだが人のようなものが上半身を乗り出すような形でしがみついているのが確認できた。
「クリストフさん！」
二人が気をとられている間に、船に大きな波が襲い掛かった。
「！！！」
命綱をなくした二人はあっという間に海水に飲まれ、気付いたときには船から投げ出されていた。
ルイとは逸れてしまった。酸素を得ようと必死に水面に上がろうとするも、次々と荒れた波が朱音に圧し掛かり、嫌という程塩辛い水を飲んでしまう。
焦ってもがくけれど、余計に体力を消耗するだけで、朱音の意識は次第に薄れていった。

「母上は、僕のこと嫌いなのかな？」
見覚えのある庭。
黒調の石壁から透明な水が流れ出し、美しく彫り飾られた石段の周りには赤い薔薇の園が広がっている。
五歳程の黒髪の幼い少年は、その石段の傍で蹲り、泣きべそをかいていた。
「まさかそんな・・・。お母上は殿下を愛していらっしゃいますよ」
少年の背後から、藍の軍服の男が声を掛けた。

「違うもん！　母上は僕のこと避けてるんだ・・・」
大きな黒い瞳は潤み、涙を目いっぱいに溜めて少年は男を見上げた。
「殿下、そうではありません。お母上はご病気なのです」
見上げてみた男は美しい碧い髪と碧い目をしていた。
少年はわあっと大きな声を上げて男に駆け寄ると、男の腰にぎゅうと抱きついた。
「僕はこんなに淋しいのに・・・っ、僕はこんなに母上が好きなのに・・・！」
男はほんの少し悲しみを含ん、優しい笑みを浮かべ、少年の頭をぽんぽんと優しく撫でた。
「殿下の傍にはいつでもこのアザエルがおります」
少年はしゃくり上げながら大きな目でじっと男の顔を見つめた。
「アザエル、きっと傍にいてよ？　ずっとだよ、絶対絶対約束だよ？」
にこりと女性のように柔らかな笑みを溢すと、男は囁いた。
「ええ、約束です。殿下はきっといつかお父上のように偉大な王になられます。わたしは、どんな犠牲を払ってでも、必ず殿下をお守りします・・・」

ひどく遠い昔の夢のようだった。
いや、あれは遠い記憶・・・？
あの黒髪の少年は遠い昔のクロウ自身、クロウの記憶の断片なのかもしれなかった。
それに、あの碧い髪と碧い目、氷のように冷たいアザエルが、あんなにも優しく微笑むことができていたなんて今からは想像もできない。

しかし、あの夢はひどく懐かしい気がした。
「目をお覚まし下さい、クロウ陛下・・・」
「ごほっ・・・」
気管に入っていた海水を吐き出し、朱音は意識を取り戻した。
飲み物を飲むのに失敗して咽(むせ)たようなひどい苦しさと、そして多量に海水を飲んだことでのむかつきで朱音は胃物を吐き出した。ムラサキ色の朦朧とする視界の中で、唯一目に入ってきたのは、碧く長い髪。
「もう無茶はお止しくださいませ」
ようやくはっきりと見えてきたところで、朱音は自分が今どこにいるのかを知った。
そこは、船上でもなく、海上でもない、何もない岩の上。ごてごてと尖った岩の上で擦りむいたのか、手足はありこち擦り傷だらけだ。荒れた波のはまだおさまってはいないようで、空には暗雲が立ち込めたままだ。
周囲は海に囲まれ、何も見えない。流された朱音を目の前にいるアザエルが救出し、この岩場まで運んでくれたようであった。
「アザエル・・・」
朱音は混乱していた。
先程見た記憶の断片のアザエルが、クロウにとってひどく懐かしくそして安心できる存在だった気がした。クロウの記憶が自分のものなのか、それとも彼のものなのか、境目がはっきりとせず、まるで朱音自身がアザエルにそういった感情を抱いているようにも感じた。
朱音はぬるりとぬめった様な奇妙な手の平の感覚に違和感を覚え、何気なく手の平を見下ろした。
「な・・・に・・・？」
まだ夜が明けるまでには間があり、暗い中だったが、朱音はそれの正体が何かを瞬間的に察知した。
「血・・・？」
暗闇の中でも分かる程てらてらと朱音の手にべったりと付着した

血液は、朱音のものではないことは明らかだった。
はっとして朱音はアザエルの服を掴んで引き寄せる。
「どこか怪我してるの・・・！？」
掴んだ服自体が既に多量の血液が染み渡っていることに気付き、朱音は驚いてアザエルの顔をじっと見つめた。
「陛下、わたしはもう長くありません。陛下がわたしを憎んでおられるのは承知で言います。陛下、緋の眼の男が陛下を狙っています。奴に捕まる前にあの風使いとルイを連れて身をお隠し下さい・・・」
アザエルは意識が朦朧としているのか、座ったまま何度も後ろに倒れそうになるのを何とか耐え忍んでいるようだった。
「アザエル・・・？　貴方がそう簡単に死ぬ訳ないよ、そうでしょ？」
朱音はアザエルの服の袖をぎゅっと掴み、碧い眼を見据えた。
しかし、辛うじて開いている綺麗な碧い目は、見る間に輝きを失いつつあった。
「奴・・・は・・・、野蛮な賊です・・・。欲しい物を手に入れる為には・・・、ど・・・んな手でも使う・・・。クロウ陛下・・・、ご無事で・・・」
固い岩の上にトサリと横倒れになり、アザエルは動かなくなった。
「アザエル？　嘘・・・。約束したじゃない！　いつでもわたしの傍に居るって、貴方そう言った！！」
あれ程憎くて仕方無かった魔王の側近が、朱音の全てを奪ってしまったあの憎くて憎くて仕方の無かったアザエルが、居なくなるなんて清々する筈だったのに、なぜか朱音は流れ出でる涙の雫を止めることができなかった。
これがクロウの感情なのか、朱音の感情なのかはよくはわからないが、アザエルはどちらにしても今の朱音にとって、とても大きな存在だったのだ。
「一人にしないで！　アザエル！　戻って！」
「その人を助けたいですか？」

ふわりと岩の上に舞い降りた風とともに、落ち着いた声が降りてきた。
横たわるアザエルに縋り付く朱音のすぐ足元に、クリストフが立っていた。
「・・・クリストフさん・・・？」
困ったように微笑むと、クリストフは口を開いた。
「すみませんでした、すぐに助けに行けずに・・・。船から離れないことには、風を無闇に使うこともできませんでしたので。風と船は相性が悪いのですよ、ほら、強風は船を転覆させてしまうでしょう？」
肩を竦めてクリストフがふっとアザエルに視線を落とした。
「それよりも、今ならまだ彼を救う方法はあります」
朱音は無意識に立ち上がり、クリストフの腕を掴んでいた。
「本当！？　どうすればいいの？？」
クリストフは、朱音の目を見つめたまま言葉を続けた。
「彼の腕の手枷を外すのです。幸いここは水を操る彼が魔力を最大限生かせる場所。周囲を全て水に囲まれています。手枷さえ外せれば、後はなんとかなる筈です」
クリストフがなぜこんなことまで知っているのかという疑問はあったが、朱音は今は彼の言うことを信じることしかできなかった。
「わかった。でも、どうやって・・・？」
朱音は、アザエルの手首についた手枷の存在を確かめると、なんとか取り外せないものかと両手で引っ張ったり押したり躍起になる。
「その手枷は力で外すことはできません。その手枷を外すことができるのは、この世でただ一つ。魔王ルシファーの魔力のみ」
その言葉の意味を理解できず、朱音はクリストフの焦げ茶の瞳を振り返った。
「そして、今はその血を受け継ぐ貴方の魔力です」
朱音はふるふると首を横に振った。
「ダメだよ、わたしには魔力なんて無い！　手枷は外せない・・・

！」

絶望して、へたりと朱音はアザエルのすぐ傍で座り込むと、ぱたぱたと涙を溢した。

「アカネさん、貴女ならきっとできます。彼の鼓動が完全に止まってしまえば、それも叶わなくなってしまいます。自分の力を信じて・・・」

クリストフは静かに腰を下ろし、そっと朱音の手に自らの手を添えた。

朱音はぎゅっと瞳を閉じると、もう一度アザエルの手枷に触れる。

「さ、手の平に気持ちを集中させてください」

朱音は手枷に触れた手に意識を集中させるが、何も変化は起こらない。

見る間にアザエルの白い顔から血の気が引いていく。

「ダメだよ、やっぱりわたしにはできない」

閉じた目尻から涙を浮かべながら、朱音は手に賢明に力を込める。

「アカネさん、自分を疑っていてはいけませんよ。魔力は自然を味方につけることのできる力です。自分を疑っていては、自然の力が共鳴することはできません」

クリストフが静かに諭す。

「あなたは万物と共鳴することのできる程の魔力を秘めています。自分自身を信じてください」

朱音は手枷に触れていた手から全ての力を抜いた。

ふと朱音の頭に尊敬する父の道着姿の背中が横切った。

どんなに冬の寒い朝でも、父は道着一枚でよく道場の真ん中で座禅を組んでいたものだった。

真咲が一度、どうして父さんは毎日座禅を組むのか、と訊ねたことがあった。

その時、父はこう言った。

“本当の強さとは何も身体ばかり鍛えることじゃない。心を空にし

て、万物を心で感じる。空気と一体になることで本当の強さを得る”と。

（心を空にして、万物を心で感じる・・・。空気と一体に・・・）

強い悲しみに囚われていた朱音の心は、父の言葉をきっかけに冷静さを取り戻した。

ただの一度だって座禅など組んだことはなかったけれど、父が放っていたぴんと張り詰めた独特の空気は肌で覚えている。

そして今、やっと父の言おうとしていたことがわかるような気がした。

吹き付ける風の唸り。

波が岩をこする音。

雨粒の一粒一粒が海に落ち、風に当たり、飛ばされる音。

そして朱音自身の呼吸の音・・・。

その全てがまるで別録りしたように鮮明に耳に届いてくる。

心臓の刻むリズムが、大自然の中の一部と化したように心地よく響いてくる。

朱音は空気と一体になっていた。

急に冷え切っていた筈の身体の奥底から温かさが沸き起こり、えも言われぬ感動に朱音はゆっくりと瞼を開いた。

もう一度ゆっくりとアザエルの手枷に手をかざし、心で強く念じる。

『カッ』

固い手枷がいとも簡単にアザエルの手首から外れると、と音を立てて岩の上に転がった。

「は・・・外れた・・・」

安心した途端、今まで感じていた暖かかく心地よい感覚は急に消

え去り朱音はひどい眠気を覚えた。
不思議なことに、海の中からシャボンのような小さな水の玉がふわりと浮き上がり、アザエルの身体に次々に吸い込まれていく。
「手枷が外れたことで彼を守護する水の力が、彼の僅かな魔力に共鳴して引き合っているのです。後は回復を待つしかありません」
その声を聞きながら、朱音はそのままぱたりと意識を手放した。
その傾いた身体が岩に打ち付けられることのないように、予め構えていた腕の中にクリストフは朱音を受け止めた。
「さて、あなたの望み通り、自分探しのワンピースを手に入れることができたようですね・・・。はたして、最終的にあなたはどんな答えを見つけるんでしょうか・・・」
クリストフは寝息を立てる腕の中の朱音の額に小さく口付けを落とした。

9話　嵐の後で

嵐の去った夜明け、廃船のようにやつれてしまったリーベル号の船首に立ち、昨晩の荒れた海が嘘のように穏やかな海面に朝日が昇るのを、アルノは静かに見つめていた。

「アルノ」

一晩にしてすっかり窶れた様子の船長の隣に、フェルデンは背後から近付いた。

「フェルデン様、ご無事で何よりです」

そう言ったアルノの声はひどく掠れていた。

「ヴィクトル陛下がアルノを今回の任務に選抜した理由が今はよく分かる。船長、あなたの腕が無ければあの嵐を乗り切ることはできなかった」

昇る朝日を遠い目で見つめたままのアルノにフェルデンは言った。

それは、アルノに対する敬意と感謝を込めたつもりだったが、アルノはその言葉を快く思わなかったらしく、難しい顔をして小さく首を横に振った。

「いえ、それは違います。わたしは船長失格です。この航海を最後にして、わたしは海を去るつもりです」

「どうしてだ？　おれはそうは思わないぞ・・・？」

目を伏せり、アルノは悔しそうに穏やかな波間に視線を落とした。

「今までの人生で海から得たものは大きい。しかし、今回の航海で失ったものがあまりに多すぎる」

甲板には今はアルノとフェルデンの二人と、見張り台で番を務める船員を除いては誰も見当たらなかった。それというのも、昨晩の嵐に夜通し戦いを挑んでいたクルー達は、今朝方やっと身体を休める時間を得、皆眠りについたばかりだったからである。

「ビリーにニック、スコッチ・・・。ニックは先月婚約したばかり

だった・・・」
　呟くようなアルノの話に出た名前は、全て嵐の犠牲になった者達のものだった。
「その上エフまで・・・。あいつは将来有望な船乗りだった。まだ若いというのに、よく助手として働いてくれていた。なのに・・・」
　フェルデンは、じっとアルノの話に耳を傾け続けた。
「・・・それに・・・、ロジャー・・・」
　突然ピタリと口を噤んでしまったアルノの異変に気付き、フェルデンは波間から目を戻した。アルノの厚みのある丸い肩が、小刻みに震えている。
「アルノ・・・？」
　突然アルノはきつく握り締めた拳を手すりに数度叩きつけた。
「わたしは友人の先ある未来までも奪ってしまった・・・！」
　くうっと喉を鳴らしながら、アルノは手すりに項垂れるような格好で頭を抱え込んだ。
　フェルデンは震えるアルノの背に触れようとするが、はっとしてその手を止めた。
「そのロジャーという友人、細身でハットを被った紳士か・・・？」
　アルノが俯いたままこくりと一つ首肯した。
「その男、死んだのか・・・？」
　フェルデンはその大人の男に見覚えがあった。日中、何度か船で擦れ違ったことがあったのだ。
　船乗りにしてはあまりにきちんとした紳士的な服装で、いつも擦れ違い様に優雅にハットを外し礼儀正しく会釈をするものだから、彼が何者なのか少し気になっていたのだ。それに、その男と一緒に乗船しているという少女の噂もちらりと耳にはしていた。
「ロジャーが折れたマストの巻き沿いを食って、海へ流されるのを見た者がいるんです。あの波の高さです、おそらくは・・・」
　アルノは目を真っ赤に充血させて左の手の甲でごしごしと両の目を擦った。

「そうか・・・。今更だが、彼はどうしてこの船に・・・？」
昨晩、あの暗い船室に潜んでいた死んだ筈の朱音と思しき気配と、その朱音をよく見知っている友人と名乗る男の存在を思い出していた。なんとなく、昨晩の男とロジャーという名の男が同一人物のように思えて仕方が無かったのだ。
アルノは、悲しげな表情で言った。
「彼は駆け落ちの途中だったんです。詳しい事情はわかりませんが、一緒にいた女性はどこかの王族の姫だったようです。彼は大陸を渡って身を隠すと言っていました」
フェルデンは混乱していた。
「そのロジャーという男は、女性と一緒に乗船していたのか・・・！？」
なぜこうもフェルデンが見知らぬ男についてあれこれと聞きたがるのか不思議に思いながらも、アルノはサンタシの王子の質問にきちんと答えていく。
「そうです、まだ十代の若い方でした。それと、従者の少年を一人連れていました」
その瞬間、フェルデンの中であるものとあるものの存在がピタリと重なり合うのがわかった。
フェルデンは駆け出した。船首に一人アルノを残し、それさえも気が付かない程に。
（まさか・・・、どういうことなんだ・・・！？）
乱暴に昨日の部屋の扉を開ける。部屋の中はまだ水浸しであちこちに倒れた積荷や樽が散らばっていた。夜が明けたとは言え、地下に潜り込むような形で設置された室内は薄暗い。
フェルデンはばしゃばしゃと見つめたい水を蹴飛ばしながら、散らかった荷の中から目当てのものを探し当てた。幸い、木箱は少し湿ってはいたものの、それほど傷んではおらず無事のようである。荷には先日と変わらずに簡単には解けないように念入りに縄でしばられていた。

（開いた形跡がない・・・！）

腰の剣を抜くと、フェルデンは無我夢中でその縄を掻き切った。はらりと切れた縄が落ちると、木箱の蓋を毟り取るようにして取り払い、中にある美しく彫刻された棺を確認した。棺の蓋はしっかりと塞がれている。

（昨日確かにこの部屋にアカネがいた！）

意を決し、黒い棺の蓋を持ち上げる。

薄暗がりの中でふわりと漂うチチルの甘い香油の香り。そこにあってはならない筈の少女の姿は変わらぬままそこに存在した。

ごとりと鈍い音を立て棺の蓋が落とされる。

「なぜだっ！」

力の入らなくなったフェルデンの手から棺の蓋が滑り落ちたのだった。

昨日あんなに近くに感じた朱音の気配や心臓の音。言葉こそ交わしはしなかったが、フェルデンは少女が生き返ったと確信していた。

しかし、その愛しい少女の身体は未だこうして棺の中で横たわっている。

“わたしはアカネさんの友人です。”

そう言った暗闇の中の謎の男の声がふいに脳裏に蘇った。

“貴方は悲しみのあまり、あまりに盲目になりすぎている。もっと心の目で物事を見てみてください。そうすれば・・・真実が自ずと見えてくる筈です。”

朱音の身体がこうしてここにあることを考えると、あとはもう、一つの可能性しか考えられなかった。

（アカネは別の姿で存在している・・・？）

金の髪をぐしゃりと掻き乱すと、フェルンデンは近くの積荷の上に座り込んだ。どういう訳かは分からないが、とにかく失ったと思っていた朱音が、自分のすぐ近くにまで戻ってきていたのだ。

（あの男の言う通りだ。おれは、あまりに盲目すぎた・・・。アカネの存在に今まで気付かなかったなんて・・・）

はっとしてフェルデンは勢いよく立ち上がった。そうと分かれば、もうのんびりなどしていられない。

アルノの友人ロジャーが連れていた女というのが、きっと今の朱音の姿に違いなかったからである。

しんと静まり返った船の上を、フェルデンは物音など気にも留めずに一目散にあの部屋へと向かった。この船唯一の客室である。

「アカネ!!!」

ノックもせずに凄まじい勢いで客室の扉を開け放つ。

しかし、中は蛻の殻だった。

真っ白いシーツはまだ起き出した形のままふっくらと膨れている。シーツを捲り上げると、ここでもふわりと甘いチチルの香りが僅かにした。

ここに、朱音が眠っていたに違いない、そうフェルデンは思った。

「ひょっとして、ロジャーの恋人とお知り合いだったのですか?」

背後から声を掛けられるまで、フェルデンはアルノの存在に気付かなかった。

はっとして振り返ると、物悲しげなアルノの目がそこにあった。

「すみません、フェルデン様が客室の方に行かれるのが見えたもので・・・」

握り締めていたシーツをもう一度見やり、空になったベッドからフェルデンの頭に良くない考えが過ぎった。

「ここにいた客人は・・・、その王族の姫という人はどこだ・・・?」

その瞬間、ふっとアルノが床に目を伏せった。

「アルノ、彼女はどこに・・・」

「昨晩、従者の少年とともに海に流されるのを見た者がおります・・・」

シーツを握り締めている手がわなわなと震えた。

ほんの少し垣間見た一筋の光が、僅かに手の指先を掠め消え去っていくような絶望感に見舞われた。

「こんなつもりではなかったんです・・・。もう少しわたしが注意を払っていれば・・・。本当に申し訳ありませんでした」
アルノはがくりと肩を落とし、簡易ベッドにくず折れるように座り込んだ。
握り締めていたシーツを離すと、フェルデンは息苦しい程の思いを感じた。
「貴方のせいじゃない・・・」
そうは言うものの、今度こそ本当に失ってしまったかもしれない、そんな恐怖と盲目だった自分への怒りが腹の底から沸きあがってくるようで、フェルデンは悔しさと憤りで唇を血が出る程強く噛み締めた。
あの嵐は必然だった。きっと誰にも避けようのないものだったのだろう。
しかし、あともう少し早く、朱音の存在に気付いていたならば、彼女を最悪の事態から救うことができたかもしれない、そう考えると愚かだった自分を戒めてやりたいと強く思った。

「うう・・・」
潮水を多量に飲んでしまったせいだろうか、口の中や喉がひりひりと痛む。
「おっ、気がついたか！　水飲むか？」
ルイはまだ覚醒しきっていないぼんやりとした頭で、差し出された木の器を受け取ると、有難くその水に口をつけた。
水を全て飲み終えたところで、ルイは自分が今いる状況を一つずつ分析し始めた。
日が昇っていることを考えると、夜が明けていることは明らかだった。
それに、真っ白い砂浜。後方には森が広がっている。小枝を組み、火を起こしたであろう薪の痕。それに、いつの間にか着ていた服は

脱がされ、水分を絞って木の枝にうまく引っ掛けられていた。代わりに大きめの古い毛布が身体に掛けられていて、ルイはそれでくるりと身体を包ませると周囲の情報を得ようとゆっくりと見回した。

（僕は一体・・・）

見回した景色の中に、見慣れない青年の姿が一つ。

逞しい褐色の剥き出しの上半身、風変わりの帽子に大きな石の耳飾りをしたその青年は健康的な笑顔をルイに向けた。彼の服はルイの衣服と同様にそれは木の枝に干されているようであった。

「あなたは・・・」

ルイがぽかんとしている様子を見て、青年は察しよく言った。

「ああ、悪いっ！　お前、昨日の嵐で海に投げ出されたの覚えてる？」

こくりと頷いたルイに、青年は笑顔のまま話を続けた。

「俺、リーベル号の乗り組み員でさ、お前を助けようとして海に飛び込んだはいいけど一緒に流されちまったんだよな」

昨晩の悪夢を思い出し、ルイは真っ青になった。

（へ、陛下・・・！）

身体に巻きつけた毛布が外れ落ちてしまうのも構わず、ルイは命の恩人かもしれない目の前の青年の肩を掴みかかった。

「僕と一緒に流された人いたでしょ！？　その人はどうなりました！？」

「お、おいっ」

いきなり肩を掴みかかられて、青年は困ったように声をあげた。

「あっ・・・す、すいません」

とんでもないことをしてしまったと気付いて、慌ててルイは手を離した。

「残念だが、俺は流されたお前しか見てない」

ふらふらと立ち上がったルイは灰の瞳をこれ以上ない程見開き、そのまま近くの木の幹へともたれ掛かった。

「そ、そんな・・・」

ルイは自らの手の平を見つめた。百二十数年生きたというのに、まだ小さな少年の手だ。この手で確かに一度は主をしっかりと掴んだのに、その手を離してしまったのだ。

ルイは、“お前を世話役に命じる”と、アザエルに初めて告げられたときのことを今でも鮮明に覚えている。天蓋付きのベッドで安らかに眠るクロウ王の姿は、まるで魔王ルシファーを生き写したかのように美しく、それでいて一切の禍々しさは感じられなかった。

そんなクロウ王だったからこそ、ルイは強く惹きつけられていたのかもしれない。

“アザエルがいない今、ルイはわたしの側近です”

何も出来ず、近くに仕えることしかできないルイにも関わらず、クロウはヘロルドにはっきりとそう言い切ってくれた。

その言葉に驚き、そして感激したこと。

しかしその直後、“ルイはわたしの友達でしょ？　だから側近なんて思ってないよ“と続けられた言葉にルイは呼吸さえするのを忘れていた。

友達という言葉を知らずに生きてきたルイにとって、クロウの言ったことはどんな魔力よりも強い力を持っていた。大切な主であること以前に、ルイは初めて友としてこの人の近くで支えになりたいと心から感じたのだ。

「そう落ち込むなって・・・！　まずは自分が助かった幸運を喜ぶべきだぜ！」

青年が真っ青になったルイを励まそうと、じっと下から顔を覗き込んだ。

ルイはそのとき初めて、青年が燃えるような緋色の瞳をしていることに気がついた。

「でも・・・僕は・・・、ずっと傍に仕えると誓ったんです・・・。なのに・・・」

いつか、ずっと一緒にいると思っていたロランが突然目の前からいなくなってしまったときの孤独感を思い出した。彼がどうして自分の前から去ったのかは未だ分からないが、今度はルイ自身が手を離してしまったという大きな失態をしてしまった。

「待てよ、まだ諦めるには早いぜ？　よく考えても見ろよ、俺達だってあの嵐の中こうして生きてこの島に流れついたんだ。お前と一緒に流されたっていうそいつも、どっかで生きてる可能性だって十分あり得るだろ？」

気がつくと、ルイは青年の手を強く握り締めていた。

「ほんとに！？　ほんとですか！？」

「えっ、ああ・・・」

僅かな希望を見出し、ルイはそれでもその希望に縋り付くしかなかった。

苦笑を漏らすと、青年は頷いた。

「俺は船じゃエフと呼ばれてた。お前は？」

緋色の瞳をじっと見つめ、ルイははっきりとした声で言った。

「ルイです。エフさん、僕の主人を探すのを手伝ってください！！」

あまりにダメージの大きすぎたリーベル号は、昼過ぎになってから海上で応急処置を始めた。

しかしそれはあくまでも応急処置。このまま航行を続けることはできないという船長アルノの判断で、船は一旦近くの港で大規模な修理を受けなければならなくなってしまった。

船は昨晩の大嵐で予定の航路から大きく外れ、サンタシ国が位置する大陸のずっと南の辺りまで流されていた。

幸い、すぐ近くに小国リストアーニャがあり、リーベル号の行き先は急遽そちらへと変更となった。

「あああ～～・・・、死にそう・・・」
ユリウスがひどく顔色悪い様子で窓から突き出した首を引っ込めた。
「あの揺れで目が覚めなかっただけでも驚きなのに、夜が明けて揺すっても叩いても起きないものだから、おれはてっきり既に死んでるのかと思ったぞ」
フェルデンは呆れ顔で小柄のユリウスの背中を擦ってやる。
朱音の存在に気付いた後、落ち込んだフェルデンが寝泊りしていたクルー用の一室に戻ると、ユリウスが一度も目覚めた様子もなくハンモックで眠り続けていた。起こそうと試みたが、一向に起きる気配は無く、異様な程深く眠りについているようであった。しばらくしてからやっと起き出したユリウスだったが、起き抜けに、突如強い吐き気に見舞われ何度もどし始めたのだ。
「す、すみません、殿下・・・」
ユリウスは青い顔でフェルデンに何度も頭を下げた。
「昨日、夕食の後に出された飲み物の中に、どうも一服盛られたようです・・・。
あれを飲んだ直後、急に眠気が襲ってきて、その後の記憶が無いんです・・・」
フェルデンは不可解そうに眉を顰めた。
昨晩は夕食後に出された飲み物にフェルデンは手をつけないままあの積荷の地下の一室へと向かったことを思い出した。
「一体誰が何の為に・・・？」
ユリウスがもう一度込み上げてきた吐き気を窓を開けてなんとかやり過ごすと、疲労し切った様子で答えた。
「あの人じゃないですか、元魔王の側近・・・」
「アザエルか？」
大きく頭(かぶり)を振ると、フェルデンは昨日の嵐で倒れたままにたなっている椅子を起こし、そこに腰掛けた。
「あいつはそんな手の込んだことはしない・・・」

確かにアザエルは昨晩から一度も二人の前に姿を現してはいなかった。

「じゃあ、どうしてあいつはこの船にいないんです？　昨日、おれ達を眠らせている間に逃げようという魂胆だったんじゃないですか？」

ユリウスの考えは一理あった。

しかし、あの魔王の側近がこんな面倒なことを仕掛けるとも考えにくい。

フェルデンは頭を悩ませた。

昨晩の嵐に紛れて、何か大きな影が動き出したような予感がした。

「間諜だ・・・。邪魔なおれ達を眠らせている間に、事を進めようとした何者かがこの船に潜んでいた・・・」

ユリウスはモスグリーンの瞳を揺らした。

フェルデンは度々送られてくる刺客や間諜のことを知っていたのだ。

「フェルデン殿下・・・！」

「お前がおれにゴーディアから刺客が送られてきていることを黙っていたのは知っていた。おれに心配を掛けまいとしたことも」

しゅんと下を向いてしまった部下に、フェルデンは知ってしまった真実を包み隠さず話した。

「ユリ、この船にアカネが乗船していた。おれは昨晩彼女に会ったんだ」

ユリウスは我耳を疑った。とうとう悲しみに明け暮れたフェルデンが妄想まで抱き始めたのではないかと思ったのだ。

「誤解するな、それはおれの見た想像や幽霊の類じゃない。アカネは姿形こそ以前とは違ってはいるが、確かに生きて戻ってきていた」

理解に苦しむフェルデンの話に、ユリウスは頭を抱え込んだ。

「おれが思うに、アカネはゴーディアの儀式とやらできっと何かされたんだ・・・！」

まだ腑に落ちないユリウスだったが、フェルデンが妄想にとりつ

かれている訳ではないことは理解した。
「・・・と言うことは、魔王の側近はそのことを全て知っているということになりますよね・・・？」
フェルデンはまたあの男にしてやられたと小憎らしげに思った。
あれ程朱音を失い悲しみに暮れるフェルデンの姿を目にしていたというのに、あの男は、表情一つ変えることなく朱音の存在を黙っていた。まして、あの男が敵国の王子であるフェルデンにみすみすそんな情報を与えてくれることはまず考えられないが。
今、二つの出来事が交差していることに二人は勘付いた。
船に潜んでいた間諜・・・。そして同じ船に乗船していた朱音・・・。
「昨日の嵐に紛れ、何か大きな事が起こったに違いない・・・！」
一夜にして忽然と姿を消したアザエルと、朱音。
（アカネはどこかできっと生きている・・・！）
なぜかフェルデンは強くそう感じた。
朱音がサンタシの白亜城に居たときから感じていた、彼女がゴーディアにとって何か重要な存在だという予感は外れてはいない筈だ。
「おそらく、アザエルとアカネは一緒にいるだろう」
そう呟いたフェルデンのブラウンの瞳は、アザエルに対する怒りと、少女の生存への僅かな希望の入り混じった色を秘めていた。
（アカネ・・・、君はどうしていつも蝶のように俺の腕をすり抜けていってしまう・・・？？）
ユリウスは、切なげに目を閉じたフェルデンの姿をじっと見つめていた。

10話　リストアーニャ

朱音とクリストフは喧騒の中を歩いていた。
「お嬢ちゃん！　お一つどうだい？」
今日は月に数回開催されるリストアーニャの市（いち）の日だった。
屋台で香ばしい匂いを漂わせている串焼きを差し出しながら、男が朱音を引き止めた。
「あ、えーと・・・」
「失礼、わたしのフィアンセは脂っぽいものは苦手なんです」
クリストフがすっとその間に割って入ると、男はちぇっと舌打ちして引き下がっていった。
「クリストフさん、今の美味しそうだったのに・・・」
指を咥えながら、恨めしそうにクリストフを見つめる朱音は、リストアーニャの女性が身につける民族衣装に身包んでいる。これは、気を失った朱音を例のごとく風に乗せて今朝方ここリストアーニャまでやって来たクリストフが、早朝から買い出してきた品の中の一つであった。
「あれだけはお勧めできません！　あの肉を焼く際に使用しているスパイスが麻薬性の強い木の実なんです」
ひっと声をあげると、朱音は生唾を飲み込んだ。
「この国は商売の国として有名ですが、規制がほとんどありません。その為、危険なものが多く出回っています。よく商品を見定めて売り買いしないと痛い目をみるんです」
なんと恐ろしい国だ、と朱音は急に小さくなって歩き始めた。
「それと、もう一つ忠告しておきます。絶対にわたしから離れないでください？　いくら美味しい話を持ちかけられても知らない人についていて行かないこと！　いいですね？」
小さな子どもにでも言い聞かせるかのようなクリストフの言葉に、

朱音はぷうと頬を膨らませた。
「何それっ、なんでそう子ども扱いなの」
困ったように肩を竦めながらクリストフが小声で言った。
「今回ばかりは本気ですよ。言ったでしょう？　この国には規制がほとんど無いと。人身売買が平気で行われることでもこの国は有名なんです」
恐ろしくなって、朱音はクリストフの腕にしがみ付いた。見回せば、誰も彼もが悪人に見えてきてしまう。
そして恐ろしいものが朱音の視界に入ってきた。
目の前を横切る荷馬車。後ろには檻が取り付けられ、何人もの薄汚れた子ども達が中ですすり泣いている。
「クリストフさん、あれ・・・」
恐怖で朱音はクリストフに目線を送った。
「アカネさんの察しの通り、売りに出される子ども達ですよ。多くは孤児や身元不明の者達ばかりです。」
クリストフは今朝方調達したばかりの真新しいハットを被り直すと、囁くようにそっと朱音の耳元で話した。
「わたし、何があってもクリストフさんから離れないよ」
クリストフはこくりと頷くと、腕を組みやすいように左の曲げた肘を朱音に差し出した。朱音は大人しく自分の腕をそこに引っ掛けるようにして絡ませると、再び喧騒の中を歩き始めた。
「旦那！　どうです、この魔光石は“マルサスの危機”で流出した正真正銘の本物ですぜ。今ならお安くしておきます。美しい彼女へのプレゼントにお一ついかがです？」
ひょろりと痩せた男が、突然ひょいと二人の前に躍り出た。その手には黒い石がはめ込まれたネックレスが引っかかっている。
「悪いですが偽物を売りつけるならば、もう少し頭の悪そうな客にしてください」
クリストフが面倒くさそうに痩せ身の男を避けて、朱音をぐいと男から遠ざける。

「なんと人聞きの悪い！　見ててください！　本物ですから！」
男が首飾りを自らの首に引っ掛け、手をクリストフのハットに翳すと、ふわりと僅かにクリストフのハットが浮かび上がった。
朱音はぎょっとしてクリストフの頭の上に浮かぶハットをまじまじと見つめる。
瞬間、クリストフが思いも寄らない行動に出た。痩せ身の男の首飾りを力任せに引っ張ったのだ。
「これをどこで手に入れたんですか！」
「ちょっ、旦那！　乱暴は止してくださいってば」
いつもは朗らかな笑みを浮かべているクリストフだったが、こんな緊張感高まる表情は見たことが無い。
「クリストフさん！？」
朱音が止めに入ったことで正気を取り戻したクリストフは、やっと男の首飾りから手を離した。
「・・・失礼」
痩せた男は慌てて首飾りを庇うと、クリストフから隠すように懐へそれをしまい込んだ。
「いくらですか？」
クリストフがベストのポケットから財布を取り出す。意外なクリストフの行動に、朱音も思わず首を傾げた。
「二千ギアでどうです？」
余程高い値段だったのか、ピクリとクリストフの手が止まり、財布をぱたりと閉じてポケットへとしまい始める。
「待って待って！　じゃあ千九百ギア！」
何事も無かったかのように歩き始めるクリストフに痩せ身の男が慌てて付き纏う。
「ああ！　わかった！　じゃあ思い切って千八百ギア！」
クリストフはしっしと男を遠ざける仕草をしても、男は諦めずついて歩く。
「じゃあ旦那、一体いくらならいいんだよ！」

男がそういうのを待ってましたとばかりに、クリストフはにこりと微笑み、
「千五百ギア」
と言った。
「そりゃいくらなんでも安すぎるぜ!?　だって、こいつは本物の魔光石・・・っておい！　旦那！」
痩せ身の男が売り渋った瞬間、クリストフは朱音をつれたまますっと男がまるで空気にでもなったかのように隣をすり抜けて行った。
「ああ！　もう！　畜生っ！　千五百ギアでのんでやる！」
男が地団太を踏んで叫んだのを聞くと、クリストフはくるりと向き直り、素早く財布から金を取り出すと男に笑顔でそれを握らせた。
「ありがとう、いい買い物ができましたよ」
男は泣く泣くそのネックレスをクリストフに手渡す。
「ところで・・・、この石、どこで手に入れました・・・？」
痩せた男の目を伺うように、クリストフは質問した。
「そうだなあ・・・、言ってもいいがタダで話す訳にはいかないね・・・」
にやりと嫌らしい笑みを浮かべて、男は右手の人差し指と親指を摺り合わせた。
面倒臭そうにクリストフは財布から札を取り出すと男に握らせる。
「毎度あり！　この魔光石ですがね、あっしもある人から譲り受けたんですよ。元々はサンタシのとある地で製造されたものらしいんですが、“マルサスの危機”でサンタシの兵とともにゴーディア国内に持ち込まれた中の一つだという話でさ」
男の話を目を細めながら聞いていたクリストフは、声を落として訊ねた。
「サンタシのとある地とはどこです?」
男はちっちと舌打ちをすると、
「こっからは固有名詞が入ってきやすから、追加料金をいただかないと・・・」

不愉快そうに眉根を顰めつつも、クリストフは仕方なく再び財布から取り出した札を男に手渡す。
「毎度！　ある地ってのは、嘗ての砲弾生産の中心地ミラクストーでさ」
朱音は聞き覚えのある地名にあっと小さく声を上げた。
朱音の記憶が正しければ、ルイとロランの生まれ故郷の筈だった。
「なるほど・・・。最後に一つ、あなたがこの魔光石を譲り受けたある人とは誰ですか？」
口の軽い男だったが、急に口を一文字に結ぶと、男は口を開こうとはしなくなった。
クリストフは一つ溜息をつくと、
「さて、お待たせしてすみませんでしたね。アカネさん、行きましょうか」
と、再び歩みを再開させた。
しかし、それは朱音にとっては有難いことで、それは街外れの宿屋に置いてきたある人の様子が調度気にかかり始めていたからである。
「ちょっ、旦那！」
まだ何か用かとでもいうように、クリストフは歩みを止めることなく痩せ身の男をちらりと横目で見た。
「見たところ、旦那達は旅の途中だろ？　どうだ、あっしを案内役として雇うなんてことは。安くしとくよ」
いい金の出所を知ったとばかりに、男がとんでもないことを言い出したので、クリストフはふっと苦笑いを浮かべると、
「いいえ、結構。わたしはこれでも旅慣れてましてね、リストアーニャも例外ではないんですよ」
きょとんとして朱音はクリストフに手を引かれるまま両側を屋台や出店が立ち並ぶ道の真ん中で足を進めていく。ちょうど昼時ということもあって、道中はかなり混雑していた。
「あーっと、旦那！　わかった！　金は要らねえ！　それならどう

だ！」

クリストフはうんざりしたように足を速める。

「どうしてわたしが、見ず知らずの怪しげな男を連れて歩かなければならないのですか？　そんなに暇なら他の旅人につるみなさい」

冷たくあしらわれた男は、とうとうクリストフの腕に縋り付いて頭を下げ始めた。

「旦那ったら、そんなこと言わねえで、頼むよ・・・！　あんた達なら信用できそうだから正直に話す！　あっしはガキの頃リストアーニャの人身売買で奴隷として買われた孤児なんだ・・・。どうしてもこの国から出たい・・・！　けど、国を出るには検問所を突破しなきゃなんねえだろ？　あそこを通過するには案内役の振りをするしか方法がねえんだ・・・、頼む・・・！」

男の言うことは満更嘘でもなさそうで、男は証拠として、リストアーニャの人身売買で奴隷となった証である手首の刻印をこっそり二人に見せた。

「あなたの境遇には同情します・・・。しかし、わたし達も訳有りの旅を続けているんです。これ以上の面倒は背負いきれません。申し訳ないが、他をあたってください」

そうはっきりとクリストフに断られても、まだ尚諦めきれない様子で、男は懸命に二人に頭を下げ続けた。

「無理を言ってるのは承知だ！　でも、あんた達を逃したらきっとあっしは二度とこの国を出られねぇ・・・。この国は皆金の亡者ばかりだ。な、哀れな男を助けると思って、頼む！」

この国では逃亡した奴隷を捕まえた者には、奴隷所有者から謝礼金が下りることになっている。男が言いたかったのはずばりそのことだった。

この男は、どうやら逃亡中の奴隷の一人のようだ。

あまりに必死な男の様子に、朱音はだんだん男が可哀相に思えてきた。ここで男を見捨てて去ってしまうにはあまりに薄情な気がした。

「クリストフさん、可哀相だよ、検問所を出るまでならいいんじゃない？」

朱音の言葉に困惑したように、クリストフは、

「しかし・・・」

と、言葉を続けた。

「何事も無く検問所を通り抜けることができたらいいですが、仮に彼が逃亡中の奴隷だとわかったら、大変なことになります」

そしてその言葉の後は、朱音にそっと耳打ちした。

『アカネさんの正体まで調べられでもしたら収集がつかなくなってしまいます』

青くなって、朱音はしゅんと下を向いてしまう。

クリストフの言うように、もし検問所で朱音の正体がばれでもしたら、きっとこの旅はここで終息することとなり、朱音はゴーディアに無理矢理連れ戻されることとなるだろう。それに、朱音を無断で連れ出した罪で、クリストフもただでは済まされない筈だ。

ただでさえ余計なことに関わらせ、これまでにも多大な迷惑を掛けまくっているクリストフに、これ以上の迷惑は掛けられない。

そう思う反面、目の前の哀れな男が朱音自身に重なって見えた。

朱音が元の世界に戻りたいと思うように、リストアーニャでずっと捕らえられてきたこの男にもきっとどこか別の故郷があって、帰りたいと思い続けてきたに違いない。

そう思うと、朱音にはそう簡単に男を切り捨てることはできなかった。

「それはよく分かってます・・・、クリストフさんにもこれ以上迷惑を掛けられないことも・・・。でも、無理矢理この国に連れて来られ、閉じ込められてきたことを思うと、なんとかできないかなって・・・」

朱音の悲しげな目を見て、クリストフは呆れたように肩を落とした。

「貴女がそこまで言うのなら、仕方無いですね・・・」

「ほ、本当かい！？　有難う！　旦那！　お嬢さん！」
目に涙を浮かべて呼び跳ねる男に、クリストフは釘を刺した。
「いいですか、検問所を出るまでですよ？　それに、わたし達も危なくなったらそのときはあなたとは他人の振りをします。それでもかまいませんか？」
男は何度も大きく頷いた。
「おお！　構わねえさ！　有難う！　本当に有難う！」
思わぬところで旅の共が増えることとなり、クリストフは困り顔で笑いながら朱音の美しく整った横顔をちらりと見やった。クリストフはどうも朱音にはついつい甘くなってしまう自分に苦笑を漏らした。
「あっしはボリスってんだ。この恩は必ず返すからよ、そうだ！もし無事に検問所を通り抜けられたら、魔光石を譲り受けた相手の名前を教えてやる！　約束だ！」
痩せ身の男、ボリスは軽快に二人の後をついて行く。
クリストフは咳払いを一つすると、もう一度ハットを深く被り直した。

「最後まで任務を果たせず申し訳ありませんでした。ヴィクトル陛下にこの書状をお渡し頂けると有難い」
と、アルノはリストアーニャの船着き場で、ヴィクトル王宛てに認めた文をフェルデンに託した。
「書状は確かに預かった。おれの怪我のせいでそれでなくとも帰還が遅れてしまっている。先に行くことを許してくれ・・・。ヴィクトル陛下にはおれからうまく伝えておくよ」
フェルデンはアルノの丸い手をしかと握った。
「世話になったな。リーベル号の修理が終わったら、必ずディアー

ゼ港へ戻ってきてくれ」
そのすぐ隣で、ユリウスがアルノに手を差し出す。
「アルノ船長、フェルデン殿下から嵐の夜の話を聞きました。失くしたものが多かったけれど、貴方の腕は失われてはいません。いつの日か、同じサンタシの同志として共に働ける日を待っています」
力無く微笑むと、アルノはユリウスを握るだけの握手を交わした。

二人は、リーベル号の修繕におそらく長期間を有するだろうとの判断で、ここからは陸地を通っての進路をとった。
世話になったリーベル号の乗り組み員達や船長と挨拶を交わすと、二人は旅を再開させた。
ボウレドで出会ったフレゴリーの腕が余程良かったのか、完全では無いものの、フェルデンの肩の傷は格段に良くなっていた。

騒がしい市(いち)が街の中心地で開催され、リストアーニャは多くの商人や買い物客で溢れ返っていた。
「それにしてもすごい人ごみですね・・・」
小柄のユリウスは人ごみが苦手だった。この身長のせいで他の者以上に人の波に飲まれやすくそれで何度も痛い目を見てきたからだ。
そして今回もそれは同じくして、既にユリウスを人ごみで酔わせていた。
「おぶってやろうか？」
長身のフェルデンが見下ろしながらユリウスにそう言うと、ユリウスは目を吊り上げてつっけんどんに言った。
「おれよりちょっと身長が高いからって馬鹿にしないでください！　いいですか、確かにおれはちょっとばかし身長は低い！　けど、男としての器の大きさなら、殿下にも負けませんから！」
ふんっと鼻を鳴らす小柄な部下を見て、フェルデンはぷっと吹き出した。
「ほら、見てください！　今だって何人かのレディーがすれ違い様

におれを見てましたよ？　やっぱりおれの男らしさは外面にも溢れ出てるんですよ」

はいはい、といい加減な返事をしてフェルデンはもの珍しい屋台に目をくれる。

美しい石を磨き繋げてアクセサリーとして陳列した店、リストアーニャの民族衣装で用いられる鮮やかな手染めの布々を売る店、旅に必要な小道具を売る店、中には怪しげな薬草を陳列する店まで。

「ちょっと、殿下ってば、聞いてます？？」

怒ったユリウスがフェルデンの顔を見上げたとき、フェルデンの足はぴたりと止まった。その視線はある一点をとらえたまま動かない。

「殿下？」

「あの男・・・！　間違いない・・・！」

突如行き交う人々を押し退けて走り出したフェルデンの背中を、慌ててユリウスが追う。

「殿下！　ちょっ・・・！　待ってください！」

混雑した中で無理矢理押された人々の中から、時折「きゃっ」という悲鳴や「何すんだ」という声が上がる。それでもフェルデンは視界に一切他の物が入っていない様子で、どんどん人ごみの中を掻き分けていく。

ユリウスはフェルデンを見失うまいと必死だった。この人ごみで逸れてしまったら、探すのに一苦労するだろうことが予想できたからだ。

「殿下～～～！！」

ユリウスはフェルデンがどうしても持っていくと言って聞かなかった棺の入った木箱を荷車に乗せて引いていたものだから、余計にこの人ごみを進むのに手間取っていた。

フェルデンはついさっき人ごみの中で確かに見た男を見失い、きょろきょろと辺りを見回した。

しかし、その人物はそこにはもう見当たらなかった。

（船の中で何度かすれ違ったときに見た顔、あれはロジャーに違いない・・・！　あの男、生きていたのか!?）

まるで幽霊でも見たかのような気分に陥り、フェルデンは男立ち止まったまま考え込んでいた。

「殿下！　やっと追いついた・・・。もう、突然走り出して、一体どうしたって言うんですか？」

息を切らせながら、ユリウスが駆け寄る。しかしその後ろには、ごろごろと荷車もしっかりと引いている。

「さっき、人ごみの中であの男を見かけた・・・」

フェルデンの表情が明らかに動揺していることに気付き、ユリウスは彼が何か昨晩の嵐に関わる重要なものを目撃したことを悟った。

「あの男とは？」

「ロジャー。アルノの古い友人で昨晩の嵐で海に投げ出され、死んだ筈だった」

ユリウスは初めて聞く名に頭を傾げる。

「船長の友人？」

こくりと頷くと、フェルデンはユリウスに向き直り説明を付け加える。

「ロジャーは秘密裏にアルノに願い出て、ある王族の姫との駆け落ちの最中にリーベル号に乗船していたらしい」

フェルデンの言っていることが一体何を意味するのか、ユリウスにはすぐに理解できなかった。

それをもどかしく思ったのか、フェルデンは口調を早めた。

「昨晩、おれがアカネに会ったと話しただろう？　その時に、暗がりの中で何者かが現れてアカネを連れ出して行った。そいつは、アカネの名を口にしていた。それに、自分はアカネの友人だとも・・・」

ユリウスはフェルデンの茶の瞳を見つめ返した。そこには、もはや一点の曇りもなく、真実だけを追い求める強さが宿っていた。

「つまり、こういうことですか。そのロジャーという男と、殿下の

前に現れた暗がりの中の男は同一人物だと。そして、そのロジャーこそが貴方が探しているアカネという人に何らかの関係を持っている」

ロジャーがこの昨晩の嵐で死んでいなかったとなると、朱音も生きてすぐ近くに居る可能性が高い。

フェルデンはロジャーなる男を目にしたことで、朱音にまた一歩近付いたことへの強い手ごたえを感じていた。

「きっと、この国のどこかに、それもおれ達のすぐ近くにアカネはいる！」

しかし、ユリウスはまだ気付いてはいなかった。

ボウレドで出会った風使いのクリストフ・ブレロが、まさかフェルデンの言うロジャーなる人物と同一人物だという事実を・・・。

11話　奇禍遭遇

日が傾き、薄暗くなりつつある部屋の中、朱音はじっと死人のように動かないアザエルの傍で時間を過ごした。
クリストフは、水の力でアザエルは自然と回復すると話していたが、アザエルの美しく整った顔は昨晩と変わらず蒼白で、皮膚は氷のように冷たいままだ。
朱音はひょっとしてこの男は既に死んでしまっているのではないか、と何度も疑った。
この死人のように冷たい男は、朱音の当たり前だった日常から見知らぬ世界レイシアに連れ去った挙句、朱音の全てを奪い、何度も朱音を絶望のどん底へと突き落とした。家族も、友達も、夢も希望も、そしてやっと気付いた愛さえも失くした朱音はこの男をひどく憎むことで辛うじて生き存えていた。
しかし、ここへ来てその憎しみという感情のやり場を失ってしまったことに、朱音の心は大きく揺れ動いていた。
冷たく恐ろしい海にのまれ流されたときに見た、遠い日の記憶。それは、まるで夢のように不安定でありながら、ひどく懐かしい確かなクロウの思い出だった。
「アザエル・・・、クロウにとって、あなたは一体どんな存在だったの・・・？」
ぽつりと呟いた朱音の声はひどく憂いを帯びていた。
『ガチャリ』
開いたドアからクリストフが姿を現す。その肩には白い鳩がとまっている。
「どうしました、明かりもつけないで」
すっかり暗くなってしまった部屋に、クリストフは皮のベストのポケットからマッチを取り出すと、部屋のランプに火を灯した。

「クイックルが戻ってたんだね」
立ち上がりクリストフの肩に手を伸ばすと、白鳩は嬉しそうにちょんと朱音の手の上に飛び乗った。
「おかえり、今度は何を見てきてくれたの？」
にこりと微笑むと、クイックルは身体を朱音の頬に擦り寄らせた。
「彼女はルイの様子を見てきてくれました。彼は変わらず無事だそうです。それに、誰か信用できる者を見つけたようで、その者と一緒にこちらへ向かっているみたいですよ」
ほっと安心したように、朱音は胸を撫で下ろした。
海に投げ出された後、はぐれてしまったルイのことをひどく心配していた朱音だったが、どういう訳かクリストフが彼は無事に生きていると話したので、朱音はそれを信じていた。
気を失っていた朱音が翌朝目を覚ました時には、既にこの宿のベッドの上だった。
そしてクリストフは目覚めたばかりの朱音にまず謝罪したのだ。
“貴女を危険な目に遭わせたこと、本当にすみませんでした”
と。そして、あの荒れた海の上で、クリストフは目にしたものを朱音に丁寧に話して聞かせた。
クリストフが折れたマストとともに海に流された後、海に投げ出されたルイと朱音が見えたこと。助けに行こうとしたところへ、リーベル号の甲板から乗り組み員の一人が飛び込み、流されたルイをうまくマストの残骸の上に引っ張りあげる瞬間を目にしたことを。そして朱音はアザエルの手で岩場へと引き上げられたことも。
しかし、謝らねばならなかったのは朱音の方だった。
あれ程客室を出るなと釘を刺されていたにも関わらず、朱音は自分勝手にも部屋を出てしまった。そのせいでクリストフやルイがこんな危険な目に遭ったことを考えると、償っても償いきれない思いでいっぱいになった。
クリストフは一度も怒らなかった。
こんなにも危険な目に遭わされたというのに、何の見返りもない

朱音の旅に、友達だからという理由で付き合い続けてくれている。
「ルイが無事で本当に良かった・・・。クイックル、ありがとうね」
白鳩はホロホロと嬉しそうに喉を鳴らすと、バサバサと翼を開く仕草をした。
「クリストフさん、あなたはひょっとして、もう何もかもを知ってるんじゃない？　わたしが一体誰なのかということも、この旅を続けている本当の理由も・・・」
朱音は気付いていた。ふとした瞬間に感じる、彼の朱音に対する態度や言葉の僅かな違和感に。
そしてそれは昨晩の出来事で確信へと変わった。暗闇の中でクリストフがフェルデンに向けて言った、
“貴方は悲しみのあまり、あまりに盲目になりすぎている。もっと心の目で物事を見てみてください。そうすれば…真実が自ずと見えてくる筈です”
という言葉は、朱音の境遇を全て理解していることに他ならない。
クリストフはじっと朱音の黒曜石の瞳を見つめた。
「さて、どうでしょうか」
彫りの深い濃げ茶の目は、別段焦った様子も無く普段同様にほんの少しの笑みさえ含んでいる。
「けれど、この旅はアカネさんが自分探しの為に始めた旅な筈です。例えわたしが全てを知っていたにせよ、最終的に答えを出すのは貴女です。わたしにそれを決める権利はどこにもありません」
なぜこうも、クリストフは知らない振りをし続けようとしているのか、朱音にはわからなかった。
クリストフの言おうとしている意味を、難しい顔で考え込む朱音に、クリストフはあっけらかんとした声で言った。
「そんなことより！　そろそろ彼がやって来る頃ですよ」
誰が、と朱音が聞き返そうとした瞬間、部屋の扉のすぐ後ろでぎゃっという悲鳴が聞こえてきた。
（???）

不審に思って恐る恐る扉を開くと、廊下一面に果物の入った袋をぶちまけてひっくり返っているボリスの姿がそこにあった。
「あれ、ボリス？」
くすくすと笑いながら、クリストフが朱音の後ろから声を掛けた。
「わたしが彼にちょいとお遣いを頼んだんですよ。そう、安全性の高い食料の調達と、それから旅に必要な道具、それから・・・」
まだまだ続くだろうクリストフの羅列していく物の多さに、朱音は笑いを堪えることができなかった。
「とまあ、ちょっと頼みすぎたかもしれませんね。ハハハ」
クリストフの悪気の無い悪戯は、ちょっとした彼のユーモアの一種だった。からかわれたボリスは尻餅をついたまま目尻に涙を浮かべている。
クリストフが居るだけで、朱音は本当に心強かった。
思い起こせば、初めてクリストフに出会い、魔城で髪を切ってもらったときだって、ちょっとした悪戯心で手に握らされた紙の切れ端にどれだけ心救われ、励まされたことか。
彼は朱音にとって、本物の救世主だった。

リストアーニャへ来て三日が経った。
クイックルが度々得てくる情報によると、ルイは着実にリストアーニャへと近付き、そして運のいいことにあのリーベル号が修理の為にこの港へと停泊しているということが分かった。
クリストフの提案で、ルイがこちらに合流するまではここで動かず待つこととなり、朱音は退屈ながらも宿の一室で眠ったままのアザエルと、お喋りなボリスと過ごしていた。
「アカネ嬢、この人、本当は死んでんじゃないか？」
ボリスがつんつんと骨ばった小指でアザエルの頬を突く。
「止めなよ！　生きてるよ、ちゃんと息してるでしょ」
ボリスの手をパチンと叩くと、朱音はきっと睨みつけた。

そうは言うものの、朱音自身アザエルが生きているのか死んでいるのかはっきりとわからず、相変わら蒼白で冷たいままのアザエルを見て不安を抱かずにはいられなかった。

「そうかあ～～？　あっしには息してるようには見えねえけどなあ・・・」

ぼそりと呟いたボリスの頭をべちっと叩くと、

「って！！　ひでえな、アカネ嬢は」

と、涙目でボリュームの少ないぺたりとした髪を擦(さす)る。

（大丈夫、アザエルは死んでない！　死んでたら今頃腐敗が始まってる筈！　死んでないったら死んでない！）

朱音はそう何度も自分に言い聞かせていた。

しかし、まだこの後に訪れる奇禍を予想だにしていなかった。

その晩、ほんの少し様子を見てくると言って宿を出て行ったクリストフが、遅くなっても戻って来なかったのだ。

「アカネ嬢、旦那、遅いっすね・・・」

ボリスが夕食に食べていた肉の骨をしゃぶりながら、退屈そうに言った。

「うん・・・」

度々こっそりと部屋を抜け出すことはあったクリストフだったが、一度出て行ったきり戻らないことは今まで一度も無かった。

「もしかして、街で何かあったんじゃ・・・。旦那、いい服着てっから・・・」

あのクリストフに限って、とは思うものの、ボリスの碌でもない一言が朱音の不安心を揺すぶる。

「変なこと言わないで。きっと、何か別に用事ができたんだよ」

とは言いつつも、朱音の夕食のパンと骨つき肉は、ほとんど形を残したまま机の上に載っかっていた。

「ありゃ、食べないんすか？」

朱音は、溜息をついてボリスに自分の分の骨付き肉を突き出す。

「ほんなら、お言葉に甘えて！」
こんなときにも食欲旺盛なボリスに、朱音は呆れると同時に羨ましいとまで感じた。
「そだ。アカネ嬢、あっしで良ければ外の様子を見てきましょうか？」
思ってもみないボリスの申し出に、朱音は藁にもすがる思いで頷いた。風を操ることのできるクリストフが何か事件に巻き込まれるなんて有り得ないとは思うものの、何かしらの不安が拭い去れなかった。
ボリスが部屋を出て行って間もなく、窓の外が何やら騒がしくなり始めた。
けたたましい男の怒鳴り声と、悲鳴。尋常ではない外の様子に、朱音は閉めていたカーテンから僅かに窓の外を覗き見た。
ちょうど朱音達が宿泊する向かいの宿から、大男が二人の子どもを無理矢理引きずり出しているところだった。
「身元不明のガキどもだ！　儲けもんだぜ！」
男達は泣き叫ぶ子ども達をひょいとネズミか何かでも摘まみ上げるかのようにして、荷馬車の檻に放り込んだ。
朱音は数日前に市（いち）で見かけた売りに出される子ども達の姿を思い出した。
（孤児や身元のわからない子どもを探してるんだ・・・！）
朱音の心臓が危険信号を知らせている。嫌な予感がした。
「この近辺にまだ隠れてる筈だ！　くまなく探せ！　逃がすなよ！」
男達の声が響くと同時、朱音の嫌な予感は的中した。朱音の宿泊している宿にまで男達が踏み込んできたのだ。
宿主は気のいい年寄り夫婦で、あの大男たちには手も足も出なかった。次々と乱暴に客室に入っては、身分証の無い子どもを片っ端から荷馬車へ詰め込んで行く。
身分証を発行してもらうには、ある一定の税金を支払わなければならない。しかし、この国にはまだまだ貧しい商人もたくさんいて、

中には身分証を持たない子どももたくさんいるとボリスが話していた。

たった今囚われた子ども達は、きっとそうした事情を抱えているのだろう。

（どうしよう・・・！）

嫌な汗が背中を伝った。もうこの部屋に男達がやってくるのも時間の問題だ。

はっとして朱音はアザエルを見た。あの男達がこの部屋に来て、動かないアザエルを見れば、どういう行動に出るのかは何となく想像できた。

子どもを平気で掻っ攫い、売り飛ばす者達だ。死体であれなんであれ、売り飛ばして金目にしようとするに違いない。

朱音は横たわったままのアザエルの足を持ち上げると、ぐいと引っ張った。意識のある人間と違い、ぐったりと脱力した大人の身体は思うように動かせない。

男達の足音はすぐ近くまで迫っていた。

（お願い！　間に合って！）

顔を真っ赤にしながら、なんとかアザエルの身体をベッドから引きずり降ろすと、お尻をつかって全体重をかけてその身体をベッドの下へ押し込んだ。

『バンッ！』

アザエルの身体をなんとかベッド下に押し込むことに成功したと同時に、部屋の扉が蹴破られた。

「おっと、お嬢ちゃん、こんばんは」

片目に眼帯をした大男がにやりとベッドの脇でへたり込んでいる朱音に言った。

「こんな時間にこの部屋で一人かな？」

恐ろしさのあまり、朱音はがたがたと震え始めた。

「身分証を見せな」

ずかずかと近付いてきた男に、朱音ははっきりと答えた。

「わたしは旅の者です。だから身分証なんて持ってないです」
男はぶっと吹き出すと、
「どの子どもも皆同じ言い訳をするのさ。それなら、出身を証明できるようなもんを提示してみな」
と、朱音を見下ろした。
朱音は必死に考えを巡らせた。
（今の身体はクロウのものだから、ゴーディアの出身だよね・・・？！　でもよく考えたら、わたし何も証明になるもの持って来てない・・・！）
男の言葉に黙り込んでしまった朱音の姿を見て、男はふんと鼻を鳴らした。
「悪く思うなよ、これも商売、金の為だ」
咄嗟に身を翻して逃げようとする朱音の腕をぐいと掴むと、朱音はいとも簡単に男の手に捕えられてしまった。こんなときに限って、ボリスは戻らない。ひょっとしたら、このおぞましい出来事を近くで震えながら見ているのかもしれない。嫌、見つかることを恐れて逃げ遂せたのかもしれなかった。
でも、もしボリスがこの光景を見ていたのなら、クリストフに伝えてくれることを今は願うしか無かった。
乱暴に投げ込まれた檻の中は暗く、既に何人もの子ども達が震え、啜り泣いていた。
「ふぇっ・・・、わたしは孤児なんかじゃないのに・・・、家族だっているのよ・・・」
暗がりの中で、朱音のすぐ傍の少女が懸命に訴えかけていた。
「ぼ、僕だって・・・！　父ちゃんの出稼ぎにくっついて来ただけなんだ！」
その声につられて、子ども達が一斉に声を上げて泣き始めた。荷馬車の周りでも、大人達の咽び泣く声が聞こえる。きっと、身分証を持たない子ども達の家族や親や親戚達だった。
朱音は気を緩めると、ついつい零れそうになる涙をぐっと堪えた。

他の子ども達よりもいくつか年上だろう自分がしっかりしなくては、と思ったのだ。

朱音自身、今は家族と引き離される子ども達の気持ちが痛いほどよくわかった。レイシアへ来て、天涯孤独の身を知った朱音にとって、ここにいる子ども達はまるで自分を見ているようであった。

やがて動き始めた荷馬車に揺られながら、悲しみに暮れる子ども達に朱音は囁いた。

「大丈夫、心配しないで。きっと家族の元に帰れるよ。きっと皆を逃がしてあげるから・・・」

すっかり帰りが遅くなってしまったクリストフは、早足で朱音の待つ宿場へと道を急いでいた。

しかし、街外れまでやって来ると、おかしな空気に気が付く。深夜だというのに、屋外でがっくりと項垂れた者や啜り泣く者がちらほらと見受けられたからだ。

妙な胸騒ぎがして、クリストフは駆け出した。

宿泊している宿に着くと、入口の辺りで、宿を営んでいる老夫婦が手をとり合ってしゃがみ込んでいた。

「何かあったのですか？」

ただ事ではない雰囲気に、クリストフは老夫婦に訊ねた。

「ああ・・・、ついさっき奴隷売りの奴らがやって来てね、身分証を持たないここらの子ども達を皆、掻っ攫ってっちまったんだ・・・」

嫌な予感がした。

しかし、慌てて駆けつけた宿泊部屋の前で、クリストフは嫌な予感が的中してしまったことを知る。

部屋の扉は既に蹴破られており、部屋の中には食べかけのパンと肉の骨が机の上に置いてあるだけで、朱音とボリスの姿はどこにも

見当たらなかった。
「一足遅かったですか・・・。しかし、リストアーニャの治安がここまで落ち込んでいるとは・・・」
着ているシャツの衿元のボタンを緩めながら、クリストフは溜息を零した。
その瞬間、クリストフはベッドの下から僅かに見える灰色のローブに気が付く。
ゆっくりと屈んでベッドの下を覗き込んでみると、アザエルがそこに横たわっていた。
「ふ・・・、アカネさん、貴女という人は・・・。自分がどんな窮地に立たされていても、人助けを優先してしまう・・・」
苦笑を漏らしながら、クリストフは呟いた。
いつの間に戻って来ていたのか、部屋の窓の外からにクイックルがちょこんと顔を覗かせていた。
クリストフは窓を開けて白鳩を部屋へと招き入れた。
「さて、君にまた頼みごとをしなくては・・・。君の名付け親が一体どこへ連れて行かれたのかを探してきて欲しいんです」
クイックルはバサバサと翼を広げ、クリストフに合図を送った。
リガルトナッツの入った袋からいくつかナッツを取り出すと、クリストフは白鳩にそれを食べさせてやる。美味しそうに平らげたクイックルは、ぴょんとクリストフの手から窓枠へと飛び降りると、一度だけクリストフを振り返り、さっと闇夜の空へと飛び去った。
だんだん小さくなる真っ白いクイックルの姿を見つめながら、クリストフは心の中でこう呟いた。
（でも、気をつけて下さい。君のように珍しい羽色の鳩は、リストアーニャではどこへ売り飛ばされるかわかりませんからね・・・）
リストアーニャの夜は更けていく。
商売の国として栄える反面、暗い一面を残して。

12話　離れ行く二人

幼い黒髪の少年が広い城の中を駆けている。
小さな白い手にいっぱいの黄色い花。少年が走る風でひらひらと舞っていた。
「母上！！」
少年が飛び込んだ広間はがらんどうで、人の気配が無い。
「母上・・・？」
誰も居ない広間の奥からひそひそと話し声が聞こえる。
クロウは恐る恐る声のする方へと近付いて行った。
隣の部屋へと通じる扉が僅かに開き、明かりが漏れている。手に黄色い花を持ったまま、クロウは大きな黒い瞳でじっと中の様子を覗いた。
「もう我慢できません・・・！　陛下はわたくしにこれ以上苦しめと仰るのですか・・・？」
アプリコットのふわりとカールした髪を美しくなびかせ、薄いピンクのドレスの可憐な女性が、何か懸命に訴えかけていた。
「あの人を遠ざけてください。わたくしを正妃として迎えたときに、わたくしを愛するよう努力すると仰ったじゃない」
女性はこちらには背を向けていて、その表情はよくはわからない。けれど、ひどく取り乱しているようであった。
「ベリアル、君にはすまないことをした。しかし、あいつを遠ざけることはできない、分かって欲しい・・・」
低く、そしてひどく懐かしい声。大人の男の声は、ベリアルと呼ばれた女性のすぐ後ろから聞こえてきた。
「なぜです！？　わたしが陛下の心を得ることはできないのですか？　こんなにも陛下を愛しているのに・・・！」
ベリアルの肩は震えていた。泣いているようだった。

「すまない・・・」
ベリアルの肩を優しく抱く男の手は透けるように白い。男のゆったりと結われた美しく長い漆黒の髪がさらりと、黒いサテンの服の上を落ちていった。
「陛下は、いつだって一人の女性しか見ておられないのよ・・・。そしてあの人は、いつでも陛下の中に住み続ける・・・。なんて残酷な人なの・・・」
ふと見えたベリアルの横顔はひどく涙で濡れていた。しかし、見る男全てを虜にしてしまう程の可憐さを持ち合わせていた。
「あの子を・・・、あの人の子であるクロウを息子だと思ったことは一度もありません。あの子を見ていると妬ましくて仕方が無いのです・・・！　わたくしも自分の子を産みたかった・・・！」
黒曜石の瞳を見開き、クロウは持っていた黄色い花をパサリと床に落とした。
ベリアルはクロウの母だった。
「あまり思い詰めるな、また発作が起きてしまう・・・」
ベリアルを支えるように抱く男は、幼いクロウと瓜二つの、恐ろしい程美しい顔をしている。
「どうしてあの人ばかりが何もかも手に入れてしまうのです・・・！　わたくしが陛下の妻なのに・・・、あの人には陛下の愛も、その愛の証さえも・・・」
クロウはひどく恐ろしい事実を知ってしまったのだ。
愛した母ベリアルは、実の母ではなかったということを。そして・・・、自らが母に愛されていないばかりか、疎ましい存在だったということを。

いつの間にか眠ってしまっていたらしい。夢を見ていた。
それは、嵐の晩に見たものと同じ、幼いクロウの記憶。とても切

なく悲しい記憶。
　この間の嵐の晩のように、魔力が使えればと思い、一晩中意識を集中させようと努力し続けた朱音だったが、あのときの力はあれっきりで、いつの間にやら疲れて眠ってしまったのだ。
「ん・・・」
　檻を背にもたれるような形で眠った為、身体のあちこちがぎしぎしと痛む。
　はっと息をのむ声が聞こえ、朱音は眠い目をこすりながらゆっくりと目を開けた。
「お姉ちゃん、女神様・・・？」
　まじまじと朱音を囲むようにして覗き込む子ども達に目を見張り、朱音は寝ぼけ顔で周囲を見回した。荷馬車の檻の上には巨大な布のようなものが被されており、布の隙間からは朝の日差しが差し込んで僅かに明るい。馬車はどこかに止められているようであった。
「え？」
　きょとんとして聞き返すと、子ども達は朱音の服をぎゅうぎゅうと摘まんでは引っ張り始めた。
「ねえっ、お姉ちゃん女神様でしょ？　だって、神話の本に出てくるアルテミス様にそっくりだもん！」
　そばかすと赤毛の少女が目を輝かせた。
「へ？　アルテミス？」
　朱音は起き抜けにほとんど理解できない頭で、思わず小首を傾げた。
「アルテミス様を知らないの？　月の女神様だよ」
　そばかすの少女はひどく驚いている。
“月の女神”と聞いて、朱音はくすりと笑った。
（ああ・・・、このクロウの姿を見てそう思ったんだね）
　子ども達がその、月の女神アルテミスと勘違いするのも無理は無かった。クロウの父は魔王ルシファーで、天上界を追放されるまでは、神に最も近い存在である天上人、ルシフェルだった。即ち、レ

イシアの神話に登場する女神の姿絵が、天上人ルシフェルをモデルとしている可能性は大いに高く、その血を色濃く受け継ぐクロウの姿が女神に似ているという話も理解できる話だ。

「わたしはそんな立派な女神様なんかじゃないよ、朱音って言うの」

零れ落ちそうな程の大きな瞳で、そばかすの少女がじっと朱音を見返してきた。

「アカネお姉ちゃん・・・？　わたし、カロル・・・」

「よろしくね、カロル」

にこりと微笑むと、周りの子ども達も僕もわたしもと名前を名乗り出した。

「ぼく、アントン！」

「ジャンだよ！」

「わたしフランカ」

朱音は子ども達に満面の笑みで答えた。

「なんだなんだ、騒がしいな・・！」

檻の外から図太い男の声が響く。びくりと身体を強張らせると、子ども達は朱音の傍で皆縮こまった。

途端、ばっと捲られた布。薄暗さで目が馴れていた朱音は、眩しさで目が眩み目を瞑った。

「こりゃ驚いた・・・。見てみろ、思わぬお宝が紛れ込んでたぜ」

その声は昨晩の大男の一人のものだった。

「昨日は暗くてよく見てなかったが、これはラッキーだぜ。奴隷として売りさばくにゃ勿体無い」

やっと見え始めた朱音の視界に、檻越しに眼帯をした大男と禿げ上がった大男の二人が、自分を驚きの目で観察している様子が入ってくる。男達の話していることが、自分のことだと気付き、朱音はひどい嫌悪感を覚えた。

「アカネお姉ちゃん・・・、わたし達、一体どうなるの・・・？」

今にも泣き出しそうな顔で、カロルがぎゅうと朱音の腕にしがみ付いてきた。

「大丈夫、きっとわたしが何とかするから、心配しないで」
魔力のこれっぽっちも無い今の朱音に何かできる筈は無かったが、子ども達を安心させる為にも、自分を安心させる為にもそう呟いた。子ども達は、月の女神アルテミスによく似た朱音の言ったことを信じ切っているようだった。
太陽が真上に昇る頃、朱音と子ども達の入れられた檻は荷馬車に揺られて、どこか別の場所へと移動を始めたようであった。
『アカネ嬢・・・、アカネ嬢・・・！』
揺れた馬車の中ゴトゴトというやかましい音に紛れて、どこからともなく囁くような呼び声が聞こえてきた。
「？」
一瞬空耳かと思い、朱音は再びカロル達とくっついて目を閉じた。昨晩は緊張と恐怖のせいか眠れなかっただろう子ども達は、疲労でうとうとと居眠りうを始めていた。
『アカネ嬢ったら・・・！』
きょろきょろと檻の中を見回すと、上に掛けられた布の隙間から、ぺったりとした髪の痩せた男が顔を覗かせている。
「ボリス！？」
驚いて朱音は馬車の後方へと四つん這いで慌てて擦り寄った。
「ボリス、あなた、逃げたんじゃなかったの？」
しっと人差し指を唇の前に立て、何かに怯えているような仕草で、ボリスは声を落として言った。
「アカネ嬢が攫われた後、旦那がまだ帰ってくる気配も無かったんで、こっそり馬車の後をつけて来たんす。あっしも奴らに見つかったらえれえことになりますんで、様子を見計らってたんすよ・・・」
とっくに逃げてしまったと思っていたボリスに、朱音は心の中で疑ったことを謝った。
「そうだったの・・・、わたし達、どうなると思う？」
子どもの頃に同じことを経験済みのボリスが一番、この馬車の行き先をよく知っている筈だった。

「たぶん・・・、競り市へ向かってんだろうなぁ・・・。明後日はまた競り市の開催日だし、集められた子どもはだいたいそこで競売に掛けられる。」

まるで物でも扱うような話に、朱音は吐き気さえ覚えた。子どもを売り買いするなんて、この国はどうかしている、はっきりとそう感じた。

「ねえ、クリストフさんにその競り市の場所を知らせることってできない？」

ボリスはこくりと頷いた。

「あっしも、それが一番いいと思ってたんだ。けど、どうもそう上手くはいかねぇみたいだ、アカネ嬢・・・」

どうして、と首を傾げた朱音に、ボリスが衝撃的な事実を述べた。

「さっき奴らの話をこっそり聞いたんだ・・・。子どもらを競り市で降ろした後、アカネ嬢だけはどっか別の場所へ連れてかれるみたいだ」

眠っている子ども達はまだボリスの存在に気付いてはいないようで、静かに眠りについている。

「それ、どういうこと・・・？」

きまりが悪そうに、ボリスはぼしょぼしょと口を窄めて答えた。

「アカネ嬢があんまり綺麗すぎたもんだから、なんでも、奴隷として競売にはかけないみてぇなことを言っててよ・・・」

朱音は咄嗟に寝ている子ども達を振り返った。

朱音と自分達が別の場所へと連れて行かれることを知ったら、子ども達はひどく動揺するに違いない。それに、彼らは朱音が本当に助けてくれると信じ切っていた。それなのに、その約束を破ることになるかもしれないと思うと、朱音は口が裂けても自分からそのことを話す気にはなれない。

「ボリス、いいからその競り市ってとこの場所をクリストフさんに伝えてきて・・・！」

ボリスは戸惑ったように返した。

「だってよ・・・、そんなこととしたら、アカネ嬢の居場所がわからなくな・・・」

「いいから！　わたしは自力で何とかするから、先にあの子達を逃がしてあげて欲しいの。ね、あなたも同じ目に遭ったなら助けてあげたいと思うでしょう？」

懸命な朱音の説得に、ボリスはうんと言わざるを得なかったらしい。しぶしぶ頷くと、周囲を見計らって、ボリスは荷馬車の上からそっと飛び降り、離れていった。

（クリストフさんなら、きっとわかってくれるよね・・・！）

ぎゅっと手の平を握り締めると、荷馬車の上から檻越しに僅かに見える外の景色を見つめた。

この時、馬車のすぐ脇を、二人の旅人が通り過ぎたことに朱音は全く気がつかなかった。

「殿下、もう限界ですよ・・・。これだけ探してもそのロジャーという男は見つからないんです。きっと、既に違う国へ行ってしまったんでしょう」

ユリウスはこの国に朱音がいると信じて疑わないフェルデンの意向で、リストアーニャで何日も足止めを食っていることに焦りを感じ始めていた。

「いや、まだあの男はこの国にいる。なぜだかわからないが、アカネが近くに居ると感じるんだ」

なんとしても朱音を取り戻したいと願うフェルデンの気持ちは分からないでも無かったが、これ以上の旅の遅れはもう許されない。今は、一刻も早くサンタシへと戻り、国王にこれまでの経緯と知りえた情報を全て話す必要があった。

「殿下、残念ですが一度城に戻らねばなりません。我々には、サンタシを背負う大切な任務があります。ヴィクトル国王陛下が首を長くしてお待ちです・・・。アカネさんという人を探すのはその後でも遅くはありません」

ユリウスの判断は正しく、私情に走りかけていたフェルデンに冷静さを取り戻させた。
「そうだな・・・。お前の言うことが正しい」
フェルデンは、サンタシの騎士という以前にサンタシの王子でもある。自らの意思よりも、国や民を優先して考えねばならない。そして、ゴーディアと緊迫した状態の続いている今は、まさにそうされるべき時だった。
「おれが勝手だった・・・。白亜城へ戻ろう」
馬車がすぐ脇を通り過ぎたのはまさにこの時だった。
フェルデンと朱音の距離は布を隔ててはいたが、両手を広げた程の僅かな距離。こんなにも近くをすれ違ったにも関わらず、互いに気付くことは無かった。
そして、二人はこの後一気に離れて行ってしまうこととなる・・・。一度は船の中で互いの心臓の音まで聞こえる距離まで近付いていたというのに。それはまるで、満ちた潮が引く様によく似ていた。

白鳩は目がいい上に利口だった。
人探しは得意分野で、特にクリストフの頼み事となれば、彼女は尚更精を出していた。美しいゴーディアの少年王が彼女に名をつけたが、まだクリストフはその名前で一度も呼んだことはなかった。
けれど、白鳩はその名が気に入っていた。そして、その名をつけてくれた少年王のことも・・・。
白鳩とクリストフの出会いはまさに奇跡だった。
自由気ままな暮らしを望んだクリストフが、風に乗って大空を飛んでいたとき、一人と一羽が出会ったのだ。いつも青い空の下にぽつりと飛ぶ小さな白鳩だったが、生まれて初めて隣で共に飛ぶ者が現れた。
クリストフは彼女に語りかけた。
「君も一人かい？　自由はいいね・・・、けれど時に虚しい・・・」

自由を選ぶと同時に、彼は多くを捨ててきたようだった。一人ぼっちの白鳩は、彼の心に共鳴したのかもしれない。

しかし、白鳩は少年王の姿を見つけることに苦労していた。なぜなら、ここはリストアーニャ。彼はどこか空からは見えにくいところに閉じ込められているのかもしれなかった。空からは同じような民族衣装を身につけたリストアーニャの女性達や、荷馬車がたくさん行き交い、その中から彼を探し出すのは至難の業である。

クリストフ自身もそのことをよく理解していた。だからこそ、白鳩が少年王を見つけられないでいる間も、文句一つ言わず街の人々から地道に情報を得ようと努力し続けていた。

「明後日の奴隷の競り市はどこで行われるかご存知ですか？」

街ゆく人々の中には、人身売買で辛い思いをした者も少なくなく、そう尋ね歩くクリストフを軽蔑の目で見つめたり、碌に返事をしない者もいた。仮に返事をしても、その辺りの貧乏商人では競り市の正確な位置まで知らない場合が多く、やっと得た情報は、国の北の辺りだと大まかなことだけだった。

（まずいな・・・、明後日までになんとか間に合わせなければ・・・）

もし競売にでもかけられて、所有者ができてしまえば、また話がややこしくなってしまい兼ねない。その為、クリストフは何としてもその前に、朱音を取り戻さなければならなかった。

（仕方がありませんね、手っ取り早く空からそれらしい場所を探す方法を取るしか無さそうですね・・・）

日は既に傾き始めていた。

長時間の飛行はできないクリストフだったが、そうも言っていられない。彼は風を起こしても問題ないように、人や建物などが無い場所を求めて歩き始めていた。

「旦那～～～～！！！！」

裏返りそうな声が聞こえ、クリストフはふと振り返る。

「良かった・・・！　捜してたんすよっ」
汗びっしょりになりながら、息を切らしたボリスが古ぼけた時計棟から駆け降りてくるところだった。ボリスの前方を白鳩がパサパサと円を描きながら飛び回っている。朱音を見つけられないでいた代わりに、ボリスを探してきてくれたようであった。
「旦那、アカネ嬢から頼まれたんす。旦那を競り市まで連れて行ってくれって・・・」
予想外の人物の登場に、クリストフはきょとりと目を瞬かせた。
「ボリス、あなた、アカネさんと一緒じゃなかったんですか？」
うっと言葉に詰まったボリスが気まずそうにもじもじと両手の人差し指をくっつけたり離したりしながらクリストフの表情を伺う。
「えっと、その・・・。旦那が帰ってくるのが遅いんで、アカネ嬢に外の様子を見てくるように頼まれちまって・・・、そしたらタイミング悪く奴隷売りの奴らが来やがったもんで・・・」
片眉を吊り上げると、クリストフは腕組みをする。
「なるほど。出るに出られなくなって、そのまま隠れていたと・・・？」
ボリスはもじもじと指を動かしながら、情けない顔でこくりと小さく頷いた。
「まあ、あなたの立場も分からないでもないですが・・・。一応こうして居場所も探ってくれてきていたようですし、信じましょう」
クリストフはぐいとボリスの服を引っ張った。
「だとすれば、少しでも早い方がいい。さ、さっそく行きますよ」
訳が分からず、へ？　っと首を傾げるボリスにクリストフは言った。
「高いところは平気ですか？」
ボリスが何か答えようとした瞬間、びゅうと強い風が吹き上がり、二人は宙へと浮き上がった。
「ぎいやあああああああああ！！！？？？」

ボリスの耳をつんざくような叫び声。
クリストフとボリスの二人は、勢いよく天に舞い上がる。
「ひいいい

13話　裏切り

朱音は一人になった檻の片隅で、与えられた薄手の毛布にくるまり、夕刻に起こった出来事を思い出していた。

「早く出ろ！　もたもたするんじゃねえ、ガキども！」

奴隷売りの大男達が鞭を片手に檻の中の子ども達を追い立てた。

子ども達はべそをかきながら、檻の外へと出されていく。どうやら、競り市の開催場所へと到着した模様だった。

カロルはぎゅっと朱音の服を掴んだまま、決して離そうとはしなかった。

「早く出ろ！　煩わせるな！」

苛立ち始めた男が鞭を持つ手を震わせ始めたので、朱音は何とかカロルを宥めて一緒に檻の外へと出ようとした。

「おっと、お嬢ちゃん。君はここで降ろさないぜ」

眼帯の男が、にやりと不気味な笑みを口元に浮かべ、縋り付くカロルを無理矢理朱音から引っぺがした。

「アカネお姉ちゃん・・・！」

「カロル！」

不安と恐ろしさでカロルは泣き喚いている。

しかし、朱音にはどうすることもできなかった。

（きっとなんとかするって約束したのに・・・。ごめんね、カロル・・・、皆・・・）

ぎゅっと立てた膝に顔を埋めるようにして、朱音は蹲った。

今頃になって、ベッドの下に隠したアザエルの身体が心配になった。

クリストフはあの後あの宿に戻ったのだろうか？　アザエルの隠し場所に気付いてくれただろうか？　もし気付いて無かったとした

ら、昼間にボリスに会った際に一緒にお願いしておけば良かったな、等と。

ふと昨晩の夢を思い出す。あまりに幻想的で、不安定な幼いクロウの記憶。しかし、あまりに悲しい記憶だった。あの可憐なベリアルという女性はクロウの実の母ではかった。遠い記憶だというのに、なぜか朱音にも、クロウがあの女性を愛し愛されたいと強く願っていたことがわかる。

「クロウの本当のお母さんは一体どこにいるの・・・」

なぜかひどく胸が痛んだ。この痛みはきっとクロウ自身の胸の痛みに他ならない。朱音は、訳のわからない感情に固く目を閉じた。

「フェルデン・・・。わたし、どうしたらいい・・・？」

もう叶わないとはわかってはいても、朱音は彼の温もりが恋しくて仕方が無かった。

寂しいとき、辛いとき、どんなときも優しく逞しい手で頭を撫でてくれた彼の手や心の温もりが、以前にも増してあまりに恋しすぎる。あの吸い込まれそうなブラウンの瞳を、もう一度見つめ返すことができるなら、今の朱音はきっとどんなことでもするだろう。

船の暗闇の中で、あんなにも近くに彼を感じることができたことは、まさに奇跡だったのかもしれない。それも、彼は今のクロウの姿に気付くことなく、朱音の亡霊でも見たかのような反応だった。

もしこの世に神が存在するのならば、あれは一種の神からの贈り物だったに違いない。

「フェルデン・・・、貴方に会いたい・・・」

クリストフとボリスは、木陰に身を顰め、巨大なテントを見つめていた。

「旦那、さっきのありゃあ・・・、魔力だろ・・・？　ひょっとして、魔光石か？？　じゃなきゃ、あんた自身が魔力を持ってるとか・・・？」

しっと人差し指を立て、クリストフが咎める。
「今はそんなことを話している場合ではありません。それより、競り市が行われる場所とはここで間違いないですか？」
こくりと力強く頷くと、ボリスは声を顰めて言った。
「旦那・・・、間違いねえ。ここは奴隷の競り市の会場だ・・・」
ボリスが嘗ての忌まわしい記憶を思い出したかのように、狭い眉間にこれという程の皺を寄せている。
次々と荷馬車が到着し、競りに掛けられるであろう子ども達がテントの中に連れ込まれていく。
「旦那、アカネ嬢はもしかするとここにはもういねえかもしれねぇ・・・」
ぼそりと呟いた痩せた男に、クリトフが顔を顰める。
「どういうことです？」
申し訳なさそうに、ボリスは朱音の乗った馬車の跡をつけて知った事実を全てクリストフに話した。そして、昼間に朱音に頼まれた内容も。
クリストフはふむとしばらく考え込むと、すっくと立ち上がった。
「旦那、一体どこへ行くんで？」
ボリスが慌ててその後を追う。
「つまり、彼女の頼みはこうだ。“自分はいいから捕まった子ども達をうまく逃がして欲しい”」
クリストフはくくくっと苦笑を漏らした。
「アカネさんの言い出しそうなことだ・・・」
不思議そうに首を傾げるボリスに、クリストフは言った。
「旦那・・・？」
クリストフは風を集め始めた。それも、特大の風だ。
テントをバサバサと揺さぶり始めた風は、まだまだ威力を増し続ける。ふわりとボリスとクリストフの身体が宙に浮かび上がる。
グンっと掬い上げるような強風は、近くの物という物を吹き飛ばし始めた。

「なっ、なんだ!?　突風か!?」
テントの入り口付近で見張りをしていた男達が、異変に気付き騒ぎ始める。
「駄目だっ、変だぞ!?　やばいっ、吹き飛ばされる!!」
テントの支柱にしがみつき、必死に飛ばされまいと抵抗する男達だったが、テントもグラグラと大きく揺さぶられ始めた。
「どうなってんだ〜〜〜!!!!!」
より一層強く巻き起こった風に、ふわりと巨大なテントが宙に浮かび上がった。そこら中に人や物が飛びたくっている。
（こんな巨大な物を飛ばしたことはないんですが・・・、全ては貴女の為ですよ、アカネさん）
クリストフは相当の集中力と精神力を消費しているのか、苦しそうに眉を顰めながら風のコントロールに全てを注ぎ込んだ。ちょっと気を抜けば、テントごと地面に落下させてしまいかねない。そんな危うい一か八かの賭け。
この状態でそう長くは飛べまい。クリストフはリストアーニャの北にある検問所を、少ししけば隣国アストラの砂漠に到達することを知っていた。もともとは、朱音を連れてそこまで行くつもりでいたのだ。
（それまで、このまま堪えられるでしょうか・・・）
疲労の激しい現状に、クリストフはくっと声を漏らした。
空に舞ったボリスが何かを叫んでいるようだったが、もはや凄まじい風の音に掻き消され、何も聞こえない。これ程大きな風を操ったのは、クリストフ自身初めての試みだった。
ごうごうと音を立て、風は全てを飲み込む勢いで吹き続ける。
（駄目だ・・・！　もう持たない・・・！）
懸命に気落ちを集中させようとするクリストフだったが、少しずつ威力を弱める風に、テントはゆっくりと降下しつつある。
あともう少しで検問所だった。ぐらぐらと揺れならが、テントが地上目掛けて落下していく。

（もう少し！）
最後の気力で、クリストフはもう一度風に威力を増加させた。
もう一度高度を増したテントは、検問所の上を通り抜け、少し先の砂漠の砂の上にゆっくりと腰を降ろした。
全身運動を行ったかのような疲労感に見舞われ、クリストフ自身もふわりと地面に降り立った。ぱらぱらと降下しては地面に転がっていくのは、吹き飛ばされた人達である。
「わあああああ」
しばらくすると、テントの中から蜘蛛の子を散らしたように数百人の子ども達が飛び出して来た。
「見て！　検問所の外だ！　僕ら、売られなくて済むよ！！」
もう立っている気力も残っていないクリストフは、ふっと口元を緩ませて砂の上に座り込んだ。
「旦那！」
ボリスが駆け寄ってくる。
「あんた、ほんとスゲエな！　ありがとよ、俺たちを逃がしてくれて！　ガキんちょどもの分も礼を言うよ！」
満面の笑みを浮かべて、ボリスはクリストフの手を握った。
国外へと無事出たものの、子ども達が大変なのは恐らくこれからだ。まだリストアーニャに住む親兄弟と再会するには相当の苦労がいるだろう。
「アカネお姉ちゃんが約束を守ってくれたんだよ！！　やっぱり、アカネお姉ちゃんはアルテミス様だったんだ！！　じゃなきゃ、こんなことできないもん！！」
テントから這い出てきた赤毛の少女が目を輝かせながら他の子ども達に話している。
クリストフはその言葉を聞き逃さなかった。だるい身体を起こし、ゆっくりと少女に近付いていった。
「君はアカネさんを知っているんですね？」
驚いて警戒した様子の少女だったが、クリストフが朱音の知り合

いと分かると、荷馬車でのことを話して聞かせてくれた。
「では、やはりアカネさんはこのテントにはいないんですね・・・」
溜息をついたクリストフの姿を見て、少女は言った。
「アカネお姉ちゃんは、サンタシに連れて行かれると奴隷売りの人達が言っていたよ。サンタシの王様に会わせるって男の人達が話してた」
少女達が散り散りになって去った後、クリストフはほっと息をついた。サンタシまで連れて行かれるとなると、すぐにどうのこうのされるという訳ではなさそうだ。しかし、朱音が目指していた旅の終着点に、囚われの身で向かうことになろうとは皮肉なものだった。
「ボリス・・・。もうリストアーニャから脱出できたのですから、後は好きに行きなさい。」
かと言ってまだ安心はできない。この先、どのルートで朱音がサンタシへと連れて行かれるかはわからないが、まだま小国は治安がよくないところもたくさんあり、途中に賊が出て襲われるという可能性も無きにあらず。それに、無事にサンタシに到着できたにしろ、サンタシの国王ヴィクトルが朱音の姿を見たらどうなることか。憎き敵国の新国王とわかれば、どんな行動に出るかわからない。
だからこそ、クリストフは急がねばならなかった。どうしてもサンタシに先回りしておく必要が出てきたのだ。
「ひでえな、旦那、忘れたのか？　ほら、魔光石を譲り受けた相手を教えると言ったろ？」
クリストフはがぴくりと顔を上げた。
「ヘロルド・ケルフェンシュタイナー閣下だ」
ボリスの口から信じられない名前が飛び出し、はっとクリストフはボリスを見つめた。
「ボリス・・・、あなたは・・・」
ボリスは可笑しそうに痩せた背を揺らしながら声を出して笑った。

「あっしはヘロルド閣下の忠臣なのさ。ヘロルド閣下の仰る通り、クロウ陛下は魔力をこれっぽっちもお持ちでないらしい。思ったより事が簡単に済んだもんだから拍子抜けだぜ」

トカゲそっくりの吊り上った細い目で、ボリスは愉快そうに話した。

「アカネさんを陥れたんですね・・・」

ボリスはあの夜、奴隷売りの男達に朱音を売り渡したのだ。

軽蔑したような目でクリストフは見返す。

「ああ。あの夜、こうなることを予想して奴隷売りに情報を売りつけたのはあっしさ」

ボリスは吐き捨てるように言った。

「どう思われようが、構わねぇ。あの王がいなくなれば、ヘロルド閣下は晴れてゴーディアの新国王となり、あっしはその側近になれるって訳だ」

ボリスには初めから怪しげな点はいくつもあった。しかし、クリストフはそれを見落としていた。

「宿でアザエルの死体を見た時にはぎょっとしたが、邪魔がいなくて助かったぜ。このところ、どうもあっしはついてるらしい！」

今のクリストフにはもうその場から風を起こして逃げる程の体力も、ボリスに対抗する程の魔力も残っていなかった。そして、朱音を空から探し出す力さえも。

「ここであんたに邪魔をさせる訳にはいかねぇ。あんたを魔城へ連れて行く。無断で魔城に忍び込み、国王を攫った罪は重いぞ。きっとその命をもって償わざるを得ないだろう」

ボリスは手の平をクリストフに向けた。

（まずい・・・！）

身体の思うように動かないクリストフは、ボリスのもう一つの手に引っかかってしまった。

「眠れ」

術を掛けられて、ぱたりと砂の上に倒れこんだクリストフは、一

瞬にして深い眠りに落ちてしまっていた。
ボリスは耳につけた小さな黒いピアスに触れた。
「あの首飾りの魔光石は偽物だ。本物はこっちだってな」
役立たずと言われ続けてきたボリスだったが、今回の働きにはきっとヘロルドも満足してくれることだろうと、ボリスはほくそ笑んだ。
こうした一人の卑怯な裏切り者の手によって、朱音の旅は一挙に転落への道筋を辿ることとなった。

二人が朱音達の宿泊先の宿に到着したのは、翌日の朝であった。
「ほんとにこの部屋だったのか～？　そもそも、この宿じゃねえかも」
エフがぼりぼりと頭を掻きながら言った。
「いいえ！　ここで間違いない筈です。この地図にもちゃんとそう記してあるじゃないですかっ」
ルイは部屋の窓を開け放つと、ポケットから皺くちゃになった紙切れを取り出し、外の景色とそれを見比べた。
「じゃ、白い鳩が持ってきたその紙切れの地図自体が間違ってるとか」
呆れたようにルイは向かいの宿を指差した。
「ほら、あの宿屋の屋根に丸い三重円のモチーフが描かれているでしょう？　この地図にも同じマークの宿が記されています。ということはですね、向かいのこの宿が目的地なんです！」
力説するルイを横目に、エフはしれっとした目を向けて言う。
「んじゃ、なんでこの部屋にはお前の捜している奴らがいないんだ？」
「えっと・・・、それは・・・」
返答に困ってルイは部屋の天井を意味もなく見上げる。古い宿の

せいもあり、天井には雨漏りの染みがところどころに広がり、黒ずんでいる。
「まあ、確かにちょっくら前までは誰か居たのは確かだろうがな」
エフが古ぼけた机の上を指指す。
食べかけのパンは乾燥し、肉の骨が二本皿の上に転がっている。
ベッドのシーツもくしゃくしゃに乱れているし、奇妙なことに、部屋のドアの鍵は壊されていた。
「この部屋で何かあったのかも・・・」
ルイは何か胸騒ぎを感じた。
「入港したときに隣にいた親爺が話していたこと覚えてるか？」
エフは二人がリストアーニャの港に着いたとき、先に着いていた商船の乗り組み員の男が話していた内容のことを言っていた。
「えーと、突然突風が起こって競り市の会場ごと国外まで吹っ飛んだとかなんとかの話ですか？」
そう自分で言っておきながら、ルイははっとして口を押さえた。
（風！？　まさか・・・）
あのときは、噂好きの親爺の戯言程度にしか思っておらず、聞き流していたルイだったが、今思うとどうも引っ掛かる。
「どうかしたか？」
ぼすんとベッドに靴のまま豪快に寝転ぶと、エフはつまらなさそうに言った。
「いえ、なんでも・・・！」
ベッドの上ですっかりリラックスモードのエフは、とんでもないことを口にし始めた。
「なんかよ、その事件にお前の仲間が関わってるってことねえよな？」
ドキリとして、ルイは心臓を押さえながらわざとらしい笑みを浮かべる。
「あはは～、嫌だなあ、エフったら。まさかそんなことある訳～～・・・」

「いや、どうだかな。そんだけの突風だ、巻き込まれて一緒に吹っ飛んだなんてことあるかもしんねぇぞ？」

ルイは、やはりクリストフや朱音に何か起きたのではないかと思い始めていた。

仮にその突風とやらがクリストフの魔力によるものであったなら、彼が何もないところであの力を使うとは到底思えない。何か力を使わなければならない程切迫した状況に追いやられていたに違いなかった。

急にそわそわと落ち着きを無くし始めたルイを見兼ねて、エフははあと溜息をついて起き上がった。

「しゃあねえな・・・。もうついでだ、その事故現場とやらに行ってみっか？」

こくこくと目を潤ませて頷く灰色のルイの眼を見て、観念したようにエフはぼりぼりと頭を掻く。

エフは粗暴で大雑把なところはあるものの、見所のある面倒見のいい青年のようであった。

二人はリストアーニャの北の検問所へとやって来た。

検問所前には国のお役人がわらわらと集まり、何か忙しなく話している。どうも、国境を出たアストラの領土内に突風で飛ばされた物達が散らばっているようで、簡単には往来できないでいるらしかった。

その他にも、どうもその噂を聞きつけた一般人も多く群がっていて、とてもじゃないが検問所を通ることなどできそうにない。

「テントの中にはうちの子もいたんですよ！　中の者は皆無事なんですか！？」

役人達が怖い顔で一般人に返答している。

「ここは一般人の来るところではない。下がりなさい！」

エフは道中で買った肉をかじりながら、うんざりしたように言っ

た。
「えらいごった返してるな。こりゃ当分は通れそうにねぇぞ」
焦りのあるルイは、このどうしようもない状況に苛立ちを隠せない。
「号外！　号外！！」
すぐ近くの石橋の上で、若い男が束になった紙を配り始めた。
「おい、一枚くれ」
ひょいっと横からエフが男の横から紙をくすねる。男はそれに気にした様子も無く、そこら中の人という人にばら撒いている。
「さっき入ったばかりの大ニュースだ！　号外！！　号外！！」
エフが紙に視線を落とすと目を丸くした。
「おい・・・、これ見てみろ」
検問所に近づけないことで苛立っていたルイは、手渡された紙をいい加減に受け取って不機嫌そうに目を通した。
「嘘だ・・・！！」
とんでも無い見出しに、ルイは必死に活字を目で追う。心臓が早鐘のように打ち始めている。
“ゴーディア、サンタシ、戦再開！！”
十年前の条約以来、停戦中だった二国間だったが、とうとう恐れていたことが起こってしまったのだ。
“ゴーディア側がサンタシに宣戦布告を申し立て、メトーリアに停泊中のサンタシの商船を砲撃した後、乗組員を見せしめに殺害。サンタシの賢王ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユはひどく憤慨し、ゴーディアの挑発に受けて立った。ゴーディアからは既に軍の進出の動きが確認されており、サンタシ側でも近くそれに対抗する処置がとられるであろう。
十年前にヴィクトル王とルシファー王のもと結ばれた停戦条約は

ゴーディアの手酷い裏切りにより儚くも破られてしまった。各国からのゴーディアに対する批判の色は強く、新国王クロウへの批判の声も多くあがっている。これも全て、新国王クロウの幼さゆえの過ちなのだろうか。だとすれば、誰かが彼の間違いを正してやらねばならないだろう。いや、誰が彼を止めることができるであろうか。

”

くしゃりと紙を握り潰すと、ルイはぎりぎりと唇を噛んだ。

（あいつだ・・・！　ヘロルドに嵌められたんだ・・・！）

クロウが魔城を留守にしている間、あの男が好き勝手に事を運んでいたらしいことが、手にとるように分かる。クロウを悪者にすることで、自らが王の座を手に入れやすくしているに違いない。

「しかし、このゴーディアの新国王クロウってのは、相当の我儘坊ちゃんらしいな。国を巻き込むなんざ恐れ入るぜ」

そう言ったエフに、ルイは掴みかかった。

「違う！　陛下はそんな方じゃないっ！　陛下は、陛下は・・・、優しくて思いやりのある人で・・・」

びっくりしたようにエフがルイの掴み掛かった手を握る。

（陛下にきっと何かあったに違いない・・・！　陛下を助けなきゃ！！）

14話　王子の帰還

「兄上っ・・・！！」
フェルデンが王室に飛び込んだ。
「フェルデン！　帰ったか！」
ヴィクトル王が壇上の上の玉座から勢いよく立ち上がり、開いた扉から飛び込んで来た実弟の姿を見つめた。
フェルデンの後を追うように、ユリウスが早足で入室して来た。
「兄上、いえ、ヴィクトル陛下！　帰還が遅くなり申し訳ありませんでした」
玉座の前に佇むヴィクトル王の前に跪き、フェルデンは礼の形をとった。
金の髪はひどく乱れており、身に着けている旅装束はよれて随分汚れと綻びが目立つ。ユリウスもフェルデンの少し後ろで礼の形をとる。二人とも、額からは多量の汗を流していた。
リストアーニャを発った後、すぐ後にフェルデンとユリウスの二人の耳にも、サンタシとゴーディアの停戦が解かれたという噂が入ってきた。慌てた二人は、早馬を飛ばし、驚異的な速さでサンタシへと戻ってきたのである。
「いや、お前が無事戻ったことが何よりだ。それに、わたしには、そち達が急ぎ帰ったように見えるぞ」
ヴィクトル王はとんとフェルデンの肩に手を添えると、面を上げるように指示した。
「陛下、とんでもない事態になってしまったようですね」
ふむとヴィクトル王が難しい顔して頷いた。
「そち達がゴーディアを出立したという連絡を受けてすぐのことだ。どういう訳か、ゴーディアがあんなにも隠したがっていたルシファー王の逝去が大っぴらに公表されたという情報を受けた。それと同

時、今までどこに雲隠れしておったかもわからぬルシファーの息子、クロウが即位したと言うではないか・・・？」

フェルデンは滴る汗を拭うことも忘れ、ヴィクトルの隙の無い目をしかと見つめた。

「それには、やはりアカネが大きく関わっています」

ヴィクトルがぴくりと眉を動かす。

「何、アカネが・・・？」

大きく頷くと、フェルデンは知り得た情報を包み隠さず話し始めた。

「おれ達がゴーディアに着いた頃、ちょうど“復活祭”と呼ばれる祭りが首都マルサスで行われていました。それに乗じて、城内で何やら不気味な儀式が行われた模様で、その儀式にアカネが贄（にえ）として犠牲になりました。その儀式の直後です、クロウが突如ゴーディアの地に現れたのは・・・。しかし、なぜアカネが儀式の贄として選ばれたのかは未だ不明のままです」

ヴィクトルは玉座に腰を下ろし、フェルデンの報告に聞き入った。

「また、この頃のゴーディアは、我国との戦を望んではおりませんでした。魔王ルシファーの側近であるアザエルが、我国の領土内であるセレネの森に無断で立ち入り、悪行を働いた件を会談に持ち出すと、元老院はアザエルの行動は一切国とは関係しないと否定し、直様アザエルの身柄をサンタシに引渡すことを決めました」

途中訊ねたいことはあったヴィクトル王だったが、決してフェルデンの話の腰を折ることはしなかった。

「おれたちはその後、魔力を封じられたアザエルを連れ、帰路へ着きました。しかし、情けないことにおれの肩の傷が悪化し、急遽キケロ山脈からボウレドの街へ立ち寄り、一時休養をよる羽目に・・・。その後、遅れてメトーリアの港からリーベル号に乗船し、サンタシのディアーゼ港を目指しました。後は陛下もご存知の通り、滅多に見ない大嵐に見舞われ、船に航行困難な程のダメージを受けてしまい、それで、近くのリストアーニャの港に・・・」

数々の旅の困難に、ヴィクトル王はこの二人がよく無事で帰って来たものだと改めて感じていた。

「しかし、まだ陛下にお伝えしなければならないことがあります。帰還途中、幾度もゴーディアの元老院からアザエルに向けて刺客が向けられていました。それは、アザエルを通じてゴーディアの国家機密が我国に漏洩することを恐れたことからのようです。リーベル号での嵐の夜、何者かが確かに船内に潜み、事を起こしました。おれとユリウスの邪魔が入らぬよう、飲み物に睡眠薬を混入し・・・。おれは肝心なときに何も目撃していませんが、その後アザエルが船内から忽然と姿を消したのです・・・」

一通りのことを話し終えたフェルデンは、静かにヴィクトル王の反応を待った。

ヴィクトル王は、裏で何やら良くない者の手が回っていることを改めて感じることとなった。

「任務の報告、ご苦労だった・・・。予想以上に困難な旅となったようだな。アカネのこと、誠に残念であった・・・」

フェルデンはふっと視線を床に落とした。

「結局、おれはアカネを救うことができませんでした。ジゼルのように、彼女もまた魔族の手により犠牲となってしまった・・・」

哀れむように、ヴィクトル王は言った。

「お前のせいでは無い・・・。全ては憎むべき魔族、そしてゴーディアだ」

しかし、そう言った後、王はこう付け加えた。

なぜなら、まだ王には腑に落ちないことが一つ残っていたのだ。

「だがな、わたしにはどうしてもそのクロウという即位したばかりの国王の考えが理解できぬのだ。ゴーディアの元老院が、あれ程我国との戦を避けたがっていたにも関わらず、なぜこんなにも急に停戦条約を破り捨てた・・・！　その、クロウ王とやらは一体何を企んでおる・・・!?」

ヴィクトル王は珍しく取り乱しているようであった。

何の罪もない商船の乗組員を殺すという卑怯なゴーディアのやり方と、苦労してやっとのことで漕ぎ着けた十年前の停戦条約を見事に破り捨てた新国王クロウにひどく立腹していた。

「陛下、実は・・・、まだ先程の話には続きがあるのです」

申してみよとでも言うように、ヴィクトル王は小さく頷いた。

「おれは新国王クロウと会いました。彼はまだ少年の域を出ない幼い王です。しかし、ルシファー王を生き移したかの容貌で、恐ろしく美しい王でした。おそらくは、父同様強大な魔力を内に秘めているのでしょう・・・」

フェルデンは直後、玉座の前で床に頭をついた。

「そちは一体何をしておるのだ・・・！？」

突然のフェルデンの行為に驚き、ヴィクトル王は思わず玉座から立ち上がった。

「陛下・・・、この戦、全てはこのおれに責任があるのです。取り返しがつかないことは分かっています。ですから、おれに適切な処分を・・・！」

長い旅を終え戻ってきたばかりの弟が、自らの前に平伏すという、予想だにしない行動を起こしたことで、ヴィクトル王は驚き戸惑った。ユリウスもじっと下を向いたまま跪(ひざまず)いていたが、このときばかりは咄嗟に顔を上げてしまった。

「どういうことだ、フェルデン・・・？」

静かなヴィクトル王の声に、フェルデンは落ち着いた口調で返した。

「おれは、アカネの亡骸を見た後、悲しみの余り我を失いました。そのせいで、おれは取り返しのつかないことをしてしまった・・・」

フェルデンが何を話そうとしているのかに気付いた瞬間、ユリウスは叫び出していた。

「殿下、いけません！！」

ユリウスの声が聞こえていなかった訳ではないが、フェルデンは罪の意識から兄であるこの男に黙っていることなど出来なかったの

だ。

「おれは、クロウ王の首を絞め、殺害しようとしたのです・・・」

「違います、あれは事故なんです！　陛下！」

ヴィクトル王は目を見開き、フェルデンを呆然と見下ろしていた。懸命なユリウスの言葉にも関わらず、フェルデンは首を横に振った。

「あれは事故などではありません。おれはあの時確かにアカネの命を引き換えに現れたあの少年王を心の底から憎いと思い、殺意を抱いた。陛下・・・。国家をこのような危機へと陥れた罪はあまりに大きい・・・。適切な処分を・・・」

信じられない事実を知ってしまい、ヴィクトル王は頭を抱え込んだ。

ユリウスも、やるせない思いで首を左右に振った。

「フェル・・・、頭を上げなさい・・・」

それでも頭を上げようとしないフェルデンに、ヴィクトルは構わず言葉を落とした。

「ゴーディアの突然の裏切りの理由はよく分かった・・・。そして、停戦中の国王の首に手を掛けてしまったそちの過ちも・・・」

フェルデンは、どんな処分も受けるつもりでいた。それがどんなに辛く苦しいものであったとしても。

「しかしだ、今はそうも言っておれぬ。ゴーディアからは既にこちらに軍が向けられておると情報が入っておる。我国もみすみすやられる訳にもいかぬのでな、準備でき次第こちらからも軍を出すつもりでいる。そちの指揮無しで騎士団は動くまい。処分を考えるのは全て片付いてからだ」

ユリウスは、ヴィクトル王の賢明な判断に唯々感謝した。

「それにな、本来は国王のわたしが言うべきことでは無いのかもれぬが、そもそもはアカネを我領土内から連れ去りその命を奪ったことや、我国からの使者に刺客を送り込み、飲み物に薬を混入させる等の所業を行ったのはゴーディア側ではないか。我国とて、我慢の範疇を超えておる。遅かれ早かれ、きっとこの戦は再開しておった

だろう」

そうは言うものの、このような事態を招いたのが自分かもしれない、というフェルデンの罪悪感はどうにもならなかった。今はサンタシの為に、どこまで自分が働き、尽くせるかということだけが、唯一の罪滅ぼしへの道として残されていた。

「陛下、この先おれは陛下やサンタシの為ならば命を投げ売る覚悟です。おれの過ちは消えませんが、今一度おれを信じてください」

フェルデンは頭を下げたまま、力強い声で誓った。

「何を今更・・・。わたしがそちを疑ったことなど今まで一度たりともない。そちは、あのディートハルトが認めた男ではないか。今もこれからも、そちの働きに大いに期待しておる」

兄であるヴィクトル王の言葉を、フェルデンは静かに胸に叩き込んでいた。

フェルデンは朱音の存在を感じることについて、ヴィクトル王に話すことはしなかった。それは、あまりに信憑性に欠ける内容だったことにある。

ユリウスには話していたが、それをヴィクトル王に話したところで、空想や想像という不確定で曖昧なものを好まない彼はきっと信じないだろう、とフェルデンは思った。

「フェルデン殿下、どうしてあんなことを言ったりなんかしたんです！」

ユリウスがひどく不機嫌な顔でフェルデンに抗議した。

「どうした？」

あっけらかんと答えるフェルデンに、ユリウスは更に噛み付く。

「どうした？　じゃありませんよ！　クロウ王の首を絞めたことをどうして馬鹿正直に陛下に話したんです！？　あれじゃあ誤解されても仕方ないじゃないですか！」

フェルデンが変わらぬ調子で返す。

「誤解も何も、全て本当のことだ。どうして陛下に隠す必要がある

？」

返す言葉が見つからずに、ユリウスは足元に視線を落とした。

「じゃあ・・・」

ぽつりと零したユリウス。

「じゃあ、なんでアカネさんのことは話さなかったんです？」

少し黙った後、フェルデンは答えた。

「あのヴィクトル・フォン・ヴォルティーユ陛下が、死んだ筈のアカネが別の姿で生きていると話したところで信じると思うか？　あの人は目に見えるものや確かな情報しか信じない、そうだろ？」

うっと言葉に詰まり、ユリウスはぽりぽりと鼻頭を小指で掻いた。

『コンコン』

外からのノックの音に、フェルデンが入室を許可する。

医療箱を手に入室してきたのは、高齢の王族直属の医師、フィルマンであった。

真っ白く長く生やした髭は、少し見ない間に少し伸びたように感じる。

「フェルデン殿下、肩の傷の具合を診に参りました」

ユリウスが気をきかせ、フェルデンの傷が診やすいようにと彼に場所を譲る。

フェルデンは、彼に診せる為に、上半身は巻かれた包帯を残して、着替えたばかりだった上着を全て脱衣した。

フィルマンは、その巻かれた包帯を丁寧にはずしてゆく。

「旅の道中、傷が悪化して一時生死をさ迷ったと伺いました。わたしには、あの深い傷で任務をこなされたこと自体不思議でなりません」

フィルマンは、その手を動かし続けながら話した。しかし、全ての包帯を取り去ると、驚きのあまりその手を思わずぴたりと止めた。

「これは・・・」

フィルマンの様子がいつもと違うことに気付き、ユリウスが背後

から声を掛ける。
「どうかしたんですか？」
ごくりと唾を飲み込むと、フィルマンはユリウスを近くに呼び寄せ、フェルデンの肩の傷の説明を始めた。
「見なさい、それ程悪化した傷が今ではほぼ塞がっている。この処置からするに、おそらくは血抜きをしたのだろうが、その際のメスの跡がほとんどと言っていい程残っておらん・・・。この傷を診た医者とは、余程の名医だったのだろう」
ユリウスの脳裏にふとボウレドで出会った町医者、フレゴリーが横切った。
「フレゴリー・・・」
ほとんど無意識にユリウスが口走ったその名前を、フィルマンは聞き逃さなかった。
「フレゴリーが殿下の傷を！？」
きょとんとフェルデンがフィルマンの老いた顔を見返す。
「ええ・・・。フィルマン先生はフレゴリーを知っておられるんですか？」
ふむと小さく声を漏らすと、フィルマンはすっかり年老いた手で医療箱の蓋を開いた。
フィルマンは五十五年前の出来事を追思していた・・・。

「誰か！　医療班・・・！」
今から二百年前、サンタシはゴーディアの仲間の裏切りを利用し、一時落城の危機にまで追い込んだ（マルサスの危機）のだが、魔王ルシファーの強大な魔力により、サンタシは勝利までのあと一歩を惜しくも逃していた。
しかし、その後サンタシで即位した、ロベール・フォン・ヴォル

ティーユ王の愚かな国政によりサンタシは国内から弱っていった。
それを見逃さなかった魔王ルシファーは、いよいよサンタシ国内へと勢力を伸ばし、ミラクストーをはじめとする武器生産の中心地を抑制していった。
身動きのとれなくなったロベール王は、軍事国カサバテッラと協定を結び、なんとか持ち直すことに成功。
百三十年前、こうしてカサバテッラ、サンタシの共同作戦が開始されたのであった。
そうして攻防を繰り返すうちに五十年の月日が流れ、今から五十五年前、カサバテッラ、サンタシによる史上最大の作戦“飛行撃砕作戦”が決行されたのだ。
カサバテッラが軽量開発して長時間の飛行を可能にした、ハングライダーでの飛行により、嘗て試されたことのない上空からの攻撃を計画したもので、この年、ゴーディアの上空では激戦が繰り広げられた。
「医療班！　誰か近くにいないのか！？」
ハングライダーの残骸があちこちに転がり、中には再起不可能な程に骨組みが捻じ曲がっていたり、折れてしまっているものも多数ある。
夜の明けない真っ暗な空は、上空で繰り広げられる激戦で、炎の色に染まっていた。
「頼むっ、誰か・・・！」
フィルマンは吹き出る脂汗を手の平で拭った。
十七歳という若い彼は、医師見習いの気の弱い青年であった。
岩の陰に隠れ、周りに別の医療班員がいないか懸命に目を凝らして探す。しかし、皆どこへ行ってしまったのか、この近くには医療班員はフィルマン一人しか見当たらなかった。
空にはまるで凧のようにハングライダーの影が弧を描いている。
バリスタによる鋭い槍に貫かれた者が、次々と上空から落下し、そのうちの一人がどさりとフィルマンのすぐ目の前に転がった。

「ひっ」
落ちた衝撃でぐしゃりと折れ曲がったハングライダーの羽。男はごぶりとどす黒い血液を口から溢れさせると、絶命した。
男の胸には太い槍が貫通していた。
フィルマンは今頃になって気付いたのだ。どうしてこの辺りに味方の医療班の者がいないのかを。
（皆、退避したんだ・・・！）
どっと噴出す汗。よく考えてみれば、上空作戦は、上空から街を破壊して深刻なダメージを与えることを狙いとしたもの。今から火の海と化す場に味方の兵を地上に留めておく訳が無い。
「誰か・・・、いないのか・・・？」
だんだん弱々しくなる、誰か知らない仲間の呼び声。
フィルマンは落下物に怯えながら、仕方無く声の主の元へと向かった。

「い、医療班の者です・・・」
力の入らない声で、フィルマンは声の主に言った。
男は地面の窪みに身を隠しながら、座り込んでいた。
「ああ・・・、誰もいないのかと思った・・・。悪い、ちょっと傷を診てくれないか」
男の息は荒く、ひどく顔色も悪い。
フィルマンは男の怪我に対処してやれる自信が無かった。知識はあったものの、このときの彼はまだ、ひどく経験が浅かったのだ。
「は、はい・・・」
男の左腿は血液でぐっしょりと染み渡り、地面にも血溜まりができている。
持っていた医療キットの中から鋏を取り出すと、フィルマンは震える手で、男の傷周りの衣服を切り裂いていく。
「ああ・・・、これは・・・」
ひどい出血だった。剣での切り傷であったが、今尚血はどくどく

と溢れ出している。傷は動脈にまで達しているようだった。
「おれは助からないのか？」
男は青い顔で言った。フィルマンは、無言のまま腿の際をぎゅっときつく紐で縛り、止血を図る。しかし、一向に血は止まらない。
フィルマンは男を助けられないと思った。
「坊や、代わろう」
突然背後から別の男の声が降ってきたと思うと、男はフィルマンを押し退けるようにして窪みに飛び込んできた。
「動脈がいっちまったかな・・・」
傷を見るなり、男はフィルマンに指示を始めた。
「坊や。ちょっとこっち来て、ここんとこを人差し指で押さえててくんないか」
何者かわからぬ男の指示に、フィルマンは従順に従い、男の指示した通りにその部位を押さえる。
「出血が・・・」
明らかに出血量が少なくなった傷に驚き、フィルマンは男の顔を見上げた。
驚いたことに、その中年の男はゴーディアの医療部隊の制服を見につけていた。
「ま、一時的なもんだ。ちょっと痛むぞ」
そう言った途端、怪我を負った男が悲鳴を上げた。
一体何をしたのかと目を丸くしていると、傷口をアルコールで洗い流したようであった。
「悪かったな」
慣れた手つきで、男は布袋の中から白っぽい粉を摘みか取り出し、傷口にふりかけ始めた。
「な、何をふりかけているんです・・・？」
不安な声でフィルマンが訊ねると、男は一種の痺れ薬のようなものだと返事をした。
その後は急に痛みが引いたのか、怪我の男は静かに謎の男の治療

を受け始める。この最悪な状況の中でさえ、目の前の謎の男は神業とも言える手つきで見事に縫合していく。

息を飲んで、フィルマンはじっと様子を見守っていた。

「おし、なんとか縫合が終わった。だが、出血量が多すぎる・・・、あまり状態は良くないな・・・。すこし体力を回復しておいてやろう」

そう言うと、手を翳し、何かをし始めた。途端、淡い光が手の平から放出され、怪我の男に吸収されていく。

「あ、あなた、魔族!?」

ふっと苦笑を漏らすと、男は言った。

「ああ・・・。悪いが、魔力と言っても怪我自体を治すことのできる力は無いに等しい。わしにできることは、こうして患者の体力を回復することぐらいだ」

この目の前の男が、どうして敵側の者の傷を治し、命を救ったのかフィルマンには理解できなかった。

「どうして・・・、敵の兵を助けたんです・・・?」

愚問だとでも言うように、男はフィルマンを呆れたように見た。

「医者が患者を助けて何が悪い。患者に敵も味方も無かろう?」

フィルマンは雷に打たれたような衝撃を受けた。

自分もいつか、この男のような医者になりたいと、強く思ったのだ。

「あなたの名前は・・・?」

「フレゴリーだ、坊や」

「そうだね、彼はわたしの人生の手本だ。あれから五十五年が経ち、わたしはすっかり老いぼれてしまったが、魔族のあの人は、まだあまり変わらぬ姿でいるのだろうな・・・」

フィルマンは懐かしそうに瞳を閉じ、そう呟いた。
「ええ、彼はとても元気そうでした」
「それは良かった」
ひどく安心したように、フィルマンはフェルデンの傷に、つんとする臭いの薬を塗りこんでいく。
「それはそうと、殿下。実は、もう一つお話したいことが・・・」
急に声を顰めたフィルマンに、フェルデンが頷いた。
「実は・・・、あのアカネという少女の亡骸を拝見させていただいたのですが・・・、なんと肉体はまだ完全に死んでいる訳では無いようです・・・」
フェルデンは驚きで目を見開き、咄嗟に薬を塗るフィルマンの手を掴んでいた。
「フィルマン、それは本当か!?」
嫌な顔一つせず、フィルマンは静かに答えた。
「ええ。少女の胸には確かに短剣が深く突き刺さり、心臓を貫いている。しかし、不思議なことに、彼女の身体は仮死状態のまま維持されています・・・」
衝撃の事実に、ユリウスとフェルデンは思わず互いに顔を見合わせた。

15話　危急存亡

バシャリと冷水を頭から浴びせさせられ、クリストフはようやく目を覚ました。
「起きろ」
耳に心地の悪い掠れた声が牢全体に響き渡る。
濡れ鼠になったクリストフの髪は、雫を垂らし、いつもの美しく整えられた髪も台無しになっていた。
「おい、お前。お前は何者なのだ」
両手、両足首には思い鎖がつけられ、牢の壁から突き出た分厚く頑丈な鉄の輪に繋がれている。
「お初にお目にかかります、ヘロルド閣下」
余裕のある笑みで、クリストフは優雅に礼の形をとってみせる。
「おお胸糞の悪いっ！　お前のような奴に名前を呼ばれたくはないわ！」
格子ごしに、ヘロルドが不快感を露わにして、大きな口をへの字に曲げる。
「わたしはクリストフ・ブレロ。しがない美容師にございます」
ふんっと鉤鼻を一つ鳴らすと、ヘロルドは後ろに控えていた従者の男から丸めた洋紙皮を受け取る。
目が合った瞬間、従者の男はふっと口元を緩ませ、いやらしい笑みを浮かべた。
（ボリス・・・）
その男こそ、朱音やクリストフを騙し、こうして身柄を拘束したボリスに他ならなかった。
ヘロルドは羊皮紙を広げると、声高々にそれを読み上げ始めた。
「クリストフ・ブレロ、ゴーディアで数年前から人気の美容師・・・。以前、クロウ殿下の整髪の際にもこの城を訪れていたようだな。

だが、調べさせてみると、エリックという売れない画家の肩書きや、ロジャーという貴族階級の紳士。他にもあげればきりがない程の名と偽名・・・。なるほど、お前は詐欺師か」

見下したような気味の悪い笑いを含ませ、ヘロルドは言った。

「そうだとすれば、詐欺罪、魔城無許可不法侵入罪、国王誘拐罪全ての罪でお前は審議にかけられる。そうなれば、死罪は免れぬだろうな」

完全にクリストフを落胆させることを狙った罪状の数々。しかし、当の本人はくすりと笑いを零した。

「何が可笑しい？」

クリストフの場に似合わない笑いに苛立ったヘロルドは鉤鼻に皺を寄せて言った。

「いえ・・・、気にしないで下さい。こっちのことです」

ヘロルドのすぐ近くに控えていたボリスが、何かヘロルドに耳打ちをした。

「何っ、それは本当か？！」

目を見開き、ヘロルドは忠臣を振り返った。

「誠でございます、ヘロルド閣下。このわたし、しかとその者の力、目にしました」

ふふふと耳障りな声で含み笑いを零すと、ヘロルドはクリストフの捕えられている牢を潜り、中へと足を踏み入れた。

「風を操ることができるとは本当か？」

落ち窪んだ目がぎょろりとクリストフを見据える。

クリストフは無言のままその目を見返した。

「まさか、我国ゴーディアの軍の出ではあるまいな？」

クリストフは言った。

「ヘロルド閣下、貴方はわたしを過大評価しているようです。わたしの力などとるに足りないものです」

かっとしてヘロルドが唸りたてる。

「嘘を申すな！　そこのボリスが、競り市の会場となる程の巨大テ

ントを風で吹き飛ばしたと申していた」
肩を竦め、クリストフは微笑みながら目の前の痩せたひどく姿勢の悪い男を見上げた。
「白を切る気か！　ああ！　なんといけ好かぬ奴だ！　まあよいわ！　調べればすぐにわかること」
ヘロルドは疑っていた。巨大テントを吹き飛ばす程の風を操ることのできる男が、元軍人でない筈がないと。そして、これ程隠したがるには何か訳があるのでは、と。
「脱兵者か？」
何も話そうとしないクリストフの前でヘロルドはゆっくりと屈み込むと、その骨ばった顔を静かにクリストフの耳元へと近付けていった。
「脱兵がどれだけ重罪かは知っておろうな。脱兵したとわかれば、お前には審議の必要すら無くなる。極刑だ」
ぎょろりとした目を細め、愉快そうにそう言い残し、ヘロルドは牢を出ていく。
「ボリス、能無しのお前にしてはよくやった。この男が魔力を使って馬鹿なことをする前に、魔力を封じておけ」
「はい、閣下」
クリストフはぼんやりと濡れた冷たい天井を見上げた。
濡れた身体に地下の空気ははひどく冷える。ふうと息を吐くと、クリストフは朱音のことを案じた。
（当分は身動きすらとれそうにない・・・。アカネさん、無事でいてください）

灼熱の太陽の下、朱音はチッポカという動物の背に跨り、揺られていた。

チッポカは、らくだとロバの中間のような生き物で、もつれたようなワシワシの黒い鬣に、大きなロバのような耳。それに砂漠に適した背のこぶは、らくだと同じ役割をもっているようだ。

アストラの砂漠での旅は、予想を上回る過酷さであった。

ただでさえ貴重な水は、眼帯の大男アリゴが腰ベルトにきつく結わえつけ、朱音にも必要最低限しか与えてくれない。朱音は、流れ滴る汗さえ、もう枯れ果ててしまっているのではないかと思った。

「それにしても、お嬢さん。そんなお綺麗な顔をして一体何をしでかしたんだ?」

にやりと下心を剥き出しにした表情でアリゴが笑いかけた。

「なんのこと」

つんとして朱音は突っぱねた。

アリゴとともに行動をともにしていた禿げ上がった頭の大男パオロとは、子ども達を荷馬車から降ろしたあの場所で別れ、今はこのアリゴと朱音の二人きりである。

この男には、“逃げようなんて馬鹿なことしてみろ、その生っちろい足を歩けねぇように折ってやるからな”と、さんざん脅されてここまで来たが、この砂漠で逃げ出そうものなら干からびてきっと死ぬ運命であろう。

「へっへ、ある男から聞いたのさ。お前さんがサンタシの王の尋ね人だってこたぁな」た

誰からそんな情報を聞いたのは不明だったが、二人はサンタシの王に朱音を会わせることで、礼として大金を貰える筈だと大喜びしていた。

しかしながら、サンタシの王、即ちヴィクトル王に会うには白亜城に向かうということ。つまりはフェルデンに正体を悟られてしまうかもしれないということに気付き、朱音はこのままアリゴにみすみすサンタシに連れられて行くには少々まずいかもしれないと考え始めていた。

「何もしてないけど。人違いじゃないの?」

リストアーニャを離れ、アストラの砂漠に入ってからというもの、人と会う機会のなくなった二人はまだ、サンタシとゴーディアの戦争が再開された事実を知らない。

ふんっと鼻を鳴らすと、アリゴはそれきり口を噤んだ。

（ボリスはちゃんとクリストフさんに会って話をしてくれたのかな？　ベッドの下のアザエルは見つけてもらえたかな・・・。子ども達は無事に逃がしてもらえたんだろうか・・・？）

自分の置かれている状況よりも、朱音はそれが気になって、アストラの砂漠を横断中もずっとそのことばかりを考えていた。

あのクリストフが、こんなにも時間が経っているというのに朱音の前に現れないなど、到底考えられないことであった。何か、来られない事情があるのか、様子を伺っているのか、と朱音は判断していた。

それに、クリストフとはぐれてしまってから、連絡がとれなくなったルイが、今どこでどうしているのかを思うと、彼を無理矢理魔城から連れ出したことを、朱音は後悔し始めていた。気の優しい彼のことだ、皆とはぐれ、きっと心細い思いをしているに違いない。

「な、なんだ・・・!?」

突然アリゴの妙な声が上がる。

暑さで霞む視界で、朱音はすぐ隣で体格のいい雄のチッポカに跨るアリゴに目をやった。

「どうかしたんですか？」

アリゴはこの砂漠の太陽で、顔を赤黒く日焼けさせていたが、その顔から少しばかり血の気が引いているのがわかった。　アリゴは口をパクパクさせながら、前方の砂漠を指差す。

「やべえっ、ありゃあドラコだ・・・、間違いねえ・・・！」

焦った声を出すと、アリゴは朱音の乗るチッポカの手綱をぐいと引き寄せた。

「ドラコ？　うわっ、て何？？」

突然乱暴に引き寄せられ、朱音は驚いてアリゴを振り返る。

「ずらかるぞ！　こっちに来い！」
　雌のチッポカの背から乱暴にアリゴの乗るチッポカの背へと移されると、アリゴはひどく慌てた様子で、雄のチッポカの尻をぴしりと平手で叩いた。
「グウウウン！！」
　驚いた雄のチッポカは大きく身体を揺らすと、今までの穏やかな歩きからは想像もつかない勢いで走り始めた。
「うわっ！？　えっ、ほんとにどうしたんだってば！」
　状況が全く理解できない朱音は凄まじく揺れるチッポカの背中の上で、朱音は叫んだ。
「うるせえ、黙ってろ！」
　アリゴが後ろを気にしながらチッポカの尻を何回も叩く。朱音は懸命に背後を振り返ろうとするが、身体が密着するような形で朱音のすぐ後ろに座るアリゴの身体が大きすぎるせいで、遮られて何も見えない。
　ただ、さっきまで朱音が乗っていたチッポカは、砂漠の真ん中で乗り捨てられたようでもう近くにはいない。
（どうしよう、さっきの子、この暑さで放っておかれたら死んじゃうんじゃ・・・！）
　朱音がそんなことを心配していると、すぐ近くで別のチッポカが砂の上を走る音が耳に届いてきた。一瞬、さっきのチッポカが追いついてきたのかと思ったけれど、すぐさまそれは違うと気付いた。
　なぜならば、その足音は一頭の足音だけではなかったからだ。
「くそっ、この役立たずめ！　走れっ、走れっ！」
　このチッポカも可哀相なものだ。こんな大男一人乗せて歩くだけでも大変だろうに、その上少年も一人乗せて全速力で走ることを強要されているのだ。
「止まれ！　そこのでかぶつ！　殺されたくなきゃな！」
　背後から突然声が飛んできた。
　何者かに二人は追われているようだった。

ちらとアリゴの顔を見上げると、これ以上ないというほどの汗を掻いている。この汗が暑さだけからきているものではないのは明らかだった。

「おいっ！　まじで止まれ！　殺すぞ！」

ただごとではないと気付き、朱音はアリゴの服を掴む。

「アリゴさん！　止まって！」

アリゴは朱音の言うことを無視し、チッポカの尻を叩き続ける。

「アリゴさん！」

このままでは、本当に殺されてしまうかもしれない。いや、その逆で逃げなければ殺されるのかも。そう思うと、朱音はどうしていいものかわからなくなった。

「！！」

どうっという音とともに、朱音達の乗るチッポカが砂の上に勢いよく転がった。乗っていた朱音もアリゴも勢いよくそのまま投げ出され、砂の上をダイブする。

一瞬何が起こったのかわからなかった。

「グウウウン！！」

雄のチッポカは興奮してそのまま砂の上を走り抜けていってしまった。

「ちっ、手間かけさせやがって」

二人を囲むように数頭のチッポカが立ち止まる。その上から何者かの声が降ってきた。

一人の男の手には縄のようなものが握られてその縄で朱音達の乗っていたチッポカの足を引っ掛けたらしい。

「い・・・たたた・・・」

朱音がのそりと起き上がると、カチャリと顎のしたで金属の冷たい感触が触れた。

「金目の物を全て出しな。それに、食料も水も全部だ」

朱音の首元に突きつけられているのは、刀剣だった。

「わ、わかった！　渡す！」

少し離れたところで、アリゴがあたふたと懐をまさぐっている。
彼も同じく剣先を向けられているようであった。
「ほら、持ち金はこれで全部だ。まだ商売の途中でこんだけしか持ってない！　本当だ！」
「まだその腰にぶら下ってる水があるだろ。それもよこせ」
朱音は自分の首に剣先を宛てがっている男をゆっくりと見上げた。
黒布を頭に巻きつけ、僅かにあいた隙間からは目だけが覗いている。
「あなた達、なに・・・？」
思わず口をついて出てきていた言葉に、朱音ははっとして唇を閉じた。
「くくっ、おいお頭ぁ、このお嬢さん、俺たちを知らないそうだぜ！」
ざっとチッポカの背から砂の上に飛び降りた音が聞こえた後、男の背後からゆっくりと別の人物が近付いてきた。
お頭と呼ばれた男は、朱音のすぐ近くまで歩み寄ると言った。
「世の賊と名のつく者どもは、皆俺達の名を聞くと震え上がる。ドラコの名を聞いて正気でいられる奴がまだこの世にいたとはな」
アリゴが何やら喚いている。
「頼むっ、殺さないでくれ！　おれはただの商人だ。何も持ってやしない」
ドラコという賊の頭が、アリゴに言い放った。
「まだいいものを持ってるじゃねえか。俺の目を誤魔化そうったってそうはいかねぇぜ。お前は奴隷売りだろ？　こいつをいただく」
朱音ははっとしてその男を見つめた。
（こいつって、もしかしてわたしのこと・・・！？）
アリゴはまだ何か喚いている。
「だめだ、そいつだけは勘弁してれ！　ただの商品じゃねえんだ！」
ほうっと関心ありげな返事をすると、頭の男は朱音の首に宛がっていた剣を収めさせた。
「それならより一層いただき甲斐があるじゃねぇの」

ぐいと朱音の腕を掴み上げると、そのままひょいと乗っていた自分のチッポカの背に朱音を乗せてしまう。
「え！？」
朱音がパニックを起こしているのも構わず、頭の男は手下の男達に合図を送る。
「おい、引き上げるぞ」
アリゴに剣を向けていた男も、他の男達も、さっと身を翻しチッポカの背に飛び乗った。
「待て！　待ってくれ！　こんな砂漠のど真ん中で、水も食料も奪われちまったら、おれはどうすりゃいい？！」
悲痛なアリゴの声がまるで聞こえないかのように、賊の男達は来た時同様勢いよく駆け出した。
「ねえ、あの人どうなるの！？　ほんとに死んじゃうかも！」
朱音は慌てた。
少なくとも、アリゴと一緒に行動を共にしていた方が、サンタシまでの道中の身の安全は保障されていた。しかし、今この謎々の賊の手の中に捕らえられてしまった状況を考えれば、どこにも安全という言葉は無い。
「騒ぐな。あの大男が砂漠で野垂れ死ぬなら運の無かっただけのことだ」
決してあのアリゴという男が好きだった訳ではない。寧ろ、売り物として突然攫われてきた身としては、腹立たしささえ覚える。しかし、あの男を憎んでいる訳でも無かった。
もしもこのままここで置き去りにしたなら、これから先何年も、彼が生きているのか死んでいるのか、はたもや、見殺しにしたかもしれないという罪悪感に何年も苛まれるのは朱音としてはごめんだった。
朱音は、頭の男の腰に結わえ付けてある水の入ったゴムの袋を乱暴に引っ張り取ると、その袋をぽいと、過ぎ去る後ろの砂の上に放り投げた。

「おいコラ！」
不意をつかれて少々驚いたのか、頭の男は少し声をあげたが、諦めたように溜息を吐いてそのまま走り続けていった。
水さえあればアリゴにも生き残るチャンスがあるかもしれない、朱音はそう思うことにした。
「ねえ、どこに行くつもり？」
こうして見ると、顔は巻きつけられた布で見えないものの、頭の男は随分若いようであった。
男は黙ったまま返事をしない。
朱音は観念して、なすがままチッポカの上で揺られていた。

数度の休憩を挟み、走ること数時間。太陽はますます高く昇り、気温は増しているようであった。
手下の男達はそれでも器用に布の隙間からゴムの袋に入った水を飲み、水分を補給していた。朱音にも何度か水分を与えられたが、頭の男はほとんど水を口にしようとしなかった。男は何も言わなかったが、おそらく、朱音が男の分の水を放り投げられたせいらしい。
朱音はなんだか申し訳ない気持ちになり始めていた。自分の分が無いのなら手下に少し分けてもらえばいいのに、彼は決して手下の貴重な水をとろうとはしなかった。
「あと一刻も走れば、アストラの砂漠を抜ける。このまま一気に乗り切るぞ」
「おう、お頭」
渇きをまるで感じさせない頭の男は、ひょいと身軽にチッポカに飛び乗った。朱音はここで放置されても困るということもあって、大人しく男のチッポカによじ登った。

いくらなんでももうこの暑さにも限界がきていた。
頭の中では鐘が打ち鳴らされているようなひどい頭痛がするし、渇ききった口の中。目が霞み、気を抜くと物が二重、三重にも見え

る。
「お頭！」
こんな中、どこにそんな力が残されているのかという位、手下の男が張りのある声で叫んだ。
気がつくと、一面砂漠の景色が、ところどころ岩がでっぱり、短いながらも緑の草が生え始めている。
「砂漠を抜けたの？」
頭の男は小さく頷いた。
その直後、おもむろに頭に巻きつけていた布をぱさりと脱ぎ去る。
「久しぶりだな！　アカネ！」
布の下から出てきたのは、炎のように真っ赤な真紅の髪と、褐色の肌。大きな石の耳飾り。そして、どうして今まで気付かなかったのか。燃えるような緋色の瞳・・・。
「エフ！？」
にかりと笑うと、男は言った。
「本名はファウストだ。ようこそ、我故郷へ」
これは、フェルデンが帰還するよりも少し前の予期せぬ出来事であった。

16話　散りゆく華

朱音は腕を後ろ手に拘束されていた。
半ば引きずられるような形で地下への入り口を潜(くぐ)ると、地下の一室に放り込まれた。
ここは、アストラの砂漠に隣接する茶色い岩山と岩壁に覆われた地域で、各国からも見捨てられた土地だった。一見何もないただの岩山に見えるが、隠された入り口を通ると中は巨大な地下道が広がっている。
誰が一体何の為に作ったものなのかは一切不明であったが、今はドラコがアジトとして使用していることだけは明らかだ。もともとは通路だけだった地下のあちこちに、後からドラコの連中が部屋を増設したらしく、通路に比べると些か雑な壁づくりであることに朱音は気付いていた。
「お頭が来るまでここで大人しくしてな」
ドラコの手下の一人が、ごつごつした岩壁に尻餅をついて目に涙を浮かべている朱音に、乱暴に言い放った。
まるで、どこからか拾い集めてきた鉄屑をくっつけたような鉄の扉を勢いよく閉じられた後は、室内に薄暗闇が訪れた。岩壁に唯一設置された蝋燭立てには、すっかり短くなった蝋燭が一本揺らめきながら小さく燃えているだけだ。
「陛下・・・」
突如部屋の隅から懐かしい聞き覚えのある少年の声が聞こえ、朱音は勢いよく振り返った。
少しずつ暗闇に慣れ始めた朱音の目に、うっすらと霞がかった灰の髪が浮かび上がってくる。
ルイは手足を拘束され、身動きが取れない様子で蹲っている。
「ルイ!?」

驚き、慌てて朱音はルイに擦り寄る。
「陛下、ご無事でしたか・・・！」
ルイは心底安心したように、ほっと溜息を溢した。
「ルイこそ！」
しかし、すぐにルイは悲しそうに俯いてしまった。
「申し訳ありませんでした、陛下・・・。陛下をこんな目に遭わせてしまった原因は全部僕のせいなんです。あの人の正体がまさかドラコの頭領だったなんて・・・。迂闊でした」
薄暗闇の中でも、ルイの顔色が優れないことは朱音にもすぐわかった。
「ルイのせいじゃないよ！　わたしだって、あの人が賊の頭領をしてるなんて知らなかったもん」
寧ろ、朱音は自分がルイに謝らねばならない方だと考えていた。自分が魔城を抜け出そうなんて思いもしなければ、ルイはこんな目に遭わないで済んでいたのにと思うと、朱音は居た堪れない気持ちになるばかりだった。
「それに、こんな目に遭わせた点では根本はわたしが原因でしょ？　そもそもわたしがルイを魔城から連れ出さなきゃ良かったんだよ・・・」
ふるふると首を横に振り、ルイは灰色の大きな可愛らしい瞳で朱音を見つめた。
「それは違います、陛下。これは僕が望んでついて来た旅です。それに・・・、僕は陛下と一緒に来られたこと、すごく感謝しているんですよ」
にこりと微笑むと、ルイは縛られた自らの手首を懸命に背中で捻り始めた。
「ルイ？」
ここに連れて来られるまでにも、縄を外そうと何度も試みた朱音だったから、それがそう簡単には外れないことはよく分かっていた。無理に縄を外そうとすれば、縛られている方の手が擦れて怪我をす

るだけだからとルイに静止をかけようかと考えていたその時、
「よしっ！　外れた！」
はらりとルイの手から縄が外れ落ち、すぐ様自由になった手で足の縄を解きにかかった。
ルイの手には何か鋭利な刃物が握られているようだ。
「陛下、じっとしててください」
今度は朱音の縄に手をかけると、ルイは手際よくそれを刃物で断ち切っていく。
「それ、船の上でも使っていたよね」
朱音の視線が自らの手に握られている刃物に注がれていることに気付き、ルイはにこりと笑って頷いた。
「これは、僕とロランに母が与えてくれた果物ナイフなんです。普段はペンダントにして首からさげているんですが、必要なときにこうして開くと果物ナイフになるんですよ。持ち運びにも便利ですし、ずっと愛用しているんです」
縛られた朱音の縄も断ち切ると、果物ナイフはぱたりと元のペンダントに戻され、その表面には美しい華の彫刻が施されていた。
今まで気がつかなかったが、それはどうやらもう一つと対になっているようであった。もう片方はおそらく、ロランがまだ手元に持っているのだろう。
どういう経緯があったにせよ、離ればなれになってしまった双子の兄弟をなんとしても再会させてやりたい、と朱音は心の中で思った。
しかし、鏡の洞窟で最後に見た、ローブから血を滲ませるロランの姿は、未だ朱音の頭から離れずに胸を締め付けた。
「どうかしましたか？　陛下」
「なんでもないよ」
心配そうに覗き込むルイにこれ以上不安を悟られないようにと、朱音はすっとその場から立ち上がった。
「そうだ・・・！　陛下、大変なんです。ヘロルドが・・・」

このときはまだ朱音自身、サンタシやゴーディアでとんでもないことが起こり始めていることを知らなかった。
「陛下が城を留守にしているのをいいことに、ヘロルドはサンタシに宣戦布告をしたようです。戦争が・・・、再開されました・・・」
「え・・・？」
悔しそうに唇を噛み締め、ルイはぎゅっと拳を握り締めている。
朱音は放心した。
一体今、ルイが何と口にしたのか理解できなかったのだ。
「あの卑劣な男め・・・！　戦争を再開させた罪を全て陛下に擦り付け、ゴーディアの王座を何がなんでも手に入れる気なんですよ！」
放心状態から覚め、あの痩せた猫背の男が脳裏に蘇る。
憎々しげに朱音を睨みつける頬骨に落ち窪んだぎょろりとした目や、魔女のような鉤鼻に皺を寄せ、大きな口をへの字に曲げたあのヘロルドの表情を思い出しただけで吐き気を催す。
それと同時に、サンタシの王子フェルデンの凛とした横顔が横切った。
（フェルデン・・・！）
サンタシの騎士団を率いる彼がゴーディアとの戦いで最前線で剣を振る姿が、ありありと目に浮かぶぶ。
「わたしが城を抜け出したせいだ・・・！　戦争をやめさせなきゃ！」
朱音の頭は真っ白になった。
彼を無事サンタシへと送り届けることを一番に願っていたというのに、まさかこんな形になってしまうとは。
「とにかく、ここから抜け出さないと！」
そう言った瞬間、鉄の扉がぎいと音を立てて開かれた。
「どこに行くって？」
炎のように真っ赤な髪。燃えるような緋の目がじっと二人を見据えている。
「ファウスト！」

「エフ！」
二人は同時に叫び出していた。
「言っておくが、ここからお前達を出す気はさらさらねぇぜ」
短い期間ではあったが、ルイは彼と行動をともにしてきた。大雑把で男気のある“エフ”という青年は、いつも快活な笑顔を見せていた。
しかし、今目の前にいる彼は、今まで見てきたあの青年からは想像もつかない程の圧力を露にしている。緋色の目を見ていると、ルイの本能が“あいつは危険だ”と告げているのか、背筋がぞくぞくと凍るような思いがした。
朱音ははっとした。
“緋の眼の男が陛下を狙っています・・・”という、嵐の夜のアザエルの言葉を思い出したのである。
（わたし、どうして今まで気付かなかったの・・・！？）
しかし朱音がそのことに気付くのはあまりに遅すぎた。ファウストの目論見は全て順調に進み、今まさに仕上げの段階へと入る瞬間だったのだ。
「アカネ。いや・・・、クロウ陛下と呼んだ方がいいか？」
驚きで目を見開き、ルイは咄嗟に朱音を庇うように前へと踏み出した。
「あなた、最初からそれを知っていたんですね！」
きっと睨み上げるルイにまるで怯んだ様子も無く、ファウストは呆れたように肩を竦め鼻で笑った。
「ボウレドでアザエルを狙った時にお前らが一緒にいたのを近くで見てた、それだけだ。うまく女の振りして変装してはいるが、生憎、おれは魔王ルシファーの顔を拝んだことがあってな、すぐにぴんときたぜ」
ファウストの口振りからすると、朱音がクロウ王だと知りながら、まるで知らぬ振りをしてルイにうまく近付き、そしてこの状況に持ち込んだということだろう。そのことにルイは腹立たしさを感じず

にはいられなかった。ファウストに勿論怒りは感じたが、この男が怪しいと今まで気付きもしなかった自分の不甲斐無さに何より怒りを抑えることができなかったのだ。

朱音はそんなルイの心情が感じ取れた。

責任感が強く、そして優しいこの少年だからこそ自分を責めているに違いないと思ったのだ。

無言のまま朱音はそっと後ろからルイの手を握った。突然手を握られたルイがぴくりと肩を揺らし反応したが、ファウストから決して目を離すことはしなかった。

「陛下に、何をするつもりですか！？」

何があっても自分が朱音を守るとでも言うように、ルイはまた一歩朱音より前に踏み出した。

「ルイ、俺が世の中で一番手に入れたいと願っているのは何だと思う？」

ファウストは組んでいた腕を下ろし、自らも一歩進み出た。

質問を質問で返され、ルイは顔を顰めて緋色の目をじっと見返す。朱音の手が無意識に震え始める。何か恐ろしいことが起こりそうな予感がした。

「・・・・・・」

「言っておくが、俺が欲しいのは富や財宝なんてチンケなもんじゃねぇ」

また一歩進み出るファウストに、朱音は思わずルイの手を握ったまま後退した。

「泣く子も黙るドラコの頭領です、僕はてっきりそうだと思っていましたけど」

張り詰めた空気が漂い、瞬きをすることも憚られる。“ファウスト”という男がどれ程危険な男なのかということを身に沁みて感じた。

「俺がどんな手を使ってでも手に入れたいのは、“力”だ。この世の誰よりも強い力。それを得る為に俺は今までどんな犠牲も払って

きた」
恐ろしい程の“力”への執着心に、二人は身震いした。
ふっと口元を歪ませると、ファウストは朱音を指差す。
「クロウ王、お前の絶対的な魔力をいただく」
そう言い放ったファウストの緋色の目を見ていると、朱音は恐怖のあまり金縛りにあったかのように身体が硬直して動かなくなった。
「！！！」
突然ファウストがバランスを崩し、地面にドサリと尻餅をついた。
朱音は一瞬何が起こったのかはわからず、パニックになってその場に立ち竦んでいる。
「さ、陛下！」
ぐいと手を引かれ、我に戻った朱音はルイに引かれるまま駆け出した。鉄の扉を抜け、地下通路を駆け抜ける。
「あのヤロウ！　やりやがったな！　くそっ」
扉を蹴り開け、ファウストが胸を押さえながら二人の後を追った。一瞬の隙をついて、ルイがファウストの鳩尾に渾身の力を込めて頭突きしたのだ。
非常事態に気付き、手下の者たちが次々と加わり、二人を追いかける足音は次第に増えていった。
「ハアハア・・・」
どれだけ走って逃げて来たであろうか。どこまで続いているのかもわからない地下道は溝に流された油の上に火が灯り、ゆらゆらと足元をしっかりと照らしてくれている。
しかし、二人の息は荒く、このままこうして逃げ続けるにはもう限界が近付いていた。
「陛下！　僕がここで彼らを足止めしますから、その間に少しでも遠くまで逃げてください！」
握っていた手を振り解かれ、朱音は思わず足を止めた。
「ルイ、何言ってるの！？」

「このまま逃げ続けるなんて無理です！　大丈夫、結界を張った後必ず追いつきますから、陛下は先に！」

追手の足音がすぐ近くまで近付いて来ている。

ルイは上がった息を整えると、目を閉じ、両の手を追手の方角へ向けて精神を集中させ始めた。

すぐさますうっと薄い壁のような膜が出現し始めた。しかし、呼吸の整わないせいか、ひどく不安定で、ゆらゆらとシャボンの表面のように揺らめいている。

「いたぞ！」

追手達がとうとう二人に追いついてきた。

「陛下、お願いです。陛下はこのレイシアに必要な方なのです。今は逃げ、ゴーディアを・・・、サンタシをお救いください・・・！」

懸命なルイの訴えに、朱音は従わざるを得なかった。きっとあのロランと同じ力を持つルイのことだ。そう簡単に結界が破られることはない筈だ。

「ルイ・・・！　絶対後から追いついてね。約束だから」

ルイは首から提げていたペンダント型の果物ナイフを朱音の手に握らせた。

「ええ、約束です。それまで、それを陛下が大事に持っていてください」

朱音は後ろ髪を引かれる思いだったが、意を決して再び通路を駆け出した。

しかし、それはルイが追いつくまでのほんの僅かな孤独の筈だった。

「・・・結界術か・・・。ルイ、お前結界術が扱えたのか」

不安定な結界を隔て、ファウストが面白い発見でもしたかのように愉快そうに笑っている。

「陛下には指一本触れさせない！」

相当の距離を走ったせいもあり、体力の消耗が激しいのかルイの

結界はなかなか安定しない。
「結界を解けって。お前を殺さずに生かしておいたのは、こんなことをする為じゃねえ。ルイ、お前なら俺達の仲間になれる、そう思ったからだ」
ルイは結界を安定さえようと、懸命に精神を集中させようとする。
「僕にドラコの仲間に加われと？　馬鹿を言うのは止してください」
ファウストの後から追いついた手下達も、息を切らしながら結界の向こうからじっとルイを見つめている。皆、あの黒く巻いた布は取っ払っていて、どれもまだ少年の域を出ない者や青年程度の顔ぶれである。
「俺を含め、ここに居るのは皆人間と魔族の合の子ばかり。ルイ、お前もそうなんじゃねぇか？」
大きく動揺し、ぐにゃりと結界が大きく揺らぐ。
「この地下道のすぐ上の土地は、今はただの見捨てられた乾燥地帯だが、五十四年前、魔王ルシファーの手により滅ぼされるまでは“カサバテッラ”という小国だった」
百三十年前のルイとロランが生まれた年、サンタシの愚王ロベール・フォン・ヴォルティーユが身動きのとれなくなったことを理由に、軍事国カサバテッラと手を組み、ゴーディアの民を脅かしたことはルイ自身よく知る史実であった。
しかし、一時あれ程栄えていた軍事国家が、まさかこんな黄色い岩山と岩壁だけの土地に変貌しているなどとは想像だにしなかった。
「俺たちは軍事国家であるカサバテッラの政府が、より強い兵力を求めた結果生まれた、生まれながらの兵士だった。この兵士強化計画は、カサバテッラがサンタシと手を組む以前から密かに始まっていたが、俺達の成長はあまりに時間がかかりすぎた」
魔族の血を引く者は人間の約十倍長く生きる。それ故、成長の速度も極めて遅い。そのことは、ルイも身をもって知っていた。
しかし、衝撃の事実に、ルイは動揺を隠せなかった。
精神的な動揺もあって、手元の結界は相変わらず不安定に揺らめ

き、今手を翳すのをやめればすぐさまそれは消失するであろうことは明らかであった。

「五十五年前、魔王ルシファーがカサバテッラを消滅させてしまったとき、俺達は命からがらこの地下道になんとか逃れた。ルイ、この通路が一体どこへ繋がっているか知ってるか？」

ルイは答えなかった。

どうしてこの青年がルイにこのような話を言って聞かせ始めたのかはわからなかったが、行動をともにする間、同じ人間と魔族の間に生まれた者同士、僅かながらも仲間意識を抱いてくれていたのかもれない。

ルイは黙ったまま結界に手を翳し続ける。

（陛下・・・、今のうちに距離を稼いでおいてください・・・）

次の瞬間、ルイはまたもや精神集中を大きく欠くこととなる。

「サンタシだ」

驚き、思わず閉じていた目を見開き、揺れ動く結界の向こう側に悠々と立つ赤髪の青年を見た。

「今なんと！？」

「サンタシへと続いていると言った。サンタシのミラクストーという街にな」

ミラクストーはルイとロランの生まれ故郷に違いなかった。しかし、ルイはまさかあの街とカサバテッラが地下道で繋がっているとは今まで知る由も無かった。

（陛下・・・！）

無事地下道から脱出できたにせよ、敵国の領土内にたった一人で侵入するにはあまりに危険すぎる。

一刻も早く結界を完全に安定させて、自分が主に追いつく他に方法は無い。

「ルイ、結界を解け。魔族と人間の間に生まれたお前ならわかる筈だ。俺達に居場所などどこにもねえ。迫害・・・、奇異の目・・・、疎外感・・・」

ファウストの言うことは正しかった。
ルイ自身、ミラクストーでロランとともに育ち、街の人間から数々の迫害を受けてきた。そのせいで母もルイもロランも、随分辛い思いをしていたのは確かだった。だからこそ母が亡くなった後、二人は父リュックを探し、ゴーディアへと渡ったのだ。
しかし、ファウストのいうことに耳を貸すことなど、ルイにはできなかった。
「嫌です、結界は解きません。僕は陛下をお守りしなければならない。アザエル閣下に陛下をお守りするよう言われたんです。それに・・・、陛下は僕に生まれて初めて居場所をくださった」
ルイの強い思いが急速に結界を安定させ始めた。
ちぃと舌打ちした後、ファウストはぼそりと呟いた。
「なんでそこまでしてあの魔王の息子を助けようとする？　魔王ルシファーもあの息子も、お綺麗な人型の仮面を被った化け物じゃねぇか」
ルイが安定し始めた結界から手を離し、ゆっくりと後退しながらその場を立ち去ろうとする。
「待て、ルイ。最後の忠告だ。俺はお前を殺りたくねぇ。この結界を解け。俺はクロウ王を倒し、その力を手に入れ、必ずやこの世界を手に入れる。人間でも魔族でもねぇ俺達の真の居場所を得る為にな！」
ファウストの声を無視し、ルイは結界に背を向けて駆け出した。
「後悔するなよ！」
その声の直後、凄まじい程の熱気に、ルイは思わず足を止めて振り返る。
結界に向けて、ファウストの翳した手から凄まじい炎が吹き付けていた。
ときおり渦巻く炎の隙間から垣間見えるファウストの緋色の瞳と真っ赤な髪は、禍々しささえ感じる。安定させた筈の結界の膜は、表面がマグマのように赤く熱されていた。

（なんだ、この炎は・・・！　これがファウストの魔力!?）
このままだと、いくらもしないうちに結界は破られてしまうだろう。
結界ごしに伝わってくる熱風に、ルイは蒸されるような急激な暑さを感じた。
（なんとか喰い止めなければ・・・！）
つうと額から流れ落ちる汗を手の甲で拭い、ルイは熱を発する結界の前へと舞い戻った。
手を翳し結界の崩壊を防ぐ為、再び精神を集中させる。しかし、呼吸もままらない程の暑さ。ルイの身体から流れ滴る汗は異常な程であった。
「無駄だ」
ルイは感じていた。この男が、自分を遙かに凌ぐ魔力を持ち合わせているということを。
そして、遠からず、この結界は消失するだろうということも・・・。

朱音は胸騒ぎを感じた。
しばらく経っても一向に追いついてくる気配の無いルイ。
別れ際に必ず追いつくと約束して預かったペンダントをそっと指先で触れると、朱音はどういう訳かやはり元来た道を引き返さねばならないような気がしてならなかった。
（ルイ・・・！）
朱音は踵を返して元来た道を懸命に走った。急がねばならない気がした。
（ルイ、やっぱりあなたを置いていけないよ・・・！）
何か恐ろしいことが起こっている気がしてならなかった。
ルイが足止めをすると言い出した時、無理矢理にでも彼を引っ張って連れて来るべきだったのかもしれない、と朱音は思い始めてい

た。
　どういうことか、途中から先程までは感じなかった蒸し暑さを感じ始めた。はじめは気のせいかと思った朱音だったが、異常な暑さに異変を察知した。
（ルイ！！）
　通路のずっと先で、何か赤いものがちらついているのが視界に入ってくる。
　ここは、先ほどルイと別れた筈の場所に間違いはなく、そして小さく見える人影はルイのものに違いなかった。
　そして、そのすぐ近くで何かとてつもないことが起こっていることも朱音には理解できた。
「ルイーーーー！！！」
　これだけ離れていてもこれ程の暑さだ、ルイが位置する場所だと恐ろしい暑さに違いない。
　朱音はこれまでに無い程に走った。
　ただ、ルイを救い出さねばならないという思いが、朱音の疲労しきった足をがむしゃらに動かしていた。
　少しずつルイの表情が見える程の距離へと近付くにつれ、辺りの温度が急激に上がっていくのがわかる。
　朱音に気付き、僅かに振り返ったルイの顔は、水につかったかのような異常な汗で滴り、皮膚から立ち昇る蒸気さえも見えた。
「陛下・・・！　なぜ戻ってきたのですか！？　もう結界が持ちません！　離れて！！」
　いつもは愛らしいルイの声は、本人のものとは思えない程に掠れ、朱音は驚き叫んでいた。
「ルイーーーーーーーーー！！！！！！！」
『ゴオオオオオオオオ』
　朱音の叫び声とほぼ同時に、ルイを一瞬にして炎が飲み込み、そしてその炎は一層勢いを増しながら渦を巻き朱音に襲い掛かった。
　炎はまるで意志をもっているかのように燃えがる。

しかし、朱音は次の瞬間、自分がまだ生きていることに気がついた。

確かに炎に飲まれてはいるが、僅かに、朱音の周囲に薄い膜のような結界が張られ、燃え盛る炎から朱音の身体を防いでくれていたのだ。

炎が次第におさまり、周囲の状況が見えてくると、少し離れた場所に赤髪のファウストがこちらに手を翳したまま仁王立ちしている姿が視界に入ってきた。

「悪運つえぇな。ルイの奴、最期の力で結界張りやがったか」

ちっと舌打ちすると、後ろに控えていた手下の男達がにやりと笑いながらその場の様子を見つめている。

「ルイっ・・・？」

朱音は何かがおかしいことに気付き、立ち上がりきょろきょろとルイの姿を探した。

炎が二人に襲い掛かる直前、確かにルイは近くに存在した。すぐ近くで表情まで確認することもできたのだ。

しかし、今、朱音の近くには彼の姿はどこにも見当たらない。

「ルイ？　どこ・・・？」

くくっと笑いを溢すと、ファウストはカツカツと朱音の近くへと歩み寄った。

「ルイはここだ」

とんと黒い皮の靴で蹴飛ばされ、ふわりと何か粉のようなものが巻き上がった。理解できず、朱音はゆっくりとその粉に手を伸ばしその粉を手の平で掬い上げる。指の間からさらさらと零れおちていく粉。

震える声で朱音は呟いていた。

「灰だ・・・」

ルイの霞がかった灰の髪がふと朱音の記憶に蘇る。

「嘘・・・」

恐ろしいことが起こってしまった。

ぼたぼたと灰の上に雫が何雫も落ち、染みを作っていく。朱音の意志とは関係無く、涙がもの凄い勢いで溢れていく。

朱音は救い上げた灰を自らの頬に擦りつけ、くしゃりと顔を歪ませた。心臓を抉り出されたかのような痛み。

復活の儀式の痛みなど、今考えるとずっと大したことのない痛みのようにも思える。

大好きだった気の優しい従者の少年は、跡形も無く朱音の前から消え去ってしまった。「陛下」と呼ぶ少年らしい声や、霞がかった綺麗な灰の目や髪を見ることはもう二度と叶わない。

朱音は悲しみという感情を塞き止めることなど到底できはしなかった。

ファウストは先程よりも確かに強い魔力を得ていた。自らの炎でルイを飲み込んだことで、心優しいあの少年の魔力さえも自らの力に変えてしまったのだ。

「さて、クロウ陛下。今度はあんたの番だ」

朱音の頭上に手を翳し、声も無く只々泣き続ける朱音にファウストは言葉を落とした。

17話　霧晴れ

朱音の頭上でファウストが手を翳す。
「魔王ルシファーの息子と言え、大したことねぇのな」
ファウストは、カサバテッラが偶然にして生み出した、至上最高の傑作であった。彼は生まれながらにして、炎を操るという高等魔力を兼ね備え、同時に自らが作り出した炎で飲み込んだ相手の力を吸収してしまうという、特殊能力を持ち合わせていたのである。
（クロウ王、お前に闘志が無いのなら、俺は遠慮なくその力をいただく！）
ファウストは褐色の手に炎を集め始めた。
「お頭っ！」
背後の少し離れた位置で突っ立っていた手下の青年が叫ぶ。
その瞬間、『ゴゴゴゴゴゴゴ・・・』と地鳴りのような音を立てた地面が少しずつ揺れ始め、その揺れは次第に大きなものへと変わっていった。
（なんだ・・・！？）
次第に立っているのも難しくなり、パラパラと天井の土が通路内に降り始める。
「お頭！」
バチイと強い静電気が翳していた手に起こり、ファウストは咄嗟に手を引っ込めた。
固い地下通路の上で蹲っているクロウの身体から、無数の静電気の筋がパチパチと音を立て発され始め、蒼黒の髪先はまるで無重力の空間にいるかのようにふわりと逆立つ。
「ちっ」
ファウストは、一歩後方へ飛び退くと、電流の掠めた右の手を確かめた。その手は僅かに焦げついている。

今、朱音は湧き出る怒りと哀しみで我を失っていた。
身体の内側から溢れ出てくる負の感情は、朱音の理性では到底抑え切ることのできないものであった。
怒りは目の前のファウストだけに留まらず、寧ろ“神”というものが存在するならば、それにあたる人物へと向けられていた。
「・・・して・・・、どうしてわたしから何もかも奪ってしまうの・・・？　家族も・・・、大切な人達も・・・！　わたしはただ、平凡に暮らしていたいだけだったのに・・・！」
朱音の体表を包むような禍々しい黒い気体がゆらゆらと湯気のように出現し始める。
「なるほど・・・！　すげえ魔力だ」
数々の魔族の魔力を奪ってきたファウストだったが、これ程の興奮を覚えたことは未だ嘗て無かった。魔王ルシファーがカサバテッラを消滅させてしまったあの日でさえ今のような興奮は起こらなかった。あの頃はまだ、自身に今程の魔力と自信を持ち合わせていなかったこともある。
しかし、今ならば魔王の息子の魔力にでも少しは対抗できるような気がしていた。
朱音の周りだけがまるで空気も時間の流れも止まったかのような静けさに包まれる。
時折バチバチと音を立てて起こる電気の筋。
「んじゃあ遠慮はしないってことで！」
ファウストは勢いよく腕を振り上げると、思い切り炎を放った。
『ボウッ』という音とともに、確かにファウストの炎は朱音の身体を包んだが、すぐさまそれは吹き消された蝋燭の火のように消失した。
「なに！？」
予想に反した状況に、ファウストは僅かに怯んだが、炎を放つ手を尚止めることはしない。

しかし、ますます朱音の身体から出る黒い気体は容量を増し、炎をいとも簡単に弾き返してしまう。
「・・・くなればいい・・・。全部無くなっちゃえばいいんだ。わたしも・・・、この世界も・・・」
ぐるぐると渦を巻き始めた黒い気体は、より一層容量を増し、地下である筈のこの空間に生温い風を巻き起こし始めた。
「!?」
突如足元がぐらつき始め、ファウストを始め他の手下の男達もバランスを崩し近くの壁に腕をつく形で寄り掛かかった。
地揺れの原因は自然現象などでは無く、朱音の深い哀しみと怒りによる魔力の暴走によるものであった。
気付いた時には、朱音の身体は黒い気体に全て覆われ、その瞳の色は死人のように周囲の何も映してはいない。
パラパラと天井の土が崩れ始め、石壁にも幾筋もの亀裂が走り始める。
「お頭！　まずいっすよ、一旦引きましょう！」
頑丈な造りになっている筈の地下の壁が崩れ始めるのも時間の問題だった。
「黙れ。そんなに逃げたきゃお前らだけでずらかりな！　俺は今ここでクロウ王を倒して世界の頂点に立つ野望を叶える！」
とっくに静電気の域を超えてしまった電流達が空間を迸り、『バチイ』と電光を何度も起こす。
「うおおおおおおお！！！」
ファウストは踏ん張った足で両の手に今現在持ちえる全最大魔力を注ぎ込んでいく。
「やべぇっ、お頭がまじでやる気だ・・・！　ずらかるぞ！」
手下の男達は血相を変えて撤退していく。
「くたばれえええええええ！！！！！」
『ドウッ』と放たれた先程とは比べ物にならない炎は石の壁を一瞬にして鉄釜のように熱っした。

（流石に奴も無事では済まねえ筈！！）
渾身の魔力を放ったファウストはくっと唇の端を吊り上げた。
石壁はジュウと音を立て、炎の勢いで二人の周りの通路はばらばらと音を立てて崩れ始めていた。
「なに！？」
炎の渦巻く中で人影がちらりと蠢いた。
ファウストは数十メートルという距離を後方に跳ね飛ばされ、逃げ出した手下のすぐ近くの石壁に強烈な勢いでのめり込んでいた。
「ぐはっ」
壁にめり込んだ身体のあちこちが衝撃でいかれてしまったようである。
ファウストは口からどす黒い血液を吐き出した。それは、口の中が切れたというよりは、内臓のどこかが傷ついてしまったもの。
ひゅうひゅうと喉を鳴らす頭（かしら）の姿に、手下の青年達は目を丸くした。そして、逃亡も忘れてファウストを見つめたまま佇んでいた。
「お・・・、お頭っ」
やっと正気に戻った手下の一人がファウストに駆け寄る。
ファウスト自身、一体今自分に何が起こったのか全く理解できていなかった。
「あはははははっ、あはははははっ！！」
バラバラと崩れる石壁と土埃りの向こうで、傷一つどころか衣服の繊維一つ焦がした様子もない少年王が立ち上がり、仰け反ったまま声高々に笑っている姿が、ドラコの面々の目に映った。
「・・・完全にイカれてる・・・」
その場に居たドラコの手下達は、ゾクリと肩を震わせた。
「あははははははっ、この僕を殺すだと・・・？　笑わせるな。魔王クロウが何もかも皆消してやる、塵も残らぬ程にな。あははははははっ」

朱音は暗闇の中を彷徨い歩いていた。
何も見えず、何も無い真っ暗闇の中をただ一人。
「ルイ・・・？　クリストフさん・・・？」
どこまで続くかわからないこの暗闇は、朱音の不安を掻き立てる。
「誰か、ねえ、ここはどこ・・・？　皆どこに行っちゃったの？」
今にも泣き出しそうな朱音の視界の端に、何かきらりと光るものが映る。
（なに・・・？）
手探りでその光を目指し、朱音は走った。
とにかくこの恐ろしく孤独で淋しい場所から抜け出したい為に。

美しく彩られた大広間。
華麗な音楽が流れ、煌びやかなドレスや宝石を身に纏った女性達が楽しそうに話に華を咲かせている。
ダンスをする男女。
一流のシェフが力を注いだであろう美味そうな料理が皿にずらりと並び、品目は数え切れない程。
黒を基調とした石を使った美しい彫刻の施された壁や柱達。
朱音はここに見覚えがあった。

「ご機嫌麗しゅう、ベリアル王妃。貴女の美しさは衰えるどころかますます磨きがかかったようでございます」
五段程高い位置に設置された玉座の下で、優雅にどこぞの公爵かが膝をつきベリアルの中指の大きな石のついた指輪に口付けていた。
「まあ、ブラントミュラー公爵。相変わらずお上手だこと。この度はわざわざ遠い地からわたくしの誕生祝いに駆け付けてくだすったこと、感謝いたしますわ」
アプリコットのふわりとカールした髪の合間からほんのりとピン

ク色の愛らしい笑みが伺え、その場にいた誰もがその美しさに溜息をついた。

「しかし、この戦の最中にこのような盛大なパーティーを開催なされるとは、ゴーディアの国政は順風満帆のようでございますね。ベリアル王妃がルシファー陛下のお隣に居られれば、この国も安泰でございましょう」

ははははと笑うブラントミュラー公爵に、ベリアルは恥ずかしそうに遠慮がちに微笑んでいた。

このとき、ベリアルを魔王ルシファーの正妃として迎え入れてからすでに五十年が経過していた。

「しっかしこの国、一時は資金不足でどうなるかと思ったが、ベリアル王妃様が嫁いで来られて本当に救われたな。なんてったって、ご実家は世界の大商人コンコーネ家だもんな。それであの愛らしさだ、恐れ入るよ」

その様子を見ていた貴族階級の男達が小声でひそひそと話をしている。

「それにしても、ベリアル王妃。貴女のお子はますます陛下に似てこられましたね。これは将来が楽しみでございます」

ブラントミュラー公爵の言葉に、ぴくりと眉を引きつらせるとベリアルはふいと不機嫌に近くに立つクロウから目を逸らした。

そのことに何も気付いていないのか、公爵はすっと立ち上がり、クロウの前に跪(ひざまず)いた。

「お久しぶりでございます、クロウ殿下。ブラントミュラー公爵でございます。覚えておられますかな」

真っ白な肌に蒼黒の髪の少年は、美しく刺繍の施された黒の礼服を身につけ、母ベリアルの横に静かに佇んでいた。

「貴方のような人、僕は知りません」

肩に掛かるさらりとした黒髪の下から、表情の無い少年がぽつりと返答した。

「はは、そうでございますか。無理もない、わたしがクロウ殿下にお会いしたのは、殿下がもっと幼い時でございましたので」
興味のないようにクロウはブラントミュラー公爵をじっと見下ろしていた。
「ブラントミュラー公爵、その子に何を言っても無駄ですわ。その子、感情がありませんの」
えっとした顔をして公爵がクロウの顔をまじまじと見つめる。
「まさかそのようなことは・・・。昔、殿下と戯れたことがございましたが、その際は可憐に微笑んでおられましたが・・・」
ベリアルは卑しいものでも見るかのように、クロウに一瞬だけ目線をやる。
「何かの記憶違いでは？　母であるこのわたくしにさえ、ただの一度も笑顔など見せたことが無いのですから」
「ベリアル」
静かに王妃の言葉を黙って聞いていたルシファーだったが、王座からついにベリアルを諫めた。
余程気に障ったのか、ベリアルはきゅっと血色のいい唇を噛み締めると、椅子から立ち上がり、淡いオレンジのドレスを翻して大広間をつかつかと飛び出して行った。
「ベリアル王妃・・・？」
驚いたように、ブラントミュラー公爵ははたと可憐な王妃の後ろ姿を見つめた。
「すまなかったな、ブラントミュラー。ベリアルは近頃あまり体調が優れない」
静かな口調で王座からルシファーが公爵に声を掛けた。
「ルシファー陛下・・・」
ブラントミュラー公爵がふとルシファー王に目をやった瞬間、ぼとりと王の手から金の杯が滑り落ち、赤い敷物の上にカラカラと転がって紫色の酒を染み渡らせてゆく。
「陛下」

すっと脇に控えていた魔王の側近が王の靴にまで飛び散っているだろう雫を、懐から取り出した灰の布で拭い始める。
透けるように長く美しい碧髪に、それと同じ色の目。決して、ガタイがいいとは言えないが、今やこの男が魔王ルシファーの次に力をもっているということは、国内外問わず誰もが知っていることであった。
「何でもない、ただ手を滑らせただけだ」
と、側近を下がらせようとするルシファー王に、
「ルシファー陛下、何やらお顔の色が優れないようでございますね」
とブラントミュラー伯爵は言った。
しかし、その言葉に何か含みがあることに気付き、側近であるアザエルは指に付着していた酒を自らの口に運び眉を顰める。
「・・・毒」
きっと鋭く目を細め、アザエルは腰の剣の握りに手を添えた。
「噂通り察しのいい方のようですね、アザエル閣下」
公爵はすっと立ち上がると、パチンと指を鳴らした。
「きゃっ」と会場のあちこちからあがる悲鳴。いつの間にか大広間は剣を手にした男達に包囲されている。賓客と偽り、城内にサンタシの兵を忍び込ませていたのだろう。まさに用意周到な襲撃。
「あの兵服はサンタシの・・・。貴様、裏切りか」
公爵は、
「これも全てはベリアル王妃の為なのです、わかってください」
と、申し訳無さそうに話した。
これ位のたかだか人間の兵ならば、魔王ルシファーであれば、その魔力でひねり潰すことくらい安易なことであった。しかし、ルシファー王はそうはしなかった。いや、できなかったのだ。
王自身も、自らの身体の異変に気付いていた。
アザエルがブラントミュラーに手を翳そうとする。
「動くな！」
何者かの腕が、クロウの首を絡めとりその身体が傾いたことに気

付き、アザエルはぴたりとその手を止める。クロウの首にはすでに剣先が宛がわれており、その切っ先が僅かに喰い込み血を垂れ流していた。

クロウに切っ先を向けていたのは、なんとゴーディアの近衛兵の一人だった。つまりはサンタシの間諜ということになる。

そんな状況にも関わらず、クロウはなんの表情も浮かべないまま、ただじっと父とその側近を見つめていた。

魔王ルシファーは毒による痺れで魔力を発動できないない状態にあった。これはが普通の人間であるならば、今頃はとっくに死に絶えていたものである。

首に刃を据え付けられたまま、クロウは引きずられるようにして広間を連れ出されていく。

すぐ後を追わなければならないことはアザエルにも分かってはいたが、忠誠を誓った王の傍を離れることはさすがに憚られたし、アザエルの力をもってすれば、一部のやり手の者を除いて大広間にいるサンタシの兵を一掃することは決して不可能なことではないこともわかっていた。

「ルシファー王を捕らえよ！　城を占拠するのだ」

ブラントミュラー公爵の指示で、貴族達を人質にとっているサンタシの兵が剣を構え玉座を取り囲んだ。

アザエルは今すぐにでも魔力を発動させようと手を構えた。

「アザエル、これしきのことでわたしがくたばるとでも？　あの子はまだ力の制御がうまくできぬ・・・。あの子を止められるのはお前だけだ、行け」

「はっ」

王直々の命に、アザエルが従わぬことなどできる筈もなかった。

アザエルの手から放たれた威嚇の為の鋭い無数の水針。空気中に含まれる僅かな水分を瞬時に変換させたもので、殺傷力には些か劣る。

しかし、取り囲む兵に一瞬の隙を与えるには十分の代物だった。兵

達が若干怯んだ隙に、アザエルは風のように素早く、クロウのと間諜の後を追った。
なんとしてもクロウに追いつき、最悪の事態を避けさせねばならなかった。

クロウはアプリコットの髪のベリアルと無言のまま向かい合っていた。
「化け物・・・」
可憐なぷくりとした唇から漏れた一言はまだ少年の域を出ない王子の心をひどく傷つけるにはあまりに十分すぎる言葉であった。
一見なんの表情も無いかのように俯いた王子の足元には、今や肉塊と化した元近衛兵の残骸が無残に転がっている。鉄臭い死臭。
どうして彼がこうなってしまったのか、クロウにはまだ理解できなかった。
「お前はなんて醜い生き物なの・・・！　ああ、恐ろしい・・・！」
恐怖に慄いたベリアルの瞳。何か恐ろしいものでも見たかのように、彼女はがくがくと自らの肩を抱きしめると震えながら王子から目を逸らした。
「は・・・、母上・・・？」
どれ程愛していても、決して受け入れてくれなかった偽の母。
しかし、クロウは彼女が偽の母とわかってはいても彼女にいつか受け入れて貰えると信じ、愛することをやめなかった。
肉塊を踏みつけていることにさえ気付かず、クロウはベリアルに一歩近付いた。
「お前の母になった覚えなど一度だってありません！　ああ、浅ましい！　お前などいなくなってしまえばいいのに！」
ベリアルは震えたまま一歩後退すると、いつもは可憐な口元をひどく歪ませる。
「母上・・・、僕・・・、母上が・・・」

クロウがまた一歩踏み出すたびに、ベリアルは同じだけ後退してゆく。
「お前が存在したせいで、わたくしは陛下の愛を手に入れることができなかった。お前さえいなければ・・・、お前さえいなければ、わたくしがこんなにも心を乱すことなどなく、幸せに生きていけたのに・・・！」
表情も何もない筈のクロウの黒曜石の瞳から、ぽろりと雫が零れ落ちた。
「わたくしがこんな身体でなければ、陛下のお子を宿し、卑しい妾の子であるお前など城から追放してやれたのに・・・！　忌々しいっ」
とうとう壁際に追い詰められてしまったベリアルは、壁にかけられていた剣の飾りを抜き取り、王子に剣先を向けた。
「近寄らないで！　それ以上近寄ればこれでお前を突き刺してやるから！！」
「母上・・・、僕・・・」
ベリアルの振り回した剣先がクロウの頬を僅かにか掠め、つうと一筋の血が筋になって流れ落ちる。
「来るな！　ああっ陛下・・・！　お助けください！」
すでに発狂しかけているベリアルを前にして、明らかにクロウの纏う空気の色が変わり始めていた。
哀しみのあまり、王子は我を失いかけていたのだ。
「きゃあああっ！！」
クロウの周囲に起こり始めた得体の知れない空気に触れたとたん、ベリアルの愛らしいオレンジのドレスが弾かれた。
「そこまでです、殿下」
大きく見開いた瞳が驚いたように背後を振り返り、そのままぐらりと身体を傾かせた。
突然姿を消した黒い空気に、ベリアルはぺたりとその場にへたり込み、握っていた剣を転がした。

いつもは結われた碧く美しい髪は、今はさらりと水のようにクロウの頬を滑り落ちていく。後ろから抱きしめるような形のアザエルの手にはしかと短剣の柄が握られていた。

ぱくぱくと何か話そうと口を開いたクロウだったが、その美しい黒曜石の瞳は開いたまま見る間に輝きを失い、人形のようにだらりと動かなくなった。

王子の胸に深く突き刺さった短剣。

「殿下・・・、お許しください」

ベリアルに一礼すると、アザエルは少年の身体を大切そうに腕に抱き、静かに地下へと向かった。

見開いたままのクロウの目蓋に美しい手をやり、閉じさせた後、黒く美しい彫刻の施された棺の中に王子の身体を丁寧に横たえた。

「しばしお眠りください。せめて、僅かな眠りの間だけは貴方の魂に平穏が訪れますよう・・・」

そう呟いた魔王の側近はゆっくりと棺の蓋を閉じていった。

（なに・・・、あれはクロウの記憶・・・？）

再び訪れた暗闇の中で、朱音は目を数回ごしごしと擦(こす)りつけた。

また視界の端にきらりと光るもの。

朱音は思わず振り返る。

「今度は何？」

光にじっと目を凝らすと、何やら楽しそうな声が響いてくる。

聞き覚えのある声。

あれは、朱音自身の声だった。

「ちょっと、真咲(まさき)！　またあんたわたしのおやつ摘み食いしたでし

ょう！？」
「なんだよ、ケチ！　将来有望な空手師範にちょっとくらい融資しとく気ないのかよ！」
懐かしい真咲の声変わりのしていない声。朱音はぐいと真咲の服の袖を引っ張っている。
「姉ちゃん、おれとやるのか！？　よし、じゃあ勝負だ」
ふんと腰に手をやると朱音はまだ自分より背の低い弟を見下ろした。
「わたしの方が数段上なのよー、勝てると思う訳？　容赦しないから」
姉弟喧嘩はいつものこと。ただし、新崎家では少々喧嘩の色が違っていた。
二人は対峙したまま構えをとる。しばし睨み合った後、『ガラリ』とふすまが開かれた。
「ちょっと、またあんたたち喧嘩？　こんなところでやめてちょうだい。ふすまや障子の修理代も馬鹿になんないんだから」
うんざりしたように言い放つと、二人の母は履いていたスリッパをおもむろに脱ぐと同時に二人の頭目掛けてスパンと投げつけた。
「いた！」
「いてっ！」
はいはい、やるなら道場でやってらっしゃい、と半ば無理矢理部屋から追い出される。これはよくある朱音の日常の一ページであった。

再び訪れた暗闇。
朱音はごしごしとまた目を擦った。
（今度はわたしの記憶・・・？）
どうしてクロウの記憶と朱音の記憶がこうも織り交ざって朱音の

前に現れるのか、朱音には理解できない。
しかし、どちらもひどく懐かしい確かな記憶。
「陛下」
すぐ近くで声がして、朱音は驚いて顔を上げる。
「ルイ!?」
そこに、優しげに微笑む少年が暗闇の中でいつの間にか佇んでいた。
「陛下、お願いです。いつもの陛下を取り戻してください。いつものお優しい陛下に・・・」
悲しげに目を伏せるルイに、朱音は思わず首を傾げた。
「え?」
じっと暗闇の奥を指さすルイの視線の先を追うと、うっすらと不気味な黒い気体が渦を巻いているのが見える。
「あれはなに?」
きょとんとして朱音はルイに向き直る。
「あれは陛下です」
ルイの言う意味がわからず、朱音はもう一度じっと目を凝らした。

禍々しいほどの黒い空気。
迸る(ほとばし)電流。不気味で高らかな笑い声。
その手は、すでに意識を手放そうとしている血だらけの褐色の少年の首を掴み、今まさにその首をいとも簡単にへし折ろうとしていた。

「今のはファウスト・・・?」
異常な出血量。すでに地下道の壁は崩れ、あの空間を保っているだけでも奇跡的と言えた。
「陛下、お願いです。陛下」
いつの間にかルイによって掴まれていた朱音の手には、預けられていたペンダントが握られていた。

「あれは・・・、クロウ・・・」
怒りにより我を失い、暴走している少年はクロウに違いなかった。
「今の陛下ならば力の暴走を抑えられる筈です。陛下、お願いです」
朱音はぐっと手を握り締めた。
アザエル・・・、魔王ルシファー・・・、ベリアル王妃・・・。
そして、真咲・・・、朱音を生み育ててくれた母・・・。そして父。
（そうだったんだ・・・。クロウと新崎朱音は別人なんかじゃなかった・・・。彼の記憶も力も、その全部は今のわたし自身だったんだ・・・）
視界を遮っていた霧が晴れたかのように、朱音は胸の底から漲る力を感じていた。自分を包み込む、万物の力を。

「・・・ぐっ、クロウ王・・・」
朱音は血だらけの青年の首からぱっと手を離した。
もうこの辺りの地下の壁も長くは持つまい。少し離れたところで、数人のドラコの手下たちが呻き声をあげて蹲(うずくま)っていた。
どさりと硬い地面に転がったファウストは虚ろな目で朱音を見上げていた。
「早くここから逃げて。ここの天井はもうすぐ崩れるだろうから」
渦巻いていた黒い気体は消え去り、少年王は狂気に満ちた笑みから元の穏やかな表情に戻っていた。
「な・・・ぜ・・・、俺を殺らねぇ・・・」
朱音ははっきりと、しかし静かに言った。
「わたしはわたしだから」

第4章　1話　招かれざる客人

その日、白亜城では忙しなく人々が動き回っていた。
サンタシが誇る騎士団の出陣が間近に迫り、兵や周囲の者もそれに備えて着々と準備を進めていた。
フェルデンはそんな中、リストアーニャで遂に見つけることのでき無かった少女の行方を案じていた。
本来ならば、兄であるヴィクトル王に旅の報告を済ませた後、再び彼女の捜索にあたるつもりだった。それが、戦の再開でそれも叶わなくなってしまったのだ。
既に数日前にディアーゼ港からゴーディアの魔笛艦隊を迎え撃つ為にヴィクトル王が艦隊を送り出したばかりだった。ヴィクトル王の放った間諜から、ゴーディアの魔笛艦隊がサンタシを目指し、海を最短距離で突っ切ろうとしているという最新の情報が入った為だ。
あの嵐の一件以来、リーベル号の船長アルノが辞任を申し出ていたが、その願いは却下され、彼が再びその艦隊を率いることとなった。
しかしながら、このリーベル艦隊はこの十年に戦闘に備えて着々と準備を重ねてきたゴーディアの魔笛艦隊の船に比べると、明らかに劣っていた。そして、船の数から言っても圧倒的に敵側の方が勝っている。
おそらくは海上での闘いは負け戦になるだろう。そうなれば、フェルデン率いる騎士団を中心とした地上戦は余儀無くされるだろう。サンタシの領土に攻め込んで来るだろうゴーディアの兵を食い止める為、騎士団はこの日、戦場と化すだろうディアーゼ港へと出立する予定でいた。
フェルデンは自らの過ちにより、戦が再開されたことをひどく後悔していた。そして、この戦でたとえ命を失うことになろうとも、

このサンタシの地と、
兄であるヴィクトル王を命懸けで守り抜くと密かに心に決めていたのだ。
「フェルデン殿下」
ふと、馬の背に必要な物資を結びつけているその背後から、部下である騎士に声を掛けられた。
「ユリウスか」
何か物言いたげな小柄の騎士は、真剣な眼差しでそこに立っていた。
「何か用があったんじゃないのか？」
何か言おうとして、言い出せずにいるユリウスに、フェルデンが先に問い掛けた。
「ユリ。リーベル号での嵐の晩、おれはあの船の一室でアカネに会ったと話したよな？」
こくりと頷いたユリウスに、フェルデンは続けた。
「あの暗闇の中で、アカネはおれと一度も言葉を交わそうとしなかった・・・。それだけじゃない、おれから逃げようとまでしていた・・・」
フェルデンはあの夜のこと思い出していた。
激しく揺れる船内。倒れた積荷の下敷きになりかけた少女を庇い、二人は互いの心臓の音が聞こえる程までに近くにいた。
確かに香ったチチルの香油の香り。
「アカネなのか・・・！？」
と訊ねたけれど、彼女からの返答は無かった。怯えたように自分を押し退けるようにして離れた彼女。
そしてそこへあのロジャーという紳士が現れた。
「私はアカネさんの友人です。今はそれだけしか申し上げられない」
彼ははっきりとそう言い、更にこう付け加えた。
「それは、彼女が貴方に会いたいと願わないからです。貴方は悲し

みのあまり、あまりに盲目になりすぎている。もっと心の目で物事を見てみてください。そうすれば・・・真実が自ずと見えてくる筈です」

彼の言った言葉で、フェルデンは盲目だった自分に気付くことができた。失ったとばかり思っていたアカネが、別の姿で存在していることを知った。

けれど、フェルデンはその一言が気掛かりでもあった。

これ程彼女に会いたいと願っても、当の彼女が自分に会いたくないかもしれないという考えがどうしても頭から離れないのだ。

「アカネは・・・、おれとの再会を望んでいないのかもしれない・・・。彼女はおれを恨んでいるのかもしれないと思ってな。もしおれがアカネに会いたいと行動することが、彼女にとっては迷惑でしか無いとしたら・・・」

フェルデンが全てを話し終える前に、ユリウスが言葉を挟んだ。

「殿下、アカネさんはきっと今でも殿下に会いたいと願っていると思います。だって、そうでなければあんなに近くまで戻って来たりしないと思いません？　きっと、殿下に直接会えないような特別な理由があったんですよ」

ユリウスの読みは正しかった。けれど、まだ二人は朱音とクロウ王の関わりについて気が付いてはいない。

苦笑いをしたフェルデンに、ユリウスが励ますような顔で言った。

「殿下、何があっても、この戦を勝ち取りましょう・・・！　そして、サンタシを守り、その時こそ必ずアカネさんを捜し出しましょう！！」

こくりと頷き、フェルデンはユリウスの小柄な背をぽんと叩いた。

それは、フェルンデンの精一杯の感謝を込めた返事であった。

すぐにでも彼女を見つけ出し、連れ帰りたい思いは変わらないままだったが、その思いは今はそっと胸の中に仕舞っておくことにした。自分の我儘で部下や仲間達の命を危険に晒すことはできはしな

い。
「ユリ、騎士団を城門前に集結させろ。ディアーゼ港に向け出立する」

ヴィクトル王は疲労しきった目蓋を左の指で指圧していた。もう眠りにつかないままこうして机と玉座を行ったり来たりしている日が何日か続いていた。
「いけませんな、陛下。お顔の色が優れませんぞ。今貴方がお倒れになれば、それこそサンタシの行く先はありませぬ」
呆れたように、ディートハルトが傍の腰掛け椅子から声を掛けた。
「分かっている。しかし、そう暢気に眠っておれる状況ではあるまい・・・」
今頃、負け戦と分かっていながら送り出したリーベル艦隊が海上でゴーディアの魔笛艦隊と激しい闘いを繰り広げている頃である。
「愚かであった・・・。もっと戦闘用の船の開発に費用を注ぐべきであった。いや、もっと人材を育成しておくべきだったのか・・・」
すっかり艶をなくしてしまったヴィクトル王の金のウェーブがかった髪は、より一層疲労を際立たせて見せる。
「確かに軍事費に割いた費用はこの十年少なかったでしょう。しかし、わたしはこの十年に陛下がなされてきた政策があながち間違いだったとは思いませんぞ」
ディートハルトは先王の後を継ぎ、このサンタシを支えてきた歳若いヴィクトル王の姿を一番近くで見続けてきた。
この十年の間に、絶対不可能だとまで言われた停戦まで持ち込み、更に長い戦争で苦難を強いられてきた民のことを一番に考え、軍事よりも生活向上に費やしてきた。
そのお蔭でサンタシの民がどれ程救われてきたことか。“賢王”とまで呼ばれるに値する、王としての責務を全うしてきたことに変

わりは無い。
「サンタシの街や村々を見てみなされ。今やどの国よりも治安は安定し、民の暮らしは潤っております。警備隊の長官を担っておる身ではありますが、わたしの仕事はこの二年ほぼ無いに等しいものでした。せいぜい民衆同士の喧嘩の仲裁程度のものです」
だからこそ、こうしてヴィクトル王の傍に仕えることができたというのも事実であった。
「ディートハルト、お前はわたしを責めることをしないのか？　艦隊の敗北は明らかであるのに、わたしはそれをみすみす送り出したのだぞ」
有能なアルノであるからこそ、きっと祖国を守る為に最期まで退くことはしないだろう。例えそれがどんな不利な状況に追い込まれたとしても、残りの一隻になるまで魔笛艦隊に果敢に立ち向かっていくことは分かっていた。
だから困る、とディートハルトは溜息を漏らした。
王はいつだって国を守る為に部下を利用しなくてはならない。たとえそれが、使い捨ての駒になろうとも・・・。それを知っているだけに、この王は賢王と呼ばれるに値する男になりえたのだろう。
しかし、それはいつだって自らの首を絞め続けてきた。
「陛下、我国の誇れるものは、艦隊ではありません。ですが、海上戦である程度戦力を削ぎ落とすことができれば、我々に勝機は十分に有り得ます。彼らは愛する母国を守る為の犠牲ならば、たとえそれがどんな結果になろうとも本望な筈です。それは、このディートハルトも同じこと・・・。そして、貴方の実弟、フェルデン・フォン・ヴォルテヴィーユ殿下はサンタシ最高の騎士です。彼の率いる騎士団が必ずや地上戦で敵の侵攻を防いでくれる筈です」
逞しい腕をぐっと胸の前に構え、ディートハルトは顔の傷を引き攣らせながらにかりと笑った。
「陛下。このディートハルトに、今一度騎士団復帰のご許可を！
そして、フェルデン殿下の手助けをぜひともわたしに！」

驚きとディートハルトの歳をも感じさせない言葉に、ヴィクトル王はふと顔を上げた。
「ディートハルト、我弟の助けとなってくれると・・・！？」
頼もしい剣士の一言で、ヴィクトル王は僅かに希望の光を見た気がした。
すっと椅子から立ち上がったディートハルトは、ヴィクトルの机の前で礼の形をとった。
「よし、そちに騎士団総司令官補佐役を命ずる。良き軍師として、良き戦友として、我弟を頼む」
「はっ」
ディートハルトがふっと口元を綻ばせて顔を上げるほんの僅か直前に、慌しく家来が部屋のドアを叩いた。
「陛下・・・！　陛下・・・！」
「何事だ、入れ」
息せき切って入室してきた近衛兵は、慌てて跪くと、報告を始めた。
「陛下、ゴーディアの新国王を名乗る不審な輩が城を訪ねて来ました。不審な点が多いので、捕縛しようと試みたのですが、城内でまんまと逃走、現在も捜索に全力を挙げております」
不可解な報告にヴィクトルは眉を顰めた。こんなに厄介なときに、人騒がせな悪戯をするどこぞの誰がいたものだ、と呆れて溜息を溢す。
「こんな時に一体何をしておるのだ。その自称ゴーディアの国王とやらは一体どんな馬鹿なのだ」
近衛兵はごほっと咳をすると、顔色を伺いながら報告を続けた。
「まだほんの子どもです。ひどく汚らしい格好をしていましたので、この騒ぎに紛れて金品を盗みに入った泥棒猫か乞食でしょう」
その話を聞いて、思わずディートハルトは苦笑した。
「おい、ここの兵はどうなっておる。この緊迫した時期にこの気の緩み用はなんたるか！　たかが子どもに城の警備を簡単にすり抜け

られるとは、この城には腑抜けの兵ばかりが残っておるのか！」
どすのきいたディートハルトの怒鳴り声に、ひっと近衛兵は飛び上がり、頭を下げた。
「もっ、申し訳ありません・・・！　すぐに捕まえて参ります・・・！」

物凄い勢いで部屋を飛び出して行った近衛兵の後姿を見送った後、ヴィクトル王はやれやれと椅子の背もたれにもたれ掛かった。
「しかし・・・、その餓鬼んちょとやらは、本当にこの時期に何を考えておるのか・・・。ゴーディアの新国王を名乗り、一人で城に乗り込んで来る気概さは認めるに値するが、なんと命知らずな・・・」

「はあはあはあはあ・・・」
相手が子どもだと思って油断していたこともあり、案外簡単に城内に入り込むことができたことに、朱音は驚いていた。
いや、よく考えると以前この城にいたときに比べると、兵の数が格段に少ないようにも思える。いつも騎士達の訓練の声が堪えない中庭も、今日はしんと静まり返っている。
（まさか・・・）
朱音は頭を振った。まだこんなところで立ち止まる訳にはいかない。
（早くヴィクトル陛下にお会いしないと・・・！　全てを話して、この戦争を止めて貰わなきゃ・・・！）
朱音は身を潜めていた馬小屋の影からゆっくりと立ち上がると、呼吸を整えて駆け出した。

2話　二人の国王

苦労の末に、やっと城内を逃走していた子どもを捕縛することができたとの近衛兵の報告を受け、ヴィクトルは疲労しきった身体を引き摺るようにして、謁見の間に訪れていた。

壇上から見下ろすような形で、縄に縛られた子どもが兵に剣をつきつけられたまま膝をついている姿を遠目に見つめた。

なるほど、確かに薄汚れた格好をしている。髪は砂埃ですっかり白くなり、かなり遠くから旅をしてきたのだろうか、服のあちこちは擦り切れてまるでぼろ切れのようになってしまっていた。そこからは性別までは判断がつけられないが、薄汚い格好と短い髪から少女というよりは少年のようにも見える。

ヴィクトル王はそんな子どもを見つめたまま、静かに王座に腰を降ろした。

「そこの者、面をあげよ」

ヴィクトル王の声に反応して、子どもがゆっくりと顔を上げる。

「！！！」

その瞬間、驚きでヴィクトル王は勢いよく玉座から立ち上がっていた。

そして、それは玉座の近くに控えていたディートハルトも同じで、目を丸くしている様子が視界に入る。

「なぜお前がここにいる！？」

もの凄い剣幕で衣を翻しながら壇上から降り立ったヴィクトル王は、子どもの胸倉を乱暴に掴み上げ、護身用の短剣をその首に押しあてた。

「陛下！？」

その場にいる近衛兵達が、息をのむ音が聞こえてくるようであっ

た。
「・・・どうかわたしの話を聞いてください、ヴィクトル陛下。わたしはその為にここへ来ました」
怯えた様子も無く、真っ直ぐにヴィクトル王を見つめる黒曜石の瞳にヴィクトル王は僅かにたじろいだ。
今ヴィクトル王の目の前にいる子どもこそ、この最悪のシナリオを招いた張本人、ゴーディアの新国王クロウに他ならなかった。
砂埃で薄汚れた髪や肌で多少見劣りはするが、この顔は忘れる筈もない知った顔であった。今は亡きゴーディアの国王で、サンタシのはるか昔からの天敵魔王ルシファーは絶世の身を兼ね備えた恐ろしい男。少年の顔はまさにその顔と瓜二つのものだったのだ。
「今更話すことなど何も無いわ！　よくものこのこと、この城へやって来れたものだ！」
憎々しげに睨みつけるヴィクトル王の表情に、朱音は胸の奥がツキリと痛んだ。
「ヴィクトル陛下、誤解です・・・！」
「うまく城へ忍び込んだものだな。お前にとってはこれもほんのお遊びのつもりであろうがな！　何が目的だ！　わたしの首をとりに来たか！」
いつもは冷静なヴィクトル王であったが、我国を脅かす脅威が突然に目の前に姿を現したことで、怒りと興奮を溢れ出させているようであった。
懸命に彼に事実を伝えようと朱音は試みるが、彼の耳、元より心にはその声はそう簡単に届きそうにはなかった。
王の異様な雰囲気を察し、この少年が招かれざる客だと気付いた近衛兵全てが、いつの間にやら少年に剣の切っ先を向けて取り囲んでいる。
「話を聞いてください！　わたしはただ、戦争を中止してもらいたくて・・・！」
「黙れ、この汚らわしい魔族め！　そんな嘘にこのわたしが騙され

ると思っておるのか。あのような惨い方法で我国を裏切っておきながら、今更戦争を中止したいだと!?　今度はどういう企みだというのだ!」

はっとして朱音は怒りに震えるヴィクトル王を悲しげな目で見つめた。

この王が自分の立場を顧みず、サンタシの民や国の為にどれだけの苦労と努力を続けてきたのかは話に聞いていた。その話は、実の弟フェルデンが白亜城に匿われていた頃の退屈な少女朱音に聞かせた話の中の一つであった。

「・・・貴方の怒りはよくわかります・・・。貴方のこれまでの苦労と、努力を踏み躙ってしまったゴーディアの罪は全てわたしが被ります。こんなことになってしまったのは、わたしのせいに他なりません・・・」

はらりと音もなく黒曜石の瞳から零れ落ちた一滴の涙に、ヴィクトル王は困惑した。

「汚らわしい・・・！　ならばここで大人しく首を刎ねられるがよい！　さすれば、この長きに渡る戦争も終結し、我国は魔族の脅威に怯えることなく、平和に安穏に暮らしていける！」

ヴィクトル王は、持っていた短剣をかなぐり捨てると、傍にいた近衛兵の剣を奪い取ってクロウの前に振り上げた。

「レイシアの為に死ね!!!」

ヴィクトル王の振り上げられた剣が振り下ろされる瞬間、『パシリ』と剣の刃が何者かの手によって遮られた。

「・・・ふっ、そういうことか・・・」

憎々しげにヴィクトル王は突如入った邪魔を睨み見た。

「敵国の城に単身で乗り込む程馬鹿ではなかったのだな・・・。しかし、そなたが生きていたとは・・・」

朱音がの前に立ち塞がるようにして現れたすらりとした身躯は、その手に構えた剣の刀身でヴィクトル王の剣を難なく受け止めていた。

一つに束ねられた美しい碧い髪は、さらりと僅かに揺れた。
「アザエル・・・！」
死んだかもしれないと思っていた彼が、今こうして目の前に現れたことに動揺し、朱音は無意識に名を呼んでいたことに気付いていなかった。
「愚王、ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユよ。このまま貴様の息の根を止めてやろうか」
冷ややかなアザエルの言葉に、ヴィクトル王はぐっと剣の刃に力を込めた。
「殺ってみるがよい。但し、わたしが死んだところで我国は滅びはせぬ。寧ろ、サンタシの新たな始まりだ。わたしの後は最高の王が引き継ぎ、そなたの主の息の根を必ずや止めに行くであろう」
ヴィクトル王の言う最高の王とは、弟であるフェルデン・フォン・ヴォルティーユを指していた。
ヴィクトル王は、自らがとる国政よりも、いつの日か弟のフェルデンがずっと素晴らしい国づくりをしてくれると、密かに夢に描き続けてきた。彼が一人前になるまでと、先王からのほんの僅かの期間のみ引き受けたつもりの王の地位。この場所が自分に相応しくないことなど初めっから承知のことであった。
しかし今、フェルデンは騎士団を率いる程までに成長し、その器は十分に出来上がりつつある。そう、ヴィクトル王の役目は終息に近付いていたのだ。
「そうはさせん！！」
一瞬の隙をついて二人の間に割って入ってきた凄まじい剣気。
びりびりと空気を伝い、肌を刺すような気迫に朱音は息をすることさえ忘れていた。
ヴィクトル王を庇うように大剣を構える大男は、歳を重ねてはいるものの、屈強な身体と恐ろしい程の剣の腕を持ち合わせ、その雰囲気だけで素人の朱音の目にも彼が相当の人物だということを知らしめるには十分な空気を身に纏っている。

「ヴィクトル陛下、お下がりください。ここはわたしが・・・」
ディートハルトには今のヴィクトル王の気持ちは手に取るようにわかった。
とっくに役目を果たしたと思っているヴィクトル王であるが、フェルデンの師でありヴィクトル王の傍に仕えてきた彼はそうは思わなかった。
フェルデンにはヴィクトル王の存在が必要で、そしてこのサンタシ国にも賢王ヴィクトルの存在が必要不可欠だと信じて疑わない。
何がなんでもディートハルトは国の為にヴィクトル王の身を守り抜かねばなるまい。
「その大剣・・・。貴様、レイシアの三剣士の一人、ディートハルト・アルデンホフか」
「いかにも」
冷ややかな笑みを浮かべ、アザエルは剣の構えを変えた。
「魔王の側近と謳われたおぬしの腕、この老いぼれの目に叩きつけてみよ」
朱音は直感で感じた。この戦いはどちらにとってもただでは済まないということを・・・。
（アザエル、だめ！）
『ビュンッ』
『ガキィィィ』
凄まじい剣気と張り詰めた空気の中で、どちらも引けぬ剣が激しくぶつかり合う。
「アザエル！　やめてっ」
朱音が叫ぶが、このときばかりはアザエルも手を止めることなどできなかった。
「ほぉ、噂通りなかなかの腕だ。しかし・・・、その鈍らでわたしの剣の刃を受け止め続けることなどできるかな」
くっと唇を引き上げると、ディートハルトはアザエルの間に合わせの剣に視線をやる。

接触の際に火花の飛び散る程の斬撃に、僅か数回の攻撃を受け止めただけのアザエルの剣の刃は既にあちこちが刃こぼれし、使い物にならない程になっていた。

冷たい目で一瞥すると、アザエルは流れるような動きで空いた手で別の攻撃を加えていく。

掌から発射される無数の針はディートハルトに絶え間無く襲い掛かる。

しかし、湿気の少ないこの室内では、空気中の水分は十分に殺傷力のある水針へと形を変えるには至らない。

ディートハルトはそうしたアザエルの攻撃を斬撃で弾き飛ばし、僅かなかすり傷のみという偉業を成し遂げていた。

アザエルの剣はゴーディアを出立前にどうやら元老院に奪われてしまったらしい。あり合わせの剣ではディートハルトの剣に所詮敵う筈などない。アザエルの剣が折れるのはもう時間の問題と言えた。

「どうした、魔族よ。お前の実力はそんなものか？　老いぼれを落胆させるな」

「口の減らぬ死に損ないが・・・」

魔力を使用し、これ程のディートハルトの攻撃を受け流しながらも、息一つ乱さないアザエルの姿に、朱音はやはりこの男は魔王ルシファーの右腕だったのだと実感する他無かった。

音もなく流れる水のように動く碧髪の男の姿は、異様に怪しい光を放っていた。

近衛兵でさえ二人の緊迫した闘いの様に見惚れ、そしてその場にまるで打ち付けられたように足が動かない。

『ザンッ』

瞬時に紅い飛沫が宙を舞い、近衛兵の一人が声を出す間もなくドサリとその場に倒れ込んだ。

そのすぐ傍で、返り血を浴びた氷の目をした男が、美しい顔からぽたりぽたりと鮮血を垂れ流しながらサンタシ最強の剣士を見つめる。

みるみるいちに床に広がっていく紅い血だまり。生暖かい血は倒れた近衛兵の首の動脈から今もどくどくと脈打つ度に流れ出ている。

朱音はあまりの光景に呆然とした。

近衛兵の中には、一体何が起こったのか理解できていない者もいたようだ。

アザエルは使い物にならなくなった剣を投げ捨てると、両の手をディートハルトに向けて翳し始めた。

「！！！」

絶命した近衛兵の今なお流れ出す血液がアザエルの手に吸い込まれるようにして、その掌にはみるみる紅黒い剣のようなものが形作られていく。

「血の剣だと・・・」

ディートハルトは目を見張り、大剣を構え直した。

「ちっ、強度がまだ足りぬか・・・」

そうアザエルが呟くと同時、今度は朱音の隣に立っていた近衛兵がどさりと鈍い音を立てて倒れ込んだ。

『ゴロゴロゴロ・・・』

光沢のある石の床面に転がったものは、置物などではなく、兵士の頭である。

「ひっ」

悲鳴を上げ、朱音を取り囲んでいた近衛兵達が向けていた剣のこともすっかり忘れ、恐怖で真っ青になりながら後退していく。

その間にも、切断された首からは鮮血が噴出し、朱音の衣服をも真っ赤に染め上げていった。

アザエルは冷笑を浮かべ、その血さえも掌の武器へと吸収し続けていく。

「その減らず口を永久に閉じてやる」

室内に篭る生臭い鉄の臭い。惨劇に朱音は吐きそうになるのをじっと堪えた。

「もう止めて・・・。これ以上誰が死ぬのも見たくない・・・」

強硬な武器を手に入れたアザエルが今まさにディートハルトに切り掛かろうとしている。
「お願いです、あの二人を止めて・・・！」
朱音は真っ赤に染まった手でヴィクトル王の腕を掴んだ。
「なぜ？」
まだ生暖かい血に濡れた少年王の手に掴まれ、ヴィクトル王は自らの腕を振り返った。その横顔は、なぜかフェルデンの表情に重なって見えた。
「ヴィクトル陛下、どうかお願いです。このままではあの人はアザエルに殺されてしまいます。どうか・・・」
「なぜわたしがお前の言うことなどを聞いてやらねばならぬ」
あまりフェルデンと似ていないと思っていたヴィクトル王の吊り上った隙の無い目、しかしふと下を向いたときに落とす睫毛の影が、二人がやはり兄弟だということを朱音に思い出させてくれた。
「ヴィクトル陛下、わたしが憎いというのならわたしは貴方の意向に従います。煮るなり焼くなり殺すなりお好きにしてください・・・。だから、どうか二人を止めて・・・！」
懸命に腕にしがみ付いて懇願する少年王の姿を目にし、ヴィクトル王はその姿を凝視した。
ここにいる少年王は、噂に聞いていた我儘で横暴な少年王の姿からまるで想像もつかないものである。血だらけになって必死に敵国の国王に訴えかける様子は、サンタシを裏切り戦争を再開させた張本人の演出にしてはあまりに妙な行動であった。
「では、お前は一体何をどうしたいというのだ。お前には強大な魔力がある筈であろう。それを使い二人を止めればよかろう」
朱音は首を振ってそれを否定した。
「わたしはただ、貴方と話がしたかっただけなんです。それに・・・、わたしは力をまだうまくコントロールできません・・・」
アザエルの血の剣がディートハルトの大剣と何度も接触し、二人とも一歩も退かない状況が続いている。

「アザエルはあの人が攻撃を止めるまではわたしの言うことをきっと聞いてくれません。ですから、ヴィクトル陛下からあの人に攻撃を止めるように言ってください・・・！　どうぞお願いします。これ以上の犠牲が出ないうちに・・・」

少し黙り込んだ後、ヴィクトル王が口を開いた。

「ディートハルト、もうよい。クロウの身柄はサンタシが預かった」

ぴたりと二人の剣の動きが静止した。

「ゴーディアの国王クロウ自らサンタシに降伏を申し出た。我国の勝利がここに証明された」

バシャリとアザエルの手に握られていた剣がどす黒い元の鉄臭い血だまりへと姿を戻す。

「ヴィクトル陛下・・・、わたしはそれでも構いません・・・。でも、あともう少しだけわたしに時間をください。戦争はまだ終わっていないんです・・・。例え私が降伏しても、今のゴーディアはきっと止まることをしません。もう既に、国が別の者の手によって動き始めてしまったんです」

ヴィクトル王は怪訝な顔で朱音の血に濡れた表情を見つめた。

「一体何を申しておる」

解せない様子で、眉を顰める。

「別の誰かが“国王に成り代わった”のか？」

いつの間にやら息が上がってしまっていたことに気付き、ディートハルトは大剣を静かに鞘へおさめた。

「我国王の座に相応しいのはクロウ陛下唯お一人。陛下の留守をいいことに、“国王に成り代わろうとした”愚かな反逆者が一人いたようだが」

アザエルの言葉に反応し、朱音が目を丸くして振り返った。

「アザエル、貴方知って・・・」

予想外の展開による過重なストレスと、不眠不休で長くいすぎたせいか、どっと疲れが噴出したヴィクトル王は、ぐらりと足元をふ

らつかせた。
「ヴィクトル陛下・・・！　ほら言わんこっちゃない・・・」
先程の気迫からは想像もできない程呆れた声でディートハルトはヴィクトル王のふらついた腕をがしりと引きとめた。
「ヴィクトル陛下・・・。少し休んでください。わたしは逃げも隠れもしません。ただ、ゴーディアの国王の最後の仕事として、ゴーディアの後始末は全て責任を持ってわたしが片付けてきます。それまで、わたしに時間をいただけますか・・・？」
黒曜石の瞳は、悲しい色を含みながらも国王としての責務を全うしようと必死にヴィクトル王に訴えかけていた。
「わたしに長年の敵国の王を信じ、みすみす放てと？」
血の気の失せた顔でヴィクトル王は吊り上がった眼をじっと細め、朱音の瞳を見返した。
「無理を言っていることはわかっています。だけど、今暴走しているゴーディアを内側から止めることができるのは、サンタシやヴィクトル陛下ではなく、きっとゴーディアの国王の地位にあるわたしだけだから・・・」
アザエルは、朱音が国王としての自覚を持ち始め、以前とは違い、その責任を果たそうとしていることに気付いた。今、朱音はゴーディアの国王として相応しい王へと変化しつつあった。
逃亡から始まったこの旅は、朱音にとってはきっと必要なものであった。
けれど、それには多くの犠牲が払われた。こうした経過でさえ、有能な魔王の側近アザエルの当初の計画に、これら全てが練り込まれていたのかもしれない。その真実はこの有能な魔王の側近の心の内だけが知っている。
さっと視界に茶色い塊が宙を横切り、その物体がディートハルトの逞しい腕にがしりと舞い降りた。
「鷲！？」

この凄まじい空間に、悠々と入ってきた立派な鷲のような鳥は、鋭い足に結わえ付けてある紙切れをくいとディートハルトに差し出した。

「これは・・・！」

険しい顔で紙を開いたディートハルトは、その文面に目を走らせた後、表情を曇らせてヴィクトル王にそれを渡した。今にも倒れそうな王の表情が、それを読んだ途端きっと唇をきつく結び鋭い目つきを取り戻した。

「リーベル艦隊が全滅した・・・」

予想はしていたものの、あまりに過酷な現実。

アルノは華々しく海で散っていったのだろうか。彼が城を後にしたときに見た背中が、ヴィクトル王が彼を見た最後の姿となってしまった。

「ディートハルト・・・。悪いがすぐに戦地へ向かってくれ。魔笛艦隊が我領土内に侵攻するのは明日だそうだ・・・。沈めた船の数は三分の一にも満たかった。予定よりもかなりの勢力を残して乗り込んでくる。そなたが行くまでフェルデンが持ってくれれば良いが・・・」

朱音の嫌な予感は的中した。

あの愛する青年が、戦火に今にも飛び込もうとしている。

「ディートハルト・・・、フェルを頼むぞ。あいつはサンタシの最後の希望なのだ・・・！　決して死なせるな・・・！」

3話　目覚め始めた記憶

愛していた・・・。
僕を殺そうとした人・・・。
可憐で、そして穢れを知らない美しい人。
皆の愛を独り占めした人・・・。
なのに、たった一人の愛を手に入れる為に、全てを裏切った人。
僕は何一つ望んでなどいなかった。
僕はただ、貴女に気付いて欲しかっただけだったのに。
ここに、それでも貴女を大好きなちっぽけな自分がいることに、
僕はただ気付いて欲しくて。
傷つけたくなんかなかったのに・・・。
これは、父ルシファーがブラントミュラー公爵の手により毒を盛
られた直後、母ベリアルとの間にあった悲しい記憶・・・。

「さあ、もうこの辺りでいいわ」
アプリコットの髪を揺らせながら、可憐な王妃は近衛兵に目配せ
をした。
こくりと頷くと、静かに近衛兵は突きつけていた剣の刃を引き下
げると、胸の内側から小さな小瓶を取り出した。
「クロウ、怖かったでしょう？　こんな乱暴なことをされてひどく
混乱しているでしょうね・・・」
ベリアルは嘗て一度もクロウに向けたことのない優しい表情を浮
かべ、クロウにそっと歩み寄った。
「母上、父上は一体どうしたんですか・・・？」
「あなたは何も心配いらないの。いいこと、今から母が言うことを
しっかりと聞いてちょうだいね」
クロウの白い頬に滑らされた華奢なベリアルの指。こんなにも近

くにクロウの近くに母が居たことはきっとなかっただろう。
「でも、母上、サンタシの兵が、この城に・・・」
「お黙りなさい。何も心配しなくていいと言ったでしょう?」
きっと大きな目を吊り上げ、ベリアルが諌めた。
近衛兵から小瓶を受け取ると、クロウにそれを包み込むように握らせる。
「母上、これは・・・?」
「今、この国は新しい王を迎え入れ、生まれ変わろうとしているのです。それには、もう強大な魔力も魔王という地位も只の足枷でしかない・・・」
恐ろしい母の告白に、クロウは黒曜石の瞳を大きく見開いた。
「心配などいりません。これは薬です。魔力を失くさせる薬・・・。ただの人間になりたいでしょう? クロウ」
どんなに冷たくあしらわれようとも、クロウは決して母を疑ったりはしなかった。それは、母がどれだけ父である魔王ルシファーを愛しているかをクロウが一番よく知っていたからだ。
「父上を・・・、ゴーディアを裏切ったのですか・・・?」
不機嫌にクロウから目を逸らし、ベリアルはふんと鼻を鳴らした。
「・・・あんたって本当にどこまでもムカムカする生き物よね・・・。人がせっかく下手に出て優しくしてあげたというのに、、可愛げの欠片さえもない。わたくしが陛下を裏切ったですって? 人聞きの悪い!」
豹変した母の態度に、クロウは驚き表情を強張らせた。
「わたくしはただ、陛下の為を思って契約を交わしただけのことです。あなた、陛下がこの国と民を守る為にどれだけ心労を重ねてらっしゃるか知らない訳ではないでしょう?」
さっきまでクロウに触れていた手が卑しくて堪らないというように、ベリアルは唇を歪めて手をぱんぱんと払う。
「契約!?」
「ええ。何を驚いているの? 陛下の強大な魔力さえさくなってし

まえば、陛下はもう無理をして国王なんかを務める必要などなくなるでしょう。ブラントミュラー公爵が陛下の魔力と魔城の引渡しを条件に、陛下とわたくしの安全と平穏を約束してくれたのです。これからは、彼が代わってこの国の王として立派に国を導いてくれるでしょう」

愚かな母は、あまりに無知であった。

国政や人間の闇を知らないベリアルは、ブラントミュラー公爵の口約束にまんまと乗せられてしまったのだ。

「母上、それはきっとブラントミュラー公爵・・・、いえ、サンタシの策略です。母上はきっと利用され、騙されたのです・・・」

憎らしげに、ベリアルはクロウの顔を見つめた。愛する夫、ルシファー王を生き映したかの容貌。

しかし、確かにその黒曜石の瞳の中に、ルシファーがこの世でただ一人愛した女の存在をはっきりと彷彿させた。その母子は一見あまり似ていないせいか、他の者が決して気付くことは無い。しかし、ベリアルだけはクロウがその女とよく似ていると感じて止まなかった。何もかもを見透かしたような目や、魔王ルシファーの期待を一身に受けるその姿が、クロウの実の母である女とひどく似通っていた。

「お前はわたくしが馬鹿で愚かだと、そう言いたいの・・・!?」

怒りで華奢な肩を震わせる可憐な王妃は、ぎっとクロウを睨み見た。

「ベリアル王妃・・・、ここに長居はできません。早く脱出致しましょう。城外で馬車を待たせてあります・・・!」

後ろを気にした様子で、傍にいた近衛兵が焦って口を挟む。

「うるさく言わなくたってわかっていますわ！　さあ、お前もさっさと薬を飲んでおしまいなさいな」

クロウが手にしていた瓶の硝子の蓋を、まどろっこしそうに抜き払うと、その瓶をクロウの胸に圧し付けた。

瓶の中身は薄い桃色の、とろりとした液体であった。蓋を開けた

途端鼻をくすぐる甘ずっぱい香り。それは父が好んで口にする“ルト”という赤い実の酒の香りによく似ていた。
しかし、その香りの中に、決して混じってはいけないものが含まれていることに、クロウは気付いてしまったのだ。
「母上・・・、まさか、これを父上に飲ませたのですか・・・？」
真っ青になりながら、クロウは愚かで美しい母の目をじっと見つめた。
「ええ、陛下の魔力を失くす薬です。ブラントミュラー公爵が長年をかけて開発した特別なもの」
クロウは瓶をぎゅっと握り締めると、近くの窓を乱暴に開けてそこから瓶を外へ投げ捨てた。
「なんてことをするの！？」
ベリアルが慌てて瓶が落ちていった窓に駆け寄り、叫んだ。
「毒だ・・・、毒が入っている・・・。それも猛毒・・・」
「え・・・？」
驚き、目を丸くするベリアルに、クロウは青い顔で言った。
「でも、たかが毒じゃ父上は殺せない・・・。だけど・・・」
傍でちっと近衛兵が舌打ちした音が、クロウの耳には確かに届いていた。
「な、なにを言っているの？」
「母上、あの瓶には僅かですが、人間の血が入っています。酒に混ぜて薄めたら、きっと匂いだけでは気付かないかもしれない。けど、確かに血が混ぜられています」
急に諤々と震え始めたベリアルは、口をわなわなと震わせた。
「う・・・そ、嘘よ。いつもわたくしがとっていた態度に腹を立てて、その仕返しのつもりでしょう・・・？」
クロウは青い顔のまま、取り乱した母の顔を黙って見つめた。
天上人ルシフェルは不老不死であった。しかし、禁忌を破ったルシフェルを地上に永久に追放した際、創造主はルシフェルを滅ぼす為にほんの少しの細工をしたのだ。人間の血を口にすると、たちま

ちそれが彼にとっては命をも奪う、猛毒になるようにと。
　創造主はこの時、既に知っていたのかもしれない。地上に住まう、人間の欲深さを。そして、自らの手で滅することのできなかった愛すべき息子ルシフェルを、彼らがいつの日か滅ぼすだろうことを・・・。
　ベリアルは、誰よりも愛しい男に自らの手で毒を盛ってしまったのだ。
　どんなに欲しても手に入れられなかった、魔王ルシファーの愛を手に入れる為に・・・。彼女を取り巻く全てを裏切り、その犠牲をも厭わずに。
　しかし、皮肉にもそれは最悪の結果を招いてしまった。まさかこんな形で、愛する男を自らの手で破滅へと導くことになろうとうは・・・。
「ベリアル王妃、クロウ殿下は貴女を城に留めようと、嘘を言っておいでなのです」
　近衛兵はひどく動揺するベリアルにそっと耳打ちした。
「まあ・・・、なんて子・・・！」
　こうして存在するだけでベリアル自身を惨めにさせるこの少年。お前がいなくなればいいと何度願ってきたことか。しかしほんの一抹の良心が、魔力を奪い、どこか遠くの地へ追放してしまうに留めてやってもいいと美しい王妃は思った。
　だが、やはりこの憎らしい子どもにはそうした情けも無用だと、ベリアルは考えを改める。ここで根絶やしにしておかねば、いつまた自らとルシファーの邪魔立てをするかわからない、と。
「わたくしは先に馬車へ行きます。お前はこの子とルシファー陛下の側近を殺してから追いつきなさい。生かしておくと碌なことがありません。それから、陛下は必ず無傷でお連れするようにと、ブラントミュラー公爵に伝言をしておきなさいな」
　軽蔑したようにつんと横を向くと、ベリアルはアプリコットの髪をふわりとなびかせて歩みを始めた。

「母上！　待って下さい！」
クロウが駆け寄ろうとしたその前に、鞘から刀身を抜き払った近衛兵が立ち塞がった。
「ふん、ただのイカれた餓鬼だとばかり思っていたが、さすがはルシファーの息子、混入された血に気付いて命拾いしたか。だが、それもここまで」
近衛兵の纏っていた空気が、明らかに別人のように殺気を放つものに変わった。これは、もともと暗殺者として訓練され、送り込まれた者に違いない。
「・・・もともと僕を殺す気だったんだね・・・。そして父上も・・・」
ふっと僅かに唇に笑みを浮かべて、男は剣を勢いよくクロウに突き立てた。
一瞬目の前が真っ白になった。

次に目を開いたとき、足元にはぐちゃぐちゃになった肉塊と血溜まりができていた。自分が一体何をしてしまったのか、どうしてこうなってしまったのか、少年には理解できなかった。
『息子よ、お前には特別な力が備わっている。今はまだその力をうまく使いこなせはしないが、わたしは信じている。お前がいつの日かこのゴーディアを引き継ぎ、ゴーディアの民を守ってくれるだろうことを』
穏やかな父の声がクロウの頭の中をふと過ぎった。
“魔王”と呼ばれるには優しすぎた父。その心は、いつもゴーディアの民のことでいっぱいであった。
そして、息子であるクロウと過ごす時間もそう長くはとれていなかった。
しかし、父はクロウにとって偉大であった。強く、優しく、そして誰よりも温情深い国王だと・・・。

「化け物・・・」
恐怖に慄いた可憐で美しい王妃のぷくりとした可愛らしい唇から残酷な言葉たちが次々と紡ぎだされる。
「お前はなんて醜い生き物なの・・・！　ああ、恐ろしい・・・！」
心が粉々に砕け散るのは十分すぎる言葉であった。
完全な拒絶。
クロウは泣いていた。
「母上、僕は・・・、僕は・・・」

「大丈夫ですかな？　ひどい顔色をしていますぞ」
ディートハルトが頭上から朱音に声を掛けた。
あれから、二人はすぐに白亜城を出立し、ディアーゼを目指して最高速の馬で駆けているところであった。
思えば、何日も疲労による気絶と駆け足を繰り返しながら、這い出るように地下道を脱出してからというもの、朱音の記憶はひどく曖昧になっていた。
ときおり白昼夢を見ることも多くなり、そこで見た記憶は朱音自身の記憶、即ち、真咲や父や母、ただの中学生だった頃の記憶と同じ位鮮明になりつつある。それと同時に、時折ひどくルシファー王を懐かしく思うことや、義母ベリアルを思い出しては胸がジクリと痛むことも多くなった。
何より、死んだかもしれないとばかり思っていたアザエルが、生きて目の前に現れたことに、ひどく安堵している自分がいた。あれ程、朱音の全てを奪い去ったあの男を、吐き気がする程憎んでいたというのに・・・。
「平気です。気にせず走らせ続けてください」
朱音の顔色は何日も眠っていないヴィクトル王といい勝負かもし

れない。
（魔王ルシファーの死はベリアル王妃の裏切りが原因だったんだ・・・。そして、クロウの魂のアースへの転生も・・・）
朱音は蘇ったクロウの記憶から、クロウのアースへの転生までの経緯を知った。
現代の、舗装された道を車に乗って走るのとは訳が違い、酷い揺れと振動とで、朱音は何度も吐き気を催した。
しかしここで弱音を吐くなどできる筈などなかった。今は一刻を争う事態なのだ。
普通は三日はかかる道のりを明日までになんとかしなければならないのだ。でなければ、到着した頃には焼け野原と死体の山だけになったディアーゼ港の姿を拝むことになるかもしれない。

「ディートハルト・・・。悪いがすぐに戦地へ向かってくれ。魔笛艦隊が我領土内に侵攻するのは明日だそうだ・・・。沈めた船の数は三分の一にも満たかった。予定よりもかなりの勢力を残して乗り込んでくる。そなたが行くまでフェルデンが持ってくれれば良いが・・・」
あの嵐の夜に船上で接触して依頼、朱音にはフェルデンの所在は一斉わからなくなってしまっていた。
しかし、その後サンタシの白亜城まで無事に帰還を果たせていたようだ。
「ディートハルト・・・、フェルを頼むぞ。あいつはサンタシの最後の希望なのだ・・・！　決して死なせるな・・・！」
「ヴィクトル陛下、仰せのままに・・・」
ディートハルトがひどく顔色の優れないサンタシの国王の前で礼の形をとった。
フェルデンの無事を知り、ほっとしたのも束の間、彼は既にゴー

ディアの侵攻軍を迎え討つ為、騎士団を引き連れて王都の西、海に面したディアーゼの街に入ってしまっていた。そう、もっとも激しい戦場と化すであろう場所へと。

「ディアーゼの街は火と血の海と化すやもしれぬ・・・」

「では陛下、わたしは直ぐにフェルデン殿下の元へと向かいます」

ディートハルトは一礼すると、早足で国王の前から立ち去っていく。彼はディアーゼへいち早く馬を飛ばし、フェルデンの指揮する騎士団に一刻も早く合流しなければならなくなった。

「待ってください・・・！　わたしも一緒に行きます・・・！」

気付いたときには、朱音はディートハルトに向けて声を発していた。

ぎょっとした表情を浮かべたディートハルトであったが、顔面のケロイドの傷をくしゃりと歪めて彼は小さく頷いた。

「ヴィクトル陛下、確かにそれは良い案やもしませんぞ。ゴーディアの国王が一緒ならば、敵国の侵攻軍にうまく働きかけることができる」

正直なところ、ヴィクトル王はこの少年王を信用し兼ねていた。今は純粋で穏やかな王を演じてはいるが、いつ突如手の平をひっくり返し、本性を現すかしれない。

しかし、もし少年王が言うように、本当に彼が居ぬ間にゴーディアの国王に成り代わろうとする者が存在し、裏で糸を引いているならば、この少年王の存在は戦場となるディアーゼにおいて強力な手札となる。

これは一種の大きな賭けでもあった。

もしディアーゼで少年王が裏切りを犯したならば、その時はおそらくサンタシの最後となるだろう。

「わたしは魔族の王の言葉など信用できぬ」

朱音は懸命にサンタシの王ヴィクトルに訴えかけた。

「お願いです、命を賭けてもいいです。絶対にわたしは貴方を裏切ったりしません！　フェルデンを・・・彼を助けたいんです・・・

！」

ヴィクトル王は、怪訝に思った。どうしてこの少年王は、よく知りもしない敵国の王子などにこんなにも一生懸命になるのかと。

フェルデンが打ち明けた、アカネを殺された怒りでこの少年王の首を絞めたという実弟の過ちだけが、ヴィクトル王の脳裏に思い当たった。

しかし、それは少年王が怒りを抱くことは考えられても、フェルデンの安否を気にすることの理由にはならないようにも思えた。

「フェルデンは、ゴーディアでお前の首を絞めたそうだな。にも拘わらず、自分を殺そうとした相手をなぜに助けたいと思う？」

ぐっと言葉を飲み込み、朱音は悲しく微笑んだ。

「彼はそんなことはしていません」

アザエルの冷たい視線が向けられていたこともあったが、朱音は白を切った。

「以前、私は彼に助けられました。私はただ、恩返しがしたい・・・。それだけです」

“彼を愛しているから”なんていう言葉は、今のこんな姿になってしまった今は言える筈などなかった。しかし、朱音がディアーゼに向かう理由はそれ以外にはどうしても見当たらない。

「そうか。だが、やはりお前を信用することはできぬ」

ヴィクトル王は、自分が聞き及んでいる他に、フェルデンと少年王の間に何かがあったのかもしれないとふと感じ取った。

少年王は、それでもヴィクトル王の顔を揺れる瞳でじっと見つめて懇願していた。良く見ると、ぼろぼろになって血に染まった衣服に身を包んでいたせいで今まで気がつかなかったが、少年の唇はかさかさに乾き、身体はひどく痩せ細っているようだった。ひょっとすると、何日もろくに睡眠や食事を摂っていないのかもしれない。よくこんな身体でこの城まで辿り着けたものだ、とヴィクトル王は柄にもなくそんなことを思った。

「ヴィクトル陛下。そんなに心配なのでしたら、そこにいる魔王の

片腕をこの城に留めておいてはどうです？　彼が人質とあれば、ゴーディアの国王も寝返ることなどできまいでしょう」

感情を持たない碧い目を細め、アザエルはじっとディートハルトを見やった。

「さて。魔族の王よ、どうする？」

ヴィクトル王は、少年王を試すかのように問いかける。

ぐっと唇を噛み締めると、朱音はヴィクトル王というよりも、アザエル自身に返答するかのように、はっきりと言葉を綴った。

「わかりました。アザエルをここへ人質として置いていきます」

美しい碧髪の男は、それでも尚なんの表情も浮かべずに、じっと佇んでいる。

「アザエル・・・、いつか、“あなたがわたしに命令を下せば、チェスの駒を動かすようにいとも簡単にわたしは動くというのに”と言ったことがあったでしょう？　わたしが命令だと言ったら、あんたはわたしを助けてくれる？」

暫しの沈黙の後、アザエルは静かに口を開いた。

「ええ。わたしを動かすことができるのは、クロウ陛下、あなただけです」

朱音はゆっくりと立ち上がり、そろりそろりと美しい碧髪の男に近付き、彼を見上げた。

「じゃあ、命令するよ。アザエル、わたしが戻るまで、ヴィクトル陛下をお守りして。これは、ゴーディアの王としての命令だよ」

驚きのあまり、ディートハルトとヴィクトル王ははっと息を飲んだ。

それを聞いた途端、アザエルは朱音の前に跪（ひざまず）くと、美しい微笑を浮かべ答えた。

「陛下の御心のままに」

「もう、あまり時間が無い・・・」
ディートハルトの走らせる馬の上で、そう言った朱音の横顔は、ひどく儚いものだった。
「大丈夫、フェルデン殿下はそうヤワではない。このわたしが認めるに足る男です」
ディートハルトはこの少年王が、なぜか消えて無くなるのではないかと心配になった。
しかし、その直感は、きっと正しかった。
朱音自身、だんだん鮮明に思い出されるクロウの記憶とともに、“朱音”としての人格が少しずつ小さくなり、代わりに“クロウ”としての人格が身体を支配し始めていることに気付いていた。
（きっと、もうすぐ“朱音”は消えてしまう・・・。朱音として彼に会えるチャンスは、これで最後になるかもしれない・・・）
朱音は、朱音としての人格が消滅してしまう恐怖を感じ始めていた。きっと、今感じている、フェルデンを一人の少女として愛していたことも、人格が失われたときにはすっかり消えてしまうのだろう。
「もう・・・、わたしには時間が無い・・・」
小さく呟いたその声は、馬の蹄の音に掻き消され、ディートハルトの耳には届くことはなかった。

4話　遠い友人

夜明けの海は不気味な程静まり返っていた。
水平線から昇る朝日に、じっと美しい茶の瞳を細め、騎士はゆっくりと立ち
上がった。
「これって嵐の前の静けさというんでしょうか・・・。薄気味悪いですよね」
背後から部下の青年騎士が声を掛けた。
「ああ」
冷やりとまだ冷たい湿気を含んだ風が吹き抜け、いつの間にか耳に掛かるまでに伸びた金の髪が、甲(かぶと)の下から僅かにのぞき揺れる。
「いよいよか・・・」
小さく呟いた声とともに、敵国の侵攻を知らせる狼煙が高台から上がった。
水平線から少しずつ姿を現してくる、敵船の黒い影。一隻、二隻と見えてい
たそれは、近付くにつれて、数えるのも馬鹿らしくなる位に次々と姿を現し始
めた。
「来ましたね・・・」
小柄の騎士がじっと目を凝らして敵船を見つめる。
船には、魔族の象徴“黒翼”の描かれた帆が風で翻っている。魔王ルシファ
ーが天上から降臨した際、蒼黒の翼を悠然と広げていたという伝説から、ゴーディアの国旗として掲げられるようになったと聞く。
敵船が着々とサンタシの兵の待ち受ける港へと迫り来ていた。
フェルデンはディアーゼの港を取り囲むように設置した、石壁の

上から海を見下ろし声を張り上げた。
「なんとしても俺たちは、ここでゴーディアの兵の侵攻を阻止しなければならない！」
ぴりぴりとした緊張した空気が張り詰め、サンタシの騎士達は各々の左胸に、誓いの右拳をぐっと握った。
「よいか、まだ焦るな。よく引き付け、計画通り油袋を結びつけた投石で敵船をよく狙え！　弓隊は火弓を絶やすな！　とにかく船を狙い続けろ！」
そう言い放つと純白のマントを翻し、フェルデンは勢いよく石壁の急な勾配を滑り降りた。
「敵の歩兵、騎兵は我ら騎士団で落とす！！　続け！！」
繋いであった美しい栗毛の馬に優雅に跨ると、フェルデンはとんと馬の腿を踵で蹴って馬を駆け出させた。
雲の遙か上を、茶色い影が旋回しながら悠々と翔けている。サンタシの王家のみが使用を許される猛禽類バスカ。誉れ高く、本来は手懐けることの難しい野生の鳥であったが、長い年月の間、代々の国王が卵を孵化させ手ずから餌をやり、王家のものにだけ懐くように躾けたのだ。
バスカは夜明け前にフェルデンの元へ一通の文を届けていた。
“なんとか踏みとどめて欲しい。だが、決して無理はするな。こちらからディートハルトに最強の手持ちの札を持ってゆかせる。それまで無事でいて欲しい”と。

リーベル艦隊壊滅の報せと、ゴーディアの魔笛艦隊の予想を上回る速さでの
ディアーゼ港侵攻の事実を知り、ヴィクトル王が何かしらの有力な手札を送り出したらしかったが、いくらディートハルトといえ、早馬を使ったところで、三日の道のりをたったの一日で到着できる筈はなかった。

今は、何とか自力でゴーディアの侵攻に立ち向かうしかない。
後方に続く騎士の先陣に立ち、フェルデンは馬で駆けながら、剣を鞘から抜き去った。
「我が名は、サンタシ国ヴィクトル国王陛下の実弟、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ！　ここから先は一歩たりとも進めさせん！！」
雄たけびを上げながら、フェルデンは剣を持って続々と敵船から降り立つ兵に勢いよく飛び込んで行った。
海上では激しく敵船に炎が上がり、陸地に到着するまでに火だるまになった敵兵達が、もがきながら海の中へぼとぼとと人形のように飛び込んでいく。
敵船のあちこちから火の手が上がった。サンタシの投石兵と弓兵の攻撃が成功しているらしい。投石で可燃性の強い薬品の入った袋を結びつけ、敵船へ向けて投石を続ける。そして船に火弓を放つ。薬品に引火し、予想以上の早さで船が一気に燃え上がっていた。
それでも、そうした攻撃を摺り抜けた船が着々と陸地につけ、ゴーディアの兵がどっと押し寄せ始めている。ここでみすみす侵入を許す訳にはいかない。
夜明けとともに、激しい戦の火蓋が上がった。

「そんな悲しそうな顔をしないでください」
くすりと笑みを零すと、クリストフは格子越しに見える、僅かな青空を眩しそうに見上げた。
『ホロホロホロ・・・』
ちょんと格子の隙間から顔を覗かせた白い鳩は、もの悲しげな声を上げて鳴く。小さな白い友人は、大好きなクリストフの痛ましい姿に心を痛めていた。
「さあ、もうここに居てはいけません。君まで捕まってしまう。わ

たしは大丈夫、こう見えて案外しぶとい男なんですよ」
そう言ったクリストフの身体は全身血だらけだった。
もとは紳士的な清楚な身だしなみであった筈が、捕らえられてから日々繰り返される鞭による拷問で、衣服のあちこちがめちゃくちゃに裂け、剥き出した皮膚は血を滲ませて露出していた。ところどころ紫に変色している部分もあり、顔さえ殴る、蹴るの暴行を受けて腫れ上がっている。
もともと細身だった彼だったが、碌な食事も与えて貰っていないせいか、より一層痩せ細ったようである。細くなった手足にはずっしりと重そうな硬い鉄の錠前がかけられ、石壁にがしりと繋がれていた。
リストアーニャで別れて以来、姿を消してしまったクリストフを探して飛び回った白鳩は、明け方にようやくクリストフの捕らえられている、ゴーディアの牢に辿り着いたのであった。
一切の形跡がなかったクリストフの足取りを追うのは至難の業だったが、白鳩は僅かな風の流れを感じ取り、ここへとやって来たのだ。
今や、魔力を封じられてしまってはいたが、彼女は長い間、彼と共に空を飛んできた。だからよく知っていたのだ。魔力を発動していなくとも、彼の身体を包む優しい風がそこにあるということを。
一向にその場から飛び去ろうとしない白鳩に、クリストフは困り果てた。
「さあ、もうお行き。君は今のわたしとは違って自由だ。もう好きなところへ行っていいんだよ」
この魔城の牢に不似合いな程純白で美しい彼女に向けて、クリストフは優しく言った。
『クルック・・・』
小さく喉を鳴らすと、白鳩はちょこん窓の外に飛び降り、パサパサと音を立てて飛び立っていった。
「そう、君は自由な鳥だ・・・」

クリストフは連日の拷問による疲労でうつらうつらし始めた。
眠ると次は目が覚めないかもしれない、とふとそんな馬鹿な考えが脳裏を掠めたが、次の瞬間、またしっかりと覚醒した。
『クルック』
さっき去ったとばかり思っていた、小さな友の声がはっきりと窓の外から響いたのだ。いつあの成り代わり偽王“ヘロルド”がここへやって来るか知れないというのに。
「クイックル・・・！？」
今まで名をつけたことも、呼んだこともなかったというのに、咄嗟に朱音がつけた愛称を口に出してしまっていた。
『クルッククルック』
嬉しそうに二度喉を鳴らすと、白鳩はぽとりと格子の隙間から何かを落とした。

コロコロコロ

クリストフの足のすぐ傍に、リガルトナッツが一粒転がった。
驚いて彼女を見つめると、パサパサと羽を羽ばたかせ、クリストフにそれを食べろと懸命に伝えている。
「これを探して、わざわざ持ってきてくれたのですか？」
そう言ったと同時、再び格子からバサバサと飛び去る音がしたかと思うと、またしばらくすると戻って来てはぽとりとナッツを落とし・・・、という行為が幾度も幾度も繰り返された。
ひどく腕が重く、動かすことも億劫だったクリストフだったが、転がったリガルトナッツをそっと手にとると、静かにその一粒を口へと運んだ。
『カリ』
いつからまともに食べ物を口に入れていなかったのだろうかと、ふとクリストフは思った。身体のあちこちが痛み、もうその痛みさえ麻痺してしまっている。初めは強く感じていた空腹感だったが、

いつの間にか脳内でシャットダウンされたのかすっかり抜け落ちてしまっていた。

「まいったな、一口食べたら急に空腹感が・・・」

リガルトナッツはもともと彼の好物の一つであったが、これ程このナッツが美味いと感じたことは嘗て無かっただろう。

夢中で白鳩が運んできてくれたナッツを口へ放り込んでいくと、満足そうに白鳩はホロホロと喉を鳴らした。

「君には助けられてばかりですね・・・。わたしは君に何もしてやれていないというのに。君はただ自由な美しい空の旅人だった。それを、わたしの我儘でこんな道へと引き込む結果になってしまったんですね・・・」

ナッツは、十分とはいかないまでも、少しばかりクリストフの空き切った胃袋を満たしてくれた。

「君は、もう本来のあるべき姿に戻らなければならない時期にきているのかもしれません・・・」

クリストフはほんの少し淋しさを落とした赤く腫れ上がった目で白鳩のつぶらな瞳を見つめた。

「ルシフェルの血を飲んだとき、わたしは風の力を得ると同時に、不老の肉体を得ました。けれど、それからを一人きりで生きるにはあまりにも長い時間で・・・。自由を得る為に選んだ道とは言え、わたしは淋しさに堪えられそうもなかった」

クリストフはそっと目を閉じて、昔、ずっと遠い昔を回想していた。

「お前さん、またこんなとこに隠れてるのかい?」

彼はこの頃の“ぼく”を気にかけてくれる、唯一の人間だった。

「ああ、おじさん・・・。違うんです・・・。えっと・・・、その・

・・」

ふっと口元を緩め、彼は笑った。

「なに、わたしゃ誰にも話しゃしないよ」

今から約一千年前、この世界にはまだ、“サンタシ”や“ゴーディア”が栄えていなかった時代。即ち、“魔力”というものがものレイシアにはこのときにはまだ存在しなかった。

しかしながら、いずれサンタシの基盤となる“エアリエラ王国”が現在サンタシが存在する大陸に存在し、文明を築いていた。

そしてもう一方の大陸では、広大な大地に原住民の村が点在し、自然と調和しつつ暮らしていた。

“ぼく”は、その原住民の小さな村の一つで生まれた。村長の家の末息子だった“ぼく”だったが、気丈な兄達に比べ気が弱く、ひどく臆病者だった。

そんな“ぼく”は親兄弟からも蔑まれ、村の中でも除け者にされてばかりだった。

父が亡くなり、長男がその後を継いだ後、何をやらせても足を引っ張ってばかりの“ぼく”に、兄達の苛立ちは最高潮に達し、とうとう陰湿な虐めが始まった。この頃の“ぼく”は三十歳を過ぎ、とうに婚姻を結んで子を持ち一家を背負う一人前の男になっていてもおかしくない歳合だった。なのに“ぼく”は、こうして兄達の目から逃げては村の外れの林で時間を潰していた。こんな“ぼく”に家庭など持てる筈もなかったのだ。

「お前さんも、もういい歳だ。わたしゃお前さんは村を出て、もっと広い世界を見にいくべきだと思うがなぁ・・・」

ぽそりと彼が溢した言葉は、“ぼく”の心になぜか響いてきた。

「・・・でも・・・、村を出るなんて・・・、兄さん達にどう説明をしたらいいんでしょう・・・。きっとひどく叱られるに決まっています・・・」

“ぼく”の存在を疎ましく思っているだろう兄達だったが、この頃、村を出ることは村の教えに反することとして、強く罰せられる

ことになっていた。村を出たいと言ったところで、村の面汚しめと罵られるにすぎないだろう。

「さあてな・・・。そうさな、この林の奥に、昔っから神々が宿るという言い伝えのある泉がある。そこへ行けば、なにかよいお告げが貰えるかもしれんよ」

“ぼく”は彼の言葉を信じた。

彼はこう言ったのだ。

「泉には、時折天上から天神様が舞い降りて来られるそうだ。こんなところで時間を潰している位なら、泉の傍でお告げを待っている方がよっぽど時間の使い方が上手い」

そう言った彼は、半分は冗談のつもりだったのかもしれない。

しかし、そのことを信じて何日も泉へ通い続けた“ぼく”にとっては、それこそが神のお告げだった。

彼の言う通り、“ぼく”　の前に天神は現れた。

眩いばかりの光に包まれ、二対の黒翼を広げた天神の神々しい姿は、“ぼく”の目に焼きついた。

天神は問い掛けた。

「そなた、地上人か？」

呆けたままこくこくと頷くと、天神はふわりと泉の脇に舞い降りた。

「地上人には翼は生えておらぬのか？」

またこくこくと頷くと、天神はふむと暫く考えた後、一体何をしたのかはわからないが、一瞬にして二対の翼を消してしまった。

「我が名はルシフェル。そなたの名は？」

この世のものとは思えぬ美しい容貌の天神に目を奪われ、“ぼく”は瞬きすら忘れてなんとか返事をした。

「シ・・・シモン・・・」

「ではシモン、わたしはこの地のことをよく知らぬ。わたしの助けになってくれぬだろうか。もちろん、礼はする」

何を言い出すかと思いきや、この蒼黒の美しい天神は臆病な“ぼく”にこんなことを持ち掛けてきた。

「た、助け・・・？」

助けを求めていたのは”ぼく”の方だった筈だ。

”ぼく”は混乱した。

天神は、どうやらお告げをしに舞い降りたのでは無かったようだ。

「創造主に気付かれる前に、なんとしてもわたしは地上界というところをこの目で見て歩きたいのだ。それには案内役がいる。どうだ、やってくれぬか？」

美しすぎる容貌に似合わず、天神は悪戯好きな青年の口振りで、とんでもないことを口にしてきた。

「あ、あ、案内役・・・！？　で、でも、天神様・・・、天神様は天上から地上のことはなんでも見ておられるのでは・・・？」

顔を横に振ると、ルシフェルと名乗った天神は声を顰めて言った。

「それは違う。天上界から地上界を見ることはできないのだ。わたしは創造主から話を聞いて、なんと面白そうなところかと、いつも一度この目で見たいと願ってきた」

“ぼく”はたまげて尻餅をついた。天神が地上を見てみたいだなんて、考えもしていなかった。

「シモン、手伝ってくれぬか？　そうすれば、そなたの願いも一つ叶えてやるぞ」

悪戯っぽく笑った天神ルシフェルに、ぼくは思わず口を開けたまま頷いてしまっていた。

「そうか！　ではシモン、願いを言ってみよ！」

「ぼくは・・・、ぼくは自由が欲しい・・・」

クリストフは静かに目を開いた。

僅かに差し込む日の光が眩しい。

遠い昔、あまりに臆病な“シモン”が、泉で出会ってしまった遠い友人。

あまりに美しく、穢れのないその男との出会いは、クリストフのその後の人生に多大な影響を及ぼす結果となった。

自由を得、広い世界を自由に行き来する為に選んだ道は、長く厳しい孤独への一歩でもあったのだ。

空から舞い降りたルシフェルは、“シモン”に、自らの血を与えた。それを口にしたとき、“シモン”は不老の肉体と、そして強い魔力を得たのだ。鳥のように自由に空を舞うことのできる、風の力を・・・。

「わたしは大きな間違いをしたのかもしれませんね。君に彼の血を与えるべきじゃなかった・・・」

そして、空で出会った自由な旅人であるこの白鳩に、ルシフェルの血を含ませた餌を与えてしまったことに、クリストフは後悔の念を抱いた。

白鳩はそれを否定するかのように、パサパサと羽を鳴らす。

魔王の血を口にしたことで、彼女もまた、不老の肉体とともに“人語”を理解し書くことのできる力を得ていた。さすがに話すことまではできはしなかったが・・・。

「さあ、行ってください。大丈夫、わたしはまだここでは死ねません。あの子との約束をまだ果たせていないのですから」

リストアーニャ以来、逸れてしまった朱音を思い、クリストフはもう一度弱り切った手に力を込めた。

しかし、手枷はびくとも動かない。

不老とは言え、不死身ではない。あと幾日もこうして繋がれていては本当に命尽きてしまうだろう。あの卑俗な男、ヘロルドはもともと刑にかける気などさらさらなかったのかもしれない。寧ろ、こうして苦しみながら餓死していく様を面白がっているのだろう。

心配そうに覗き込む白鳩に小さく片目を閉じると、クリストフはくすりと笑みを溢した。

「そろそろいい頃でしょうかね。わたしの力の見せどころはここからです。わたしは案外しぶとい男なんですよ？　ね、クイックル」

5話　決戦のとき

「フェルデン殿下・・・！　敵の勢力が強すぎます・・・！」
ゴーディアの歩兵は主に魔力の弱い兵士ばかりで編成され、サンタシの騎士団でも十分に対抗できる兵力であった。
しかし、騎兵の方はある程度の魔力を持ち合わせたエリートで、サンタシの選りすぐりの騎士達もかなり苦戦していた。
『バラバラバラ』
後方で、港を取り囲んでいた石壁の一部が崩壊していく。
崩れ始めた石壁の上から、人形のようにサンタシの兵がともに落下していく。
「ユリウス！　あの男を止めろ！」
美しい栗毛の馬に跨るゴーディアの騎士は、一際強力な魔術を駆使し、植物の蔦をまるで生き物のように操り、石壁をばらばらに砕いていく。
湧くように向かってくるゴーディアの歩兵を薙ぎ払う手を止めないまま、フェルデンが部下に下命した。
ユリウスは小柄を最大限活かし、愛馬の手綱を思い切り引き上げる。馬は身体を捩り前足を高く掲げると、群がる歩兵達を蹴散らしながら方向を転換した。
全速力で向かってくる小柄の騎士に気付き、ゴーディアの騎士は咄嗟にユリウスの剣を避ける為に馬の手綱を取る。
ゴーディアの騎士の甲（かぶと）には、はっきりと黒翼の紋章が焼き付けられてある。階級が高ければ高い程、紋章の色が黒く克明になっていくのだ。それは、この男が相当の高い階級の騎士であるということを物語っていた。
「おれはサンタシ騎士団第一隊隊長ユリウス・ゲイラー、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ殿下の部下だ。これ以上サンタシの領

土に踏み入らせる訳にはいかない！　おれがここでお前を倒す！　名を名乗れ！」

モスグリーンの鋭い視線に、ゴーディアの騎士は馬の向きを正面に向き直らせた。

「ああ・・・。君があの珍しい庶民出の騎士か・・・」

遠目から見た鎧姿で分からなかったが、男はすらりとした身長の割にひどく華奢な身体つきをしていた。ユリウスの参入で、すっかり石壁を砕く攻撃は中断されてしまっている。

二人の背後では、まだパラパラと崩れた石壁が砂煙を巻き上げて僅かに崩れていた。石壁の上には投石兵と弓兵が待機していたが、これ以上の長居には限界がきているようだ。あとは下へ降りて、射程内の敵に向けて発射するしかない。

しかし、未だうようよと海岸に敵船が到着を果たしてきている。

“庶民出”という言葉に、ユリウスはむっとして男を睨み返した。

「ぼくはゴーディア国、黒の騎士団副司令官、メフィス・ギュンツブルク」

十七であるユリウスよりはずっと年上であろう彼であったが、その口調は年齢の判別を難しくさせた。

「そうか、メフィス・ギュンツブルク！　悪いがおれたちがここでお前達を止めさせてもらう！」

威勢よく断言した小柄の騎士に、メフィスは戦場には似合わない程の陽気な笑みを浮かべた。

「なるほど、噂通り威勢がいいみたいだね。でも、ぼくは国王の意思に従っているだけだよ。今の指令官には嫌気が差してはいるけどね」

意味深な言葉を残して、メフィスはユリウスに向けて右の手を翳した。

彼の腰には、立派な鞘の剣がささされている。しかし、その剣の刃はまだこの戦場で抜かれた形跡は全く無い。

「ユリウス・ゲイラー、ぼくにまさか剣一本で挑もうってわけじゃ

ないよね？　その石は飾りなんかじゃないだろ、それを使いなよ」
剣を構えるユリウスに、メフィスは勲章として贈られる胸の飾りを指さした。
赤黒く光るその石は、メフィスの言うようにただの石などではなかった。この石は、騎士団で功績を挙げた有能な騎士のみに贈られる勲章で、それは選ばれた騎士しか身につけることを許されていない貴重なものだった。
「この石はただの勲章だ。使う気などさらさらない！」
きっと睨み返してくる小柄の騎士に、メフィスはぷっと吹き出して笑った。
「その石がただの勲章だって？　それはぼくたち魔族への侮辱として受け取っていいのかな？　だって、それはぼくたち魔族の血から作った石だろう？」
メフィスの浮かべる陽気な笑みは、その裏に渦巻く殺気を隠す為のカムフラージュにすぎなかったのだ。浮かべた笑みの下から覗く、サンタシに対する強い敵対心はユリウスをぞっとさせた。
「おれとフェルデン殿下はサンタシの騎士の誇りをかけて、自分の剣の腕のみで闘う。決して、魔族から奪った力などに頼ったりはしない！」
そう言いきるユリウスに、メフィスは、「ふうん」と返した。
「君がそこまで言うんだ、もう無理には勧めないことにするよ。だけど、ぼくは魔術を使わないからって手加減なんかしないよ」
翳した手の指を僅かに動かすと、石壁を壊していた植物の蔦が、めきめきと音を立てて地中を潜り、ユリウス目掛けて動き始めた。
「！！」
ボコリと盛り上がった地面の中から飛び出した蔦は、うねりながら鋭い爪のようにユリウスに襲い掛かってきた。
ヒヒンと驚いき後退する馬の手綱を取り、ユリウスは持っていた剣でその蔦に切りつける。
しかし、表面の硬い蔦をなんとかその剣で受け止めはしたものの、

蔦自体はなかなか切断するまでに至らない。うねうねと蛇のように迫りくるそれは、怯むことを知らない。

「知っているかな。人間の血は植物にとって最高の栄養になるって話」

他人事のように話すメフィスに、ユリウスはどうやってこの場を切り抜けようか懸命に頭を働かせていた。

「そういえば、そっちの指令官、アザエルの後に誰が後釜に納まった？」

本当ならばこうして話している余裕すらないにも関わらず、ユリウスは一か八かの賭けに出た。

「あの氷のような男、サンタシの船で護送中に行方不明なんだが、あんた、奴の行方を知らないか？　まさか海で死んだ・・・なんてことは無いだろうがな」

メフィスが僅かに苛立ったのがユリウスには感じ取れた。これはひょっとすると当たりかもしれない。

「しかし、アザエルもああ見えてあんまり大したことないのかもな」

そう言った瞬間、メフィスがすっと刀剣を鞘から抜き出していた。

「君、ぼくを怒らせたいの？」

急に露になった殺気に怯むことなく、ユリウスは言葉を続けてた。

「新しい司令官はアザエルよりも利口なんだろうか」

「アザエル閣下をあんな下品な男と比べるな・・・！　ぼくはあんな下衆な男の部下になるつもりはない！　ぼくが部下として働くのは、アザエル閣下の下だけだ！」

刀身を構え、今尚襲い掛かる植物の蔦の攻撃を避け続けるユリウスに言い放った。

「ぼくはあの下品な男の命に従っている訳じゃない。閣下が、“クロウ国王陛下の命に決して背くな”とぼくに仰ったからだ！　閣下が信じ愛した国王に、ぼくも全面的に従うのみ」

すっかり平静さを失ったメフィスの攻撃には、僅かに隙が生まれていた。

ユリウスは、空いた手で剣の鞘を取り蔦の攻撃を受け止めながら、その一瞬の隙を狙って剣で一撃を放った。
しかし、その攻撃は寸でのところで避けられてしまった。
メフィスの頬をつうと一筋の血が伝うと、メフィスは小柄の騎士をじっと見据えた。
「アザエルはともかく、あの我儘で傲慢な少年王に従うと・・・？あんた、本当にそれでいいのかよ」
ユリウスは剣を強く握り直すと、メフィスの赤茶の瞳を軽蔑に満ちた目で見つめ返した。
「何を勘違いしてるかは知らないけど、ぼくはゴーディアの使い捨ての駒の一つにすぎないんだよ。ぼくに国王の命に背く余地なんてあると思う？」
二人の騎士は互いの腹を探り合っていた。
一人はサンタシ騎士団第一隊の若き長、そして、もう一人はゴーディアの黒の騎士団副司令という肩書きの二人は、立場は違えど実力的には互角とも言えた。
「それでも、おれはあの幼い国王の仕出かしたは、とてもじゃないけど納得できそうにないけどな」
「君も人の上に立つ立場なら分かるだろう、納得するしないの問題じゃない。ただ、ぼくたちは国王や上官の命に従う。それしか道はない」
メフィスの言っていることは正しかった。
「説得を試みるのは無理みたいだな。やっぱりおれとあんたは、ここでどちらかがくたばるまで殺り合うよう定められてるみたいだ」
いつの間にかメフィスの、植物を操る手は止められていた。
「仕方無い。ここは君のレベルに合わせてあげるよ。ほんとは、ぼくは“剣”なんて低属な武器はあんまり好きじゃないんだけど、一応これでも一端の騎士なんでね」
“剣”が嫌いな騎士などあってたまるか、と反発心を抱いたユリウスだったが、この男が再び剣を持ち直した途端、その腕が相当の

ものであることを肌で感じ取った。
「つまり、魔力を使わず、騎士らしく正々堂々と一騎打ちか」
すっかり朝が明け、いつの間にか日はもう高く昇りかかっている。
未だ周囲の喧騒は止まず、剣が交じり合う音や炎の上がる音、傷を負った兵の呻き声がそこら中で鳴り響いている。
メフィスによって半分は破壊されてしまった石壁の隙間から、攻撃を免れたゴーディア兵が掻い潜っている。これ以上の足止めをするには、大将の首をとることの他に道は残されていない。
「まあね。君も噂通り、なかなか剣の筋は良さそうだし？　その若さでサンタシ騎士団の二番手だって？」
メフィスは馬の手綱を引き寄せると、剣をかちゃりと構えた。それはいつでもかかってこいという合図であった。
（こいつを倒せば、あとはフェルデン殿下が大将の首をとってくれる筈・・・！　ここは絶対に負けられない・・・！）
ユリウスは小さく息を吸い込むと、ぴしりと馬の手綱を打った。
勢いをつけて滑走を始める愛馬に、小柄な身体をぐっと前方に倒し、ぐっと剣を突き出すような形で構えた。もっともユリウスが得意とする“オクス（突き）”を応用した剣技である。この技は、高速で駆ける馬を片手で操り、そしてそのスピードと勢いを力に変換する、高い技術を要するものだった。
メフィスはユリウスの攻撃を避けようとはせず、真っ向からその勝負を受けて立った。
二頭の馬が擦れ違う瞬間、凄まじい剣音が木霊し、一瞬の静寂が訪れた。
周囲の全ての音が消え去った。

『カシャン』

剣が地面に音を立てて落下していった。
ユリウスの左腕を生暖かい感触がたらりと伝っていく。
「なるほどね・・・。二番手の君じゃなくて、一度君の上官と手合

わせしてみたかったよ」

ユリウスは痛みを感じることはなかった。ただ、痺れたように腕が麻痺し、馬の名綱を握っていることはできない。霞む目で、ぱたりと静かに馬の背に身体を預けるようにして気を失ってしまった。

「ユリウス！！」

二人の一騎打ちを目にしたフェルデンが、他の兵を押し退けるようにして駆けつけたが、小柄の騎士は愛馬の背で既に意識を手放していた。

『ドサ・・・』

すぐ脇で、何かが地面に落下して崩れ落ちた。

地面に仰向けに横たわるそれは、赤茶色の眼を僅かに開いた、騎士としては華奢な身躯の青年であった。頭上には落ちた拍子に脱げた甲が転がり、それには濃い黒翼の紋章が刻まれている。

息はまだある様子だが、その口の端からつうと一筋の血が流れ落ちている。腹部を見ると、鎧を突き破って切り付けた剣痕が認められ、その隙間から赤い血液が流れ出していた。

（ユリウスのオクスを受けたのか・・・。しかし、あの攻撃を真っ向から受けて即死しないとは・・・）

ユリウスの突きは、師である強靭なディートハルトの力強い攻撃に、唯一力で対抗できる技であった。あの突きがまともに入れば、どんな頑丈な鎧をも簡単に打ち砕き、人の肉や骨などいとも簡単に突き破ってしまう。

その突きを、この華奢なゴーディアの騎士が受け止めたことに、フェルデンは驚かざるをえなかった。

男の手に握られた剣は根元から砕け折れ、今やもとの剣の姿など見る影もない。おそらくは、あの一瞬の間に、この剣で堪えうる最大限の攻撃を受け、更にユリウスに反撃を食らわしたのだろう。

フェルデンは、馬から飛び降り、ぐったりと動かない小柄の騎士の身体を自らの馬の背に移した。ぐっしょりと血にぬれた腕は、ユリウス自身もかなりの重症であるということを物語っていた。

相打ちだった。二人の力はほぼ互角、この地に寝そべっている青年は、フェルデンが聞き及んでいた限りでは、黒の騎士団の副司令官では、と予想できた。

とうとうゴーディアの兵が石壁を突破し、前進し始めたらしい。

「フェルデン殿下・・・！　もう、持ちません・・・！」

血相を変えて、第三隊隊長であるアレクシがフェルデンの傍に馬を寄せた。

「殿下、すでに騎士団のうち第五隊と第六隊が全滅、第四隊も半数がやられています。歩兵の被害は半数以上にのぼり、弓兵、投石兵のほとんどが馴れない剣での接近戦での闘いを余儀なくされております」

そして、もっとも有能な騎士集団第一隊の隊長であるユリウスさえも、今や大傷を負ってこの様である。

「落ち着け、まだいける。忘れたか、石壁の向こうには最終手段として我国最高の術師ロランが敵の侵入を阻む結界を張っている。いいか、今ならまだ奴らの兵を押し止めておける。第三隊はお前を含め騎士団の中でももっとも個性的な騎士達ばかりだ。残っている騎士を全て集め、全力で敵国の歩兵、騎士どもを足止めしろ。おれは・・・」

馬上から地面に転がる黒騎士の副司令官を見下ろした。

「おれは、敵軍の大将を見つけ出し倒す・・・！」

息も切れ切れにメフィスが嘲った。

「忠告しておくけれど・・・、彼は・・・ぼくのように武器は不得手ではないよ・・・。彼・・・は、槍の名手だからね・・・。きっと・・・、魔・・・光石・・・を使わないと、彼には勝てないよ・・・。」

「こいつ・・・！　殿下の剣の腕を知りもしない癖に！」

アレクシが止めを刺そうと、自らの剣を彼の喉元に突き刺そうとする。

「待て」
フェルデンの手によりその手を静止させられたアレクシは、“どうして？”という面持ちで上官を振り返った。
いつの間にかアレクシの足首に植物の蔓が絡まっていた。彼が剣を振り下ろしていたなら、きっと、この絡まっていた蔓は、アレクシの命を奪おうとしただろう。
「この男はもういい。きっともうここでは碌に闘えやしない」
愛馬の逞しい腿を緩やかに撫で上げながら、
「ユリウスを医療部隊の陣営地へ」
と囁くと、フェルデンは馬の背をぽんと軽く叩いた。その合図を受けて、馬は慎重にゆっくりと歩き出した。背に乗せたユリウスが決して地面に落ちないようにと細心の注意を払いながら。
「おい、そいつは今どこにいる？」
返答が無いことを不審に思い、フェルデンはゴーディアの黒騎士を見下ろした。いつの間にかその瞳は閉じられ、気を失ってしまっているようだったが、まだ死んだという訳では無さそうだ。
石壁の奥へと足を進めてくるゴーディアの軍であったが、石壁を越えたところで一時停滞している。歩兵達が苛立っているのがここからでもわかる。
薄い膜のような結界の壁が立ち塞がり、味方であっても誰一人そこを通すことを拒んでいた。多少の魔力を兼ね備えているゴーディアの歩兵達が、持ち得る魔術で張られた結界を破ろうと試みてはいるが、彼らの魔力程度ではどうにもならなかった。
黒騎士達は、未だサンタシの残る騎士達の妨害により、結界の少し手前で足止めを喰らっている。
その後ろから、やたらとごてごてしい装飾の馬に跨った騎士がゆったりとした足取りで歩んでいくのが見える。その甲には、派手な真っ赤に染められた動物の毛が艶々しくなびき、鎧の下のから覗く藍の衣服には、端々に赤い糸で細かく刺？が施されている。片腕には確かに長く大きな黒い槍が握られていた。

明らかに他の騎士よりも目立つ身なりの騎士は、この慌しい戦場にも関わらず、何の焦りも感じていないようでああある。

「あいつか・・・！」

フェルデンはそう直感で感じると、すぐさま馬の手綱をとり愛馬を走らせる。

しかしまだそこへ追いつくには少し距離があった。

男が石壁が崩れ落ちた瓦礫を通りすぎ、張り巡らされた結界の前に立ち塞がった。歩兵や騎士達が結界から僅かに離れたかと思った瞬間、男は持っていた槍をまるで紙の棒でも振るように軽々と一振りすると、あれだけびくともしなかった結界にその斬撃で切れ目が走った。

「！！」

何事も無かったかのように、その切れ目から馬で歩を進めようとする男の背後から、フェルデンは叫んだ。

「待て！　そこは通す訳にはいかない！　見たところ、貴殿はゴーディア軍の大将とお見受けする！」

振り返った男の目と見て、フェルデンは驚き言葉を失った。

彼は盲目だった。紫紺の美しい瞳は、開いてはいるものの、既に光を失い周囲の何も映し出してはいなかったのだ。

しかし、彼の甲にははっきりと黒翼が焼き付けられている。

「如何にも・・・。だが悪いが、おれはこの通り目が見えん。そちらは何者だ」

ひどく落ち着いた盲目の騎士の声に、フェルデン自身も落ち着いた口調で返答した。

「おれはサンタシ騎士団指令官、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ。ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユ陛下の実弟だ」

あれ程騒がしかったというのに、なぜかこの周囲だけはいつになくしんとしている。

「おれはゴーディア国、黒の騎士団指令官補佐役、ライシェル・ギーだ。確かにおれはこの戦場において“大将”とも言えるが・・・。

もう一人同格の仲間がいた筈なのだが・・・」
見えていない紫紺の瞳を真っ直ぐ見つめ、フェルデンははっきりと事実を告げた。
「植物を操る騎士なら、おれの部下が相打って落としたが」
ふむ、と下顎をさすると、ライシェルは「そうか」とだけ返答した。
「そこを通りたければ、おれを倒してからだ。ライシェル・ギー」
「いいだろう・・・。だが、おれは“中途半端”は嫌いでな。勝負はどちらか一方が絶命するまでということでどうだ?」
フェルデンはすっと剣を鞘から引き抜いた。
「ああ、それで構わない・・・!」
ライシェル・ギーは大きな槍を構えた。彼の魔力は未だ謎のままだ。

今、二人の大将が、二国の運命を背負って命を掛けた決闘に挑もうとしていた。

6話　強き想い

ディートハルトは急いていた。剣士として長年の勘が、不吉を告げていた。

すでに白亜城を出立してから一日半が経過していた。太陽は真上をとうに通り過ぎ、夕刻に近付いてきている。ディートハルトは、決して馬の足を止めることなく、知り尽くしたサンタシの、最短の距離である道なき道を走り続けた。

少しでも気を抜けば、崖下に真っ逆さまという場所や、川の中を馬で突っ切ることもあった。飲み食いの一切をも絶ち、彼はひたすら目的地ディアーゼに向けて馬を走らせてきた。

とは言え、腕の中の少年の様子が気にならなかった訳ではない。城を発つときから、あまりいいとは言えない顔色の少年王だったが、慣れない馬で長時間揺すられていることもあって、その横顔が死人のように真っ白なのには少々驚いた。ふと、この少年は死んでいるのでは・・・？　と不安に思うこともあったが、彼は定期的に黄色い胃液を吐き出すので、それがどうやら生きてはいるようだという確認になっていた。

長旅でぼろぼろになった上に加えて、城での惨劇により血だらけになった衣服は、出立前に白亜城で調達した旅装束に取り替えられてはいたが、彼の顔や頭は未だ砂埃で塗れていた。さすがに風呂に入る時間まではなかったのだ。

だが、なるほどまだ王としては幼い少年王の姿ではあったが、ディートハルトが嘗て目にした“魔王ルシファー”とあまりによく似ていた。

ふとその美しさに見入りそうになるが、気を抜けば彼が目を開いたままふと意識を遠ざけ、落馬しかけるので、ディートハルトは彼の細っこい腕をいつでも掴めるように準備しておかねばならなかっ

た。
「クロウ陛下、貴方はもしかするとしばらく何も口にしておられんのでは・・・？　どこかで休みをとりましょうかな？」
　そんな余裕はどこにもないが、あまりの具合の悪さに思わずディートハルトは少年王に訊ねたこともある。しかし、死人のような顔で彼はこう答えた。
「いえ。今はディアーゼに向かうことの方が大事です。ディートハルトさん、お願いです。なんとか間に合わせて下さい」
　ディートハルトは馬の足を止めることなく、ひたすらに駆け続けた。

「あれは・・・」
　朱音は呟いた。
　ディートハルトもはっとして幾筋もの煙の立ち昇る遠くの空を見つめた。もう随分ディアーゼの近くまで来ていた。潮の含んだ海風が風を切って走る二人の頬を撫で始めていた。恐らくは、あの空の下では激戦が繰り広げられていることだろう。
「いかん・・・。間に合うか・・・」
　渋面でディートハルトは馬の手綱を勢いよく打った。じっと朱音は屈強な老剣士の服にしがみ付き、じっとその下で手を握って祈った。
（どうか・・・、彼が無事でありますように・・・！）
と。

　朱音は一面に壁のように張り巡らされた半透明の結界ごしに呆然と見つめた。痩せっぽっちのこの身体の、一体どこにそんな力が残っていたのかと疑いたくなる程、朱音は転げるようにディートハルトの馬の背から飛び降りると、一目散に薄い膜の前に駆けつけたのだ。
　馬は、この結界を怖がって、ある一定の距離を越えて近寄ろうとはしない。ディートハルトは仕方なく馬を置いて朱音の後を徒歩で

追った。
　たった一枚の薄い結界の反対側では、多くのゴーディアの歩兵達が詰め寄り、取り囲んでいる。その少しばかり後ろで、なぜかぽっかりと何もない空間ができていて、その空間に、相対して立ち竦む、二頭の馬と二人の騎士。
　一人は槍を握り、もう片方は剣を構えたまま静止していた。
「大変・・・！　フェルデン・・・！」
　はっとして朱音が結界の表面に触れると、バチリと結界の表面が弾け、結界の通過を阻んだ。火傷のような痛みを僅かに触れた部分に感じ、朱音は唇を噛み締めてじっとその向こう側を見つめた。
「長時間の睨み合いが続いているようですな」
　いつの間に追いついたのか、朱音の頭上からディートハルトの低い声が降りてきた。
「ライシェル・ギーか・・・」
「あの騎士を知っているんですか!?」
　ディートハルトを仰ぐように振り返ると、朱音はその逞しい腕をぎゅっと掴んだ。
　少し目を丸くしたが、ディートハルトはその手を振りほどいたりはせず、小さく頷いて、こう付け加えた。
「わたしが今よりずっと若かったころ、あの男と一度闘ったことがあります。
そのときに負った傷がこれですな」
　ケロイドになった大きな顔の傷。今となってはただの傷跡にすぎないかもしれないが、この傷を負った当初、余程酷い傷だったに違いない。
「じゃあ、“三剣士”だっけ・・・？　と呼ばれるすごいディートハルトさんにそんな傷を負わせる位、あの騎士は強いの・・・？」
心配そうに見つめ返してくる朱音の大きく美しい黒曜石の瞳に、思わずディートハルトは釘付けられてしまいそうになりながらも、その正当な疑問に答えてやった。

「確かにあの男は、今までフェルンデン殿下が闘ってきた中でも格段に強い。ましてや、同じ剣ではなく槍の使い手だ。やり難いことこの上ない・・・。しかしながら、その頃のわたしはまだ見習い剣士でもありました故。」

朱音は嘗て目にしたことのない、フェルデンの胸甲(きょうこう)姿の隙のない騎士姿に、もう一度視線を戻した。しかし、その手は未だディートハルトの逞しい腕を握り締めている。

「ゴーディア一の剣士がアザエルとするならば、あの男はゴーディア一の槍使い・・・ではないでしょうかな?」

はて、とディートハルトは不思議に思う。ゴーディアの国王の座に居るこの少年王が、なぜに自らの強駒である騎士達の存在を把握していないのか、と。

しかし、とある儀式にてこの小さな国王はまだ覚醒して間もないと聞く。それも仕方が無いことなのかもしれないと、屈強な剣士は自らを納得させた。

朱音もなんとなくは分かっていた。空手の師範をしている父がよく言っていた。“強い者程無駄な動きはしないもの”と。相手が強ければ強い程、相手の間合いに踏み入るタイミングをよく見定めなければならないのだ、と。

下手に相手の間合いに飛び込むと、逆に相手から痛恨の一撃を食らう羽目になる。だからこそ、相手の呼吸を読み、空気を読まなければならないのだ。それには、相当の集中力と体力、そして精神力が要る。どれか一つ一瞬でも欠落させたとき、それは敗北を意味する。

実際、二人の運動量は対峙している今、ゼロに近い。しかし、二人の額からは幾筋もの汗が滴り落ちていた。

(あの集中力、殿下は少し見ない間に相当腕を上げたようだ・・・)

ディートハルトはじっと目を細め、嘗ての弟子を見つめた。あんなに小さく幼かった王子は、いつの間にか師の手を離れ、有能な騎士へと成長を果たしていた。二年前、彼に騎士団の指令官の地位を

譲ったことは、間違いでは無かったようだ。
「どうしよう、あの二人を止めなきゃ・・・！」
朱音には分かっていた。二人が動いたとき、そのときはきっとただでは済まないということを。
「ディートハルトさん、わたしが出ていって二人を止めます！　この壁、なんとかなりませんか？」
ディートハルトは驚いていた。この小さな少年王は、本能で二人の騎士が命を賭けた勝負であるということに気付いていたのだ。
（この少年王、われわれサンタシを出し抜こうとしているとはまるで思えぬ・・・。やはり、城で言っていた通り、玉座を乗っ取られたというのは誠か・・・？）
朱音はきょろきょろと周囲を見回した。目の前を遮るこの半透明の巨大な壁、これは朱音のよく知るあの人物が作り出したものに違いなかった。
「ロラン！　いるんでしょ!?　この壁を消して！」
突如大声で叫び始めた朱音にぎょっとして、ディートハルトは細っこいその肩に手を置いた。
「クロウ陛下、なぜ彼の名を・・・？」
「わたしは彼の友達なんです。彼にこの壁をなんとかさせないと」
そう言うと、再び朱音は大声を張り巡らし始めた。
「ロラン！　聞こえているんなら返事して！」
覚醒して間もないこの少年王が、なぜサンタシの国王直属の魔術師の名を知り、出会う筈もないのに友人だと口にしたのか、もはやディートハルトには理解出来かねた。
この少年王は狂っているのか、それとも何かの策略なのか。しかし、この必死さを見るに、到底裏切りを狙っているものとは思えない。
「煩い、聞こえている」
意外にも、それ程離れていない岩陰から小生意気な少年術師の声が発された。

朱音ははっとして声のした辺りを振り返った。
そこには、灰色のローブに身を包み、鏡の洞窟でしていたときと同じように静かに座り、巨大な結界の壁に向かって手を掲げている懐かしい少年の姿があった。
「ロラン・・・！」
アザエルによって血だらけになって洞窟内で倒れていた姿からは想像もできない程、彼はぴんぴんしているようであった。そのことにほっとしながらも、朱音は涙ぐみながら少年の元へと駆け寄った。
「僕に話し掛けるな、集中力が途切れるだろうが。それでなくとも、あの槍使いに簡単に破られた箇所の修復に精神を集中させなくちゃならないってのに」
ふんっと鼻を鳴らし、魔術師の少年ロランは口元を歪ませて鬱陶しそうにあしらった。
「お願い、ロラン。早く二人を止めないと取り返しがつかないことになっちゃう」
がくがくと肩を揺す振られ、ロランは集中の為に閉じていた瞳をやっと開いた。
「ああっ、邪魔するな！　僕はお前のような見知らぬ奴に名前を呼ばれる筋合いなどない！」
ルイとは色違いの霞がかった茶の瞳が朱音の姿を映し出した。
驚き、大きく見開かれる目。
「お、お前は・・・」
動揺で僅かに揺れた結界の壁だったが、即座にそれは持ち直された。
「どうやってサンタシの国土に侵入した!?」
彼の目に映ったのは当然ながら朱音ではなく、魔王ルシファーを生き写したかのような少年王の姿であったのだ。ロランはゴーディアへ渡っていた昔、魔王ルシファーの姿を見知っていた。
「わたしはこの闘いを止めに来たの。お願い、わたしを壁の向こうに行かせて！」

「駄目だ」
朱音の願いはぴしゃりと跳ね除けられた。
「一体何を企んでいるのか知らないが、僕はヴィクトル陛下の命を受けて動いている。結界を解除する訳にはいかない！　解いて欲しいなら僕を殺すんだな」
朱音はロランの肩からぱっと手を話すと、ゆっくりと一歩後退りした。
「そんなこと、できる訳ないじゃない・・・」
ぽそりと零れた言葉は、ピロロロと空を旋回しながら飛び回る、バスカの鳴き声に重なり消えた。
朱音の今の姿では、ロランの信用を勝ち取ることなどきっとできないだろう。そして、彼を説得するにはあまりに猶予がなさすぎる。
朱音は矢庭に自らの手を迷いもなく結界に差し込んだ。ロランは我が目を疑い、結界の壁に差し込まれた少年王の手をまじまじと見た。
結界は侵入してきた異物を吐き出そうと、バチバチと青い電気を巻き起こし、激しく朱音の身体を包み込もうとする。
「！！！！」
ライシェルの槍ように、一時的に結界を破ることは可能であっても、結界内を通り抜ける所業があるなどとはさすがのロランも聞いたことがなかった。普通の者ならば全くもって不可能なことである。
とは言え、全身を雷に打たれたかのような痛みに、朱音は苦痛で顔を歪めていた。
「馬鹿かお前！　やめろ！　いくら魔王の息子とは言え、死ぬぞ！？」
ロランの止めるのも聞かず、朱音は自らの身体を反発する結界内に割り込ませていく。
「うあああああああ・・・！」
強烈な痛みに悲痛な声を上げながらも、朱音は“フェルデンを守りたい”という一心で前進していた。とっくに気を失っていてもお

かしくはないと言うのに、信じられないことに、その細っこい身体は、少しずつ少しずつ、結界の向こう側へと通り抜けていっている。

後方で様子を見ていたディートハルトは、目を疑うような光景に絶句していた。何があの少年王の心をああまで突き動かしているのかまでは分からなかったが、あのぼろぼろになった状態でここまでできる程に、何か強い想いが根底にあることだけは確かだった。

「あああああああああ！！！」

結界の反対側でも、異変に気付いたゴーディアの歩兵達が、結界を通り抜けようとする朱音にいつの間にか目を向けていた。

「もうやめろ！　そんなことしたって、ぼくは結界を解かないからな！　ほんとに死ぬぞ！」

ロランもひどく動揺し、声を荒げている。しかし、その手は結界を決して解こうとはしなかった。結界を解いた途端、敵方が国土に雪崩れ込んでくることは安易に予想できたからである。そういう点では、このディアーゼにおいて、ロランの結界が最後の砦であることは明白だったのだ。

「あああああああ！！！！！！」

ふと空気の流れが変わったことを朱音は感じた。

周囲がざわめいている声が聞こえる。いつの間にか凄まじい痛みはおさまり、近く遠く、波間の小波の音が響く。

「な、何者なんだ、この餓鬼・・・」

「おれたちがどうやったってびくともしなかった結界を通り抜けやがった・・・」

朱音はゆっくりと振り返った。

今も尚そこに存在し続ける結界の壁の向こうで、呆けたようにこっちを見つめるロランの姿と無言のままじっと様子を見守るディートハルトの姿をとらえることができた。

はっとして朱音は二人の騎士が対峙している方角を見た。まだ二人は睨み合ったままじっと動かない。

しかし、二人はここに居てここには居ないようであった。

二人の精神は既に別次元にあり、周囲の情報全てから断絶されていた。ここから叫んだところで、二人の耳にはきっと届くことはないだろう。

「おい、餓鬼！　おまえ一体何者だ・・・？　敵か？　味方か・・・？」

歩兵の一人が剣を抜き、朱音へ向けながら投げ掛けた。

「早くあの二人を止めなきゃ・・・！」

我を忘れるほどの美しい朱音の黒曜石の瞳に、一瞬歩兵の男はたじろいだ。

「何言ってる。これは戦だ、止めるなんてできる訳がない！」

そう男が言った瞬間、ライシェルの見えていない目が大きく見開かれた。ほぼ同時に、二人の騎士が馬を突進させていく。猛烈な速さであった。

「やめてーーーーーーーー！！！！！！」

朱音は半ば悲鳴のような声を上げていた。

その直後、朱音はまたあの暗闇に包まれていた。ルイを失ったあのとき、訪れた暗闇と同類の闇だ。

「あれ・・・？　わたし、どうしちゃったの・・・？」

こんな暗闇に囚われている場合ではないというのに、今こうしている間にも、フェルデンが致命傷を負っているかもしれない。

「会いたかったよ、アカネ」

ふと背後から抱きしめられ、朱音は驚いて振り向こうとするが、僅かに振り向くことができたのは首だけだった。

聞き慣れる声。朱音の身体を包み込む手は白く、その美しい手はやはり見覚えがあった。

「あなたは・・・、クロウ・・・？」

くすりと耳元で微笑むと、

「会いたかったよ。もう一人の僕」
すっと回された腕を解かれると、朱音はゆっくりと少年に向き直った。
夢で何度も見た、魔王ルシファーとそっくりな容貌。見る者全てを魅了するだろう神懸かったその姿は、まさしくクロウであった。
「ぼくは君が嫌いだった。だって、君はあまりに幸せな日々と、多くの愛に恵まれていたから」
小さく首を傾げ、クロウは穏やかな口調でそうアカネに告げた。
「だけど、君は僕に、たくさんのものをくれた。情、愛・・・。僕がそれまで決して手に入れることのできなかったものたち・・・」
朱音は、クロウによって優しく包み込むように触れられた手に、視線を落とした。
「こうしてあなたから会いにきたってことは、何か言いたいことがあるんじゃない・・・？」
朱音だって馬鹿ではない、自分のことは自分自身が一番よくわかっている。
「ただ、僕はお礼が言いたかったんだ。そして、謝りたくて」
こくりと頷くと、朱音はもう一度美しいクロウの黒曜石の瞳を見つめた。
「わたし、消えちゃうのね・・・？」
悲しそうに微笑むと、クロウはぎゅっと朱音の手を握り締めた。
「ごめんね、アカネ。今の君は、魂が覚えていた残像ようなもの。肉体を離れて、長時間元の記憶を維持し続けることはできないんだ」
朱音は微笑み返す。
「そっか・・・」
予想通りの告知に、朱音は思いの外落ち着いていた。
「知ってたよ。だって、最近じゃ、あんなに大好きだった母さんや父さん、真咲の顔がよく思い出せないんだもん」
朱音はクロウの手を握り返した。
「だけど、あともう少しだけ・・・、もう少しだけ助けて・・・。

フェルデンを・・・、あの人をここで失う訳にはいかないんだもん」
クロウはどきりとする程朱音に顔を近付け、「いいよ」と答えた。
ほんの朱音よりもほんの少し背が高い少年に、今度は前から抱きしめられていた。
「もっと別の形で会いたかったな・・・。そしたら、ぼ僕はきっと君を好きになってたのに」
そう耳元で囁かれたと思った途端、急にぱっと視界が明るくなった。

ぼこぼこと地面が隆起し、二人の騎士の間に巨大な土の山が出現していた。
突如出現した山に驚き、二頭の馬はすっかり落ち着きを失っている。
しかし、どうにか間に合ったようであった。
「何者だ！　おれたちの闘いを邪魔立てする者は！」
不機嫌な様子で、槍を地面に突き立て、ライシェルが叫んだ。
「闘いを止めたのはわたしです、ライシェルさん。この無意味で馬鹿げた闘いを止めに来たんです！」
砂山の反対側では、フェルデンもその声の主を見て驚きを隠せない様子である。
「わたしはゴーディアの新国王、クロウです。ゴーディアの兵をすぐに撤退させて下さい。これは、国王命令です！」
「クロウ陛下！？」
ここに居るはずのないゴーディアの国王が忽然として現れたことにより、一時ディアーゼの戦場は騒然となった。

7話　相携う者たち（前書き）

長い間続きを書けない日が続きましたが、ようやく勢いを取り戻しつつあるようです。頭の中の妄想が途切れないうちに、物語の続きを書き綴っていきたいと思います☆

7話　相携う者たち

「陛下、遠征で碌な食料が残っておりませんので、こんな物しかお出しできませんが・・・」

朱音は湯気の立ち昇る、温かいスープの器を手にとった。

思えば、何日かぶりの温かい食事だった。日持ちのするパンとスープという簡素なものだったが、それは朱音にとっては十分な食事であった。

ゴーディアの船の中で、朱音は今、丸いテーブルを挟んでライシェル・ギーと向かい合っていた。

盲目の彼が、どうして“新国王クロウ”と名乗る怪しい少年を信用してくれたのかは朱音にも分からないが、彼は疑うどころかすぐさま馬を降りて頭(こうべ)を垂れた。

「無礼な立ち振る舞い、申し訳ございませんでした。まさか、この戦場に陛下御自らお越しになっていようとは、思いも寄りませんでしたので・・・」

朱音はスープを一口啜ると、小さく首を振った。

「いいえ。それより、どうしてわたしを信じてくれたんですか？もしかすると、国王を名乗る別人かもしれないのに」

それを聞いた途端、ふっとライシェルは俯き表情を緩めた。

「確かに自分は陛下のお顔を拝見することはできません。しかし、その分目に見えぬものを感じ取ることができます。そう、身体から発せられる目には見えない色・・・。その色は亡きルシファー陛下のみが携えておられた特別な色です。他の誰にも真似することなどできません」

そう言ったライシェルの顔を見つめた後、彼の琥珀色の眼が本当に何も映していないと思うと、なぜか不思議な気持ちになった。

船の外は未だ張り詰めた空気で満ちてはいたが、一時休戦となっ

ていた。
窓の外には、相変わらず半透明の薄い膜のような結界が張り巡らされている
のが伺える。サンタシ側も、いつ何時仕掛けてくるかわからないゴーディアを警戒し、まだ臨戦態勢を崩していないようだ。
　フェルデンを含むサンタシの兵達も、今は自軍の医療班陣営地へと一旦引き上げている。
「ライシェルさん、この戦はわたしの望んだものではありません。嵌められてしまったんです・・・。裏でわたしを陥れようと糸を引いている者がいます」
「それでは、この戦は陛下の指示ではない・・・と？」
ぐっと拳を握り締め、朱音は「はい」としっかりとした口調で答えた。
「もしそれが事実だとすれば・・・」
　こくりと頷くと、朱音はこう付け加えた。
「指示しているのは、ヘロルドです」
　ぴくりと肩眉を吊り上げると、ライシェルは難しい顔をして考え込んだ。
「ヘロルド閣下ですか・・・。初めっからどうもいけ好かないとは思ってはいましたが、まさかこのような行動に出るとは・・・」
　しかしどういうことか、と疑問に思う。たとえそれが最高司令官の座を手に入れたヘロルドの仕業であったにせよ、あの元老院どもが黙ってそれを見過ごす訳が無いというのに。
（ほう・・・、なるほど。あの男、元老院どもの弱みにでもつけ込み、巧く操ったか・・・）
「ですから、お願いです。これ以上多くの人達が無意味な血を流す姿は見たくないんです。ここは引き下がって貰えませんか」
　朱音は必死にライシェルに懸命に訴えかけた。
「それが陛下のお望みならば、我々は喜んで従いましょう」
　意外にも、すんなりと受け入れられた朱音の願いだったが、その

直後、ライシェルの口から告げられた驚愕の事実で安堵感はすぐさま打ち消されることとなった。

「しかし陛下、問題が・・・。我々が大人しく引き下がったところで、戦を止めることはできません。陛下、どうしてこの戦場に“最高司令官”の姿がないのかと疑問には思われませんか？」

はっとして朱音は窓の外に目をやった。

そうだ、ここに居なければならないヘロルドの姿がどこにもない！

「実は我々は囮なのです。本陣はサンタシの背後から攻め入り、こちらの戦場の為に手薄になった城と城下を一気に攻め落とすという計画なのです。奴はその陣で指揮を・・・」

「！！」

驚愕して朱音は椅子が倒れてしまったことも気にならない程勢いよく立ち上がっていた。

「それの到着はいつ頃の予定なんですか・・・！？」

苦い表情のまま、ライシェルは答えた。

「恐らくは、明日、あるいは明後日までには・・・。数日前に入った連絡では、リストアーニャの港に商船として入ったと知らせを受けていますので」

「そんな・・・！　なんとかして止めなきゃ・・・！」

「まだ間に合うかもしれません。我々も、陛下にお供致します。すぐに陣営にいるサンタシの指令と連絡を取らせましょう」

ぴりぴりとした空気の中、互いの陣の中間点に簡易テントを設け、そこで速やかに上官だけの会合が開かれることとなった。

甲（かぶと）は取り去ってはいるものの、未だ鎧を身につけたままの姿で、懐かしいあの青年がテントの入り口を潜（くぐ）って中に入って来たときには、朱音は緊張で直視できなかった。

俯いたまま、彼の存在が静かに用意された椅子に腰掛けるのを感じながら朱音は勘付かれない程度に深く息を吸い込んだ。

「国王自ら会合を申し込むとは、一体どういう狙いだ」
突然の声に驚き、朱音は思わずその声の主に視線をやってしまって後悔の念に襲われた。
以前よりも落ち着いた雰囲気を纏ったフェルデンの姿は、いつの間にかすっかり少年の名残も消え、すっかり大人のものへと変わっていた。
しかし、その透けるようなブラウンの瞳は、あの頃となんら変わってはいない。今では耳を覆ってしまう程に伸びた金の髪は、後もう少しで結える日も近いだろう。
朱音は気を抜けば溢れ出そうになる涙を、懸命に押し止め、平静を装って返答した。
「応じてくださって、ありがとうございます。フェルデン殿下・・・。今からお話することは、一刻の猶予を争う内容のものです。先にお願いしておきます。今すぐ結界を解除して、出立の準備を進めて下さい。そして、叶うならば・・・、ディートハルトさんにもこの会合の中身を伝えてください」
嘗て魔城にて謁見の際に見せた、クロウに対する嫌悪の目と同じものが向けられていることに朱音は気付いていた。
それは、身を裂かれるよりも辛いことであったが、朱音は決して彼から目を逸らすことなく話続けた。
「一体何を言っている・・・？　そのようなこと承知できる訳がない！」
明らかに怒りを露にしているフェルデンの感情を感じ取り、ライシェルが付け加えた。
「落ち着け、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ。陛下が仰りたいことは、一時我らが提携しようという提案だ。何もサンタシを乗っ取ろうという気などない」
フェルデンはじっと何も映してはいないライシェルの目に僅かに視線をやった。
「どういうことだ？」

「フェルデン殿下、この戦争はわたしが指示したものではないからです。今、わたしに成り代わり、国や軍を欺き指示をしている者が別にいるんです。ですから、わたしはこの無意味な戦を止める為にここへ来ました。でも、できなかった・・・」

腕組みをし、フェルデンは伺うように朱音の言葉に耳を傾けた。

「わたしは大きな勘違いをしてしまいました・・・。ここへ来ればきっと、この戦争を止めることができると思っていたのに、実はここでの戦いは囮だったんです。彼は、手薄になった白亜城を背後から一気に攻め落とす気でいます」

「なに・・・!?」

拳をテーブルに強く叩きつけた拍子、上に乗せられていた水の入ったグラスが勢いよく地面に落下し粉々に砕け散った。

「殿下！　何かありましたかっ」

テントのすぐ外で控えていたアレクシが、慌てて中へ飛び込んで来た。

「その話が事実だという証拠はあるのか？　お前達ゴーディアの嘘ではないという確証はどこにある？」

先程まで矛先を向け合っていたこの状況で、こうした現状を何の疑いもなく受け入れることはきっと難しいことだった。

「証拠・・・。さすがに証拠は提示できないが、我ら黒の騎士団はここでの戦いを放棄し、現段階から全面的にクロウ陛下直々のご命令に従う意思でいる。疑うのは仕方の無いことだが、そうこうする間に本当に手遅れになってしまうぞ」

ライシェルの言っていることは的を得ていた。もしこのことが本当なら、城に残してきたヴィクトル王の身が危ない。

「わたしたちのことを信用して欲しいとは言いません。ですが、今だけは手を取り合いませんか？　ゴーディアも、今は彼の脅威に晒されているんです。ヘロルドを止めないと・・・。彼を止めたいという点では、サンタシも同じでしょう？」

少年王はまるで邪気を感じさせない真っ直ぐな目でフェルデンを

見返してくる。その目は、似ている筈もない、いや、決して似ていてはいけないあの少女の瞳にフェルデンには重なって見えた。
僅かに動揺し、初めてフェルデンは朱音から視線を外した。
「フェルデン・フォン・ヴォルティーユ。もしも我が騎士団と手を結ぶというのであれば、そちらの陣営に人員を配置させよう。そう・・・、確かうちの副司令官と相打った騎士が居たな。恐らくは相当の痛手を負っている筈だ。最高の医療班を送ろう」
アレクシは大きな物音がして慌てて入ってきてはみたが、どういう訳か“提携”の話にあがっていることと、あのゴーディアの方から人員を送るとまで提案してきたことに、信じられない思いでいっぱいだった。
「殿下・・・、一体どういった経緯でこうなったのかはわかりませんが、ゴーディアの提案はこちらにとっても損な話ではありません。実際、ここで傷を負った兵の数は多く、ユリウス上官の具合もあまり良くありません・・・。魔族の医療魔術は我々にとっても必要です」
アレクシはそっとフェルデンに耳打ちした。
ユリウスの状態が良くないことも、今回のディアーゼ港での戦いがサンタシ騎士団にとって、予想以上の痛手になってしまったことも、フェルデン自身よく理解していた。
「いや、やはりその提案は引き受けられない」
「まあまあ、そう結論を急ぐことはない」
急にテントの入り口を中年の男がくぐり抜け、姿を現した。
「その医療班の長はこのわしだ。覚えておらんかい？」
薄暗闇のテントの中でじっと目を凝らすと、見覚えのある風貌に、フェルデンはぴんときた。
「あなたは確か・・・。ボウレドで傷を手当てしてくださった街医者の・・・」
「ああ、覚えてくれていたか。まさか、君がサンタシの王子さんだったとは」

フレゴリーは口髭ぽりぽりと掻くと、ぱちくりと目をしばたかせた。

「昔の経験もあって、今回この遠征の医療班の長として引き抜きを受けたんだ」

フェルデンの疑問に答えるように、フレゴリーは付け加えた。

「ゴーディアの副司令官殿も、相当の傷を負ってはいたが、今し方やっと落ち着いたところだ。聞けば、あのときの生意気な小柄坊やが相打ったそうじゃないか。そこでだ、わしに彼を診させてはくれないか？」

フィルマンがいつしか話してい憧れの医者、フレゴリーこそ、今この目の前にいる男であった。

“患者に敵も味方もない”と言ったフレゴリーの言葉に、きっと嘘はないだろう。

「どうだろう、このフレゴリーに免じて、一時ゴーディアの申し出を受け入れてはくれんだろうか？　実際、そちらの怪我人達の状態が気になって仕方が無い」

朱音自身、思わぬ人物の登場にひどく驚いていた。

僅かに考えた後、フェルデンはフレゴリーに問うた。

「フレゴリー、あなたならユリウスを救えるのか・・・？」

「手遅れにならんうちならばな」

間髪入れずに返ってきた自信に満ちたフレゴリーの答えに、フェルデンはこの男ならば信じてもいいと、そう思えた。

「アレクシ、兄上に急ぎ文を送る。危険が迫っていると文に認(したた)めろ。バスカに届けさせる。おれはすぐにロランに結界を解除させる」

「はっ」

朱音は咄嗟にフェルデンに頭を下げた。

「ありがとう・・・！」

驚いたようにフェルデンは朱音をまじまじと見下ろした。まさか、ゴーディアの国王が易々と自分に頭を下げるなどと思ってもいなかったのだ。

「おれが信用したのはフレゴリーの人柄だ。いいか、少しでも変な素振りを見せれば、おれたちは全力でおまえたちを潰す」

魔族に妹を殺され、そして更にも朱音を奪われた憎しみは尚も生き続け、フェルデンの中で消えることなく燃え続けている。しかし、残された僅かな時間をこうして近くで過ごすことができることだけでも、朱音にとっては幸せなことだった。

「ええ。必要があればいつでもわたしを殺してくださって結構です」

邪心なくにこりと浮かべられた美しすぎる少年王の微笑みに、フェルデンはなぜか胸の奥が疼いた。

“こちらからディートハルトに最強の手持ちの札を持ってゆかせる。”

そうヴィクトルの手自ら書かれた文に記されていた。きっと、その手持ちの札というのがこの少年王だったのだろう。

どういった経緯でディートハルトが彼を連れてこの地までやって来たのかは分からないが、きっと自分がディアーゼに来ている間に何か白亜城であったのだということだけは想像できた。

「それとアレクシ、サンタシ騎士団で動ける者全てにすぐ出立の準備をさせろ。半刻後、すぐにここを経つ」

朱音は出立の前のディアーゼ港の浜の一端で、小さく座って、遠くの小波を見つめていた。

港は今回の戦いでひどく荒れ、未だ息絶えてしまった兵士や騎士たちの屍があちこちに無残に転がっている。煙をあげて尚沈没していくゴーディアの船に、地面のあちこちに突き刺さった矢。

いつの間にか日が傾き、空は夕焼けに少しずつ浸食され始めている。

慌しく出立の準備に奔走する騎士たちの声が聞こえてくる。

怪我人や騎士以外の兵達はこのディアーゼ港に留まり、傷の手当や港の整

備、復興にしばらくは尽力させられるらしい。
「残像・・・か。フェルデンを見るとこんなにも苦しいのに、この想いさえもただの残像なんだね」
朱音は胸元にしまってあったペンダントを取り出すと、それをぎゅっと握り締めた。
「陛下、そんな悲しいこと言わないで下さい。陛下は陛下ですよ。僕はどんなときもそのままの陛下が好きです」
朱音のすぐ隣に腰を下ろし、ふわりと優しくルイが微笑んだ。
「ルイ、ありがとう」
そう返したそこには、本当は誰の存在もない。
しかし朱音は、振り向けば、「陛下」と笑ってまだそこに居てくれているような気がしてならなかった。
目を閉じれば、あの恐ろしい光景が蘇ってくる。まさしく、あれは灼熱の地獄だった。大切な友人が一瞬にして灰となり消滅してしまったあの日から、朱音は火を見る度に手先が震えるのを止められないでいた。
（もう誰一人失いたくなんかない・・・！）
朱音はふと背後に人の気配を感じてそっと振り返った。
「クロウ陛下」
見上げると、じっと朱音を見下ろすディートハルトの姿があった。
「どうかしましたか、ディートハルトさん」
さっとペンダントを隠すようにして胸元へ押し込むと、何気ない振りをして朱音は言った。
「その手・・・、どうなさったのです？」
目敏い彼は、小刻みに震える朱音の手に気付いていたのだ。
「え、なんのこと？　どうもしないけど」
ぱっと手を服の中にしまうと、そっけなく視線を逸らした。
「わたしには、どうもしないようには見えませんな・・・。ひどい顔をしていますぞ」
そう言われて、朱音は初めて自分の顔の異変に気がついた。

朱音は泣いていた・・・。いつの間にか顔中が水にでも浸かったかのようにぐっしょりと涙で濡れていたのだ。

こんな辛いときには、いつだって大好きな父や母、憎たらしいところもある真咲が朱音を励ましてくれていたのに、今は本当に朱音は一人ぼっちだった。

もの凄く皆に会いたいと強く感じるのに、どうしても家族の顔が思い出せない。そしてその声さえも・・・。

「気付かなかった・・・、ごめんなさい。すぐにおさまりますから、他の人には黙っててくださいね」

ぐしぐしと服の袖で涙を拭うと、朱音は懸命に作り笑いを浮かべた。

「わたしは・・・、貴方を誤解していたのかもれませんな。どんなに傲慢な愚王かと思っていたが、わたしには貴方が若くとも立派な王に見える」

朱音が「え」と首を傾げると、ディートハルトはケロイドの傷を引き攣らせながらにかりと笑った。

「フェルデン殿下から事の成り行きは全て聞きましたぞ。サンタシとゴーディアの騎士が手を組む日がわたしの生きている間に訪れるとは思ってもいませんでしたのでな、不謹慎ながらもちょっと胸が騒いでおるのです」

そうして、この素晴らしい提案をしたのが少年王だと知って、ディートハルトはわざわざこの少年王の姿を探して、忙しい最中にここまでやって来たのだった。

「正直なところ、わたしには殿下とライシェル・ギーの戦いを止めることはできなかった・・・。礼を言っておきますぞ、クロウ陛下」

そう言って、ディートハルトはくるりと元来た道に向き直った。

「いいえ。わたしの方こそ、ここまでわたしを連れてきてくださって有難うございました。そして、またしばらく、よろしくお願いしますね」

背中を向けて力強く歩き始めたディートハルトは、大きな左の手

を挨拶代わりにひらひらと振りながら立ち去っていった。
朱音はパンと両の頬を自らの手で軽く叩くと、「よし！」小さく掛け声をあげた。
（こんなところで挫けててどうする、朱音！　まだ完全に消えた訳じゃないだから、最後まで自分の役目を果たさなきゃ！　ここでへこたれちゃ、新崎家の血が廃る！）
それに、朱音はまだ小さな希望を捨てていなかった。ひょっとして、ひょっとすると、神様か天上人だか何だか知らないけれど、不幸な一人の少女を哀れに思って、何か得策を講じてくれるかもしれない・・・！　と。

8話　夢幻と少女

白亜城へ向けてサンタシとゴーディアの騎士達が疾風の如く馬を走らせる最中、朱音の異変を感じ取ったのは馬に同乗していたライシェルその人であった。

「陛下？」

突然脱力したかと思うと、その華奢な朱音の身体は危うく落馬しかけたのだ。寸でのところでライシェルはだらりと力無く気を失っている朱音の腕を捉えた。

サンタシ騎士団の後に続き、黒の騎士団の先陣を切って駆けていた馬を突如急停止したので、後に続いていた騎士達も慌てて自らが乗っている馬の手綱をいっぱいに引き、砂埃を巻き上げながら停止させた。

「ライシェル指令官補佐、どうかなさったのですか！？」

黒の騎士団で唯一の女騎士、タリアが、心配そうに馬で近付いた。

ライシェルはとりあえず朱音の身体を馬の背で安定するように抱え直すと、ぼそりと一言溢した。

「熱い・・・」

タリアはその意味を感じ取り、少年のように短く刈った海松色（みるいろ）の髪をふわと揺らして、ひょいと馬から飛び降り、そして朱音のぐったりした額に手を触れた。

「・・・すごい熱ですね・・・。今までよく平気な振りをしておられたものです・・・。見たところ、酷いお姿をしておられますし、相当疲労が溜まっておられるようです」

前を走るサンタシの騎士達の姿は、既に視界から消えていた。

「このペースでの疾走はもう無理だ。この辺りで少し休みをとる。お前達は先に行ってサンタシ騎士団に合流しろ。おれが追いつくまでは指揮はお前に任せる」

「はっ」
再び馬に跨ったタリアに、ライシェルは付け加えた。
「余計な疑心を生みたくはない、フェルデン・フォン・ヴォルティーユに、陛下が意識を取り戻し次第すぐに追いつくと伝えておけ」
こくりと頷くと、タリアは他の騎士達を引き連れ、勢いよく駆け出した。彼女には遅れをとった分を取り戻し、尚且つサンタシの指令官に言伝をするという重要な任務が加わったのだ。
少しでも速く駆けられるようにと、両国の騎士は皆、僅かな武器のみを身につけた軽装備で出立していた。ライシェルも、今は胸甲を身につけていない。赤い刺?の入った美しい藍の衣に、琥珀色の髪を高く小さくまとめた姿がやけに東洋めいて見える。
これまで休みなく走ってきたが、夜もかなり更けていた。すっかり深まった闇の中で、ライシェルは朱音の身体を馬に預けたまま、少し道を外れた場所へと馬の手綱を引いた。もともと目の見えない彼にとって、夜の闇も昼間となんら変わりは無い。
ライシェルは、自らの藍のマントを取り外すと、成る丈寝心地のいいだろう草の上を探してそれを敷いてた。そして馬からそっと抱き下ろした朱音の身体を横たえてやる。
そしてふと思った。この華奢な身体で、これまでどれだけ過酷な旅をしてきたのかと。
「アザエル閣下は貴方を選び、確立してきた地位や名誉さえも投げ打ってまで貴方に忠義を尽くした・・・。その理由が、今ならよくわかる。貴方ならば、両国の長き闘いに終止符を打つことができるかもしれない・・・」

「姉ちゃん」
久しぶりにこんなにも穏やかな気持ちで眠ったかもしれない。こ

んな安眠を手にしたのは、何週間、いや、何ヶ月ぶりだろうか。
「姉ちゃん！」
熟睡程の幸せは無い。いつまでも、この柔らかい布団に寝そべっていたい。
「おい！　お姉ちゃんったら！」
思い返せば、どうしてここ最近はこんな眠っていなかったんだろうか？　と、ふと疑問が浮かび上がる。けれど、今となってはどうでもいいことのようにも思える。
（ま、いっか。きっと受験勉強にでも勤しんでたせいだな・・・）
なんて暢気に寝返りを打とうとすると、
「このやろう！　いい加減にしろ！」
と乱暴な怒鳴り声と同時に幸せの為の“布団”という魔法を無理矢理引き剥がされる。
「・・・っさいなあ・・・。人がせっかくいい気持ちで寝てるっていうのに・・・」
重い目をこすりながら、朱音はのっそりと起き上がった。
まだ半分夢の中にいるような気分である。
見慣れた自分の部屋と、壁に貼られた人気アイドルグループＪ’ｓのポスターが視界に入ってくる。参考書とノートが開けっぱなしの勉強机には、食べかけのジャガリコの容器が載っかっている。
湿気てしまっていなければいいが・・・、とちょっぴり不安に駆られる。
「姉ちゃん、もう昼だぜ？　母さんがいい加減起こしてこいって」
ぶすっと不機嫌に引き剥がした布団を床にばさりと置くと、真咲が言った。
「ああ、もう、わかったってば」
嫌々ながら姉を起こしに来たことは賞賛に値するが、今の朱音にはそれさえも腹立ちの要因となりえる。
「あー、姉ちゃんまた散らけたまま寝てる！　ってかまた菓子の蓋くらい閉じとけよ！　知らねえよ、ゴキが湧いて出ても」

苛々の頂点に達し、朱音はとうとう枕を真咲に投げ付ける。
「って！　こんにゃろう、おれとやる気か？　道場跡継ぎのこのおれとやる気なのか！？」
こんな狭い部屋でやり合ってたまるか、と朱音は馬鹿馬鹿しくなってベッドから置き出した。
「おい、臆病者！　逃げる気か？！」
ふんっと一瞥すると、朱音は真咲に言い捨てた。
「ばっかじゃないの。あんたよりわたしの方が数段上なんですけど？　あんたなんかに跡継ぎ務まってたまるかっての」
べっと舌を出すと、後ろから「むきーっ」という怒りの喚叫が響いてくる前に、そそくさと退散した。
台所へ向かう為、階段を降りながら朱音はふと胸に引っ掛かりを覚えた。
昨日と何も変わらない日常で、ありふれた休日だというのに、妙に懐かしく感じる。それに、なんだかとてつもなく長い夢を見ていたような気もする。
けれどどんな夢を見ていたのかは思い出せない。朝起きると、見た夢をすっかり忘れてしまうことなんてよくあることだ。
「朱音、おはよう。ご飯は？」
エプロンをつけた母が台所から顔を出す。
「おはよう・・・。あれ、なんかいい香りがするけど」
甘い香りに誘われ、匂い嗅いでぴんときた。ホットケーキである。
「真咲が朝御飯に食べたのよ。冷めちゃってるけど、食べる？」
「うん・・・」
寝ぼけ眼で椅子に気だるげに掻けると、ラップのかかった皿を朱音に手渡してくれた。
オレンジジュースの紙パックが出しっぱなしでテーブルの上に置いてあって、朱音は昨晩寝る前に飲んだまんまのマグカップにこぽこぽとそれを注いだ。
蒸気でしっとりと湿ったサランラップを剥がすと、ちょっぴりふ

んわり感が抜けてしまったぬるいホットケーキを見つめて「あ」と声を出す。
「なに」
と、母の声。
「マーガリンと蜂蜜・・・」
面倒くさいと思いながらも、朱音はよっこいせとのろのろと立ち上がり、冷蔵庫をバタリと開いた。
涼しげな風と、独特の冷蔵庫のにおい。
目的のマーガリンの容器と蜂蜜のチューブを取り出すと、朱音は再びどすんと椅子に腰掛けた。
冷めたホットケーキにマーガリンを塗る作業はなかなか骨がいったが、そこは根気強く丁寧に塗りつけ、仕上げはたっぷりの蜂蜜の筈だった・・・。
しかし、蜂蜜の透明チューブを手にした途端、透き通った蜂蜜色になぜかその手が止まる。
「この色、どっかで・・・」
とろりとした蜂蜜をじっと見つめるが、一体どこでその色を見たのか、やっぱり思い出せない。
「母さん、わたし、この色どっかで見たことあるんだよね」
そう言った娘の言葉に、母は苦笑しながら答えた。
「そりゃそうよー。蜂蜜なんて、普段いっつも見慣れてんだから」
そう言われても、朱音はどうもまだ納得できない。
「そうじゃなくてー・・・」
はっとして朱音は待ち密のチューブをテーブルに置いて見つめた。
「そうだ・・・。この色、夢に出てきてた・・・！」
馬鹿らしいかもしれないが、これは重要なことのような気がしてならなかった。
「へえ、夢？　どんな夢？　ホットケーキの夢とか？」
母はまな板の上でウインナーに切れ込みを入れながら冗談半分で返してくる。

「違うってば。なんか・・・、ちょっと悲しい夢だった気がする・・・」

しみじみと話す娘に、母はちょっと意外だったのか、「へえ」と真面目な相槌を打った。

蜂蜜を見つめながら、朱音は、なぜか忘れてしまった夢がとても重要で、どうしても思い出さなければいけないような焦燥に駆られる。

けれど、思い出せなくて・・・。

蜂蜜を見る度に胸が苦しくなるような感じを覚えるのだった。

「殿下、様子が変です！　先程まで我々のすぐ後を走っていた黒の騎士団達の姿がありません！」

アレクシがフェルデンに声を掛けた。

「やはり、おれたちは嵌められたのか・・・！？」

騎士達の中に動揺が走り始める。

「あいつら、まんまとサンタシへ入り込み、囲い込むつもりなんじゃ・・・」

『ピロロロロロロロ』

頭上で黒い影が弧を描いて翔け回る。バスカは夜目がきく。

バスカに運ばせたヴィクトル王宛ての文はすでに王の元へと届けられていた。

無言のまま、フェルデンは馬の速度を僅かに落とすと、左腕をバスカの止まり木代わりに掲げた。ファサ、と優雅に舞い降りた王家の鳥は、駆け続ける馬の上で足に結わえつけられている文を主人に

差し出した。服の袖に準備してあった干し肉をバスカに咥えさせてやると、やれやれというように、鳥は再び空中へと舞い上がった。フェルデンは片手で器用に文を広げていく。ともすれば、走る風で吹き飛ばされそうになる羊皮紙の切れ端を手の甲でうまく固定し、書かれている文字に目を走らせた。

“忠告は受け取った。今のところまだ進軍の情報は入ってきてはいない。しかし、迎え撃つ準備はしておくつもりだ。僅かな兵力しか手元に残ってはいまいが、王の務めを最後まで果たす覚悟でいる。遅くなったが、この度のディアーゼ港での働き、ご苦労であった。そなたの働きは王家の誇りだ。”

読み終えた羊皮紙をぐっと握り締めると、無意識のうちに、フェルデンは出立前からずっと頭から離れようとしないフレゴリーの一言を復唱していた。

出立直前、フレゴリーが医療具を部下にサンタシ陣営まで運ばせる際にフェルデンに話かけてきた。

それというのも、小柄の騎士ユリウスの状態が気になるだろうとフレゴリーが気を回してくれたのだが、これが結果的に出立後もフェルデンの心を掻き乱すこととなってしまった。

「そろそろ出立だと聞いたんだが、今、話しても?」

馬の背に食料の荷を結わえつけている最中であったが、フェルデンはその手を止めてフレゴリーに向き直った。

「ええ」

中年の医者は、ごほんと咳払いを一つすると、ユリウスの状態について分かりやすく話し始めた。

「まあ、簡単に言えば命に別状はない。急所は外れているし、そちらの医療班の応急処置が適切だったこともある。けれど、それより問題なのは剣の刺し傷というよりは、別の傷・・・。メフィスの植

物による攻撃を受けた傷ですな」
命に別状はないと聞いてほっとしかけた矢先、フェルデンは顔を顰めた。
「その傷がなにか？」
ふむ、と頷くと、フレゴリーは口髭をぽりぽりと人差し指で掻きながら続けた。
「植物に毒が含まれていたせいで、今は昏睡状態に陥っている。解毒薬を作って飲ませたが・・・、しばらくは目を覚まさないかもしれない」
油断はできない状態かもしれないが、彼の命に別状が無いことに心底安堵した。
「フレゴリー、あなたにはいつも助けられてばかりだ。大した礼もできないが・・・」
敵国の医者だというのに、フレゴリーには、自らの命だけでなく、部下であり友人である者の命まで救って貰ったことになる。若き頃のフィルマンが彼に憧れ、目標にしてきたと話したこと、今ならその気持ちがよく理解できる。
「いいや、わしは大したことはしとらん。確かに傷の手当はしたが、実は傷自体よりも本人の“治りたい”という意志が何より重要なんだ。君の怪我は、君自身の意志が治したのさ」
その言葉は、フレゴリーの謙遜というよりは、真にそう思って医者を続けてきたというような口振りだった。
「そんな謙遜を。あなたは素晴らしい医者です、フィルマンもそう言っていました」
おお、あのときの若造か！　っと、フレゴリーは嬉しそうに微笑んだ。彼は若き頃のフィルマンを記憶に止めていたようだ。
「さて、そろそろ患者の様子が気になる。この辺で失礼するよ」
去り際にぴこりと頭を下げると、フレゴリーは意味深なことを言い残していった。
「全く、ここへ来てからはびっくりし通しだ。あのときの怪我人は

サンタシの王子だというし、看病に来ていた別嬪のお嬢さんはゴーディアの国王だというし・・・。一体どうなってる、次は一体何が飛び出す？　王妃か？　お姫さんか・・・？」

ぶつぶつと言いながらテントへ戻って行ったフレゴリーの背中を見つめながら、フェルデンは眉を顰めた。確かに、ゴーディアへサンタシの遣いとして行った際に、傷の悪化の為に急遽ボウレドへ立ち寄り、フレゴリーの診療所で世話になった記憶ははっきりと残っている。

しかし、看病してくれていたのは、フェルデンの記憶が正しければ、旅の同行をしていたユリウスだった筈だ。当然のこと、“お嬢さん”なんて人物が診療所に訪ねて来た記憶は全くもって無いし、仮に意識を失っている間に来ていたとしても、そうだとしたら、きっとユリウスがそれをフェルデンに伝えている筈だ。

それなのに、フレゴリーは確かにはっきりと、“看病に来ていた別嬪のお嬢さん”と口にしていた。

もう一度、熱に浮かされたあの晩の記憶を辿ってみる。

確かに、フェルデンはあの晩不思議な夢を見ていた。

温かい手の温もりや、懐かしいチチルの実の甘い香り。

「きっと良くなるから・・・」

と、耳元で囁く優しい少女の声。

あれらは全て、痛みと熱がフェルデンに見せた夢幻だとばかり思っていたが、それだけではなかったらしい。

（どういうことだ・・・？　それに、フレゴリーはそれをゴーディアの国王だと言わなかったか・・・？）

出立を直前にて、不謹慎ながらも、ユリウスに事実を問い質したい思いに駆られたが、生憎彼は未だ意識を取り戻してはいない。

ユリウスがどうしてこのことを自分に隠していたのかを考えると、ますます分からなくなってくる。

一度は朱音の命を引き換えに覚醒したクロウに憎しみすら抱き、その首に手を掛けてしまったというのに、どうしてその当の本人が、

敵国の王子の看病の為にわざわざ城を離れやって来たのだろうか。
（まさかとは思うが・・・、城を空けた隙に国王の座を乗っ取られたということはないだろうな・・・？　いや、まさか・・・な。憎むべき敵国の俺に、どうしてあの王がそこまでする必要がある・・・？）
けれど、初めてゴーディアで少年王に謁見したとき、切なげにこちらを見るめていた彼の表情や、その美しい頬を伝って零れた一粒の涙が何度も思い出されて仕方が無い。
そしてあの夜、彼の首に手をかけたとき、あの世にも美しい少年王は、抵抗の一つもせず、じっと声もなく泣きながら瞳を閉じていた。まるで、フェルデンに自らの命を捧げるつもりかのように・・・。
（お前は一体、何なんだ・・・、クロウ・・・！）
馬の手綱を握る手に思わず力が入るが、突然すぐ脇から、
「フェルデン様！」
と、女の声で呼び掛けられた。
はっと現実に戻って隣をに視線をやると、ゴーディアの女騎士がすぐ隣を馬で走らせていた。
「お前は・・・」
「ゴーディアの黒の騎士、タリアと申します。ライシェル指令官補佐から伝言を預かって参りました」
馬の走る速度を落とさないまま、フェルデンはタリアにこくりと頷いた。
「実は、クロウ陛下が疲労でお倒れになりました・・・。ライシェル指令官補佐は陛下の意識が戻られるまでは少し休みをとると、そして、その後必ずこちらに追いつくとお伝えするように命令を受けました」
「倒れた・・・？」
傍で一部始終を耳にしていたアレクシが、疑わしげな目でタリアを睨んでいたことに、フェルデンは気付いてはいなかった。

「ええ。陛下はかなり過酷な旅をして来られたようです。体力的にも、精神的にもとうに限界を過ぎておられます。心配はご無用です。ライシェル指令官補佐なら、一日程度の遅れならすぐに追いついて来られますから」

相当の速さで駆けさせているにも関わらず、それでも一日程度ならば追いつけるというタリアの自信あり気な言葉に、フェルデンは、

「わかった、信用する」

と、意外にもあっさりと返した。

しかし、心中はひどく動揺していた。なぜかはわからないが、自分が何か重要な事柄を見落としてきたのではないか、という胸騒ぎを覚えずにはいられなかった。

9話　騎士に捧ぐ（前書き）

いつもご愛読ありがとうございます。本業が多忙の為、更新速度がマチマチですが、頑張って更新していきたいと思います。今後もよろしくお願いします。

9話　騎士に捧ぐ

死んだように動かなくなった朱音の身体を、なるたけ冷やさないようにと、ライシェルは自らが羽織っていた藍の衣を、まだ幼さの残るその肩に掛けてやっていた。

触れるとひどく熱を発しているのに、なぜかライシェルの目は、異様な色を感じ取っていた。

華奢なその身体からは、想像もつかない程巨大なものが蠢き、そしてそれは内側に留め切ることができず、じわじわと滲み出しているという表現が適切かもしれない。今までうまく隠していたものが、意識を失ったことで抑制力が弱まったせいかもしれないし、もしくは、眠っていた力が覚醒し始めたようにも見える。

ともあれ、こうして眠りについた途端、彼の身体が急激に回復していくのがライシェルにもはっきりと感じ取れた。力の覚醒により、彼の身体を自然と治癒し始めているのだろう。この調子であれば、夜明けには意識を取り戻し、この場所を出立できるかもしれない、とライシェルは思った。

朱音は図書館の机の上から、窓の外をぼんやりと眺めていた。

今朝のハチミツが頭にこびり付いて離れようとせず、受験勉強に全く身が入らないでいた。

（なんで、あんなどこにでもある蜂蜜なんかが気になったりしてんだろう・・・）

くしゃりと前髪を掻き上げると、大きな溜息を溢した。今朝から、なんだかまだ夢心地というか、なんというか、自分で言うのも何だが、どうも様子が変だと朱音は感じていた。

「あっ、朱音じゃん！　今日も自習しに来てたんだ？」
ふと誰かに声を掛けられ、朱音は窓の外から視線を戻す。
「愛美（まなみ）・・・」
クラスメイトの愛美である。彼女は、朱音とは正反対の人格を持ち合わせていた。何もかもが人並みな朱音に対し、彼女は家庭環境と容姿に恵まれ、かなりの自信家でもある。受験生という括りにとらわれることなく、彼女は常に恋多き女であった。
「まさか一人で来てるとかないよねー？　そんな淋しいことしてたら、徹生えるよ～」
お洒落にも一切手抜きをしない彼女は、今日もピンク色のワンピースに、ちょっぴりヒールの高いパンプスを身につけている。ほんのりと施された化粧が、同性の目から見ても思わず真似したくなるような可憐さを醸し出している。
「まさかの一人だよ。ってかさ、愛美こそ、また新しい彼とデート？」
にっこりと微笑むと、愛美は綺麗にネイルアートされた人差し指で、入り口付近のテーブルを指差した。
「あったり～～。あの爽やか青年が愛美の新しい彼です」
見ると、Ｊ，ｓのメンバーにでもいそうな爽やか系の男の子が、何やら雑誌に読み耽っている。
「あの人、もしかして高校生？」
受験生では絶対いそうにない、金のメッシュの入った髪に、朱音はぴんときた。
「そっ。高校の体験入学のときに仲良くなったの。彼は高校二年生。なかなかのイケメンでしょ？」
恋愛経験のあまり豊富でない朱音にとって、“年上の彼氏”というものが、ひどく凄いことに思える。
「愛美、ほんとあんたってすごいよね・・・」
呆れる程感心し、朱音は開いた数学の参考書をぱたりと閉じた。
そろそろ気分転換にジュースでも飲みに行こうと思ったのだ。

「こらこら、何言ってんの。朱音だって女の子じゃん。年頃の女の子が、彼氏の一人や二人いないでどうする！　ファーストキスだって、時期を過ぎたら賞味期限切れちゃうよ～～」

べっと舌を出して、愛美が小声で説教する。

「ん・・・？　わたし、もうファーストキス終わっちゃってるよ？」

ぎょっとして、愛美が思わず身を乗り出す。

「へ！？　ちょっと、朱音。それ、わたし聞いてないよ？？　一体いつ、誰にあげちゃったの！？」

そう問い詰められて、朱音ははたと困って考え込んだ。

（あれ・・・？　そういえばわたし、一体誰とファーストキスしたんだっけ・・・？）

確かに誰かとした記憶はあるのに、その相手が誰だったのかさっぱり思い出せない。

けれど、なぜかその時でさえ、今朝の蜂蜜が頭を過ぎっていた。

ただ、あの蜂蜜色が、どうしてかファーストキスに関わっている気がして仕方が無かった。

明け方、ライシェルの予想通り、少年王が目を覚ました。

「気がつかれたようですね、クロウ陛下」

少年王は言った。

「ああ。久しぶりによく眠った気がする・・・。ライシェル、僕はどれくらいここでこうしてた？」

しかし、目を開けた少年王は、昨晩とはまるで別人のような雰囲気を纏っていた。ましてや、昨晩とは一人称や口調までも違っている。

その事に勘付きながらも、ライシェルは敢えて何も口にせず、

「それほど長くはありませんよ。せいぜい四刻程ではないでしょうか」

と、答えた。

「そう・・・。少し遅れをとってしまったよね」
何事も無かったかのように起き上がると、少年王は明るみ始めている空を見上げた。
「ライシェル、馬はここに置いて行こうよ。僕たちは別の移動手段で追いつけばいい。なにかいい案はない？　今ここで飛竜を呼んでもいいんだけど、あんまり目立たない方がいいでしょ？」
さらりと“飛竜”という言葉を口にしたクロウに、ライシェルは驚きをなんとか内に圧し止めた。
飛竜は数千年も生きると呼ばれる幻の生物で、このレイシアでその存在を見た者は数える程しかいないと言われている。ましてや、彼らの生息地は現在も不明である。
「飛竜・・・ですか・・・？　そんな幻の生き物をどこで・・・」
「ああ。幼かった頃に、父上に一頭貰ったんだ。さすがに生息地までは教えて貰えなかったけれど、貰った飛竜とは血の契約を結んでいる」
滅多なことがない限り感心したりなどしないライシェルでさえ、底知れぬ少年王の力に言葉を失った。
「ライシェルは、父上の代から確か指令官補佐をしていたよね？実際会ったのは今回が初めてだけど、父上から、あなたが優秀な魔笛使いと聞いたことがある。確か・・・、獣を自由に操れたんじゃなかったっけ？」
黙りこくっていたライシェルだが、自分のもつ能力について少年王に言われていると気付くと、
「仰る通りです」
と、返した。
何より先代の王ルシファーが、息子のクロウに、指令官補佐である自らの存在について、話して聞かせていたことがあまりに意外だった。偉大で強大な魔力を有するあの魔王には、きっとどんな有能な部下でさえ、いるもいないも同じことに違いない、そうライシェルは思っていたのだ。彼が必要としていた人物は、いつだって、あ

の碧髪冷徹の上官、アザエルだけだと・・・。
「それなら話は早いよね。あなたの魔笛であれをここへ呼んでよ」
少年王はすっと頭上を指差した。
ふたりの遙か上の空を優雅に飛びかう巨大な鳥。
あれは、レイシア一の巨大鳥、ゾーン。一時は飛行手段として飼い慣らそうとする者達もいたが、あまりに気性が荒く、頭の悪い凶暴なあの鳥は、如何なる獣使いであれその手を持て余させた。結局、今では誰もがあの鳥を手放し、決して手出ししない。ついでに言うと、食用としても、この鳥の肉は強烈な匂いと固さで売り物にもならない。
「クロウ陛下、いくらわたしが魔笛を使えるとはいえ、あの鳥はお薦めできかねます。確かに、あれの背に乗れば、あっという間に皆に追いつくことができるでしょう。けれど、ゾーンは非常に頭が悪い・・・」
実際、何度かライシェルもあの鳥を魔笛で操作しようと試みたことがある。しかし、一時的にいうことを聞かせることができても、魔笛の音が止んだ途端、近くにいる動くもの全てを敵と見なし、狂乱して手がつけられなくなるのだ。
「じゃあどうやって追いつく？　飛竜なんか使ったら、そこら中の注目をあっという間に集めてしまうよ。それとも、ゾーンよりも早く距離を縮められる獣の当てなんてある？」
勿論、ここで休みをとると決めたとき、ライシェルに全く考えが無かった訳ではない。
「陛下・・・、利口な銀獅子ではいけませんか？」
盲目なライシェルの目を、じっとクロウは見つめ返した。
「悪くはない・・・。だけど、銀獅子は陸を駆けるじゃないか。空中なら、最短距離を一直線に詰められる。それも、あの鳥なら誰にも気付かれずに」
普通の者ならば決して選ぶことのない手段。目の前の少年王は、確かにあの魔王ルシファーの血を色濃く受け継いでいた。

ライシェルは呆れて小さく溜息を漏らした。
「何もあなたに全部任せる気ないから安心してよ。あの鳥をここに呼んで、少しの間大人しくさせてくれればいいからさ」
そう言って、クロウは地面に敷かれていたライシェルのマントを拾い上げ、ついた土を丁寧に払ってから藍の衣と一緒に彼に手渡した。
ライシェルは、衣とマントを纏いなおすと、しぶしぶ腰のベルトに装備していた魔笛の袋に手をやった。思いの外小ぶりなその横笛を、少年王は興味深げに見つめる。
「ほんとに、どうなってもしりませんよ」
魔笛に口をつける直前、ライシェルは少年王に最終通告をした。
この歳若い王が、一体何を考えているのかわからなかったが、言われる通りに指令官補佐の男は魔笛を奏で始めた。
しかし、確かに魔的を奏でているだろうに、その音はほとんど耳には聞こえてこない。時折、笛を通り過ぎる僅かな呼気の音だけがする程度であった。
少年王は綺麗な音色が聴けるものとばかり思っていたのか、些か残念そうな表情を浮かべていたが、しばらくすると、頭上の鳥の様子がおかしいことに勘付き始めた。
酔ったように蛇行しながら空を旋回し始める。仕舞いには高度を落とし、ふらふらと頭を振りながら降下していた。
人の耳には聞こえない、特殊な音波のようなものが、魔笛から発されているのかもしれない。
とうとう二人の目の前に、巨大な鳥が降り立った。遠くから見るのとは違い、ゾーンは想像以上の迫力だった。
身体の割に小さい頭は、禿げ上がり、身体を覆っている黒と白の羽毛は、お世辞にも美しいとは言えない。あちらこちらに毟りとられた後やすでに塞がった傷が目立つ。この鳥は、共食いをして生存する稀な種で有名だ。おそらくは、これらの傷はそのときにできたもの達であろう。

「ビャア」
耳障りな潰れたような声で、ゾーンが鳴いた。
赤い目が不機嫌な様子を物語っている。今、ライシェルが魔笛を吹くのをやめたとしたら、間違いなく、この鳥は二人に襲い掛かってくるだろう。
「ライシェル、もう少し大人しくさせていてよ。今からこの鳥と“血の契約”を結ぶ」
少年王はそう言うと同時に、胸元にしまってあったペンダントを取り出し、原型であるナイフへと変形させた。そして、迷うことなくその刃を自らの左手首に宛がった。
異変に気付き、ライシェルが少年王に声を掛けようとするが、今は一時だって笛から口を離すことはできない。
少年王は、シュッと宛がったナイフを手首に走らせた。僅かに眉をしかめると、その直後、ぽたりぽたりと血が滴り始めた。
血の匂いに敏感な巨大鳥は、
「びゃあ」
と、やはり耳障りな鳴き声を上げる。
少年王は、ゾーンの目の前まで近付き、素早くその尖った嘴を無理矢理こじ開けた。そして尚も血液の滴る左手を、肘のあたりまで無理矢理奥に捩じ込んだのだ。
魔笛を吹きながらも周囲の音に注意を払っていたライシェルは、突然少年王がとった危険な行為に、思わずぎょっとしていた。
驚いたゾーンは暫くはバタバタと大きな翼を暴れさせていたが、しばらくすると、その赤い目が落ち着いた朱色へと変化し、急に大人しくなった。
「ライシェル、もう吹くのをやめていい」
クロウの声で、ライシェルは魔笛を口から離した。
いつもならば、ここでゾーンの攻撃に備えて槍をすかさず構えなければならないところだが、このときばかりは様子が違っていた。
先程までの凶暴な鳥は、じっと静かに主人の命令を待つ、従順な

ただの鳥に変わっていた。
「陛下、一体どうやってこの鳥を手懐けたのですか？」
思わず訊ねずにはいられなかったライシェルは、魔笛を袋にしまいながら言った。
「この方法は、父上に飛竜を貰ったときに使った方法だ。“血の契約”と言って、自らの血を飲ませた相手に不老の肉体を与え、魔力を目覚めさせてやる代わりに、僕への忠誠を誓わることができる」
“血の契約”の存在を知らずにいたライシェルは、魔王の血の恐ろしさを今改めてその身に感じた。
「さ、早く乗ろうよ。出発は早い方がいいでしょう？」
華奢な左手首の切り傷は、もう既に塞がりかけている。驚異的な回復力である。
目の前の小さな少年王の底知れぬ力に、ライシェルは恐ろしささえ感じた。
（この王は、この世の全てを思う儘にしうる力を持っているというのか・・・？　そして、あのルシファー陛下もこれと同じ力を持っていた・・・。しかし、先王はそれを乱用しようとはしなかった。この力さえあれば、サンタシの王でさえ忠誠を誓わせることができたというのに・・・。そして、この王もまた・・・）
そして同時に、この少年王が、これからどのように行動していくのかを見てみたくなった。
「ライシェル、何をぼうっとしてるんだよ、出発するよ？」
すでにゾーンの背に跨つ少年王にライシェルはこくりと頷いた。
「ああ、すみません。そうですね。すぐに出発しましょう」
ライシェルは馬の手綱を解いてやり、自由にしてやった。
二人は、レイシア一の巨大鳥の、初の飛行者となったのである。

朱音は突然の吐き気に見舞われ、図書館のトイレに駆け込んでいた。
ひどい頭痛。

それも、あの蜂蜜とファーストキスの相手をキーワードに記憶を辿ろうとすると決まって訪れるのだった。急に目の前で真っ青になった友人の姿にびっくりし、愛美がトイレに同行してくれていた。勿論のこと、彼氏を待たせたままである。

「ね、朱音、一体どうしちゃったの？」

心配そうに背中を擦ってくれる愛美の手に感謝しながら、朱音はパシャリと冷たい水で顔を濡らした。

「分かんない・・・。でも、なんか急に・・・」

「ちょっと根詰めて勉強ばっか頑張りすぎてんじゃないの？　ちゃんと夜とか寝てる？」

横からさっと可愛らしいハンカチタオルを差し出しながら、愛美は言った。

「うん、睡眠はちゃんと摂ってるつもりなんだけど・・・」

受け取ったタオルハンカチで顔を拭くと、それがブランド品だということに気付き、ちょっぴり朱音は申し訳ない気持ちになった。

「気分転換は？　家にすっこんでばっかしてんじゃない？　時々はそのファーストキスの相手でも誘って、外でデートとかしなきゃ」

ぷんすかしながら、愛美は続けた。

しかし、その言葉を聞いた途端、朱音はひどい頭痛で頭を抱え込んだ。

「ちょ・・・、朱音・・・！？　まじで大丈夫？　誰か呼んで来ようか・・・？」

友人の状態に心配した愛美は、

「ここでちょっと待ってて。彼氏呼んでくるから」

とだけ言って、慌ててトイレから飛び出していった。

残された朱音は、洗面台に圧し掛かるような姿勢で、荒い息でもたれ掛かっていた。真っ青になった自分の顔が、鏡に映っている。

（これはほんとに不味いかもしんない・・・）

そう思った瞬間、鏡の中の自分がぐにゃりと歪んで別人へと姿を変えた。

「!?」

驚いて、目をごしごしと擦るが、鏡に現れた世にも美しい漆黒の髪の美少年は、消えることなく朱音を見つめてくる。

痛みのせいで幻覚を見ているのかと疑ったが、そのあまりにリアルな光景に、その少年の人間離れしすぎた美貌を前に、ただ呆然と見入っていた。

「アカネ」

すると、突然鏡の中の少年が口を開き、朱音の名を呼ぶではないか。

(なっ、なんでこの子わたしの名前を知ってるの!? ってか誰!?)

「こんな偽の世界に囚われていていいの? 君の居場所はここじゃないでしょ」

全く訳のわからないことを言われ、朱音は訝しげに少年を見た。

「偽の世界・・・?」

「そうだ。ここは、君が創り出した作り物の世界。まだ君は完全には消えてしまった訳じゃない。君が消えてしまうその時まで、クロウの身体は二人のものだ」

またひどい頭痛に苛まれ、朱音は霞む目で少年の黒曜石の瞳を見つめ続けた。

(何を言ってるのか分かんないけど・・・、わたし、この子とどこかで会ったことがある・・・)

「思い出せないのは気のせいだ。ちゃんと君は覚えている。僕のことも、アザエルやルイのことも。そして、フェルデン・フォン・ヴォルティーユのことも・・・」

ぐるぐると回る視界で、朱音は小さく悲鳴をあげた。

『アカネ、もどって来い』

遠くで優しく懐かしい声がした。

そう、あの優しい声を朱音はよく知っている・・・。

高鳴る鼓動。

振り向くと、金の髪の青年が柔らかに微笑んでいた。その目は、その目は透けるようなブラウンで、蜂蜜の色によく似ていた。

「フェルデン・・・」

気付けば、朱音はそう口にしていた。

（そうだ・・・、ここは元の世界なんかじゃない・・・！　わたしはまだレイシアにいるんだ。ここは違う・・・！　彼の居る世界じゃない！）

そう思った途端、バタンとトイレの入り口が開き、彼氏を引っ張ってきた愛美の姿が視界に入って来る。

しかし、朱音の身体はみるみると透け始めていた。

「朱音！？」

消えかかった友人を見て、愛美が何か叫んでいた。

（ごめんね、愛美・・・）

偽の世界だと分かってはいても、こうして再び母や真咲、そして愛美に出会えたことに、朱音はただ感謝した。そして、できることなら、父にも一目会いたかったなとも思った。

突然ぱっと開けた視界に、朱音は思わず目を細めた。いつの間にか夜が明け明るい太陽が差し込んでいる。浮遊感とともに、あまり座り心地のよくない羽毛を尻の下に感じた。

「わっ、わっ！？　どうなってんの、これ！？」

自分が地上から遙かに離れた空を飛んでいることに気付き、驚いて落っこちそうになったところを、がしりと後ろから捕まえられた。

「陛下、急にどうしたんです」
振り向くと、盲目の槍使い、ライシェル・ギーがいた。
「えっ、ラ、ライシェルさん・・・！？」
どういう成り行きでこうなったのかは想像もつかないが、とにかく、今は巨大な鳥の背に跨って空を飛んでいることだけは確かだ。
急に別人のように纏っていた空気を変えてしまった少年王に気付き、ライシェルはここで初めて少年王の中に存在する、二つの人格に気付き始めた。
「陛下、陛下がこのゾーンを手懐けてくださったお蔭で、銀獅子の足よりもずっと早く追いつくことができたようですよ」
どうして目の見えない彼が、遙か下にいる騎士団の姿を知ることができたのかは不可思議な事象だったが、朱音は上空から、黒の騎士団とサンタシ騎士団の姿を確かめることができた。
戦闘をかけている白いマントの騎士はきっと、フェルデンに違いない、と朱音は思った。
クロウがくれた僅かだけれど、大切な時間。
朱音はぎゅっと胸元に隠したペンダントを服ごしに握り締めた。
（あともう少し・・・、あともう少しだけ・・・！）
きっとフェルデンは朱音の存在に気付くことはないだろう。けれど、朱音はそれでも構わなかった。
（たとえ気付いて貰えなくても、憎まれたままでも構わない。ただ、消えてしまう最後の瞬間まで、フェルデン、貴方の傍で貴方の助けになりたい・・・！）
残された僅かな時間を彼の為に、と朱音は強く心に決めたのであった。

10話　託された意志

巨大な影が覆い被さり、フェルデンはふと真上を見上げた。
「な、なんだ!?」
アレクシが、驚き、思わず馬の足を止め、続いて他の騎士達も馬を静止させた。
巨大な影は、気性の荒いことで有名な、あのゾーンであった。
立ち塞がるようにして目の前に降り立とうとする巨大鳥に、フェルデンは剣を抜き構えた。この鳥に遭遇したときは、殺るか殺られるかだと、師であるディートハルトに幼いころから教わっていた。
「フェルデン殿下、お待ちを」
ディートハルトの声と同時、その鳥の背に動く二つの影に目を留めた。
「ライシェル・ギー・・・、クロウ・・・!」
「殿下、これは一体どういうことでしょうか、確か、クロウ王は疲労で倒れていた筈じゃ・・・」
確かに、昨日会ったときよりもはるかに顔色がいい様子で、少年王は、ひょいっとゾーンの背から飛び降り、礼儀正しくフェルデンの前で頭を下げた。
「フェルデン殿下、途中わたしが倒れてしまったそうで、遅れをとってしまい申し訳ありませんでした」
フェルデンは、今、こうして目の前にいる少年王が一体何者なのかが分からなくなっていた。
しかし、美しい黒曜石の目は、じっと真っ直ぐに見つめている。
「クロウ陛下、御無事で何よりです。ライシェル指令官補佐、お戻りをお待ちしておりました」
馬から下りた女騎士タリアは、すっと朱音とライシェルの前に跪(ひざまず)いた。

「タリア、留守の間ご苦労だったな」
ライシェルもゾーンの背から飛び降り、そして朱音のすぐ脇に控えた。
「これはたまげた！　話を遮って悪いが、このゾーン、どうやって調達した・・・？　わたしが知る限りでは、この鳥は誰一人として飼い慣らすことなどできない強暴な鳥の筈だが・・・」
ディートハルトの当然の疑問に、タリアが口を挟んだ。
「ライシェル指令官補佐は、魔笛でどんな獣でさえ操ることができる魔力を持っておられるのです」
そう言った直後、「いや」と、ライシェルがそれを否定した。
「俺ではない」
ぎょっとして、他の騎士もライシェルを振り返った。
魔笛使いのライシェルが手懐けたのでなければ、一体どうやってこんな強暴で頭の悪い鳥の背に乗るなどできたのか、と黒の騎士達は一斉に顔を見合わせた。
「俺は、一時的に笛の音で大人しくさせることはできても、この鳥だけはどうしても手懐けることができない。だが、陛下は違った。このゾーンは、陛下にのみ従う陛下だけの僕だ。俺は何もしていない」
きょとんとした顔できょろきょろと他の騎士達の顔色を伺う朱音の姿は、なぜか年齢よりも幼くさえ見えてしまう。なのに、こんな少年王が、この巨大鳥を手懐けてしまうなど、その場にいた誰もに仰天させた。
「それでですね、わたしから提案なんですけど・・・、もしよかったら、“ノムラさん”の背中に乗っていきませんか？」
一瞬その場の空気が凍りついた。
“ノムラさん”は、朱音がつけたゾーンの名前である。
どうして“ノムラさん”なのかと言うと、この禿げ上がったゾーンの頭が、ご近所の野村さんにそっくりだったからである。全くもって失礼な話だが、きっと一生野村さんは自分がこんな鳥の名前の

モデルにされたことなどは知ることはないだろう。
空中でしきりに“ノムラさん”とゾーンに向かって呼び続けている朱音に、ライシェルも実を言うと少し気にはなっていた。しかし、朱音は「野村さんによく似てるから」とだけしか答えなかったので、敢えてそれ以上突っ込まないことにしたのだ。
「ノ・・・、ノムラさん??」
無言のままのフェルデンに代わり、アレクシが思わず聞き返した。
「あ、このおっきな鳥の名前です。ノムラさんて言います。因みにわたしがつけました」
自信満々に言う朱音を、皆ぽかんと見つめるばかりだった。
「で、そのノムラさんに乗るとは?」
突拍子もない提案に、フェルデンは聞き返した。
「えっと、実はこのノムラさん、こう見えてすっごくよく飛ぶんです。フェルデン殿下は早くヴィクトル陛下のところまで帰らないといけないでしょ? ノムラさんに乗れば、馬よりずっと早く着けるかな・・・って思ったんです。・・・って、ダメでしょうか?」
フェルンデンは少し考えた後、さっと馬から降り立った。
「いや、いい案だ」
アレクシががしりとフェルデンの手を掴んだ。
「フェルデン殿下、いいんですか? そんなに簡単に決めてしまって!」
そして小声でこう付け足した。
「ひょっとしたら、クロウ王の罠かもしれませんよ? ここは時間は掛かるかもしれませんが、確実な方法で向かうべきです」
ディートハルトがごほんと咳払いをして嗜めた。
「個人的な意見だが、わたしもクロウ陛下の提案は良案と思うが。先に殿下が到着すれば、その分勝算も上がる。
賛成の言葉が、嘗ての剣の師のものであったこともあったが、なぜか、フェルデンはこの少年王がここに来てサンタシを裏切るようなことはしないという確信があった。

いや、完全に裏切りへの不安を払拭しきれた訳ではなかったが、今は、フェルデン自身、このクロウという少年王が一体何者なのかという謎の手掛かりを得たかったのかもしれない。

フェルデンは、構えていた剣を鞘におさめると、馬の背から飛び降り、獰猛な巨大鳥ゾーンの背に跨った。

他の騎士達は目を丸くして驚いていたが、朱音はくるりと向き直ると、にこりと微笑んだ。そして、その笑顔はあまりに儚く、美しすぎるものであった。

「クロウ陛下」

朱音にはライシェルが言いたいことはわかっていた。しかし、いくらこの鳥でも、大の男二人と少年王の重量を背負うとなると、かなりの体力を消耗する上に速度が落ちてしまうだろう。

「大丈夫、きっとヘロルドを止めてみせます。だけどきっと皆さんの力が必要になると思います。わたし達は白亜城に先に行って待っていますから」

絶大なる魔力を持つ魔王ルシファーの息子クロウ。

それなのに、どうしてか彼らにはそんな少年王が最後に残す言葉のように思えて仕方が無かった。それはまるで、戦場へ死にに向かう者のように・・・。

「どうか、ご無事で・・・」

そう呟き、ライシェルは僅かに感じる湿気った空気に一抹の不安を抱いた。

（一雨くる・・・）

彼の予報が当たらなかったことは嘗て一度もない。

王都中が分厚い灰の雲に覆われ、どんよりとしていた。そのせいで、視界もひどく悪い。時折ぽつりぽつりと頬にあたる水滴は、雨の前兆だ。

「この積荷はなんだ」
城門番が、馬車の積荷を指差して訊ねた。
「これは、国王様お達しで国中の腕のいい鍛冶職人から買い占めた武器でございます。」
城門番の男は、ふむと考えながら、ちらりと馬車にかけられた布をめくりあげた。
「なんだ、箱ばかりじゃないか」
武器商人は言った。
「ええ、なんせあちこちから取り寄せたものばかりですので、場所ごとに箱が違っているんです。ほら、ここに製造場所と、職人の名前が焼き付けられているでしょう？　こっちはハンセン、それでこっちはミドルという職人の手によるものです」
見ると、確かにしっかりとした木箱の側面に、地名人物名が見受けられる。箱の大きさはまちまちで、大きいものや、中くらいのもの、小さいものまでさまざまである。
「ちょっと中身を確認させてもらうぞ」
城内に持ち込まれる物ということもあり、城門番は慎重になっている。
「ええ、構いませんとも」
武器商人がそう言うので、城門番はいそいそと馬車の積荷置きへと乗り込んだ。
その途端、馬車にかけられている布でさっと蓋をされ、中に暗闇が訪れた。暗闇にまだ目が慣れていない城門番は、慌ててきょろきょろと周囲を見回すが、何も見えない。
「おい、武器商人！　暗くてよく見えん！　布をあげろ」
そういうが、武器商人は押し黙ったまま何も返事をしない。
何かがおかしいと気付いたときには、暗闇の中でぎいと箱の蓋が次々に開き、そして城門番はいつの間にか周囲を囲まれていた。
ぐいと羽交い絞めにされ、
「な、何をするっ！・・・ぐ・・・」

そのまま手際良く首を刃物で掻っ切られていた。

なかなか出て来ない城門番に、何らかの異変を感じ、門の近くで待機していた近衛兵二人が首を傾げながら馬車に近付いていく。

「えらく時間が掛かっているようだが、城門番はどうした？」

馬車の前で顔を見合わせて不審がっている近衛兵に、

「いいえ、何でもございませんよ」

と、武器商人はにこやかに返答したが、近衛兵達はその直後、瞬時に顔色を変えた。馬車の積荷置きの中から、どす黒い血がたらたらと伝い落ちていたのだ。

「こ、これはどういうことだ・・・！？」

近衛兵達が行動するよりも先に、中から数人の覆面の男達が勢いよく飛び出し、手際よく近衛兵をとっ捕まえると、ひょいと積荷置きの中に引き摺り込んだ。

声を出す暇もなく、彼らは城門番同様に喉元を掻っ切られ、いとも簡単に絶命した。

何事もなかったかのように、馬車は再び動き始める。城門を潜り、白亜城内の敷地へと・・・。

しかし、この事態に誰も気付くことはできなかった。

城の上からの見張りも、この視界の悪さにほんの先しか見通せない程だった。

それに城内は、確かに人手が足りておらず、常時よりもはるかに少ない兵達が警備にあたっていたというせいもある。

だが彼らは決して怠慢などでは無かった。ヴィクトル王の命を受け、ましてやいつもより念入りな警備体制を敷ていた程だ。

更に悪いことに、まさか城門番や見張りの近衛兵達も交代時間まではまだ幾らか時間があった。その為、彼らの姿が無いことさえ気付かなかった。

皮肉なことに、白亜城に歓迎できない輩が入り込んだことにいち

早く気付いたのは、魔王の側近であり、今はゴーディアの罪人アザエルその人であった。
「魔族の気配を感じる」
主の命令通り、ヴィクトル王の傍から離れようとしないアザエルは何の表情も浮かべないままぽつりと溢した。
「何？」
ヴィクトル王が聞き返そうとした瞬間、城内で悲鳴が響き渡った。
まるで図ったかのように、雷鳴を轟かせ、突然窓の外が豪雨に見舞われる。バチンバチンと窓や屋根を叩きつける雨音は、その激しさを物語っていた。
「そのままの意味だ」
冷たい碧い瞳がじっとヴィクトル王を見つめた。
外に青白い閃光が走り、遅れて轟音が鳴り響いた。薄暗い王室の中を、雷光が点滅する明かりのように二人を不気味に照らし出す。
王室の窓からは、既に流れ落ちる雨水により外界の様子は全くといっていい程遮断されていた。
王室の扉が開かれ、真っ青になった侍女が飛び込んで来た。
「陛下・・・！　すぐにここからお逃げ下さい！！」
本来ならば、こうして許可もなく王室に入るなどは無礼極まりない愚行であったが、それをも短縮せざるを得ない程、今の状況が切羽詰っていることが見て取れた。
「エメ、一体我が城に何が起こっておる！？」
ヴィクトル王はがたりと椅子から立ち上がると、血相を変えた侍女に問うた。
「陛下、一体どうやったのかはわかりませんが、城内にゴーディア兵が入り込み、城内の兵や侍女を次々に切り捨てています・・・！きっとここへも直ぐ・・・」
雨音と雷鳴に掻き消されながらも、城内で悲鳴が響き続けている。
「まさか・・・、一体どうやって・・・」
フェルデンから連絡を受けてからは、より一層の警戒はしてきた

つもりなのに、それはいとも簡単に打ち崩されてしまった。
落城すれば、サンタシは魔族の手に渡ることになり、サンタシの民は魔族の手により不当の扱いを受けることは目に見えていた。
（やはり、クロウ王の裏切りなのか・・・！？）
ちらと碧髪碧眼の男に視線やると、男はふっと冷笑を浮かべ言い放った。
「クロウ陛下をお疑い・・・か」
ヴィクトル王は悔やんでいた。やはり、あの時少年王を信じディアーゼに向かわせたことは間違いだったのかもしれない、と。そして、もしそうであれば、今頃実の弟とその師の命はもう失われていることだろう、と。
「目論見通りか？　アザエルよ。わたしをここで殺すか？」
無言のままアザエルはヴィクトル王に近付き、小さく呟いた。
「見縊らないでいただきたい。我主はこのような下衆な真似はしない。愚王よ、まだ気付かないのか・・・？　クロウ陛下がその気になれば、このような国ごとき、一瞬で消滅させてしまえるということを」
エメは、背筋に走ったゾクリとした感覚で肩を震わせ、碧髪の美しい男に恐怖心を抱いた。
「では、なぜそなたはここでわたしを殺そうとしない」
ヴィクトル王は重い口を開いた。
「愚問だな・・・。クロウ陛下はわたしに、“戻るまでヴィクトル王を守れ”と命じられた。ただそれだけのこと」
アザエルからは微塵の殺気も感じられないことを悟ったヴィクトル王は、ふいと視線を逸らすと静かに椅子に腰を下ろした。
「信じた訳では無い。しかし、最後に賭けてみよう。そなたがそうまでして忠誠をつくす、クロウ王に。彼が再びこの城へ、我弟フェルデンを連れ帰り戻るということにな」
ヴィクトル王の切り札はすでに尽きていた。しかし、“クロウ王”というジョーカーがどう化けるかというところに、最後の願いを

託す他は無さそうだ。
「陛下、早くお逃げにならなければ、大変なことになります・・・！」
エメの訴えにも関わらず、ヴィクトル王は羽ぺんを手にとり、
「いや・・・。わたしは逃げはしない」
と、そう口にした。
「な、なぜでございますか・・・！？」
エメはヴィクトル王のデスクの前まで駆け寄った。
ヴィクトル王はひらりと羊皮紙を一枚引き寄せると、さらさらとそこへペン先を走らせ始めた。
「民を見捨てて我が身可愛さだけに逃げることはできぬ。それが、わたしに課せられた国王としての務めだ」
尚綴り続けるペンに、何度もインクを付け足しながら、ヴィクトル王は言った。
「でも、陛下。陛下がゴーディアの手に落ちてしまえば、サンタシはそれこそもうお終いです・・・！　どうか、どうか、お考え直し下さい・・・！」
エメは目に涙を浮かべながら懇願していた。
エメ自身、この王がサンタシの民にとってどんなに良い王だったのかをよく知っていた。彼女自身、身分の低い家から能力を買われて城へと召し抱えられたのだ。そして、それは他の国ではどんなに難しいことなのかもよく分かっていた。彼は、身分差さえ廃絶してしまえる、そんな偉大な王だったのだ。
そして、それはあのユリウスでさえ例外ではなかった。農家出身で、ただの馬番だった彼の能力と可能性に目を付け、弟と同じ師の下で剣術を学ばせ、そして騎士へと昇格させたのもこの王であった。
「何もみすみす魔族にやられてやろうという訳ではない。わたしとて、少しぐらいは剣の嗜みはある。わたしは諦めの悪い男でな、最後の最後まで立ち向かってみせる」
そう言うと、ヴィクトル王は立ち上がると、重いデスクをぎいと

引きずり押した。
ふわふわの絨毯を巻き上げるようにして捲ると、そのその下から隠し扉が現れた。
「陛下、これは一体・・・？」
ヴィクトル王は左の人差し指に嵌めこんでいた指輪を隠し扉の鍵穴に宛がうと、ゆっくりとそれを押し込んだ。
すると、中でかちゃりという解錠した音が小さく響く。
「ここは、王族のみが知る隠し通路だ。王都の外れにある教会へと一本道で続いている」
扉は錆びた鉄の音をさせながら、少しずつヴィクトル王の手により開かれた。
薄暗い階段が扉の下に続いている。
そして、王はその階段の脇に置かれた小箱に手を伸ばした。埃を被った薄汚い木でできたその箱の埃を吹き払うと、そっと大事にその中身を取り出した。
「代々国王にのみ伝えられる国璽（こくじ）だ」
紅い上等な布に包まれたそれを開くと、美しく彫刻を施された印が姿を露になった。
金のその印は、確かに国の象徴であり、王家の紋章でもあるリリーの華が彫刻されていた。
ヴィクトル王は、デスクに広げたままの羊皮紙に、取り出した国璽に朱印をつけ、しっかりと押印した。
「エメ。わたしの代わりにこの文を持ち、必ずフェルデンに届けよ」
くるくると羊皮紙を端から丸めると、きゅっと紐で縛る。そして布に包んだ国璽を添えて、エメに手渡した。
「そんなっ！　陛下が直接殿下にお渡しになるべきです！」
ふるふると首を横に振り、エメは涙しながら訴えた。
彼自身、もう後が無いことはよくわかっていた。そして、すぐに帰還すると文を寄越したフェルデンや騎士団達が、この時点で白亜城に辿り着くことなどできないはしないということも・・・。

「陛下！」
そう言ったエメを、半分無理矢理押し込むような形で、ヴィクトル王はランプとともに隠し通路へと追いやった。
相変わらずアザエルはと言えば、柱にもたれ掛かったままぴくりとも動こうとはしない。あくまでクロウの命令通り、ヴィクトル王に命の危険が迫らない限りは一切の手出しをしないつもりらしい。
バタリと未だ懸命に訴え続けるエメを無視し隠し扉を閉じると、何事も無かったかのように絨毯とデスクを手際よく元の位置へと戻した。
城内の悲鳴と叫び声は未だ響き続けている。恐らくは城内は悲惨な状況になっていることだろう。
そして、この王室にゴーディア兵が辿り着くのも、ほぼ時間の問題と言えた。
（フェルデン、この状況を招いた馬鹿な兄を許せ・・・。そして、この国を・・・、サンタシを頼んだぞ・・・！）

豪雨の中、ゾーンは朱音に従い、荒れ狂う空の上を左右に揺さぶられながらもひたすらに進み続けていた。
速度のある分、ぶつかる雨粒が石のように痛い。青白い雷の閃光は、すぐ近くでぴしゃりと眩い光を放ち、恐ろしい威力で地へと落下していく。視界はゼロ。一寸先さえ何も見えはしない。
ここで手を滑らせて落ちてしまえば最後、いくらクロウの肉体とはいえ、朱音には生きていられる自信はない。
朱音はゾーンの背にしがみ付くような形で、懸命に堪えていた。そのすぐ背に、フェルデンの身体が密着している。そのことに、朱音はフェルデンが不快に感じてやしないかと心配になっていた。
「クロウ・・・。お前は俺を憎いとは思わないのか？」
雨音の中、フェルデンが突如として口を開いた。ゾーンに乗ってからというもの、一度も言葉を交わすことなどなかったというのに。
「思いませんよ・・・？」

どうしてそんなことを訊ねられたのか、朱音には全く理解できなかった。
「なぜ、こうまでして俺に手を貸そうとする？　俺は一度、お前を殺しかけたんだぞ」
朱音は、“だって、わたしは朱音だから”と、喉元まで出掛かった言葉をなんとか押し止め、飲み込んだ。
黙ったままの相手に、フェルデンは更に疑問をぶつけた。
「それに、お前は・・・、お前は一体何者なんだ・・・？　本当に、魔王ルシファーの息子なのか・・・？」
その言葉に、朱音はびくりと身体を反応させた。
（フェルデンは・・・、何か勘付いてる・・・！）
ふと真下にきらりと光るものが見えた。教会の鐘だ。
「あれは・・・」
朱音がそう呟いた直後、フェルデンははっきりとこう口にした。
「サンタシの王都のはずれ、レイシアス教会だ」
この“レイシアス”という言葉に、朱音は確かに聞き覚えがあった。レイシアはこの世界の名前であり、それと似通っていることもあったが、すぐに頭を過ぎったのは、鏡の洞窟で元の世界に戻る寸前にフェルデンに「ラ・レイシアス」という言葉を耳元で囁かれたことであった。
「レイシアス・・・？」
フェルデンは何の気無しに答えた。
「ああ。レイシアスとは、すなわち“創造主”。サンタシの民が唯一信仰する神だ。そして、この世界の名前の由来にもなった。これは有名な話だろう」
そんな当たり前のことを聞き返す朱音に不可解な顔をして、フェルデンは小首を傾げた。
「まさかとは思ったが、こんなに早く王都まで戻って来れたとはな・・・」
それよりも、今は思っていた以上に早く帰還できたことにフェル

デンは興奮していた。
「それじゃあ、“ラ・レイシアス”って・・・？」
既に気が逸っているフェルデンはその質問の意図に全く気付くことなく、単純に答えた。

「レイシアスの別の意味は、“愛する人”。ラは、“たった一人の”を意味する。クロウ、そんなこと聞いてどうするつもりだ？」
朱音は、驚きと、心に受けたあまりの衝撃で、放心してしまっていた。
まさか、あの時、フェルデンも朱音と同じ気持ちでいてくれていたなどと、夢にも思わなかったのである。

11話　番外の手札

「何か様子が変だ」
フェルデンが視界がほとんどきかない空中から、王都の異変を感じ取った。
サンタシでは滅多に見られないこの豪雨に、王都中の民が皆家にすっ込んでしまっているということも考えられたが、それにしてもやけに静かすぎる。
日が落ちてしまったこの時間ならば、家の中で灯る光や街明かりが少しはちらついてもいい筈なのに、その光さえ一切伺えない。
強い雨音と雷鳴のみが木霊し、あまりに不気味であった。
ゾーンが、すぐ近くを横切った雷に驚き、
『びゃあ』
と、一声鳴くと、バタバタと翼を大きく羽ばたかせた。
「うわっ、ノムラさん！　落ち着いて！」
朱音は懸命に巨大鳥を宥めつかせようと首のあたりを撫でるが、パニックを起こしたゾーンにそれはあまり効き目が無かったようだ。
「教会の傍で一度休ませよう」
フェルデンの提案通り、朱音はなんとかゾーンを教会の真裏に降り立たさせると、僅かな軒下で一休みさせることにした。
「ノムラさん、休み無しで飛ばせてしまったもんね、ごめんね」
すっかり意気消沈してしまったゾーンのがさがさとした毛羽だった羽毛を、朱音は撫でてやった。その横顔は、漆黒の闇のような髪に、透けるような真っ白い肌が雨に濡らされて、異様な艶っぽさを放っていた。
フェルデンは、今ここにいる少年王に戸惑っていた。朱音の身代わりに覚醒した魔族の王であり、憎き魔王ルシファーの息子である筈の彼に、なぜか、もう憎しみという感情をぶつけることができな

いことに気付いていた。
ここにいる少年の王の心は、真っ白で、あまりに穢れないもののように映った。
こんなにも醜い嫌われものの巨大鳥でさえ、現に彼は恐れることなく、慈しみ、その愛を惜しみなく与えている。
そして、心のどこかで、フェルデンは気付き始めていたのかもしれない。この少年王のそうしたところが、あの、愛しい少女に、あまりに似ていることに・・・。
「あ、誰か出てきた・・・！」
朱音は小声で叫んだ。
はっとしてフェルデンは咄嗟に少年王の身体を壁にぐいと押しやり、「しっ」と黙するように口に人差し指を立てた。
敵かもしれない者の前に、無闇に姿を現すような無謀な真似は控えたいところだった。
なるたけ息を殺し、そっと壁伝いに表の扉を覗き込むと、ひどく混乱した様子で教会の外に出ようか出まいかき決め兼ねている人物の姿がそこにあった。
「エメ！」
フェルデンは、周囲をよく見回し、他に気配が無いことを確認してから素早く彼女の腕をぐいと掴んだ。後ろ手には朱音の手首を掴み、そのまま教会の扉の中へと身体を滑り込ませた。
「フェルデン殿下！　御無事だったのですね・・・！」
エプロンを風呂敷のように巻きつけ、エメは大切そうに何かを抱きかかえていた。
朱音は、もう二度と会えることはないだろうと思っていた、大好きな侍女との思わぬ再会に、思わず涙して駆け寄ろうとする自らの心をぐっと抑えていた。
朱音は身の程を知っていた。今は、以前の朱音ではないということを。
教会内は、薄暗く、蝋燭の火だけが揺らめきながら静かに中を照

らしていた。
　扉の真正面には、月の女神アルテミス、太陽神アポロン、大地の女神ガイア、天空の神ウラノス、この四神が輪になって祈りを捧げる絵画が大きく描かれている。
　しかし、その中心には何も描かれてはいない。
　ぽっかりと開いた真白い空間は、創造主が描かれるべき場所だ。
　しかし、この国では偶像崇拝は忌み嫌われる存在であった為、敢えてそこには何も描かれなかったのだろう。
　雨音さえも遮断し、暖かい聖なる光に包まれるような懐かしい不思議な感覚に、朱音はなぜか胸の奥が痛んだ。これはきっと、父である創造主を裏切り、大罪を犯して天上界を永久に追放されたルシファーの罪の痛みだった。
「エメ、一体王都はどうなっている!?　どうして君がこんなところに?」
　エメは簡潔に、尚且つ順序立てて成り行きをフェルデンに説明した。

　朱音はヘロルドの人の命をものともしない、あまりの暴挙に激怒した。
　エメは、あの平和で美しかった白亜城が地獄と化した、凄まじい光景をその目にしてきたのだ。
　彼女がこうして無傷で城を脱出できたことは、まさに奇跡としか言いようが無かった。
「今頃、城内で働く者のほとんどの者の命が奪われていることでしょう・・・！　ゴーディア兵は、武器を持たない侍女や付き人でさえ、ごみの様に切り捨てていきました・・・」
　目いっぱいに涙を浮かべ、震える声でエメが語った。
「わたしは、陛下にこれをフェルデン殿下に代わりに渡すよう申し付かったのです」
　ヴィクトル王が逃げることをせず王室に残ったこと、そして、自

分が隠し通路を使ってこの教会まで辿り着いたことを話すと、エメは抱えていたものをフェルデンに差し出した。

「何!?　兄上が城に残っただと!?」

取り乱した様子で、フェルデンは受け取った紅い上等の布の包みを開けた。

「これは・・・、国璽・・・？」

代々国王のみが持つことを許される筈の印が、王子である自らの手に渡ったことに戸惑い、フェルデンはもう一方の羊皮紙の紐を慌てて解いた。

インクの滲み具合から、相当焦って書いた物だということが見て取れた。

しかし、綴られた文字は、確かに兄であるヴィクトル王のものであった。

『この文が、我弟フェルデン・フォン・ヴォルティーユの元に無事に辿り着くことを、切に願う。

フェル、わたしはまんまとゴーディアに嵌められてしまったらしい。この過ちのせいで、多くの人の命が失われてしまった。そしてこの白亜城も、もういくらも持たないだろう。わたしの命運もここまでのようだ。

しかし、わたしはここで国とともに滅びる覚悟はできている。

もしこの文を読んでいるとすれば、恐らくは今、白亜城を目指していることだろう。だが、もうお前の手に国王の印が渡ったのならば、もうこの城へ戻る理由も無い。

城へは戻らず、生き残った騎士達を連れてどこかに身を隠すのだ。お前だけは生き残り、そしていつの日か、再びこのサンタシを再建してくれ。

今このときを持って、わたしヴィクトル・フォン・ヴォルティーユは、国王の座を退き、全権を実弟フェルデン・フォン・ヴォルティーユに委譲する。

～ヴィクトル・フォン・ヴォルテ
ィーユ～

追伸：この文をお前が受け取ったということは、クロウ王がわたしとの約束を守り、お前をディアーゼから連れ戻したということになるな。フェル、お前の口から彼に、“すまなかった”と伝えておいて欲しい。そして、その身はもはや自由の身だとも・・・。』

「兄上・・・！　なぜだ！」

羊皮紙がフェルデンの手を離れ。ひらりと教会の床面に舞い落ちた。

「フェルデン殿下、一体なんて書いてあったんですか？」

絶望した様子のフェルデンに、朱音は恐る恐る声を掛けた。

書かれた内容が、きっと良いものではないことくらい、朱音にもよくわかっていた。

「・・・城へは戻るなと・・・！　兄上や国を見捨てて身を隠せと・・・！」

いけないとはわかってはいても、朱音はフェルデンに宛てて書かれた文を拾い上げ、目を通さずにはいられなかった。フェルデン自身、その行為を黙認したのだ。

エメは不安そうな表情を浮かべながら、見覚えの無い美しい少年と、サンタシの王子を見守っていた。

（これじゃあ、まるで遺書じゃない・・・）

朱音はフェルデンが取り乱したのも無理はないと思った。

城まであともう少しのところまで来ているというのに、兄や苦しむ人々を見て見ぬ振りをするなど、優しく正義感の強い青年フェルデンには、きっと身を切るよりも辛いことだろう。

「エメ、他に何か情報を教えてくれないか？」

こくりと頷くと、エメは持ちえる情報を全て託そうとした。

「隠し通路は、恐らくまだゴーディア兵には勘付かれてはいません。それから・・・、壁を隔てて聞いてしまったことなのですが、先に城内に入り込んだゴーディア兵が城を占拠、それと同時に王都を取り囲んでいた仲間を集めると言っていました。」

フェルデンはふっと目を伏せ、黙り込んだ。

一足遅かったのかもしれない、フェルデンも朱音も思わず唇を噛み締めずにはいられなかった。

「エメ、あなたは今すぐにでも安全な場所まで逃げて。そうだ、あなたの故郷の、ええと、そうだ、ロージ村へ向かって。そこならきっと、まだゴーディア兵の手も及んでいないだろうから・・・」

「は、はい・・・！」

エメは見ず知らずの少年が、どうして自分の名前や故郷を知っているのかということにとても驚いたが、聞き返すことは決してしなかった。

「クロウ、俺はやはり兄上とサンタシの民を見捨てることなどできない。たとえこの地で滅びようとも、俺は、サンタシ騎士団の騎士らしく、最後まで戦うつもりだ！」

フェルデンの強い言葉に、朱音もぐっと拳を握り締め、首肯した。

「わたしも、貴方とともに戦います。ゴーディアの王として、わたしもヘロルドの暴挙を止めるつもりです」

城に残してきたアザエルが気にかかったが、魔王の片腕と呼ばれた彼が、そう簡単にくたばるとは朱音も考えてはいなかった。

「きっと、まだ間に合いますよ、ヴィクトル陛下は必ず生きてます。アザエルがヴィクトル陛下をきっとお守りしている筈ですから・・・！」

フェルデンは黒曜石の大きな瞳を見つめた。どこまでも澄み、なんて哀しく美しい闇。

このとき、フェルデンは初めて、少年王が自らの側近を兄であるヴィクトル王につけていた事実を知ったのであった。

彼女が今、城内のどのあたりの通路を行っているのかは不明だったが、何にしろ、まだ隠し通路の存在がゴーディア兵に知られていないことだけは確かだった。

王室の扉を蹴破ってゴーディア兵がやって来たのは、エメを行かせてからほんの数分後のことである。

「サンタシ国の国王、ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユ陛下とお見受けする」

ゴーディア兵が強い口調で言った。

「如何にも・・・。わたしがこの国の国王、ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユだが」

ヴィクトル王は、すっと椅子から立ち上がると、入ってきたゴーディア兵に静かに見つめた。

「この城と城下は、ゴーディア国最高司令官ヘロルド閣下の名の下に、我軍が占拠させていただいた。今、城門を開き、全軍を城へ集結させているところだ。無駄な抵抗はせず、大人しくついてきてもらおうか」

雨音のせいで、気付かなかったが、たしかに堅く閉じていた城門が、全開し、ぞくぞくとゴーディア兵が進軍してきている様子が窓から伺える。

「王都の民はどうした？　まさか、手出しはしておらぬだろうな」

ゴーディア兵が口を開きかけたそのとき、彼の背後から別の人物が現れ、話を遮った。

「もうよいわ、下がれ下がれ」

「へ、ヘロルド閣下！　ご到着でしたか・・・！」

ゴーディア兵は深く頭を下げたまま、すっと身を脇へと引っ込めた。

「ヴィクトル国王陛下、お初にお目にかかりますかな。わたしはゴーディアの現、最高司令官ヘロルド・ケルフェンシュタイナーと申

します」
　ひょろりとしたひどく姿勢の悪い男は、落ち窪んだ目をぎょろりとヴィクトル王に向け、大きな口を不気味に引き上げた。彼は後方に、ぞろぞろとゴーディア兵を引き連れていた。
「なるほど、そなたがゴーディアの新しい最高司令官か。では率直に訊かせて貰おう。そなたはゴーディアの新国王クロウ陛下の側近ということか？」
　ヘロルドは、魔女のように尖った鉤鼻の上に、気色の悪い皺を寄せて不気味な笑みを浮かべる。
「まあ、そうとも言えるでしょうな」
　逃げ場のない所に追い詰められたヴィクトル王だったが、全く怖気づいた様子など微塵も感じさせず、更にヘロルドに質問を浴びせた。
「それなら話は早い。なぜ、そなたの主は停戦条約をいとも簡単に破り捨てたのだ。無抵抗な我国の商戦を砲撃し、無抵抗な乗組員を見せしめに斬首した？　側近のそなたならばその理由を知っている筈だろう。このような非人道的な行い、許される筈がない！」
　ヘロルドはヴィクトル王の言葉を小うるさそうに、左手の小指を耳の穴に突っ込み、その骨ばって曲がった指をくりくりとまわして見せた。
「さてな、知りませぬなぁ。あの我儘国王の考えることなど、側近であれ何であれ、誰も理解などできぬのです。しかしそれに抗うことなどできないのですよ。なんと言っても、クロウ陛下は恐ろしい魔力をお持ちだ。命令に刃向かえば我々の命はありませぬので」
　まるで、自分は望まない戦を、クロウの命令で仕方なくさせられているようなヘロルドの物言いに、察しのいいヴィクトル王はぴんときた。
　クロウ王の側近どころか、この男は、クロウの立場を利用し、彼を悪者に仕立て上げることで王座を狙っている反逆者であるということを。

やはり、クロウ王がヴィクトル王に話したことは全て真実であった。

今更、ヴィクトル王は疑り深い自らの性質に反省した。

（ふ・・・、いつからだろうな、こんなに疑り深くなったのは。あれは・・・、きっとジゼルが魔族に殺された後からか・・・）

そして、こうも思った。もっとクロウ王の話を信じてやっていれば、何か対策を講じられたかもしれない、と。

「ヘロルド閣下、最後に一つだけ質問させて貰う。そなたの言う、我儘国王クロウ陛下は、今どこにおられる？」

それは、あまりに際どい問いであった。

ヴィクトル王は、鋭い切り口でヘロルドに鎌を掛けたのだ。

「一体何を・・・？　クロウ陛下がここにおられないということは、ゴーディアの魔城におられるに決まっておるでしょう」

ヘロルドの顔色がさっと変化したことに、ヴィクトル王は気付いた。

「そうか。一度も魔城を出られてはいないのか？」

ここで一気に畳み掛ける。

「クロウ陛下は覚醒後から今まで、一歩たりとも魔城の外へは出られておりませんな。陛下のお姿は、常人が目にすれば視力を失うとも言われております故」

まだ白を切るヘロルドに、ヴィクトル王は止めの言葉を突きつけた。

「ほう。それではどうも辻褄が合わなくなる。実を言うと、この城にクロウ陛下が訪ねて来られたのだ。そしてわたしに力を貸して欲しいと申し出た。“しばらく城を空けている間に、何者かに成り代わられた”と。そして、“その男を止めなければならない”と」

王室に集結していたゴーディア兵達が、ひそひそと近くの者と話始めた。

ヘロルドは、顔を真っ赤にして叫んだ。

「この？吐き愚王めが！！　そのような嘘八百で我軍の動揺を誘お

うなどと、なんと愚かな！」
興奮するヘロルドとは対照的に、ヴィクトル王はひどく落ち着いた口調でこうも付け加えた。
「嘘などではない。現に、クロウ陛下は我弟フェルデン・フォン・ヴォルティーユと共に、今まだこのサンタシ国内におるのだから」
堪らずに、ヘロルドは近くにいた兵士達に命を下した。
「この愚王の息の根を、今ここで絶つのだ！！」
戸惑いながらも、上官の命に背くことの許されない兵士は剣を抜きヴィクトル王へと向けた。
その瞬間、さっと碧くたなびく髪がヴィクトル王の前に舞い降りた。
「ア・・・、アザエル閣下・・・！」
剣を構えていた兵士達は狼狽し、その美しくも冷たい嘗ての上官から視線を逸らすことができなかった。
「ま、まだ生きていたのか！　なんてしぶとい男だ！」
ヘロルドは明らかに背中に冷たい汗を掻いていた。
この男だけはできるならば敵にはしたくなかった。
（ちぃっ、ボリスめ！　あの能無しめ！　アザエルは死んだと言っていたのに、この通りぴんぴんしているではないか！　くそっ、予定が随分狂ってきた・・・！）
「しっかりしろ、お前達！　よく見ろ。こいつは嘗ての魔王陛下の側近ではない！　今や、只の罪人アザエルだ」
ヘロルドの言葉に、ゴーディア兵達は生唾をごくりと飲み込んだ。いくら今は違うとは言え、やはり魔王ルシファーの側近だったことには変わりはない。
「ア、アザエル閣下・・・、そこをどいてください」
冷たく碧い目で兵士達を見やると、アザエルは言った。
「お前たちは一体誰に仕えている。その後ろにいる小汚い男か？それともクロウ陛下か？」
アザエルの圧倒的な威圧感に、兵士達はぶるりと身震いする。

「ク、クロウ国王陛下です、閣下・・・！」
もう上官ではないというのに、兵士達は無意識にそう答えていた。
「な、何をしておる！　もう奴は貴様らの上官などではない！　まとめて切り殺すのだ！！」
その声ではっと我に返った兵士達は、震える手で剣の柄を握り締めると、一斉にアザエルに切り掛かっていった。
「愚かな・・・」
アザエルの手には、水を圧縮してつくり上げた剣が瞬時に現れた。
今宵は、アザエルの水の魔力が一層強まる豪雨だ。
流れるような動きで、アザエルは水の剣を振るった。
「な、何故だ！？　確か、元老院どもが魔力を封じる手枷を嵌めた筈っ・・・！」
ぼとりと切断された兵士の腕が足元に転がり、ヘロルドは真っ青になってひっと声を上げた。
どうゆう訳か、封じられている筈のアザエルの魔力は全開で、情け容赦のない攻撃はゴーディア兵達の恐怖心を呼び起こした。
「当てが外れて残念ですね、ヘロルド閣下」
冷笑を浮かべ、アザエルは一歩、また一歩とヘロルドに歩み寄って行く。
「ええい、寄るな！　こ、この反逆者めが！」
ヘロルドは蛇に睨まれた蛙のようにじりじりと後退していく。
足元には、身体の各部位がバラバラに切断された元兵士の肉塊と血溜まりができている。
「その言葉、そっくりそのまま貴殿にお返ししよう」
凍りつくような碧い目に見据えられ、ヘロルドは額から嫌な汗が噴き出すのを感じた。
「勘違いするな。わたしはこの愚王に仕えている訳ではない。全てはクロウ陛下の御意志だ」
城を占拠し、ヴィクトル王をここまで追い詰めたというのに、どういう訳かヘロルドは今、不利な状況に陥りかけていることに気付

いた。
（ど、どういう訳だ・・・！？　そうか、この男が現れたことが、全ての原因だ・・・！　どうする・・・！？　この状況を一体どうやって切り抜ければよい！？）
　切羽詰ったヘロルドの脳裏に、ふと意外な切り札が思い出された。サンタシへ向かう途中の、思いもしない拾い物・・・。
「おい、お前、あいつはどこへ行った！？」
　今、アザエルは鋭い水の剣の切っ先を、ヘロルドへと向けようとしていた。慌てて兵士を睨みつけるが、兵士はびくりと跳ね上がるだけで、すっかり金縛りにあったように固まってしまい、誰も答えようとはしない。
（くそっ、こんなところで殺されてたまるか！　この肝心なときに、あいつはどこへ行った！？）
　ヴィクトル王は、碧く美しい魔王の側近の感情を一切感じさせない冷淡な姿を目にし、自分達は長年の間、こんなにも恐ろしい相手を敵にしていたのかと、改めて感じていた。
「おいおっさん。何かやばそうだけど、もしかして俺を探してたり？」
　ふいにヴィクトルの後ろから快活な声がした。
　驚き振り向くと、燃え盛る炎のごとく赤い真紅の髪と緋色の瞳の青年が、ヴィクトル王の椅子に寛いだ様子で深く腰掛けている。まるで最初からそこに座っていたかのように、青年は足をゆったりと組み、肘掛けに褐色の肌を露出させた手を悠々と伸ばしている。
「その髪！　ファウストか・・・！　一体どうやって入った！？」
　王室に、新たな厄介者が一人、紛れ込んできたようだ。

１２話　王都炎上（前書き）

いただいた感想を励みに、更新しています（＾－＾　いつもありがとうございます☆

12話　王都炎上

今、美しき白亜の城で、至上最大の闘いが繰り広げられようとしていた。

アザエルは若きゴーディア王への忠誠の為に、
ヘロルドは、王座を手にする為に、
ファウストは、より強き力の為に、
そしてヴィクトル王は、サンタシの民の為に・・・。

そして、ヴィクトル王は、絶対絶命の危機に瀕していた。
ヘロルドは、もう目前まで迫った“王座”に目が眩み、盲目になっている。ヴィクトル王に、慣れない短剣を向け今まさに切りかかろうとしていた。
一方、ヴィクトル王の護衛役である魔王の側近アザエルは、いまや突如現れた新たな敵、ファウストに阻まれその役割を完全に邪魔されていた。
あまり剣の得意ではないヴィクトル王だったが、とりあえず護身用の短剣を懐から取り出し、汗ばむ手でヘロルドと対峙している。
「サンタシの王よ、もう諦めろ。この城はもうわたしの手の中だ、ふはははははっ」
落ち窪んだヘロルドの眼がぎらぎらと怪しく光る。口は笑っているが目は全く笑ってはいない。
「悪いが、サンタシの王族は、代々諦めが悪い。たとえ駄目とわかってはいても、そう簡単にはやられてやるまい」
ヴィクトルの額からは、緊張の汗がつうと一筋流れ落ちる。
「ただの人間の王に一体何ができるという？　死ね！　サンタシの

王よ！」

ヘロルドがびゅうと音を立てて乱暴に短剣を一振りしたが、それは敢え無くもヴィクトル王に難なくかわされてしまう。

それに腹を立てたのか、ヘロルドは更に乱暴にぶんぶんと短剣を振りたくった。

隙だらけの攻撃に、ヴィクトル王はなるたけ冷静に対処しようと頭を働かせる。今のヘロルドは冷静さを欠いている。それに、この未熟な攻撃ならば、どうにか反撃ができるかもしれない、と。

「くそっくそっくそっ！　ちょこまかと逃げ回りよって！」

いらいらが頂点に達したヘロルドは、無駄に振りたくったせいで、すっかり息が上がってしまった身体で、ヴィクトル王に向き直り、忌々しげに吐き捨てた。

「ゴーディアの兵どもよ、いい加減目を覚ますのだ。ここにいる男は、王座欲しさに国を乗っ取ろうとしている、謀反者だ！」

ヴィクトル王は王室の入り口に突っ立っている、ゴーディア兵達に訴え掛けた。彼らが単なる命令で動いているだけにすぎないのであれば、こちら側に取り込むことさえできれば、優位に立つことができる筈と思考したのだ。

ヴィクトル王の言葉に、「まさか」と言う顔で、兵達に少しばかりの迷いが生じ始める。

「お前達よ！　この愚かなる王の嘘に騙されるな！　この王は、このような惨めな嘘をついてまでも、尚自分だけは生き延びたいのだ。忘れたのか！　新国王クロウ陛下たってのご命令を！」

兵士達の心が揺さぶられる。

「耳を貸すな！　ゴーディアの兵士達よ、その偽指令官の言うことこそが嘘だ。

よく考えても見るがよい、いくら敵国の王といえど、クロウ陛下に報告もせずにその場で切り捨てようなどと、最高司令官の振る舞いではない！」

ヴィクトル王の訴えは、確かに的を得ている。

兵士達の心が大きく揺らいだ。
「で、では、ヘロルド閣下は・・・」
「お前達！　敵国の王を信用して上官のわたしを疑う気か！　いや、クロウ陛下までも疑っているも同じことだ。陛下は“憎きサンサシを倒し、我国に勝利をもたらせ”とお達しくださった！　お前たちはその命に背く反逆者か！」
“反逆者”という言葉にすっかり縮み上がってしまった兵士達は、もうヘロルドの思う壺であった。
「と、とんでもありません、ヘロルド閣下！　我々はクロウ陛下の命に従います」
ヴィクトル王は、あと少しのところで兵士を味方に取り付けることができなかったことに、落胆せずにはいられなかった。
しかし、ここで気を抜く訳にはいかない。兵士が完全にヘロルド側についてしまったことで、ますます状況は苦しくなった。
「そうと分かれば、この愚王を殺すのに手を貸すがよい！」
ヘロルドの歪んだ表情に気付いた者は、ヴィクトル王唯一人。
一斉に剣を構え、にじり寄ってくる兵の殺気に、ヴィクトルは短剣を握る手が汗ばむのを感じた。

「あんた、あの夜船ん中で殺したと思ってたが、やっぱ生きてたんだな」
魔力を封じられたままのアザエルを、背後から刺したことについて、まるで悪びれた様子を全く見せず、ファウストは笑った。
「そこをどけ、野蛮な賊めが」
アザエルは手を翳すと、いつもより数倍は威力があろう水針を間髪入れず無数に発射した。
しかしその攻撃は、ファウストが瞬時に作り出した炎の盾により、接触した瞬間に蒸発させられてしまう。
ファウストの能力の前に、アザエルの魔術が完全に無効化されてしまっていた。ファウストは、明らかに以前よりも遙かに強い魔力

を身に付けているようであった。
「ま、俺としては、魔力の封じられていないときのアンタと闘ってみたかったし？　儲けもんだけど」
「・・・どこでこれ程の魔力を得た」
変わらぬ表情のまま、アザエルは言った。その手には、新たに水を凝縮して作り上げた剣を出現させている。
ファウストはじっと愉快そうに目を細め、アザエルの間合いからひょいと後ろに飛び退いた。経験から、この男に下手に近付けば只では済まないと、直感で感じていたのだ。
「あれ、あんたの主人から聞いてない？　てっきり、もう知ってるもんだと思ってたんだけど」
ぽりぽりと人差し指で鼻頭を掻くと、もう一方の手にファウストはメラメラと燃える手の平サイズの玉を出現させ始める。
アザエルは次の攻撃にそなえて更に武器の硬度を上げさせていた。
「俺、あんたの主人にボロ負けして、瀕死の重傷を負ったんだよな。で、使いもんにならねえ身体を回復する為に、部下が身代わりになってくれたって訳」
それまで笑顔を浮かべていた赤髪の青年の顔から、一切の笑いが消えた。
「仲間を殺すことで魔力を吸収、増強したのか」
ふっと口元を歪ませると、アザエルは冷え切った言葉で付け加えた。
「まあ、手間が省けていい。どちらにしろ、近いうちにドラコはわたしの手で消滅させるつもりでいた」
ギッと今までに無く、緋色の鋭い眼つきでアザエルを突き上げるように睨み上げる。
その目は、野生の獣のようであった。
「確かに俺はアンタの言う通り仲間の命と引き換えに魔力を吸い、こうして力を得た。そして、今ならアンタとも互角に闘える」
ファウストは、手に炎の玉を渾身の力でアザエルに向けて投げつ

けた。
炎の玉は瞬きよりも速く宙を横切り、アザエルの顔面目掛けて飛ぶ。
『ジュッ』
アザエルは、硬度の増した水の剣で炎弾を切り裂こうと試みるが、瞬時に水の剣が蒸気へと姿を変えた。尚威力の落ちない炎弾を、アザエルは咄嗟に身を翻してなんとか避け切るが、掠ってもいないというのに、比較的距離が近かった衣服の一部が燃え上がった。
その後、対象を失った炎弾は、王室の窓ガラスを淵ごと突き破り、夜の闇の中に消えた。
あのアザエルが、今のファウストの力に僅かに押されていた。
まるきり慌てた様子を見せず、いつか朱音が魔城の上から飛び降りたときに出現させた水流と同じものを起こすと、アザエルは衣服を焦がす炎を鎮火させた。
「だがな、勘違いはすんな。仲間は俺に全てを託し、そして俺と同化する道を選んだ。俺の中には、仲間の強い思いと魔力が今も尚生き続けてる」
両の掌を、鉤(かぎ)のように丸めると、ファウストは炎弾の連続攻撃の為に構えた。
「尤もらしい言い訳ということか。所詮お前は仲間殺しの野蛮な賊。それ以上でもそれ以下でもない、自惚れるな」
ファウストの周囲の温度が急激に上がり始め、真っ赤な髪が燃え盛る炎のように揺らめく。その姿はまるで、火の中に潜む獣そのものだ。
瞬く間に、王室の室温は上昇し、中の者は額や背中に汗が噴き出すのを感じた。
ファウストは、手の平をアザエルに向けると、先程の炎弾よりも一回り大きなものを繰り出した。それを皮切りに、次々と同じものを放ち始める。それこそ、同時に五発ないしは六発を創り出し、アザエルに避ける隙さえも与えないつもりらしい。

集中砲火を浴びるアザエルは軽い身のこなしで宙を舞い、それらの攻撃をなんとかかわしていく。しかしこうも攻撃の間隔が狭いと、そう長く避け続けることは難しいことに気付いていた。

一方、避け続ける最中、アザエルは両の手に水針を放つ準備を密かに整え、時期を見計らっていた。

逸れた炎弾のほとんどは窓を突き破り、暗い王都の空へと消えていったが、何発かは王室内の石の柱や床面に激突し、その部分は簡単に砕け、抉り取ってしまっている。その威力は、頑丈な筈の城面さえも紙粘土のように脆く見せる程であった。

抉り取られたその場所は、炎弾が起こした衝撃と熱を発し、ぷすぷすと真っ白い煙を立ち上げていた。

時は一刻を争っていた。

二人は、再びゾーンの背に跨り、真っ暗い雲で覆われた空の中を進んでいた。

街外れのレイシアス教会でエメと別れた後、すぐさま二人は白亜城を目指し飛び立った。

そして、今、白亜城の城下、王都の頭上に来ている。真上まで来てみると、視界が利かない中でも街の様子がよく分かる。晴天であれば、さぞや美しい景色が臨めたことだろう。

「少し雨足が弱まったようだ・・・」

強かった雨はいつの間にか勢いを弱め、遠くの空からは僅かに月明かりと夜の群青色が見え隠れしている。この分だと、もう少しすれば雨は止んでくれるかもしれない。

ふと朱音がそういう考えを掠めた途端、二人を乗せたゾーンの横を、前から物凄い勢いで通過し落下していく“何か”を視界の端で捉えた。それは、二人を通り越した後に鈍い轟音を立てて民家の屋根に激突していった。

「な、なんだ・・・？」

白亜城に向けて飛び続けるゾーンの上で、思わず二人は後方を振り返った。

”何か”が落下した民家の屋根は、巨大な穴を空け、その縁は焼け焦げちりちりと燃え上がっている。

「今、お城の方から飛んで・・・」

朱音がそう口を開きかけた途端、今度ははっきりと前方から赤黒い塊がこちらを目掛けてやってくるのが見えた。

「まただ。今度はさっきのよりもでかい！」

『ビュウウウウウウウ』と唸り声を上げながら接近するその玉の軌跡には、巻き上げた黒っぽい煙がもくもくと残されている。

「まずい！　高度を下げさせろ！」

フェルデンの声で我に戻り、朱音はゾーンの禿げ上がった頭を強引に下方へ押し下げた。

急に頭を押し下げられたゾーンは驚いて『びゃっ』と耳障りな鳴き声を上げたが、お蔭で僅かに高度が下がった。

その瞬間、『ビュウウウウウウウ』と、凄まじい熱を放ちながらすぐ頭上を“何か”が通り過ぎる音がしたかと思うと、すぐさま近くの街路地に落下していった。

まさに危機一髪だった。

二人はそのままゾーンを旋回させ、落下した“何か”を上から見下ろした。

すると、深く地面に食い込み、未だ赤く黒く燻り続けている“何か”は、地を焦がし煙を巻き上げている。

朱音はぞっとした。もしあれが直撃していたら、二人と一羽は跡形もなく散ってしまっていただろう。いや、運が良ければ、身体のどこかが焦げた焼肉となって、僅かに残っていてくれるかもしれないが。

しかし、この“何か”に気付いたのは、朱音とフェルデンだけではなかった。今まで屋内に隠れるように引っ込んでいた王都の住民達が、只ならぬ音に不安を抱き、恐る恐る締め切ったカーテンや窓

から顔を覗かせ始めたのだ。
皆、街のほとんどの人達は、夜中に突然何処からか湧くように侵入してきたゴーディア兵に驚き、怯え、屋内に引っ込んでいたのだ。ゴーディア兵が街中を馬で駆け回る最中に、逃げ出す隙と術を持たなかったからである。
街路地に隣接する雑貨屋の主人なんかは家の扉から外の様子を見に出てきていた。
「一体、こりゃあ・・・」
呆然として店前に佇む主人だったが、すぐ様顔色を真っ青にして叫んだ。
「た、大変だ!!　皆、逃げろー!!!」
空を指差した主人の声を皮切りに、あちこちで風切り音が上がる。

『ピュウウウウ』『ピュウウウウウウ』「ピュウ』
『ゴゴゴゴ』『ビュウビュウ』

明らかに城の方から、恐ろしい数の“何か”が砲弾のように放たれ、そしてそれは次々に街のあちこちに落下していく。
「!!!!」
瞬時に街のあちこちで真っ黒い煙が上がり、家の中の物に引火してあれという間に燃え広がっていく。突然降り注いだ死の炎弾に、家から飛び出した人々がパニックを起こして逃げ惑い始めた。
「くそっ！　一体どういうことだ!!」
フェルデンはビュウビュウと唸り、王都に降り注ぐ炎の玉に為す術もなく、王都を飲み込んでいく炎を見つめていた。
それでも尚、降り止むことのないそれは、次々と美しい王都を破壊していく。
いつの間にか雨は完全に上がっていた。これほどの湿気をものともせず、燃え広がる炎弾の火力は通常では考えられない程であった。
朱音は震えていた。

目に映った惨劇。燃え盛る炎、巻き上げる煙。何もかもが、大切なあの灰の髪の少年を失ったときと類似していた。

「お前、震えて・・・？」

フェルデンは、腕の中の少年王が小刻みに震えていることに気付いた。

しかし、サンタシの誇り高き騎士は弱き存在を見捨てることはできはしなかった。

「きゃあああああああ！！！！」

すぐ真下で、小さな子どもを連れた若い母親が、迫り来る炎弾の餌食になろうとしていた。悲鳴をあげて咄嗟に子を守ろうと庇うようにうずくまる姿。

朱音が気付いたときには、フェルデンはゾーンの背から飛び降りていた。

「フェルデン！」

着弾の寸前、金の髪の騎士が親子の前に着地するのが見えた。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴ』

渦巻く煙にのまれ、すぐに親子と騎士の姿は確認できなくなってしまった。

「フェルデンーーーーーーー！！！！」

朱音は自らが今はクロウだということを忘れ、叫び出していた。

もうもうと上がる煙の中に、何かが僅かに動くのが見えた。

地面に大きく空いた穴の中では、炎弾が燻っている。そのすぐ近くの、落下時にぶつかって破壊された建物の瓦礫の下から、ゆっくりと何か這い出してくる。

這い出してきたのは、真っ白の軍事服のあちこちを焦がしたフェルデンであった。立ち上がった彼は、瓦礫を丁寧に上から取り除いていく。その下からは、気を失ってはいるが、無事な親子の姿が現れた。

炎弾が直撃する寸前、咄嗟に親子の前に飛び降りたフェルデンが、

二人を押し転がすようにしてその場から逃れたのだ。その後、崩れた瓦礫の下敷きになりかけた二人を庇うようにして、フェルデンは自らの背を盾にして二人の命を救ったのだ。

フェルデンの無事な姿を確認してほっとする朱音だったが、それと同時に一歩間違えれば彼が死んでいたかもしれない、という恐怖を強く感じていた。

そして、まだ震えは止まっていなかった。

尚もしきりに赤黒い炎弾が飛び交い、悲鳴は絶えず続いている。一瞬にして失われていく、罪もなき命。そして美しい街並み。

「クロウ！　城へ行くんだ！！」

フェルデンが地上から声を張り上げた。

はっとして朱音は震える手を押さえ込み、ゾーンの背から彼をじっと見つめた。

今の状況下で、ゾーンを着地させて再びフェルデンを乗せて飛び上がることはできそうにもない。そうする時間も、場所も、そして飛び交う炎弾がそうさせてはくれないだろう。

あちこちに上がる火の手。街が地獄と化そうとしている。

「だけど、ここに貴方を置いてはいけない・・・！！」

朱音は泣き出しそうな声で言った。

ここで彼を失う訳にはいかない。残った僅かな時を、彼を助ける為に捧ぐと決めた朱音には、最も辛い決断だった。

「何をしてる！　行け！！　俺もすぐ後から追いかける！　先に行って、これを止めてくれ！！」

フェルデンの懸命な声に、朱音はぐっと震える手を握り締めて大きく頷いた。

「分かった・・・！」

彼が初めて朱音にした頼みごと、それは、命をよりも大切なこの美しいサンタシ国を守ることだった。

（なんとかして、これを止めなきゃ！！）

朱音はゾーンにお願いして、炎弾の当たらない高さを目指し、高

度を一気に上げて舞い上がった。
覆っていた厚い雲の隙間から明るい月明かりが差し込み、巨大鳥を天へと導く光のように、優しく地上を照らし始めている。
フェルデンはこの惨劇の中、ゾーンの背に乗る華奢な少年王の姿を仰ぎ見て感じていた。その姿が、魔族の王というよりも、まるで救世主のようだと・・・。

13話　新たなる国王

アザエルは止むことなく発させるファウストの攻撃かわしながら、無数の水針を放った。

ファウストはそれでも攻撃を止めることなく、左の手で炎の盾を瞬間的に創り出し、防御する。

水針は彼の本体に届く前に敢え無くも蒸発して消滅してしまう。それでも尚アザエルは水針を放ち続けた。狙いはただ一つ。中距離戦を得意とする彼との間合いを詰めることにあった。

反し赤髪の青年は、魔王の側近をこれ以上近付けさせまいと、更に炎弾を繰り出すスピードを増させた。

完全に避けきった筈の炎の攻撃は、その余熱でアザエルの衣服を次々に焦がしていく。

「アンタを殺して俺はその魔力をいただく！　そしてその後はクロウ王だ！　俺は世界最強の力を手に入れてみせる！」

緋色の眼を細め、ファウストは更に炎弾の威力を増させた。

すでに王室の窓や外に面した壁は炎弾による被害で取り払われていた。崩れた壁の端はちりちりと火を燻らせている。そして、外気に直接晒された元王室は、ほぼ原型を止めてはいなかった。

いつの間にか雨は上がっていた。

なくなってしまった王室の壁のせいで、すっかり見晴らしが良くなってしまった部屋からは、王都のあちこちから煙と炎が上がっている様を一望できる。

ヴィクトル王は短剣を握る手が汗ばんでいることに気付いていた。剣を構え、じりじりと追い詰めてくるゴーディア兵と、目を血走らせたヘロルド。

魔王の側近と炎を操る青年がすぐ近くでとてつもなく激しい攻防を繰り返していたことは重々承知していたが、追い詰められた背後

が壁ではなく、何もないことに気付き、ふとすぐ後ろの足元に視線をやった。
（ここまで・・・ということか・・・）
カラカラになった鍔を飲み込み、ヴィクトル王は短剣を構えたままヘロルドを鋭い目つきでじっと見つめた。
「逃げ場がなくなりましたな、ヴィクトル陛下」
大きな口に卑下た笑みを浮かべると、ヘトルドは舌なめずりしてずいとヴィクトル王に近付いていく。
『びゃあ』
開放的になった王室のすぐ外側で、耳障りな鳴き声が響いた。
「な、なんだ!?　ひっ」
目を丸くし表情を引き攣らせたヘロルドが、ヴィクトル王の背後に釘付けになったように口をぱくぱくと喘がせている。
『びゃあびゃあ』
今度はすぐ耳の後ろでしたひしゃげた声に、ヴィクトル王は思わず、短剣を握り締めた手で、耳を塞ぎ振り返った。
尖った嘴に、醜悪な禿げ上がった鳥の頭。巨大鳥ゾーン、王都では滅多に見ることのない凶暴な鳥である。
ヴィクトル王は、信仰する唯一の神、創造主に感謝した。
この場でヘロルドなどという愚かな男にみすみす殺られずに済むことを。そして、せめてゾーンに殺さされる前に、この狡賢い男を道連れにしてやれることを。
しかし、予想に反してゾーンの襲撃はなく、代わりに聞き覚えのある少年の声が聞こえた。
「お久しぶりですね、ヘロルドさん」
「ク、クロウ陛下・・・！」
状況が全く理解できていないヘロルドは狼狽し、固まったままゾーンの背に乗る少年王の姿をあわあわと見つめた。
（な、なぜこの餓鬼がここにいる!?）
不意に現れた巨大鳥と、その背に乗る我目を疑いたくなるような

美しい少年王に、ゴーディア兵達は目を奪われていた。兵の中で誰一人として魔王ルシファーの顔を見知っている者はいない。即ち、当然のことながら、少年王の顔を知る筈も無かった。

そして、その存在に気をとられた人物がそこにもう一人いた。

ファウストである。

アザエルとの闘いでは一瞬の気の緩みや隙は命取りであった。だが、ファウストの視界は、少年王の姿を捉えてしまったのだ。

あの日、自らに瀕死の重症を負わせた魔族の王に、ファウストは再び会える日を渇望していた。

魔王ルシファーの血を受け継ぐ麗しの少年王を、あの日以来一度たりとも忘れたことはなかった。あの少年王の息の根を止める為だけに、ファウストはドラコの部下の命を一つ残らずその手で燃やし尽くし、更なる強い魔力を手に入れたのだ。犠牲にしてきたものはあまりに大きい。

今や、ファウストは孤独だった。

しかし、哀しみや淋しさに浸っている時間などな無い。

ファウストは、止めない炎弾のいくつかを朱音目掛けて放った。

しかし、その僅かな焦りがほんの一瞬アザエルに反撃の余地を与えてしまう。

自らのみを標的に絞り、仕切りなく放たれていた攻撃のたった数発のみが、別方向に向いた。たったそれだけのことであった。しかし、そのことによって生じた無にも等しい小さな隙を、碧く美しい魔王の側近は決して見逃さなかった。

「！！！！！！」

その場にいた誰もが、一体自分達に何が起こったのかを理解できなかった。

突如湧き起こった激しい波と水流にのまれ、勢いよく城の外部に流れ落とされていく。

ファウストは抗えない水流にのまれ、そのまま部屋の外へと流されていく。

（くそっ！　やられた！！）

流されゆく瞬間、変わらぬ冷たい表情のままアザエルは天井にあいた炎弾による穴に手をかけ、じっと赤髪の青年が部屋の外へ流される様を見つめていた。

そして、ゴーディア兵やあの卑劣な偽指令官、ヘロルドさえも次々と水流に飲み込まれていくのが、ファウストの視界にも入っていた。

先程放った炎弾は朱音にうまく当たらなかったようだ。

王室から流れ出す水流から、巻き添えを食わないように距離をとったまま空中で静止していた。絶対に誰にも飼い慣らすことなどできないと言われる凶暴な巨大鳥ゾーンが、大人しく朱音を背に乗せたまま従順に上空で翼をはためかせている。

「遅くなってしまってすみません、ヴィクトル陛下」

城の外へ投げ出される瞬間、朱音はヴィクトル王の腕を咄嗟に掴んでいた。

今、ヴィクトル王は朱音の華奢な手に掴り、ゾーンの背から宙吊りになっていた。

「ノムラさん・・・！　そこに降ろして・・・！」

表情を歪ませながら朱音は懸命に言った。

水が流れ出て、水浸しになってしまった元王室だった空間に、ゾーンは舞い降りた。

朱音は、ヴィクトル王を掴んでいた手を離した。途端、ヴィクトル王は濡れた床面にどさりと尻餅をつく。

その背後から、静かに歩みよる影を見上げ、朱音は口を開いた。

「アザエル・・・」

「お帰りなさいませ、我君」

碧い髪から雫を滴らせ、美しい魔王の側近は膝をつき頭を垂れた。

水流とともに落下していく最中、ファウストは高らかに笑っていた。美しき魔王の側近は、やはり血も涙も無い冷徹な男だという事

実に笑わずにはいられなかったのだ。
　少年王の危機を救う為にならば、他の誰が犠牲になろうとも厭わず、あの男は水で一掃させる手段を選んだ。そう、その中に例えヴィクトル王の命が含まれていようとも。
（やっぱ、アンタと俺は同じ匂いがするぜ・・・。なあ、アザエル閣下）
　急速に接近する地面に向け、ファウストは炎を噴射した。巻き起こった強い熱風で地面との激突を回避すると、くるりと宙で反転し近くの草の上に着地した。
　見上げると、遙か上の方で城の壁が崩壊している場所がある。恐らくは、あそこがヴィクトル王の王室であった。
　よく見れば、足元にはおかしな方向に折れ曲がったゴーディア兵の遺体が、何体も転がっている。あの部屋からアザエルの出現させた水流で押し流された者達であろう。
　あれ程の攻撃を絶え間無く仕掛けたにも関わらず、一発たりともあの男に当てることができなかった。しかしながら、あの無敵と思われる碧き美しい男と互角にやり合える程に自らの魔力が達していたことに、確かな手ごたえを感じていた。
「くそう・・・！　アザエルめが、またわたしの邪魔をしおって・・・！」
　そこにもう一人、落下による死を免れた男がいた。
　忌々しげに痩せて骨ばった手を握り締め、ぽっかりと空いた王室を睨み見るヘロルドの姿がそこにあった。
　全身濡れ鼠のようになったヘロルドは、どんな手を使ったのかは知らないが、無傷のまま地上に突っ立っている。
「おい、おっさん。取引きしないか？」
　ファウストは水を含んだ服の裾をぎゅっと絞ると、不敵な笑みを浮かべた。
　ヘロルドは、ぎょろりとした落ち窪んだ目を赤髪の青年に向けると、何かを企んだようにじっと目を細めた。

「一体何と何を取引きするというのだ」
ぼたぼたと服の水気を絞り落としながら、ファウストが答えた。
「アンタはゴーディアの王座を手に入れたい。俺はクロウ王を倒し最強を手に入れたい。目的は違えど、互いに殺りたい相手は同じってことに気付かねぇか？」
ヘロルドは大きな口を吊り上げた。不揃いな変色した歯が覗いている。
「その通りだ」
真紅の髪を犬のように振って水気を飛ばすと、ファウストは緋色の目を王都へ向けた。
「なら、手伝え」
偉ぶった青年の物言いがえらく勘に触ったが、ヘロルドは黙って王都に視線をやった。
「・・・お前の仕業か？」
怒りの為、王都がこのような惨事になっていたことに今の今まで気付かなかったヘロルドだったが、ここで初めて、ここへ来る途中で本当にいい拾いものをしたと今更ながら思った。
「俺が王都で暴れたとしたら、クロウ王は黙って見過ごすと思うか？」
ぎょっとしてヘロルドは青年を振り返った。
「王都を完全に破壊する気か？」
その質問に答えないまま、ファウストは言った。
「そういやアンタ、まだ一度も魔術を使ってねぇけど、ほんとに使えるワケ？」
完全に見下したような口振りで、ファウストはヘロルドに軽蔑した目線を向けた。
「う・・・！」
痛いところを突かれて、ヘロルドは口をへの字に曲げて呻いた。
「はっ！　まさかその地位にいながら、魔術のつかえねぇ奴がいたとはな！　笑えるぜ」

ファウストの見下げた口振りに、ヘロルドは地団太を踏みたい衝動をじっと堪えた。
「お前の言う通り、わたしには生まれながらの魔力は携わってはいない・・・！　だが、わたしにはこれがある・・・」
びしょ濡れになった衣服の下から巨大な石の塊を取り出した。赤黒く大きな石は、月明かりの下で不気味に反射した。
「魔光石・・・」
ファウストは水晶玉ほどの丸い大きな石を見て、なるほどと合点がいった。この男は、同種である魔族の血液を凝縮して作り上げられた、魔光石の力を利用してこの地位に上りつめたのだ。
ましてや、それ程の魔力を秘めた魔光石を、この狡賢い男がどうやって手に入れたのかまでは興味の範疇には含まれていなかったが。
「なぜ今までそれを使わなかった？」
ファウストの当然な問い掛けに、ヘロルドは小憎たらしげに答えた。
「これの魔力は強い。だが、力加減が利かないという欠点がある」
呆れたように溜息をつくと、ファウストは言った。
「つまりは、テメエで力をコントロールしきれねぇってことだな？」
鉤鼻に皺を寄せ、ヘロルドは青年の横顔を睨み付けた。
「言っておくが、この魔光石だけはお前なんぞに死んでも渡さんぞ」
「いらねぇよ」
ヘロルドの言葉に重ねるようにして、ファウストは突っ返した。
「俺はそんなチンケな人工物なんかの力には興味ねぇえの。俺が手に入れたいのは、本物の“強さ”だけだ」
それを聞いてヘロルドはひどく安心した様子で、魔光石を愛おしげにそっと撫でた。
「ま、そのコントロールできねぇ力でも、今はどうやら奴に立ちそうだぜ？　この国を破壊するっつう計画の中でならな」
ファウストの企みは、いよいよ王都に止まらず、サンタシ国全土の破壊へと膨らんでいた。全ては、クロウ王の意識を自らに引き付

けるが為に・・・。

フェルデンは地獄と化した王都の中、まだ被害を受けていない馬屋の中から比較的利口そうな馬を一頭拝借し、白亜城を目指し駆けていた。先程から、城から放たれる炎の玉は降り止んではいるが、尚、火の勢いは衰えていない。

（砲撃が止んだ・・・。クロウが止めたのか・・・？）

フェルデンは、馬を走らせながら、燃え移る火を最小に止めようと剣で燃える物という物と切り落としていた。しかし、たった一人の騎士の力では、それも大した助けにもなってはいない。

「くそっ・・・！」

自分の無力さに、フェルデンは燃えて崩れ落ちた屋根の残骸を剣で乱暴に突き刺した。

ザバと突然湧き起こった水流に、その辺り一体の家々の火が鎮火された。

「無様だな、フェルデン・フォン・ヴォルティーユよ」

民家の屋根に、碧く美しい髪がたなびく。

「アザエル・・・！」

咄嗟に剣を構えようとして、フェルデンははっと鎮火された建物の影から現れた、気高き馬に跨る人の存在を認めてその手を止めた。

「よくぞ無事で戻ってくれた、我弟よ」

僅かに吊り上ったブラウンの瞳に、金のウェーブがかった髪。

この人の無事を、どれだけ祈ったことか。

「兄上！！」

そしてヴィクトル王の腕の中にはもう一人の姿があった。黒く艶やかな髪の少年、クロウ王である。

「フェル、ここからはここにいるクロウ陛下も街の鎮火に手を貸してくれるそうだ」

朱音はフェルデンの無事な姿を目にし、ひどく安堵していた。

（良かった、無事で・・・）
しかし、その束の間の喜びは、すぐさま掻き消されることとなる。
「陛下！！！」
アザエルが叫び、二人の跨る馬の前に飛び出したと同時、人程の大きさもある、巨大な炎弾が直撃した。
朱音は炎弾が巻き起こした凄まじい熱風に、馬ごと吹き飛ばされた。

「うっ」
背中にひどい痛みを感じ、朱音はゆっくりと目を開けた。
乗っていた馬は、離れた場所に横たわって苦しそうに呻いている。
ふと、自分が誰かの腕の中で庇われていたことに気付き、のろのろとその人の顔を仰いだ。
「ああ・・・、またあんたに借り作っちゃったね」
朱音は情けなさに涙が出そうになった。
碧く美しい髪と、美しい横顔。あの月夜の晩に朱音を攫ったときと同じように、アザエルは朱音をその腕に抱えていた。
じゅうじゅうと音を立て、炎弾がえぐった地面はをぽっかりと大きな穴を空け、煙を上げている。その向こう側で、フェルデンがこちらを見つめているのが見える。
「陛下、申し訳ありません・・・、お怪我を・・」
いつもは表情一つ変えないアザエルが、こんなにも慌てた顔を嘗て見たことがあっただろうか。
「なんであんたが謝るの？　わたしこそ謝やらなきゃ。いつも足引っ張っちゃって、ごめんね。わたしは大丈夫だから」
背中が痛むのは、ただの怪我ではないだろう。朱音は片方の手を背に回し、そっと触れた。
そしてほんの少し笑った。
（こりゃ痛いわけだ、なんか突き刺さってるし）
爆風の際に吹きば飛ばされた木片が、背に突き刺さっているら

しい。
「ク・・・クロウ・・・」
掠れた声がして、朱音はふとそちらに視線をやった。
「ヴィクトル陛下・・・？」
少し離れた場所で、瓦礫にもたれ掛かるようにして倒れるヴィクトル王の姿が目に入った。
しかし、その背には、太く尖った木片が突き刺さり、腹部を貫いていた。木片はヴィクトル王の血を吸い、赤く滑っている。
「兄上！！！」
フェルデンがごふりと血を吐き出したヴィクトル王の傍に駆け寄り、そっとその手を握り締めた。
「・・・美しき・・・魔族の・・・王、クロウよ・・・。愚かなるわたしの・・・行いを・・・許して欲しい・・・。今こそ・・・、長年の戦を終結させ・・・、人間と・・・魔族が、共に手を・・・取り合う時が来た・・・」
「兄上っ、喋ってはいけません！　誰か医者を呼んでまいります・・・！」
その場から立ち上がろうとしたフェルデンの手を掴み、ヴィクトル王は静かに首を横に振った。
「フェル・・・。誇り高きサンタシの・・・騎士よ・・・。わたしの・・・愛するただ一人の・・・弟よ・・・。これからは、お前が・・・わたしに代わり、この国を治めるのだ・・・。わたしが成しえなかったことを・・・お前に託す・・・。決してヘロルドに・・・王の印を・・・渡し・・・て・・・」
開かれたブラウンの瞳からは、生の光が失われてしまった。フェルデンの手を掴んでいた手が力無くだらりと垂れ、砂の上にことりと転がった。
「兄上・・・？」
フェルデンは動かなくなった兄の肩を揺さ振るが、彼が再び反応することは無かった。

「嘘・・・」
朱音は、呆然としてその光景を見つめていた。
「兄上っ」
優しきサンタシの騎士は、兄の首元に顔を埋め泣いた。
そして、朱音も静かに涙を流していた。兄想いの彼の心の痛みを、朱音はまるで自分のもののように感じていた。
もう誰も失いたくはないのに、朱音の親しい人達は次々と儚く命を散らせていく。
「おいおい、マジか？　ちょっと脅かしてやるつもりだったのに、まさかこんな呆気なく終了とかぬかすなよな？」
民家の屋根から、月明かりで伸びた影が揺れる。
朱音はこの声を知っていた。
「ファウスト・・・！」
燃え盛る炎のごとく赤い髪の青年は、屋根の上で愉快そうに笑った。何事も無かったかのように、腰に手をあてつまらなさそうに朱音達を見下ろしていた。
朱音は背に走る痛みに呻きながらも、アザエルの腕から立ち上がり、緋色の瞳を強く見上げた。
「わたしはあんたを許さない！！」
朱音は胸のペンダントを握り締め、喉が裂けるのではないかという程に強く叫んでいた。
「そうか。それじゃあ俺を止めてみな」
すっくと立ち上がったファウストは、まるで鬼ごっこでも始めるかのように、ぺんぺんとおどけて自らの尻と叩いた。
「言っとくが、俺を止めるには俺を殺すしか道は無いぜ。俺は今から王都を燃やし尽くした後、サンタシ全土を灰に変えてやる」
緋の眼をギラつかせ、ファウストは軽い足取りで王都の民家の屋根から屋根へと飛び移り、月夜の下を駆けていく。
朱音はアザエルにそっと耳打ちする。
「陛下、本当によろしいのですか？」

「うん、自分じゃできないから、あんたがやって」
アザエルは、そっと少年王の背に突き刺さった木片に手を添えた。
「陛下、失礼致します」
囁くように言った後、今までとは比べものにならない程の痛みが走った。
「うああ！！」
痛みに呻き、朱音は一瞬気が遠くなって倒れ込みそうになるが、その肩をアザエルに支えられてなんとか踏みとどまることができた。
「ありがと・・・。早くファウストを止めないと・・・」
そうする間にも、ファウストは無差別に炎弾を放ち、街の破壊を遂行している。
「陛下、傷をお見せください」
朱音はアザエルの言葉に「必要ない」とだけ答えた。
クロウの身体に傷をつけてしまったことに申し訳なさを感じない訳ではなかったが、彼の身体には、驚異的な回復力が携わっていることを朱音自身よく知っていた。傷をつくっている原因さえ排除してしまえば、後は自然と傷は塞がっていく筈だ。
「ねえ、アザエル。もう少しわたしの我儘に付き合ってくれる？」
まだ朱音の人格がクロウの身体を支配していることに、アザエルは気付いていた。
「陛下のお心のままに」
冷酷で無情な碧く美しい魔王の側近は、遠いクロウの記憶で見せていた優しい微笑みを浮かべた。
朱音は事切れたヴィクトル王の肩を抱いたままのサンタシの騎士を振り返った。
「フェルデン、貴方のお兄さんを守れなくてごめんなさい・・・。きっと、ファウストを止めてみせるから・・・！」
フェルデンは“フェルデン”と親しい呼び名で呼ばれたことに驚き、顔を上げた。
黒く艶やかな髪に、透けるような白い顔。大きな黒曜石の瞳から

はとめどない悲涙が流れ落ちていた。
そして背を向けると、朱音は駆け出した。
アザエルは主の後を追う前に、フェルデンにこう言い残した。
「この国を救いたければ、石を使え。所詮つまらぬ意地だけで国を守ることなどできはしない。貴様の剣技に魔力が加われば、少しは使い物になるかもしれんがな。フェルデン王」

１４話　帰ってきた紳士

白銀の毛の獅子の群れが王都を一望できる崖上に佇んでいた。
美しく風に靡き、さらさらと毛が揺れる度、獅子たちははあはあと荒い息を立てながらその凛々しく利口そうな目を細めてじっと風にまかせていた。その背には、それぞれ灰の軍服に身を包む騎士達と、白い軍服に身を包む騎士達が跨っている。
「これは一体・・・」
ディートハルトは逃げ惑う人々の悲鳴や、燃え盛る王都の街を見下ろし、愕然とした。
「くそう、間に合わなかったってことか・・・！」
くやしそうなアレクシの声に、サンタシの騎士達は皆込み上げてくる怒りと悲しみの入り混じった感情で、誰しも涙を堪えた。
美しかった王都は今や見る影もない。しきりに上がる黒い煙に、炎。あちこちに不気味な焦げた穴が地面に口を開けている。
「いや、まだ悲しむには早い。両の目を凝らしてよく見てみろ。まだ諦めずに闘う者がいるということを」
ライシェルは何も映すことのできない琥珀の瞳で、じっと王都を見つめ、何かを感じ取っているようであった。
「あれは・・・」
最初に声を上げたのは黒の騎士団唯一の女騎士、タリアであった。
彼女は確かに街の中で懸命に闘う者の姿を認めた。
この距離でははっきりとは見えないが、赤い炎の塊のようなもので王都を破壊していく何者かを妨害しようとする何者かが街の中にいるようだ。
城は見たところまだ目立って外傷は無い。王都の惨状から想像するに、白亜城は敵に占拠されている可能性が高い。
「先に行かれたフェルデン殿下です、きっと」

「恐らく、クロウ陛下もどこかにおられる筈」
サンタシの騎士達とゴーディアの騎士達は、互いに顔を見合わせた。国は違え、今、二つの国と二つの種族の目的は一つに一致していた。
「急げ！　お二人の援護に参らねばなるまい！！」
ディートハルトは太く逞しい左の腕の拳を振り上げた。
銀獅子の背に跨った騎士達は勢いよく崖を駆け下りた。一つの目的の為に。

朱音は背中の痛みに堪えながら、駆けた。
しかし、身軽に建物の屋根を飛び移りながら街を破壊していくファウストには、地上からではとても追いつくことはできない。
（どうしよう、彼に追いつけない・・・！）
崩れ落ちてくる障害物を避けながらの追跡は、かなり応えた。かと言って、ここにゾーンを呼び寄せるには抵抗がある。ゾーンは暑さを嫌うことも一理あったが、彼を呼べば、間違いなく巨大な彼がファウストの攻撃の的になることは目に見えていた。これ以上、彼をこの闘いに巻き込むことなどできはしない。
「全部わたしのせいなんだね・・・。ルイやアザエルはわたしがお城を空けることを止めてたのに、わたしは自分勝手にお城を抜け出してきた・・・。わたしがそんなことしなかったら、きっとこの戦争は起こることはなかったのに・・・・」
朱音は、動かなくなった我子を抱き、泣き崩れる見知らぬ母の姿に、ただ呆然として立ち止まった。
「遠かれ近かれ、起こるべくして起こったこと。陛下が嘆くことはありません」
アザエルは立ち止った朱音の後ろから感情の篭らない声でそう言った。
朱音は今だ流れ続けている涙を手の甲で拭うと、アザエルを振り

返った。
「ファウストを許すことはできない・・・。だけど、それ以上にわたしはわたしを許すこともできない・・・」
朱音は残された最後の時がもう目前に迫ってきていることを知っていた。
これ程の緊迫した中というのに、先程からひどい眠気を感じることも。そして、次に眠ったとき、自分が今こうしているように目覚めることがきっと無いであろうことも。
ふと、ファウストが炎弾で破壊するその向こうから、何か巨大なものが迫り来ることに朱音は気付き、黒曜石の瞳を大きく見開いた。
巨大な竜巻。
それは、ちょうどセレネの森あたりから音もなく近付き、木々や緑を片っ端から巻き上げ飲み込みながらゆっくりと王都へ近付いていた。
「何・・・、あれ」
「自然現象などではないようです・・・、あれは風の魔術・・・」
じっと碧い目を細め、アザエルは巨大な竜巻の中心に誰か発現者が存在することに逸早く勘付いた。
「と、止めなきゃ・・・！」
しかし、その一方でファウストはその風の存在をもともと見知っていたかのように、向かい来る竜巻とは逆の方向へと身軽に移動を始め、王都の外へと脱出しようとしていた。ここで彼を逃せば、今度は他の街を破壊しに向かうだろう。彼をみすみすここで見過ごす訳にもいかない。
ファウトは時計台の頂点に立つと、片手を上げて何か合図をしている。
ゆっくりと勢力を増しながら着々と王都に近付いてくる竜巻。
合図の後に突然空の上から現れたのは、一頭の飛竜（ひりゅう）。燃えるようなファウストの髪に相対するような赤みの鱗。背には蝙蝠（こうもり）のように大きく尖った翼が生え、ファウストはその背にひょいと身軽に飛び

乗った。
「陛下、わたしがあれを追います」
アザエルの手にはすでに水の剣が創造されていた。
「うん・・・！」
朱音は瞳を閉じた。嘗てのクロウの記憶が鮮明に湧き上がる。
飛竜を追うには飛竜でなければならない。そして、血の契約をせし飛竜をここに召喚する法もまた、知っている。
すぐにでも駆け出そうとしているアザエルに「待って」と待機を促すと、ふと空を見上げた。
雲よりもずっと高い場所に小さな黒い影。羽を畳み、まっすぐに降下してくるそれは、クロウの飛竜であった。
真っ黒に光輝く光沢のある鱗に、ぐりぐりした大きな爬虫類の眼。それは、念じた朱音の元でファサと羽ばたき、とても静かに舞い降りた。
「アザエル、この子を使って。彼を追うにはこの子の速さが必要だよ」
朱音が眠っている間に、どうやらクロウが既にこの飛竜を近くへと呼び寄せていたようだ。
まだ子どもの飛竜は、久しぶりに主に会えたことを喜び、グルグルと喉を鳴らし大きな利口そうな頭を朱音に摺り寄せた。頭に生えかかった角はまだ未熟で、てっぺんが少し出たばかりだ。
「こんにちは、スキュラ」
朱音は不思議と恐れを抱くことは無かった。懐かしい気持ちになり、嘗てクロウが彼をそう呼んでいたように、飛竜の頭を優しく撫でてやった。
「なかなか立派な飛竜をお持ちじゃねぇか、クロウ陛下」
赤い鱗の飛竜の背に跨り、朱音達の頭上を旋回しながらファウストが言った。
彼の飛竜はスキュラよりも一回り程大きく、成長した優雅な動きだ。

「ファウスト、絶対に逃がさないから・・・！」
ぎっと緋色の眼を睨み返すと、朱音はスキュラに小さく耳打ちした。
「飛竜を扱える奴が俺の他にこの世界にいたとは思わなかったぜ、クロウ陛下。俺を追って来い」
ファウストは赤い飛竜の上でにっと笑いを浮かべると、大空へ舞い上がった。
「アザエル、竜巻を止めた後わたしもすぐに向かうから、あいつを足止めしておいて」
スキュラは朱音は背を差し出すように地に伏せると、大きな目で朱音を見つめ返してきた。
「スキュラ、アザエルをお願いね」
アザエルは静かに礼をとると、スキュラの背に跨った。
飛ぶことの楽しい幼い竜の子スキュラ。畳んでいた真っ黒い翼を広げると、一羽ばたきでぐんと雲の近くまで飛び上がった。
（あんたたちの好きにさせてなんかあげないから・・・！）
朱音はぐっと拳を握り締め、王都の目前まで迫った竜巻を見上げた。これ以上の王都の破壊をここで食い止めなければならない。あの竜巻に飲まれでもすれば、王都は塵だけを残してきっと消滅してしまうだろう。
まだ、この王都には多くの人々が生き存えている。ヴィクトル王やフェルデンが愛し、守ろうとしたこの国を、ここで諦めることなどできはしない。
「クロウ陛下、到着が遅くなってしまいました」
振り向くと、銀の獅子に跨るライシェルの姿がそこにあった。
「ライシェル！」
その後ろから続々と銀獅子に跨り現れた騎士達の姿に、朱音は驚き眼を丸くした。
「クロウ陛下、ここからは我々も尽力しますぞ」
「ディートハルトさん・・・！」

心強い味方の登場に、朱音は少し落ち着きを取り戻すことができた。

「クロウ陛下、フェルデン殿下は今はどこに・・・」

アレクシの不安そうな問いかけに、朱音は表情を曇らせ、俯いた。

「まさか、殿下に何かあったんじゃ・・・」

騎士達がざわつき始めたその時、背後から凛とした声が響いた。

「俺はここだ」

皆が振り向いたそこには、煤だらけになった、真っ白い軍服に身を包むフェルデンの姿。

「殿下・・・！　ご無事でしたか！！」

ひどく嬉しそうにアレクシが喜びの声をあげたが、フェルデンはいつになく真剣な面持ちで続けた。

「ヴィクトル・フォン・ヴォルテヴィーユ陛下がお亡くなりになられた」

「何！？」

ディートハルトは信じられない思いでフェルデンを見つめた。

「敵の大将は偽指令官ヘロルド。その手先である炎使いファウストが我らの王都を破壊し、陛下を殺害した」

まるで第三者の視点から見ていたかのように、フェルデンは表情を変えないまま話した。きっと、上官としての威厳を保ち続けようと、必死でいるに違いない。

「俺は、陛下がお亡くなりになる前に国璽（こくじ）を受け賜った。これより、ヴィクトル陛下に代わり、このフェルデン・フォン・ヴィルティーユがサンタシの国王として即位する」

彼の即位に反対する者は誰一人いなかった。

彼が若くとも、王としての十分な気質を携えていることを知っていたこともある。そして何より、彼は精神面だけでなくこの大国をも背負ってゆける程の剣の腕を持ち合わせていた。

フェルデンは、若く、美しく、そして強い。

「いいか、王としてサンタシの騎士達に命ずる。王都には、まだ多

くの民が怯えながら逃げ惑っている。一人でも多くの民を、安全な地へと誘導しろ！！」

「はっ」

ヴィクトル王の死は騎士達にとっても深い哀しみを抱かせたが、それをも感じさせぬほどのフェルデンの勇ましい声に奮い立たされ、白い軍服に身を包んだ騎士達は、ぐっと拳を胸に掲げると、静かに頭を下げた。

「お待ち下さい、新国王フェルデン陛下。我々の魔力も何かの役に立つかもしれません。わたしたちもご一緒しましょう」

ライシェルが銀獅子を歩ませ、フェルデンの前に進み出た。

「ライシェル・ギー・・・。ああ、頼む」

フェルデンはライシェルの手を握った。

不思議なことに、フェルデンはライシェル達の申し出を不快に感じることは無かった。あれ程憎んでいた魔族と共に、こうして互いに手を取り合っていることに、何ら違和感を覚えることは無くなっていた。考えてみれば、人間と魔族も姿形はほとんど同じだということに気付いたのだ。少し前までは、魔族と言えば無慈悲で冷酷だと思っていたけれど、それはひどい思い違いだったようだ。今は、この盲目の騎士が、とても心強く感じることができる。

朱音は再び王都に迫り来る巨大な竜巻に目をやる。

（だんだん大きくなってる・・・！）

もう、これ以上こうしてここで止まっている訳にはいかない。

「わたしはなんとかして竜巻を止めてみます！　皆さんは、どうか一般の人たちを助けてあげてください！！」

朱音は駆け出した。誰かが後ろで何か叫んでいる。

しかし、もう朱音は止まらなかった。

（止めなきゃ・・・！　フェルデンの国を守らなきゃ・・・！　皆を守らなきゃ・・・！！！）

そうは言っても、今の朱音には、一体どうやってあの巨大な竜巻を止めればいいのか見当がつかない。

ただ、クロウの身体が何かを覚えているだろうことを信じるしか術は無い。
（クロウ・・・！　お願い、どうやったらあの竜巻を止められる・・・！？）
朱音は心の中で懸命にクロウに呼び掛けた。
（ねえ、クロウ、わたし、一体どうしたらいいの！？）
しかし、クロウの返答がある筈もなく、朱音はそれでも諦めずに竜巻の向かい来る方へと全力で駆けていた。
（クロウ！！！　あれを止めなきゃ、サンタシが滅びちゃうんだよ！？　貴方ならどうすれば救えるのか、知ってる筈でしょ！？）

「お手伝いいたしましょうか？　姫君」
ふと通り過ぎようとしていた柱の影から、何者かの声が投げかけられた。
「！！？？」
竜巻は、もう、本当に王都のすぐ脇まで迫っている。
近付くにつれて、空へと吸い込むような強風が巻き起こり始めている。そろそろこうして走って近付くには辛いものを感じ始めていた、そんな時であった。
振り向いたその先に、ゴーディアの兵が一人、柱にもたれ掛かるようにして朗らかに微笑んでいた。
見慣れた揉み上げに、彫りの深い焦げ茶の目。
（ああ・・・、いつも貴方はそうだ。いつもわたしが助けて欲しいと願ったときに、どこからともなく現れてくる）
朱音は、目尻からじわりと熱いものが込み上げてくるの感じた。
「泣かせるつもりはなかったんですが」
困ったように優しく微笑むと、その人は柔らかく朱音の肩を抱いた。
そして、朱音はひどく驚く。もともと痩せ身だった彼だったが、以前よりもより一層痩細ってしまっている事に。

「一体、何があったんですか、クリストフさん・・・！？」
滲む視界で、朱音は震える声で訊ねた。
「合流がすっかり遅くなってしまって、申し訳無かったですね、アカネさん」
彼に只ならぬ何かが起きたことだけは確かだった。けれど、問い詰めたところで、きっと彼は自分から何があったのかを朱音に話すことはしないだろう。
優しい彼だからこそ、朱音に心配を掛けるようなことは決してしない。
「ルイが・・・、ルイが・・・」
「わたしがいない間、とても辛いことがあったようですね」
労わるような優しい声に、朱音は思わず堪えきれなくなった涙を溢した。
「でも、アカネさん。今はまだ泣く時ではありませんよ？　あれをなんとかしないと、王都ともども、わたしたちも塵と化すことになります」
クリストフの言葉に、ふっと引き戻された朱音は、涙をごしごしとこすり、尚巨大化を続ける竜巻に目をやった。
「うん、そうだね、早く止めなきゃ・・・！」
そうは思うものの、どうやってあの大きな竜巻を止めればいいのかが未だわからない。
「だけど、どうやって・・・」
クリストフは朱音の手を自らの手首に握らせた。
そこで得た感触は、あの時の手枷の感触によく似ていた。あのアザエルの魔力を封じていた手枷とそっくりの物。
「アカネさん、まずはこれを外してくれませんか？」
クリストフの腕に嵌められた手枷は、確かに魔力封じの手枷であった。恐らくは、何者かがクリストフを捕らえ、脅威となるその魔力を封じようとしたのだろう。
「分かった、やってみる・・・！」

あの夜と同じように、朱音は目を閉じ、クリストフの手枷に触れた。

『カッ』

以前よりも難なくその手枷は外れ、金の彫刻を施されたそれは、土のうえにぽさりと落ちて転がった。

「ありがとうございます。さて、では参りましょうか？」

片目を閉じて合図すると、朱音は小首を傾げた。

「久しぶりに解放された魔力です。どうも力が疼いて仕方無いんですよ！！　今日は思う存分飛ばしますよ！！！」

そう言うと、クリストフは漲（みなぎ）る風の力を発動させた。

突如巻き起こった風に朱音とクリストフの身体がふわりと宙に吹き上げられた。

「うわっ！？」

不意の出来事に驚き、思わず声を上げた朱音だったが、すぐにその懐かしい感覚に安心感を覚えた。クリストフの起こす風はひどく優しく心地良い。

巨大な竜巻に近付くにつれ、二人を包む風は次第に強い風に変化していった。

すぐ近くまで近付いたときには、二人を包む風は竜巻へと姿を変えていた。

二人は、その中心である目の中で宙に静かに浮いていた。

しかし、巨大化する竜巻には、大きさでは決して敵わない。二人の竜巻の三倍の大きさはあるに違いない。

「アカネさん、まずはこの竜巻をぶつけることで、進路を逸らすことからはじめましょうか」

クリストフの提案通り、朱音はこくりと頷いた。確かに、大きさでは敵わないかもしれなが、体当たりすることで、きっと進路くらいは変えられる筈である。

クリストフはいつもにも増して、強い風の魔力を発揮していた。

逆回転の竜巻を数回ぶつけることで、進路を変えることを狙った

クリストフの風は、ゆるやかに巨大竜巻にその身体をぶつけにかかった。

しかし、思いの他強力だった風に、クリストフの創り出した風は安易に弾き返される。

「まだ風の力が十分では無いようですね」

台風の目の中、クリストフはぐっと力を加えるように、更に注ぐ魔力を増大させていく。この強風を操るには、クリストフ自身かなりの体力と集中力を有していることだろう。

力を増大させて、更に大きくなった竜巻でもう一度試してみるが、またもや弾き返されてしまい、歯が立たない。

とうとう巨大化した竜巻の端が王都に足を僅かに踏み入れてしまった。一瞬にしてその部分の物という物が巻き上げられ、風の中に飲み込まれていく。

朱音は、この中に逃げ遅れた人がいないことを強く願った。

その心中を察してか、クリストフがほんの少し汗ばんだ表情で優しく微笑んだ。

「大丈夫です。きっと騎士達が住民の避難を進めてくれていますよ」

どうして彼がそんなことまで知り遂せているのかが不思議だったが、いつだって何もかもを知り尽くしているクリストフならば、そんなに驚くことではないか、と朱音は妙に納得していた。

そうしながらも、クリストフはまた力を加え始めた。

こうした強風を巻き起こすことは、例えると短距離走で必要となる云わば瞬発力と同じようなものである。クリストフが今している行為は、そう長く保ち続けることのできない類のものだった。

「きっと、これが最後でしょう。もう、これ以上は力を維持するのが難しい・・・！」

クリストフは、残された自らの力を全て出し切るつもりで、最大の魔力を発動させる。ぐんと巻き起こった風がクリストフの竜巻に加わり、大きさを増す。

しかし、それでもまだ巨大化し続ける竜巻の大きさには及んでは

いなかった。
朱音は胸にしまってあるペンダントを強く握り締める。
「クリストフさん、わたしに一つ考えがあります・・・！」
じっと見つめ返すクリストフの表情はひどく辛そうだ。
「いいでしょう、貴女の考えをぜひお聞きしましょう」
まだ何も言わないうちから、クリストフはこくりと頷き同意の意志を示してくれる。
これが失敗すれば、きっともう後は無いだろう。
しかし、朱音はこの紳士の信頼に応えるかのように、しっかりとした口調で言った。
「クリストフさん、風の向きを逆に変えることはできませんか？あっちの竜巻と同じ向きにするんです」
「ええ、勿論可能です。しかし、それではきっとあの竜巻の進路を変えることは・・・」
そう言いかけて、はっとしてクリストフは口元に薄い笑みを浮かべた。
（なるほど・・・、アカネさん、考えましたね・・・）
残った体力で風向きを逆に変えることは、相当の精神力が必要である。
クリストフは深く深呼吸をすると、じわじわと巻き上げた風を逆方向へと吹かせ始めた。
はじめはあまり変化が見られなかったが、ゆっくりゆっくりと、掻き混ぜた水を逆向きに掻き混ぜるかのように、クリストフの竜巻は逆回転に風を巻き上げ始めた。
クリストフの息はすっかり荒くなっている。もう、維持するのには限界が近付いていた。
「最後の試みです。さあ、今度こそ上手くいってくださいよ」
クリストフは、ゆっくりと巨大化する竜巻に自らの竜巻を近づけていく。
朱音は胸のペンダントを握り締めながら、瞳を閉じてただ風の音

を聴いていた。クリストフの起こした、優しい心地のよい風の音を・・・。

１５話　紳士の告白（前書き）

ようやく終結まであと少し、というところまでやってきました。
いつもご愛読ありがとうございます。あともう少し、お付き合いいただければと思います。よろしくお願いします。

15話　紳士の告白

この惨劇の繰り広げられている王都の外れには不似合いな程に美しい黒塗りの馬車が一台止められていた。

僅かに開けられた紅色のカーテンの隙間から、一人の婦人が顔を覗かせ、燃える王都をじっと見つめている。

「何も、こんな危険な場所へとお越しにならずともよろしかったのに・・・」

呆れ声で、オリーブ色がかった口髭を立派にあつらえた紳士は、困ったように婦人に笑い掛ける。

「お黙りなさいな、ブラントミュラー。あの方の敵をとるこの日を、わたくしがどれだけ長い間待ち続けたか・・・！」

深く淵の大きな帽子を被り、日除けのベールが降りているせいで、婦人の表情はまるでわからない。

ただ、その婦人に向かい合うように腰掛けた紳は、二百年前に起こった“マルサスの危機”の際に魔王ルシファーを裏切った男、ブラントミュラー公爵に違いなかった。

「ブラントミュラー、わたくしは、ゴーディアを追放されてしまって以来、一時も、ルシファー陛下のことを想わない日はありませんでした・・・。わたくしから陛下を奪った、あの、憎き女とその息子クロウを、今こそこの手で葬り去ってみせますわ・・・」

ブラントミュラーは愛しげに、白い手袋をはめた婦人の華奢な手にそっと自らの手を重ねた。

「ええ、愛しい方。貴女が望むならば、わたしは何もかもを悪魔に売り渡すつもりです。貴女が誰かを殺したいと願うならば、わたしは喜んで貴女に手を貸しましょう」

ふっと口元を緩ませると、婦人は呟いた。

「頼りにしているわよ、ブラントミュラー。わたくしには、もう、

何も残ってはおりませんもの・・・。これがわたくしの最後の賭けですわ」

ブラントミュラーは、すっと馬車の扉を開き、優雅に降りると、ふと背後の丘を振り返った。

紅色の蛇が絡みつく派手な紋様の旗を掲げ、ずらりと並んだ数千の兵士達。騎馬隊、歩兵、どこから湧いて出たのかと訊ねたくなる程の巨大な軍が二人の乗る馬車の背後に潜んでいたのだ。

「よく聞け、我ザルティスの神兵達よ！　創造主の命の元に、今こそ魔の国王クロウを、この世から葬り去るのだ！！！」

ブラントミュラーは拳を高く振り翳し、大声で叫んだ。

『おおおお

「ヘロルドさん、このままでは王都が本当に消えて無くなってしまいます。今すぐこの竜巻を消して下さい！！」
クリストフは朱音の隣で、かなりの体力を消耗し、額に大粒の汗を浮かべて荒い息をついている。
「お前・・・！　どうやって地下牢を抜け出した・・・！？」
ヘロルドはひどく慌てた様子で、クリストフを睨み見た。
「さっき、何か隠されましたね、ヘロルド閣下。一体何を隠されたのです？」
クリストフは、首を傾げじっとヘロルドの落ち窪んだ目を見据えた。
「な、何のことだか。それよりも、なぜお前がこうしてここに居るのかという質問に先に答えて貰おう」
ヘロルドは忌々しげに大きな口を歪めた。
「どうしてここに居るのか・・・ですか」
可笑しそうに笑い、クリストフはぽりぽりと揉み上げを数回左手の小指で掻く仕草をした。
「クリストフさん、魔城の地下牢って・・・？」
朱音はヘロルドのただならぬ言葉に、思わずクリストフを振り返っていた。
その質問に対して、クリストフは目だけで「まあ、いろいろとね」とでも返すように合図する。
「何せ、貴方が言うにはわたしは“詐欺師”ですから、まあ死んだ振りでもして遺体として牢を抜け出すなんてことは可能でしょうがね。その後はこの通り、ゴーディア兵の扮装をして進軍兵として紛れ込んだだけのこと」
肩をすくめ、クリストフは言った。
「くそっ、ボリスめ・・・！　あの使えない馬鹿めが・・・！」
悔しそうに拳を握り締め、ヘロルドはその手をぶるぶると震わせている。
「ボリス・・・！？」

はっとして朱音は自らの口を両手で押さえた。
“ボリス”という男は、朱音がクリストフが反対するのも聞かずに仲間に加えたトカゲのような男であった。ヘロルドの一言で、大体の成り行きを知ってしまった朱音は、青くなってクリストフの落ち着いた横顔を見つめた。朱音の考えが正しければ、やはりボリスは信用ならない男だったということだ。
そして、そんな男を仲間に加えてしまった朱音は、この心優しき紳士をとんでもない危機へと陥れてしまったことになる。そう、その全ては朱音が招いたことだったのだ。
「アカネさん、貴女のせいではないんですよ。責任感の強い貴女のことです、きっと自分を責めているんでしょうけれど・・・、奴に捕まったのも、全てはわたし自身の失態です。ボリスを信用しすぎていたのは、このわたしなんですから」
まるで、朱音の心を読んだかのようなクリストフの言葉に、朱音は言葉を失った。
この人の帰りを、朱音はどれだけ待っていたか。これだけ長い間自分の元に戻らなかったクリストフを、朱音は一度だって敵かもしれないと疑ったことなどない。彼は、数少ない朱音のよき理解者であり、友であった。
「ふんっ、だがもう今更何もかも遅いわ！　この竜巻はもう誰にも止めることなどできはしない！　既にわたしの手から離れてしまったのだからな」
ヘロルドは言った。
「どの道お前達はここで死ぬ。安心するがいい、クロウ。お前が死ねば、わたしが代わりにゴーディアの王座に腰掛けてやる」
そう言うと、ヘロルドは先程隠していたものを服の中から取り出すと、天高く掲げで叫んだ。
「魔城を離れたことを後悔しながら死ぬがいい！！！　ひゃっははは！！！！」
途端、凄まじい逆風が風の目の中に瞬間的に巻き起こり、朱音と

クリストフは危うく渦巻く風の中に押しやられそうになった。
次に顔を上げたとき、ヘロルドの姿は、忽然と消えていた。
「どうやら、自分だけこの中から脱出したようですね・・・」
クリストフは、彼を逃がしてしまった失態に少し苛立っていた。
「どの道、この乱暴ものの竜巻は、この地の全てを飲み込みつくすまでは落ち着くことはしないでしょう。当初の狙い通り、わたしがこいつの手綱を握れるのか試してみる価値はあります」
朱音は頷いた。と同時に、クリストフの身体への負担がひどく心配になった。
（わたしにもきっと何かできる筈・・・、クロウ、わたしは一体何ができるの・・・？）
ぎゅっと目をつぶり、懸命にクロウに呼びかけるが、反応は見られない。
クリストフは、既に磨り減った精神力に再び負荷をかけ、残りの全魔力を竜巻の方向転換に注ぎ込んだ。尋常ではない程の汗が噴き出している。
「くうっ・・・！」
苦しそうな呻き声をあげながら、クリストフは視力、聴力、嗅覚、その全てを外界から断絶し、ヘロルドの起こした乱暴な風と共鳴することに精神を集中させた。
（さあ、何が気に食わないんです。命を食い荒らしたところで、君たちの欲求不満は解消されることはないんですよ。わたしと空の下を自由に行き来する、優しい風に戻りましょう・・・）
まるで、感情のある子どもに言い聞かせるように、クリストフは心の中で荒れ狂う竜巻に呼び掛けた。
それに反発するように、『ビュウウウウウウ』と、音を鳴らしながら、竜巻は王都を逸れ進路を拒否するかのように、ぐいぐいと王都へとその太い足を食い込ませてゆく。
「相当な聞かん坊のようです・・・！」
クリストフの体力はとっくに限界を通り過ぎていた。

しかし、ここで彼は退く訳にはいかない。
（君たちがそこまで言うことを聞かないのなら、わたしにも考えがありますよ！）
クリストフは突然朗らかな笑みを浮かべ、朱音の肩を優しく叩いた。
「クリストフさん・・・？」
本能的に、朱音は彼を止めなければいけない、と感じた。ほぼ反射的に、朱音はクリストフの前よりも細くなった手首を強く掴んでいた。
「大丈夫、わたしがそう簡単にくたばる様な男に見えますか？　わたしを信じてください」
朱音は胸騒ぎのおさまらない心を抑え切れず、泣きそうな表情でそれでもクリストフの腕を掴んだまま離さない。
「アカネさん、まだ、貴女の自分探しの旅は終わってはいません。そして、わたしは貴女のその旅に最後までお付き合いすると約束しましたね。わたしは自由な男なんです。わたしを動かすことができるのは、わたしだけなのですから」
ゆっくりと、掴んでいた朱音の手を解くと、クリストフは穏やかな目を朱音向けた。
「だめっ！」
朱音が解かれた手をもう一度クリストフの腕に絡ませようとした瞬間、クリストフは自らを黒い風の渦の中に飛び込んだ。そして、朱音の手は大きく宙を切る。
ただ、『ごおごお』という渦巻く風の音が木霊し、その中心に朱音は一人取り残される。
この豪風に飲まれたら、いくら彼であろうとも一溜まりもない。
「やあああああああああ！！！！！！！！！！！！！」
朱音は悲鳴にならない声を上げた。
「陛下、落ち着いて・・・。陛下は万物と共鳴することのできる魔力をお持ちなのです。こんなちっぽけな風くらい、陛下にとっては

なんの障害でも無い筈です」
　涙で霞む視界に、優しいルイの姿がそっと姿を現す。
「ルイ・・・、わたしには何の力も無いんだよ。もう、クリストフさんは死んでしまったかもしれない・・・！」
　すると、ルイは優しく答えた。
「いいえ、陛下。僕は決して陛下の幻想なんかじゃありません。見えなくとも僕はいつだって、陛下の傍にお仕えしています。そして、僕は強く感じるんです。陛下の偉大な力を・・・」
　朱音は驚き胸にしまってあったペンダントを取り出した。
「痛っ！」
　慌てて取り出したせいか、誤ってペンダントからナイフの刃に変形させてしまった拍子に、朱音は自らの手の平を切ってしまった。
　顔を上げると、さっきまで確かにいたルイの姿が無くなっている。
　暖かい血が手の平を伝い落ち、その雫はぱらぱらと黒く渦巻く風の中に吸い込まれていく。
「万物と共鳴する・・・力・・・？」

“風と・・・一体になる・・・！”

　風の鼓動を聴く。
　風の鼓動は、ひどく淋しく、哀しい音。
　この風達は泣いている・・・。
　そして、怒っている・・・。

（大丈夫、きっと自由になれるよ。クリストフさんが一緒なら、あなたたちもきっと・・・）
　ほんの少し風が温かくなった気がした。
「王都を壊すのは、もうやめて・・・」
　朱音がそう呟いた途端、ゆっくりと竜巻が転回し、そのまま王都の外へと向けて歩み出す。

「もう、休んでいいよ」
巨大化していた竜巻の勢力が僅かに弱まった。ゆっくりゆっくりと王都の外へと這い出す竜巻は、次第に力を弱めていく。
「アカネさん」
頭上から降ってきた声に驚き、見上げると、クリストフが竜巻の目の中に空から舞い戻ってきた。
「クリストフさん・・・！！」
彼の無事な姿に、朱音は叫び出していた。
「やはり貴女でしたか。この聞かん坊に言うことを聞かせてくれたのは」
にこりと微笑んだクリストフに朱音は小さく首を捻る。
既に塞がりかけている朱音の手の平の傷に気付き、クリストフが
「なるほど、考えましたね」と意外な顔をした。
「貴女の血の力は生き物だけでなく、万物に有効なようですね」
この風使いの言う意味を、朱音はよく理解できなかったが、取敢えずは朱音も少しは役に立ったようだ。
みるみる縮小していく竜巻の中で、朱音は訊ねた。一体、クリストフがこの巨大な竜巻に何をしたのか、ということを。
「何、単純なことです。竜巻は温かい風が冷たい風の下に潜り込んでできるものですから、一か八かの賭けでもありましたが、とりあえずは竜巻の足元を十分冷たい風で冷やしてやったのです」
なるほど、いくら強情な竜巻でも、足元を冷やされてはその身体を維持し続けることはできなかったらしい。
あっという間に消え失せていく竜巻の様に、朱音はほっと胸を撫で降ろした。何より、クリストフがこうして無事で戻ってくれたことが、何より嬉しいことであった。
ゆっくりと穏やかな風に変わりながら、二人取り巻く風は消滅した。
二人はそっと静かに地面の上に降り立った。
ヘロルドにによって利用された風達は、クリストフの優しい風に

助けられ、解放されたようだ。
　ヘロルドが破壊した王都の一部は、塵とゴミだけが残され、そこに存在した全てが消えてなくなってしまっていた。
　全ての力を消耗してしまったクリストフはよろけるようにして、地面に腰を下ろした。
「すみません・・・、情けないですが、わたしは当分動けそうにありません。少し休んでから、またきっと追いつきますので、貴女は先に行ってくださいね」
　疲労しきったクリストフは、もはや話すことも気だるい様子で、荒く息をしている。これ以上彼に無理を強いる訳にはいかない。
　まだ、闘いは終わった訳ではない。今、サンタシとゴーディアの騎士達も、きっと全力で王都の人々の避難をすすめてくれている筈だ。そして、今やこの地の王となったフェルデンは、ヴィクトル王が命を賭けて守ろうとしたこの国を守る為、きっと奔走していることだろう。
　朱音は突然ひどい目眩を感じ、その場に屈み込んだ。
「どうしたんですか、アカネさん・・・？」
　自分もひどく辛い筈なのに、クリストフが心配そうに朱音の表情を覗き込んでくる。
「・・・大丈夫です・・・、ただちょっと眠くて・・・」
　こんな時だというのに、急激な眠気が朱音を襲い始めていた。そして、その異変にクリストフ自身も気付いていた。今にも彼女が消えて無くなりそうな、そんな気配を彼は感じ取ったのだ。
　クリストフは朱音の肩をそっと抱くと、その耳元で優しく囁いた。
「アカネさん、もしわたしが貴女の全てを知っていると言ったら、どうしますか？」
　朱音は眠い目をこすりながら、クリストフの彫りの深い顔を見つめた。
「それ・・・、どういうことですか・・・？」
　クリストフはもう、朱音に限界が近付いていることを感じ取って

いた。
「アカネさん、貴女はもう十分よく頑張りました。いいえ、期待以上のことを成し得たんですよ。今、この国は崩壊寸前です・・・。ですが、貴女がこの国や人々を守ろうと動いたことで、魔族と人間の間には、共に闘うことを通して新たな絆が生まれ始めています・・・」
彼の言うことは正しかった。魔族と人間の長き争いは今、終結しようとしていた。
「それに、“自分探しの旅”の答えは、きっともう貴女の中で出ているのではありませんか？　そろそろここいらで旅を終息させませんか、アカネさん」
確かに、朱音は気付かない間に魔族と人間の長き闘いを終結に導いてきたのかもしれない。
けれど、この地ではまだ闘いは続いている。そして、この闘いは朱音自身が招いたものに他ならないことも事実。この闘いの犠牲になった人達が数多くいることもまた同じであった。ルイやヴィクトル王も例外ではない・・・。
これ以上誰も死なせる訳にはいかない。そして、誰よりもあの金の髪の騎士を思うと今ここで闘いをやめる訳にはいかなかった。
「駄目です。今わたしがここで投げ出したら、ルイやヴィクトル陛下、多くの人達の犠牲が本当に無駄になってしまう・・・。それに、アザエルはわたしを信じてファウストを追ってくれてるんです・・・」
朱音が消滅してしまうその時は、もうすぐそこまで迫っていることは、このひどい眠気がよく表していた。
「わたしは悪い男です・・・。どうか許してください。貴女に謝らなければならないことがあります・・・」
クリストフが何かを朱音に打ち明けようとしたとき、
「クロウ！！」
突然の呼び声に、二人は振り返った。

「・・・フェル・・・デン・・・？」
真白い馬に跨った金の髪の騎士が、馬の手綱を引き寄せ、じっと馬上から朱音を見つめていた。
「やっと追いついた！　ファウストを止めるのにお前の力が必要だ！　乗れ！！」
フェルデンは手を差し出した。
朱音はこくりと頷き、立ち上がる。
「アカネさん、今なら貴女を助けられるかもしれない。友人のわたしが止めても無駄でしょうか・・・？」
珍しくも、クリストフが懇願するかのように朱音の手を掴むが、朱音はその手をゆっくりと離した。
「ごめんなさい、クリストフさん。今行かないと、わたしはきっと後悔します・・・。だから・・・」
哀しそうに微笑むと、クリストフは解けた手をぐっと握り締めた。まだ彼の息はひどく荒い。
朱音はフェルデンの差し出す手を力強く掴んだ。逞しく優しい彼の手は、ひどく温かかった。
「行くぞ！　アザエルが王都の外れで奴を足止めしている・・・！」
フェルデンは白馬の腿を強く蹴った。馬は風のように駆け出す。
走り去っていく白馬の姿を見つめながら、クリストフは悲しい笑みを浮かべて呟いた。
「わたしは悪い男だ・・・。わたしはあの儀式の日、参列者に交じって、全てを見ていたんです。覚醒したクロウの中身が貴女だとを知って、わたしは貴女を利用した・・・。君なら、この世界の魔族と人間の争いを止めることができるかもしれないと、わざと城の外へ連れ出したのですから・・・」
そして、焦げ茶の瞳から一滴の泪を溢した。
「もう少し早く貴女に打ち明けるべきでした、アカネさん。そうすれば、きっと貴女は元の身体に戻ることができたかもしれないのに・

・・」

きっと、ファウストとの闘いを終える頃には朱音はもうクロウの中には存在しないかもしれない。クリストフはなぜかそんな気がした。

白い羽をひらひらと舞い降りさせながら、一話の白鳩がぼろぼろになった紳士の細い肩の上に舞い降りてきた。

「わたしは彼女の友人失格のようです」

白鳩は、静かにクリストフの頬に翼をすり寄せた。まるで、“悲しまないで”と、彼を励ますかのように・・・。

16話　黒幕

「あれだ！！」
フェルデンが馬の足を止めて見上げた。
その先では、赤い飛竜と黒い飛竜が空中戦を繰り広げている。王都から馬で一時間程離れたこの場所で、アザエルは朱音の願い通りファウストの足止めに尽力していたようだ。
ファウストは飛竜の背で得意の炎弾をアザエルに放ち、アザエルは今までに見たこともない攻撃を繰り出していた。彼の腕に蛇のように巻き付いた水は、意思に応じて自由に曲がりくねり、さまざまな方向へと攻撃の方向を瞬時に変えることができる。それはまるで、変幻自在の鞭のようにも見え、先は鋭い剣のように尖っていて、ときには同時に四方八方に枝分かれして攻撃を加えていた。
「どうやらやっとご到着らしいぜ」
ファウストはふんと鼻を鳴らすと、地上からこちらを見つめる二人の姿をアザエルに目配せした。
しかし、当のアザエルは、既に二人の存在があったことを知っていたかのように、目も向けず無反応なままファウストに新たな一撃を加えようとした。
「おっと、危ねえなあ！　あんた、自分の主人との感動の再会だろう？　ちっとは驚いたり動揺したりとか、なんかねぇのかよ」
アザエルの止まない攻撃を寸での所でかわしたファウストは、呆

れたような溜息をつき、美しい碧髪の男を見やった。
　無言のまま尚も攻撃の手を止めようとしないアザエルに、ファウストは“氷の男”と呼称されるだけはあると内心苦笑を漏らした。
「名残惜しいが、あんたの相手はここまでだ。クロウ王が追いつくまでに、俺はあんたを仕留めたかったんだが・・・。残念なことに、こっちも味方が到着しちまったみたいでな」
　ぐんと勢いよく赤い飛竜を反転させると、目にも止まらぬ速さでファウストは真上へ急上昇した。
　すぐに雲の上へと見えなくなってしまった赤い飛竜の姿を追おうとするが、スキュラは真横からの突然の強い突風に煽られ、それを妨害されてしまう。強く空中で揺すられ、スキュラは空中で数度回転しながらバランスをなんとか取り戻す。
　アザエルはその目まぐるしい中で視界の端に新たな人物の姿を捉えていた。
（ヘロルド・・・！！）
　じっと目を細め、アザエルは出現させていた蛇ような水を消失させる。碧く長い髪は、流れる水のようにたおやかに宙をひらひらと舞っていた。
　しかしその美しい顔はどこまでも冷たく、そして何もかもを見透かしたような眼に、朱音は思わずドキリとしてしまった。
　その直後である。わざとなのか、そうでないのか、アザエルの身体がすっと宙を回転し続けるスキュラの背から離れ、落下していった。
「アザエル！！！！」
　咄嗟に叫んでいた朱音だったが、アザエルは地面に直撃する直前に、多量の水を地に出現させたのだ。
　朱音が実際にこの術を目にしたのは、これで三回目になる。流れ出た水の上に、流されることなく自然に着地すると、アザエルは冷ややかな表情を相手に向けた。
　着地したアザエルのすぐ目の前に佇んでいたのは、ヘロルドその

人であった。
曲がった背に出っ張った頬骨。何度見ても虫唾の走るその姿に、朱音は思わず身震いする。
（あいつ、白亜城のあの高さから、落下して死んだんじゃなかったの・・・！？）
朱音は状況を飲み込めず、眉を顰めた。あの時、確かにアザエルの出現させた水流にのまれ、城の下へと押し流されていったヘロルドの姿を朱音は目にしていたのだ。
「クロウ、あの男はアザエルに任せ、俺たちはファウストを追うぞ」
フェルデンの声に我に戻された朱音は、こくりと頷いた。
『グルルル』
軽やかにスキュラが朱音達の跨る馬の前に舞い降りた。まだ幼い飛竜は、主人がこの場にやってくることを心待ちにしていたかのように、大きくぐりぐりした目を嬉しそうに朱音へと向けた。その背は、もう今すぐにでも乗せられるようにと差し出されている。
「スキュラ、わたしが来るまで、よく今までファウストを足止めしてくれていたね。さ、今からもう一飛びするよ」
馬から飛び降りた朱音は今にも目蓋の降りてきそうな眠い目をこすりながら、光沢のあるスキュラの背の鱗を優しく一撫でした。
「フェルデン、貴方のこの国を、きっと守ろうね！！」
朱音はフェルデンをスキュラの背に誘った。
幼い飛竜の子は羽を広げ、ぐんと空へと舞い上がった。二人の若き王をその背に乗せて・・・。

「なんの真似だ、ヘロルド」
既にアザエルの口からは敬称さえも消え去っている。
「無礼であるぞ、たかが罪人ごとき身分の者が」
鉤のような鼻に幾筋もの皺を寄せ、忌々しげにアザエルを睨んだ。

「無礼だと・・・？　一体なんの冗談だ。貴様のような卑しい反逆者に、なぜわたしが敬意を払わねばならぬ」

確かに、アザエルにとっては、ゴーディアの王であるクロウを陥れ、王座を乗っ取ろうとしているこの男は、反逆者以外の何者でもなかった。

「何だと・・・！？　さっきから聞いておれば、よくも・・・！この死に損ない目が！」

ヘロルドは怒りを露にし、ぶるぶると骨ばった拳を握り締めた。

「まあ、反逆者を排除するのにちょうどいい機会だ。」

アザエルは冷淡な微笑を浮かべると、手に水の剣を出現させる。

驚きで目を見開いたヘロルドは、無意識に一歩後ろへ下がり、ごくりと鍔を飲み込んだ。

しかし、懐に仕舞ってある重みに気付き、自らをいきり立たせた。

（何を怯えている・・・！　わたしにはこれがあるではないか・・・！　そうだ、わたしとて、この石さえあれば、奴と同等の魔力を携えていることに変わりは無いではないか・・・！　わたしは最高司令官という地位に相応しい魔力を持っているのだ・・・！！）

ヘロルドはくくくっと噛み殺した笑みを溢すと、鋭い眼光を放つ嫌らしい目をアザエルに向けた。

「何が可笑しい」

アザエルの不機嫌な声に、ヘロルドは返した。

「排除だと・・・？　笑わせるな、死に損ない。本当にこのわたしをそう簡単に倒せると思っているのか。今や、ゴーディアで国王の次に強い魔力を持っているのだぞ。そう、お前を除いてな！！」

そう言い終わらぬうちに、ヘロルドは節ばった両の指をアザエルに向けた。

「死ねえええええ！！！」

それはまさに一瞬だった。

アザエルは直感で危険を感じ飛び退いたが、それを完全に避けきることはできなかった。それはまるで目には見えない鋭く巨大な刃

が飛んできたかのようであった。
　ぼたぼたと赤黒い血を垂らし、アザエルが肩口を押さえた。掠っただけのようだったが、傷口はぱっくりと割れ、深くまで到達したようだ。
「・・・」
　この攻撃を胴に受けたとしたら、さすがのアザエルも一溜まりも無い。アザエル自身、この男の力を見くびり過ぎていたのかもしれない。
「ふん、うまく避けたな。だが、次は外さぬぞ!!」
　自分の攻撃が、アザエルを掠めたことで、一時的な興奮状態になっているヘロルドは、瞬きすらも忘れてしまう程、異常な汗を噴き出している。
　再び風の刃を繰り出そうとするヘロルドから、アザエルは少し距離をとる必要を感じ取った。今まで、この男の魔力を目にする機会のなかった分、その力は未知数だ。無闇に近付きすぎると良くない。アザエルの肩口の傷がその証拠であった。
　アザエルは手に出現させていた水剣を消失させると、両の手を地に翳した。
先程出現させた水流のせいで湿った地から、水が蒸気となって宙に上がり始めた。それは、すぐに真白い霧となり、ヘロルドの視界を遮る程までになる。
「小細工をっ・・・!」
　だがそれは、風使いを相手に通じる術ではなかった。ヘロルドは強風を起こし、あっという間に霧を吹き飛ばしてしまう。
　無論、アザエルもそのことを計算に入れてはいた。
　何も霧の中に身を隠そうなどという安価な考えではなく、単にこの男から間合いをとるだけの時間稼ぎをする為の策であった。お蔭で、アザエルはヘロルドから相手の魔力を伺いながら闘うだけの間合いをとることに成功していた。
「えらく逃げ腰ではないか、嘗ては魔王の側近と呼ばれたお前が・・

・」

ヘロルドの挑発するようなセリフに、アザエルは全く耳を貸そうとはせず、さてどうやって相手の弱点を見極めてやろうかと冷静に思考していた。

「だがな、俺からそんな距離をとったところで、お前には俺の攻撃は読めぬだろう」

ヘロルドは構わずに腕を振り上げた。

再び放たれた風の刃。目に見えぬ攻撃に、アザエルは勘を頼りに避けることしかできない。

またもや、避けたと思われた攻撃は、僅かにアザエルの足の腿を掠めていった。

ぱっくりと裂けた傷からは、また血が流れ出す。いくら致命傷ではないとは言え、このままこうした傷を受け続けるとなると、いずれ身動きが困難になる筈だ。

ヘロルドは、またもや自らの攻撃がアザエルに命中したことに興奮を覚えていた。そして、自分がもしやこの碧髪の男よりも上なのではないか、という自信を感じ始めていた。

「次は胴と首を切り離してくれるわ！」

ヘロルドが腕を振り上げた瞬間、アザエルは分厚い水の壁を作り上げた。

「そのような柔い盾など、わたしの風のや刃には通用せぬ！！」

放たれた見えない風の刃は、びゅんっと横切り、アザエルの水の壁に勢いよくぶち当たった。

いとも簡単に水の壁を通り抜けた風の刃だったが、なぜかアザエルに到達する前に、彼はすっとその攻撃を余裕有り気に回避していた。

今度は、傷一つ見あたらない。

「な、何！？」

アザエルはヘロルドの単純すぎる攻撃を完全に見切っていた。もうこの攻撃はアザエルには通用しない。

風の刃が水にあたる瞬間に、アザエルはその進路を予測するという対抗手段を編み出したのだ。
（なるほど・・・。高い魔力を持つ割に、攻撃の工夫がなされていない・・・。闘いに対してはまるで素人か・・・）
最近になって、初めて実戦に出たヘロルドの闘いでの経験はひどく浅く、未熟なものだった。更に、無駄な動きが多いことから、剣術が長けていないこともすぐに感じ取れたし、僅かな戦闘で荒い呼吸を繰り返していることからは、体力の低さも相当のものだ。
即ち、この男は雑魚。アザエルの見解はこれだけで十分であった。

アザエルは比較的離れた距離でも攻撃可能な水針を放った。
ヘロルドは、反撃されたことにひどく動揺していたようだったが、すぐに得意の突風でその水針を吹き飛ばすことに成功した。
ヘロルドには、高い戦闘力も経験も技術も無い。しかし、厄介なことに、それに見合わない程の魔力を持っていた。
（不可解だ・・・。なぜこれ程に未熟な男にこれ程の魔力が備わっている・・・）
腑に落ちず、アザエルは碧い目を静かに細め、ヘロルドの姿を見つめた。
「アザエルよ。このような攻撃が俺に通用すると思っておるのか？」
ヘロルドの卑下た笑みに、不快さを露わにし、アザエルは珍しく口を開いた。
「貴様、それ程の魔力を持ちながら、なぜ今まで軍で名声を得なかった」
実際、最高司令官の地位にあった時でさえ、この男の姿は軍で見たことは無かった。ただ、たかが元老院中の老人の一人息子ということもあり、魔城で数度見かけた程度である。
今となっては、この男が軍に所属していたのかどうかも定かではない。もしいたとすれば、軍の最下層周辺にいたとしか考えられない。

そう問われた瞬間、急に顔色の変わったヘロルドは、それを誤魔化そうとするかのように、口をへの字に曲げ、押し黙った。

アザエルはふと考えを巡らせる。魔城で最後にこの男を見かけたのはいつだったかと・・・。

思い起こせば、アザエルが罪人として魔城を出るまでの向こう数年間はこの男を魔城で見かけていなかったようにも思える。

「いや・・・。軍人でさえないという訳か・・・」

そうなれば、ヘロルドは金と権力を傘に生きる、卑怯で脆弱なただの貴族階級の中の一人ということになる。そんなたかが貴族階級の無能な男が、数年の空白の後、クロウの復活とルシファー王の死去が知れた途端突如として帰国。そしてうまい具合にアザエルの後釜として最高指令官という地位におさまった。

この男よりも、指令官補佐役を務めるライシェル・ギーが、全てにおいて勝っている上、地位的なものや信頼できる点からすれば、クロウの側近として相応しいのはライシェルだということは明らかだ。それなのに、その彼を差し置いてまでこのヘロルドは今の地位に就いた。これは、どう考えても裏があるとしか言いようが無い。

ヘロルドは鋭いアザエルの読みにびくつき、焦りを覚えていた。一刻も早く叩き伏せてしまわなければ、自分の弱点を見抜かれてしまうのでは、と恐れていた。

「くそう！！」

ヘロルドは、唾を撒き散らしながら、悪態をつくと、再び節張った手を構えた。

直後、巻き起こった強風が渦を巻き始める。それがつい数刻前、王都を飲み込もうとしていた巨大竜巻と同様のものだということは、アザエルにもわかった。そして、それをみすみす作らせてしまえば、厄介なことになり兼ねないということも。

アザエルは、兎に角ヘロルドの風を操る手元への集中を削ぐ為、先程自身の腕に巻きつけるようにして創り上げていた水の蛇を再形成した。凶暴な蛇は、すぐさま邪魔者を排除する為に勢いよく醜悪

な男へと飛び掛かる。
『ビチャッ！！』
しかしそれは、ヘロルドが放った風の刃にて叩き切られてしまう。
落とされた蛇の頭は水滴となって地面へと落下していったが、直後には再び蒸気となって元の蛇の本体へと吸収され、すぐに元通りの姿へと戻る。そして、剣のように鋭く尖った蛇の頭は、今度は三つに分かれて首をもたげる。
手元を狂わされたヘロルドは、再び巨大竜巻を創り始めるが、次に三方向から次々に攻撃を始めるアザエルの水の魔術に、咄嗟にその手を緩めて防御体勢をとった。動きの速い三つの蛇の頭を同時に風の刃で叩き落すことは難しく、攻撃の直前突風でそれを妨害するしか手立てがない。
そのせいで、ヘロルドは仕方無く竜巻をつくることを一旦中断して守りを固めるのに気持ちを集中する他無くなってしまった。竜巻は、弱いつむじ風に変わり、ゆっくりと静かに消えた。
それでも、アザエルは自分の攻撃がヘロルドに届くまではいかないことに苛立ち、一気に蛇の頭を十数個に増やした。
十数個に増えた蛇はぐねぐねと曲がりくねり、またもや一度にヘロルドの首目指して飛び掛かる。少し怯んだかに見えたヘロルドであったが、その攻撃も見事突風で妨害して見せた。
アザエルはじっと目を細め、無表情にその卑劣な男を見つめていた。
ヘロルドの背に冷たいものが流れ落ちた。
（ひっ・・・！！）
そのなんと無慈悲で冷たい眼差しに、ヘロルドは恐怖していた。
（こ、殺される・・・！！！）
ぶるりと身震いした後、ヘロルドは青い顔でその恐怖をなんとか一掃しようと試みる。
（な、何を考えていた。殺されるだって・・・？　そんな馬鹿な・・・。魔力の強さならば奴とさして違いは無い筈・・・！　このわた

しが殺られるなどあるまい！！）

いつの間にか、アザエルの手に創り上げられていた水の蛇の姿が消えていた。

ゆっくりと近付いてくる魔王の側近の右の手には、みるみる水が凝縮され、鋭く美しい剣へと形成されていく様を、ヘロルドは瞬きも忘れて見入っていた。

“怖ろしい”

この目の前にいる男は、まさしく魔王の側近に相応しい男だとヘロルドは今更ながら実感せずにはいられなかった。強い魔力に加えて、凄まじい程の威圧感。これは、長年の闘いで培われてきたもの。即席の魔光石の力などで今の地位を手に入れたヘロルドにはそもそも敵う相手では無かったのだ。

最後の足掻きで、ヘロルドは懸命に風の刃を放ちまくった。持ちえるスピードと力を込めた攻撃は、剣を構えていない反対の手で、瞬時に作り出されていく水の膜にぶち当たると同時に、いとも簡単にその男に避けられてしまう。もう、アザエルは完全にヘロルドの考えを掌握していた。ワンパターンな攻撃に、少々イラついてすらいた程だ。

あっという間に間合いを詰められてしまったヘロルドは、いつの間にかアザエルの剣が届く距離にいたことに驚き、腰を抜かした。

「・・・終わりだ」

アザエルの呟くようなその声と同時に、水剣が真上から振り落とされる。

「ぐふっ」

くぐもった呻き声を上げると、ヘロルドは自身を貫く水剣とその冷ややかな男を見上げた。

一振りで命を絶つこともできたのに、アザエルの剣はヘロルドの急所をわざと外した右胸に深く突き刺さっていた。

ヘロルドの苦しむ姿に気にした様子もなく、空いた手でヘロルドの服の腹部を弄り始めた。

「や・・・めろ・・・！」
懸命にその手を払おうとするが、水剣をまた深く差し込まれ、痛みにその手を離してしまう。
「やはりな・・・。魔光石か。そんなことだろうと思っていた」
見つけ出した赤黒い石の塊を手にすると、アザエルは口元に冷ややかな笑みを浮かべた。
「は、早く・・・殺せ・・・！」
「苦しいか？　生憎だが、貴様を楽に殺す気は無い。我主を陥れた罪、そう簡単に許されると思うな」
アザエルは突き刺していた剣を一気にヘロルドから抜き去った。
「ぐあああああ！！！」
あまりの痛みに白眼を剥き、痙攣するヘロルドをアザエルは靴の踵でぐいと転がした。
「貴様に聞きたいことがある。この石をいつどこで手に入れた」
ヘロルドは口の端から血を垂れ流し、虚ろな眼でアザエルを見上げた。
しかし、その口からは何も発せられない。
「そうか」
水剣が再び落とされ。今度はヘロルドの左腿に深く突き刺さる。
「ぎあああああああああ！！！」
悲鳴を上げるヘロルドに、アザエルは感情の篭らない声でもう一度問い掛ける。
「この石の出所はどこだ？」
呻き続けるヘロルドを甚振るように、アザエルは突き刺さった剣先をゆっくりと抜いてゆく。
この男を敵に回してしまった自らに深く後悔しながら、ヘロルドは痛みに声が嗄れる程叫んでいた。
「次は右脚だ。貴様が口を割らなければ、一本一本指を切り落としていくのもいい」
これ以上の苦しみには、もうヘロルド自身堪えられそうに無かっ

た。
「べ・・・」
何か言おうとして口を噤んでてしまったヘロルドに、アザエルは水剣の切っ先を右腿に見えるように宛がった。
恐怖で震え上がりながら、ヘロルドは涙と血でぐしゃぐしゃになった顔を歪ませた。
「ベリアル・・・王妃・・・から戴いたもの・・・だ・・・」
アザエルはほんの少し眉を動かした後、ヘロルドの右腿に容赦なく、水剣を突き刺した。
「があああああああああ！！！！」
またもや襲ってきた痛みに、ヘロルドは咽び泣いた。
「楽になりたければ全て話せ」
アザエルの拷問は、ヘロルドが失血死するか、口を割るまで終わりそうには無かった。
ヘロルドは、痛みに堪えながらも、この苦しみから解放されたい思いで、洗いざらい全てアザエルに口を割った。

魔族の中でも貴族の家系に、しかも元老院の子として生まれたヘロルドであったが、その肉体には魔力はほんの僅かにも備わってはいなかった。
容姿も父親によく似て、見た目も良く無い上、痩せ身で運動神経も良くない。更に悪いことに魔力も無いとなれば、親からもよく家の恥だと疎まれた。周囲からも、名ばかり貴族だと蔑まれ、無能な我が身を呪って日々を過ごすのみ。暴力こそしないが、まるで息子がそこにいないかのような父の扱いを受ける度に、いつか父を追い抜いて見返してやると、堪え忍んできた。
そんな時、ヘロルドの手元に、あるパーティーの招待状が届いた。
見るからに高級な紙に、高貴な者の主催であることは分かったのだが、奇妙なことに、差出人の名前は一切書かれていなかった。ただ、ヘロルドへの宛名のみ。そして、“貴殿に折り入ってお願いし

たいことがある”というメッセージが添えられていたのだ。
パーティーの開催場所は、大陸から離れた場所にある小さな島であった。
他の者には一切届いていない様子の招待状。そして差出人も不明。
もしかすれば、何か良からぬ者の手による、金絡みの犯罪行為かとも疑ったが、数週間後にはなんとその主催者は高級な馬車と案内人をヘロルドに寄越したのだ。
ヘロルドはパーティーの招待を受けることにした。
無力な自分に、何も失うものなど無いと開き直ったのだ。そして、これ程のことを為せる主催者とやらに、些かの興味が湧いた、というのもあったであろう。

「行ってみて、驚いた・・・。主催者は・・・、ゴーディアを追放された、あのベリアル王妃・・・だったのだ・・・」
呻くようにそう話すと、ヘロルドは虚ろな眼をアザエルに向けた。
「そして・・・、王妃はこの魔光石を・・・下さった・・・。その代わりに、こうお願いされた・・・」

『ヘロルド、その石を貴方に差し上げる代わりに、ゴーディアの次期国王の座を手に入れることを誓っていただきたいの。そして・・・、その時はきっと、わたくしをあの城へと呼び戻してくださると約束して』

「お前のような、有能な男にはわかるまい・・・。ベリアル王妃が、どれだけこれまでお苦しみになってこられたか・・・」
アザエルは冷たい眼を向けたまま、ヘロルドを見下ろしていた。
「だが・・・、もう全てが手遅れだ・・・。兵は放たれた・・・」
水剣を静かに振り上げると、その切っ先はヘロルドの心臓を突き刺していた。
事切れたヘロルドの眼から光が消え、それきり、男はぴくりとも

動かなくなった。
この二百年という歳月の中で、アザエルはベリアルの存在を忘れた日は無かった。しかし、再びその名を耳にする日が来るとは予想だにしていなかった。
水剣を消失させると、アザエルは静かに地を濡らす血溜まりを見つめていた。

17話　信念を掛けて（前書き）

またまた長い間、お休みをいただいてすみませんでした。
いよいよ、最後の闘いの幕が上がりました。どうぞ、もう少しお付き合いいただければと思います。

17話　信念を掛けて

朱音はもう何も怖れてはいなかった。

今、こうして何より守りたかったその人に必要とされ、手助けできる喜び。そして、きっと最期のときになるであろうこの一瞬一瞬を、どんな状況であれ、この人と共に過ごすことのできる幸せを。

神、いや、この世界の言い方に直せば、“創造主”なのかもしれないが、彼の人が朱音にくれた最初で最後、そして唯一の贈り物なのかもしれない。

（この世界に来たときは、自分の不幸を呪ったけど・・・、悪く無かったかもね、わたしの人生・・・）

風を切って飛ぶスキュラの背に跨り、頼りない朱音の身体を支えるようにして、逞しいフェルデンの腕が回されていた。その手はあまりにも暖かく、そして背中ごしに伝わる温もりと鼓動に朱音はほんの少し泣きそうになった。

クロウの身体で覚醒した後、もうこんな近くで彼と過ごすことは二度と無いだろうと諦めていたというのに、どういう訳か今こうして二人は一頭の飛竜に乗っている。これは朱音にとって奇跡か夢のようにも思えた。たとえそれが、朱音自身の正体を明かさないままでいることになったとしても・・・。

朱音はその反面自らに重い罪の意識を抱えていた。

愛するが故に許すことのできない自分自身の行い。自分可愛さとフェルデンを守るという言い訳を理由に、自分勝手にも魔城を離れたこと。そのせいで望まぬ戦が始まり、ルイのみならず、そしてフェルデンの愛する実の兄ヴィクトル王を死へと追いやってしまった。そして今やこのサンタシ国さえ危機に瀕している。守るどころか、フェルデンを苦しめることばかり繰り返してきた自分をどうしても許すことができないのだ。そして、あの夜、肩に大怪我を負ったフ

エルデンを見捨ててゴーディアへ去ってしまったことについても、まだ罪の清算はできていない。
（だけどきっと、貴方だけは守ってみせるから・・・！）
朱音はきっと白く広がる雲の先を睨んだ。

「いたぞ！」
フェルデンの声と同時に、赤い竜の尾っぽが雲の合間に覗き、スキュラは勢いよくそれを追う。
雲を突っ切ると、一面の青空が広がり、太陽がもの凄く近く感じる。
追いつかれてしまったことに舌打ちをしたファウストは、片手で乱雑な火弾を浴びせかけてくる。しかし、すばしっこいスキュラはその攻撃を悠々とかわしてゆく。スピードから言えば、あの赤い飛竜よりもスキュラが上のようだ。
しかし、ファウストの赤き飛竜はスキュラより一回り大きく、厄介なのは口から炎を噴射するところだ。上のファウストの動きばかりに注意を払っていると、下の赤い竜の攻撃に不意打ちを喰らいそうになる。かといって、この高さと速さの世界では兎に角この赤い飛竜の姿を見失わないこと、振り切られないようにすることに集中する他無い。
「くそっ、これじゃ反撃するどころか、下手に近付くこともできない・・・！」
フェルデンはもどかしさで拳をぎゅっと握り締めた。
“なんとかしなきゃ”
と考える反面、朱音はこんな状況にも関わらず、襲ってくる強い眠気に懸命に闘っていた。今ここで眠ってしまっては、何の意味もない。朱音はまだここで眠りこける訳にはいかなかった。しかし、それは抗うことのできない強烈なものでもあった。今、朱音はフェルデンとこの世界を守るという強い意志のみでなんとか目を開けている状態である。

「どうした！　最強の魔力を持つ魔族の王と、サンタシ一の騎士が二人揃っていながら、俺に手も足も出ないってか？　俺を力ずくで止めてみろ！　さもなきゃ俺はこの国を全て焼き伏せてやるぜ」

挑発するように、にやりと笑みを浮かべると、ファウストはくるくると空中で赤い飛竜を回転させて急降下していった。

「追うぞ！！」

フェルデンの声と同時に、ふわりとスキュラの身体が翻り、その後を追うように真っ逆さまに落下していく。羽をぴたりと畳んだスキュラの身体は風の抵抗がほぼ無いかのようにもの凄い速さで落ちていく。

朱音とフェルデンは命綱も何も無い状態で、落下による無重力を味わっていた。

内臓が全て浮き上がったような感覚。スキュラから滑り落ちてしまえば命が無いということもわかってはいたが、すぐ隣にフェルデンがいるという事実だけがどういう訳か朱音に落ち着きと安心感をもたらしていた。

赤と黒の二対の竜が平行するように並んで落下する中、ファウストは攻撃の機を逃すことなく炎弾を打ち込んでくる。

しかし、その距離は思った以上に近く、落下中のスキュラが回避できる時間も無かった。

（まずい・・・！！）

フェルデンが、ファウストの炎の威力にただの剣で対抗できる筈も無いことは重々理解してはいたが、自らの剣を咄嗟に抜き、炎弾を防ごうとした。

しかし、それよりも前に、黒き煙がスキュラと二人を包み込むようなベール状に包み込み、どういう訳かファウストの攻撃はそれに弾き返されてしまう。

「何！？」

ファウストが叫んだと同時に、フェルデンは目の前の少年王の異変をすぐさま感じ取った。

細く頼りないまだ少年の域を出ないクロウの身体から、蒸気のような黒い靄が湧き上がっていた。それは意思を持っているかのように形を帯び、二人とスキュラの身体を危険から守っているかのようであった。禍々しい筈のそれだったが、なぜか一切の殺気は感じられない。

「クロウ・・・？」

朱音は身体の底から眠っていた何かが開放されたのを感じていた。なぜかこれは、以前はこれをうまく使いこなせなかったものだとも知っていた。そう、クロウがまだ永い眠りにつく以前、魔王ルシファーから受け継いだ強大なそれを・・・。

スキュラとフェルデンの心音。唸る風。温かい太陽の光。僅かな距離にいる赤い竜の息遣い。そしてファウストの息を飲む声。ゆっくりと静かに朱音の耳にその全ての状況が流れ込んでくる。朱音を取り巻く全てがまるでスローモーションになったかのように、ゆったりと心地よく響いてきた。

（ああ・・・、これが皆が話していた魔王ルシファーの力なんだ・・・。こんな力があれば、この世界の頂点に立つことなんて、ルシファーにとってはなんでもないことだったのに・・・）

今なら指先を軽く動かしただけで、地を割り、隆起させ、邪魔な者は全て排除できることなど他愛もないことだと朱音は思った。そして、そんな力を持っていたルシファーが、どうしてこうまでして多くの犠牲も厭わずに世界の頂点に立とうともせず、ゴーディアという国の中で止まったのか。そして、国力のみでサンタシから自国を守ろうとしたのか。ふとそんな疑問が駆け抜けた。

「クロウ！！」

フェルデンに肩を掴れて、朱音は今の状況をはっと思い出した。

今尚勢いを止めることなく落下し続ける二対の竜の下には、いつの間にか地上が迫りつつある。しかも、気付かないうちに王都から別の町の頭上へと移動してきていたようであった。王都よりもこじんまりとしたのどかな町並みに、町の人々が行き交う姿が小さく確

認できる。
「スキュラ！！！」
このままでは街中に突っ込んでしまう。
慌ててスキュラに合図するが、勢いがつきすぎてしまった今、簡単にそれを止めることができない。
『グウウウウウ』
スキュラは喉を唸らせて懸命に方向を転換させようとするが、なかなか上体を起こすことができない。
そしてそれはファウストの飛竜も同じで、ファウスト自身もそのことに気付いて慌てているようであた。ファウストは、自分の攻撃が謎の黒い煙で邪魔されたことに気を取られ、僅かにその反応が遅れたのが最も大きな原因だった。
「ちっ！！」
ファウストは自分の飛竜が上体を起こすことが困難だとわかると、自ら飛竜から手を離した。尚勢いを止められない赤い飛竜は落下を続ける。だが、もう目前まで地上は迫っている。
町の人々が異変に気付き、天から真っ逆さまに落下してくる自分達を指さして目を丸くしているのが見えた。中には驚きで口をあんぐり開けている人も。このままでは、自分達だけでなく町の人達も巻き添えにしてしまい兼ねない。
「まずいっ！！！」
フェルデンも焦った声を上げた。
朱音は汗ばむ手を翳すと、そっとスキュラの背に宛がった。途端、勢いづいていたスキュラの身体がふわりと浮き上がり、徐々に上体を起こしていった。
一方、主人に見捨てられた赤い飛竜は今も勢いを止めることなく地上へ真っ逆さまに突進している。
『ぐぅぅぅ』
赤い飛竜の悲しそうな唸り声が聞こえた。
「待ってて、今助けるから！！」

朱音は上昇を始めたスキュラから、落下を続ける赤い飛竜へと腕を伸ばした。
「クロウ！！　どうする気だ！」
「大丈夫！！」
フェルデンの腕を摺り抜け、朱音は無謀にも赤い飛竜の背に飛び移った。
一歩間違えれば乗り移りに失敗していたかもしれないというのに、朱音にはどういう訳か一切の恐れが消え去っていた。なぜか今の自分なら成せないことは何もないという確信さえあった。
地面はもうすぐ傍まで迫っている。
朱音はスキュラにしたのと同じ要領で、ファウストの飛竜の背に自らの手を翳した。
フェルデンは、自分の目を疑うような光景にはっとした。
朱音が乗り移った直後、赤い飛竜の背に、あの黒い煙のようなものが集まり、あっという間に巨大な翼へと形づくったのだ。ふぁさりとそれが羽ばたいたのは、すでに地面から大人三人分程の距離であった。真下にいた人々は腰を抜かして身動き取れずにいる。赤い飛竜は優雅に上体を起こし、再び上昇を始めた。
（あれは・・・）
見上げると、スキュラの背にも同様の黒い翼が広げられている。それはまるで、ルシファー降臨の際の黒翼のようであった。
なんとか地面へ激突を回避した朱音と飛竜であったが、すぐ近くで物凄い炎風と音が響き、ほっとする暇もなく振り返った。ファウストが例のごとく、地面に叩き付けられるのを回避する為に、地上へ向けて炎を噴射したのだ。その巻き起こった熱風を利用してうまく地に着地するところであった。
もとは広場だったであろうその場所では、破壊された噴水の残骸が黒くなって散らばっていた。この場所に無関係な人達がいなかったことだけを朱音は切に願った。
ファウストの乱れた真っ赤な髪が、燃え盛る炎のごとく揺らめい

ている。その口には既に笑みは消え去っていた。
「ぬるい・・・。アンタ、まじでぬるいぜ。それだけの魔力を持っていたら、俺ならもっと有効活用するぜ」
ファウストは両の手に真っ赤な炎の玉を作り上げると、その二つを頭上で合体させて、更に大きな炎弾に成長させた。
「クロウ!!　逃げろ!!」
赤い飛竜に向けて放たれた強い威力を持った炎弾に、朱音は慌てて黒いベールを被せようとするが、身体の大きな赤竜全体を保護するにはほんの僅かに時間が少なかった。
まさに一瞬のことだった。
赤い飛竜の肩方の翼を、ファウストの放った炎弾が無遠慮に焼き千切ってしまったのだ。痛みと熱さのあまり、飛竜はパニックを起こして暴れまくり、朱音は振り落とされそうになる。
「クロウ!!　掴まれ!!」
朱音が赤い飛竜の背から弾け飛んだ瞬間、スキュラとその背のフェルデンが華麗にその軽い身体をキャッチしてみせた。
「大丈夫か？」
「なんて酷いこと・・・」
朱音は苦しみながら片羽になってしまった赤い飛竜がふらふらと町外れの方へと飛び去っていくのを涙を浮かべて見つめていた。
「ファウスト・・・！　どうしてあんな酷いことができるの!?あの子はあんたの友達なんじゃないの!?」
朱音は怒りで思わず叫び出していた。
「友達・・・？　そんな甘ったるいもんは俺には要らない。俺に必要なのは、強さだけだ」
ドラコの仲間を灰にして同化した後、ファウストの中の何かが変わってしまっていた。
「俺を止めたけりゃ、俺の息の根を止めることだ。クロウ陛下。あんたがぬるい考えを捨てないんじゃ、俺は容赦なくこの町さえも灰に変えてやる」

ファウストは、炎弾を町に向けて放つ構えをした。
「やめて!!　これ以上罪の無い人を傷つけるなんて、絶対に許さないから!!」
朱音が止めようとスキュラに合図を送ろうとした瞬間、フェルデンがそれを静止した。
「待て、クロウ!　何か様子がおかしい・・・!」
じっと耳を澄ませば聞こえてくる・・・。何百という馬の蹄の音。轟・・・。
地平線の無効から少しずつ見え始めたのは、黒地の旗には真っ赤な蛇が二匹絡みつくような紋様が描かれている、騎馬隊の大軍・・・。
「あれは一体・・・」
「見たことのない蛇の紋様・・・。あんな大軍、いつの間に・・・」
ファウストは一瞬戸惑いはしたものの、自らの使命を全うするために、手を街へと構えた。
朱音はもう自分のすべきことはわかっていた。スキュラを反転させ、自分の足で着地できる高さまで高度を落とさせると、ぎゅっとフェルデンの逞しい手を最後に握り締めた。フェルデンは何かを感じ取ったかのように、大きく目を見開いた。
「フェルデン!　行って!!」
飛び降りると同時に、朱音はファウストに向けて黒い煙を放った。
スキュラはフェルデンを乗せたまま再び空へ舞い上がると、勢いよく迫り来るとま大軍に方向転換した。
(クロウ・・・、まさか、君は・・・!)
手を握られた瞬間、フェルデンは信じられない思いで地上に舞い降りた少年王の美しい姿を返り見た。彼が首からさげていたチチルの香油の小瓶が僅かに覗いたのだ。フェルデンの中でのクロウへの疑問は確信に変わった。
迫りくる騎馬隊の勢いは止まることなく、尚も蹄を轟かせてこちらへ賭けてくる。

フェルデンはその思いを断ち切るかのように様騎馬隊の真上へとスキュラを素早く移動させていった。

しかし、内心では今直ぐにでも少年王の元へと舞い戻り、事の真偽を確かめたい思いでいっぱいだった。そして、こんな状況で無ければ、少年王の傍でともにファウスト討伐に加勢したいところだ。だが、この状況がそれを簡単には許してはくれまい。

「止まれ!!　指揮者は誰だ?!」

フェルデンは、スキュラに乗り、軍の頭上から投げ掛けた。

初めて飛竜を目にした者たちから、僅かに息を呑む音が聞こえてきたような気がしたが、フェルデンはまるで気にも止めなかった。

「我らはザルティスの神兵。創造主の元に集いし革命軍だ。そちらこそ何者だ」

馬を走らせることを止めないまま、赤と黒の塗りの施された甲(かぶと)を被った騎士が返答した。

「おれはサンタシ国ヴィクトル・フォン・ヴォルティーユ陛下に継いで即位した、新国王フェルデン・フォン・ヴォルティーユだ。もう一度言う、止まれ!」

尚も馬の足を止めようとはせず、騎士がちらりとスキュラの上のフェルデンを見やった。

「なに、サンタシの国王だと・・・?　なぜ国王が王都の外のこんな街はずれにいる?」

「王都をゴーディアに攻め入られたからだ。おれはその中の一人を追い、我国を守る為に今ここにいる。だが、そこへお前達がこうして突然現れた。国王であるおれの許可なくおれの国で武力を行使することは許しがたい。一体お前達の目的は何だ!」

騎士がどうどう、と馬を静止させると、「皆の者、止まれ」とやっと静止をかけた。軍の前進が一旦中断された後、騎士は馬を素早く降りると、甲をはずして頭を垂れた。

フェルデンはその様子を見て、スキュラをゆっくりと着地させた後、地面に降り立ち彼の前に立った。

「サンタシ国の王とは知らず、無礼な振る舞いを失礼した。我はクロード・シャルパンティエ。この軍の指揮を任されている」
甲の下から現れたのは、利発そうだがどこか抜け目の無い三十過ぎの男の顔であった。
馬から降りると、彼がそれ程長身ではないことが伺えたが、胸甲の上からでも、彼の身体が十分に鍛えぬかれていることは明らかに分かる。
彼らが身につけている胸甲は、奇抜な形をしており、フェルデンが嘗て見たこともないものだった。
「ザルティスの神兵と言ったか？　お前達の目的は何だ。サンタシ国を脅かすものだと言うなら、おれは容赦はしない」
これ程の大軍を相手にたった一人と言うのに、フェルデンはまるで怯む様子も無く、一国の王たるに相応しく堂々たる態度である。
「サンタシ国の王よ、心配なされるな。我らの目的はサンタシ国を乗っ取ろうとするものではない。寧ろ、創造主を崇め、敬う点からすれば貴国の民とは同志だとも言える。我らは唯一絶対の神である創造主のご意思に従い、立ち上がった神兵なのだ」
「同志・・・？」
フェルデンはクロードの心の内を読もうと訝しげに眉を顰めた。
「いかにも。我ら絶対の神、創造主は魔王ルシファーの手により長き間蔑ろにされてきた。それだけでも耐え難い屈辱であったが、我らは耐え忍んできたのだ・・・。にも関わらず、魔王の息子は自らの力に溺れ、痴態の限りを尽くし、このレイシアを危機へと陥れたのだ。一時は平和を取り戻しつつあったこの世界を・・・！」
フェルデンはこの目の前の軍が一体何を目指しているのかを知った途端、手の平が僅かに汗ばむのを感じた。
「・・・お前達の目的は、クロウなのか？」
含みのある笑みを浮かべると、クロードは答えた。
「味方の出現というのに、あまり嬉しそうではないようだな・・・。サンタシの王よ、貴方が追ってきた敵というのは、この先にいるク

ロウ王ではないのか？」
　これは不味いことになった、とフェルデンは思った。まだ少年王とファウストのいる場所までは少し距離があるものの、この距離ならば直ぐに追いついてしまうだろう。
　以前のフェルデンならば、この思いも寄らない助っ人に、まさに神の導きだと喜んだのかもしれないが、今のフェルデンにとって、このザルティスの神兵達の出現は、物事をより面倒にするものの他以外の何でもなかった。
「残念だが、この先にクロウはいない。今すぐおれの国から去れ」
　これ以上、問題をややこしくすることはできない。それに、クロウの正体に気付いてしまったフェルデンは、なんとしても最悪の事態から彼を守りきらねばならなかった。
「・・・？　なぜそのような見え透いた嘘を・・・？　これがある限り、奴がこのすぐ近くにいることはわかっている」
　クロードが取り出したものは、奇妙な光を放つ魔光石であった。
「その魔光石は・・・」
「これはその昔、我らが祖先ザルティスの神官が魔王ルシファーの血のみで作り上げた魔光石だ。主が近ければ近い程、この石が反応し光を放つ」
　いつの間にか、少年王とファウストの闘いは開始されていたようで、赤い炎がちらつき、ときおり破壊音が耳に届いてくる。
　フェルデンは、直ぐにでも彼の元へ駆けつけたい思いともどかしさでいっぱいであった。
（くそっ、どうしておれは彼をここへ連れてきた・・・！　そもそも、どうしてもっと早くに気付かなかった・・・！）
　ぎりと奥歯を噛み締めると、フェルデンはクロードに鋭い視線を送った。
「本当の敵はクロウではない！　彼は何者かに悪者に仕立て上げられただけだ。おれはサンタシの国王として、お前達をここから通す訳にはいかない！！　それでもまだここを通ろうとするならば、お

れは全力でお前達を阻止する！！）

フェルデンは、剣を鞘から抜き去ると、クロードに向けて構えた。

これだけの大軍にも関わらず、しんとその場が静まり返っている。

「サンタシの王よ、後悔するぞ」

クロードは脱いでいた甲を被り直すと、さっと同時に剣を二本抜いた。通常よりも細く少し短い刀身の剣を、彼は両の手に構えた。柄の部分には、旗と同じ紋様が刻まれている。

「我らの邪魔をする者は、たとえ何者であれ排除する！」

クロードから殺気が放たれた。

フェルデンの金の髪が、優しい風にふわりと流れたと同時、二人の騎士は互いの間合いに渾身の力を込めて踏み込んだ。

今この時、ゴーディアとサンタシの二人の王は、それぞれの信念のもと、一歩も退けない死闘へ足を踏み出したのである。

18話　旅の終焉

この町中でファウストの攻撃が始まれば、住民の被害は測り知れない。
（なんとかしないと・・・！）
ファウストは炎弾を街に放とうと手を振り上げた。
「やめて！！！」
朱音の意思でクロウの肉体から湧き出る黒い煙は大きな手の形になって、勢いよくファウストの放った炎弾を全て包み込んだ。
ぶすぶすと燻った後、朱音の黒い大きな手の隙間から灰になったそれがぱらぱらと舞い落ちた。
ファウストはにやりと笑みを浮かべると、再び炎の塊を作り出す。
「クロウ陛下。世界最大の魔力とやらは、そんなもんじゃねぇだろ？　本気を出してみな」
怖ろしいことに、ファウストはこの状況を楽しんでいた。
「もうやめて！　これ以上罪の無い人達を傷つけるのは・・・！ここじゃ闘えないね！」
「聞こえないね！」
ファウストは朱音の言葉を無視するかのように、次々に街へ向けて炎弾を放ってゆく。
懸命にそれを一つ一つ掴んでは消すという、地道な作業を繰り返すしかない朱音だったが、ファウストはその反応を見ては楽しそうに高らかに笑った。
「だんだんスピートを上げてくぜ。早く俺を殺さなきゃ、この街と住民が消えてなくなっちまうぜ」
徐々に速くなるそれに、朱音は必死だった。
ただ、この街の人達を守りたいという朱音の思いが、ファウストの放つ炎弾を確実に消してゆく。

「えらく粘るな。じゃ、これはどうだ？」
ファウスト攻撃の手が一旦止まると、ファウストは特大の炎を創り始めた。
めらめらと燃えるそれは、朱音にルイを失った日のことをありありと思い出させる。
「防ぐばかりじゃ俺を殺せねぇぜ」
あっという間に家一軒分はありそうな巨大な炎の塊になったそれを、ファウストは頭上に投げ上げると同時に回転をかけた。
「！！！」
頭上高くに投げ上げられた炎の塊は、回転しながら次々と炎弾を無作為に放ち始めた。
朱音が焦って、それを掴みにかかるが、次々に発射される上どこから放たれるのかが予想できない為、全てを掴みきることができない。
『びゅうううう』
唸りを上げながら朱音が掴み損ねた炎弾が街のあちこちに突っ込み、燃やしていく。
さっきまでのどかだった街並みが、みるみるうちに地獄と化してゆく。
人々の悲鳴があちこちで上がる。
炎に包まれゆく街に、朱音は震える手でそれでも尚炎弾を防ごうとしていた。
「あっちに気をとられて、本体の防御が疎かになってるぜ」
いつの間に近付いたのか、ファウストは朱音のすぐ背後に回り込んでいた。その手には見たこともない武器が握られている。
咄嗟に煙のベールでその攻撃を防ぐが、その分、炎の塊が放つ炎弾を防ぐ手が緩くなり、みるみるうちに街へと炎弾が着弾してゆく。
「あっ！！」
朱音は懸命に守ろうとした街が燃えて灰になっていく姿を愕然として見つめた。
「どうした、街を守るんじゃなかったのか？　早くなんとかしねぇ

と、まじで全部灰になっちまうぜ」
　ファウストの手に握られていると思っていたのは、炎で作り出した短剣であった。
（まただ・・・、またわたしは救えないの・・・？）
　朱音は悲しみに打ちひしがれ、そして、再び人々を救えなかったことに憤りを感じていた。
　今まで殺気が一切感じられなかった黒い蒸気のような気体は一層容量を増し、嘗て地下道で見せたときのように、朱音の身体を全て覆ってしまった。そしてぐるぐると渦を巻き始めたそれは、バチバチと電気を放ち、生暖かい不気味な風を巻き起こす。
「怒れ・・・、そうだ、あの時みたいにもっと怒れ！　そして本気を出せ、クロウ！！！！」
　ファウストは目論見通りに事が進んだことに、興奮を抑えることができず、額を伝う奇妙な汗をぐいと拭った。ファウストは、朱音がこうなる瞬間を待ち望んでいたのだ。
　メキメキと音を立てて地面にひびが入り、地がぐらぐらと揺れる。あれだけ晴れ渡っていた空が、いつの間にやら朱音の身体から発せられた黒い煙で雨雲ように街全体の空を覆い尽くされ、辺り一面を暗くしていた。
　ファウストは炎の剣を構えると、朱音に突っ込んで行った。
　直前で、『バチイ』と電気が走り、ファウストを邪魔したが、炎で作った防壁でそれを弾き返すと、構わずに朱音の身体目掛けて踏み込んだ。
「何っ！？」
　そのとき初めてファウストは地下道での様子と、今の朱音の様子が少し違っていることに気付いた。
　あの時の朱音の眼は、怒りと哀しみで何も映してはいなかったというのに、今の朱音の眼はそうでは無かった。黒く大きな美しい目は、哀しげな色を含ませてはいたが、我を失ってなどいなかった。それだけでなく、ひどく憐れんだ瞳をファウストに向けてじっと見

つめ返してくる。
ファウストの炎の剣を握った手は、どこからそんな力が出ているのかと疑いたくなる程の握力で、しっかりと掴れていた。
「そ、そんな目で俺を見るんじゃない・・・！」
ファウストが怒り任せに掴れた手を振り切ろうとするが、どうやってもその手を振り切ることができない。
ファウストの手を掴んだまま、朱音は曇った空をゆっくりと見上げた。
ポツリ、ポツリ、と水滴が落ち、朱音の頬を濡らした。
（雨・・・！）
炎を使うファウストがもっとも苦手とする、雨だった。いくら多くの力を吸収して強くなってきたファウストとはいえ、雨は炎の魔力を弱める。
ザーと降り出した雨は、朱音の蒼黒の髪をしっとりと濡らし、雫を滴らせてゆく。
（こいつの仕業か・・・！）
ファウストは唇を噛み締めると、街の炎がみるみる雨によって鎮火される様子を見つめた。
頭上で回転しながら炎弾を放っていた炎の塊も、湿気には勝てず小さくなって消えていく。手に創り出していた炎の短剣も、すっかり威力をなくしてほとんど役に立たなくなっていた。
「殺せ」
尚、手を離そうとしない朱音に、ファウストは吐き捨てるように言った。
「嫌だ」
無言のまま見つめる朱音の目から視線を逸らすことができず、ファウストは身体を捻って両の足で朱音の身体に蹴りを入れようとした。
だが、朱音の身体を覆う黒い気体が、柔らかなクッションのようにその衝撃を包み込み、それさえもかなわない。

ファウストは、まだ生ぬるいことを言う朱音に、苛立ちを隠せなかった。
「忠告しておくが、今ここでおれを殺さなけりゃ、命ある限りてめぇを狙い続けるし、この世の全てが灰になるまで燃やし尽くすぜ」
「なんか勘違いしてるみたいだけど、わたしはあんたを簡単には許さない。死んで簡単に今までの罪から解放されるなんて考えてたら、大間違いだからね」
そう言って突然掴まれていた手を突き放されて、ファウストがよろめいた瞬間、朱音の身体がふわりと宙を舞った。
「！！！」
その直後、どうっとファウストが地面に倒れ込んだ。
顔に強い衝撃を受けた直後、痛みとともに口腔内に鉄の味が広がる。
「どうだ、新崎道場必殺回し蹴り！」
どうしてこんな緊迫した状況で、空手の技をファウストにお見舞いしようと思ったのかと朱音自身不思議に思った。けれど、なぜだかこの歳若い青年に、朱音の自身の渾身の一発を入れてやりたかったのだ。
ファウスト自身、まさか、朱音に蹴りを喰らわされるとは思ってもいなかった。
倒れたままのファウストを真上から見下ろすと、朱音は言った。
「効いたでしょ？　まともに入れば暫くは脳震盪で立てなくなるんだよね」
口元の血を拭いながら、ファウストは美しい少年王姿の朱音を見上げる。
「・・・何をする気だ」
「言ったでしょう、わたしはアンタを許さないって」
朱音は胸元にしまっていたルイのペンダント型のナイフを取り出すと、自らの手首にその刃を滑らせた。
痛みに眉を顰めるが、すぐその傷が癒えることを朱音はよく知っ

ている。
　ファウストは、危険を感じ取り、起き上がろうと試みるが朱音はその青年の胸に馬乗りになってそれを阻止した。
「くそっ！！」
　身動きを完全に封じられてしまったファウストは、抉じ開けられた唇に、雨水とともに生暖かい血液が流れ込んでくるのを感じた。
（やめろ！！！！）
　もがくファウストの口を朱音は無理矢理閉じさせると、それが完全に喉を通過するまで離さなかった。
「やっとわかった気がする。魔王ルシファーがどうして世界を我が物にしようとしなかったのか・・・。どうして国の力だけでゴーディアを守ろうとしたのか・・・」
　褐色のファウストの喉がこくりと動いたと同時、朱音はゆっくりとその手を離した。手首の傷はすでに塞がりつつある。
「この世界を、彼は誰より愛してたんだ・・・。だからこそ魔力でその全てを手に入れようとはしなかった」
　焼け付く喉にばたばたとのた打ち回るファウストの身体の隣に、朱音自身も力尽きたようにぱたりと倒れ込んだ。

「・・・眠い・・・」
　ぼそりと溢したその声の隣で、ファウストの苦しみが和らいだのか降りしきる雨音以外の静寂が訪れた。どうやら彼は意識を手放してしまったらしい。
　朱音は、もうこれ以上目を開けていられそうになかった。
（ごめんね、フェルデン・・・。最後まで貴方の無事を見守りたかったのに・・・）
　遠くの方で闘いの気配が感じ取れはしたが、もう指一本たりとも動かすのが億劫で、朱音はゆっくりと瞳を閉じた。

　雨が上がり、立ち込めていた黒い靄は晴れてゆく。

もとの温かく優しい太陽の光が、朱音を労わるように差し込んでいる。

「アカネ・・・」

何もない真っ白な世界に、朱音は膝を抱えてふわふわと漂っていた。

心地いいその空間で、朱音は最後に声を聞いた。

「・・・誰・・・？　すごく疲れたの・・・、お願いだから少し眠らせてくれない・・・」

うわ言のように返事した後、音も無く静かに現れたのは、もう一人の朱音、クロウだった。

「アカネ、君はよくやったよ。後は安心して僕に任せて・・・。もう眠っていいんだよ」

美しく優しい少年の声は、朱音の耳にひどく心地よく響いてきた。

「クロ・・・ウ・・・。長い間、身体を貸してくれて・・・、どうもありがとう・・・」

既に目を閉じている朱音は気付いてはいなかった。クロウは傍らで、静かに涙を流していた。

「礼を言うのは僕の方なんだよ、アカネ。君は僕・・・僕は君だったんだ・・・」

“おやすみ、アカネ”

クロードの剣とフェルデンの剣が激しくぶつかり合う。

両手剣を相手に闘ったことの無いフェルデンであったが、師であるディートハルトに鍛えられた剣筋は確かなものだった。

クロードのスピードはなかなかのものであったが、あのアザエル

に比べればまだ遅い。そして、細い剣での突きは、親友であるユリウスのものに比べれば威力は格段に劣っていた。

しかし、無駄の無い動きで、確実に剣を繰り出してくる積極性と、引き際をよく見知っていることから、クロードが相当の場を踏んできた男だということは闘いの中で感じ取れた。

「サンタシの王よ！　邪魔をするな！」

クロードの剣を受け止めながら、フェルデンは言った。

「それはおれのセリフだ！！」

フェルデンはクロードの剣を薙ぎ払った。

その衝撃でクロードの一方の剣が後方へと飛ばされ、地面へと転がった。

今や右手の剣のみになってしまったクロードはじっと攻撃の機会を見定めるかのようにじりと砂を踏み締めた。後ろに控えているザルティスの神兵達は、固唾を呑んでその闘いの行方を見守っている。

「我兵は創造主の御心なり！！！」

そう叫んだと同時、クロードは剣舞のような攻撃を繰り出した。

鮮やかで軽やかなるその攻撃に、フェルデンは一瞬の攻撃の為に剣を鞘に納めた。

意外なフェルデンの行動に驚いた者も多くいたが、その数秒後、勝負はあっという間に方が付いた。

とさりという音とともに、クロードの身体が地面に倒れたのだ。

じわりと砂の上に広がってゆく血だまりを見たとき、自分達の指揮者がこのサンタシの王の剣の前に敗れたことを悟り、ザルティスの神兵達は確かに怯んだ。

しかし、指揮者を失っても尚、前進することを教えられてきたのか、すぐに神兵達が剣を抜きフェルデンに襲い掛かる。

「くそっ！！」

フェルデンの前に、すっと現れた黒い美しい飛竜は、彼を背に乗せ空へ舞い上がった。

『グルルルル』

スキュラは、フェルデンを後押しするように、喉を鳴らした。

町の方では、いつの間にか火の手が上がっている。あの下ではファウストと少年王が凄まじい闘いを繰り広げているに違いない。

フェルデンは、この軍をこれ以上あの街へと近付けることはなんとしても阻止しなければならなかった。そして、少しでも早く、少年王の援護に駆けつける必要があった。それには、この人数を一人ひとり相手にしている時間と余裕などどこにも無い。

そんな時、ふとあの碧髪碧眼の魔王の側近の言葉が脳裏に蘇った。

“この国を救いたければ、石を使え。所詮つまらぬ意地だけで国を守ることなどできはしない。貴様の剣技に魔力が加われば、少しは使い物になるかもしれんがな。フェルデン王”

今まで、魔族の血から作り上げられた石の力を使うなど、考えるだけでも気分が悪くなったが、今こそそれを破る時だと、フェルデンは心を決めた。

スキュラを低空飛行させると、フェルデンは剣で馬上の騎士どもを薙ぎ払った。主を失った馬の背に、飛び乗ると、フェルデンは叫んだ。

「うおおおおおおおおお!!!!」

剣を一振りすると、周囲十メートル圏内にいる騎士がその斬撃で全て吹き飛んだ。

予想以上の魔光石の威力に、フェルデン自身も驚きを隠せなかったが、それはザルティスの神兵達も同じで、とてつもない力を持った者の出現に、皆が混乱を始めたようであった。

しかし、ここは一歩も退くことのできないフェルデン。馬を駆け巡らせては片っ端から神兵達を薙ぎ倒してゆく。何千といる兵を相手に、それはまるで限の無いものにも見えた。

さすがのフェルデンにも、少々疲労が見え始めた頃、突然後方で神兵達が馬から大量に転げ落ちるのが見えた。
（何だ・・・！？）
剣を振るう手を止めないまま、じっと目を凝らして見ると、碧く美しい髪をたなびかせた男が、静かにそこに立っていた。
「アザエル・・・！」
何も表情を浮かべないのは相変わらずで、感情の無い声で魔王の側近は言った。
「やっと少しは使える男になったか、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ」
神兵達はアザエルの姿を見た途端、蒼白になり、すっかり落ち着きを無くしていた。
アザエルはそんな神兵達に目もくれず、水針を無数に放つ。いや、すでにそれは水針ではなく、新兵達の血を吸った血の武器である。赤黒く鋭く尖ったそれは、相手の動きを止める為の釘や針という生易しいものではなく、短剣並の威力を持った凶器である。
それは、これほどの武器を瞬時に作り出せる程に、今この場所は神兵達の血で溢れ返っているということを意味していた。

二人は、何千という神兵を一人残らず倒した。
全てを倒すころには、フェルデンの息は上がり、信じられないことに、アザエルの額にも汗が滲んでいた。
一面に神兵達が横たわる光景を見つめ、フェルデンは剣を鞘にしまった。
「言っておくが、まだこれで終わった訳ではないぞ。このザルティスの軍はほんの一部に満たない」
アザエルの言葉に、フェルデンは驚愕し振り返る。
「一体どういうことだ！」
アザエルはその言葉に何も答えず、空から舞い降りたスキュラの背に軽やかに飛び乗った。

「おいっ！！」
スキュラはアザエルを乗せ、雨雲に覆われた街の方へと飛び去ってゆく。
街だけを覆った奇妙な雨雲はいつの間に現れたのか、さっきまで街を燃やしていた炎は、今や雨によって鎮火され、燻った黒い煙をあちこちから上げているのみだ。
（クロウ・・・！）
はっとして、フェルデンは乗り手を失って彷徨う一頭の馬に跨ると、少年王の元へと駆けた。
（無事でいてくれ・・・！！）

駆けつけるにはあまりに遅すぎたのかもしれない。のどかだった町は見る影もなく、破壊されていた。
きっと、ここでも多くの民が犠牲になったことだろう・・・。
フェルデンが馬で元いた広場まで戻った頃には、アザエルが少年王の身体を起こし、別の場所へと移した後であった。
少年王はぐったりとしたままぴくりとも動かず、透けるような白い肌に、濡れた黒い髪がしっとりとはりついている。
少し離れたところで、真っ赤な髪の青年が倒れているのが視界に入る。
フェルデンは信じられない気持ちでゆっくりと馬の背から降りた。
「死んだのか・・・？」
少年王の傍に立つアザエルは黙ったまま、主の顔を見つめている。
フェルデンは感じていた疑問をその魔王の側近にぶつけた。
「クロウはアカネなのか！？」
乱暴にアザエルの胸倉を掴むと、フェルデンは強い口調で言った。
「何とか言え！　アカネなんだろう！？」
アザエルは、冷ややかな声で言った。
「それが、どうだというのだ」
フェルデンは怒りに震える手で、アザエルの頬を思い切り殴った。

よろめいたアザエルはぴっと血を吐き出すと、フェルデンを碧く冷たい眼で見つめた。
「なぜ今まで黙っていた！」
「黙っていただと・・・？　ふ、なぜ貴様にわたしがそんなことまで教えてやらねばならぬのだ」
フェルデンは、少々この魔王の側近を信用しすぎていたことに後悔の念を抱かずにはいられなかった。
「やはり、お前はどこまでも冷酷な魔王の側近なんだな・・・」
フェルデンがそう溢したとき、少年王の身体がぴくりと動いた。
「アカネ！」
慌てて少年王の傍に駆け寄ると、ゆっくりと目を開いた少年王は小さく口を開いた。
「残念だけど、もう僕はアカネじゃない」
むくりと起き上がった少年王は、以前と変わらぬ美しい容貌であったが、どこかしら以前の様子とは違って見えた。
「おかりなさいませ、陛下」
アザエルは少年王の傍らで静かに膝をついて礼の形をとった。
「アザエル、長い間不在にしていて悪かったね。僕がいない間になんだかややこしいことになってるみたいだけど・・・」
フェルデンは、すっかり変貌してしまった少年王の姿を呆然と見つめた。
「陛下・・・、ザルティスの軍が陛下の命を狙っております。ベリアル王妃が秘密裏に集め、二百年の年月をかけて作り上げた兵のようです。おそらくは、あのブラントミュラーが深く関わっているかと」
「そうか、母上が・・・」
悲しそうに僅かに俯いた後、少年王は凛とした表情で顔を上げた。
「ザルティスの軍を一掃する」
「はっ」
呆然として立ち竦むフェルデンの存在に気付き、少年王クロウは

言葉を掛けた。
「どうしてアカネは貴方に自分の存在を最期まで打ち明けなかったんだろうね。僕にはそれがよく分からないよ・・・。だけど、確かに彼女はついさっきまで僕の中にいた」
「・・・愚かなのは俺だ・・・。アカネはこんなにも近くまで戻ってきていたのに、俺は盲目だった・・・」
フェルデンは問うた。
「もう、アカネは戻らないのか、クロウ」
「・・・・・・」
何もかもが遅すぎた。
フェルデンは自らを呪った。
どうして、ゴーディアへ遣いとして行った時に、彼女の存在に気付いてやれなかったのかと・・・。そして、あの夜、フェルデンは苦しむ彼女を更なる地獄へと追いやった。彼女の首に手を掛け、彼女を自らの手で亡き者にしようとまで考えたのだ。それにも関わらず、傷ついた心で尚も、朱音はフェルデンの傍で彼を守ろうとしていた。自らの最期の瞬間まで・・・。
「だけどね、フェルデン。アカネは貴方を少しだって恨んだりしていなかったよ。彼女は、誰よりも貴方を愛していた。僕がついつい妬いちゃう位にね」
クロウは黒曜石の瞳で優しくフェルデンに微笑みかけた。
「彼女は幸せだったよ」
フェルデンは強く目を閉じた。
今度こそ永遠に失われてしまった少女の面影を、記憶の中を辿って・・・。

１９話　魔王降臨（前書き）

これがこの長き闘いの最後の山場となる予定です。ほんとに長い闘いでした・・・。ほんとここまで読んで下さった皆様には感謝、そして感謝です。

19話　魔王降臨

クロウとアザエルは赤き竜の背に、フェルデンはスキュラの背に乗り、王都へと戻って来ていた。
片羽を失った赤い竜が、町外れの森の中で震えているのをクロウが見つけ、血の契約を結んだのだ。
赤き竜には、クロウは血の契約と引き換えに、失った身体の部分を何度でも再生できる力を授けた。そのお蔭で、赤き竜は新たな主人を得、新しい羽も得ることができたのだ。
しかし、王都は、すでにザルティスの軍に占拠されていた。
当初は数千の兵と考えていたザルティスの軍の規模だったが、これから判断するに、数千を優に超した数万はありそうである。
「僕を国外に逃がさない為に、あちこちに兵を散りばめたんだね・・・。この手回し、ほんと母上らしいよ」
ふっと悲しい笑みを溢すと、アザエルに言った。
「ね、これじゃあどこに降りても一緒だよ。ここら辺で降ろしてくれる？」
スキュラはクロウの言った通りに、くるりと空中で旋回すると、降下を始める。
破壊された王都の建物がはっきりと見え始めたとき、数百の矢が天に向けて放たれた。
「すごい歓迎だな・・・」
フェルデンは剣を抜き、次々と降り注ぐ矢を斬撃で薙ぎ落としてゆく。
言うまでもなく、クロウが指先を動かしただけで、身体から現れた黒い靄が薄いベールを作り出し、スキュラとその背に乗る二人を見事に保護していた。
自分達の矢による攻撃が、一切届いていないことを知るとザルテ

ィスの神兵が地上で慌てふためていている姿が伺える。
まるで何の障害も無かったかのように地上に降り立ったスキュラと赤き竜から丸く取り囲むようにして立ち塞がった。その兵の手には、どれも二対の蛇が絡みつく紋様が彫られた剣が構えられてる。
フェルデンはの表情は険しい。思わぬところから突然現れた者達の手で、このサンタシが占拠されてしまったことに、ひどく憤りを感じているようであった。
「君達に忠告する。命が惜しい者は今すぐ武器を置いて降伏して欲しい」
クロウはスキュラの背から軽やかに飛び降りると、取り囲む神兵達に言った。
「魔の国王の言葉などに耳を貸すんじゃない！」
「そうだ！　我らザルティスの神兵は命を惜しんだりはしない！貴様の首をとるまではな！！」
口々に叫ぶ声がし、クロウは黒曜石の瞳を静かに閉じた。
「創造主に代わり、地上界レイシアの幸福と平和の為、死んでもらう！！」
その声と同時、一斉に神兵達が二頭の竜と二人の若き王、そして魔王の側近に斬りかかった。
「うおおおおおおおおお」
大勢の兵達の凄まじい声が上がる。命をも顧みず、そこにいる誰もが自らの正義を信じ闘いに乗じていることは確かであった。
しかし、赤と黒の奇抜な胸甲の兵達は、フェルデンの剣の前に次々と薙ぎ飛ばされ宙を舞い、アザエルの無慈悲冷酷な血の剣の前に真っ赤な血飛沫を巻き上げて倒れていく。赤き竜は舞い上がり、頭上から炎を吐き出し兵に浴びせ掛けた。
王都は今、地獄絵図と化していた。
山のように折り重なってゆく屍の上を、アザエルの碧い髪が華麗に舞い、それとは対照的なフェルデンの剣が力強く振りおろされていく。その美しさは、この光景に不似合いな程の異様さを放っている。

「フェルデン陛下！　クロウ陛下！　我々もお供します！！」
突然神兵の人ごみの向こうから聞こえた聞き慣れた声に、フェルデンは振り返った。
「アレクシ！！」
白銀の獅子に跨り、剣を振り翳して現れたサンタシ騎士団の三番隊隊長の騎士が、今、数人の神兵を薙ぎ倒した瞬間であった。
フェルデンは、この騎士の他にも多くの知った顔が駆けつけてくれたことに気付いた。
師である屈強な剣士ディートハルトは、崩れかけた建物の上に上り、矢を射る神兵を大剣で叩き伏せている。そして、白銀の獅子の上から槍を一振りして数人の敵をやり込めているのは黒の騎士団指令官補佐、ライシェル・ギーである。女性とは思えない程無駄の無い動きで、的確に相手の攻撃をかわし倒してゆく騎士は、黒の騎士団唯一の女性騎士、タリア。その他にも、見覚えのある騎士達がこの悲惨な状況の中で怯むことなく勇敢に剣を振るっていた。
心強い助っ人に、フェルデンは心から感謝していた。
その中で、クロウは静かに瞳を閉じていた。
天を仰ぎ、彼は呼んでいたのだ。天のイカズチを・・・。

『ピシャアアアアアア』
ドドドドドという轟きとともに、天から眩い光の矢が落ちた。
いつの間にか、王都の空は真っ黒な雨雲で覆われている。
次々に天から降り注ぐ雷は、痛みを感じる暇も与えず、神兵を墨へと変えてゆく。
ザルティスの神兵達は、天からのイカズチと魔王の強大な魔力を目の当たりにし、恐怖で逃げ惑い始めていた。

今から約二百年前、“マルサスの危機”と呼ばれる歴史的な事件

が起こった。
　ゴーディアの王都マルサスは、味方の裏切りにより、敵国サンタシの兵の侵入を許したのである。
　当時、ブラントミュラー公爵家はゴーディア国内で最も有力な貴族で、その一人息子ロベルトは魔力を持たずして生まれたものの、大層頭の切れる男で有名であった。
ロベルトは、その頭脳を買われ、ブラントミュラー公爵として、国王ルシフ
ァーの命令で大使を務めていた。
ロベルト・ブラントミュラーは真面目で愛国心の強い男であったが、ただ一
つの事が彼を大きく変えてしまったのだ。彼は、決して愛していけない女性に
惹かれてしまったのである。
愛してしまった彼女は穢れなく、どこまでも愛らしく可憐だった。
けれど、
彼女は囚われた籠の中の鳥。魔城という籠の中に窮屈に閉じ込められた彼女の
心は、今にも壊れてしまいそうで・・・。
ブラントミュラー公爵は、王妃ベリアルに強い恋心を抱いていた。
しかし、彼女のすぐ側には怖ろしい程美しい容貌と、強大な魔力を持つ国王
ルシファーの姿があった。
一見仲睦まじい夫婦に見える二人であったが、ロベルトには表面的な作られ
たものだということがすぐに分かった。国王は王妃を愛してはいなかったのだ
それでも王妃は、ひたすらに国王を愛し続けていたというのに・・・。
やがて、ロベルトは王妃のよき相談相手として関係を築いていった。

彼女の
実らぬ思いと苦しみを聞く度、いつか彼女をこの狭い世界から救ってやりたい
という思いを強く抱くようになった。たとえ、それが国王ルシファーやゴーデ
ィアを敵に回すことになろうとも。

「ベリアル王妃、どうか泣かないでください」
ベリアルは美しく整えられたベッドに横たわり、死人のように動かないまま
何日も過ごしていた。涙は枯れ果てるのではないかという程、大きな目からは雫が幾滴も流れ続け、枕を濡らしている。
「このままでは、本当にお身体を壊してしまいます。どうか、涙を拭いて食事だけでも・・・」
マルサスの危機の直後、裏切りの発覚したブラントミュラー公爵は爵位を失い、大罪人として追われる身となった。それと同時、王妃ベリアルは元老院の手により嫌疑に掛けられ、一旦はロベルト・ブラントミュラーと同罪と見なされ、処刑と決定されたのだが、国王ルシファーの慈悲により、国外追放の刑におさまったのだった。
それをブラントミュラーが保護し、予め用意しておいた隠れ蓑に彼女を連れ帰ったという経緯である。
ベリアルの髪は美しいアプリコットから、見る間に白銀髪へと姿を変えていった。
それは、ベリアルの深い悲しみと絶望を鮮明に表していた。
「全部お前のせいよ、ブラントミュラー・・・。わたくしは、もう二度と陛下にお会いすることが叶わなくなったのですから・・・。もう生きていてもなんの意味もないわ・・・」
ブラントミュラーは痛々しい彼女を見る度に胸が締め付けられる思いだった。
彼はただ、どれだけ望んでも愛してくれぬ夫から引き離し、そし

て窮屈な世界から救ってやりたかっただけだというのに。彼は自分の行いが間違っていたのかと何度も自身に苦悶した。

（否、これが正しかったに違いない・・・！　王妃をあのままあの国王の隣に放置することなどできる筈がない・・・！！）

きっとあのままベリアルをあのままにしておけば、彼女の心が壊れてしまうのは時間の問題だった。

けれど、実際には、ベリアルの心はもう再起不可能に近い程壊れてしまっていた。

「ベリアル王妃、どうかわたしをお恨みください・・・。どれだけわたしを罵ろうと、わたしは構いません。ですが、どうか覚えておいてください。いつでも、わたしは貴女を心から愛し、お慕いしているということを・・・」

ベッドに伏せったまま、ベリアルは静かにブラントミュラーの発した言葉を聞いていた。

「そして貴女の為ならば、わたしは如何なる困難でさえ乗り越えてみせます。愛しい貴女が望むことならば、何だって叶えましょう・・・」

じっと動くことのなかったベリアルが、その言葉を聞いた途端、ゆっくりとベッドに起き上がった。以前より痩せてしまった顔。涙はまだ頬を濡らしている。

「どんなことでも・・・？」

ベリアルの問いに、「ええ」とブラントミュラーは優しく微笑み返した。

「では、わたくしにルシファー陛下を返して頂戴」

そう言ったとき、ブラントミュラーはじっとベリアルの大きな瞳を見つめて頷いた。

「ええ、分かりました。貴女がそれを望むなら・・・」

予想外の返答に、ベリアルは驚きもう一度聞き返す。

「わたくしは“ルシファー陛下を返して”と言ったのですよ？　そんなことでができるの・・・？」

ブラントミュラーは真面目な顔でこくりと頷いた。
「このブラントミュラーに不可能はございません。但し、それには多くの時間を有しますが」
いつの間にか涙の止まったベリアルの頬に、ブラントミュラーは愛しげに触れると、言葉を付け足した。
「ゴーディアとサンタシがいがみ合っている隙に、この無人島で我々は密かに兵を集めるのです。増強し、時が来るまでじっと息を潜めて待つのです。そして、一気に叩く」
はっとしてベリアルが口を挟む。
「それで本当に陛下を取り戻せるのですか・・・？」
既に一度魔力を奪う薬だと嘘を吹き込まれるという裏切りを受けたベリアルは、ブラントミュラーに強い不信感を抱いていた。
「今度ばかりは本当です。ベリアル王妃、貴女を騙すようなことをしてしまったこと、深く反省しています・・・。もう二度と貴女に嘘をつかないと誓います」
ブラントミュラーは、国王ルシファーに盛った毒は本当に僅かで、もともと命を奪う為ではなく、一時的に力を弱める為だけだったと何度も説明した。
しかし、“人間の血”が天上人であった国王ルシファーにとって猛毒であることに変わりはなく、その解毒薬が存在しないことも確かであった。
「お前は信用なりません。ルシファー陛下を殺そうとしたのですから！」
そんなベリアルの強い拒否の声にもめげることなく、ブラントミュラーは微笑みを浮かべ続けた。
「そうですね、ベリアル王妃。貴女にそう思われるのは当然の報いです」
この男の揺ぎ無い自信が一体どこから湧いてくるのか、本当に不思議なものだった。
「・・・けれど、こんな大陸から遠く離れた無人島で、兵を集める

などと、一体どうやって・・・」
よくぞ聞いてくれたとばかりに、ブラントミュラーは嬉しそうに部屋の壁を指差した。
不審に思い、ベリアルが振り返って見た先には、壁に掛けられた一枚の額縁の絵。
「あれです、ベリアル王妃」
「あの絵がどうかしたのですか・・・？」
絵には、天上界の様子が描かれている。
無論、画家が考えた想像上の天上界だが、幾人もの翼を持った天上人達が優雅に天の泉で水浴びをしている。その背後に、眩い光。この光こそが、全ての父である創造主である。
「知っていますか？　信仰こそが人間の強みであり、力となるのです」
この時、すでにブラントミュラーの計画は始まっていたのだ。
「信仰ですって？」
「ええ。わたしが創造主から兵を挙げよとのお告げを受けたと話せば、どれだけ多くの人間がここに集まるでしょうか・・・。今から楽しみですよ」
ふふっと笑いを溢すブラントミュラーの頭脳に、ベリアルは驚き呆れた。
そして、同じくしてこの男にもう一度だけ賭けてみようと、ベリアルは思ったのだった。

「ブラントミュラー！　一体これはどういうこと！？」
白亜城の展望のよい一室から、怒りの声が響き渡る。
二百年前の約束の後、確かにブラントミュラーは予告通り“神のお告げ”とやらを元に兵を募り、ザルティスの神兵という名の数万の兵を率いた。けれど結局のところ、ベリアルが一番望んでいた魔王ルシファーは、あの時の毒が原因で既に還らぬ人となってしまっ

ていた。
　それだけでも耐え難い怒りと悲しみだったが、ベリアルはひたすらに耐えた。もともと病弱だったベリアルは、この二百年の間でますます体調を崩していた。あの憎きクロウと、その実の母の息の根を止めることだけが今のベリアルを生かしていると言っても過言では無い。
「落ち着いて下さい、お身体に障りますよ、愛しい方」
　怒りで震える華奢な身体を宥めるように、ブラントミュラーは椅子に腰掛けるようにベリアルに言った。
　用意されたお茶のカップは、テーブルの上に転がり、中身はすべて床に零れ滴っている。それは、ベリアルが怒りのあまりテーブルを叩いたのが原因している。
「兵の数は圧倒的にこちらが多いのに、どうしてあの少ない人数にこうもやられているのです！　話が違うではないの！？」
　ブラントミュラーは、ふっとオリーブ色の口髭を一撫でして笑った。
「大丈夫、予定通り事は進んでいますよ。あの兵は全兵力の半分以下ですし、ただの時間稼ぎにすぎません。本当の勝負はこれからです」
　訝しげに何やら企む男を見返すと、貴婦人は訊ねた。
「ただの時間稼ぎ・・・？」
「ええ。今、残りの兵力全てをこの王都に集結させています。ザルティス軍には、あともう少し時間稼ぎをして貰う必要がありますので」
　落ち着きを取り戻した貴婦人の手をとり、ブラントミュラーは微笑みを浮かべた。
「全ては愛しい貴女の為に・・・。きっと貴女の望みをこのブラントミュラーが叶えてみせましょう」
　まさか、ブラントミュラーが二百年前のあの日、ベリアルと交わした約束を果たそうとしていることなど、彼女はまだ気付いていな

かったのだ。

「一体どこから湧いてくるんだ、これじゃあ限が無い・・・！」

アレクシが、さすがに体力を消耗し始めたのか、額から汗を滴らせながら剣を振るい続けている。疲労が出始めているのは、アレクシだけではなかった。

ザルティスの神兵は、クロウの雷で冷静さを失ってはいたが、後から後からまるで湧き出てきているかのように、次々と新たに現れ襲い掛かってくる。

「確かに、これでは流石にこちらの体力が持たないな」

フェルデンが何か得策が無いか考えを巡らせる。しかし、剣を振るう手は休める暇も無い。

「くそっ」

背に傷を負い、一人の騎士がよろめいた。仲間の騎士がフォローするが、その騎士達も疲労で随分動きが鈍くなりつつある。騎士達の中にも傷を負う者も多く出始めてきていた。このままでは、そう長くは持たない。

「アレクシ！！　おれが奴らの気を引いておく隙に一旦退け！！　このままでは犠牲が出る！！」

「で、でも・・・！」

国王を残したまま退くなどということは考えられず、アレクシは踏み止まろうとする。

「国王陛下のご命令だ、アレクシ！　ここはわたしが陛下を助太刀する。行け！！」

ディートハルトが力強く言った。

アレクシはそんな屈強な戦士の言葉にこくりと頷き、叫んだ。

「一旦退却するぞ！　続け！！」

その声と同時に、フェルデンが全神兵に向けて大声で言い放った。

「よく聞け、ザルティスの神兵ども！　創造主の元に集いし革命軍だと！？　笑わせるな。我らサンタシが崇め敬う創造主は、我ら人の子を愛し、何より平和を望まれている。お前達は偽神兵以外の何者でもない！！　自らの正義の為に神を利用し、冒涜するだけの偽善者どもにすぎない！！」

その声に、多くの神兵が怒りを露わにしてフェルデンを睨みつけた。自らが信じる“創造主”にケチをつけ、その上偽者扱いされたのだ、黙ってはいられまい。

「なんだと！？　我らザルティスの神兵を愚弄する気か！！　いくらサンタシの国王と言えど、それだけは許しがたい！！」

神兵の目が怒りに満ちてゆくのがありありと伺えた。

そのお蔭か、仲間の騎士達はとりあえずの退却に成功していた。だが、怒りを買ってしまったフェルデン達の立場が悪くなったことに変わりは無い。

「余計なことを」

アザエルは煩わしそうに呟く。

「教えてやろう、サンタシの王よ！　我らザルティスの神兵が創造主のお告げにより選ばれし特別な兵であることをな！！」

一層勢いを増した神兵達の攻撃に、フェルデン、ディートハルト、アザエルは剣を構え直した。

「ごめん、フェルデン。今よりこの土地を酷い状態にしたくなかったんだけど、許してよね」

クロウがフェルデンに申し訳なさそうに僅かに肩を竦める。

フェルデンがその理由を聞き返すよりも先に、『ゴゴゴゴゴ・・・』という地鳴りが響き、大地が大きく揺れ始めた。地面が割れ、この亀裂に次々と大勢の神兵が塵のように落ちていく。地面は、三人の居る場所だけを残して、沈下と隆起を激しく繰り返し始めた。

「わあああああああああっ」

神兵達の悲鳴が響く中、まだ王都の名残を残していた建物達が、あれよという間に土にのまれ姿を消していく姿を見て、フェルデン

は驚きを隠せなかった。
　美しく栄えていた王都はもはや見る影も無い。唯一の救いは、生き残った人々が、仲間の騎士達の手で、安全な場所に避難できているという事実だけであった。
　あっという間に約八割の敵の兵力を失わせてしまったクロウの魔力に、ディートハルトが思わず感嘆の声を漏らした。そして、こんな強い相手を敵に、サンタシは長い間無意味な戦争をしてきたのかと感じずにはいられなかった。
　スキュラと赤き竜は、空で旋回を繰り返しながら、戦況を見守っている。
　残った神兵達も、一瞬の出来事に、ほとんどが戦意を喪失してしまったようである。

しかし、その直後、とんでも無いものが天から地に舞い降りたのである。
　ひらひらと舞い落ちる漆黒の羽。
　ふぁさりと漆黒の翼が羽ばたき、禍々しくも美しい光が差す。
「な・・・、なぜ・・・」
クロウの黒曜石の瞳が大きく見開かれる。
蒼黒の長い髪が艶やかに揺らめき、透けるように白い肌と世にも美しく整っ
た顔立ちに誰もが息を呑んだ。
「魔王ルシファー・・・！」
　フェルデンは、失われた筈のその存在が、なぜこうしてここに在るのか理解できずにいた。
　しかし、それはここにいる誰もが同じで、あのアザエルでさえ無言のまま嘗ての主の姿を仰ぎ見ている。
「久しぶりね、クロウ。お前に会えて嬉しいわ」
　ふと可愛らしい声がしたかと思うと、黒いベールのおりた帽子を目深に被った貴婦人が、お付きの者の手を借りて、ちょうど静かに

馬の背から降り立ったところであった。
クロウは、死んだ筈の父に加え、新たに現れた人物に目を丸くした。
「あらあら、あんまり嬉しくて声も出ないのかしら・・・？」
白い手袋をはめた華奢な手が、静かに帽子を脱がせると、現れたのは二百年前にゴーディアを追放された義理の母、ベリアルの可憐な顔が露になった。
「母上・・・」
二百年の月日を経て、少し歳をとったベリアルではあったが、未だその可憐さは失われてはおらず、クロウは只々呆然とベリアルを見つめた。
「アザエル、あなたにもまた会えて喜んでいるのよ、わたくし」
ただ一つ髪の色を除いて変わらず美しい姿のベリアルは、魔王の側近アザエルに言葉を掛けた。
「お前達のせいで、この二百年、わたくしがどれだけ苦しんできたか理解できないでしょう・・・？　けれど、その悪夢もいよいよ今日この日で終わるのよ」
ぷくりとした可愛らしい唇が不敵に笑う。大きくくりくりした目は、美しく輝き空にはためく魔王ルシファーに注がれていた。その目はこれ以上無い程に愛おしげで、そして悲しみと悦びの色を帯びている。
「クロウ陛下！　貴方のお父上は既に亡くなったのでは！？」
ディートハルトが当然の疑問を投げ掛けた。
クロウは黒曜石の瞳を見開いたままこくりと大きく頷いた。
「では、なぜあそこにいる！？」
既に死んだ筈の父がこうして姿を現すことなど考えられないことであった。
漆黒の翼を羽ばたかせ、ルシファーはクロウに視線をやった。
「ルシファー陛下はお前を滅ぼす為に蘇ったのよ！！」
ベリアルが壊れたように高く微笑む声が響き渡る。

魔王ルシファーとクロウの同じ黒曜石の瞳が、静かに互いを見つめ合っていた。

20話　世界最強の敵（前編）

禍々しい光に包まれた父に目をとられ、彫刻のように動かないクロウに、魔王ルシファーは手を翳した。

「クロウ陛下・・・！」

凄まじい轟音と、砂埃が辺り一面に霧のように舞い上がった。

「！！？？」

あまりに一瞬のことで、訳がわからないクロウは、驚きで周囲を見回す。

気付けば、クロウは土の上に倒れていた。そしてその身体は何かに庇うように覆い被されている。

「お怪我はありませんか・・・？」

砂埃のせいで一切の視界がきかない中、さらりと美しい碧髪がクロウの視界に映る。

「アザエル・・・」

クロウは驚く程に自らの声が弱々しいことに気付く。

少しずつ治まりゆく砂の霧の向こうに、まだ変わらぬまま同じ姿で宙から見下ろす魔王ルシファーの姿を見た。

家一軒が丸ごと入ってしまう程の巨大な穴がぽっかりと地面に開き、そこから真っ黒な湯気のようなものが上がっている。明らかに、それはクロウを殺そうとした結果であった。

「父上・・・、なぜ・・・」

クロウは、再会を果たした義理の母の存在だけでも十分、いや、それ以上の精神的なダメージを受けていることは明白である。それにも関わらず、こうして死んだ筈の父、魔王ルシファーが突如として出現し、こうしてクロウを殺そうと攻撃を仕掛けてきたのだ。彼の混乱は当然のものである。

その様子を可笑しそうに微笑みながら、魔王ルシファーは黒翼を

ゆっくりと羽ばたかせて、音もなく地上に降り立った。
何世紀もの長き時代をこの世界で生きていたとは信じられ無い程、その姿は麗しい。
ルシファーは美しい唇を静かに開いた。
「アザエルよ。お前は嘗て仕えた主を裏切るつもりか」
アザエルはゆっくりと立ち上がると、嘗ての主を、髪と同色の碧い目でじっと見つめた。
「こうして帰って来たのだ。出迎えの言葉でも聞けると思っていたが」
クロウを守るように立ち塞がったままのアザエルは、ルシファーに対して何も答えない。
「アザエル、わたしの元へ戻れ。お前とわたしならば世界の全てをその手にできる」
心地よい程の美しい響きを放ち、ルシファーはアザエルに言葉を紡いだ。
アザエルは動かないままじっとその主の姿を見つめている。
「アザエル・・・」
クロウは、アザエルがひょっとして父の元へと行ってしまうかもしれない、そんな不安を感じていた。
いつだってクロウの近くで見守り、傍にいてくれた魔王の側近。
しかし、アザエルはクロウが生まれるより以前にあの父ルシファーに忠誠を誓い、仕えてきたのだ。その張本人が蘇ったとなれば、元の居場所へと戻っても何らおかしな話では無い。
しばらく美しき魔王を見つめていたアザエルであったが、しばらくして静かにその足を一歩一歩とそちらへと進め始めた。
クロウは悲しみを堪えるように、じっと目を閉じた。
（・・・そうか・・・）
これで、クロウは本当に一人ぼっちになってしまった。胸を鋭い槍で貫かれたような痛みが突き抜ける。それは、心の痛みに他ならなかった。

「クロウ、まさかあいつがいないというだけで、諦めるんじゃないだろうな?」
ふとすぐ近くから心地よい凛とした声が降ってくる。
「立て、クロウ。おれはお前を信用している。あの魔王ルシファーなどではなく、現在のゴーディアの国王、クロウをな!」
クロウの前に、なんの迷いも無く差し出された手はあちこち傷だらけだった。
「フェルデン・・・」
見上げた先には、にこりと笑みを浮かべる優しい優しい騎士の姿があった。透けるようなブラウンの瞳は、クロウにひどく安らぎを与える。
「これが片付いたら、おれは王都を必ず復興する! そして、サンタシとゴーディアでもう一度初めからやり直したいと思っている。このレイシアに、真の平和を訪れさせる為に」
突然の告白に、クロウは大きな目を見開き、フェルデンの顔を見つめ返した。
「だが、それにはお前の力が必要だ。おれを落胆させるな、クロウ!」
地面についていた手をぐっと砂と一緒に握り締めると、クロウは無言のままゆっくりと立ち上がった。
今や彼は一人ではなかった。
「どういうことだ、クロウ。父に刃向かうか」
強い目でルシファーを見つめると、クロウは言った。
「父上。僕はここで殺られる訳にはいきません。この国の為に、ゴーディアの為に、そしてこの世界レイシアの為に、僕はしなければならないことがあるのです!!」
不愉快そうに目を細めると、ルシファーは吐き捨てるように言った。
「この世界が必要としているのは強き支配者。強き者が支配する世こそが平和ではないか」

「父上、支配は何も生みません。人々が自由で幸せに暮らせることこそが真の平和なのです」
父に引けをとらないクロウの言葉に、フェルデンはこの少年王こそがこの世界に真の平和を創り出せるのではないかという確信をした。
「愛を知らず、ずっと孤独に生きてきたお前に“人々の幸せ”の何がわかる」
ぐっと唇を噛み締めると、クロウはルシファーを真っ直ぐに見返した。
「確かに、ぼくは愛を知らずにいました。ですが、ぼくはある友人から教わったのです。たとえ愛されることが無くとも、“人を愛する幸せ”を・・・」
ルシファーはくすりと笑いを溢すと、自らの黒翼から数枚の羽を抜き、それをふわりと宙に舞い上げた。羽は、宙を舞ううちに、ぼこぼこと生き物のように蠢き、そしてみるみる膨らんでゆく。
「な、なに・・・！？」
ディートハルトが大剣を構える。
むくむくと形づくられたそれは、ちょうど人の顔程の大きさの奇妙な生物に変化した。
前進真っ黒な羽毛に覆われ、目はギラギラと銀に光り、凶暴そうな大きな口から鋭い牙を見え隠れさせている。それは小さな羽根が生え、ぱたぱたと素早い動きで自由にルシファーの回りを飛び回った。
「あれは、マブ・・・。ああ見えてすごく凶暴で頭がいい・・・」
クロウは既に見知っている口振りで、ディートハルトに答えた。
「何ですと・・・？」
見たことの無い奇妙な生物に、ディートハルトは首を傾げ警戒している。
「マブ。実体を持たない精霊に父上の強い魔力からできた羽を与えて創り出した、妖精・・・。いや、そんな可愛いもんじゃないな、

使い魔と言った方が適切かも・・・」
「三、四、五・・・、六匹いるぞ」
フェルデンが飛び回るそれを目で追い数えた。
「気をつけて。昔、一度父があれを出したのを見たことがあったけれど、あれは一匹一匹が強い魔力を持っている。そのときは、たった一匹で敵を全て食いつくしていたよ」
クロウのぞっとする話に、フェルデンは眉を顰(ひそ)めて剣の柄に手を携えた。
いつの間にか、ベリアルの存在はその場から消え去っていた。おそらくは、危険なこの場所から、安全且つよく状況が見渡せる場所へと移動したのだろう。
「遊べ」
ルシファーが呟くと、『キーッ』と耳障りな声で牙を剥き出し、物凄いスピードでマブが襲い掛かってくる。
そのうちの一匹は、空を旋回しながら様子を見守っていたスキュラと赤い竜へと突進していった。
「スキュラ!!」
はっとしてクロウが叫んだときには、既にマブはスキュラの横腹に噛み付く寸前であった。
「危ない!!」
ぶんと大剣がクロウの鼻の真横を横切り、慌てて振り向くと、ディートハルトがクロウに噛み付こうとしたマブを追い払った瞬間であった。
クロウは黒い煙でマブを捕縛し、包み込んだそれでぐしゃりと潰してしまった。
空では、危機一髪で、スキュラに噛み付こうとしたマブを赤い竜が吐き出した炎でうまく追い払っていた。
ほっとしつつ、クロウは再び自らに意識を戻す。
六匹中一匹が減って残りは五匹。
しかし、仲間を殺られたマブは、警戒して一旦三人の近くから離

れて距離をとった。
ディートハルトとフェルデンの剣の隙の無い攻撃も、すいすいとマブは避けてしまう。
「まずい。怒らせたか」
ルシファーは、死んだザルティスの兵の折り重なった遺体の上に静かに腰掛け、愉快そうに微笑みながらその様子を見つめている。そしてその隣には、碧く美しい魔王の側近が冷たい表情のまま控えている。
クロウはずきりと胸が痛んだが、そこからなんとか視線を振り切った。
『キーッ』『キキーッ』
様子を伺うようして飛び回っていたマブが、ぱたぱたと狙いを定めたかと思うと、一匹を残して一斉に三人に向かって飛び掛ってきた。
ディートハルトが、力強く踏み込み大剣を振るが、すばしっこいマブはなかなか捉えることができない。
クロウは、ここで一発稲妻を起こせば一気に方が付くことはわかっていたが、マブのすぐ近くに二人がいる為、下手にその攻撃を仕掛けることはできなかった。
限の無いことにイラついたフェルデンが、魔光石の魔力を発動し剣を振るったことで、とりあえずはマブを吹き飛ばすことに成功した。そしてそれをクロウは逃なさなかった。
鋭い稲妻を叩き落し、マブを一気に四匹片付けてしまう。
だが、それはまだ始まりにすぎなかった。
「くはっ・・・」
「ぐう・・・」
ほっとする暇もなく、それはフェルデンとディートハルトの身体にすぐに異変を起こした。
突如顔を引き攣らせたディートハルトは、呻きながら大剣を身体の支えに地面へと突き刺しなんとか倒れそうな瞬間を耐え忍んだ。

フェルデンは、苦しそうに俯き、肩膝をついている。
『キーッ、キキーッ!!』
まるでそれを予測していたかのように、一匹だけ残ったマブが嬉しそうにぱたぱたと飛び様子を伺っている。
「二人とも、一体どうし・・・」
クロウは利口なマブの策略に気づき、ちっと舌打ちをした。
(毒か・・・!!)
ルシファーの血を引くクロウには全く効き目のない毒だが、どうもマブのあの気色の悪い口からは毒性のものが発されていたらしい。わざわざ一匹だけが別の場所に止まっていたのは、人間が毒で弱るのを待つ為だったらしい。
「悪い、クロウ・・・。どうやら毒気にあてられたらしい。痺れてうまく力が入らない」
なるほど、二人の身体は小刻みに震え、まるで痺れ薬を盛られたときのように嫌な汗を掻いていた。
『キキッ、キキッ』
弱った二人に今だとばかりにマブが飛び掛かった。
「そうはさせない!!」
クロウはマブを黒い靄を瞬時に掴み取り、紙屑でも握り潰すかのように躊躇なくそれを潰した。
麗しい微笑みを浮かべるルシファーは、そんな三人の様子をまるで何かのショーの前座でも楽しむかのように、パチパチと拍手を送った。
「クロウ、すっかり力を使いこなせるようになったようだな。ここでお前を失うには惜しい」
クロウは悲しい目で父を見つめる。
「父上は変わりましたね。以前の父上は、寡黙な方でした・・・」
そして、何より人を傷つけるような真似を嫌い、誰よりも優しい心を持っていた筈であった。
その父は、今や別人のように変貌してしまっていた。見た目こそ

変わらないが、クロウの知っている父では既に無くなっているのかもしれなかった。
麗しい笑みを浮かべると、ルシファーはまた羽をふわりと吹き上げた。
今度は先程よりも多い数。
「お遊びはそろそろ終わりにしよう。残念だが、わたしはお前を殺さねばならない」
空に舞い上がった黒い羽は見る間にマブへと形を変え、戦闘態勢をとっている。
一方、ルシファーはすっくと遺体の上に立つと、蒼黒の髪を妖しくなびかせクロウに向き直った。
「あの二人の邪魔が入る前に殺せ」
ルシファーの口から命(めい)が下り、マブはぎらりと銀の眼を光らせながら、毒にあてられたディートハルトとフェルデンに飛び掛った。
「父上!!」
「自分のことを心配しろ、クロウ」
クロウの知る父とは考えられない程冷徹な目を向け、ルシファーは宙に舞い上がった。
空では、数匹のマブが飛竜達にも襲い掛かっている。
「クロウ、お前の存在は罪だ。父が責任をもってお前を消す」
ルシファーの手には、黒い靄が集まり、それはみるみるうちに不気味な首切り鎌へと形作られていく。
鎌は青白い電気をバチバチと放ち、柄の先には自在に伸びる黒き鎖ががっしりと繋がっている。これこそが、魔王とクロウの魔力のもう一つの大きな力であった。
二人は、この世界に存在するあらゆる物質を思いのままに変化、再構築することで物体を創造することができるのだ。
「おれたちは大丈夫だ、行け、クロウ」
辛くない筈など無いだろうに、フェルデンはまるで何でも無いかのように、襲い掛かるマブに剣を振るう。

「その通りですぞ、クロウ陛下。老いぼれてはいるが、わたしもこのフェルデン陛下の師でもありますからな。そう簡単には殺られてはやりませぬぞ」

顔面のケロイドの傷を引き攣らせ、ディートハルトがにかりと笑った。

本当は、今すぐにでもこのマブ達を処分したい思いでいっぱいのクロウであったが、今ここでこの数のマブを一匹一匹握り潰すとなると、ルシファーの思う壺となってしまうことはわかっていた。だからこそ、クロウは二人を信じこくりと頷くしかなかったのだ。

クロウは自分そっくりの父の姿を見上げ、自らも同じように翼を生やした。

しかし、少年身体のクロウは、父ルシファーよりも小ぶりの翼である。

「ゆくぞ」

僅かに目を閉じた目を見開いたと同時、バサリと翼を羽ばたかせ、ルシファーは息子クロウに攻撃を仕掛けた。

巨大な首切り鎌に対抗する為、クロウは咄嗟に巨大な盾を創り出していた。

『バチイッ』

青い電気の火花を散らせ、クロウの盾は見事に父の大鎌を受け止めていた。

「ほお、咄嗟の割にはいい反応のようだ」

ルシファーはその手に掛ける力を弱めることなく、ぐいとクロウの盾を押し返してくる。

「だが、これはどうだ」

すると、その手を止めないまま、ルシファーは保護できていないクロウの下半身を膝頭で勢いよく蹴り上げた。

衝撃でびゅんと後方に吹き飛ばされたクロウは、なんとか翼を広げることで体勢と立て直すが、その隙をルシファーは許さない。

再び鎌を振り上げ、それをまた寸でのところでクロウの盾が防ぐ。

今度は腕いっぱいに力を込め、ルシファーの攻撃をうまく反動をつかって弾き返す。
だが、ルシファーはその反動を利用して更に素早いスピードで鎌を華麗に振り下ろす。鎌の攻撃を防ぐことに気をとられているうちに、クロウはルシファーの蹴りを何発か命中させられていた。
「下の二人がそんなに気になるのならば、さっさと得意の雷(いかずち)でマブを片付けてやればすっきりするのではないか」
息一つ乱さないルシファーは、嫌な笑いを含んだ目でクロウに言った。
それは、クロウ自身自らの手でディートハルトとフェルデンをマブ諸共に滅ぼさせようと企む残忍な言葉であった。
「・・・・・・」
クロウは、血の混じった唾をぴっと吐き出すと、別人のように変わってしまった父を睨んだ。
「まあよい。クロウ、お前が二人に手を下さなくとも、二人はマブにもうすぐ食い殺されるだろう」
ククククッと笑いを漏らすと、ルシファーは風を切って鎌をクロウに向け振り切る。
なんとかその攻撃をかわしても、すぐさま次の攻撃がクロウを襲う。宙とひゅんひゅんと切る鎌の音が鳴る。
クロウの頬にいつの間にか鎌の攻撃を掠ったときについた傷ができ、つうと血を流していた。
(このまま逃げ続けるのはできない・・・。下の二人も気がかりだ・・・。けれど、父上を攻撃するなんて・・・)
クロウは躊躇していた。
『がっ』
クロウの盾が再びルシファーの鎌の刃を捉える。
「かはっ」
クロウは突然勢いよく鮮血を吐き出した。クロウは一体何が起こったのか理解できず、盾ごしにルシファーが口元を愉快そうに歪め

ている姿を見つめた。
そして、僅かに視線を下に落とすと、左手で自らの腹部に軽く触れる。
生暖かく、ぬるりとした感触。感覚の無いその場所に、盾を貫通した鎌の鋭い刃の先が食い込んでいた。
クロウは持てる力の全てでルシファーを蹴り上げた。
それ程の威力はなかったらしく、ルシファーは数歩程度後ろに飛ばされはしたものの、まるで何とも無いかのようにすっと体勢を立て直した。彼の身体には未だたった一つの服の綻びさえ見当たらない。
「・・・・・」
クロウは、じわじわと広がってゆく腹部の血染みを左の手で押さえながら、一旦地上へ舞い降りた。その手からは盾は消失している。
蒼黒の髪をふわりとなびかせた後、ぶわりと生暖かい風が巻き起こった。
（しまった・・・！！）
瞬きをする速さでルシファーがクロウの背後に回り込む。手には巨大な鎌。
『ズシャッ』
振り向いたクロウの眼には信じられないものが映っていた。
「何のつもりだ、アザエル」
ルシファーの鎌の刃を、赤く黒い剣が受け止めていた。
（なぜアザエルが・・・！？）
「貴様は誰だ」
碧い髪から覗く横顔は、忠誠を誓う主に向けられているものなどではなく、ひどく冷ややかなものであった。
「何を言う、わたしはルシファーだ」
武器に入れる力を緩めないまま、ルシファーはつまらない冗談を、とでも言うように笑った。
「貴様が我主でないことは既にわかっている」

アザエルの言葉に、ルシファーはむっとした様子で鎌を引っ込めて一旦後ろへ飛び退いた。
「・・・いつから気付いていた？」
面白くなさそうに武器をだらりと下ろすと、ルシファーはアザエルを見つめた。
「クロウ陛下を攻撃した時からだ」
アザエルはルシファーと対峙したまま血の剣を構え直す。
「最初からわかっていたのか？　ではなぜわたしの元についたふりをした・・・？」
ルシファーの機嫌が見るからに悪くなってゆく。生温かい風が再びぶわりと起こり始める。
（どういうことだ・・・！？）
クロウはアザエルの口にした言葉に戸惑いを感じていた。
ルシファーはちらとアザエルの手にしている剣に目をやる。
「そうか、わたしに気付かれずにその剣を・・・」
アザエルは、ルシファーがクロウに意識をとられている隙に、ザルティスの神兵の亡骸から血を集め、最高強度の血の剣を創り出していたのである。
「アザエル、それは父ではないってこと？」
アザエルは頷いた。
クロウはそれを聞いた途端、自らの両の手にソードを創造する。
バチバチと散る静電気と青白い火花。クロウから迷いはすっかり消え伏せていた。
「どこの泥棒猫は知らぬが、禁術を行ったな」
ルシファーはぶわりとあの奇妙な風を巻き起こし、アザエルをかわしクロウの眼前に出現した。
『ガキイ』
クロウのソードの刃ががっちりと鎌の刃を受け止めていた。
今度は、空いた片方の手で瞬時に電流の球を作り出しルシファーの腹部に放つ。ルシファーは同じ電流の玉でもってそれを跳ね返す。

その衝撃で大きな青い火花が散り、不気味な光を放った。
クロウのソードの攻撃を、ルシファーの鎌が薙ぎ払い、ルシファーの鎌をクロウのソードが受け止め、一進一退の攻防が続く。
クロウの腹部の傷は深いらしく、まだ血を滴らせている。
アザエルが加勢し、そんなクロウをうまく補助してくれていたが、クロウは再びふわりと空へと舞い上がった。
「アザエル！　地上の様子がおかしい！！　彼らを・・・！」
アザエルは碧い目を屈強な剣士と若きサンタシの国王へとやった。
そこら中死体だらけの地獄とかした地上。そこにはうじゃうじゃと虫が湧き出るように、気味が悪い程のマブが飛び回っていた。一体どうやったかは知らないが、マブはいまだに増え続けている。
スキュラと赤い竜も傷を負い、いつの間にか地上へと降り立っていた。それを守るように、見覚えのある薄い膜が張り巡らされていた。
（結界か）
いまや、その結界がマブからの襲撃をなんとか凌いでいるようだ。
「アザエル、僕の大切な友人達を死なせないで！　ここは僕がなんとかするから、あなたは彼らを！」
ルシファーがぶわりと風を巻き起こし、自らもクロウを追い、宙へと舞い上がった。クロウは、振り切られた鎌をソードの柄で受け止め、再びバチバチと音を出す電流の玉を放つ。
「陛下のお心のままに」
アザエルは駆け出した。マブの大軍の中へと・・・。

21話　世界最強の敵（後編）（前書き）

ほんと、マイペースな更新にお付き合いいただき、ありがとうございます。このあと、あともう少しだけ、最終章を執筆するつもりでいます。

21話　世界最強の敵（後編）

「フェルデン陛下、呼吸はせぬ方が無難ですぞ」
「分かっています」
フェルデンは、師と背中合わせに剣を振るっていた。
マブの口から発される毒の気体を吸い込まないように、二人は呼吸を止めて闘うが、しきりに襲い掛かるマブの攻撃を防ぎながらのそれはかなりの困難を極める。
フェルデンが、魔光石の魔力を発動し、マブを吹き飛ばしたほんの僅かの間に二人は酸素を補給する方法でなんとか状況を維持していた。しかし、それももう長くは持たない。ましてや、二人は既に毒気に当てられ、身体が思うように動かせなかった。
『ビシャリ』
切り捨てたマブの死体が熟れた柿の実が地面に落下したときのように、嫌な音を立てて地面に叩きつけられる。ディートハルトとフェルデンは順調に数匹のマブを切り捨てている筈であった。
『にちゃり・・・にちゃり・・・』
肉塊と化したマブの遺骸がしばらくして動き始める瞬間を見るまでは、二人は痺れの残るその身体でもなんとかこの場を乗り切ることができると確信していた。
しかし、蠢く気色の悪い遺骸が二つに分裂し、それぞれがもとの身体に再構築されていくのを目撃したとき、二人は倦む気持ちを抑えられなくなった。あれだけ苦労してやっと仕留めたこの生き物は、ともすれば最初の数より確実に増えていた。いくら切り捨てたところで、こいつらには“死”というものが無い。切れば切る程に分裂し、増え続けていく。
「これはちょいとまずいことになりましたな・・・」
うんざりしたようなディートハルトの声に、フェルデンは溜息を

つき頷いた。
いよいよ、二人でここを乗り切るには厳しくなってきた。
『グルルルル！！！』
空を旋回していた飛竜の様子がおかしい。
どうも、スキュラが尾っぽをマブの一匹に齧(かじ)られたらしい。痛々しい血を流し、痛みに呻きながらふらふらと地上へ向けて舞い降りてくる。マブの毒にやられたのか、身体が自由に動かせないようで、苦しそうには呻いていた。
「噛まれたか・・・！」
赤き竜がスキュラを守るように、炎を吐き出しながら周囲のマブを追い払っている。
あのおぞましい生き物は炎には弱いらしく、炎に飲まれたものは
『ボオッ』　と赤紫の毒々しい炎を上げてボテボテと地上に落下してゆく。
「どうやら、下手に切り刻まん方がいいようですな。焼き払うのが手っ取り早い」
ディートハルトの意見は尤もであったが、今ここで助けになるのは赤い竜の吐き出す炎だけである。
（どうしたものか・・・）
フェルデンは襲いかかるマブをなるたけ斬らないようにと、うまく避けることに徹しようと努力するが、咄嗟にこの生物を斬らずにはいられない。
地上で苦しむスキュラと、心配そうに寄り添う赤き竜にも、マブが続々と群がり始めていた。
上では蒼黒の翼をははたためかせた、禍々しい親子が空中戦を繰り広げている。
魔王ルシファーは大きな鎌を手に、息子クロウは頑丈な盾のようなものを手に激しいぶつかり合いをしているのが遠目にもわかった。
二人の闘いは、すでに人間の闘いの域を遙かに越えたものであった。
「ひどいですよ、師匠もフェルデン陛下も。俺を置いていくなんて」

マブを切り捨てた瞬間、ディートハルトは空耳かとふと顔を上げた。
「お前・・・」
フェルデンが幽霊でも見たかのように、呆気にとられている様子からすれば、それはディートハルトの空耳でも幻想でも無いようだ。
スタリと身軽に馬の背から降り立った小柄の騎士は、何やら丸いものを後方に放り投げて駆け寄った。数秒後、それは『ズドン』と煙と炎を上げて爆発する。火薬弾だ。威力は左程ではないが、確実に周囲のマブ数匹を仕留めた。
「あなたの心強い心の友、ユリウスの登場ですよ。嬉しくて泣けてきちゃうでしょ？」
こんなときまで冗談を言えるのはまさにユリウスらしい。
「ユリ、無事だったのか！」
フェルデンは驚きで叫んでいた。
「俺がそう簡単にくたばる訳ないでしょう？　だいたい、貴方を知りつくして手助けできるのって、俺を除いて誰がいるってんですか！」
ユリウスは火薬弾をひょいひょいと辺りに飴玉でも放り投げるかのように投げ上げてゆく。
「ひよっこの割に生意気を」
ディートハルトの言葉はいつものように悪態をついてはいたが、もう一人の愛弟子の成長を喜んでいるものでもあった。
「ははっ！　けど、驚くのはまだ早いですよ。もう一人、心強〜い助っ人がいるんです」
そうユリウスが言った直後、自分達の周囲をぴんと薄い膜のようなものが張り巡らされたのを感じ、二人は、まさかと声を上げた。
「じゃじゃ〜〜ん、我サンタシ国国王直属の最高の術師、ロラン君で〜〜す」
この地獄と化した場所で不似合いなユリウスの口調に、顔を顰(しか)めながらもフェルデンはユリウスの指差した方向を振り返った。

灰色のローブに霞がかった茶の髪。生意気そうな少年が馬の背に跨ったままじっとこちらを見つめている。
「ロラン、来てくれたのか」
怪我を負った飛竜をも守るように、ロランの完璧な結界がマブのいる外界から完全にシャットアウトされていた。ようやく訪れた平穏。恐ろしい数に膨れ上がったマブはその結界を覆い隠すように群がっている。
「ヴィクトル陛下がお亡くなりになったことを伺いました」
僅かに目を伏せ、変声期を迎えていない声でロランが言った。
「ああ・・・。君が仕えていたのは兄上だ。もうサンタシに仕える必要が無いのに、君は手を貸してくれると？」
ロランは、兄ヴィクトルがいつしかどこやらで拾ってきた半魔族の少年であった。
無愛想で且つ出身以外の全てが謎のこの少年を、どういう訳かヴィクトルは術師として自らの側に置いてきたのだ。その理由と真相は唯一人の弟であるフェルデンにも明かされていない。
「いいえ、僕はサンタシの魔術師です。ヴィクトル陛下に僕は返し切れない程のご恩を戴いてきました。ここにサンタシという国が在る限り、僕はサンタシの術師であり続けます」
こくりと頷き、フェルデンはロランのどこまでも真っ直ぐな瞳を見つめた。
この場でこれ程心強い仲間はいないだろう。
「ときに、フェルデン陛下。なぜ外のあの気味の悪い生き物が増え続けているかご存知ですか？」
ロランの問いに、ユリウスとフェルデンが顔を見合わせた。
「あいつら、互いを食い合うことで分裂し、仲間を増やしているようですよ」
ゾッとする話に、ディートハルトがやれやれと溜息を溢した。
「剣が効かないとなると、この火薬弾だけど、元々そんな手持ちは無いからな・・・。拙いな」

ユリウスがぽりぽりと鼻頭を掻いて考え込む。
「・・・俺にいい考えがある」
フェルデンがそう言ったとき、いつの間にか結界のすぐ側まで来ていた魔王の側近のそのどこまでも碧く感情の読めない目と合い、ユリウスは思わず押し黙った。クロウを見捨ててルシファーの元へと戻った男。予想以上にこれからの苦戦が強いられるに違いないとフェルデンはぐっと凛々しげに表情を引き締め、覚悟を決めたのだった。

クロウは感じていた。自分のまだ未熟な力で、父の魔力には到底敵わないということを・・・。
けれど、ここで全てを諦める訳にはいかないことも分かっていた。父の姿をした何者かが目の前で強大な魔力を弄ぶかのように振るう。
彼を倒すには、まだクロウの力は未成熟だ。力にしろ、技量にしろ、何一つ天上人であった彼に勝るものは今のところ見つからない。けれど、唯一の勝機があった。クロウはその為になんとしても時間稼ぎをしなければならないのだ。
「けほっ」
肺を傷つけたのか、夥しい血を何度も吐き出しながら、クロウはソードを構え、何度もルシファーに踏み込む。その度に返り討ちに遭い、見るからにクロウはぼろぼろの姿であった。一方ルシファーはいまだ麗しい姿のままである。
(彼なら、きっとやり遂げてくれる筈だ・・・!)
クロウはソードを構え、禍々しい父にその刃を反射させた。
ルシファーは不気味な笑みを浮かべる。勝利の足音に酔いしれているのがまざまざと感じ取れる。
「最期だ、クロウ」
ルシファーの言葉に、クロウは静かに目を閉じた。
(ここまでか・・・)

もうクロウの身体はすでに限界が近付いている。傷と体力の回復も追いついていない状況である。

“クロウ、貴方ならまだできる。諦めるには早いよ。ルシファーを見て。彼は姿形は本物かもしれないけれど、中身は彼じゃないんだよ？　そんな彼に貴方が簡単に負けるなんて有り得ないよ”

突如頭の中で響いた声に、クロウは黒曜石の瞳を見開いた。

「アカネ！？　君は消えてしまったんじゃ・・・」

”わたしは貴方の中にいる。誰よりも貴方をよく知っているから、わたしは信じてる。あなたは万物と一体になれる力を持っているんだから”

クロウは武器を消失させた。

「何をぶつぶつ言っているのだ。潔く諦めたか」

ルシファーが、丸腰になったクロウを皮肉った。

（万物と一体に・・・）

クロウは瞳を閉じ、一切の感情と心を無にすることに徹した。いつしか、朱音が自らの肉体を使ってやって見せたときのように。風の音に耳を澄ませ、大地の鼓動を聴いた。芽吹く小さな生命と心音。遠くの山の川のせせらぎ。自然の中で育まれゆく命。

通常ならばいくつも山を隔てた土地の音を聞くなどということができる筈はないが、どういう訳かクロウの耳にはその全てが伝わってきた。母なる大地の温かさと、この世界への愛しさで、熱いものが溢れてくる。

「泣く程死が怖いか、クロウ」

ルシファーの声で、初めて自分が涙を溢していたことに気付く。

「いいえ、その逆です」

クロウの力は解放されていた。

背の翼がすっと姿を消すと、クロウの身体に牡鹿の魂が重なり、消えた。

（なんだ・・・？　目の錯覚か・・・？）

ルシファーの目の前で、クロウは牡鹿の姿に変貌し、空中を力強く後ろ足で蹴飛ばし跳ねた。頑丈な角でルシファーをがしりと捕らえ、そして投げ上げる。

ルシファーが体勢を立て直すよりも前に、今度はクロウの身体に熊の魂が重なった。大きく逞しい熊が鋭い爪を振り翳し、ルシファーの上にどしりと圧し掛かり、そのまま地上へと叩き付ける。

「ぐふっ」

骨が砕けたのか、ルシファーは唇の端からたらりと血を流す。すぐに起き上がれないままの魔王に、クロウは容赦なく次の攻撃を加える。蛇の魂と重なったクロウは大蛇に変貌し、身動きの取れないルシファーの身体に巻き付き、締め上げる。メキメキミシミシと音と立て、ルシファーの身体の骨が次々に砕けていく。

ぐったりとして動かなくなったルシファーの身体から、ゆっくりと離れると、クロウは静かに元の姿に戻った。

「な・・・に・・・？」

「油断したな、クロウ」

死んだ筈のルシファーの手には、長く鋭いレイピアが握られていて、それはクロウの左胸を貫いていた。

地面に倒れているルシファーの身体は、おかしな方向に手足が捩れ、到底生きているとは考えられない程のダメージを受けているにも関わらず、全く痛みを感じた様子もなくルシファーはその口元に笑みさえ浮かべている。

ばたりと膝をついて倒れたクロウの前で、ルシファーはバキバキと音をさせながら、むくりと起き上がり、自らの手で折れた骨を元に戻してゆく。

「残念だな。既にこの肉体は死んでいる。たとえ首を刎ねられようと、わたしは痛くも痒くも無いのだよ」

クロウは愕然とした。
本当に、もうここまでかと覚悟を決めた。
（アカネ、すまない・・・。君との約束、守れなかったよ・・・）
「おい、化け物」
闘いに夢中になっていた為、すぐ背後に別の存在がいたことにルシファーは気付くことが出来なかったのだ。
ズンと剣を背から突き刺され、ルシファーは衝撃で僅かに前のめりになって振り向いた。
「お前は・・・」
「確かにその身体はダメージを受けないかもしれないが、貴様本体の肉体ならどうかな」
顔色を変えたルシファーが慌てて貫かれた剣を抜こうともがく。
「まさか・・・！」
「そのまさかだ。クロウはお前より一枚も二枚も上手だってことだ。わかったか、ブラントミュラー公爵」
クロウは顔を上げてくすりと笑った。
「させるか！！」
正体を見破られたルシファーの姿をしたブラントミュラーは、一度は消滅していた首切り鎌を再び出現させ、ぶんと大きく振り落ろす。
その前に突き刺していた剣をさっと抜き去り、剣の主はやすやすとその攻撃をかわした。
「お前はここで死ぬんだ、ブラントミュラー」
「ぐぁっ！！」
ぐらりとルシファーの首が傾き、さらさらと蒼黒の髪をなびかせながら、ぼとりと地面にそれが転がった。
「フェルデン、助かったよ」
胸の傷を抑えながら、クロウが首を刎ねたソードを元の分子へと分解させた。
首の無くなったルシファーの身体は、手探りで自らの首をあたふ

たと這いずって探している。
「首を刎ねられても、痛くも痒くもないんだろ？　しばらくそのまま大人しくしていろ」
　フェルデンがざくりとルシファーの背後から硬い岩にその身体を串刺した。首を失った身体はバタバタと滑稽にもがいている。
「くそっ！！　これで済むと思うなよ！！　今に創造主の罰が下されるぞ！！！」
　化け物に成り下がってしまったブラントミュラーの負け惜しみが空しく響く。いつの間にか、あれ程増殖していたマブも一匹残らず消えていた。
「ブラントミュラー、よくも父上の身体を好き勝手に使い、こんなにしてくれたね。いくら寛大なぼくでもこれだけは許せないよ」
　クロウは首だけのブラントミュラーを犬にでも話しかけるように屈んで言った。
「今頃貴方の本体を僕の仲間が見つけている頃だ。知っているよね？　死人に魂を入れ替える禁術を行ったときのリスクは・・・」
　血の気をすっかり失ってしまったブラントミュラーはぱくぱくと喘ぐように、「やめろっ、やめろっ」と何度も悲鳴を上げた。首から下の身体になって尚、なんとか背中の剣を抜こうとその手に武器を創り出そうとするが、その手さえもフェルデンの短剣に地面に縫い止められ、動かせなくなる。
「一体どうなるんだ、クロウ？」
　実際、魔術とはあまり関わりを持たずして育ったフェルデンには理解の範疇を超えたものだったこともあり、そのリスクとやらが想像もつかなかった。
「還る肉体を無くした魂は、永久に無の世界で彷徨うことになる。誰も何も存在しない真っ暗で孤独な世界でね」
　ひいっと悲鳴を上げるブラントミュラーにくすりと笑いを漏らすと、二人は哀れな男を見下ろした。
「それはゾッとする話だな」

フェルデンは肩を竦め、少年王に笑いかける。
「な!?　おかしいゾ!?　どうなってる、何も見えない!!　何も感じない!!」
二人は建ちそびえる美しき白亜城を見上げた。
アザエルか、ユリウスか、ディートハルトか。或いは騎士の誰かか。あの城の中で蛻(もぬけ)になったブラントミュラーの肉体を見つけ、まさに今、その命を絶とうとうしているのだ。
「あああああ・・・、や・・・めて・・・」
ブラントミュラーの叫びを最期に、ルシファーの身体はぴくりとも動かなくなった。
「終わったみたいだな」
クロウはふうと脱力してその場に座り込んだ。
「おい、クロウ。大丈夫か?」
「ああ、死ぬ程ではないよ。しばらくじっとしておけば回復する」
酷い有様な父の亡骸に、クロウは申し訳ない気持ちでがっくりと肩を落とす。
「大丈夫だ、クロウ。フレゴリーなら、元の状態と言えずともある程度見れるようにしてくれるだろ」
そうだね、とクロウは頷いた。
やっと訪れた静寂。平和の足音。

「そう言えばフェルデン。どうやって、あれだけのマブを始末したの?」
フェルデンは少年のように笑い答えた。
「君の部下には腕のいい魔笛使いがいるだろ?　全部彼だ」
ああ、とクロウは笑った。
ライシェル・ギーの魔笛でマブを操作し自滅させるという考えは、後にこのフェルデンが考えついたということが分かる。そして、それを手助けしたのが、あのアザエルだということも・・・。
「遅くなったが、ようこそサンタシへ。ゴーディアの新国王、クロ

ウ陛下」

長く酷い闘いが終わった。

これからは、新しい時代が始まる。

最終章　1話　新たなる時代へ（前書き）

最終章です。
まだ明かされていない謎をこの章でいよいよ明かしていきたいと思っています。どうぞ、最後までお付き合いよろしくお願いします。

最終章　1話　新たなる時代へ

「柑橘類とハーブのミックスティーです、陛下」
かちゃりとデスクの上に置かれたティーカップから、甘酸っぱい香りが漂う。
「ああ、エメ、ありがとう」
フェルデンは山積みになった書類から目を離し、そばかすの侍女に言った。
「陛下、ひどいお顔ですわ。少しお休みになられてはいかがですか？」
エメは心配そうに溢す。
「ああ・・・、だが、まだ王都の復興の目処がついていないからな・・・」
フェルデンはふと部屋の窓から外を見やる。
この一ヶ月で、王都の再建は驚く程のスピードで行われていた。
この分だと、あと数ヶ月もしないうちに、一時避難していた民の多くも王都へと戻ってこられるだろう。あちこちで人々がせわしなく働いている。王都が完全に復興した暁には、新しく生まれ変わった王都の名前を変えようと、フェルデンは心に決めていた。

ちょうど一ヶ月前、この土地には王都が跡形も無く消え去っていた。
地は荒れ、多くのザルティスの死体が無数に散らばり、とても目を向けられるものではなかった。
あの日、フェルデンはクロウとルシファーの人間離れした闘いを目にした。自分達人間は、こんなにも恐ろしい相手と長い間戦をしてきたのかと呆れ返ったのが本当のところだ。
「あなたは、確か、ロジャー・・・」

白亜城のたくさんある部屋の一室で、不気味な円陣の描かれた石壁と床。そして、その中心に横たわる紳士。その男の衣服の胸には、ザルティスの神兵と同じく真っ赤な蛇の紋様の刺?が施されていた。

フェルデンとクロウが白亜城へ戻ったとき、すでにその男の首は胴と切り離され、夥しい血を円陣の中に撒き散らした後であった。

城の中には、どこを探してもベリアルの姿は見つからなかった。

まるで最初からそこにいたかのように部屋の椅子に腰掛けたザルティスの兵の姿をした男は、フェルデンがいつしかリーベル号で見かけたその男のものに相違無かった。

「お久しぶりです、フェルデン陛下。いえ、お初にお目にかかります、と言った方が適切でしょうか?」

男の肩には、世にも珍しい、真っ白い鳩が大人しくとまっている。

「あなたは一体何者なんです」

フェルデンは問うた。謎に包まれたこの男が、どうしてこの場に当然のように居合わせ、そして何もかもを知っている口振りなのか。その全てがわからないままだった。

「わたしは、しがないただの美容師、クリストフ・ブレロにございます、フェルデン陛下。以後、お見知りおきを」

すっと椅子から降り立ち、優雅に頭を下げた男の動きは、紳士そのものであった。

「では、クリストフ・ブレロ。そこに転がっている男の首はあなたが刎ねたのか?」

それを否定するかのように、白い鳩がばさばさと羽を鳴らした。

「いいえ、新王陛下。わたくしはこの場所を、クロウ陛下のご側近にお教えしただけにございます」

何故、この男がアザエルさえも知らなかった禁術を施した場所まで知り得ていたのかと、フェルデンは眉を顰めた。

「あなたがどうして何もかもを知っている!」

「はい、新王陛下。全てを見てきたからでございます」

自称美容師と名乗るクリストフ・ブレロは、嘘をついている素振

りは一切見せなかった。
「一体何を見ていたんだ！」
フェルデンの強い口振りにも、怯むことなく紳士は丁寧な口調で話し始めた。
「盲目の魔笛使いが、その魔力でもってしてあの奇妙な生き物を一掃させました。その後、生き残ったサンタシとゴーディアの騎士がこの白亜城へと一斉に乗り込んできたのございます・・・。騎士達は必死で何かを探していました。けれど、百数個ある城の部屋からこの場所を特定するのは困難を極めました。わたしも、彼らが探しているものを共に探しましたが、そう簡単には見つかりませんでした。クロウ陛下はすでに深手を負っておられ、誰もが焦っていました。そんなとき我友人であるこのクイックルが、ある方法を思いついたのです。窓の外から部屋を覗いて回ればよいと・・・。恐れながら、わたくしは魔族の血を引いていて、多少の風の魔力を扱えますので、わたしと彼女は城の外から部屋を特定する方法に及びました。二頭の竜や羽のある友人の手伝いもあり、それはそう時間も掛かることなく済みました。しかし、我々が見たところ、どの部屋にも探しているものが無かったのです。それは、あることを指し示していました。探しているものは、“窓の無い部屋にある”ということを」
クリストフの話す内容は辻褄の合うものであった。
けれど、ここには肝心のその魔王の側近アザエルがいない。
「では、アザエルはどこへ行った・・・？」
「はて。気がついたときには姿が見えなくなっておりましたので・・・」
鳩と会話ができるなど、おかしな男であった。そして、この男は、まだまだフェルデンの知り得ない謎を多く持っている筈だった。
クリストフは、肩の上の鳩の頭を優しく撫でると、小さく頭を下げ、
「ではこれで失礼します」

と言って、ふわりと宙へ浮かび上がった。
ここは城の最上階。窓が存在せず、屋根との狭間に存在する云わば物置きとでも言える場所。フェルンデンですらこんな場所が存在したことを今の今まで知らなかった。
吹き込む風は優しく、紳士の身体を持ち上げた。
見上げると、外部と繋がる小さな天窓。その窓が開け放され、そこから風が吹き込んでいたのだ。
「待って、クリストフ！」
意外にも、声を出したのは少年王クロウであった。
「アカネからの伝言です」
クリストフは驚いたようにクロウを見つめた。
「貴方は素晴らしい友人だったと。そして、自分を責めることは決してしないで欲しいと」
ほんの少し悲しそうに微笑むと、クリストフは頷いた。
「わかりました。クロウ陛下、ありがとうございます」
ぶわりと巻き起こった風で、クリストフは勢い良く天窓の外へ吸い込まれるようにして飛び去って行った。
クリストフはきっと、朱音について何かを知っていた筈だ。フェルデンは光の差し込む天窓をじっと見上げてそう思った。

「ルシファー、貴方の息子は立派な王になるだろうね」
クリストフは心地よい風に身体を任せ、静かに呟いた。既にこの世を去った、亡き友人に向けて・・・。

「ねえ、アザエル。例の書状、認めておいてくれた？」
クロウはスキュラの頭を優しく撫でる。
「はい、陛下」
アザエルは？で封をした書状を上等な藍色の布から大切に取り出

すと、クロウに見せた。
「ありがと。じゃあ、すぐに遣いを出してくれる？　急ぎなんだ」
スキュラが可愛がってもらっている様子を物陰からじっと見つめていたもう一頭の赤い竜が、淋しげに『グルグル』と声を上げた。
「はい。では、わたしが参りしょうか」
「ううん。アザエルには僕の傍にいてもらう」
おいでと赤い竜に手招きすると、のっしのっしと尾を振りながらクロウに駆け寄ってくる。
「ヒュドラ、君は今朝また花壇の花を焦がしたね。メフィスがカンカンだったよ」
困った顔で赤い竜の頭を撫でると、クロウはアザエルを振り返った。ヒュドラという名前は、魔城に戻ってからクロウが赤い竜に付けたものだ。
「ファウストに行かせて？」
感情の薄いアザエルは、無言のまましばらく静止する。
「陛下、奴は危険です。ましてや、急ぎの用ならば別の者に行かせた方がよろしいかと」
「もう危険は無いよ。だいたい、彼とは既に血の契約を結んである、僕を裏切ることはできない。それに、もう以前のような魔力は無いんだから」
クロウの言葉に、アザエルは僅かに溜息のようなものを溢した。
「例え魔力がなくとも、奴にはあの凶暴な性格と多少の剣の腕があります」
「その時は、アザエルがこてんぱんにしてくれればいいだけでしょ」
きっぱりと言い切ったクロウに、アザエルは仕方無く頷いた。

あの日、全てを終えた後、クロウはあの小さな町へ引き返し、意識を手放している青年を魔城へと連れ帰った。アザエルとしては、危険分子はあの場で殺しておきたかったのだが、それをクロウは許さなかった。

意識を取り戻したファウストは、以前のような炎を操る力を失い、すっかりただの血気盛んな青年に成り下がっていた。クロウの説明によると、血の契約を結んだ際に朱音が炎の魔力と対称的な水の魔力を彼に与えた為だということである。つまりは、彼の中で炎と水の魔力が互いを打ち消しあい、そして力を失ってしまったということになる。

そんな彼を、クロウは事もあろうか魔城で働かせると言い出したのだ。

アザエルは、いつか隙を見て、ファウストの息の根を止めてやろうと決めていた。

アザエルは不機嫌に中庭の通路をつかつかと歩いていた。

擦れ違う者は、とばっちりを受けるのでは無いかとびくびくとしながら深く頭を下げてそそくさと隣を通り抜けてゆく。明らかにアザエルからは怒りの色が滲み出ていた。

「おい、クズめが。そこにいるのだろう」

冷ややかで殺気の篭ったアザエルの声に、中庭の奥で呻く声が返ってくる。

いつものごとく、あの紅髪の青年は、中庭の木陰で昼寝をして仕事をさぼっていたようだ。

「・・・ふぁあああああ・・・。眠ぃ・・・」

むっくりと起き上がったファウストは涙を浮かべながらぐっと伸びをした。

「死にたいか」

冷たい剣の先を首に宛がわれ、ファウストは冷ややかな碧髪碧眼の男を見上げた。

「おっかねぇの」

にやりと笑みを浮かべ、フェウストは続けた。

「で、あんたから俺を探しに来るってことは、何か用があったんじゃねぇの？」

アザエルは、藍の布を寝ぼけ顔の青年に投げつけた。
「うおっと・・・！　なんだこれ」
布を開こうとした瞬間、アザエルがファウストの胸倉を乱暴に掴み上げた。
「サンタシ国王陛下宛ての書状だ。封を切った時点で命は無いと思え」
突き放すように掴んだ手を離すと、ファウストはどさりと尻餅をつく。
「・・・てて・・・。で、このサンタシの王様宛ての書状をどうするって？」
アザエルの殺気を気にしない様子で、ファウストはとりあえず藍の布ごと懐へしまった。
「なるべく早く届けよとのクロウ陛下のお達しだ」
「へ～ぇ、クロウ王が俺にねぇ・・・」
ファウストは些か驚いたように、愉快そうに笑った。
「妙な動きを少しでもしてみろ、貴様の息の根を止める」
アザエルのファウスト嫌いは相当のものである。
「分かってるよ。これっぽっちのチンケな紙を、あのフェルデンとかいう新国王に届けりゃいいんだろ？」
ファウストはぴょんと飛び上がるようにして立ち上がると、ひょいと中庭の壁に飛び乗った。
「見てな。一週間でやってやるぜ」
ふんとアザエルは何事もなかったかのように中庭の通路をすたすたと立ち去ってゆく。
この日、ファウストはサンタシに向けて遣いとして出立したのである。

クロウは漆黒の服に身を包み、王室の椅子に腰掛けた。嘗てはここで父ルシファーがゴーディアの国政を維持し続けていたのだ。
父の亡骸はフレゴリーの手により元通りに修復され、また、元の

棺に眠っている。しかし、義理の母ベリアルは、あの日以来行方がわからないままになっていた。

ザルティスの神兵は一掃され、残った者もゴーディアの重罪人用の牢に幽閉されている。

アザエルは軍事指令官の地位を退き、主宰地位に就任。その代わりにライシェル・ギーが指令官の地位に、そして、メフィス・ギュンツブルクは副司令官から指令官補佐へと昇格。更に、黒の騎士団唯一の女騎士タリアが副司令官に収まった。

近く、貴族中心の国政であったゴーディアを、クロウは身分に関係なく能力のある者が自由に参画できる政治体制に切り替えてゆくつもりでいる。そう、ヴィクトル王が成そうとしていた事のように。そしてその皮切りに、まずは誰もが入学できる能力別の学校をいくつか創設させているところである。

ゴーディアの国政に多大な力を持ち続けてきた元老院は、今回の事で解体が決まり、国王への裏切りが発覚した者達には容赦なく死刑宣告がなされた。この辺りで、一気に内部の膿を出してしまうことを決意したクロウは、あともういくつかの事をやり遂げなければならなかった。

ゴーディアの艦隊は既にサンタシに向けて出航している。砲弾の代わりに、大量の木材や工具を載せて・・・。

後は彼らが到着するよりも先に、ファウストがフェルデンの元に書状を届けてくれれば滞りなく王都復興の援助が行える手筈である。

それから、数日後にクロウは重大な催しを予定していた。父ルシファーの葬儀である。ブラントミュラー公爵の一件で、クロウは父の遺体を火葬しようと決心したのだった。ゴーディアの民には、既にこのことを公表しており、当日には国外からも多くの民衆がゴーディアに詰め掛けるだろう。反対するかと思っていたアザエルも、このことには快く賛同してくれていた。

そして、もう一つ、クロウにはまだアザエルにも言っていない大きな決心があった・・・。

「フェルデン陛下！」
　ノックなしにバンと大きな音を立てて扉から飛び込んできた小柄の騎士に、フェルデンは特に気に留める様子もなく顔を上げた。眼の下には黒ずんだクマが浮かび上がっている。
本来なら無礼だと刑罰を与えられてもおかしくはないユリウスの行動に、新しく雇われた近衛兵達も困ったように顔を見合わせて苦笑いしている。けれど、遙かに自分達より高い地位にいる彼を咎めることは当然ながらできる筈もなく、兵士は皆不思議で仕方無かった。
　まるで子どものような性格のユリウス・ゲイラー青年は、この小柄にしてこの性格にして、なんと指令官の地位に昇格し、実質サンタシ国の軍のトップとなったのだから・・・。
「ああ、ユリか。なんだ、そんなに慌てて」
　すっかり結える程に伸びたさらさらの金の髪は、小さく後ろで纏められている。けれど、フェルデンはなぜか以前と変わらぬ軍服を身に纏っていた。本人曰く、この方が落ち着くとのことだったが、どうも違和感は拭い去れない。
「ゴーディアから遣いの者が来ています！」
　フェルデンが窓の下を覗けば、入り口の前で近衛兵に剣を向けて静止させられている者の姿が小さく伺えた。
「何用だ」
　深く薄汚れたローブを被っているせいで、ここからでは顔までは見ることはできない。
「本人は、クロウ陛下の命令で書状を届けにきたと」
　ふうと一息つくと、フェルデンはかたりと椅子から立ち上がった。
「通せ」
　しかし、近衛兵の案内で王室に姿を現したゴーディアの遣いを見た途端、フェルデンの美しい顔が険しくなった。

「お前、生きていたのか・・・」
フードを脱いで現れたのは、燃えるような深紅の髪。褐色の肌。
あの日と変わらぬ野生の動物並みの鋭い緋色の眼。
「ああ。この通り今じゃクロウの下僕と化して、奴に力も奪われちまったけどな」
何でもないような口調で、ファウストは笑みさえ浮かべて言った。
「今度ばかりはまじで用事で来た。もうアンタの国をぶっ壊したりはしねぇから安心しろ」
王都を破壊した張本人であるこの青年に、フェルデンが怒りを感じない筈はない。
けれど、なぜその張本人である彼を遣いとしてわざわざサンタシに送り込んできたのか、何か少年王クロウの意図があることを感じ取った。
「まさか、あいつが・・・?!」
ユリウスの質問に答えるように、フェルデンはこくりと深く頷いた。愛する母国を破壊されたユリウスは目を吊り上げ、ファウストを睨みつけている。
「クロウ王から文を預かってきた。これを渡したら、悪いけど俺は帰るぜ。そっちの騎士が今にも噛み付いてきそうだしな」
懐から取り出した藍色の布を、近くの兵に取りに行かせる。
確かに、布の下から現れた書状には、黒い?で封が施され、その上にゴーディアの象徴である黒翼が焼き付けられている。
フェルデンは、丁寧にその文を開く。

“サンタシ国新国王、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ陛下。
王都の復興の助けになるかはわからないが、我国から数十隻の船を向かわせた。その全てに必要となる資源を積載させている。腕に覚えのある職人も向かわせたが、それ以上に必要な物資等があれば、遠慮なく遣いの者に文を持たせてくれ。
それから、我国も現在腐った内部の宛建て直しを図っている。も

う少しして落ち着いた頃を見計らい、貴国を訪問する意向だ。その際には、サンタシとゴーディアが正式に同盟を結ぶことを望む。それまでにその心積もりを。”

読み終えた後、フェルデンはふっと透けるようなブラウンの瞳をファウストに向けた。

「お前には悪いが、もう一仕事して貰う」

「なんだと!?」

ファウストの抗議を無視し、フェルデンは含みのある笑いを溢した。

「残念だったな、お前の主であるクロウ陛下がお前を文係として扱使えということでな」

さすがはクロウ。確かに、こんなもので罪滅ぼしになる訳ではないが、この青年は何より心の拠り所にしていた魔力を永久に奪われ、そして不老の肉体を得たことで永遠に近い時を、これからずっと刻んでいかねばならないのである。彼にとっては、まさに生き地獄に相違ない。これは彼に対する最も有効な罰なのかもしれない。いつか、彼が自らの手で奪った多くの命について罪の意識をもち、償いたいと気付く日がきたとき、彼に与えらえた“不老”の肉体が刑罰としての効果を発揮するのだろう。

「あんの、くそガキ国王っ!!」

ファウストは地団太を踏んで怒りを露わにしている。

フェルデンは感じていた。

兄ヴィクトルが待ち望んでいた、平和への一歩が確実に踏み出されつつあることを。

「ユリ、クロウ陛下の手配でもうすぐゴーディアから十数隻の船が到着する。王都復興の為の資源と人員を送ってくれたようだ。下の者達に、彼らを迎える準備を整えるよう指示を」

ユリウスは「はっ」と礼の形をとった。

（クロウが訪国することで、実質レイシア全土に我国とゴーディア

の終戦を知らしめ、公に二大国が手を結ぶことが認められることになる・・・）

亡き兄に向けて、フェルデンは小さく呟いた。

「兄上。兄上の望んだ真の平和が、もうあと少しで実現しそうですよ」

それを祝福しているかのように、肖像画の中のヴィクトル王が少し微笑んだように見えた。

2話　もう一つの決意（前書き）

2話　もう一つの決意

「よく来たな、クロウ」
スキュラの背から降り立った少年王の手を取り、フェルデンはがしりと肩を抱いた。
「久しぶりだね、フェルデン」
フェルデンは、クロウが船では無く飛竜を使ってやって来たことに少々驚いていた。
「ああ、君のおかげで王都もこの通りだ。既に多くの場所で人が賑わい、機能し始めている。まだまだ整備の必要なところも多いけれど」
白亜城の敷地内に降り立った二頭の黒と赤の飛竜は、ご機嫌な様子で爬虫類の眼をきょろきょろとさせている。
「そのようだね。正直、これ程早く復興できるとは予想していなかった」
クロウは透けるような白い頬を嬉しげに緩めた。これが魔の国王と謳われていた者とは今では到底考えられない。
「クロウ、長旅疲れただろう。部屋を用意させている。少し休むといい」
クロウを城の中へ招くと、フェルデンは小声で訊ねた。
「ところで、なぜ今日は君の側近はいない？」
赤い飛竜の背から降りた付き人は、あの碧髪碧眼の氷の男アザエルではなく、あの盲目の槍遣いライシェル・ギーであった。
「彼は主宰を務めることになった。僕が魔城を留守にしている間は彼が全てを取り仕切っている」
「へえ、彼が主宰を？」
フェルデンはゴーディア国内でも確実に大きな変革が起き始めたことを改めて感じた。

「そうだ、クロウ。俺は君に謝らねばならない」
二人の後には、ぞろぞろと近衛兵が列をなしてついている。
今日、サンタシ国内でも、ゴーディアの国王が訪国するという噂で持ち切りであった。
「へ？」
きょとんと黒曜石の瞳でクロウはフェルデンを見返した。
「君のお父上の葬儀のことだ・・・。あんなことがあった後にも関わらず、参列できずにすまない・・・」
特別な来客用の部屋の前までやって来ると、フェルデンはぴたりとそこで足を止めた。
「そんなことを気にしていたの？　貴方の国はそれどころじゃ無かったじゃないか。その気持ちだけで十分だよ」
この日ばかりはエメにもユリウスにも半強制的に王服を身につけさせられているフェルデンは、いつになく国王らしくクロウの眼に映った。
すっかり存在を忘れかけていたが、ライシェルは静かに二人から適切な距離をとってクロウの近くに控えている。
「そう言って貰えると気が楽になったよ」
フェルデンは侍女に客間の両開きの扉を開けさせた。
「この部屋は君の為に用意させたものだ。今晩はゆっくり休んでくれ。何か足りないものがあれば、鈴を鳴らして侍女を呼んでくれ。何でも用意するよう話しておく」
クロウは困ったように微笑んだ。
「お気遣いありがとう。けれど、部屋を貸して貰えるだけで十分だよ」
フェルデンは少年王に優しい笑みを向けた。それは、友に向けるものそのものであった。
「ライシェル殿にも部屋の案内を」
侍女にそう告げると、フェルデンはもう一度クロウに向き直った。
「明日の正午、いよいよ友好の儀を執り行うのだな・・・」

クロウは真っ直ぐにフェルデンの凛とした表情を見つめた。
この日を、どれ程待ち望んできたことか・・・。
「ああ、そうだね」
二大国の提携を機に、レイシアのあらゆる紛争が激減することを期待して止まない。

その晩、クロウは美しく生まれ変わりつつあるサンタシの王都を客室の大きな窓辺から眺めていた。よく晴れた月の綺麗な夜だ。
王都の東には、聖なる地、セレネの森が広がっている。幸いにも、この地だ
けは戦の犠牲にならず美しいままそこに存在していた。
あの森にある鏡の洞窟から、彼女はこの世界へとやって来たのだった。何も
知らない純真な異世界の少女は、ひどく混乱し、そして嘆いたに違いない。こちらの都合で強制的に連れて来られた上、歳若い人生を無理矢理に奪われたのだ。きっとこの世界と自分のことをひどく憎んだに違いないとクロウは思った。
けれど、夢の中の彼女はいつでも優しく微笑んでいた。奪われたのは彼女の方なのに、彼女は消えるほんの僅か前まで、クロウが身体を貸してくれたことに感謝こそしていた。
（アカネ、僕はいつだって君から奪うことしかできなかったというのに、君にはたくさんの物をを貰ってばかりだった・・・）
クロウは月明かりに目を閉じた。
クロウと彼女はコインの表と裏のようであった。けれど、それは元々は同じ一枚で・・・。二人が一つの魂を共有していることに変わりは無い。

ふと、あの日の光景が蘇る。
朱音の存在が消えたすぐ後、

「もう、アカネは戻らないのか、クロウ」

と、問うたフェルデンのそのときの様子。そのまま黙り込んでしまった彼のそのあまりに辛そうな顔はとても見ていられなかった。それはまるで、片羽を?がれた蝶のようで・・・。彼の心の痛みは計り知れない。

けれど、それ以来彼は一度も朱音の名前を口にしなくなった。それが彼の周囲の者やクロウへとの優しさなのだろう。自分が彼女を救えなかったことを嘆き悲しむことで、クロウが自らを責めることのないようにと。そして、周囲の者に気をつかわせることの無いようにと・・・。

しかし、クロウは知っていた。彼が変わらず彼女のことを愛し続けていることを。そして、今でもそっと彼女の帰りを密かに待ち続けていることを・・・。

なぜなら、クロウは見ていたのだ。あの全てを終えた日の夜、敵の手に落ちることなく隠し通せたあの棺の前に跪(ひざまず)き、そっとその棺の淵を静かに触れていたことを。

彼は今でもああして棺の前に毎夜訪れているのだろうか。

響き渡るトランペットの響き、太鼓の音。

昨日同様、どこまでも晴れ渡った空が眩しげな太陽を照らし、真新しい建物で溢れ返る王都の街並みは、遠方からきた観光客や民で賑わっている。出店が立ち並び、色鮮やかな紙吹雪が舞い、あちこちで新王都の復興を祝う喜劇が民衆の間で演じられている。王都中が祝福と喜びでお祭り騒ぎである。

その王都の真新しい大通りを、豪華な馬車が進み、その後に続いて騎士団が行進する。サンタシの新国王と、その祝いの席に駆けつけたゴーディアの新国王が同じ馬車に同乗し、喜びの眼差しで見つめる民衆に向けて微笑みを返している。

この日、サンタシの王都復興を祝う特別な式典が催された。同時に、国民への感謝を込め、フェルンデンが盛大なパレードを企画したのだ。

王都の外からも、新しい国王の顔と新しい王都の姿を目の当たりにしようと、多くの民が詰め掛けていた。勿論、国外から駆けつけた者も多い。

「すごい人だかりだね」

クロウは作った笑顔を崩しはしないが、本音を溢す。

「ああ、予想はしていたが、これ程までとはな・・・」

フェルデンもそう返した。

それもその筈、今日はただの王都復興記念というだけではないのだから。

王都の中心に立てられた、平和の願いを込めたモダンな塔の前で二人の乗った馬車が停止する。

塔のてっぺんには、黄金に輝く鐘が太陽の光に反射し、美しく輝きを放っている。塔を取り囲むように建設された広場には、真っ赤な絨毯が敷かれ、塔の入り口まで続いていた。

二人は塔の最上階から王都を見下ろしていた。塔の下は見上げる人々で埋め尽くされ、恐ろしい程の熱気を放っている。皆、新たなる若き王の言葉を心待ちにしているのだ。

フェルデンは出来得る限りの声を張り上げた。

「我国は心無き悪しき者の手により、望まぬ戦を強いられ、王都を含め多くの民の犠牲を払った。先王であるヴィクトル陛下もそのお一人であられる。しかし、大きな痛手を負ったのは我サンタシ国だけではない。長き間我国と敵対していたゴーディア国もその犠牲となった」

民衆の間から、ざわざわとどよめきが起こり始める。

「魔族と人間は憎しみ、何度も互いに戦を繰り返してきたが、それは大きな過ちであったと今はっきりと断言できる。悪しき者達からサンタシを守る為、ここにおられるゴーディア国新国王クロウ陛下

は、自らの命をも顧みず、奔放してくださった。さらに、多大な損害を被った我国の復興に力添えをしてくださった。この戦で、サンタシ国とゴーディア国は共に手を組み、悪しき者達を廃絶させることに成功したのだ。今回のことで我々は学んだのだ。“真の敵は種族の違いなどではない、真の敵は憎しみという感情そのものだ”ということを!!　ここにサンタシ国の王として全世界に宣言する!

今日をもって、我国とゴーディアは友好関係を結び、レイシア全土の平和の先駆けとなることを!　そして、二度と同じ過ちを犯さぬようここに二国の友情の証である鐘を打ち鳴らす!!」

フェルデンの合図で兵達により黄金の鐘が打ち鳴らされる。

広場中に、王都中に鐘の音が響き渡り、人々は大喝采してその音に喜びを露わにしていた。

塔の上で、クロウとフェルデンがかしりと熱い握手を交わした。

鐘の音が鳴りやんだところで、クロウが耳に手をやり、すぽりと何かを抜き取った。

「なるほど、耳栓をしろっていうのは、こういうことだったんだ」

これで全世界にサンタシとゴーディアの同盟は知らしめられた。

これからまだまだ多くの問題は残るが、レイシアの平和への一歩がいよいよ踏み出された訳だ。

「今日は存分に祝い、楽しんでくれ!!　今日、この日をもって、王都は“ヴィクトーリア”と改名し、この日を平和祭祝日と制定する!!」

フェルデンが最後に付け足すと、広場に集まった民衆は喜びの声を上げた。

パンパンと花火が上がり、ラッパの音が木霊する。祭りの再開の合図だ。

「フェルデン、演説とてもよかったよ」

「ありがとう。クロウ、今回はわざわざ我国の式典に参加してくれたこと、感謝するよ」

くすりとクロウは笑った。

「いいや、“貴国を訪問する”って言い出したのは僕の方だ。こっちこそ、ぼ僕を招待してくれたこと、感謝しているよ」

これからは、もっと二国間が親睦を深め、人種に関係なく人々が国を行き来する時代が訪れるだろう。

「それにしても、あの書状、本当に君が書いたのか？　クロウ」

以前ファウストの手によりフェルデンに届けられた書状の文体ときたら、あまりに固いものだった為、フェルデンは多少の違和感を覚えていたのだ。

「ああ、ばれたか・・・。アザエルに書かせたんだけど・・・」

そう聞いた途端、フェルデンはなるほどと思わず笑いを溢してしまっていた。

「ところで、フェルデン。僕はちょっとしなければならないことがあって、先に城へ戻らせてもらいたいんだけれど・・・」

クロウの申し出に、フェルデンは首を傾げた。

「どんな用だ？　部下に言って手伝わせようか？」

クロウはふるふると首を横に振った。この後、フェルデンは王都をパレードであと半周してから白亜城へと戻る予定だったのだ。

「否、さすがに君の部下にアザエル宛の書状を書いてもらう訳にはいかないよ。報告も兼ねてるしね。それに、彼が怒ると怖い・・・」

はあと溜息をつく少年王の姿に、フェルデンは苦笑を漏らした。アザエルが恐ろしい人物だということは、フェルデン自身痛い程よく知っている。

「なるほど、それでは仕方無いな。ユリウスに言って、君を城まで送らせるよ」

こくりと頷いたクロウに、フェルデンは全く疑念を抱くことは無かった。これ以上、大切な客人を自国の都合で連れ回す訳にもいかないと考えたこともあったせいもある。

二人は塔の下で別れ、クロウはユリウスを含む数人の騎士と護衛、そしてライシェルを引き連れて一足先に白亜城へと引き返して行っ

た。
　いつもと変わらぬクロウの表情。
　息を飲む程の美しい容貌の少年王に時折視線をやり、ユリウスはその度に気まずくなってさり気無く視線を逸らすといったことを馬の上で何度も繰り返した。
（けれど、まさかこの魔王の息子とフェルデン陛下が手を結ぶ日が本当にくるとはなあ・・・。ってか、この少年王には個人的な疑問が山程残ってるんだけど）
　ユリウスは、フェルデンと共にゴーディアに遣いとして訪れたときの事や、ボウレドでのあの晩のことを思い起こしていた。
　朱音を失ったことで我を失ったフェルデンがこの少年王の首に手をかけたこと。それにも関わらず、彼はその事実を側近アザエルにさえ明かすことなく黙っていたこと。そして、自分を殺そうとしたそのフェルデンのこをとひどく心配し、魔城を抜け出しフェルデンを追ってきていたこと・・・。
（あれじゃあまるで、この少年王が儀式により覚醒するより以前からフェルデン陛下のことを知っていたみたいだ・・・）
　ユリススの中で腑に落ちないまま、その奇妙な疑問点はぐるぐると出口を無くした迷路のようにずっと漂っている。

「ありがとう、もうここでいい」
　クロウの言葉にはっと我に返ったユリウスは、いつの間にか白亜城の城門を抜け、入り口までやって来ていたことに初めて気付いた。
　慌てて馬を降りるが、クロウがそれに静止をかけた。
「君は馬を置いてこなきゃいけないでしょ？　ここからはライシェルもいるし、一人で大丈夫だよ。部屋の場所はしっかり頭に入っているし」
「しかし、そういう訳には・・・」
　いくらなんでも客人をここで放っておく訳にもいかず、ユリウスが返答しようとしたとき、

「ユリウス殿。わたしがクロウ陛下についていますので、お気になさらず馬を置いてきては？　後から追いついて来てくだされば済むことです」

盲目の槍遣い、ライシェルが尤もな意見を口にし、ユリウスはしぶしぶそれに頷くしか無かった。

「で、では・・・。急いで馬を置いてきます。すぐに追いつきますので、護衛と先に行きかけていてください」

にこりと微笑んだクロウを見て、ユリウスはくるりと馬屋に向けて馬を走らせた。

これが後々取り返しのつかないことになるとは思いもせずに・・・。

クロウは静かに佇んでいた。

美しく彫刻の施された黒い棺の前に佇み、その中を見下ろしていた。

眠ったように目を閉じたまま動かない黒髪の少女の頬にそっと触れ、クロウは優しい微笑みを浮かべた。

「やっと逢えた」

実体の彼女に直接出会ったのは、クロウにとってこれが初めてだ。夢や心の中で会ったときより、少女の姿は可憐で、そしてどこか不思議な色を帯びている。

決して美しい容貌をしている訳ではないし、魔力を秘めている訳でも無い。ただの人間の少女に他ならないその彼女の姿を見た途端、懐かしさと温かさが胸の奥から湧き出る感覚を覚えた。

少女の胸に深く突き刺さった短剣。けれど彼女の肉体はまだ死んではいない。今ならまだ間に合う。

クロウは朱音の胸の剣にそっと触れる。

嘗ては自らの胸に突き刺さっていたこのハデスの剣は、アザエル

の魔術により遠き“アース”の地へと魂を長い旅へ誘っていた。そして今、この剣はそのアースから連れて来られた少女朱音の胸に突き刺さり、その魂を元の肉体クロウへと戻す役割を果たしていた。

「アカネ、君に時間を返してあげる」

クロウは知っていた。魂の移動距離が近くであれば、司祭や強い魔力を持つ他者の手助けが無くても儀式が成立するということを・・・。

彼女から奪うことしかできなかった、せめてもの償い。

クロウは触れていた少女の胸の短剣を握る手にぐっと力を込める。勢いよく抜けた剣の刃は少女の胸から一滴の血も垂らすことなく、傷口を瞬時に癒してゆく。

けれど、クロウは傷口が塞がりきるよりも前に、その刃を自らの胸に突き立てなければならなかった。

己の胸に叩き付けるかのように、クロウは剣を突き刺した。

「・・・アカネ・・・、もう一人の・・・僕・・・」

トサリと棺の脇に倒れたクロウはそのまま動かなくなった。

ユリウスは自らの失態に舌打ちした。

（くそっ、やられた・・・！！）

馬を置いてなるべくすぐ後を追いかけた筈だったのだが、城の中に足を踏み入れた途端、侍女や彼につけた護衛の全てがバタバタと通路で倒れ気を失っている。慌てて飛び込んだクロウに宛がわれている客室は蛻の殻だった。

「一体クロウ陛下はどこに・・・！？」

ユリウスがドンと剣の柄を感情のままに城の柱に叩き付けた直後、背後に気配を感じ飛び退いた。

「！？」

「ユリウス殿、わたしです」

盲目の槍遣い、ライシェルがいつの間にかそこへ立っていた。

「ライシェル殿・・・！　これは一体どういうことです・・・！？」
　ユリウスは一瞬クロウとライシェルの裏切りを疑った。
「こんな祝いの日に申し訳ない・・・。しかし、これはクロウ陛下が強く望まれたこと。一介の部下であるわたしには陛下をお止めすることはできなかったのです」
　ライシェルの言っている意味が理解できず、ユリウスは眉を顰めた。
「それは一体どういう・・・」
「わたしはクロウ陛下からフェルデン陛下宛の書状を渡す命を受けています」
　はっとしてユリウスは身を翻して駆け出した。
（まさか・・・！！）
　ユリウスには向かうべき場所はすでにわかっていた。
　そう、あの場所しかない。
『バン！！』
　勢いよく跳ね開けた部屋の扉の先には、だだっ広く何もない部屋が広がっている。その中央に、美しい黒い棺が横たえられ、そのすぐ脇に小柄な少年の身体が崩折れていた。
「！！！」
　ユリウスは大きく目を見開き、慌てて倒れた人物の元へと駆け寄る。
　美しい蒼黒の髪。閉じられた瞳と、透けるような真白い肌。漆黒の礼服。
「クロウ陛下！　しっかりしてください！！」
　クロウの身体を抱き起こした直後、その胸に突き刺さった固い何かに気がつき、ユリウスはそれに視線を落とした。
「そ・・・、そんな、まさか・・・！」
　クロウの胸には短剣が突き刺さっていた。揺すっても、一向にクロウは目を覚ます気配は無い。
（お、落ち着け、ユリウス・・・！　とにかく、この剣をなんとか

しないと・・・）

ユリウスが血相を変えて短剣の柄に手を添えた時、

「う・・・」

棺の中から呻き声が上がった。驚き振り返ると、ちょうど少女がむくりと起き上がるところだった。

「！！？？」

少女の胸の短剣はなくなっている。

混乱してい目を丸くしているユリウスに、少女が言った。

「その剣・・・、抜かないで・・・」

少女がなんとか声を絞り出すと、ユリウスは腕の中でぐったりとして動かないクロウと少女を交互に見た。

「へ・・・！？　一体どうなって・・・」

「・・・ぼ・・・く・・・だよ。クロウ。魔力のない・・・この子の身体じゃ、すぐにでも僕の意識は消えてなくなっちゃうだろうけど・・・」

信じられない光景に、ユリウスが目を丸くして口をあんぐり開けている。

「君は確か、フェルデンの一番の部下だよね・・・？　ちょっと伝言を頼まれてくれる？」

少女の姿をしたクロウが言った言葉に、ユリウスは思わず無意識に頷いていた。

（は！？　クロウ陛下が死んで、この子が生き返って・・・、この子がクロウ陛下で・・・？？　一体どうなってる～～～～～～～～～～！？）

ユリウスは嘗て無い程にパニックに陥り、心の中で思い切り叫び声を上げていた。

3話　誓い（前書き）

このお話の中で、謎がいくつか解明されますが、まだいくつか謎を残しています。残りはまた次のお話で・・・。（＾―＾）

3話　誓い

パレードを終えた馬車が城門から入ってきた直後、フェルデンを乗せた馬車の脇を必死の形相で駆ける小柄の騎士の姿があった。
「フェルデン陛下！！　大変です！！」
そろりと下から見上げながら走り寄るユリウスを、また始まったとばかりに呆れ顔でフェルデンが苦笑して返答する。
「ユリ、今度は一体どうした。んっとにお前はいつも落ち着きが無いな・・・」
「陛下！　それは一体どういう・・・、じゃなくて！！　大変なんですってば！！」
一人突っ込みを入れる部下の様子を苦笑しながら眺めるフェルデンにとっては、慌てて報告にやって来るユリウスのことなど、日常の一コマに過ぎなかった。
「馬を止めてくれ」
フェルデンは、部下に命じて馬の足を止めさせると、えらく興奮した様子のユリウスに向き直った。
「で、一体どうした？」
「フェルデン陛下、お、落ち着いて聞いてくださいね・・・！」
はあと溜息を溢し、フェルデンが頷く。
「ああ。まずはお前が落ち着くべきだがな」
「ぜ、絶対に怒らないで下さいよ！？　約束ですよ！？」
えらく念入りに確認をとるユリウスに、フェルデンは妙に引っかかったが、とりあえず小さく頷いておいた。
「え～～っと、なんと説明すればいいのか・・・」
「なんだそれは。大した用でないなら、後にしろ」
しらっとしたフェルデンの目つきに、ユリウスは慌てて食い下がる。

「それはダメです!!　え〜っと・・・、つまり・・・」
首を捻ったフェルデンに、ユリウスは思い切って叫んだ。
「クロウ陛下が亡くなりました!!!!!」
一瞬しんと静まり返ったその場。
「は・・・？」
ユリウスの言っていることが理解できなかったのか、フェルデンが思わず素の表情で聞き返す。
「ですからっ、クロウ陛下が亡くなったんですってば!!」
「お前、一体何の冗談だ？　いくらお前でも、それは行き過ぎた冗談だぞ」
状況を全く理解していないフェルデンに少しばかり苛立ち、ユリウスはさっきよりもはっきりと言い切った。
「冗談なんかじゃありませんよ!!　本当なんです、これが!!自分の胸に剣を突き刺して亡くなったんです!!」
急激にフェルデンの顔から血の気が引いていくのがユリウスにもはっきりとわかった。
勢いよく馬車から飛び降り、フェルデンは顔を強張らせたまま早足で城へと駆け出した。
「フェルデン陛下!!　どうかされたのですか？」
後ろで、控えていた護衛達が何やら問い掛ける声が聞こえたが、もう今はそれどころではなかった。
「ユリ!!　どういうことだ!?　説明しろっ!!」
ほんのさっき、あの塔の上で大勢の民衆を前にゴーディアとサンタシの友好を宣言したばかりで、これからの新たなる時代への喜びを、二人で分かち合ってたというのになぜあの少年王がその直後にそのような行動を起こさねばならなかったのか、フェルデンには理解の範疇を超えていた。
「すみません、全部俺の責任です。俺が馬を置いている間に、ライシェル殿とクロウ陛下が先に城内へ・・・。すぐに後を追いかけたのですが、俺が中に入ったときには、城の中の者は皆意識を失って

いて、クロウ陛下は既に・・・」
ひらひらと風で靡く王服は、足に纏わりついて煩わしいらしく、フェルデンはちいっと舌打ちして足元の服の裾を払った。それでも成る丈早く歩き、フェルデンは一刻も早く事の真相を確かめる為に足を動かした。
「それと、実はもう一つ・・・」
ユリウスが大切なもう一つのことを報告しようとしたそのとき、フェルデンは王室の扉をバンと乱暴に開いた。
部屋の中心に目を置いたまま、ピタリと静止して動かなくなってしまったフェルデンにユリウスは疑問を感じ、ふと長身の彼を見上げた。
すると、彼の美しく透けるようなブラウンの瞳が大きく見開かれていた。すっと通った男らしい鼻筋や口はまるで幻でも見ているかのような驚きでいっぱいであった。
「ユリ、これは夢か・・・？」
呆けたままのフェルデンに、ユリウスは「いいえ、現実です」と小さく答えた。本来なら、フェルデンがここへ辿り着くより先に報告してしまいたかったというのに・・・。
ちょこんと王室の床に座っている黒髪の少女は、きょとりとしてフェルデンとユリウスの方を見つめていた。
「アカネ！！！」
気づくと、フェルデンは周囲の全てを忘れてその少女に駆け寄り、強く抱きしめていた。
懐かしいチチルの甘い香りがふわりとフェルデンの鼻腔をくすぐる。
「フェルデン・・・？」
強く抱き寄せられたまま、少女は驚き目を丸くしている。
「・・・・・・」

抱きしめたまま、何の反応も返さないフェルデンに、少女は思わず呻いた。
「フェルデン、痛いよ」
「アカネ・・・、会いたかった・・・！」
朱音は逞しい青年の腕の温もりの中で、静かに目を閉じ、そろりとその背に腕を回す。
長身の彼が、床に膝をつき服が汚れることも厭わずに彼女を抱きしめたまま動こうとしなかった。
「わたしも・・・」
朱音は頬を伝う熱いものに気付いてはいなかった。
胸が熱い。身体の奥深くから溢れる水のようにその感情がどんどん噴き出し、頭を真っ白にさせた。
“もう離れたくない”
そんな想いが、次々に沸き起こり、回した手につい力が籠もる。
まさか、こうして彼に新崎朱音として会える日が再び来ることなど、誰が予想していただろうか。朱音自身、ファウストの闘いの際にその希望はとっくに諦めていた。
（それなのに、今、わたしはこうして彼に抱きしめられてる・・・）
幸せという言葉では形容できない程、朱音は喜びと安堵感に包み込まれていた。
「アカネ、君は俺のすぐ近くまで戻って来てくれていたのに、俺は・・・！」
フェルデンが自分を許せない口調で朱音の頭上で呻くように溢した。
「本当は、俺には君をこうして抱きしめる権利などどこにも無いというのに・・・」
朱音はするりと青年王の腕からすり抜けると、黒く澄んだ瞳を彼に向けた。
「そんなことない、貴方に自分の正体を隠して騙し続けていたのはわたしなんだよ？　貴方にその権利が無いのなら、わたしにはもっ

とその権利は無いよ」
涙の雫で濡れた純真な少女の頬を、フェルデンは優しく撫でた。
「君はちっとも悪くなんかないよ、アカネ。君を守ってあげられなかったのはおれだ。おれはまだ弱く、そしてあまりに盲目だった・・・」
悲しそうな目で見つめ返す青年に、朱音は微笑んだ。
「でも、そのお蔭でわたしは貴方のもとに戻って来られた・・・」
「ああ・・・。おかえり、アカネ」
朱音はまた泣いた。
彼の元まで戻ってくるまで、どれだけ遠回りしてきただろうか・・・。

一度は元の世界へ戻り、彼の元を去った。
けれど、結局はまたレイシアへと連れ戻され、朱音の身体を失い、そして彼との繋がりも一度は失ってしまった。
かけがえの無い仲間との旅を通して、色々な人々と出会い、別れ・・・。
闘いで傷つき、友や多くのものを失ってきた。
そして、朱音としての最期を迎え、その時に“自分探しの旅”の答えを得たのだ。
この世界に連れて来たアザエルを恨み、自分の人生を呪ったこともあった。
けれど、今ではこうして別の世界に住むこのたった一人の青年に出会わせてくれた運命に感謝していた。あのまま、元の世界で受験生を続け、受験し、高校生活を送っていけばそれなりに幸せな人生が待ち受けていたかもしれない。だが、“フェルデン・フォン・ヴォルティーユ”という男に決して出会うことはできなかっただろう。
「アカネ、君は本当にすごい女の子だ」
フェルデンの言葉に首を傾げると、彼はふっと優しい笑みを浮か

べた。
以前よりもすっかり大人っぽい顔つきになった青年は、今や王たるにふさわしい空気さえ纏っている。
「君がこのサンタシ国を守った。そして、兄上さえもが成し遂げることのできなかった、ゴーディアとサンタシの平和への礎を築いた。君は偉大だ」
全くそんな偉業を成し遂げたつもりのなかった朱音は、純真な目で整った若き王の瞳を困り顔で見返す。
フェルデンは気付いていた。彼女の魂が、どれだけ高潔で、そして人々の心を捉えて離さぬほどの魅力を兼ね備えているかということを。そして、その彼女の魂こそが、サンタシとゴーディアの人々の心を一つに結束させ、平和へと導いたのだという事実を・・・。
「だけどフェルデン、いつクロウがわたしだと気づいたの・・・？」
朱音からすれば当然の疑問だった。
朱音の知る限り、フェルデンが自分の存在に気付いていたという覚えが見当たらなかった。ディアーゼ港での再会時には、確かにフェルデンは自分を見て、敵国の王であり憎い仇だという目を向けていた筈であったし、その後の王都での闘いでも、一向にそんな素振りは見せていなかった筈だ。
「情け無いことに、ちゃんと気付いたのは君がファウストとやり合っている最中だ・・・。違和感を感じ始めたのは、その少し前。そう、王都にゾーンで戻った時あたりだろうか・・・」
そうなると、フェルデンがクロウの中の朱音の存在に完全に勘付いたのは、朱音がクロウの中で眠りについてしまった後ということになる。
「そうだったんだ・・・」
「だが、リーベル号で既に君が別の形で生きているということには気付いていたんだ。高貴な娘が海に落ちたと聞いて、すぐに君のことじゃないかと疑った・・・」
朱音はこくりと頷いた。

「あはは、それわたしだ」
ぽりぽりと鼻頭を掻くと、照れ笑いを浮かべる。
「じゃあ、あの嵐の夜に船の地下室にいたのは、やっぱり君だったのか」
暗闇の中、立つこともままならないあの船の地下室で、確かにフェルデンは朱音の存在を感じていた。一言も発することの無かった朱音だったが、崩れた荷物から庇った際に漂ったチチルの実の甘い香りは、今でもはっきりと思い出される。
「ごめんね、どうしてもクロウの姿で貴方に会う訳にはいかなくて・・・」
フェルデンは俯いた朱音の頭をふわりと撫でた。
「あの後、君は本当に海に落ちたのか？」
嵐の後に行方が分からなくなってしまった朱音の存在。
またもやこくりと頷いた少女に、フェルデンは頭を抱え込んでしまう。
「・・・・・・」
「え、フェルデン・・・？」
黙りこんでしまった金髪の青年に、朱音は心配そうに顔を覗き込む。
「おれはまた君を救えなかったってことか・・・」
「でもね、大丈夫だったんだよ！　ほら、アザエルが助けてくれたし！！　あ、でもあの時はアザエルも死にかけてたんだっけ・・・」
フォローするつもりが、余計にフェルデンを落ち込ませ、がっくりと肩を落としてしまう。
「・・・んっとに、自分が嫌になるよ・・・」
朱音がおろおろと気落ちしてしまった青年の隣で慌てふためく。
「君を自らのこの手で殺そうとまでしたんだ。その上君に酷いことを言って、心を傷つけてしまった・・・。一生かけて償っても償いきれない程だ・・・」
彼はこれから先、きっと自分を許すことをしないだろう。そう朱

音は心の中で感じた。けれど、それはひどく悲しいこと。優しいこの青年には、いつだって笑顔でいて欲しい。

「きっとわたしが逆の立場なら、わたしも同じことをしていたと思う・・・。だから自分を責めないで、フェルデン・・・？　それに、わたしは実はすごく弱い人間なんだ・・・」

　逞しいフェルデンの手に自らの手を添えながら、朱音は一つひとつ、想いを言葉に紡いでいった。

「クロウの姿で目が覚めた時、わたしは全てを失ったと思った・・・。そして、正体を知られて貴方から拒絶されることが何より一番怖かった・・・。実際、貴方がサンタシから使者として来たとき、絶対に貴方にクロウの正体がわたしだって知られたくないって思ってた・・・。つまり、わたしは臆病で、真実を話す勇気が無かったの・・・」

　自分にもう少し勇気があれば、貴方がこうして苦しむことも無かったのにね、と朱音は辛そうに笑った。そして小さく「ごめん」と付け加えた。

　フェルデンは、朱音が真っ直ぐな言葉に全ての神経を研ぎ澄ませて聞き入っていた。

「だけどね、一つクロウとして目覚めてはっきりとわかったことがあるの。“わたしはわたし”だってこと。たとえ外見が変わろうとも、ここにいるのは新崎朱音なんだ」

　彼女のどこまでも澄んだその目を見つめるうち、フェルデンは胸が高鳴るのを感じていた。

「だから、今なら胸を張って貴方にも話せる。貴方がどう感じるのかが少し怖いけど・・・」

　朱音は一呼吸置いてから告白した。

「わたしはね、クロウの魂の生まれ変わりなの」

　大きく茶の瞳を見開き、フェルデンが無言のまま朱音を見つめ返す。

その間に耐え切れなくなって、朱音は辛そうに目を伏せった。
「・・・それはつまり・・・、アカネとクロウは魂を共有していると・・・？」
朱音は深く頷いた。
（アカネとクロウが同じ魂だと・・・！？）
それはあまりに衝撃的な事実だったが、フェルデンには、今までのできごとを考えると、それはいかに自然なことか納得できた。朱音の魂が特別なものだったからこそ、自身が強く惹かれていったのかもしれないと、なぜかすんなりと受け入れることができたのだ。
「わたしも初めはそんなこと信じられなかった。だけど、本当のことだった・・・」
朱音の話が本当だとすると、一つの魂で二つの肉体を持っているということになる。
「貴方を追って旅に出て、たくさんのことを経験して、色んな人達と出会って分かったの。クロウの生まれ変わりだってことも全部ひっくるめて今のわたしなんだってこと。クロウとはまた違う、わたしという人間なんだ」
今まで覆い隠してきた部分を全て打ち明けたことで、朱音の心は羽のように軽かった。あとはフェルデンにどう受け取られるかということだけが、朱音にとって大きな問題でもあった。
フェルデンは黄味を帯びた少女の頬に手を添えると、静かに言った。
「ああ、君は君だ」
じわりと朱音の視界が滲んだ。
受け入れられている。そんな安堵感が朱音を包み込んでいた。
「ありがとう、フェルデン・・・。それとね、旅の中でもう一つ分かったことがあったの」
ぽろぽろと零れ落ちてくる涙の雫を切なげに見つめ、その一つひとつを指で拭い去りながらフェルデンは頷いた。
「フェルデン、わたし・・・、貴方がすごくすごく大好きなの・・・

！　貴方を失いたくない・・・！　貴方がとても大切だから、わたし・・・！」

全部を話しきらないうちに、朱音は再び逞しく温かい青年の逞しい腕の中で、再び抱きすくめられていた。

「アカネ、もう二度と君を失いたくない・・・！！　君を失ったと知ったとき、あれ程の地獄はなかった・・・」

ああ、と朱音は胸の中で後悔していた。自分のせいで、彼をどれだけ哀しみの淵へと追いやっていたのかと・・・。

「愛してる、アカネ！　君を二度と危険に晒したりはしないと約束する・・・！　二度と君を手放さないと！」

考えてもいなかった愛する青年からの告白に、朱音はぎゅっと目を瞑った。朱音自身、彼と全く同じ気持ちでいっぱいだった。

けれど、その喜びはすぐに悲しみへと変化してゆく。

「だけど、そのせいでクロウは・・・」

朱音の声で、重要なことを思い出したフェルデンは、はっとしてユリウスを振り返った。

「そうだ、クロウは・・・！　ユリ！！」

二人のやり取りを目にし、ほんのりと頬を紅く染めたユリウスが、落ち着きの無い返事を返した。

「クロウ陛下ですが、本人がご希望された通りに身体はアカネさんが入っていた棺の中に入れておきました」

ユリウスの言葉に、フェルデンが眉を顰めて訊ねた。

「クロウの希望・・・？　お前、クロウと話したのか？」

はたと少し考えてから、ユリウスが微妙な顔で頷いた。

「ええ、まあ、話したと言えば話しましたね・・・。ですが、話していたのはアカネさんの身体でしたけど・・・」

「それは、一体どういうことだ・・・？」

困り顔のユリウスは、フェルデンに説明を加える。

「ええと、上手く説明できないですが、アカネさんとクロウ陛下は同じ魂の為同時に存在することができないんだと思います・・・。

ですから、クロウ陛下は自らこんな行動を・・・」
ユリウスの説明に、フェルデンは難しい顔をしたまま目を閉じて考え込んでしまう。
「つまり、お前はアカネの身体を使って話すクロウと言葉を交わしたと・・・？」
大きく頷くと、ユリウスは「おそらく」と返答した。
フェルデンは、とんでもないことになってしまったと、今にも頭を抱え出しそうな雰囲気だった。
「お取り込み中に申し訳ない」
ふと、背後から落ち着いた声がして三人は振り返った。
そこには、旅装束に衣替えを済ませた槍遣い、ライシェルが静かに扉の前に立っていた。
「サンタシ国王、フェルデン陛下。我主クロウ陛下から書状を預かっています」
フェルデンは彼の意図を感じ取って、すっと立ち上がった。
まるで隙のないこのゴーディアの黒の騎士団指令官の男は、国王の前でもまるで物怖じする様子も無く、預かっていた書状をフェルデンに差し出した。
上等の紙に？で封をされた書状を受け取ると、フェルデンは光を映さないライシェルの眼を見つめた。
無言のままそれに視線を落とし、腰のナイフでを手に取ると、封に切れ目を入れる。かさりと音を立て、フェルデンは手紙に目を通していった。

“親愛なるサンタシの国王、フェルデン・フォン・ヴォルティーユ陛下。
貴方はゴーディアとサンタシに平和をもたらした歴史上初めての人間だ。
僕は共に闘った貴方を心から信頼している。だからこそ、打ち明けなければならない。

二百年前のマルサスの危機で、僕は父から受け継いだ魔力を抑制する術をもたなかった。それを危ぶんだ父が、アザエルに命じ、僕をある儀式により一時的に異世界アースへと魂のみを転生させた。

僕は約二百年の月日をクロウとしての記憶を一切持たず、全く別の人間として幾度か生まれ変わりを繰り返していた。

そんな中、父ルシファーがマルサスの危機の際に受けた毒が原因で亡くなり、その側近であったアザエルは父の生前の遺言通り、鏡の洞窟を通じ異世界アースを訪れ、とうとう僕の生まれ変わりの魂の持ち主を探し当てた。それがアカネだ。

でも、彼女はあくまで普通の家庭に生まれた普通の人間の少女で、彼女には大切な友人や家族もいた。

けれど、父亡き後のゴーディアの混乱を防ぐ為という僕らの自分勝手な理由で、彼女を無理矢理レイシアへ連れ去り、その魂を僕へと戻す為に彼女の全てを奪う結果になってしまった。

僕自身の人格が覚醒するまで、彼女は僕の身体の中で存在し続けていた。

アカネは、僕の中で懸命に生き、そして希望を最後まで捨てようとしなかった。完全に彼女の人格が僕の中から消え去ってしまうその時まで・・・。

アカネは僕を恨むどころか、かけがえの無い多くのものを残してくれた。

仲間。心の強さ。優しさ。愛。希望。

その全てが、僕がいくら欲しても手に入れることのできなかったものばかりだ。

僕は、彼女をこの世界に連れてきてしまったことや、闘いに巻き込んでしまったことは大きな間違いだったと思っている。

そして、奪うことしかできなかった僕が、一体彼女に何をしてあげられるだろうと・・・。

だからこそ僕は決めた。彼女から奪った時間を返すことを。
決して、僕らがしてきたことを償うことはできないけれど、せめて、アカネには笑っていて欲しい。
貴方に彼女を頼みたい。そして、今後のサンタシとゴーディアのことを。否、
このレイシア全てを・・・。

僕が再び目覚めるときは、アカネの命が尽きるときとなるだろう。
それまで、僕はもう少しの間眠りについていることにするよ。
僕が目覚めるまでに、レイシアに真の平和を築き上げていて欲しい。
どうか、素晴らしき友人、賢王フェルデンにお願いしたい。
もう一人の僕、アカネをよろしく頼む。

貴方の友人
クロウ”

読み終わった後、フェルデンの中で霧がかった視界が一気にはれたような気がした。全ての謎や出来事が、やっと一本に繋がったのだ。
フェルデンは懸命に書き綴ったであろうクロウの手紙をぐっと胸に押し付けると、強く心の中で誓った。

（クロウ・・・、きっと約束しよう・・・！！）

4話　扉の向こうへ（前書き）

最終話です。ここまで読んで下さった皆さん、本当にありがとうございました。

ここまで書いてこれたのは皆様の応援があってこそです。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

4話　扉の向こうへ

朱音は腕までを覆う滑らかな生地の手袋を、両手を広げまじまじと見つめていた。

「お綺麗でございます、アカネ様・・・」

純白のドレスに身を包んだ少女は、平素とは違った特別なメイクが施され、ほんのりとその頬は桜色に染まっていた。真っ白のドレスに黒い髪が映え、神秘的な雰囲気を放っている。美しく着飾った少女は、少女というよりもいくらか大人びた女性のようにも見せていた。

鏡越しに、まるで自分とは違う別人がそこに映っているかのように呆けている、少女の美しく纏め上げられた髪に、仕上げのティアラを据え置きながら、うっとりとした声で侍女であるエメが溢す。

「エメ、わたし、どうしよう、怖い・・・」

不安げな声を上げる少女を慰めるように、エメは優しくその手を握った。

「大丈夫ですよ、アカネ様。国中の誰もがアカネ様を待ち望んでいます。それに、今ごろ陛下も・・・」

強張った面持ちで、朱音は大きく息をついて立ち上がった。

「さ、そろそろ参りましょうか」

エメの声に合わせ、朱音は床にまで広がる長くたおやかな純白のドレスを両手で持ち上げ、ゆっくりと部屋の扉へ向かった。

一歩、一歩と慎重に足を進めてゆく。

履き慣れない高いヒールの真っ白な靴。

ずしりと重く、きらきらと散りばめられた宝石が光るドレス。

朱音は扉の前でもう一度大きく息を吸い込み、そして吐き出した。

城の敷地内に存在する真っ青な空を映した湖。
その畔で一人ぼんやり湖の水面を見つめる少年の姿を朱音は見つけた。
霞ががかった茶の髪は、時折暖かく心地の良い風に吹かれ、さらさらと揺れる。そのどこか淋しそうな横顔に、朱音は胸の奥がツキリと痛んだ。
懐かしく、そして大好きだったあの少年とそっくりな横顔。思わず「ルイ」と声を掛けそうになるけれど、その少年が振り向いたときそれが彼では無かったことを痛感し、そして悲しい現実へと引き戻されるのだ。
「なぜお前が泣く」
うんざりしたように、少年が溜息混じりに言った。
「ロラン・・・」
朱音は、滲んだ視界の中、霞みがかった茶の瞳を見つめ返した。
「僕に再会できて、そんなに嬉しいとはな」
皮肉めいた口振りは相変わらずだが、それが彼の精一杯の照れ隠しだということは、朱音にもすぐにわかった。
朱音がこの少年に最後に会ったのは、メトーリア港での闘いの時で、その時は彼自身クロウの中にいる朱音には気付いていなかった。
「うん。ロランに凄く会いたかった」
素直な朱音の言葉に、戸惑った様子で視線をぷいと逸らすと、ロランはつっけんどんに言った。
「・・・悪かったな」
「へ・・・？」
絶対に自分からは頭を下げたりしないこの少年が、一体何に対して謝っているのかと朱音はきょとりと瞬きを繰り返した。
「その・・・、お前を元の世界に返してやると約束しておきながら、結果的にこうなった・・・」
朱音にとっては驚くべき事実であった。まさか、あれからロラン

がこのことをずっと思い悩んでいたなんて。
「ロラン、わたしは元の世界に帰ったんだよ。ただ、思いの外早く連れ戻されちゃったってだけ」
目元を手の甲で拭い、朱音は努めて明るく返した。
「まあ、そうだが・・・。鏡の洞窟はもう力を失った。お前はもう・・・」
ロランが全てを言い終わらないうちに、朱音は少年が何を言おうとしているのかを知っていた。
「うん、そだね。もう二度と帰れない」
ルイとは色違いの大きな目が、僅かに細められた。
「俺を恨んでないのか」
朱音はロランの隣にそっと腰を下ろした。湖の水面はきらきらと光を反射し、輝いている。
「なんでロランを恨まなきゃならないのよ。あなたは約束通りわたしを元の世界に送り返してくれたじゃない」
ロランの視線が再び湖に戻された。
「もう、帰りたいとは言わないのか・・・？」
無愛想を装ってはいるけれど、これが少年の精一杯の気遣いなのだ。
「正直すごく帰りたい。父さんや母さんや弟に会いたいって今でもそう思う。今までのが全部夢で、また目が覚めて元の日常に戻れたらって・・・」
そう言ったきり、しばらく沈黙が訪れる。
そよそよと揺れ、その音を朱音は心で聴いていた。
「・・・だけど、こうも思ってる。この世界に来られてよかったって」
今度は湖を見つめる朱音の横顔をロランが見つめる。
「なぜだ？」
ふっと唇を緩ませると、朱音は言った。
「だって、ロランに会えた」

驚いたように少年はじっと朱音の横顔を見つめたまま僅かに息を吐いた。
「それに、フェルデンやヴィクトル陛下や、エメにも。サンタシの中だけじゃない、ゴーディアでもたくさんの素敵な人達と出会えた。だから・・・」
朱音が言わんとしていることに、ロランはふんっと鼻を鳴らした。
「ほんっとお前は馬鹿だな。無理矢理拉致されて無理矢理故郷から引き離されたんだぞ！？　どれだけお前はお人好しなんだ」
腕組みをして、急にぷんすかと怒り始めた少年に、朱音は首を傾げる。
「なんでロランが怒るのよ」
「知るか。お前の心配なんかして損をした」
そんな少年の優しさを内心で嬉しく思いながら、朱音はくすりと静かに笑った。
「でね、ロラン。あなたに渡さなきゃいけないものがあるんだ」
今度はしっかりと身体ごと少年に向き直り、朱音は真面目な面持ちで伝えた。
かちゃりと鎖の音をさせて、朱音は胸元にしまってあるあのペンダントを黙って握り締めた。意を決したようにそれを首から取り外し、自分よりも幼く見える術師の少年の手に握らせる。
「これは・・・」
「ルイのだよ」
今まで冷静を装っていた少年の霞みがかった大きな茶の目が、一層大きく見開かれた。
「どうしてお前がこれを・・・？」
すっかり気配りもできない程余裕を失くした少年が、思わず朱音の腕を強く掴む。
朱音はそんな痛みに顔を顰めることなく言葉を続けた。
「アザエルに連れられてゴーディアへ渡った後、魔城であなたそっくりの子に出会ったんだ。初めは、ロラン、あなただと思った」

そのときのことを懐かしむように、朱音は静かに目を閉じた。
「だけど、その子はルイと名乗った。彼はいつもわたしの側で助けてくれた。わたしは彼が大好きで、わたしたちはすぐに友達になった」
あの心優しい少年の姿を思い出すと、今でも心が穏やかになる。
「ある日、ルイは自分とロランは双子だと話してくれた」
しばらく魔城で生活していた朱音ならば、双子の兄であるルイを知っていたとしてもなんの不思議も無かった筈だ。けれど、ロランはなぜか嫌な予感がしていた。
「ルイは・・・、ルイはどうしてた?」
「あなたをすごく恋しがってた。離ればなれになってしまったことをすごく悔やんで、あなたに会いたがってたよ」
ロランは受け取ったペンダントに視線を落とした。自らが肌身離さず首に下げているペンダントと対のそれは、ひどく懐かしい。
「今、ルイは・・・」
ロランが重い口を開いたと同時に、朱音は静かに告げた。
「ルイはもういない・・・」
確かに、少年の瞳が大きく揺らいだ。ペンダントを握る手が僅かに震えるのが朱音にも感じ取れた。
「い・・・ない・・・?」
「ごめんなさい。わたしは大切なあなたの弟を守れなかった・・・」
ロランの嫌な予感は的中した。彼は魔族の血を半分引く自分達の長い寿命の中で、いつか分身でもある双子の兄とどこかで会えることを密かに期待していたのかもしれない。
「ルイが・・・、死・・・んだ?」
朱音は黙ってロランの手に自らの手をそっと乗せた。その頬を伝って、幾粒の雫が二人の手の甲にぱたぱたと落ちてゆく。
「このペンダント、ルイがお母さんから貰ったとても大切なものだって話していたから、あなたに渡さなきゃって」
ロランは朱音がつくり出した涙の雫を、瞬き一つすることなくじ

っと見つめている。
「・・・そうか・・・。このペンダントを見た瞬間、なんとなく嫌な予感がしてたんだ」
掠れた少年の声は酷く切なげで、朱音はもう少年に掛ける言葉さえ見つからない。
黙ったまましばらく少年の手を優しく包んでいた。
「アカネ、ルイの最期を訊いてもいいか・・・？」
涙こそ見せないが、少年の哀しみが言葉では表せない程大きなものだということは、朱音にもよく分かっていた。
朱音は知り得る全ての事を話した。
どういう経緯で彼とともに旅に出ることとなり、自分達をどんな出来事が待ち受けていたのかということを。そして、あの日の地下道での恐ろしい悪夢を・・・。
「ルイは、自分の信念を貫き、お前を最期まで守りきったんだな・・・」
全てを聞き終わると、ロランは呟いた。それは、とても切なく淋しそうな声だったが、双子の兄であるルイに対する誇りを感じさせるものであった。
「もう泣くな。お前は元々顔のつくりが繊細じゃないんだ。泣くと余計見窄らしい」
唯一の肉親を失くしたロランが一番泣きたいだろうに、そんな皮肉を飛ばしながら、少年は笑った。
「あの気の大人しいルイに、お前を守りたいと本気させたんだ。光栄に思え」
朱音は再び勢いよく涙が溢れ出した顔でロランにがばりと抱きついた。
「おっ、おい！」
びっくりはしたものの、少年は朱音のしたいようにさせてやることにした。

しばらくして朱音がある程度落ち着いたところで、ロランは言った。
「お前が気に病むことなんてない。こう見えて僕たちはお前なんかよりも遙かに長く生きている。ルイもお前を守れたことに満足してる筈だ」
半身を失ったとは信じられない程、少年の口調は落ち着いていた。
「って訳だ。そろそろ離れろ、馬鹿」
突き放すような口調ではあるものの、それは明らかに照れ隠しであった。
「こんなところ、フェルデン陛下に見られでもしたら、僕はたちまち術師としての仕事を解任させられる」
朱音がはたと涙を拭いながら少年を首を傾げて見返す。
「フェルデン陛下はお前に婚姻を申し込まれたのだろう？」
それを聞いた途端、ぼっと顔を真っ赤にした朱音は口をぱくぱくさせて声を上擦らせた。
「な、何でそのこと・・・！」
呆れたようにロランが溜息を吐く。
「当たり前だろう。一国の王がたかがそのへんの小娘に婚姻を申し込むなんてこと、噂にならない訳がないだろう」
朱音は、自分の身体で覚醒して数日した後に起こった出来事を思い出して煙が出そうな程に顔を紅潮させていた。

『アカネ、君さえよければ、俺の側でずっと一緒にいてくれないか？』
見慣れた真白い騎士服のフェルデンが、ベッドから出たり入ったりする、数日の休養生活を過ごしていた朱音に突然言った一言だった。
よく言っている意味がわからないでいた朱音に、フェルデンがこう付け加えた。

『俺は君を后として迎えたい。君を本気で幸せにしたいんだ。少し、考えてみてはくれないか・・・？』

まさか、こんなに若くして、誰かから求婚されるなんてことは、朱音自身予想だにしていなかった。それも、大国の王様にである。

まだ、結婚なんてことは今の朱音にははっきり言ってぴんとこないものだった。

「で、どうする気だ？」

すっかりいつもの調子に戻っている少年に、朱音はもごもごと口篭った。

「どうする気って言われても・・・、わたしまだ中学生だし。・・・って、もう結構日が経ってるから高校生か・・・」

少年はイラついた調子でそれに返答する。

「まさか、断る気なんてないだろうな！？　陛下だぞ！？　王様だぞ！？　国王陛下に目を掛けて貰えることがどれだけ貴重且つ有り難いことなのか、お前わかって言っているのか！？」

鼻息を荒くする少年に、朱音がしゅんとして俯く。

「うん・・・、そりゃあわかってるけどさ・・・」

そんな朱音に、少年ははあともう一度溜息をついて付け足した。

「受けろ、アカネ。幸せになるべきだ、お前という女は」

穏やかな口調の少年に、朱音はひどく安心感を覚えた。

「ん・・・」

肉親を失ったことを知ったばかりのロランが、朱音に言い聞かせるような口調で続けた。

「お前はいろんなものを失いすぎた。このあたりで何か得ても罰はあたらないだろう・・・」

ロランからは考えられもしない程優しいその目は、やはり朱音よりも何十年も年上の者のようだった。

それに、朱音にはそれがルイの優しい眼差しと重なって見え、思

わず呆けてまじまじと彼を見つめてしまう。
「それにだな、何よりフェルデン陛下に恥をかかせるなよ？　お前みたいなド庶民の平凡な小娘に婚姻を申し込んだだけでも、陛下にとってはとんでもない不名誉なんだぞ」
腕組みをして懇々と言い聞かせるルイそっくりな少年に、朱音はぼんやりとその表情を見つめ続けている。
「おい、人が真面目に話してやっているときに、ちゃんと聞いているのか！？」
急に不機嫌になった少年の言葉にはっとして、朱音は申し訳なさそうに頭を下げた。
「んっとに、お前って女は・・・。これじゃあルイも苦労してただろうな」
こうしてがみがみとロランに小言を言われるのは、朱音自身久しぶりのことで、とても新鮮なことだった。そして、彼の言うように、自分の年齢なんかを気にしていることが、あまりにちっぽけなことのようにも思えてきた。
今では、ここでのフェルデン無しでの暮らしはもう考えられない。正直に言えば、フェルデンともう二度と離ればなれになりたくないと朱音は感じていた。次に彼を失ったときは、今度こそ気がおかしくなってしまうかもしれないとまで考えるまでだ。
この時、既に朱音の心の中は決まっていた。
もう、誰も失いたくない。
失う前に、あの若く賢い王の隣で、今度は自分から大切な人達を守ってゆきたい、と・・・。
ロランはそんな朱音の姿を目にしながら、そっと握りしめていたペンダントを懐へしまった。
遠く離れていた対のペンダントが今、再び同じ場所へと戻ってきた。その重みを感じながら、少年はこの異世界から来た一人の少女を今度こそ近くで見守ろうと静かに心に決めた。兄であるルイがそう決めたのと同じように・・・。

ルイはロランの双子の兄であり、ロランにとってルイは切って離すことのできない程大切な半身で、そして大切な存在だった。それは、ルイにとってロランも当然ながら同じで、それはロラン自身よくわかっていた。

故郷のミラクストーでは、魔族の血を半分受け継ぐ混血児である、ロランとルイへの迫害はあまりに酷いものであった。悪魔の子と呼ばれ、挙句は人間である母までが迫害を受けていた。心の優しすぎるルイは毎日泣いて暮らしていた。そしてそれは、母の死後にも続いていた。

二人がゴーディアへと渡った後、ミラクストーの住民の手により母の墓は街外れの荒れた地へと無許可で移転させられていたのだ。そのことを知ったロランは、ルイには告げずに一人帰国して墓の場所を探し出したのだ。そして、戻った時のひどい有様を知り、ロランは愕然とした。住民達に憎しみすら抱き、そしてここへルイを連れて来なくて良かったとも思った。

ロランは住民を懲らしめてやりたいと思い、ある行動に出た。

街に結界を張ったのだ。街の外から結界を張り、住民が街の外に出ることを一切絶とうとしたのだ。外界から断絶され、孤立した街の人々は数日で焦り始めた。遣いを出そうにも遣いすら出すことさえ叶わない。ただ、見えない壁が立ち塞がり、恐怖した。

ロランはそれでも結界を張るのをやめなかった。ただ、母を父と出会ったこの地で安らかに眠らせてやりたかったのだ。住民が泣いて謝り、許しを請うまでは決してやめる気もなかった。

そこへ、サンタシの新国王が現地視察の為たまたま訪れたのが、ロランとヴィクトル王との初めての出会いである。

ヴィクトル王は、固くなに結界を解こうとしないロランを叱り切り捨てるなんてことはしなかった。

ただ、彼はこう言ったのだ。

『君の怒りはも尤もだ。けれど、その力をもっと役立てる気はない

か？　わたしはまだ若く未熟だ。しかし、今よりももっとよい国にこのサンタシを変えてゆきたいと考えている。今はまだ無理だが、いずれ、この国の誰もが幸せに暮らせる世を創り上げてみせると約束する。どうだ、それまでわたしの元で術師として働かないか？君の母上には、そんな世が訪れるまでは城の敷地内に仮住まいを用意しよう』

少し吊り上ったブラウンの目は隙がなく、そしてとても利口そうだった。

ロランはゴーディアに残してきたルイのことがひどく気にかかったが、それでもこのヴィクトルという若き国王に懸けてみたいとそう思った。

ルイは負けん気の強いロランとは正反対で、とても気の大人しく優しい少年だった。だからこそ、魔族に対する迫害の強いこの街にルイを連れて帰りたくなかったというのがロランの本音だ。

その反面、ゴーディアならば混血児である二人への迫害はなかったし、そして何より、あの魔王の側近アザエルが二人の身元を引き受けてくれていたこともあり、とりあえずは居食住と安全は保障されていている。

ロランはあえて半身から自ら離れて生きる道を選ぶことにした。それは、母の安らかな眠りと、心優しい双子の兄を守る為に選んだ道だったのだ。

それがまさか、こんな形になろうとは、ロラン自身考えてもみなかった。いつか、真の平和が訪れたとき、二人はまた以前のように再会し、ともに暮らせる日が来ると思っていたのだから・・・。

（ルイ、お前は絶対に自ら危険には飛び込まないタイプだと思っていたんだが・・・）

ロランはあの優しげに微笑む霞がかった灰の目を思い出していた。

そして、どうやらやはり二人同じ大切な守りたいものを見つけてしまったことに呆れたような笑いを溢さずにはいられなかった。

けれど、ロランがこの話を朱音に打ち明けるのは、まだずっと先の話である。

開かれた扉を一歩、一歩と歩むその先に、輝ける太陽の光が差し込み祝福していた。
ドクン、ドクン。
高鳴る鼓動。
緊張。恐れ。夢。希望。
その全てがない交ぜになって、朱音の胸を焦がす。
最初の一歩を扉の外に踏み出した途端、朱音は眩しい光に目がくらみ、白い手袋の左手を思わず目の上に翳した。

『ワアアアアアアアアアアア』

地が揺れる程の歓声と、喜びの声が降り注いだ。
そこにいる誰もが大喝采し、朱音の登場を待ち望んでいた。
驚きでゆっくりと周囲を見渡す。
真っ赤な絨毯の道は扉から一本道に続き。その脇には多くの人々が大勢詰め掛けていた。大勢の兵士が、万全の警備の中その道を守るように立ち並んでいる。
そして、その先には、真っ白な燕尾服に身を包んだ、完璧な青年が優雅に微笑んでいた。金の髪は美しく後ろに撫で上げられ、整った薄い唇が「アカネ」と呼んだ気がした。
朱音はたおやかな純白のドレスをゆっくりと持ち上げると、真白い靴で彼の元へと向かって歩き始めた。吸い込まれそうなブラウンの瞳が、唯一人の少女だけを映していた。

ここにいる誰もが神秘的な美しさを放つ朱音に釘付けになっていた。

誰もが、心から若き国王と少女の幸せを、そしてサンタシの幸せを願っていた。

そして、少し離れた場所からそれを見守る友人達の姿もそこにあった。

アザエルは、いつも通りの変わらぬ無表情で同盟国の代表としてじっとそこに佇んでいた。碧く長い髪は左で緩やかに結われ、真っ黒な礼服の上で輝いている。

そのすぐ隣では、似合わない礼服を窮屈そうに身につけたディートハルトの姿が。その顔の傷はいつになく緩み引き攣れている。

そして、騎士としての職を全うしようと、いつも通りの騎士姿でにこにこと笑うユリウス。

礼服を着ているというよりは着られていると言った方が適切だろうロランが、にこりとはしないが霞がかった茶の目は、幸せそうな朱音に向けられていた。その胸には二対のペンダントが掛けられている。

一番奥にはこの戦で奇跡的に無傷だった老齢の医師フィルマンが、久しぶりに再会を果たしたフレゴリー医師と肩を並べ穏やかな表情で見守る。

ライシェルや他の黒の騎士の姿はここには見当たらなかったが、実を言えば、こっそり塔の上から見物していたのだ。

『パサパサパサ』

羽ばたきの音に、朱音がふと顔を上げる。

真っ白な鳩が一羽朱音のすぐ上の青く晴れ上がった空を飛び去っていくところだった。

「クイックル・・・！」

朱音はきょろきょろと周囲を見回した。
けれど残念ながら、優しい紳士の姿は見つけることはできなかった。
「お姫様。誰かお探しかな？」
いつの間にかすぐ近くまでやって来ていた美声が、朱音の耳の近くで小声で囁いた。
真っ赤になった朱音の背を抱き込むように、フェルデンが彼女を受け止めた。
「フェルデン・・・」
色鮮やかな花びらが舞う中で、遠くで塔の上の鐘が祝福の音を響かせている。
鼻をくすぐるとてもいい香りに、朱音はそっと目を閉じて愛する青年の逞しい手をきゅっと握りしめた。
二人は、世界の祝福の中で、新たな一歩を踏み出したのだ。

「貴女の幸せそうな姿が見られて、私もとても嬉しいですよ、アカネさん・・・」
塔の上で、足を組んだタキシードの紳士が、フワリとハットを優雅に外した。その肩にちょこんと白い鳩がとまる。紳士は、満足げにハットを静かに被り直した。

今、またここからレイシアの新しい歴史が刻まれていく・・・。

4話　扉の向こうへ（後書き）

最後に残った謎・・・、クロウの実のお母さんが誰だか分かったでしょうか？　お話の中に何度かヒントがあったので、気付いた方もおられるかもしれません（＾－＾）

地上で最も罪な出会い（前書き）

長らくお待たせ致しました・・・。

ここで、本編では明かされなかった謎が明らかになります。

地上で最も罪な出会い

暗黒の雲に覆われ、空に怒りの雷の光が走り抜ける。吹き荒れる雨粒は肌にを叩きつけるような大粒のもので、強風は二人の旅を阻む程のものであった。

視界はひどく悪く、目を開けていられない程・・・。互いの声は雨と風の激しい音に掻き消され、互いに聞き取ることさえできない。

これは、父なる創造主が無断で地上界に舞い降りたルシフェルに対する、忠告の標であった。

この一ヶ月、彼と血の契約を交わすことで自由に飛ぶことのできる風の力を手に入れたシモンと、そして天上人ルシフェルは、人間界を歩いて回るという奇妙な旅を続けていた。

ルシフェルの不在に気付いた創造主は、ルシフェルを捜したが、彼はうまく人間の姿に化け、そして一切の魔力を抑えることで人間に紛れることに成功していた。その為、二人は魔力無しの徒歩の旅をしなければらなかったのだ。

「この雨じゃ、当分歩けないよ、どこかで雨宿りをしよう」

「え、何!?」

大声で叫ぶシモンの声に、ルシフェルは叫ぶようにして返した。

「あ！　ま！　や！　ど！　り！」

一音一音の唇を読むことで、何とかシモンの提案を理解したルシフェルは大きく頷いて見せた。

しきりに空に青白い雷の筋がいくつも走り、そして間髪入れずに轟音が地になり響く。

すぐ近くの地面に雷が落ちたらしく、燻ったような煙が上がっている。

（これはちょっと拙いぞ・・・）

シモンは、視界のきかない中で、何とか洞窟を見つけ出し、その中で雨と雷をやり過ごすことにした。
「父が相当苛立ってるみたいだ」
衣服の水分を絞り落としながら、ルシフェルが洞窟の穴からちらりと真っ黒な空を見上げた。当分雨は止みそうに無い。
「父って、創造主様ですか？」
シモンは、火を起こそうと発火石をカチリカチリとぶつけ合いながら、火花を起こしている。
「ああ、そうだ。父はどうやらわたしに天上界へ戻って来いと言っているようだ」
困ったように、ルシフェルは苦笑した。
「創造主様がお怒りなら、一度戻られてはどうなんですか？」
なかなか掻き集めた湿気の無い枝になかなか火が付かず、シモンは手を焼いている。
「それはできぬ！　父に見つかれば、強制送還だ。そうすれば、わたしはもう二度と地上界を訪れることはできなくなるではないか」
急に不機嫌になったルシフェルに、シモンは肩を竦めた。この一ヶ月、共に旅を続けてきたが、どうもこの天上人は見た目は麗しい立派な男性姿をしているが、中身はとても好奇心旺盛な子どものような性格をしていた。
「けれどルシフェル・・・。この世界をお創りになった創造主様です、きっとすぐに見つけられてしまうんじゃないですか？」
ルシフェルが、”地上界では友というものがあって、友というものは互いに名前で呼び合うものだと話しに聞いた！”と目を輝かせて言うものだから、シモンはルシフェルを名前で呼ぶ羽目になっていた。それは、シモンにとっては、天上人である彼を呼び捨てにすることで、罰当たりなことのように思えて仕方が無かったのだが・・・。
「魔力を使用しなければ大丈夫だ。父は魔力の発動地点を頼りにわたしの居場所を見つけ出す」

やっと引火に成功したシモンは、ふうと一息をついた。こんな火だって、ルシフェルの力さえあれば、簡単に起こすことができるというのに・・・。

「このまま隠れ続けるには無理があるようにも思いますけど・・・」

心配そうなシモンに、ルシフェルが自信満々に返す。

「君は何も心配しなくたっていい、シモン。わたしだって、一通り地上界を見て回ったら自分から天上界にちゃんと帰るさ」

美しく透けるような白い肌に、蒼黒の髪をしとどに濡らしたとても神秘的なルシフェルの姿に、シモンは何度も目を釘付けられる。それはまさに、神懸りの美しさと言えた。

けれど、彼はその美しい顔で子どものように唇を尖がらせたり、頬を膨らませたりと、その姿に不似合いな仕草をした。

「ルシフェル、あなたって、一体何歳なんですか・・・？」

シモンの純粋な疑問だった。

「何歳？　天上人にはそういった概念は無いんだけれど・・・・。わたしは兄上や姉上達に比べるとずっと若い。父が一番最近にわたしを生み出したと言っていた。と言っても、この地上界で言えば何千年という時が経過しているんだろうけれど」

ルシフェルは興味深々なシモンに天上界でのあらゆることを話して聞かせた。

月の女神アルテミス、太陽神アポロン、大地の女神ガイア、天空の神ウラノス、彼らはルシフェルと同様に創造主が生み出した兄弟達であること。他の多くの天上人達も、生まれた時から大人の姿をしていること。そして、その誰もに”欲”というものが存在せず、誰もが勤勉で、誰もが慈愛に満ち、そして父である創造主に従順であること。

けれど、一番年下のルシフェルだけが彼らと少し毛色が違っていた。

創造主は、完璧を求め、限りなく神に近い存在である天上人を創

りだすことに成功し、そこで生まれたのがこのルシフェルだったのだ。

”欲”が無く、そして慈愛に満ちた天上人達には欠落している部分があった。それは、感情というものの・・・。それが無ければ、彼らは創造主の子ども達という名の、ただの操り人形でしかなかったのだ。

創造主は、操り人形でな無く、自らの意思を持った者を生み出そうとしたのだ。感情と意思を持ったその者に、いずれは神として世界を預けようと密かに計画していたのかもしれない。

「わたしは、いつも父から地上界の話を聞かされていた。そこに住む人間達の話はすぐにわたしの心を虜にした。やがて、人間界のことをもっと知りたい、人間界の言葉を学びたい、人間界での暮らしを見てみたい、人間と接してみたい、と強く考えるようになった」

ルシフェルの好奇心と、”もっと知りたい”という欲は、やがて創造主の手を煩わせる程のものとなっていったらしい。

そうして、彼は創造主の目をすり抜け、こうして無断で地上界を訪れることを決行したのである。

ここでシモンがルシフェルから直接聞いた話は、後にゴーディアの魔王降臨の際の伝記物語として伝えられていくこととなる・・・。

明け方、雨が止んだ洞窟から、シモンが食料調達に出掛けてからのことである。

一刻程経過した頃、洞窟のすぐ側で何やらかさかさと葉がこすれる音と、足を引き摺るような音が聞こえ、ルシファーはシモンが帰ってきたと思い警戒心も何も一切無く洞窟の外に飛び出して行った

のだ。
「シモン、戻ったのか？」
きょろきょろと周囲を見回しながら、洞窟の入り口のすぐ脇に立っていたルシフェルは、突如後ろから羽交い絞めにされ、その首にひやりと冷たい硬い何かを突きつけられ、驚きで身体を固くした。
「何者だ」
中性的な声に、ルシフェルは返した。
「君こそ誰だ？」
予想外の反応だったのか、その者はゆっくりと羽交い絞めにしていた手を緩め、硬く冷たい物を引っ込めた。ルシフェルから一切の殺気が感じ取れなかったからだ。

「賊ではないみたいだな」
ルシフェルの眼の前に、吸い込まれそうな不思議な碧い髪が靡いた。
それは、彼が今まで一度も目にしたことの無いとても珍しく美しい色・・・。
「おい。口がきけないのか？　なぜ何も言わない」
呆けたルシフェル、その者は不機嫌に言った。
「わたしは・・・、ここで友を待っていたのだ・・・」
なんとかそう言ったルシフェルの神懸かった美しい容貌に気付き、その者が驚きに満ちた声で質問した。
「お前・・・、人間か・・・？」
その一言は、ルシフェルに十分すぎる動揺を与えた。なぜなら、彼は魔力を一切抑え込み、完全に人間の中に紛れ込んでいる筈だったからである。
「わ、わたしは、に、人間だぞ！　あ、怪しくなんてないぞ！？」
明らかに挙動不審な美麗な男に、その者は訝しげな碧い目を向ける。その瞳は、髪と同じ色で、ルシフェルは思わずじっとその目を見つめていた。

そして、あることに気付く。
「怪我を・・・しているのか？」
薄汚れた旅装束に腰に剣を携えていることから、この者は旅の剣士と伺えたが、その腿をぐしょりと赤黒い血液が衣服を濡らしていることにルシフェルは気付いた。
「大したことはない。ただのかすり傷だ」
剣士がさして興味もなさそうにそう言ったものの、ルシフェルはその足元を転々と血の痕がずっと森の向こうから続いていることに目を留めた。
「わたしにはそうは見えないが。かなり痛そうだ」
まるで我が身のことのように、眉を顰めるルシフェルに、剣士は顔には出さずとも、心の中で小さく安堵の溜息をついた。
（追手ではないようだな・・・）
「・・・！　おい、何をするっ」
急にふわりと浮き上がった感覚に、剣士は反射的に剣の刃をルシフェルに突き立てかける。
今、怪我を負った碧き剣士は森の中で出会ったばかりのこの男に抱き上げられていたのだ。
「洞窟の中で傷の手当をしよう。怪我をした女の子を放ってはおけまい」
驚きに目を見張った剣士は、思わず突き立てていた剣の手を緩めてしまった。
「わ、わたしは男だ！　放せ！　放さなければ叩き切るぞ！」
ずっと張り詰めた空気を纏っていた剣士が思いも寄らないルシフェルの行動に少し緩む。
「男？　君は女だ」
「なぜそう思う！？　わたしは正真正銘の男・・・」
「君は美しい。男は逞しく、女は美しいと父から教え学ばされた。よって君は女だ」
呆気にとられたようにぽかんと口を開けた剣士だったが、すぐに

正気を取り戻し、またルシフェルの腕の中で暴れ始めた。
「美しいだと!?　よくもその顔で抜け抜けとそんなことを言えるな。そう言うなら、お前自身も女では?」
剣士は、これ程までに美しい容貌の人間をこれまで目にしたことは無かった。腹が立つやら調子が狂わされるやら、何やら訳の分からない感情で、嘗て無い程に取り乱していた。
「わたしは男だ。何故なら、わたしは逞しい」
恥じらいもせず、もがく剣士をなんなく抱いたまま、ルシフェルが自身ありげに頷いた。
「お前っ、頭がどうかしているんじゃないか!?」
剣士が呆れ半分で美しすぎる男の顔をまじまじと見つめる。名も知らない謎多き男。殺気の一切が感じられず、成熟した肉体とは反した少年のような真っ直ぐで迷いのない物言い。一体どういう経緯で、この男がこんな山奥の洞窟にいるのか、全く想像もできない。
「失礼な。わたしの頭は正常だぞ?　君は女だ。そして君の瞳は・・・とても優しい」
剣士は顔にかあっと血が集結するのを感じた。
暴れるのをやめた剣士の身体をそっと洞窟の奥に降ろすと、ルシフェルは剣士の腿に走る傷跡を見つめ、そっとその手を宛がった。
「何をする気だ・・・?」
不審そうな目を向け剣士が剣の柄を握りしめる。妙なことをすれば迷わずばっさりといってやる気だった。
じっと見つめてくる黒曜石の瞳は大丈夫とでも言わんばかりに、じっと剣士を見つめ返した。
剣士は吸い込まれそうなその瞳に、思わず呼吸を忘れてしまっていた。
逸らすことのできない瞳に金縛りにあったかのように釘付けられている間に、先程まで痺れるように感じていた腿の痛みがいつの間にか消えていることに剣士は気付いた。

「・・・傷が・・・」
慌てて傷口をまさぐるが、確かに血に濡れた衣服が不快に足にくっついてはいるが、どこにもその傷跡が見当たらない。痛みどころか、まるで最初からそこに傷などなかったかのように脚も何不自由なく動かすことさえできる。
驚きの目で、剣士はルシフェルの胸倉を掴んだ。
「お前、一体何者だ!!」
「わたしはルシフェル。天上人だ」
眉を顰め、ぐいと剣士は美しい彼の顔を引き寄せた。
「馬鹿を言え、そんなものがこの世に存在する筈が・・・」
掴まれた手に優しく手を添えたルシフェルは、しっと指を唇の前で立てた。
「拙い、非常に拙い・・・。父に居場所が見つかった・・・」
うんざりしたようにそう言うと、ルシフェルは剣士の耳元で囁いた。
「ねえ、少し父をからかってやろうか?」
悪戯を思いついた子どものように、ルシフェルは剣士に微笑みかけた。
「は!?　お前は一体何を言って・・・」

「!!!!」

そう言った瞬間、周囲の風景が飛ぶように流れた。
一体何が起こったのか全く理解できないでいる剣士は、大きく見開いた碧い瞳で、ゆっくりと周囲を見渡した。

「・・・ここは・・・」
今、目の前で常識では考えられない事象が起こっていた。
二人は、さっきまでいた場所とは全く別の場所へと瞬時に移動していたのだ。

手を宛がっただけで完治した腿の傷跡に、瞬きする間に身体を移動させる能力。神懸った美しい姿。
明らかに彼が人間ではないことは一目瞭然であった。
「さすがの父も、すぐにここを探し出せないだろう」
嬉しげに空を見上げる男は、してやったりと手を腰に宛がった。
「ルシフェル、お前は一体・・・」
「ここはセレネの森と言うそうだ。どういう訳か、この場所だけは父の千里眼さえも干渉しにくい特別な力を持つ場所のようだな」
満足気に辺りの木々を眺めながら、ルシフェルはそう呟いた。
「おい、聞いているのか!?」
剣士は暢気な彼に苛立ちを感じ、駆け寄って彼の胸倉を再び掴む。
そんな剣幕にもまるで怯む様子もなく、ルシフェルはにへらと笑った。
「父から聞いたことがある。父が創り上げてきたこの世界とはまた別の世界をすぐ近い時空に存在すると・・・。この場所で少しばかり細工すれば、ひょっとしてその世界に行けるかもしれないとは思わないか?」
彼の言っていることの意味が全く理解できないが、剣士はこの男が何やらとんでもないことを考えている気がした。
「よくわからないが、わたしを今すぐ元の場所へ返せ!!」
この謎めいた美しい男に関われば、なぜかとんでもないことに巻き込まれかねないと感じ取った剣士は、一層強く胸倉を掴み、強く揺さぶった。
ルシフェルは気にした様子も無く、そっと近くの地に手の平を翳した。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』

瞬間、地が小刻みに揺れ、何か岩がぶつかるような不気味な音が

周囲に響いた。
森がざわざわとざわめき、鳥達が木々から一度に飛び立ってゆく。
バランスを崩しかけ、剣士は掴んでいた手を緩め、咄嗟に辺りを見回した。何か危険な生き物が今にも飛び出してくるのではないかと剣の柄に手をかける。

ひとしきりの揺れと音が止んだとき、剣士は自分のすぐ背後に小さな洞窟が突如出現していることに気付いた。
「・・・お前・・・、今度は一体何を・・・」
信じられないことばかりをするこの美しい男に、剣士はこれまで無い程に振り回されていた。それも、初対面の者にだ。
「この洞窟は少し特殊なつくりにしてみた。蝋燭の火を囲って安定させるのと同じように、時空の歪みを囲うことで安定させてやるという訳だ。さ、父が勘付く前に行ってしまおう」
「は!?　一体どこに行くというんだ!?」
ぐいと剣士の腕を掴むと、ルシフェルは好奇心で輝く目を向けた。
「もう一つの世界、アースに」
そう言って振り返った創り出されたばかりの小さな洞窟の中には、金色に輝く眩い光が輝いていた。
「わ、わたしは行かないぞ!?　行きたければお前一人で行けばいい!!」
掴まれた腕を振り払おうとするが、思いの外この美しい男は力が強いらしくそう簡単には離れない。
「さ、行こう。君はその証人という訳だな」
にこやかにそう言ったルシフェルの耳には、既に剣士の抗議の声は届いていない。
「お、おいっ!　聞いているのか!?　なんて強引な男なんだ、お前はっ!　おい!」
半ば引き摺られながら、剣士はルシフェルが好奇心に輝く黒曜石の眼で見つめる金色の光に今にも連れ込まれかけていた。

「一体なんなんだ、お前は!?　わたしの話を聞け!!」
光に吸い込まれる瞬間、ルシフェルはとぼけたことを口にした。
「あ、そういえば君の名を聞いていなかった。君の名は?」
「わたしは行かないと行っているーーーー・・・」
光の中に消えた二人の姿。
この後、シモンが跡形も無く突然消えてしまったルシフェルを必死で探し回る羽目になり、そして父なる創造主さえも二人を追跡できなくなったのは言うまでもない。

二週間後にこの場所から再びこの世界へと帰還を果たしたルシフェルは、二週間たっぷり異世界旅行を楽しんだ上、天上界ではきつく禁じられている禁忌をすでに犯していた。心の傷を負った剣士は、このときからルシフェルの特別な存在となってしまったのだ・・・。
強く美しい剣士の正体は、賊の手にかかり滅ぼされてしまった、水の精霊を奉る少部族の唯一の生き残りの娘だったのだ。彼女の名はアザエラ。彼女はその仇をとるがため、たった一人旅を続けていたのだ。

元の世界に無事戻った美しい男装の剣士は、再び仇をとる旅に出る。そして、彼女と別れた後ルシフェルはシモンに挨拶だけ済ませた後、すぐに天上界へと引っ込んでしまった。心に焼きついた彼女があまりに大きく、そしてルシフェルの心を苦しめたのだ。産まれて初めての恋だった。彼女をずっと傍に置いておきたいと願う反面、仲間や家族を一度に奪われた彼女の悲しみと怒りをどうしても拭い去ってやることができなかったのだ。ルシフェルは苦悩した。どうすることもできない苦悩に頭をただ頭を抱えるしかなかった・・・。

やがて数年が経ち・・・、とんでもないことが発覚することとなる。

地上界では普通では考えられない程の強い魔力が、しかもルシフェルそっくりの魔力が動き回り始めたのだ。創造主はそのとき初めて息子の犯した重大に罪に勘付いた。

彼女は血に染まった大地を、何色も映さない碧く美しい眼でぼんやりと眺めた。

最期の一振りで、虫の息だった賊の頭領の胸を突き刺し、成し遂げた敵討ちに胸を震わせていた。

「終わったか・・・」

ぽそりと呟いたその声は、やけに悲しげに響いた。

あの日、仲間や部族が目の前で賊の手にかかり息絶えた瞬間から、こうして賊のアジトを嗅ぎつけ全滅させる今まで、あまりに長く苦しい旅だった。この日を何度も夢見、この為だけに自らの手を血で汚し、剣を振るい続けてきたのだ。

けれど、今彼女の目の前にあるのは、只の”無”。

しんと静まり返った”無”だけが閑散とそこに腰を降ろしていた。

「何を感傷に浸る必要がある・・・？　これ程待ちわびた瞬間は無かった筈だ・・・」

ひどく胸が痛んだ。やり遂げた筈なのに、今彼女の傍には何一つ残ってはいない。家族も、仲間も、友人さえも・・・。あるのは只の”無”のみ。なんの為に今こうして生きているのかさえ考えられない。

そんなとき、ふとあの男の顔が頭を過ぎった。

長く思い出すことのなかったあの男の美しすぎる顔が。少年のように微笑みかける黒曜石の瞳は、なぜか彼女の頬を僅かに緩めた。

「なぜ、あんな男のことなど・・・」

笑い方を忘れてしまったようで、ひくりと頬が引き攣ったように上がり、彼女は冷たく碧い眼を少し細める。まだ自分に少しでも温かい感情が残っていたことを不思議に思いながらも、彼女は突き刺した剣をずぶりと頭領の胸から抜き取った。

どういう訳かせり上がってくる強い吐き気に、彼女は屈み込んだ。何百人もの人間を切り捨ててきたえれど、こんな吐き気を催したことなど一度だって無かった。そして、あの男の顔を思い出したのも数年ぶりのことだった。いや、思い出さなかったのではなく、きっとわざと心の奥底に押し込めてきた想いに違い無い。

ルシフェルと過ごした二週間は、彼女にとってまるで夢のような時間だった。あの時だけは、全てのしがらみから解放された気がしていた。ただの一人の人間の娘として、幸せな時間を過ごせたようにも思う。けれど、それは今となっては全て夢だったのかもしれない。謎に包まれた美しい男は、きっと何かの幻影か白昼夢だったのだろう。

けれど、どういう訳か彼女は強く彼に会いたいと感じた。たとえ、それがまた幻か白昼夢であったとしても・・・。

ルシフェルの過ちに、創世主は怒りを露わにした。

微妙な均衡を保ってきたこのレイシアの世界を破壊するやもしれないルシフェルの大罪・・・。人間と関係をもつこと・・・。それによって、地上界に絶対に存在してはならない強い魔力を持つ、天上人の血を引く子どもが誕生することとなる。その子は、やがてこの世界の脅威となるだろうと創世主は判断した。今、数年の時を経て、人間の娘アザエラは、確かに強い魔力を持つ子を身篭っていた

のだ。そして、そのことに本人さえもまだ気付いてはいない。
創世主は手遅れになる前に、彼女とその中に芽生えた新しい命を消してしまうことを計画した。
けれど、それを知ったルシフェルはそれを阻止する為に再び地上へと舞い降りたのだ。これが全ての始まりとなった、魔王降臨である。
父なる創世主と、子であるルシフェルの攻防が始まった。神と、神に果てしなく近い力を持つ天上人ルシフェル。
こうして、ルシフェルは天上界から追放され、エルの称号を失い魔王ルシファーとして魔族の国ゴーディアを地上界に建国していくこととなったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0901i/

AKANE

2011年7月22日03時40分発行